

梅花女子大学大学院 博士学位請求論文

満洲児童文学研究

二〇一三年十一月

寺前君子

目次

序論

はじめに	一
第一章 満洲について	二
一 満洲の歴史	三
二 日本の満洲植民地化	四
（一）満鉄の文化人招聘	四
（二）満洲における教育状況	五
第二章 先行文献	七
第三章 研究方法と本稿の構成	九
一 研究方法	九
二 本稿の構成	九
序論注	一一
資料「満洲児童文学関係 先行文献 一覧」	一二

本論

第Ⅰ部 満洲児童文学の萌芽―巖谷小波の満洲お伽講演

はじめに	一五
第一章 巖谷小波について	一六
一 略歴	一六
二 先行論文	一六
第二章 一回目の満洲講演―一九一三（大正二）年	一八
一 小波訪満の動機	一八

二 日程・講演内容	一九
（一）小波来満	二〇
小波を迎えるまで／大連到着	
三 小波が語ったお伽噺	二一
（一）「山の神」	二一
（二）「蜂の功名」	二三
（三）「足の力」・「正直正吉」	二四
（四）「水責地獄（水地獄）」	二四
（五）「指輪大名（鳥の小太郎）」	二四
（六）「けだものゝ喧嘩（鶏の冠）」・「人の情」	二五
（七）「石の花」	二五
四 小波の語ったお伽噺と「桃太郎主義」	二六
（一）「桃太郎主義」	二六
（二）小波のお伽噺に見られる「桃太郎主義」	二六
（三）お伽噺「母の手本」	二七
五 お伽講演の手応え	二八
六 小波が語る満洲旅行の印象	二八
七 満洲児童文学の萌芽	二九
（一）お伽噺の口演活動の促進	二九
（二）最初の子ども向け満洲旅行記「満鮮いろは噺」	二九
執筆の動機／概要／内容	三〇
第三章 二回目の満洲講演―一九二六（大正十五）年	三五
一 一九二〇年代前後の内地の童話界の概況	三五
二 「全満児童デー」	三五
三 二回目の満洲講演の特徴	三七
（一）小波を迎えるまで	三七
（二）大連・旅順における小波	三八
おわりに	四一
第Ⅰ部注	四二

第Ⅱ部 マス・メディアにおける児童文学の動き

―「満洲日日新聞」「満洲日報」紙子ども欄の変遷

第一章 「満洲日日新聞」「満洲日報」について	四四
一 沿革	四四
二 子ども欄の移り変わり	四六
第二章 子ども欄創設以前―子ども欄の萌芽	四八
一 「ミツワ家庭欄 コドモブンゲイ」	四八
二 「小供ページ」の登場	五一
三 童話の掲載と紙面の工夫	五三
四 子どもを文化的環境の整備	五四
第三章 子ども欄「子供の世界」の誕生	五五
一 文芸作品―童謡／童話／ルポルタージュ	五五
二 低学年向け記事―「ボウ」のシリーズ	六〇
三 「子供の世界」の役割	六二
第四章 「満日婦人週報」欄の「コドモしんぶん」	六三
第五章 「満日コドモページ」	六六
一 「満日コドモページ」欄の創設	六六
二 「満日コドモページ」の概要	六八
三 青山捨夫と「満日コドモページ」	六九
四 「満日コドモページ」の文芸作品	七〇
（一）青山捨夫の仕事―海外の作品紹介	七〇
（二）「合作童話」	七一
（三）懸賞童話・童謡	七二
五 マス・メディアとしての役割と啓蒙	七三
六 「満日コドモページ」と満洲児童文学活動	七四
第六章 「満日コドモページ」以後	七六
おわりに	七七
第Ⅱ部注	七八

第Ⅲ部 石森延男と満洲児童文学

はじめに

第一章 石森延男―在満十三年の軌跡	七八
一 誕生から渡満まで	八〇
二 渡満の動機	八一
三 満洲時代	八一
（一）教科書編集部時代	八一
（二）視学時代	八三
（三）大連彌生高等女学校教諭から 文部省図書局監修官へ	八五
第二章 満洲中等学生読物「帆」	八八
はじめに	八八
一 「帆」の概要	八八
（一）書誌事項	八八
（二）発刊動機	八八
（三）「帆」発刊に至る経過	九〇
（四）「帆」全六冊について	九一
二 「帆」創刊号（VOL1）	九二
（一）「創刊号」目次	九三
（二）「創刊号」分析	九四
（三）創刊号掲載の石森作品	九八
（1）MNC HURIA CHORUSU	九八
（2）「満洲野花ことば」	九八
（3）「満洲スケッチ」	九九
（4）「ものがたり」	一〇一
三 「帆」が目指したもの	一〇一
四 「帆」の評価	一〇二
おわりに	一〇三

第三章 満洲読物『まんちゅりあ』―石森延男の満洲観を探る

はじめに	一〇四
一「ます野」と『まんちゅりあ』	一〇四
二『まんちゅりあ』の概要	一〇六
（一）書誌事項	一〇六
（二）出版動機	一〇七
三『まんちゅりあ』分析	一〇七
（一）内容別分類	一〇七
（二）表現について	一一一
四 作品に見る石森の満洲観	一一一
五 『まんちゅりあ』の評価	一一五
おわりに	一一六

第四章 童話同人誌「新童話」―石森童話の誕生

一「童話」への道	一一七
二「新童話」の概要	一一八
（一）書誌事項	一一八
（二）「新童話」の歩み	一一八
（1）発刊と終刊	一一八
（2）歩み	一九
三「新童話」における石森作品	二二一
（一）童話	二二二
（1）発想の妙味	二二二
（2）小さな命への慈しみ	二二二
（3）存在の意味を問う作品	二二二
（4）見捨てられた物への哀感	二二三
（5）貧しい者に寄り添う姿勢	二二三
（二）童詩	二二三

四 「童話文学」と石森延男

（一）「童話文学」について	二二五
（二）「童話文学」と石森延男の関わり	二二六

（三）「童話文学」が目指した童話創作

五 大連を中心に興った童話論争	一二七
（一）石森の主張	一二八
（二）石森の主張を巡って興った童話論争	一二八
六「新童話」と石森童話の誕生	一三一
資料 「童話文学」と「新童話」の中の石森作品	一三三

第五章 叢書「満洲文庫」

はじめに	一三六
一「満洲文庫」の概要	一三六
（一）「満洲文庫」について	一三六
（1）「満洲文庫」全十四冊	一三六
（2）書誌事項	一三七
二「満洲文庫」の誕生	一三七
三「満洲文庫」とはどのような叢書か	一三八
（一）「刊行目次」について	一三八
（二）「満洲文庫」の特徴	一四〇
四「満洲文庫」の発刊から終刊まで	一四一
（一）叢書としての「満洲文庫」	一四二
（二）刊行物としての不統一	一四三
五「満洲文庫」の評価	一四三
おわりに	一四五

第六章 「満洲文庫」文学篇『童話と童詩』

はじめに	一四六
一『童話と童詩』（紅版）の概要	一四六
（一）編集方針と収録作品	一四六
（二）内容	一四六
（1）構成	一四八
（2）題材・内容による分類	一四八
二 作者と作品	一四八

(一) 満洲在住者プロフィール	一四九
(二) 内地在住者プロフィール及び掲載作品履歴	一五一
三 作品分析	一五二
(一) 自然・風物を描いたもの	一五二
(二) 日本人・日本の子どもの生活を描いたもの	一五四
(三) 中国人・中国の子どもを描いたもの	一五五
(四) 時局的な表現の見られるもの	一五六
(五) その他	一五六
おわりに	一五七
資料 作品 二一編	一五八
第七章 「満洲文庫」文学篇『満洲新童話集』	一六三
一 「緑版」の概要	一六三
(一) 編集意図	一六三
(二) 作者と収録作品	一六三
二 「緑版」作品分析	一六六
(一) 作品の中の日本人	一六七
(二) 作品の中の植民地的諸相	一七〇
(三) 作品の中の満洲風物	一七三
三 「緑版」に見る満洲児童文学の実相	一七五
第八章 「軍人の子」(平方久直作)と「満洲文庫」発禁問題	一七六
一 平方久直―人と作品	一七六
(一) プロフィール	一七六
(二) 平方の文学活動	一七六
(1) 満洲時代―平方文学の原点	一七六
(2) 帰国から敗戦まで	一七八
(3) 戦後	一八〇
二 作品「軍人の子」	一八〇
(一) 「軍人の子」を巡って	一八〇
(1) 出版履歴	一八〇

(2) 「軍人の子」に関する問題点	一八〇
(二) 「軍人の子」作品分析	一八一
(1) 内容分析	一八一
(2) 「僕」にとって「父親」とはどういう存在か。	一八四
三 「軍人の子」から「僕のお父さん」へ	一八四
(一) 書き換えの特徴	一八四
(1) 読者対象を考慮した書き換え	一八四
(2) 軍隊・軍人に関する書き換え	一八五
(3) 心情描写の大幅な削除	一八七
(二) 書き換えの背景	一八八
四 「満洲文庫」発禁問題を解く手がかり	一八九
(一) 「満洲文庫」出版履歴	一八九
(二) 発禁関連文献について	一九〇
(三) 発禁問題に関する検証	一九一
五 まとめ	一九四
第九章 長編小説『咲きだす少年群』	一九五
はじめに	一九五
一 先行文献	一九五
二 『咲きだす少年群』の概要	一九五
(一) 誕生から出版まで	一九五
(二) 戯曲化の経緯	一九七
三 『咲きだす少年群』の作品世界	一九八
(一) 作品構成・登場人物・テーマ	一九八
(二) 時代と舞台	一九八
(三) テーマその一―民族を越えた友情	一九九
(1) 洋と真ちゃん	一九九
(2) 蒙古人少年チャクト	二〇〇
(3) ロシヤ人少年ユリヒ	二〇一
(4) 満人少年志泰	二〇一

(四) テーマその二―女性の生き方・銃後……………	二〇四
(五) テーマその三―日本の満洲・支那政策、「日支親善」	
「もんくーふおん」と『咲きだす少年群』と「モンクー	
フォン」……………	二〇七
(一) 比較の概略……………	二〇八
(二) 「もんくーふおん」から『咲きだす少年群』へ……………	二〇八
(1) 読者対象の変化による改変……………	二〇八
(2) 加筆によって強まった戦時色……………	二〇九
1 日常生活の描写に見られる戦争用語……………	二〇九
2 「洋」像の変化……………	二一〇
3 出征兵士の心構え……………	二一一
五 新潮社大衆文芸賞受賞……………	二一二
(一) 『咲きだす少年群』出版前後の社会情勢……………	二一二
―求められた満洲・支那大陸もの……………	二一二
(二) 『咲きだす少年群』第三回新潮社大衆文芸賞受賞……………	二一二
おわりに……………	二一五
資料……………	二一六
『咲きだす少年群』構成表……………	
「主な登場人物一覧表」……………	
「新潮社文芸賞選考委員・受賞作品一覧」……………	
第十章 満洲児童文学の推移……………	二二〇
一 石森延男と満洲児童文学……………	二二〇
二 石森離満後の状況……………	二二一
第Ⅲ部注……………	二二三

第Ⅳ部 寺田喜治郎と児童雑誌「コドモ満洲」

はじめに……………	二二八
第一章 寺田喜治郎と満洲教育専門学校……………	二二九
一 寺田喜治郎の略歴……………	二二九
二 満洲教育専門学校の概要……………	二二九
三 満洲における寺田の活動……………	二三一
第二章 「コドモ満洲」について……………	二三三
一 「コドモ満洲」の概要……………	二三三
(一) 書誌事項……………	二三三
(二) 発行同人及び発行目的……………	二三三
二 評価と期待……………	二三四
三 「コドモ満洲」の内容……………	二三四
(一) 内容の特徴……………	二三四
(二) 内容の考察……………	二三五
(1) 文芸作品……………	二三五
(2) 戦争哀話……………	二三八
(3) 教材の地方化……………	二三八
(4) 児童作品……………	二三九
第三章 「コドモ満洲」における寺田作品……………	二四〇
第四章 石森と「コドモ満洲」……………	二四二
おわりに……………	二四三
第Ⅳ部注……………	二四四

第V部 満洲児童文学作家 山田健二

第一章	山田健二―人と作品	二四五
一	プロフィール	二四五
二	山田の児童文学観	二四八
第二章	作品(一)『高梁の花環』	二四九
一	書誌事項	二四九
二	収録作品概要	二四九
三	個別作品	二五〇
	(一)「本當に強い兵隊さん」	二五〇
	(二)「高梁の花環」	二五一
	(三)「氷の記念碑」	二五二
四	『高梁の花環』の評価	二五三
第三章	作品(二)『慰安車』	二五五
一	書誌事項	二五五
二	テーマ別作品概要	二五五
	(一)子どもの心	二五五
	(二)日本人の心	二五六
	(三)兵隊と子ども	二五六
三	『慰安車』の評価	二五七
第四章	作品(三)『少年義勇兵』	二五八
一	書誌事項	二五八
二	収録作品概要	二五八
三	開拓村を描いた作品	二五九
	(一)「饒河少年隊」	二五九
	(二)「少年移民隊長」	二六〇
第五章	山田作品に見る「五族協和」	二六一
一	「五族協和」をテーマにした作品	二六一
	(一)日本人の母と満洲人の赤ちゃん―「青い赤ちゃん」	二六一
	(二)ロシア人少年を描いた作品二編	二六二

(三) 朝鮮人小学生への贈り物―「貴い贈物」	二六三
(四) 蒙古人少年―「馬に乗ったラマ僧」	二六三
二 山田が描く「五族協和」	二六三
おわりに	二六四

第V部注	二六五
------	-----

結論	二六七
----	-----

あとがき	二七八
------	-----

謝辞	二八〇
----	-----

参考文献	二八一
------	-----

凡例

一 表記について

- 引用文は原書のままの表記で使用了。
- 書名、新聞名、人名は原則として、当時の表記をそのまま使用了。但し、記述中に用いる時や、略称で使用する際には、現代かなづかいに改めた。

例「満洲日日新聞」「満洲日報」の略称は「満日」と現代かなづかいで表記した。

『満洲補充讀本』の表記は、本論文では二種類ある。一つは、『満洲補充讀本五の巻』のように具体的に教科書名を指す時は原書どおりの表記を使用し、副教科書として全体を指す場合は、『満洲補充讀本』と現代かなづかいで表記した。

- 「満洲」「支那」「満人」等の民族名及び国名は、原則として当時の呼称を使用了。但し、表記は現代かなづかいを使用了。
- 年号は西暦を用いた。ただし、筆者判断で必要に応じて元号を併記した。

二 注釈・資料

- 注釈は各部末尾に記し、資料は必要に応じて「資料編」或は「各章」に添付し、その際は添付場所を明記した。また、参考文献はまとめて本論文末尾に明記した。

三 その他

- 資料の中に「石森スクラップ」と称するものがある。これは、石森延男が生前に、北海道立文学館に寄贈した書籍・資料の一部で、満洲時代の石森の著述や関連記事を貼付した「スクラップ帳」七冊（52―58）を指している。
- 利用施設の中に「大阪国際児童文学館」がある。当館は二〇一〇年三月、閉館となり移転し、現在は「大阪府立中央図書館 国際児童文学館」と名称を変更している。しかし、筆者が利用した資料は両館にまたがっているため、本論文では、「大阪国際児童文学館」と明記した。
- 敬称は省略した。

満洲児童文学研究

序論

はじめに

日本における中国児童文学の受容は、日本児童文学の発展と連動している。さらに、日本の中国侵略とも深く関わっている。明治になって、学校教育の普及と幼稚園の設立によって、子ども雑誌が数多く出版され、海外へ目を向ける題材として外国の作品が紹介されるようになった。その中には中国の古典や物語の再話も含まれていた。また、日清戦争（一八九四―九五）、日露戦争（一九〇四―〇五）後、日本は満洲を足がかりとして、中国への侵略を推し進め、日中戦争（一九三七―四五）へと戦火が拡大するにつれて、中国を題材にした作品が数多く生まれた。¹

中国を題材とした日本人の作品も含め、日本における中国児童文学について研究しようとするとき、看過できないのは、旧植民地満

洲における児童文学活動である。そこでは、満洲（中国）を題材とした多くの作品が誕生しているからである。

だが、満洲で興った児童文学活動については、ほとんど解明されていない。そこで、筆者は、日本における中国児童文学研究の焦点を満洲児童文学研究に置くことにした。

満洲における児童文学活動は、様々な面を持っている。日本における中国児童文学という面、異郷に生れた日本児童文学という面、植民地における児童文学という面、それらをみな併せ持っている。さらに、満洲は多民族社会で、中国人（満人）、蒙古人、朝鮮人、ロシア人らが住み、各民族の文学活動もあった。

本論文では、満洲における児童文学研究の一環として、日本人によって展開された満洲児童文学（以下「満洲児童文学」）を対象とし、その期間は、満洲植民地化の初期から「満洲国」建国によって政治・文化の中心が新京（現在の長春）へと移るまでとする。なぜなら、「満洲国」は日本の傀儡国家とはいえ独立国の形態をとった多民族国家であり、その児童文学活動は、いわゆる植民地満洲のそれとは異なる様相を呈してくるからである。

第一章 満洲について

一 満洲の歴史

満洲とはどういうところであつたのか。まず、その歴史と日本との関係を簡潔に述べる。

「満洲」とは、本来民族名である。「満洲」が地理の名称として使われるようになったのは、近代になってからで、広く中国東北の三省（奉天（現遼寧）省・吉林省・黒龍江省）を指す。

東三省は、古来より、様々な民族によって国家がつくられてきた。高句麗、渤海（高句麗系）、遼（契丹族）、金（女真族）、元（蒙古族）、明（漢民族）、清である。一六一六年、ヌルハチ（努爾哈赤・清の太祖）が、遼東に後金をうち建て、その位を継いだ皇太極（清の太宗）が、民族名を「女真族」から「満洲族」（現中国では「満族」）に改め、国号を「清」とする。清朝が北京に移ったのち、満洲は清朝発祥の地、満洲旗人の地を保存するという考えから、「封禁の地」として立ち入りを禁じる。だが、清朝は、十七世紀半ばより開墾目的の漢民族の移民政策を進める。移民政策停止後も、漢民族の移住は続く。拡大した漢民族の開拓地を、清朝は総督を派遣して統治したが、それは中央機関だけで、漢民族の開拓村は自治に任された。満洲の治安の維持の多くは、馬賊と称された村落の自衛武装集団によつた。日本と満洲との関わりは、朝鮮半島の覇権を巡って起こった日清戦争から始まる。日清戦争に勝利した日本は、清国に遼東半島を割譲させるが、三国干渉（露・仏・独）によつて清国に還付。その遼東半島を清国から租借したロシアは、北のハルビンと南の大連を結

ぶ東清鉄道（東支鉄道）の建設に着手し、旅順は軍港として、大連は商業港として莫大な資金を投入した。さらに、義和団事件（一九〇〇）鎮圧のために派遣したロシア軍をそのまま満洲に駐屯させ、満洲でのロシアの影響を強めた。そのことで、朝鮮支配への危機感を抱いた日本とロシアとの間に日露戦争が起こる。

日露戦争に勝利した日本は、満洲における権益を手にした。その権益とは、遼東半島南端の「関東州」の租借権、東清鉄道の一部（長春・旅順間）と日本軍が日露戦争時に軍用鉄道として敷設した安奉鉄道（安東・奉天間）である。鉄道には線路を中心に幅六二メートルの带状の領地が附属地として含まれ、その附属地は各駅ごと、駅舎を中心に広い敷地がとつてあつた（のち、そこを中心に日本人街が発展していく）。そして、一キロメートルにつき十五名を越えない範囲で鉄道守備隊を配置することができた（この鉄道守備隊が一九一九年に誕生する関東軍の前身である）。さらに、南満洲鉄道権益の中には、その付帯事業として撫順炭坑と煙台炭坑の経営、鴨緑江沿岸の森林伐採権、遼東半島一帯の漁業権も含まれていた。それらの経営のために設立されたのが、半官半民の国策会社である南満洲鉄道株式会社（以下「満鉄」）であつた。

日本が満洲植民地化の足がかりを掴んだ頃、中国に辛亥革命（一九一一）が起こり、清朝に代わつて中華民国が誕生する。その新政府に、日本は、一九一五（大正四）年、「対華二十一カ条要求」の承認を迫る。その五条からなる要求の中には、日本が満洲全土を手中に収めるべく、満洲・東部内蒙古権益の拡大・延長を図つた内容が盛り込まれていた。この中国の主権を踏みにじる「対華二十一カ条要求」によつて、中国に大きな反日運動が起こる。

中華民国になったばかりで、北京の中央政府の支配力は弱く、中国は群雄割拠の時代にあった。満洲には張作霖を領袖とする奉天軍閥があった。張作霖は日露戦争で日本に協力し、辛亥革命で奉天（現在の瀋陽）の革命軍を鎮圧して、奉天省の軍事・政治の実権を握ると、黒龍江省、吉林省を手中に収め、一九一九年には東三省の支配権を確立した。満洲の覇者となった張作霖を日本は積極的に支援した。しかし、張作霖は対日依存政策を変え、さらに、中国政府からは討伐される立場となる。張作霖への対応を巡り、日本政府と関東軍との方針が異なる中、張作霖は関東軍によって爆殺される（一九二八年六月四日）。張作霖の地位を世襲した息子張学良は、国民政府側につき、東北边防総司令官として満洲の実権を握り、排日運動を展開する。

関東軍の独走はとどまることなく、一九三一（昭和六）年九月十八日、奉天柳条湖附近の満鉄線を自ら爆破、それを中国軍の攻撃とみなし、満洲を武力制圧する。満洲事変である。翌一九三二年三月一日、清朝最後の皇帝であった溥儀を執政（一九三四年、皇帝となる）として、清朝発祥の地満洲に、王道楽土と五族協和（漢・満・朝・蒙・日）を理想に掲げる「満洲国」（一九三四年、溥儀が皇帝となり「満洲帝国」となる）を建国する。「満洲国」は、関東州を除く東三省及び熱河省から成る。独立国の形態をとってはいるが、日本人が政治そのものを取り仕切る傀儡国家で、実質の権力者は関東軍司令官であった。この傀儡国家を、現中国では「満洲国」とは呼ばず、「偽満洲国」と称する。

「満洲国」建国及び日本の統治に対する抵抗運動は激しく、建国とともに編成された「満洲国軍」（関東軍に協力した旧軍閥軍隊、事

変以後関東軍の指導下で活動していた日満混成特殊部隊の遊撃隊、日本人顧問、教官、日系士官によって構成）は、治安維持を目的に、反満抗日勢力（反日の旧軍閥軍隊、農民組織、共産系と民族系の抗日組織、在満朝鮮人による赤色遊撃隊等）の討伐にあたった。反満抗日勢力は、日本側では「匪賊」と呼んだ。また、関東軍と警察は討伐と並行して、匪賊対策に、住民同士を互いに監視させる「保甲制度」や、もともとある村落を撤去し、村民を一所に集め、村民と抗日勢力との接触を阻む「集団部落政策」をとった。

国際連盟から派遣された調査団によって、「満洲国」建設が日本の侵略行為だと報告された（「リットン報告書」）。その年の一九三三（昭和八）年、日本は国際連盟を脱退する。

「満洲国」の首都に長春（新京と改名）が決まり、新しい実験的な手法を取り入れた大規模な都市建設がすすめられ、政治・文化の中心は、これまで満洲植民地化の拠点であった旅順・大連から奉天・新京へと移っていく。一九三七（昭和十二）年十二月、満鉄は、鉄道附属地行政を「満洲国」に委譲する。

満蒙開拓団（一九三七年開始）は、一九三二（昭和七）年、第一次満蒙開拓計画に基づく試験移民をその始まりとする。その年の十月、在郷軍人五百名弱が吉林省樺川県チャムス永豊鎮に入植した。この入植地が満蒙開拓村のモデルとなる「弥栄村（いやさかむら）」である。これ以後続く満洲移民の入植地はタダ同然の値段で満洲の農民たちから収奪されたものである。窮乏していた日本の農村の次男以下の農民たちや村民たちが「新天地」を求めて満洲へ渡り、日本の敗戦と同時に、その地に捨て置かれることとなり、多くの悲劇を生んだ。

一九三七年七月、中国との全面戦争となった日中戦争は泥沼化。中国への侵略に対して、米英は日本に強硬姿勢で臨んできたが、日本は米英との対立の道を選び、米英仏蘭の植民地であるアジア諸地域を武力で解放、大東亜共栄圏の建設を標榜する。一九四一（昭和十六）年十二月八日、日本の真珠湾攻撃によって太平洋戦争が始まる。関東軍から抽出された兵力は南方へ送られ、在満邦人は現地召集された。一九四五年八月九日、ソ連軍の満洲侵攻。同年八月十五日敗戦。「満洲国」政府首脳は「満洲国」の解体と皇帝の退位を決定（同年八月十八日）。「満洲国」は十三年間でその幕を閉じる。²

二 日本の満洲植民地化

日本の満洲植民地化は、関東州の統治を行う関東都督と、鉄道附属地の行政権を握る南満洲鉄道株式会社（以下「満鉄」と、鉄道附属地内の外交・警察権を握る領事館との「三頭立て」による統治機構で進められた。

満鉄は、一九〇六年六月七日設立公布、同年十一月二六日創立總會を経て、翌一九〇七年四月一日より営業を開始する。初代総裁には、当時台湾総督府民政局長であった後藤新平が、参謀総長児玉源太郎（かつての台湾総督）に請われて就任。資本金二億円（うち一億円は日本政府の出資、残りの一億円は日本の株式と外債）。会社の機軸は「文装的武備」、つまり「文事的施設を以て他の侵略に備へ、一旦緩急あれば武断的行動を助くるの便を併せて講じ置く事」³。というもので、満鉄は、鉄道事業の他に、産業、医療、教育、芸術育成全般に携わった。

満洲における文化の育成に満鉄が果たした役割は非常に大きい。施設や啓蒙面での具体的な施策については、本論を進める中で、明らかにってくるので、ここでは、満鉄が創立当初から力を入れた、文化人の招聘と教育関係について概略を述べる。

（一） 満鉄の文化人招聘

満鉄は創立当初から、著名な文化人を多数満洲に招聘している。その目的は、一つは満洲及び満鉄事業の宣伝のためであり、もう一つは、日本文化の移植と文化環境の充実であった。

一九〇九年九月、夏目漱石は、学生時代からの友人である当時の満鉄総裁中村是公の招きで満洲を旅し、その見聞を「満韓ところどころ」と題し、「朝日新聞」（一九〇九年十月二日〜十二月三〇日）に発表している。原田勝正著『満鉄』によると、「当時満鉄は、その事業内容を内外に広く宣伝することに努めていた。（中略）中村総裁が漱石を招いたのも、たんに友人を招待するという目的ではなく、漱石の筆を通じて満鉄の事業を宣伝させるという目的があったからであろう」⁴とある。この他、巖谷小波は、満鉄の招聘で一九一三、二六年の二回訪満している。倉橋惣三は一九一六年に幼時教育の視察に訪れ、一九二七年に再訪、満鉄主催の保育講習会で保母たちに講義している。島木赤彦は、一九二三年に訪満、万葉集や短歌道の講演を行っている。野口雨情は一九二三、二四、二六、三四年と四回訪満、そのほとんどが満鉄招聘の講演巡遊である。早くから満洲唱歌を作成していた北原白秋は一九三〇年に訪満している。これらはほんの一例に過ぎないが、満鉄がこれら文化人の招聘によって、

日本文化の移植、文化環境の充実、満洲の宣伝に力を入れていたことが窺える。

(二) 満洲における教育状況

次に、満洲の教育状況について述べる。

満洲における教育の普及は日支親善及び満蒙開発の基底を造る重要な手段と考えられ、邦人教育及び中国人教育に巨費が投じられていた。教育事業の経営にあたったのは、主に関東庁と満鉄であり、教育状況も、関東州と鉄道附属地では異なっていた。(括弧内数字は『満洲年鑑』(一九四〇年版)による学校数)

関東庁は、関東州内における教育を管轄、日本人教育に、小学校(18校)、高等女学校(2校)、中学校(3校)があった。中国人教育に、公学堂(10校)、中学校(1校)、実業学堂(商業・農業各1校)、があり、中国人教員養成校である師範学堂(1校)があった。また、高等教育機関として旅順工科大学(日支人共学)があった。この他、支那人子弟の初等教育機関に、日本の寺子屋のような旧来の書房を整理改良した普通学堂があり公認されたものが百余校あった。

鉄道附属地での教育は、日露戦争中に日本の軍政署が行った中国人教育を初めとする。日本人教育は、当初は児童数が少ないこともあって、多くは中国人教育機関に付設される形で始まり、のち、尋常高等小学校として独立。以後、鉄道附属地内の教育事業は政府命令書に拠り満鉄が経営することとなる。

鉄道附属地は、広範囲に点在し、児童生徒数も地域によって異なっている。そのため、満鉄は、現地事情に合わせ、規模や内容や目

的に応じた学校運営を行っている。日本人教育に、小学校(27校)の他、分教場(5校)、実業補習学校(32校)、家政女学校(11校)や幼稚園(25園)を有している。中等教育機関に、中学校(3校)、高等女学校(4校)、実業学校(商業・工業各1校)等を有し、高等教育機関に、南満洲工業専門学校、教育専門学校、南満医学堂(日支人共学)、満洲医科大学(日支人共学)を有し、さらに、研究機関である教育研究所や社会教育施設である図書館等も有していた。中国人教育には、公学堂(11校)、中学堂(1校)、実業学堂(商業・農業・鉱山各1校)を有する他に、日語学堂補助学校(6校)等も有していた。

在満朝鮮人の教育は、撫順、奉天等の数か所に、普通学校、育英学校としてあった。経営は、朝鮮総督府及び満鉄の補助経営であった⁵⁾。

槻木瑞生著「在満日本人教育」によると、鉄道附属地の日本人教育はいわば中国人社会の中にある日本人学校で、中国人学校に日本人学級を付設したり、逆に、日本人学校に中国人特別学級を設けることもあり、他民族との接触の機会は関東州よりあったのに対して、関東州は日本の領土の中の日本人学校であり、日本人は日本人学校に通い、中国人は中国人の学校に通うのが、一般的であったという。

一九三二(昭和七)年三月「満洲国」建国のちも、関東州は、租借先をこれまでの「支那」から「満洲国」に換えただけで日本の領土としての実情は変わらず、依然として内地型の日本人教育が行われていた。

では、「満洲国」の教育内容はどのようなものであったのか。建国後の教育の変化を『満洲年鑑』(一九四〇年版)を手がかりにまとめ

ると次のようになる。

「満洲国」の教育行政は、一九三六年七月に全面改革される。同年十二月一日、治外法権撤廃と教育行政権委譲とともに、従来満鉄が経営していた鉄道附属地内の満人教育施設及び一部朝鮮人教育施設は、すべて「満洲国」民生部に引き継がれる。しかし、日本人教育及び普通学校十四校の朝鮮人教育は、駐満日本大使館教務部が所管し、各地方別に設けられた学校組合が経営にあたった。学校経営は満鉄の手から離れたが、日本人教育に関しては、従来どおり日本の管轄であったので、教育体制、内容に大きな変化はなかったと考えられる。

中国人の教育制度は、建国当初は旧政権時代のものを踏襲していたが、新学制により、初級小学校を国民学校に、高級小学校を国民優級学校に改称。国民学校は日本の小学校に相当し、入学資格は満七歳以上で修業年限四年、学科目は国民科、算術、作業、音楽及び体育の五科目である。国民優級学校は日本の高等小学校に相当し、修業年限は二年、学科目は国民科、算術、実務、図画、音楽、体育である。中等教育はかつて米国流で文科中心的傾向が強かったが、実務教育を基調とする国民高等学校とし、修業年限を四年とした。この他、国務院直轄の最高学府である建国大学（一九三八年四月開設）、官公吏の養成機関である大同学院があった。

どのような教科書が使われていたのか。日本人学校では、内地と同じ国定教科書を使った。しかし、満洲と内地では自然環境が大きく異なるので、満洲を教材とした副教科書が並行して使われた。

その副教科書編纂事業は、関東庁は一九一四（大正三）年から、満鉄は一九一七（大正六）年から始めたが、一九二二（大正十一）

年に関東庁と満鉄の編集事業が合わさり、合同組織「南満洲教育会編輯部」（一九二四年、「南満洲教育会教科書編輯部」に改称）を設立、共同で教科書編輯を行った。その教科書には唱歌、歴史、地理、理科の他、国語の副読本『満洲補充読本』（第一期全八巻）があった。石森延男はこの『満洲補充読本』のために渡満し、この執筆・編纂・改訂に深く関わっている。『満洲補充読本』は、のち何度か改訂されながら広く使われた。⁷

この副教科書編纂について、磯田一雄は、「朝鮮・台湾など他の植民地では、日本が支配した現地民族には現地編纂教科書を使用させたが、そこに移り住んだ日本人（内地人）の子どもには原則として内地と同じ教科書を使用させた。これに対し『満洲』では、中国人用の教科書だけではなく、日本人用の教科書も現地で編纂されたものが多数使用されたのが際立った特色である」と述べ、副教科書の発行を「満鉄独自のきわめて自由主義的な現地主義的教育思想」⁸と述べている。

「満洲国」建国後の中国人用の教科書は、旧政権の教育方針を排除するため、三民主義に基づく教科書の使用を厳禁し、取りあえず四書五経を講読させ、新教科書の編纂に着手したが、日鮮満蒙露と用語の多種多様、及び編審官の少なさでなかなか予定どおりには進まなかったという。

第二章 先行文献

まず、先行文献について確認しておきたい。

これまで、満洲の教育に関する研究は比較的なされてきた。だが、満洲児童文学に関する研究は多くない。満洲児童文学の中心的人物であった石森延男（以下「石森」）に関する論文であつてもその多くは、植民地教育との関わりで論じられている。教育者であり、文学者であつた石森の「業績」はどちらにおいても、「華々しい」ということである。また、石森にとつて、教科書教材の執筆と、児童文学作品の創作とは不可分の関係にあつたということでもある。

満洲児童文学に関する先行文献については、「序論 末尾資料 満洲児童文学関係 先行文献 一覧」を参照願いたい。ここでは、児童文学の観点から論じられた先行文献について確認しておく。

まず、石森自身が、満洲児童文学について述べている詳細な報告がある。日本児童文学学会編「児童文学研究」（一九七二—一九七五）に三回にわたり掲載された。「満洲児童文学回想」（一九七二）では、渡満の動機、満洲児童文学の誕生とその活動内容等が述べられている。その証言は当事者が語る貴重な内容である。ただ、執筆が戦後二〇余年を経た一九七〇年代であることから、石森の記憶違いや当事者が語ることによる一面性やあいまいさがある。さらに、同雑誌には「満洲児童文学資料—その一」（一九七二）、「その二」（一九七三）、「その三」（一九七五）として、満洲児童文学各作品の細目、作家紹介、石森が満洲で刊行した雑誌の細目等が記載されている。本論文は、この石森の文章に負うところが大きい。しかし、筆者は、客観的資料に基づき石森の証言を検証しつつ、あくまでも筆者の視

点で満洲児童文学の全容を解明する姿勢で本論文に取り組んだ。

新村徹『満洲児童文学』について」（一九八六）は、満洲児童文学を全体的な視点から論じようとした唯一の論文である。（だが、残念なことに未完である）。

乙骨淑子は「戦時下の児童文学—石森延男の場合—」（一九七一）で、石森が「真面目に情熱をかけて人種的偏見のない理想郷を願つた」その思いは、「弱者同士の対等な連帯から」ではなく、「保護者と被保護者との関係」であつたと指摘している。

磯田一雄は、「戦時下の石森の児童文学作品と「満洲」（一九九三）で、石森が満洲から文部省に移る前後の一連の作品（『咲きだす少年群』『日本に来て』『スングリーの朝』）に見られる、「満洲」の異民族に対する石森の立場を論じている。また、同著者による『のらくろ探険隊』と『スングリーの朝』—戦時下の児童文化における「満洲」—（一九九九）は、石森の長編童話『スングリーの朝』の作品論である。

小笠原治嘉「石森延男論考」（二〇〇五）は、「石森の児童文学研究には、国語学者としての石森の軌跡を追跡し、そこと重ね合わせない限り本当の理解はできない」という考えによつて石森の幼年童話他を論じている。

河野孝之「発禁処分の行方—石森延男編「満洲文庫」と東亜「新満洲文庫」—」（二〇〇二）は、長い間謎であつた「満洲文庫」の発禁問題に関する詳細な論考である。

柴村紀代「満洲児童雑誌「新童話」について—函館図書館児童雑誌コレクションによる—」（二〇〇七）は、石森が主宰した童話同人誌についての論考である。さらに、柴村紀代「児童雑誌「コドモ満

洲」の概要と特徴」(二〇〇七)は、撫順で出版された児童雑誌に関する論考である。

季穎の『日中児童文学交流史の研究』(二〇一〇)の「石森延男」に関する論考では、満洲における石森の事跡と作品について論じ、植民地文学としての一面を明らかにしている。

他の満洲児童文学作家について、以下の論考がある。

長谷川潮『子どもの本に描かれたアジア・太平洋―近・現代につくられたイメージ』(二〇〇七)で、山田健二及びその作品『少年義勇軍』について論じている。

相川美恵子は『王の家』に描かれた満洲―旧植民地を描いた児童読物の可能性と限界」(二〇一二)で、平方久直の作品『王の家』に収められている各作品の分析を行い、旧植民地を描いた児童読物の可能性と限界について論じている。

第三章 研究方法と本稿の構成

一 研究方法

本論文を執筆するにあたり、あくまでも満洲児童文学を児童文学の視点から研究する姿勢で臨みたいと考えた。石森自身が語っているように、石森の満洲における児童文学活動の原点は『満洲補充読本』の執筆編集にある⁹。従って、石森文学を考える場合、石森執筆の教科書教材と石森の児童文学作品の両方の考察が必要であり、また、石森の場合、厳密には教科書教材と児童文学作品とを分けることは不可能である。だが、教科書教材に関しては、すでに先行論文によって詳細な研究がなされていること、教科書教材を考察するには、教育的視点からの検討も必要になってくることから、本論文では、教科書教材については、考察の対象からはずした。

また、満洲児童文学は、満洲で生れた日本児童文学であるという観点から、同時期の日本児童文学の動きとの関連性を視野に入れて考察するように努めた。

敗戦後、日本人が中国から引き揚げる際、出版物の国外持ち出しが制限されたこともあって、今日、満洲で出版された書籍類を日本国内で閲覧することはかなり困難な状況にはあった。しかし、可能な限り、まず現物にあたることを第一とした。作品及び資料を自分の目で読み込む作業を基本姿勢とした。

二 本稿の構成

満洲で発行された『満蒙年鑑』¹⁰（資料編の〈資料1〉）という書籍がある。これは、満鉄と関東庁の後援の下、日支両国の協同機関として設立された「満蒙文化協会」¹¹が発行したもので、統一的組織による正確な情報提供を目的とした。その情報提供は、当然のことながら植民地経営に資するためであり、また国策に沿った記述による世論作りのためでもあった。だが、「年鑑」の用途は別にして、「年鑑」に記載された数値や情報は当時の満洲の実態を示す一つの客観的資料でもある。

その「年鑑」を基に、満洲児童文学の発生時期をたどると、『昭和七年版 満蒙年鑑』（一九三一年十二月二十日発行）の目次に、はじめて「藝術」という項が独立して立てられ、その「文藝」欄に、一九三一（昭和六）年度に雑誌に掲載された作品名とその作者名が各項目（「詩・詩論」「民謡」「短歌」「川柳」「小説・戯曲」「隨筆・紀行」「小品」「評論」）毎に記述され、最後に「童謡・童話・児童劇」として児童文学が紹介されている。児童文学として紹介されているのは、「新童話」（石森主宰）と、「協和」（満鉄社員会発行）掲載の童謡童話作品である。この二雑誌の記述は「年鑑」に登場する初めての児童文学関係の記事である。とすると、この記事で述べられている一九三一（昭和六）年頃には、「童謡・童話・児童劇」に、子どもを対象とした文学としての認識が生まれていたということ、つまり、児童文学の概念が満洲に定着してきていたということである。

この記事に紹介されている「新童話」の主筆者である石森が、戦後に著した「満洲児童文学回想」¹²で、植民地満洲の児童文学は、『満洲補充読本』を根幹にしているものの、石森を中心とした児童文学活動を満洲児童文学の誕生としていると述べている。これは、

在満者自身による創作活動を起点と考えた見解である。しかし、石森らの活動以前に、すでに満洲童謡の創作があり、お伽噺の口演活動があった。筆者は、石森らの児童文学活動を起点に、それ以前を満洲児童文学の萌芽期と位置付けている。従って、本論文を以下のように構成した。

第Ⅰ部では、満洲児童文学の萌芽として、巖谷小波（以下「小波」）の二回の訪満を取り上げた。小波訪満一回目は一九一三（大正二）年の秋である。小波は、在満の日本人小学校を中心に精力的に満洲講演を行い、帰国後は「少年世界」に、満洲旅行記「満洲いろは噺」を発表している。これは子ども向けに書かれた満洲旅行記として注目に値する。二回目はその十三年後の一九二六（大正十五）年六月で、満鉄が主催する「全満児童デー」に合わせた訪満である。小波の二回の訪満は、満洲における児童文学誕生の土壌作りに功績があったといえる。

第Ⅱ部では、満洲児童文学誕生及び発展に新聞の子ども欄が果たした役割について考察した。満洲の邦字新聞「満洲日日新聞」（一九二七年「満洲日報」と改名）の子ども欄は、一九二六年の「全満児童デー」及び小波の二回目の訪満と同時期に活発になっている。子ども欄の内容の変化をたどり、子ども欄の記事が在満の子どもにどのように働きかけ、満洲児童文学誕生及び発展にどのように関わったかを考察した。

第Ⅲ部は、関東州大連を中心に展開された満洲児童文学グループの中心的人物であった石森の、在満十三年間の事跡とその児童文学活動を三つの時期に分けて考察した。さらに、各時期の代表作の特徴を採った。

第一期の「南満洲教科書編集部時代」の作品としては、渡満の翌年に発行した在満中等生向けの雑誌「帆」、小学生向けに刊行したリーフレット「ます野」を合本した満洲読物『まんちゅりあ』、童話同人誌「新童話」を取り上げた。

第二期の「視学時代」の作品としては、石森が編集した叢書『満洲文庫』を取り上げ、全十四冊のうち、文学篇『童話と童詩』（紅版）と『満洲新童話集』（緑版）について考察し、満洲児童文学の特徴を探究した。また、『満洲文庫』は、発禁処分を受けている。この発禁処分の原因となった作品「軍人の子」（平方久直作）は『満洲新童話集』の冒頭に収められた作品であった。この「軍人の子」と発禁問題について考察した。

第三期の「彌生高等女学校教諭時代」の代表作に新聞小説「もんくーふおん」がある。この作品は、石森が一九三九年三月末に帰国する直前の三月（から五月）に、「満洲日日新聞」（夕刊）に連載された。石森は、帰国後、「もんくーふおん」を大幅に書き換え『咲きだす少年群』（新潮社）として出版し、その翌年に新潮社大衆文芸賞を受賞する。この作品について、新聞連載作品と単行本とを比較し、石森がこの作品に込めた思いを探究した。

第Ⅳ部は、鉄道附属地である撫順で展開された児童文学活動の中心人物であった寺田喜治郎と、そこで発行された児童雑誌「コドモ満洲」について考察した。「コドモ満洲」発行に関わったのは、寺田喜治郎と彼を慕う小・中学校教師たちのグループ「撫順国語夜話会」（のち「奉撫国語夜話会」）の同人たちである。彼らは、日々の教育活動の充実を図るために、名作の教材化・地方の教材化に着手し、それが児童雑誌「コドモ満洲」の刊行となる。石森らと同じ初等教

育者たちの活動の成果である「コドモ満洲」について考察した。

第V部は、満洲児童文学作家の一人である山田健二の人と作品について論述した。山田健二は満鉄社員としての業務の傍ら、童話を創作し、口演童話を行い、ラジオ放送に携わった。実話に取材し、自身の体験に照らして、鉄道附属地で暮らす人々や子どもの姿を描いているのが特徴である。

本論文では、満洲における児童文学研究の一環として、日本人によって展開された満洲児童文学を対象とした。だが、もう一つの大きなテーマが残されている。それは、本国中国で興った満洲児童文学活動の調査研究である。このテーマについては、今後、取り組むつもりである。

序論注

- 1 寺前君子「日本における中国児童文学受容史」「中国児童文学」第18号
中国児童文学研究会発行 二〇〇八年九月二八—三七頁
- 2 本項執筆にあたり、下記著書を参考にした。
 - ・馬寅主編・君島久子鑑訳『概説中国の少数民族』三省堂一九八七年
 - ・太平洋戦争研究会著『図説「満洲帝国」』河出書房新社一九九六年
 - ・小林英夫著『〈満洲〉の歴史』講談社現代新書 二〇〇八年
- 3 小林英夫『〈満洲〉の歴史』講談社現代新書 二〇〇八年十一月 三八頁
- 4 原田勝正『満鉄』岩波新書一九八五年四月 第八刷 六二頁
- 5 『満蒙年鑑』一九二六（大正十五）年版 五八〇・五八一頁
- 6 槻木瑞生「在満日本人教育」磯田一雄他編『在満日本人用教科書集成 第一〇巻』所収 柏書房 二〇〇〇年十一月 一九三—二二二頁
- 7 一九三二年度「南満洲教育會教科書編輯部一覽」磯田一雄他編『在満日本人用教科書集成』所収 柏書房 二〇〇〇年十一月
- 8 磯田一雄『「皇国の姿」を追って—教科書に見る植民地教育文化史』皓星社 一九九九年三月 二八・三二頁
- 9 石森延男「満洲児童文学回想」「満洲児童文学資料—その一」日本児童文学学会編「児童文学研究二」 一九七二年秋季号 三〇頁
- 10 『満蒙年鑑』「大正十一年版」創刊（推定）、「昭和二十年版」、一九三三年以降『満洲年鑑』と改称。
- 11 「中蒙文化協会」のち、社団法人となり、「大正十六年版」から「中日文化協会」と改称。
- 12 石森延男「満洲児童文学回想」「満洲児童文学資料—その一」日本児童文学学会編「児童文学研究二」 一九七二年秋季号 三〇頁

序論 末尾資料 「満洲児童文学関係 先行文献 一覧」(年代順)

- 喜田瀧治郎(編集委員代表)『石森先生の思い出』石森延男先生教育文学碑建設賛助会 一九六七年九月二〇日
- 山田健二「満鉄と児童文化―日満綴方使節のこと―」《体験者の記録2》日本児童文学者協会「日本児童文学」盛光社 一九七一年八月一日
- 坪田譲二「石森さんの人と作品」『石森延男児童文学全集第四巻しおり』学習研究社 一九七一年
- 千葉省三「満洲野」のことなど」『石森延男児童文学全集第七巻しおり』学習研究社 一九七一年
- 中川正文「ひとつの邂逅」『石森延男児童文学全集第七巻しおり』学習研究社 一九七一年
- 西原慶一「石森児童文学のいかにもすぐれた二面性」『石森延男児童文学全集第十二巻しおり』学習研究社 一九七一年
- 高橋健二「石森延男さんのこと」『石森延男児童文学全集第十二巻しおり』学習研究社 一九七一年
- 栗原一登「もんくーふおん譚」『石森延男児童文学全集第十四巻しおり』学習研究社 一九七一年
- 八木橋雄次郎「新童話のころ」『石森延男児童文学全集第十四巻しおり』学習研究社 一九七一年
- 石森延男「石森延男児童文学全集第十四巻」『あとがき』学習研究社 一九七一年
- 平方久直「先生と私」『石森延男児童文学全集第十五巻しおり』学習研究社 一九七一年
- 乙骨淑子「石森延男の場合」《特集》戦時下の児童文学 戦時下に活躍した作家たち「日本児童文学」日本児童文学者協会 一九七一年十二月
- 《座談会》「石森延男文学をめぐって」村松定孝・前川康男・石井和夫・木幡栄次「子どもらいぶらり」一九七一年八月
- 石森延男「満洲児童文学回想」『満洲児童文学資料 その一』日本児童文学学会「児童文学研究」二 一九七二年秋季号
- 石森延男「満洲児童文学資料 その二」日本児童文学学会「児童文学研究」三 一九七三年春季号
- 新村徹「日本「戦争児童文学」と中国」『野草』第十一号 中国文芸研究会 一九七三年六月
- 新村徹「日本「戦争児童文学」と中国」特集 戦時下のアジアと児童文学 日本児童文学者協会「日本児童文学」一九七三年九月一日
- 石森延男「満洲児童文学資料 その三」日本児童文学学会「児童文学研究」四 一九七五年春季号
- 船木枳郎「日本の子供への願い―出世作「もんくーふおん」―」『石森延男人間愛とロマン』学習研究社 一九七四年十月一日
- 八木橋雄次郎「石森延男先生と国語教科書」『石森延男国語教育選集第五巻』光村図書 一九七八年九月十日
- 石森延男『随想 わたしの落穂ひろい』あらき書房 一九八三年九月
- 石森延男『随想 続 わたしの落穂ひろい』あらき書房 一九八三年十一月
- 石森延男『随想 続々 わたしの落穂ひろい』あらき書房 一九八四年十一月
- 小森陽一「国語教科書における植民地教材 成城大学『成城学園教育研究所年報・第八集』 一九八五年十一月
- 新村徹「満洲児童文学」について『近代文学における中国と日本』汲古書院 一九八六年

- 久保喬 「石森文学の世界」「日本児童文学」 日本児童文学者協会 一九八七年十一月一日
- 渋谷孝編集・解説『現代国語教育論集成 石森延男』明治図書 一九九二年二月
- 磯田一雄 「石森国語の成立と満洲―その基盤としての『満洲補充読本』―」「成城文藝」第一四一号・成城大学文芸学部編集発行 一九九二年十二月
- 遠山清子 「石森延男の文体―『声の文学』を求めて―」「ことばといのち」雄松堂出版 一九九四年七月
- 尾崎秀樹 「童心に映じたる満洲」他「十五年戦争の谷間に16」「飛ぶ教室」51号 一九九四年十月二五日
- 尾崎秀樹 「満洲事変児童文集」「十五年戦争の谷間に17」「飛ぶ教室」52号 一九九五年四月二〇日
- 川村湊 『海を渡った日本語―植民地の「国語」の時間―』第六章「ワタクシドモハ、マンシウノコドモデス―満洲―」 青土社 一九九四年十二月
- 尾崎秀樹 「児童文集―満鉄初等教育研究会綴方研究部」『十五年戦争の谷間に18』「飛ぶ教室」52号 一九九四年十二月二五日
- 安藤修平 「石森延男」「月刊国語教育」十五巻第五号 東京法令出版 一九九五年七月一日
- 野地潤家 「主要著書解題 石森延男を理解する本」「月刊国語教育」十五巻第五号 東京法令出版 一九九五年七月一日
- 渋谷孝 「改訂石森延男年譜と新資料―現代国語科教育史論のために―」「宮城教育大学紀要」第三〇巻 一九九六年三月一九日
- 森かをる 「石森延男と『満洲文庫』―国定教科書における満洲教材―」「名古屋近代文学研究」第一四号 名古屋近代文学研究会 一九九六年十二月
- 森かをる 「咲きだす少年群」と『コタンの口笛』における「日本語」・〈種族〉―石森延男の戦中と戦後の作品から―」「名古屋近代文学研究」第十五号 名古屋近代文学研究会発行 一九九七年十二月二〇日
- 川村湊 「理念としての「五族協和」『文学から見る「満洲」「五族協和」の夢と現実』吉川弘文館 一九九八年十二月一日
- 磯田一雄 「戦時下の石森の児童文学作品と「満洲」「皇国の姿」を追って(第一部第五章) 皓星社 一九九三年三月十日
- 磯田一雄 「『のらくろ探検隊』と『スンガリーの朝』―戦時下の児童文化における「満洲」―」「成城文藝」第一六六号・成城大学文芸学部編集発行 一九九九年三月三日
- 赤座憲久 「石森延男の児童文学」 日本児童文学学会中部支部「児童文学論叢」第七号 二〇〇一年十月
- 河野孝之 「発禁処分の行方―石森延男編「満洲文庫」と東亜「新満洲文庫」―」「児童文学研究」三三五号 二〇〇二年十月十五日
- 高野光男 「石森延男と『南満教育』―石森延男における「文学」の発見―」「東京都立工業高等学校研究報告」三九 二〇〇四年二月二七日
- 西田勝 『《満洲国》文化細目』 不二出版 二〇〇五年六月二〇日
- 小笠原治嘉 『石森延男論考』童房舎叢書I 二〇〇五年十二月一日
- 長谷川潮 「日輪兵舎のまやかし」に「満洲児童文学」「山田健二」についての論考あり。『子どもの本に描かれたアジア・太平洋―近・現代につくられたイメージ』(第七章) 梨の木舎 二〇〇七年八月一日
- 柴村紀代 「満洲児童雑誌「新童話」について」「藤女子大学紀要」四四号 二〇〇七年
- 柴村紀代 「児童雑誌「コドモ満洲」の概要と特徴」「児童文学研究」四〇号 二〇〇七年十二月十五日

○上笙一郎「石森延男の手紙」日本植民地児童文学史稿・1 「日本古書通信」第九四二号 二〇〇八年一月

○季穎 『日中児童文学交流史の研究―日本における中国児童文学及び日本児童文学における中国』風間書房 二〇一〇年二月十五日 所収の第Ⅱ部

日本児童文学における中国の中での「石森延男」「平方久直、山田健二の作品」「満洲についての作品」

○柴村紀代「北海道立文学館蔵「石森延男スクラップ・満洲編」について」日本児童文学学会北海道支部機関誌「ヘカッチ」第五号 二〇一〇年五月

○「函館の貴重児童資料」論集 「函館貴重児童資料の公開と記録集作成」実行委員会 二〇一〇年十一月

柴村紀代「満洲児童雑誌「新童話」について」「児童雑誌「コドモ満洲」の概要と特徴」を所収

○相川美恵子『王の家』に描かれた満洲―旧植民地を描いた児童読物の可能性と限界』『児童読物の軌跡 戦争と子どもをつないだ表現』龍谷叢書所収

二〇一二年八月二〇日

『王の家』（平方久直・作）の「満洲」像―旧植民地を描いた児童読物の可能性と限界』（『児童文学研究』第三四号 二〇〇一年十月）
を改題して加筆訂正後、収録

○畠山兆子 解題・書誌作成『咲きだす少年群』財団法人大阪国際児童文学館（現大阪国際児童文学振興財団）「日本の子どもの本一〇〇選」（戦前
一八六八年―一九四五年）

拙稿

「絵本に見るアジア」鳥越信編『はじめて学ぶ日本の絵本史Ⅱ―十五年戦争下の絵本―』（第3章）ミネルヴァ書房 二〇〇二年二月二五日

「戦時中の絵本『新日本幼年文庫』の中の「中国」「中国児童文学」第12号 二〇〇三年七月

「満洲児童文学へのアプローチ―『満洲文庫』文学篇『童話と童詩』について―」「日本児童文学・文化研究誌」第3号 梅花女子大学大学院畠山研究室
二〇一〇年八月

「石森延男と『満洲文庫』」「梅花児童文学」第18号 二〇一〇年十一月

「満洲における石森延男の足跡―同人雑誌「童心行」の概要と細目」「中国児童文学」第21号 二〇一一年十月

「満洲児童文学研究―寺田喜治郎と『コドモ満洲』」「日本児童文学・文化研究誌」第4号 梅花女子大学大学院畠山研究室 二〇一二年二月

「コドモ満洲」細目」「日本児童文学・文化研究誌」第4号 梅花女子大学大学院畠山研究室 二〇一二年二月

「巖谷小波の満洲お伽講演―小波が語った「お伽噺」」「中国児童文学」第22号 二〇一三年六月

「満洲児童文学研究―「満洲日日新聞」「満洲日報」紙子ども欄の変遷」「日本児童文学・文化研究誌」第5号 梅花女子大学大学院畠山研究室
二〇一三年十月

本論

第I部

満洲児童文学の萌芽

―― 巖谷小波の満洲お伽講演

はじめに

満洲児童文学の萌芽期の特筆すべき出来事に、巖谷小波（以下「小波」）の満洲でのお伽講演（以下「満洲講演」）がある。小波は、一九一三（大正二）年（四十三歳）及び一九二六（大正十五）年（五十六歳）の二回、満洲講演を行っている。本稿では、小波の著述¹及び「満洲日日新聞」（以下「満日」²）紙上に掲載された小波関連記事をもとに、小波の二回の満洲講演について明らかにし、満洲児童文学の萌芽を探る。

本論に入る前に、本稿で用いた語句について説明する。

本稿で用いた用語は、基本的には、「満日」報道の用語に基づく。但し、「満日」報道における表記は統一されていない部分もあるので、本稿では次のように用いた。

小波は満洲で、「お伽講演」と「講演」とを行っている。「お伽講演」は、一般には、「口演」の語が使われるが、「満日」紙上では、「お伽講演」「お伽噺講演」と表記されている。いずれも、お伽噺を語った小波の講演を指している。本稿では、小波が満洲で行ったお伽噺の口演に関しては「お伽講演」に統一し、小波の語る話は「お伽噺」とした。「講演」は、「満日」紙上では、「講演」「講筵」とあるが、「講演」とした。また、「満日」紙上では、「満鉄家族會」「家族會」「家庭會」と表記されていたが、「満鉄家族會」に統一した。ただし引用文は原文のままにしてある。

第一章 巖谷小波について

一 略歴

小波は、一八七〇（明治三）年六月六日武蔵国麴町（現東京都千代田区）に生れる。本名季雄。生れたその年の十月に生母八重死去、翌年継母茂登が来る。巖谷家は近江国水口藩の藩医であつた。「漣山人」及び「小波」のペンネームは「さざなみや志賀の都は荒れにしを昔ながらの山桜かな（忠度）」による。父修は新政府の高級官吏となり、一六居士と号し、漢詩人で書家でもあつた。長兄は採鉱冶金の研究、次兄は養子に出、三男の季雄が医業を継ぐべく育てられる。子どもの頃からドイツ語を学ぶ。十歳の時、ドイツ留学中の長兄より勉学の助けにと送られたオットーのメルヘン集が、文学志望の原因の一つとなる。大学予備門への二度にわたる失敗の後、長兄の親友杉浦重剛の口添えで、文学への道が家族に認められる。その頃にはすでに硯友社に参加し、「我楽多文庫」に小説を数多く発表する。少年少女のあどけない恋愛を描き、「文壇の少年屋」と呼ばれた。一八九〇年十月、尾崎紅葉らと俳句結社「紫吟社」を創立。生涯句作を行う。一八九一年一月、叢書「少年文学」（博文館）の第一編に漣山人の名で「こがね丸」を発表、大好評を博す。一八九二年、杉浦重剛の推薦で「京都日出新聞」主筆となる。この時期から児童ものは原則として言文一致体とする。一八九五年一月、博文館が「少年世界」を創刊、その主筆に迎えられ、帰京する。一八九六年、京都の小学校校長からお伽噺の口演を求められたことがきっかけとなり、以後、お伽噺の口演をするようになる。小波は児童対象の作品を「お伽噺」と呼んだ。一九〇〇年秋から二年間、ベルリン大学付属東洋語学院の日本語教師を務める。ドイツの児童劇場に刺戟され、児童

劇公演の道を開く。歴史的かなづかいに疑問を持ち、児童対象の作品には発音式かなづかい（お伽仮名、わ仮名と自称）を使用した。ドイツから帰国後、早稲田大学でドイツ文学史を講じる。一九〇六年から一九〇八年まで、文部省図書課嘱託として国定教科書編纂に携わるが、内閣更迭で解職となる。一九〇八年から全国小・中学校、「少年世界」の愛読者らの招請で随時各地に口演旅行を行うようになる。一九〇九年、渋沢栄一を団長とする渡米実業団と共に北米を漫遊。一九一一年文部省文芸委員となり、また、通俗教育調査委員を命ぜられる。一九一三（大正二）年、満洲（二六年に再訪）・朝鮮（二三年、三〇年五月、同年十二月に訪朝）に口演旅行。一九一六年台湾（二五年、三一年に再台）に口演旅行。同年御前口演。一九一七年、博文館を辞す。一九二六年四月、デンマーク国王から駐日公使を経て、ダンネブローウ二等のB勲章を贈呈される。同年十一月ハワイへ口演旅行。一九二九（昭和四）年樺太へ口演旅行。一九三三（昭和八年）年中国地方に口演旅行中、腸閉塞症を起こし手術、直腸癌と判明。同年九月五日、六三歳で永眠する。³

二 先行論文

管見によれば、小波の満洲講演に本格的に取り組んだ先行論文はなく、小波自身の著述や当時大連で発行されていた新聞記事によって知る以外、その詳細は明らかではない。

巖谷大四著「年譜」⁴には、「大正二年」「九月、満洲・朝鮮地方へ口演旅行」、「大正十五年」「六・七月、満洲」と、実際の訪問時期が記されているだけで、その日程・内容については述べられていない。

金成妍著「巖谷小波の『全鮮巡回お伽講演会』——朝鮮児童文学と巖谷小波 その二」⁵には、一九一三年の第一回満洲講演の動機と日程の概略が述べられている。しかし、金氏論文の目的が、小波の全

鮮巡回を解明することであるので、当然ながら、満洲講演の内容については触れられていない。

他に以下の文献がある。

桑原三郎編「巖谷小波年譜」には、「大正二年（一九一三）四十三歳」「九月、満洲・朝鮮地方へ口演旅行に赴く」として、一回目の満洲講演のみが記されるにとどまり、『日本児童文学大事典』⁶では、「（一九）一七年に博文館を辞してからは、『舌栗毛』と称して満洲（現中国東北部）、朝鮮半島、ハワイにも足をのばした。」（続橋達雄著）とあり、一九一三年の満洲講演の記述はない。大竹聖美著『植民地朝鮮と児童文化』⁷には、「巖谷小波の朝鮮・満洲口演旅行」（一一頁）の中で、一九一三年の満洲講演での子どもの反応が述べられている。が、その内容は小波著『我が五十年』⁸に基づく論述である。

第二章 一回目の満洲講演——一九一三（大正二）年

一回目の満洲講演は一九一三年であるが、満鉄から声がかかったのは一九一一年である。これは、漱石に次いで早い招聘であると考えられる。小波招聘の目的は何か。小波は帰国後、東京で「満鮮の小國民」¹⁰と題して行った講演の中で次のように述べている。

（前略）子供の爲に参つたのであります。満洲には御承知の南満洲鐵道會社といふものがあつて此鐵道會社の沿道に、會社が經營して居る學校が澤山居りますのであります。其小學校に最早今日の處では兒童が澤山居りますので其子供等に話をして貰ひたいといふ御依頼が豫てから私に有つたのであります。（後略）
（大正二年十一月九日 日本橋俱樂部に於けるオモチャ會講演會にて）

小波は各地の小學校と満鉄家族会を中心に講演している。満鉄の招聘の目的は在滿日本人兒童及び大人に内地の文化に触れさせるということであつた。だが、小波の満洲講演は、漱石の訪滿と同じように、結果的には、内地に向けての満洲宣伝に一役買ったことになる。というのは、小波は初めての訪滿に関し、雑誌に寄稿し、講演で語り、満洲旅行記まで発表しているからである。このことについては後述する。

一 小波訪滿の動機

満鉄からの招聘に小波が応じるのは、二年後の一九一三年である。そのきっかけは、小波が北海道を訪れたことによる。小波は大連到

着の日に、「満日」の記者に次のように語っている。

（前略）先頃北海道を視察して來た結果急に満洲も見なくなつたからなのです、日本では北海道は最も新しい所で新しい土地だけに少年少女も非常に元氣がある日本では見られぬ潑刺たる元氣があるのか、非常に頼母しいそれで未來の無い所よりもより多くの未來を有する土地の少年少女に接して豫て私が首唱してゐる「桃太郎主義」を鼓吹したいと思つたのです（中略）日本の少年殊に是からの少年は桃太郎主義で無ければならぬ、飽くまで積極的で向上主義である、併も仲の悪い犬や猿や雉子等を威伏せしめて家臣にする等恩威共に行はれて面白い此の氣分はやがて日本人一同の心なのです（後略）
（一九一三年九月三十日付「満日」）

小波にとつて北海道は日本の因習に縛られない「新しい土地」で、「潑刺たる元氣」があつた。これなら、満洲にも同じものが期待できるかもしれないという思いを抱いたということである。引用文にいう「多くの未來を有する土地の少年少女」とは、満洲に住む日本人少年少女を指している。小波は植民地満洲に未來の可能性を見、在滿の日本人少年少女に、「桃太郎主義」を鼓吹したいと述べている。それは、積極的で向上心を持ち、桃太郎のように情と威厳でもつて植民地満洲の建設者たれ、ということになるうか。

また、「少年世界」誌上（十九卷十四号）に、小波が大連到着の翌日（九月三十日）に書いた文章「大連より」が掲載されており、そこには、これから満洲を旅行する小波の期待と抱負が語られている。

（前略）僕は、進んでこの新領土の新味をも、出来る丈漁り度い（中略）我々日本國民は、日に月に進んで行く、世界の大勢

に後れない様に目を千里の外に放ち足を萬里の遠きまでも伸ばして大に國威を發揚しなければなるまい僕は實にこの意味からして、大いに新しい物を好む。何故ならば、新しさは進歩を意味し、發展を意味するからである。そしてその新しさは、古くから開けて居る所より、新しく起つた所に於て、更に著しいのである。(中略) 此所の子供を見て廻はる事を大いに愉快に感ずるのである。(後略)

(二二二・二二三頁)

日本国民は、世界に目を向け、世界と伍し、新天地建設によつて大いに國威發揚しなければならない。ドイツに滞在し、北米を漫游した経験のある小波は、國際社会に通用する国民性の必要を痛感していたのである。この引用文から、小波が新天地である満洲に住む日本の子どもたちに、「世界の大勢に後れない」新しい国民像としての期待を抱いていたことが分かる。

では、在満日本人は小波の訪滿に何を期待したのか。「満日」掲載の記事「巖谷の叔父さん―大なる兒童教育家」(十月一日付)にこうある。

(前略) 得意のお伽噺をして是等少國民(在満日本人少年少女を指す。筆者注)に味ひある福音を傳ふことは、願ふてもなき事(中略)それと同時に、滿洲、朝鮮等にゐる我々日本人の狀態とその兒童の有様について、叔父さんの深き注意を望み、植民地における兒童の教育といふことを充分研究して戴きたい(一記者)

この記事は在満日本人の期待の代弁であつたろう。植民地化まもない満洲に暮らす日本人にとって、滿洲は教育及び文化的に立ち遅れた所であつたのである。

小波は一回目の滿洲講演で、三幼稚園、十九小学校、二高等女学校の日本人兒童生徒にお伽講演を行っている。小波が訪問した一九一三年に、滿洲全土にどれくらい日本人小学校があつたかは不明だが、おそらくほとんどの小学校を訪れたのではないかと思われる。というのは、大正十二年版『滿蒙年鑑』¹⁾によると、「明治三十九(一九〇六 筆者注)年五月先づ大連旅順に小學校が開設せられてから人口の増加に伴ひ學齡兒童の増加によつて現今(一九二一年現在筆者注)では南北滿洲を通して其數四十四校に達するに至つた」とある。年間約三校ずつ増えていったと仮定したなら、当時滿洲にあつた日本人小学校のほとんどを小波は訪れたということになる。この推測はあながち間違ひではなからう。

二 日程・講演内容

小波の滿洲講演の詳細は、「資料編の〈資料2〉」に「巖谷小波滿洲お伽講演日程表(一九一三年九月二十九日〜十月二十一日)」として添付したので参照願いたい。

まず、一回目の日程の概略を述べる。

一九一三年九月二十五日、東京を出発した小波は、京都・大阪に立ちよつたのち、門司から滿洲に渡り、滿洲―支那(天津・北京)―滿洲―朝鮮と旅をして、同年十一月五日に帰京している。一ヶ月と十一日になる滿鮮旅行の中で、小波が滿洲(四日間の支那行を含む)に滞在したのは、九月二十九日から十月二十一日までの二十三日間である。「廻つた場所が、滿洲で十七ヶ所、朝鮮で九ヶ所、序でに北京天津の二ヶ所、べめて二十八ヶ所に及んで、演壇に上つた數が、總計で七十一回、話題を改めた數が都合三十と七種。その短いのが二十分、長いのが一時間半」¹⁾と小波は書いている。

講演地を巡講演にあげると、大連(四日)・旅順・瓦房店・大石橋・

營口・遼陽・撫順・開原・鐵嶺・奉天（二日）・天津（二日）・北京（二日）・長春・公主嶺・本溪湖・鷄冠山・安東となる。

どの行程も過密である。各地で行われた小学校でのお伽講演と満鉄家族会での講演のほか、連日のように歓迎会が催された。また、小波は精力的に日露戦跡・名所旧跡・新施設を見学している。『少年日露戦史』¹³の著者である小波にとって、今回の旅のもう一つの目的が日露戦跡を実地に見ることだった¹⁴。さらに、満洲に来た「序でに」と、天津の義弟のもとで暮らす義母を尋ね、北京をも訪れ、天津、北京でも請われて講演している。

ここでは、主に大連における小波の動向について述べる。それは、主な資料とした「満日」が、大連発行の新聞で、大連での小波のお伽講演や聴衆の様子を詳細に報じているからである。が、それだけではない。大連は満洲侵略の拠点として要の都市であった。そのため、大連における小波のお伽講演の様子を知ることが、植民地満洲の文化状況を知る一つの指標となると考えたからである。

（一） 小波来満

（1） 小波を迎えるまで

「満日」紙上における小波来満の報は、実際の来満の七日前から始まる。「小波山人来る―各所にお伽講演開かれん」（九月二二日付）では、「大連幼稚園」でのお伽講演の予定を述べ「我少年少女は少年世界のお馴染の小父さん來るとて楽しみ悦こんで待ち居れり」とある。「お伽講演日程―小波山人の精力」（九月二四日付）では全満洲での日程を挙げている。「小波山人の事―河西博士の友情」（九月二八日付）では、医学予備校時代の親しい同級生として、大連在住の河西博士が、小波の経歴や人柄、童話の大家となるに至った経

緯について語っている。「本社主催お伽講演會」（九月二九日付）のお知らせでは、「お伽文學の泰斗小波山人巖谷季雄氏」とひときわ大きな活字で報じている。これらは、文化環境の整っていない満洲において、文化人の来満は待ち焦がれる大ニュースであるということであろうが、また、来満までに、メディアによって、小波の歓迎ムードがつくられていく過程であるともいえる。

（2） 大連到着

一九一三（大正二）年九月二十九日午後三時、小波の乗った嘉義丸が大連港に着岸。秋空高い埠頭での歓迎の様子を「満日」では、「お伽日和の大連灣―小波のオヂさん来る」（九月三〇日付）という見出しで次のように報じている。

（前略）同氏を出迎へんとて埠頭に集る舊友知己新聞記者等（中略）小波山人を見むと思ふものオヂさんを仰がんと思ふもの群衆堵を爲し混雑を極めたる中に（中略）コドモ館の少年は國旗を振りかざしつゝ、「叔父さん万歳々々」を叫び同氏を取り囲めば小波氏は目を細くして「有難う有難う」といたはり出迎の人々に挨拶して馬車にて旅館遼東ホテルに向かへり（後略）

その日の夜、小波は、満洲日日新聞社主催のお伽講演で「牛千匹」を語っている。その盛況ぶりを「満日」の同記事は次のように報じている。

（前略）午後六時と云ふに會衆夥しく七時には階上階下身動きもならぬ程人を以て埋められたり會衆は少年少女を中心として父母兄弟多く中には白髪のお母も見受けられたり（中略）氏が

巧みなる話振りに會衆何れも魅(ちゃーむ)され宛ら水を打ちたる如く静肅たりしも氏が話を了りて降壇すると共に夢より醒たる如く俄に拍手喝采し面白かつた嬉しかつたを名残りに家路に向ひたり(後略)

二つの引用文から、小波の来満に対する大連での熱狂ぶりが窺える。

小波の満洲講演中は、内地新聞¹⁵でも小波の動向が報じられているが、ほんの数行である。だが、大連発行の「満日」では、小波の来満前から始まり、日程や内容、歓迎ぶりまで逐一報告されている。在満日本人にとって、小波の講演はいかに大ニュースであったかが分かる。どの会場も立錫の余地なく聴衆で埋められたと報じられている。が、その中で、「鐵嶺」(十月九日)では「來集者未だ集り居らざりしため」舎監の挨拶や満鉄の慰問部長が講話するうちに「小學兒童滿鐵社員家族等も其中に参集したる」とある。時程の変更があったのかもしれないが、都市と地方の意識の違いの表れともとれまいか。

三 小波が語ったお伽噺

各地における小波のお伽講演の模様は、その都度、「満日」紙上で報道されており、時には講演内容の概略も紹介されている。そのため、小波が満洲で行った五十回ほどのお伽講演や講演のうち、十九回分について、題名や内容が確認できた(次表1「巖谷小波が語ったお伽噺・講話一覧」)。十九回分の中でお伽噺は十四編である。十四編中の六編(「蜂の功名」「水責地獄」「正直正吉」「指輪大名」「母のお手本」「石の花」)は、一九二三年の小波の朝鮮講演でも語られている¹⁶。

ここでは、(表1)のお伽噺について説明する。但し、「満日」紙上に紹介されたお伽講演の内容はほとんどが断片的で、そのため、他の出版物で内容を確認したものもある。その場合は、書名を挙げた。

(一)「山の神」 九月三十日午前 大連第一小学校

九月三十日午前は大連第一・第三小学校の児童対象にお伽講演が行われた。会場は二校に分けられ、高学年と低学年が別々の会場に参集した。最初の会場である第一小学校では、第一及び第三両校の尋常科五年生以上の男女生徒千百余名に「山の神」が語られた。その模様を「満日」(十月一日付)は次のように伝えている。

(前略) 登壇し開口一番先づ大和尚山を説いて其れより『山の神』てふお伽噺に遷らる例の巧みなる話振りに千余名の學堂首を長く延ばして小波氏が首を動かせば一同首を動かし手を振れば全くお伽噺中のものとなり感興の高潮に乗じては拍手喝采して快哉を叫ぶ(後略)

この記事から、導入に満洲に在る「大和尚山」に触れて、「山の神」を語るといふ小波の巧みな話術が窺える。また、子どもたちがこの話にいかにも魅了されたが分かる。記事には話の内容についての説明はないが、撫順(十月八日)で語られたのが「山の神とお花ちゃん」(ドイツの物語「大根数え」とあることから、ドイツの「リューベツァール」の物語)であることがわかる。小波編『世界お伽文庫第十七・十八編』(一九二〇年十一月、一九二一年六月)で「山の神」の話が紹介されており、「大根数え」はそのうちの一編である。参考までに『世界お伽文庫第十七編』の「山の神」の内容を簡単に紹介す

〈表1〉 巖谷小波が語ったお伽噺・講演一覧

月日	会場	時間	対象	内容
九・二九	大連・青年会館	午後七時―九時	少年少女	「牛千匹」
九・三十	大連第三小学校	午前八時―九時二十分	五年生以上（約千百名）	「山の神」
同日	大連第一小学校	午前九時半―十時半	四年生以下（約九百名）	「蜂の功名」
十・一	大連第二小学校	午前八時半―九時	三年生以下（約四百名）	「足の力」
同日	大連第二小学校	午前九時―十時	三年生以上（ママ）（約六百名）	「正直正吉」
同日	大連 大連医院	午後七時から	看護婦・高等女学生	「母のお手本」
十・二	大連幼稚園	午後四時から	四歳―七歳	「ケチ兵衛爺さんの話」
同日	大連（星の家）	午後十時半	南満洲教育会	講演「児童教育に就て」
十・三	旅順第一小学校	午前十時半	三年生以下（含む幼稚園）（約七百名）	「水責地獄」
同日	旅順第一小学校	午前	四年生以上・高等女学生（約千百名）	「指輪大名」
十・五	大石橋 公会場	午後七時半―九時	満鉄家族会	講演 日米人の性格の対照を引いて児童の積極的教育に論及
十・七	遼陽小学校	午前十時から	三年生以下	「けだものの喧嘩」
同日	遼陽小学校	午前	四年生以上	「人は情」
同日	遼陽 満鉄道場	午後七時―八時	満鉄家族会	「石の花」
十・八	撫順小学校	午前	三年生以下	「山の神とお花ちゃん」（ドイツ物語「大根数え」）
同日	撫順小学校	午前	四年生以上	「悦びの種」
同日	奉天小学校	午後七時―九時	父兄約二百名	講演 桃太郎主義の国民的講演
同日	鉄嶺・満鉄演武場	午後	満鉄家族会（約五百名） 児童・満鉄社員家族等	講演 お伽噺の根源より地上の天使に就いて 講演 家庭教育親子の情合（ママ）、親の子女教育に関する日常起居に於ける心得を説く

る。

山の神は、森や野原を畑や村に変える人間に興味を抱き、若者に姿をかせ、人間社会に入りこむ。が、欲深く情知らずの人間たちに幻滅して山に帰る。しばらくして、人間が恋しくなった山の神は、野遊びに来たエンマ姫を見染め、地の底へさらっていく。姫を喜ばせるために、大根で地上の家来たちを作りだす。姫は大根で作った鵲で地上の婚約者と連絡を取り、山の神に畑の大根の数を数えさせている間に、地上へと逃げ去る。それ以後、山の神は「大根数え」とあだ名で呼ばれるようになる。

あくまでも推測だが、撫順の「山の神とお花ちゃん」では、「エンマ姫」を「お花ちゃん」に変えて語ったのではないだろうか。というのも、小波は外国の話を基に語るとき、聴衆が身近な出来事と感じられるように、しばしば登場人物の名前を日本名に換えているからである。

(二)「蜂の功名」

九月三十日午後 大連第三小学校

第一小学校のお伽講演を終えた小波は予定ではすぐにもう一つの会場である第三小学校へ向かう筈だったが、「西公園アカシアの林間秋色普ねく捨て難き趣ある」(「満日」十月一日付)と勧められ、馬車から愛でた後到着。第三小学校では、第一及び第三小学校の尋常四年生以下の男女生徒九百名に対して「蜂の功名」を語っている。その模様は、「満日」(同上)に「鳥獸合戦の蜂の功名を語られたるに何れも大悦び」(同上)とあるのみで内容の説明はない。が、『小波おもちゃ箱』(九段書房 一九二五年十月五日発行)に同名の話が掲載されている。それによると、内容は次のとおりである。

ミソサザイの子が熊に馬鹿にされ、それに憤慨する他の子鳥たち。親鳥も怒って鳥の王に訴える。鳥の王は獣の王に熊の処罰を求める

が断られ、そのため獣仲間と戦をしかける。狐が獣軍の大將をかつてでる。高い場所から狐は尻尾の向きで采配を振るい、鳥軍は劣勢になる。蜂が狐の腹の下を針で刺す。狐が痛さで尻尾を下げると、指示を誤認した獣軍が一斉に退却。鳥軍の大勝利となる。

ここで描かれているのは、大きなものに立ち向かう小さいものの心意気と勇氣、知恵である。幼い聴衆はミソサザイの子に自分をおきかえて、この戦の勝利に拍手喝采したことだろう。この小さな鳥に日本を、大きな獣にロシアを置きかえるのは、決して穿った見方ではあるまい。

(三)「足の力」・「正直正吉」

十月一日 大連第二小学校

十月一日の午前は、大連第二小学校でのお伽講演である。「満日」(十月二日付)は次のように報じている。

(前略)校庭のポプラの蔭には少年少女ずらりと居並んでオヂさん遅しと待つてゐる馬車の影を見ると何れも手を叩いて小躍する小父さんいらっしやい先生いらっしやいと大層な騒ぎだ(中略)小波氏登壇『足の力』と云ふ題で怠けものゝ太郎さんと勤勉の次郎さんとのお話を手振聲色巧みに語られて聴衆は尋常三年生以下の男女生約四百静まり返つて聴いてゐるが感興の高潮に乗じては思はず拍手喝采して悦ぶ中には感極まつて涙をすゝるものもある(後略)

校庭で整列して小波を待つ子どもたち。小波の来校は学校の一大イベントである。童話の大家を迎える学校側の緊張と気構えが伝わってくる記事である。語られた「足の力」については現在調査中である。

そのあと、尋常科四年生以上¹⁷男女生徒約六百名に「正直正吉」が語られる。「満日」(十月二日付)には「小波氏得意のお話とて面白い事譬へやうもない」(同上)とあるのみで内容に関する記述はない。『袖珍改訂世界お伽噺第五集』¹⁸に同名の話がある。それによると、原話は、デンマークの話。スエンドという若者の名を「正吉」に変えている。あらずじは次のとおりである。

正吉は家が貧乏のため、奉公に出る。正直で信心深くあれという母の教えを守りよく務め、主人に可愛がられる。それを妬んだ奉公人の捻松が讒言し、それを真に受けた主人は正吉を瓦工場に追いや、少しでも悪いことをしたら、窯の中へ入れて焼き殺してもよい、と書いた手紙を別の者に持たせる。正吉の不幸を見物しようとして後を追った捻松が、途中、お宮で手を合わせた正吉を追ひぬき、窯で焼かれる。ある日、隣国から来た主人の友人が正吉を試す。手紙を持たされた正吉が友人の家に使いにやられ、酒をふるまわれ、カルタ遊びで身ぐるみはがれる。裸同然で主人の元に帰った正吉は正直に話す。主人の友人がしかけた試験に合格した正吉は褒美を貰う。

ここで語られているのは信仰心の深さと正直であることの大切さである。筋立ては変化に富み、脇役たちがさまざまな仕掛けで正吉を陥れようとする。それを正吉は信仰心と朴訥なまでの正直さで切り抜ける。教訓臭さはなく、聴衆は話のおもしろさにひきこまれていくうちに、正吉の信仰の深さと正直さに自然と共感していくであろう。

十月一日の四度目のお伽講演は、夜、大連医院の看護婦・高等女学生対象に語られた「母の手本」である。この話については、後の「四の(三)」で詳しく述べる。

(四)「水責地獄(水地獄)」十月三日午前 旅順第一小学校

十月三日。前夜に旅順に来た小波は、早朝に日露戦跡の爾靈山を訪れたのち、旅順第一小学校で、幼稚園児を含む三年生以下約七百名に「水責地獄」を語っている。記事中には話の内容の紹介はないが、『童話の聞かせ方』¹⁹に同名の話が収録されている。内容は以下のとおりである。

フランスとドイツの国境にある一軒の酒屋に三人のドイツ兵が押し入る。少年(太郎吉)とその妹(お花さん)は、ドイツ兵が穴蔵で酒の樽を手あたりしだいに開けて飲んでいく隙に、彼らを穴蔵に閉じ込める。少年が急いで村の義勇軍に知らせるが、義勇軍はドイツ兵を恐れて助けてくれない。少女は半鐘を鳴らす。火事だと集まってきた村人にわけを話し、協力して彼らを水責めにして捕らえる。

「水地獄」とも題されているこの話は、「獨乙の原書から取ったものであったが、歐州大戦後は、これを逆にして、獨逸の斥候が佛蘭西へ侵入して、其所で捕虜になる事に改め、また滿洲邊でやつた時は、馬賊が日本の酒屋へ侵入して、其所の子供に捕らへれる事にかへて見た」²⁰とあり、小波が滿洲お伽講演で語った時には、「馬賊」が「日本の酒屋」に侵入した話となっていたことが分かる。また、この話は、滿洲では三年生以下(含む幼稚園児)の低学年に語られたが、一九二三年の朝鮮講演では中学生・一般人対象に語られている。この対象の逆転は、話の内容が複雑であることに因ると筆者は考えている。さらに、この話は、一九一六年六月二五日(地久節)、秩父宮殿下(当時の淳宮)の誕生日の祝いの席で「御前口演」されている。²¹

(五)「指輪大名(鳥の小太郎)」

十月三日午後 旅順第一小学校

小波は、このあと引き続き旅順第一小学校で、四年生及び高等女

学生約千百名に「指輪大名」を語る。この話は「鳥の小太郎」²²とも題され、前述の「水責地獄」(「水地獄」)と共に、一九一六年六月二五日に「御前口演」されている。『童話の聞かせ方』収録の同名の話を参考にあらすじを紹介しよう。

狩の好きな大名がいた。息子の小太郎が諫めても聞き入れない。狩場で喧嘩に負けて縛られていた小人を助け、お礼に、一つ回せば願いの叶う腕輪を貰い、そのかわりに狩は週に一度にすると約束。大名は腕輪を指にはめる。一年後、狩は週に一度という小人との約束を破った大名は指輪を失う。隣国が攻めてきて、大名親子は洞穴に幽閉される。牢番と親しくなった小太郎は、時々、牢から外へ遊びに出る。小太郎は、森で巣から落ちた鳥の子を拾う。親鳥の元に返してやると、鳥が指輪をくれる。再び指輪を手にした大名の元に小人が現れ、すべて元どおりになる。その後、小太郎は指輪大名とあがめられ、国が栄える。

この話の寓意は、「上に立たれるお方は、仁慈の心が大切であるという事」²³であるとされており、動物愛護も訴えている。また、約束を違わぬことも教訓としているといえよう。

(六)「けだものゝ喧嘩(鶏の冠)」・「人は情」

十月七日午前 遼陽小学校

十月七日、小波は遼陽小学校で尋常三年生以下には「けだものゝ喧嘩」を語り、四年生以上には「人は情」を語っている。「満日」(十月十一日付)記事中に詳細な内容紹介があったので、それに基づき簡単に紹介する。

前者「けだものゝ喧嘩」は、「鶏(とり)の冠」とも題され²⁴、鶏はなぜ赤いとさかを持っているのかという由来譚である。虎が多く、獣を味方に引き入れ、獅子王を殺して獣王の位につこうとする。

その相談を耳にした鶏が獅子王に注進し、褒美として「とさか」という冠をもらったという話²⁵である。

後者は、大金持ちなのに、物乞いに施しするのも厭う人間の話。強欲な太郎兵衛は、一人娘の諫めをも聞かない。ついに、門前の乞食の言に迷わされ、隣村から子どもを買い、その子を亡き者にしようといふとあれこれ試みるが、失敗。成長したその子に全財産を取られ、家人からも追い出される²⁶。この話では、情を持たない人間の不幸を語っている。

(七)「石の花」 十月七日午後 満鉄家族会

十月七日の午後、小波は日露戦跡首山堡に登り、夜七時より満鉄道場で開かれた満鉄家族会で「石の花」というお伽講演を行っている。あらすじは次のとおりである。

お花さんは相愛の人に嫁ぐ。が、結婚前に、子どもを持つことを厭い一生子どもを持たぬ祈願をし「うまづめ」になっていた。そのことで夫に離縁される。寺で高僧に救われ七年間苦行の末、「うまづめ」の罪業が解けて、相愛の人との愛が復活。以後、子孫が繁栄したという。²⁷

この話では、女性の役割としての出産について説いている。「満日」²⁸紙上には、「今の新らしがる婦人連が自然の約束に悖り果ては子は要らぬとか家庭は五月蠅いとか云ふ輕薄の思想を諷して戒むる如き極めて面白味ある一場の談話」だと書かれている。「今の新らしがる婦人連」については、具体的な指摘はないが、ちょうど時期的には、平塚雷鳥らの「青鞥」(一九一一年)発刊と重なり、社会に女性の意識の変革が兆しはじめた頃でもある。これは植民地満洲の日本人社会が内地の社会情勢と直結していたということであろう。

この「石の花」と、後述する「母の手本」とは、共に、女性の役

割を説いた内容である。小波の今回の満洲お伽講演は、子どもを対象としている他に、女性に向けての啓蒙活動的な要素も見受けられる。この二つの話は、一九二三年の朝鮮講演でも語られている。

四 小波の語ったお伽噺と「桃太郎主義」

前述したように、小波は訪満の意気込みを「より多くの未來を有する土地の少年少女」に「私が首唱してゐる『桃太郎主義』を鼓吹したい」と語っている。小波著『桃太郎主義の教育』（東亜堂）の出版は、一九一五（大正四）年二月であるので、満鮮旅行時にはまだ刊行されてはいない。だが、小波自身の中では「桃太郎主義」は、満鮮旅行時にはすでに明確な形となっていたと考えられる。ここでは、小波の語ったお伽噺に見られる「桃太郎主義」について考察する。

（一）「桃太郎主義」

お伽噺の考察に入る前に、小波の唱える「桃太郎主義」とはどういう考え方か。簡単に述べる。以下の引用（鈎括弧内）は『桃太郎主義の教育』からのものである。

小波は、日本の置かれてゐる状況と桃太郎に代表される国民性の必要を次のように述べている。「日本開闢三千年、國として今日ほど發展した時は無いが、又今日ほど大切な時もあるまい。」（十一頁）として、日清戦争（一八九四―五）、日露戦争（一九〇四―五）に勝利した日本が国際社会と対等に渡りあおうとしている時期をこのように述べる。そして、「生存競争の激しい世の中には、人としても國としても、依頼と油斷が禁物、確固たる獨立心と、勇邁なる進取の氣象とが無くては、到底落伍は免かれぬのである。（中略）その獨立

の氣慨と云ひ、進取の氣象と云ひ、之を少年時代から養成するには、まづ國民教育が肝腎だ。そして其の教科書としては、即ち我が桃太郎なるものが、その無二のものである事を、僕は敢へて主張する。」（三〇頁）として、その根拠として、「桃太郎なるお伽噺は、その初めから終まで、積極的に、進取的に、放膽的に、而も亦樂天的である。」（三一頁）と述べている。つまり、確固たる獨立心を持ち、進取の氣性に富み、大胆でしかも樂天的な考え方で物事に立ち向かう人材の育成を目指したということである。

（二）小波のお伽噺に見られる「桃太郎主義」

「蜂の功名」の鳥たちや「水責地獄」の兄妹は、自分より大きくて強い者に敢然と立ち向かう。蜂は機転をきかして、狐の毛の薄い腹部に針を突き刺す。兄妹は救いを求めた大人が当てにならないと知ると、自分たちで解決しようとする。ここで語られるのは、獨立心と勇氣と知恵で自分より強い者に立ち向かう人物像である。

「正直正吉」では、信仰深く、正直であれという母の教えをひたすら守る朴訥な若者が登場する。邪心のない朴訥さが正吉を災難から救う。小波は、『桃太郎主義の教育』の中で、「正直」を「只嘘をつかないと云ふ、消極的の意味ではない。他も欺かぬと同時に、己を決して欺かず、即ち己の欲するまゝに、意思の向ふ通りを、言ひもし、行ふもすると云ふ」（二五二頁）と説いている。正吉の邪心のなさが「己の欲するまゝ」ということであろう。

小波は、『桃太郎主義の教育』の中で、「理知」よりも「情の力」を説く（一一七―一二二頁）。また、「力」と「徳」を備えた「將に將たる器」について述べている（二四〇―二四二頁）。「人の情」という話では、「情」のない強欲な人間の末路を語り、「指輪大名」では、慈悲の心を持たぬ大名が辛酸をなめる姿を語る。

小波は、「滋養的教訓」話を目指した。日本のお伽噺の多くが、「消極的な物」で「誠める」ものであるが、「健康の人間を、一層強壮にする方が、更に社會の利益ではないか」(四二頁)と考え、その「滋養劑の大なるものは、我が桃太郎」だと考えていた。小波は、大胆で勇氣と知恵を兼ね備え、かつ情にあつく、しかも樂觀的な「桃太郎」的人物を新しいお伽噺の主人公として具現化したといえよう。

(三) お伽噺「母のお手本」

ここで、「母のお手本」を特別に取り上げたのは、二つの理由からである。一つは、十月一日午後七時から、大連医院の看護婦・高等女学生対象に語られたこの話の内容は、「満日」²紙上で、六日間に分けて詳しく紹介されていたこと。小波のお伽講演の記事では、話の要点を紹介したものはあるが、これほど詳細に紹介されているのは、「母のお手本」だけであり、この話の内容を広く読者に伝えたいという意図が感じられるからである。もう一つは、要約であるにしても、当時語られた内容そのままであり、この話の中に、『桃太郎主義の教育』の原型が見て取れると考えるからである。

以下は「母のお手本」の内容の考察である。

小波は、導入に「親になる事はやさしいが親である事は困難い」と独逸の諺を引いて子供を育てる親の義務を語ったのち、伊藤博文の母であるお琴の物語を語る³⁰。

長門の萩の百姓十藏とその妻お琴に利助という一人息子がいた。餓鬼大将でいたずら者。祭の時に使う山車を引っ張り出して遊んでいて庄屋に叱られる。が、逃げもせず、悪びれず謝る利助の度胸に庄屋が感心する。度胸のある我が子を片田舎に埋もれさせるのは忍びないと、お琴は夫に武家奉公を勧め、田畑家作を売って、萩の城下に移り住む。利助十二の冬、夫婦は利助を藩の武士の家に若党と

して住み込ませる。雪の中、主人の使いで近くまできたので立ちよったという利助をお琴は厳しく叱りつけて追いかえす。すぐごと帰る利助の後ろ姿を、お琴は涙ながらに見送る。吹雪の中、うつむいて歩く利助が武士とぶつかる。武士に聞かれるままに、わけを話し、母の言葉を嬉しいと言う利助。まもなく、利助はその武士来原良藏の屋敷に引き取られ、教育を受ける。

小波はこの話の末尾を次のように結んでいる。「伊藤公があれだけの偉大なる人になられた所以のものは、其所に隠れたる偉人―即ち母親のお琴があつたからである、私は母親のお琴を母のお手本として諸氏に推薦するのである」³¹

ここで語られるのは、大器となる利助の才と、我が子を知る明を持ち、我が子の才を伸ばした母お琴の姿である。

小波は『桃太郎主義の教育』で、子どもの天性についてこう述べている。

「僕は想像する。彼の桃太郎なるものは、随分腕白な暴者であつたろう」(一〇七頁)「元氣の潑刺たる所、忽ち腕白となりいたづらとなり、どなりとなり、あばれとなる。これが蓋し子供の天性だ。」(一一三頁)

「子供の時は子供らしく、子供としての天真を、遺憾無く發揮させるのは、他日の大成が期されるのである」(一一六頁)。

つまり、利助は、餓鬼大将で腕白であつた。それは、子どもの天性を型にはめられることなく、伸び伸びと育ったから、「他日の大成が期され」たというのである。

また、小波は、『桃太郎主義の教育』の中で、「親になるのは甚だ易いが、親であるのは頗る難い」「即ち親になるのは只子を拵へる丈の事だ。が、親であるのは、即ち其子を育てると云ふ事だ。」(一八

九・一九〇頁）と述べている。この文言は、満洲で語った「母のお手本」の冒頭ですでに述べられており、小波の「桃太郎主義」が満洲お伽講演時にはすでに確立していたことが証明される。そして、小波は、「遺傳」よりも「薰育の力」を重視すると言い（一〇二頁）、また、「今日の教育」は、「おとなしい子は作つても、つよい子は作らうとしない」「おとなしい子」は、「賢い人間」であるかもしれないが、「偉い人物」にはなれない、と批判し、「眞の教育は、各人の個性をよく研究してからでなければ、とても出来る筈ではない」（十五頁）と説く。

「母のお手本」のお琴は、腕白な餓鬼大将の我が子利助の人並みならぬ才を見抜き、我が子のために最良の環境を整え、その利助を日本の近代国家の礎を築いた偉人・伊藤博文に育てあげた。正しく、お琴は「桃太郎主義の教育」の具現者たる母親として語られている。

五 お伽講演の手応え

小波は、お伽講演や講演によつて内地の文化に飢えた人々を慰問し、「桃太郎主義」を鼓吹した。一方、在満者は、各地でお伽講演を行った小波が植民地における児童の教育に積極的に意見を述べることを期待した³²。

「満日」によると、小波の満洲講演は、どの会場も盛況であったという。では、満洲お伽講演を行った小波自身の手応えはどうであったのか。

ここで紹介したお伽噺の多くは、外国の話の翻案であるが、小波が満洲で伝統的な日本のお伽噺を語らなかつたのかと言えば、そうではない。『我が五十年』（一九二〇年 東亜堂）の中で、次のように語っている。

（前略）満洲に於ける子供にもお伽噺の滋味を解せぬものがあつた。かの地方に於ける幼稚園尋常一二年生の爲に私は善く分るやうにと、お伽噺も程度の低い、人間の出来ない動植物を主題にした―擬人法に依るお伽噺を試みた。が、これは意外にも失敗した。何故なれば、「……河で洗濯した」と話しても、満洲には洗濯の出来るやうな河がなく、又龜の子を見た事がない者もあれば、木のある山のない處もあり、海を知らぬ子供もあると云ふやうな事で（中略）満洲の子供―眼界の狭隘なる聴衆に對しては、遂に私のお伽噺は失敗したのである。（三一三・三一四頁）

この引用文から、伝統的な日本のお伽噺を語ったことが分かると同時に、幼児・低学年対象の場合、自然や生活環境の違いから十分に理解されているとは思えなかつたようである。だが、一方で「併し尋常五年の生徒になればなかく、たいしたもので、内地の片田舎の子供などに比較すれば、遙かに眼界も廣く、何事も善く知つて居るのに愕いた」（同三一四頁）とあり、その理由に「この子供達は或は東京、大阪と云ふ様に、いろいろな處から両親と共に移住したものであるから、私共のお伽噺を聴いても、十分に消化してその興味を感ずることが出来るのである」（同三一四頁）と述べている。

のち、『童話の聞かせ方』（一九三二年 賢文館）では、「新領土の風土や人情習慣など、特殊な點をよく頭に入れておいて、同じ話をするにしても、彼地の者によく通ずるやうに工夫しなければならぬ」（九五頁）と述べている。小波は、初めての満洲お伽講演で、内地とは違う環境を実感したのであろう。

六 小波が語る満洲旅行の印象

帰国後、「読売新聞」(十一月七日付)紙上に、「満鮮おみやげ―小波氏の旅行談」という記事が載る。小波は「満鮮といつても今はもう別に珍らしい所ではないが子供を見て来たことは僕に及ぶものはないと思ふ」と語り、在満の日本の子どもに直接触れた印象を次のように語っている。

(前略)父兄の轉任などの關係上轉校が多く又(中略)各地方のものが集まつて來てゐるから相互の間に友愛の情が乏しくなるとなく索莫の感じがする、然しその代りに皆獨立心が強く意志が堅い小學校でも一學級から寄宿舎に入らせるから(中略)自營する、この點は注文通りの意志教育が行はれてゐるが之が拙くゆくと自我本位、ヤンキー式になつてしまふ、つまり内地の兒童にはもつと意志教育が必要でこの植民地の兒童にはもつと趣味教育の必要がある(後略)

小波は在満日本人兒童の獨立心の強さを褒める一方、各地から集まつた兒童間にある人間關係の希薄さを指摘し、趣味教育の必要性を説いている。さらに、「満洲の兒童の幸福な點」として、學校設備面での良さと教師の優秀さを挙げ、「不幸な點」は、「社會の娛樂機關の缺乏、自然の荒寥落莫」を挙げている。これは、満洲の、まだ文化的環境が整っていない点を指摘しているのである。そして「教科書の問題」に触れて次のように語っている。

(前略)内地本位で可けない(中略)植民地には植民地の教科書が必要で折角この新領土に踏みだして將來の發展を期待すべき兒童に内地を慕はせるやうな思想を注入することはよくない、もつと世界的な、因襲のない新國民を養成するに努めてほしいと思ふ

小波が渡満した一九一三年には満洲で内地製の教科書を使う弊害が表面化し問題になっていた時期であつた。翌一九一四年に関東庁が、一九一七年には滿鉄が教科書編集に着手し、一九二三年に関東庁と滿鉄の合同組織である「南滿洲教育會教科書編輯部」の前身「南滿洲教育會編輯部」が創設されている。小波はドイツで日本語を教授(一九〇〇年―一九〇二年)し、また、国定教科書の改訂編纂(一九〇七年頃)にも携わつた経験がある。そのため、植民地滿洲の教科書に対しても強い関心を寄せ、小波独自の見解を述べている。だが、小波の見解と「南滿洲教育會編集部」の方向が同じかどうかは検証する必要がある。

小波はこの記事の中で、植民地に生きる「新國民」像を述べている。それは、「世界的な」目を持った、「因襲に縛られない」人間育成である。当然ながら、小波の標榜する「桃太郎主義」の精神を持つていることが前提であることは言うまでもない。

七 満洲兒童文学の萌芽

(一) お伽話の口演活動の促進

お伽話の口演については、内地の隆盛と連動して満洲で比較的早くから行われていたであろうと筆者は推測している。というのも、今回の小波の訪満時、コドモ館の館長である西村濤陰は、小波のお伽講演の前に「明治三年生まれの午歳」の小波のために、歓迎の辞に代えて「お伽馬」という話を語っている(十月一日付「満日」)。また、同子供館を小波が訪れた時の様子が次のように報じられており(十月二日付「満日」)、この記事から、大連におけるお伽話の普及を垣間見ることができる。

(前略) 聴衆は子供を中心として丸髷庇髪お太鼓海老茶袴等ぎッしりつめかけて坐る場所とてない二時開會西村濤陰君立つて歓迎の辭を述べてからアカシヤの森と云ふお伽噺を語り次いで内藤満ちちゃんとして可愛い男の子が桃太郎のお話をする廻らぬ舌ながら中々上手だ優しい唱歌やお話があつた後羽織袴の小波氏嬢々として演壇に上り子供に分り易い極めて面白いお話をされた子供館の子供だけにオヂさんの名を知つてゐるから氏の羽織の袖にまっつたり抱きついたりして大悦びだ(後略)

コドモ館とはどんな所か、私立の幼稚園だという説もあるが、現時点では不明である。だが、この子どもたちは小波の名を知っており、また、日ごろからお伽話の口演を聞いていると思われる。

満鉄の小波招聘は、満洲でも行われていたお伽噺の口演の隆盛を促し、口演童話の愛好家のすそ野を広げたであろう。小波の満洲講演がきっかけで、研究会が発足したというような具体例は、現時点では見つかっていないが、満洲の口演童話の発展を大いに勢いづけたことは想像に難くない。そしてそれは、植民地満洲に子ども文化を生み出す土壌を耕すことであつたともいえる。

(二) 最初の子ども向け満洲旅行記―「満鮮いろは噺」

帰国後、小波は「少年世界」に今回の満鮮旅行についての文章を多く掲載している。詩「爾靈山」(第十九卷第十五號)、「満鮮お伽日誌」(同上)、満洲お土産お伽噺「鈍太郎の初夢」(第二十卷第貳號)、そして、満鮮旅行記「満鮮いろは噺」(一九一四年二月〜六月)である。ここでは、「満鮮いろは噺」を取り上げる。それは、小波が内地の少年少女に向けて書いたもので、おそらく子ども向けに書かれた

最初の満洲旅行記だと考えられるからである。

(1) 執筆の動機

「満鮮いろは噺」を連載するにあたり、小波はその動機を次のように述べている。

新領土に居る少國民には、内地の事をもう忘れたりまた少しも知らない者がある。それが如何にも氣の毒ではある。然し其代りには、内地の少年の受ける事の出来ない活きた教訓に又富んで居る。(中略) 僕は新領土の小國民諸子^{ママ}に、内地の事を知らせ度いと同時に、又内地の少年諸子にもこの新領土の有様を、是非知らせ度いと思つて居る。否、正に知るべき必要があると思ふ」³³

「新領土」とは、この場合、満洲と朝鮮を指している。「新領土の小國民諸子」も「内地の少年諸子」も共に「日本人」である。「新領土の小國民諸子」にもっと内地のことを知らせたい。一方、「内地の少年諸子」は「新領土の有様」を知るべきであると述べている。そして、「内地の少年諸子」に、「新領土の有様」を伝えるために書かれた作品が「満鮮いろは噺」であるというのである。ちょうど、漱石が満洲から帰国後、「満韓ところどころ」を連載したのと同じ動機であるといえよう。

(2) 概要

次の「表2」は「満洲いろは噺」の目次である。

一ヶ月と十一日
 露西亞の足跡
 白塔下の小學校（遼陽）
 爾靈山の野菊（旅順）
 星ヶ浦の絶景（大連）
 北京の自動車
 湯崗子の温泉
 地獄の門口（撫順炭坑大山坑）
 ○李王家博物館
 盗人の晝寢所（長春と寛城子の間にある三不管）
 壘々たる土饅頭
 落付かぬ生徒
 渡鳥の戸惑（旅順の表忠塔）
 寛城子の荒廢
 幼年の先帝
 ○大同江の砧
 靈地の乞丐
 蔬菜品評會（本溪湖）
 月の入り所
 鼠の代りに蠅
 ○何の爲めのサアベル
 喇嘛殿の荒顔（北京）
 （以上 第二十卷第二號 一九一四・一・五發行）

のゐうむ
 昔の御所（奉天）
 鶉の名所（旅順）
 ○居候の威張る國
 乗心地の好い汽車

お 恩津の大佛
く 群山の米作

(以上 第二十卷第參號 一九一四・二・一發行)

や
屋根の穴
(旅順)

萬壽山の絶景（北京）

○玄武門の二度吃驚

○普通學校

コンドラチエンコ討死の跡（旅順）

營口の支那街

天下第一關（万里の長城）

(以上 第二十卷第四號 一九一四・三・一發行)

旭山の古戦場（安奉線の橋頭駅一帯）

○三百年祭の釜山

居留地の共進會（天津）

輸入の魁（長春）

(以上 第二十卷第五號 一九一四・四・一發行)

め
名相の靈廟（天津―李鴻章の廟）

民國の成立

首山堡の古戦場（遼陽―橘中佐戦死の地）

(以上 第二十卷第七號 一九一四・五・一發行)

〇畫卷の正の物

羊の群（奉天郊外）

門番の大男（北京）

せ
○清涼里の廟所

鈴の鳴る汽車

(以上 第二十卷第八號 一九一四・六・一發行)

「満鮮いろは噺」は、いろは歌をタイトルの頭文字に取り入れ、四十七項目にわたって、満鮮旅行での見聞を綴っている。「少年世界」の「第二十卷第二號」（一九一四年四月一日）から「第二十卷第八號」（一九一四年六月一日）まで連載された。「満鮮いろは噺」目次（前頁「表2」）は、筆者が四十七項目のタイトルを書き抜き、作成した。最初から順番に見て行くと、「い」「ろ」の項は「書き出し」として、「い」では「一ヶ月と十一日」に及んだ満鮮旅行の概略を述べ、「ろ」では満洲の経営がロシアから日本に渡ったことを述べている。最後の項である「す」は「結び」として、満洲における日本の役割を述べている。そして、「は」から「せ」までの項は、行程に関係なく、満洲と朝鮮での見聞を披露している。その筆致は平易で、率直である。

（3） 内容

小波が見学したのは、植民地満洲、北京と天津の日本人居留地及び名所旧跡、そして併合後の朝鮮である。ここでは、満洲での見聞のいくつかを紹介する。

「ろ」の項「露西亞の足跡」で、小波は満洲のことを次のように表現している。

満洲は云うまでもない、この十年前までは、露西亞人の勝手に横行して居た所だ。それを三十七八年戦役（日露戦争のこと引用者注）に、明治天皇陛下の稜威の力で、遂に我方へ譲り取つたのである。

それ以来我日本の手で、新たに経営を初めたのだが、元より露西亞の足跡は、まだ方々に残つて居る。

その足を十二文とすれば、我が足は漸く十文位だ。まだこんな

小さな足では、折角残して行つてくれた靴も、思ふ様に穿きなせぬと云つた様な始末だ。

それにつけても我々は、もつと大きくならなけりやならぬ、もつと強くなけりやならぬ。さもなけりやア折角満洲を取つても、却つて大きな履物に蹴躓いて、飛んだ物笑にならぬとも限らない。（「少年世界」第二十卷第二号 三頁）

日本は日露戦争によつて、ロシアから満洲の權益を奪いとつた。

そして、日本は建設途上であつたロシアの街づくりをベースに植民地建設を進めたのである。小波は、その経緯及びロシアと日本の国力の違いを足のサイズに譬えて述べている。そして、満洲支配を進めるためにも、国際社会に打つて出るためにも、これからの日本は、「大きく」「強い」国とならなくてはならないと述べている。この文章から小波が世界の中の日本をどう捉えていたかが分かる。

「を」の項では、「落ち付かぬ生徒」と題して、在満日本人児童の現状を次のように述べている。

満洲至る所、今は日本式の小學校が出来て居て、其所に日本の生徒が居る。僕の見た所でも、一番少ないので五六十人、多いのは五六百から千人近くもあつた。

此等の生徒は、皆その父兄に連れられて、此地方に来て居るのだが、父兄の都合で、度々居所が變る爲めに、その都度轉學しなければならず。甚しいのになると、六年間に七八度も學校を換へて、一學年と一つ學校に、落付いて居られぬのがあるさうだ。なんと氣の毒な話ではないか。

その代り一方からは、非常な優待を受けて居た。即ち汽車は一切無賃で、而も二等室に入れられ、貨車を利用した場合には、停車場の無い所でも、家の近間で便宜に停めてもらふ事も出来

る。

又面白いのは、元より新開地の事だから、各地の生徒の寄り集つて居る事で、一つの學校に、三府四十二縣の者があるなど、内地でとても見られない事だらう。

（「少年世界」第二十卷第二号 九・十頁）

ここでは、在満日本人児童が内地とは全く異なる環境の中で育つ状況が述べられていて興味深い。父兄の都合で度々「轉學」を強いられる生活環境と、もう一方で植民地ならではの優遇措置。子どもの頃から「特権階級意識」が生まれる状況が日常生活の中にある様子がよく分かる。

小波の「支那人」に対する意識はどうであろうか。「れ」の項目「靈地の乞丐」で、小波は「支那人」の印象をこう述べている。

支那位乞丐の多い所はあるまい。否、一體支那人の多數が、已に乞丐根性を備へて居ると云つても、必しも過言でないのかも知れない。

例へば奉天の北陵でも、北京の萬壽山でも、喇嘛の寺でも、孔子の廟でも、さう云ふ神聖な所、崇靈な地を參拝して廻はるに、其案内者は何れも乞丐の様な奴計りだ。

これはその風俗の、汚らしいと云ふ計りではない、その根性が頗る下劣で、正當な拂ふべき案内料の他に、何分かの酒手を所望する。そして之を挑ねつけても、別に腹を立てない代りに、相手さへ變れば幾度でも手を出す。

いくら恥を搔かされても、取る物さへ取れば可いと云ふ。こんな國でも今以て、孔子を祀つて居るのが不思議だ。

（「少年世界」第二十卷第二号 十三頁）

これは、小波が見学地で体験したことであろうが、「一體支那人の多數が、已に乞丐根性を備へて居ると云つても、必しも過言でないのかも知れない」とあるのは、あまりにも極端すぎる。なぜなら、小波自身、「へ」の項「北京の自動車」では、狭い小路や雑踏の中を事故なく運転したことに対し、「支那人の運轉手、大いに侮る可からず」と感心している場面もあるからである。ただ、小波が見学した大部分は、日本統治下であつたということ、つまり植民地或は居留地という日本人優位の社会での「支那人」の印象であつたということである。植民地或は居留地における「支那人」の一面を表していると言えるが、小波自身の中に、「支那」に対する蔑視はなかつたろうか。

最後の「す」の項「鈴の鳴る汽車」では、満洲における日本人の役割を次のように述べている。

日本の汽車はピーと云つて出る。満洲の汽車はガランく
と揺れ出す。此邊が狭軌と廣軌の差だ。

あの大きな汽鐘の頭に、高く半鐘を掲げて、これを鳴らしながら進行するのは、北米を廻つた時に、目にも耳にも馴らされた事だつたが、今度また同じブルマン式に乗つて坐ろに彼時の事を思ひ出した。

あはれこの満洲も、鐘の音の繁くなるにつれてその文明の度の進むことも、やがて北米の如くであれかし。

その場合我が日本人はさしづめ彼所での英國人と云役目だ。――蓋し大いに努めねばなるまい。

（「少年世界」第二〇卷第八号 十五頁）

小波は植民地満洲の建設を「北米」の開拓時代に譬えている。そして日本の役割は、「北米」を文明国家にした「英國人」の立場にあ

るという。ただ、今の日本ではまだまだ力不足だともいう。

小波は満鮮旅行の見聞を「満鮮いろは噺」として発表した。石森が「帆」(一九二七年)や「ます野」(一九二九年)という雑誌で満の日本人児童生徒に向けて満洲風物を紹介するよりも十三年前のことである。小波は旅人として満洲風物の見たまま感じたままを率直な表現で内地の少年少女に紹介し、石森は生活者として自分の感性で捉えた満洲風物の良さを在満の少年少女に向けて紹介したという違いはあるが、一九一四年に子ども向けの満洲旅行記が書かれていたということは、満洲児童文学の萌芽として注目に値する。満鉄の小波招聘は、在満日本人や日本人児童に対する慰問と教育の他に、小波の筆による満洲紹介という大きな成果をもたらした。おそらくこの成果も満鉄の招聘目的の一つであつたのだろう。

第三章 二回目の満洲講演——一九二六（大正十五）年

植民地満洲の子ども文化を語る場合、常に内地の子ども文化の状況を把握する必要がある。それは、内地で発行されていた子ども雑誌はほぼタイムリーに植民地満洲に入っており、満洲の子ども文化の発展は、早い遅いはあっても内地のそれと連動しているからである。小波の二回目の満洲講演について述べる前に、一九二〇年代の内地の童話界の概況を押さえておく。

一 一九二〇年前後の内地の童話界の概況

「こがね丸」（一九一一年一月）の大ヒット、雑誌「少年世界」を初めてする少年少女向け雑誌の刊行、口演童話の隆盛。明治から大正の中頃までは、巖谷小波に代表される「お伽噺」の時代と呼ばれる。「お伽噺」は、一九一八年から「童話」と呼びかえられ、各地に童話研究会ができ、当時「童話」と言えば読む童話よりも話す童話のことを指すほどであった。が、一九一〇年代より生れた芸術的童話・童謡によって、童話界の様相が変化していく。小川未明の第一童話集『赤い船』（一九一〇）や島崎藤村ら当時新進の若手作家による「愛子叢書」（一九一三）が刊行され、一九一八年七月に「赤い鳥」が創刊。「赤い鳥」の出現によって類似の子ども雑誌が続々と刊行され、「赤い鳥」を中心とした芸術的児童文学運動が興る。一方、「立川文庫」のような大衆的・通俗的児童文学の流れを汲む雑誌も刊行され、その代表的な雑誌「少年倶楽部」（一九一四年十一月創刊）は、一九二〇年代より、佐藤紅緑、吉川英治らの小説、田河水泡らの漫画などで圧倒的人気を博し、昭和初期に全盛期を迎える。³⁴

二 「全満児童デー」

小波の二回目の満洲講演は、一九二六（大正十五）年六月十六日から七月七日までの約三週間である。満鉄主催の「全満児童デー」（六月十三日）が挙行された時期に招聘された訪満であった。

まず、「全満児童デー」について説明する。

一九二六年五月二六日付「満日」に「童話のおちさん 小波先生 来る 六月中旬に全満児童デー おちさんは 沿線を行脚する」という見出しで、「全満児童デー」及び小波の来満に関する記事が掲載されている。以下はその記事の要約である。

満鉄社会課では、昨年、大連を初め沿線各地に児童デーを催し、童話劇、童謡、遊戯等各小学校の生徒に出演させて好評だったので、今年は六月十三日沿線一斉に「全満児童デー」を挙行することになり、各地方事務所社会主事がその土地の小学校と連絡を取って準備している。ただし、大連は小学校が関東庁の管轄であるので、打ち合わせに時間がかかり、日取りはまだ決定していない。満鉄社会課では、「斯界の権威者巖谷小波氏」を招くことになった。大連では児童デーの席上で巖谷氏の童話を請うことになるであろう。出演は各小学校に分担して貰って、児童の童謡、童話劇、遊戯等が演じられるだろうが、社会課では児童向きに精選した活動写真を見せるつもりである。

実際は、一九二六年の児童デーは第三回目³⁵となる。満鉄は、第三回目開催に当たり、「全満児童デー」として、沿線で一斉に行うという大規模な企画、しかも、「全満児童デー」の時期に、「斯界の権威者巖谷小波氏」を招くという力の入れようである。結果的には、小波の来満は六月十六日で、「全満児童デー」当日には間に合わなかった。が、小波は約三週間の滞満中、「全満児童デー」で児童愛護の意識の高まる満洲各地で精力的にお伽講演と講演を行っている。し

かも、七月三・四日の両日に行われた大連の「児童デー」（「満日」では「児童愛護デー」と表記）には、三日の午後、自動車で駆けつけお伽講演を行っている。

それでは「全満児童デー」とはどういうものであったのか。

開催趣旨は、「この日に児童を楽しく遊ばせると云ふことの外に一般人にこの日を記念として児童を愛護するという記憶を新にしてもらうと云ふことが目的である」（一九二六年七月一日付「満日」満鐵社會課鮫島氏談）とあり、また、「第二の國民たる児童が如何に尊重すべきものであるかは私^{ママ}言ふ迄もない事である」（同上）とある。満鐵は、「全満児童デー」開催に向けて、小学校との協議はもちろん、各市の要人や新聞社、地域の商店等への協力要請を行っている。児童デーの開催は、満鐵の主導によつて植民地満洲に児童愛護の意識の啓発が行われ、芽生え育ち広まることを目的としていたといえる。

「全満児童デー」の内容については、「満日」の記事を基に、「各地の「全満児童デー」の概要」として一覧表にまとめた（「資料編の（資料2）」）。詳細についてはその一覧表を参照願いたい。ここでは、催しの概略を述べる。

まず、参加者についてである。当時の満洲の初等教育機関を大まかに述べると、日本人の子どもが学ぶ「小学校」、中国人の子どもが学ぶ「公学堂」、朝鮮人の子どもが学ぶ「普通学校」があった。どの都市にも「公学堂」や「普通学校」があったわけではないが、筆者が作成した一覧表の中の都市で言えば、大連、瓦房店、長春には「公学堂」があり、撫順、安東、鐵嶺、長春には「普通学校」（もしくはそれに相当する「育英学校」）があった³⁶。だが、一覧表（資料編の（資料3））に挙げた都市のうち、撫順以外の参加者はいずれも「小学校生徒」「幼稚園児」とあるので、主な参加者は日本人の子どもであったことが分かる。ただ、撫順だけは、参加者に「第一第二小学校・公学堂・普通学校生徒」とあり、日本人、中国人、朝鮮人の子

どもたちが一緒に児童デーを楽しんだ様子が窺える。当時にあつては「先進的」とも思えるこの撫順の参加形態はどこから来るのか。詳細な調査が必要であつて、早計には結論は出せないが、あえて推測を述べるなら、撫順は大きな炭鉱の町で日本人以外に、多くの中国人、朝鮮人が働いていた。そのため、子ども全体に対する文化的意識や環境が他の都市より進んでいたのではないか。というのも、「童話研究」（日本童話協会発行）掲載の「日本童話協会会員名簿」によると、一九二六年八月に、満鐵の招聘で渡満した檜葉勇が撫順に來たことがきっかけで「撫順童話協會」が発足しているからである³⁷。また、のち、寺田喜治郎を主編とする雑誌「コードモ満洲」（一九三一年九月創刊）も撫順を中心とする小学校教師たちによつて誕生している。

催しの内容は、各地各校によつて異なるが、共通しているのは、いずれも半日程の日程で、お伽講演、童謡、ゲーム（宝探し）や音楽会が行われ、多くの会場で賞品や菓子の配布があり、子どもを主体とした企画であつた。さらに、多くの都市で旗行列によつて「児童愛護」を啓発している（安東・瓦房店・大石橋・遼陽・鐵嶺・長春）。一方、神社参拝（安東・大石橋・鐵嶺）や兩陛下万歳三唱（大石橋）、「君が代」合唱（長春）、幼児への風船付き国旗配布（撫順）といった皇民化教育と合体させた所もある。この他、児童の作品展（瓦房店・長春）、児童の健康チェック（瓦房店）、地域の商店の協力による割引売り出し等もある（遼陽・鐵嶺）。

中でも、大連の催しは一段と盛大であつた。大連の小学校は関東庁管轄であつたため、満鐵と関東庁（大連奨学会）との協議を経て、「児童デー」が七月三、四日の両日と決定。主催は他の都市と同様に満鐵社會課で、会場は満鐵社員倶楽部で行われた。六九五〇名程の小学生を三組に分け、三日の午後、四日の午前・午後の三回開催である。初日は小波のお伽講演、二日目の午前と午後は深瀬薫のお

伽講演や絵噺の他に、深瀬夫人の指導によって、練習を積んだ躍りやダンスの発表があり、二校の女生徒による童話劇など多彩な演目が披露された。

催しで、特に注目したいのは、どの会場でもお伽講演が行われていることである。小波や深瀬薫のような童話の専門家を招いた大連はむしろ特別で、ほとんどの都市では、校長や教師が語り、中には本願寺の僧が語っている。これは植民地満洲において、口演童話がごく一般的な楽しみとして、普及していたことを意味している。

三 二回目の満洲講演の特徴

小波の二回目の満洲講演の詳細な日程は、「満日」の記事に基づき「巖谷小波満洲お伽講演日程表（一九二六（大正十五）年六月十六日～七月七日）」（資料編の〈資料2〉）として表にまとめた。二回目の訪満は、前回と異なり、東京より「はるぴん丸」で大連に直行している。訪問地は満洲のみで、約三週間の滞在である。大連・旅順・遼陽・鞍山・奉天・撫順・公主嶺・鐵嶺・長春・ハルピン・熊岳城・金州・貔子窩・普蘭店・湯崗子・本溪湖・安東を訪問、二回目にはハルピンまで足を伸ばしている。語ったお伽噺で分かっているものについて述べると、前回と同じ噺は「母の鏡」（前回タイトルは「母の手本」）「正直正吉」「狩好き大名」（前回タイトルは「指輪大名」）である。その他の「小猿橋」「金貨の鬼退治」「極楽ふくろ」「犬が雪を降らした話」「飴と鬼」「マンタロウサンのお話」「一寸法師」は二回目で語られた。訪満中は、前回同様、「童話のおちさん」として、小波はお伽講演や講演を精力的に行った他に、二回目では、「俳人」としての活躍も目ざましく、各地で行われた俳句会に出席し、俳画の揮毫を行っている。

（一）小波を迎えるまで

ここでは、「満日」の記事を資料に、一回目と二回目との異なる点、特に迎える側の状況の変化を中心に述べる。

一つは、二回目では小波来満までの「満日」での記事掲載数の増加及び記事内容の充実が挙げられる。

前回の小波来満に関する記事の掲載は、実際の来満の七日前からで、医学予備校時代の友人である河西博士（在大連）による小波紹介の記事はあったが、掲載記事のほとんどは満洲講演の日程が中心であった。

だが、二回目は、「全満児童デー」と関連づけて、二十日前（一九二六年五月二六日付）から小波の来満を報じている。同年五月三一日付の「満日」によると、

（前略）昔々の桃太郎を添寝語りに聞き初めて以来お伽の時代を直接間接に培はれた我々青年にとつてもそれは趣味深いおちさんであると共に今現にお伽噺を好む小學生の憧憬とよろこびはどんなであらう。（中略）ほんとに子供のおちさんたる巖谷さんの来満は八方から待ち焦がれられて居る。（後略）

という状況であったという。さらに、連日のように、小波の様々な面の紹介記事が掲載されている。例えば、「丁抹の王様から勲章を貰った◇：お伽噺の小波さん」（同年五月三一日付）では、ちょうど小波は、同年四月に「お伽噺の功」によってデンマークの皇帝から「コンマンドール・ダネブログ勲章」を贈与されたばかりであったので、その勲章を胸につけた小波の写真が大きく掲載され、「童話界の第一人者」としての小波が印象づけられている。また、「小波先生講演會 児童教員のためと一般父兄のために」（同年六月十日付）で

は、「家庭教育者」としての小波が強調されている。「小波さんは……どう云ふ人か 滋賀の古都の花の歌からとつたその雅號」(同年六月十日付)では、小波の多才で華やかな経歴が紹介され、「金色夜叉のモデルの貫一 紅葉山人の義憤と小波さんのロマンス」(同年六月十二日付)では、「巷間に傳はる」『金色夜叉』のモデル問題³⁸が紹介されている。「昔は悪太郎 長兄から送られた独逸語のお伽本から世界的の小波先生へ」(同年六月十五日付)では、小波が「童話を以て世に立つに至つた」経過を紹介している。

金成妍氏論文³⁹によると、一九二三年の小波の「全鮮巡回お伽講演会」においても同様の状況が見られ、「口演開催一ヶ月ほど前から持続的に」『京城日報』による宣伝⁴⁰が行われたとある。このことは、「朝鮮における小波の認知度や関心度を大きく高める役割を果たしたと考えられる」とあり、筆者も金氏の見解に同意見である。

では、これら記事によつて小波来満のための一層の世論作りがなされたのはなぜか。

小波の来満を迎える意義を、「満日」は、「在滿邦人一般が子弟の家庭教育に傾倒する風潮にある今日誠に意義深き結果の豫想されるものがある」(一九二六年六月十日付)と述べている。満洲で、子どもも家庭教育の在り方に人々が関心を持ち、子ども文化に対する意識が育とうとする時期の「全滿児童デー」であり、小波の招聘である。小波来満の大々的な報道は、「児童愛護」の意識の育成との相乗効果を狙つての世論作りであつたとも考えられる。

二つ目は、俳人としての小波に対する在滿日本人の反応である。俳人としての小波の知名度は高く、「巖谷小波先生の來滿を傳へると在連俳人の間に小波先生歡迎句會の開催方を希望する者多く」(六月十五日付)「満日」はその声に応えて「歡迎俳句會」を主催し、新聞で俳句の募集を行った。その結果、「市内(大連 筆者注)は勿論遠く朝鮮の平壤、大田及遼陽、公主嶺、撫順、瓦房店、營口の各方面

から投句」(六月十二日付)があり、最終は「應募俳句 實に六百句」(六月十五日付)になったと報じられている。また、句会及び俳画の揮毫は、各地で予定されている。これは満洲において日本文化の移植が着々と進んでいる証拠でもある。

(二) 大連・旅順における小波

ここでは、大連、旅順における小波の動向について述べる。

お伽の國からお土産持つて 小波のおぢさん来る 童話の國の風潮を察せず 児童劇を壓へた文相は失敗 ◇……と小波氏元氣に語る

一九二六年六月十六日付「満日」の夕刊第一面の上段に、右記見出しで小波の着連を報じる記事が、小波の半身の写真とともに掲載された。記事には、「大正二年の渡滿以来十三年振りであつたが満洲の山は昔日の倂を残して一向青くもならず樹木も繁つてゐない満洲の風景に接した」と小波が再訪の感想を記者に述べた後、最近の童話界の隆盛を語り、一時文相が児童劇を禁止したことを批判したと報じられている。

大連・旅順のお伽講演では、先に渡滿していた深瀬薫が小波と行動を共にしている。

翌日十七日、日中は三小学校(伏見台、常盤、松林)でお伽講演、午後四時半からは満鉄社員約千名に童話に関する講演を行い、童話は「児童教育とうまく按配よく注意して児童に聞かせないと却つて有害である」と説いた⁴¹。

十八日の午前、三校合同(日本橋、大広場、南山麓)の五六年生約八百名に、深瀬薫は「燈臺守」小波は「小猿橋」、三校合同(同

上)の二三四年生約千二百名に、深瀬薫は「金太郎の手柄」、小波は「金貨の鬼退治」を語った。午後は、四校合同(朝日、常盤、春日、嶺前屯)の五六年生約千名にお伽講演を行った後、実業試験所の見学、俳画の揮毫、夜は社員倶楽部で講演を行った。⁴⁰

十九日、午前は二校合同(沙河口、大正)の四五年生及び高等科生千百余名に、深瀬薫は絵斬「モーターボートの南洋探検」小波は「極楽ふくろ」を語り、午後は常盤小学校を会場に市内の各教職員対象に「童話の今昔」と題して「教育上有益な講演をなし聴衆に多大の感動を與へ」、四時から社員倶楽部で講演。午後七時から「一般兒童父兄保護者」約千余名に「母の鏡」を語った。「母の鏡」は前回の「母の手本」と同じ伊藤博文を育てた母お琴の漸である。が、二回目では、「瀬戸内海の一漁村の感心な母の寓話」や、「静岡県下の某漢学者が子に対する理解を誤つて、愛兒を強盗未遂犯にした實例」や「難波大助が大逆を犯すに至つたのも必竟ママは、父親の愛子に對する眞の理解が無かつた事に起因する」として、これらとお琴を對比させ「親子の争鬭は双方の愛の不足無理解に依るものであるから子弟を教育するには家庭の愛、殊に母の教育が必要である旨を力説した。八時半散会。⁴¹

二十日、午前中は大連山縣通の福昌倶楽部で「歡迎俳句會」が開かれた。主催は大連奨学会・満洲日日新聞社。「俳句會」の予告は、連日新聞紙上で行われ、十三日の締切日まで前記したように約六百句の応募があった。当日参加者約五十名、会費一人三十銭。席題「噴水」兼題「白靴」「螢」で行われ、小波の講演もあった。夜七時半からは沙河口倶楽部で小波、深瀬薫が講演を行った。⁴²

六月二十一日、旅順の二小学校、一高等女学校でお伽講演。戦跡見学。旅順泊。

六月二十二日、午後一時半から市立大連高等女学校で市立市立両高等女学校生徒約千五百名に、深瀬薫は「白い鳥」、小波は「正直正

吉」を語った⁴³。午後六時から泰華樓で、満洲日日新聞社主催で歡迎会が開かれた。「何人によらず奮つて參會せられたく」(六月十八日付、十九日付)と紙上で呼びかけられた歡迎会であつたが、三十余名の参加者は主に行政関係者や校長等大連の要人たち(杉野大連市長・佐藤大連商業會議所会頭・小倉満鉄社会課長・藤井大連民政署地方課長・服部大連一中校長・武内大朝支局長・市内各小学校、公学堂長、俳人等)であつた。「お伽話に俳談に懷旧談に耽り何れも少年世界愛讀者時代の少年期を振返つて先生に導かれた慕しい思ひ出に耽り先生の功績を讀へて清談を交へた」とある。九時過ぎ散会⁴⁴。翌日から小波は地方へ講演旅行に出かけた。が、前述したように、七月三日の大連の兒童デーには自動車で駆けつけお伽講演を行い、再び、大連を後にする忙しさであつた。

さて、大連における二回目の小波の満洲講演は前回とどのように違つていたか。

内容に絞つて言えば、一つは前回と同じ漸であっても、新たな内容が加味されている点である。「満日」に掲載された概略を手がかりに推測すると、例えば「母の鏡」は、前回語つた「母の手本」に、新たな実話や例話を加えて、より主題を明確にしている。二つ目は「童話をお菓子に譬えての講話」(六月十七日、満鉄社員対象)や「童話の今昔」(六月十九日、教職員対象)と童話に関する講演が増えていく点である。これは、長年童話の創作、口演に携わつた小波の経験から来るものであつたと同時に、内地における童話隆盛の反映と言えるかもしれない。

前回の満洲講演について小波は雑誌「少年世界」(博文館)に多くの文章を掲載している。だが、二回目の満洲講演については「少年世界」には小波の文章は一編もない。この頃には、小波はすでに「少年世界」の主筆を降りている(一九一七年)。そのことも関係しているであろう。しかし、それだけだろうか。二回目の訪満であつた

から、語るべきことがそれほどなかったのか。人々にとって植民地
満洲が十三年前程には珍しい土地ではなくなってきたのか。二
回目の満洲講演の小波の感慨は、小波が旅先で詠んだ句が、「満洲駄
栗毛（一―九）」（「資料編の〈資料2〉」参照）として、「満日」に掲
載されており、それらによって窺い知れるのみである。

おわりに

小波の満洲講演が植民地満洲の児童文学誕生にどう関わったか。簡潔に言えば、児童文学誕生の土壌作りに功績があったということであろう。

満鉄は、創立当初より、文化人の招聘を積極的に進め、日本文化の移植に努めた。小波の二回の満洲講演も満鉄の招聘である。

小波の一回目の渡満は一九一三（大正二）年、沿線の日本人児童に話をしてほしいという満鉄の要望に応えての訪問だった。小波は、植民地満洲である「新しい土地」に生きる少年少女たちに、国際社会に向けての新しい国民像の可能性を期待し、常日頃首唱している「桃太郎主義」を鼓吹したいという思いを抱いていた。小波は精力的にお伽講演・講演をこなした。この小波の満洲講演は、満洲における口演童話の隆盛を促したであろう。また、小波は、一回目の満洲講演での見聞を「少年世界」に続々と発表し、満洲紹介に大きく貢献した。中でも六回にわたり連載された「満洲いろは噺」は子ども向けに書かれた初めての満洲旅行記として注目に値する。

小波の二回目の満洲講演は、一回目から十三年後の一九二六（大正十五）年である。一九二六年は「在満邦人一般が子弟の家庭教育に傾倒する風潮」（一九二六年六月十日付「満日」）が現れ出てきた時期である。同年六月、満鉄は「全満児童デー」を主催し、それに合わせて小波を招聘する。「全満児童デー」では、子どもを主体とした楽しい催しが各地で一斉に行われ、児童愛護の精神が啓発された。在満日本人の意識が子どもや子どもの文化的環境に向きはじめてこの時期に、お伽講演や講演を通して、家庭教育の在り方や童話の役割を説いた小波の満洲講演は、これらの活動を更に勢いづけたと考えられる。このことは、筆者が、小波の満洲講演が児童文学誕生の

土壌作りに功績があったとする所以である。

「全満児童デー」及び小波の二回目の訪満をきっかけに、「満日」紙上に、子ども向けの記事が掲載されだす。「満日」が満洲児童文学誕生に果たした役割については、第Ⅱ部で論述する。

第I部注

- 1 ・「大連より」(『少年世界』十九卷十四号 一九一三年十一月一日)・「小波氏下關着」(読売新聞 一九一三年十一月三日付)・「満鮮おみやげ小波氏の旅行談」(読売新聞 一九一三年十一月七日付)・「満鮮句行」(『文章世界』第百十八号 一九一三年十二月一日発行)・「爾靈山」(『少年世界』第十九卷第十五号 一九一三年十二月一日発行)・「満洲お伽日誌」(同上)・「満鮮いろは噺」(大江小波名で発表「少年世界」二〇卷二号 一九一四年一月二〇卷八号 一九一四年一月)・「満鮮の小国民」(「三越」三越呉服店 一九一四年一月一日)・『我が五十年』(東京 東亜堂蔵版一九二〇年 復刻・久山社一九八七年)
- 2 一九〇五年七月創刊の「満洲日報」が、一九〇七年十一月三日に「満洲日日新聞」と改名。本社は大連。
- 3 略歴記述の参考文献として下記資料を使用した。
 - ・大阪国際児童文学館編 『日本児童文学大事典』大日本図書 一九九三年十月 「巖谷小波」(続橋達雄著)の項 九七―一〇〇頁
 - ・巖谷大四『波の聲音』「年譜」 新潮社 一九七四年十二月 二五七―二七二頁
 - ・「小波さんは…どう云ふ人か 滋賀の古都の花の歌からとつたその雅號」『満洲日日新聞』一九二六年六月十日付
 - 『波の聲音』新潮社一九七四年十二月 所収
 - 「九大日文5」二〇〇四年十二月 二四九頁
 - 『日本児童文学大事典』第一卷 大日本図書 一九九三年十月 九八頁
 - 評論社 二〇〇八年十二月
 - 東京東亜堂 一九二〇年五月 復刻 久山社 一九八七年五月
 - 「満鮮の小国民」(大正二年十一月九日日本橋俱樂部に於けるオモチャ會講演會にて)「三越」第四号 一九一四年一月一日 一頁
 - 「満鮮の小国民」(日本橋俱樂部に於けるオモチャ會講演會にて)「三越」

- 三越呉服店 一九一四年一月 一頁
- 1 満蒙文化協会発行 一九二三年一月十日発行 七六二頁
- 1 2 「満鮮いろは噺」「少年世界」二〇卷一号 一九一四年一月五日 二頁
- 1 3 博文館 一九〇四年六月―一九〇六年四月
- 1 4 大江小波「僕の領分」「少年世界」二十卷一号 一九一四年一月一日五六頁
- 1 5 「読売」(一九一三年九月十二日付、九月二十四日付、十月十一日付)「東京朝日」(同年十月十七日付、十月十九日付)
- 1 6 金成妍著「巖谷小波が朝鮮に『聞かせた』童話―朝鮮児童文学と巖谷小波その三」『九大日文6』二〇〇五年六月 三一―四頁
- 1 7 「満日」(十月二日付)「一日の小波氏」にその日のお伽講演の模様が報道され、記事で、「聴衆は尋常三年生以下の男女生約四百」と「次に尋常三年以上の男女生約六百」と両方に「三年」が出てくる。筆者は、後者を「四年以上」の誤植だと判断した。
- 1 8 博文館 大正十五年八月五日七版発行
- 1 9 巖谷小波「童話の聞かせ方」賢文館版 一九三一年三月 初版発行一九八七年十月復刻
- 2 0 『童話の聞かせ方』八二頁
- 2 1 『童話の聞かせ方』六九―七七頁 御前口演は昭和天皇(当時東宮)・高松宮・三笠宮殿下(当時淳宮)の御前。
- 2 2 『童話の聞かせ方』三八九―四一四頁
- 2 3 『童話の聞かせ方』八二頁
- 2 4 『小波お伽全集 第四卷 幼年お伽集』所収 一九三三年十一月十日発行
- 2 5 「遼陽の小波山人」「満日」一九一三年十月十一日付
- 2 6 「遼陽の小波山人」「満日」一九一三年十月十一日付
- 2 7 「遼陽の小波山人」「満日」一九一三年十月十一日付
- 2 8 「遼陽の小波山人」「満日」一九一三年十月十一日付
- 2 9 「遼陽の小波山人」「満日」一九一三年十月十一日付
- 3 0 「満日」一九一三年十月四日―十月十日付
- 3 1 「満日」一九一三年十月十一日付

3 2 「巖谷の叔父さん―大なる児童教育家」「満日」一九一三年十月一日付
3 3 大江小波「僕の領分」「少年世界」二十卷一号一九一四年一月一日 五
七頁

参考文献

3 4 ・内山憲堂編『日本口演童話史』文化書房博文社 一九七二年三月
・鳥越信編著『はじめて学ぶ日本児童文学史』ミネルヴァ書房二〇〇一
年四月

3 5 「賑はつた児童デー」「満洲日日新聞」（地方通信欄）一九二六年六月
十六日付（記事）「全國第三回児童デーに當る十三日長春では（後略）」
3 6 『滿蒙年鑑』（一九二七年版）中日文化協會發行 五四四・五四五頁
3 7 『童話研究』第六卷第六號 四七九頁
3 8 金成妍著「巖谷小波の「全鮮巡回お伽講演会」―朝鮮児童文学と巖谷小
波その二」『九大日文5』二〇〇四年十二月一日 二五三頁

3 9 「童話をお菓子に譬へての講話 昨日小波先生が試みた滿鐵社員俱樂部
の講演」「満日」一九二六年六月十九日付

4 0 「第二日も…晝夜兼行のお伽噺…大もての小波先生」「満日」一九二
六年六月十九日付

4 1 「朝から晩まで疲れも厭はずお伽噺に講演に知慧囊が續く小波氏」「満
日」一九二六年六月二十日付・「母お琴の愛によつて忠臣伊藤理助を生
み 子に對する眞の理解が無かつたため逆臣難波大助を生んだ…と
巖谷小波氏の特別講演」「満日」一九二六年六月二十一日付

4 2 「應募俳句 實に六百句小波先生歡迎句會 盛會が豫想出来る」「満日」
一九二六年六月十二日付・「巖谷小波先生歡迎句會 愈明朝九時から開
催◇―席題各人二句吐」「満日」一九二六年六月二十日付・「薰風さは
やかに 清興盡きせぬ俳句會席題噴水に沈吟苦吟し 俳人小波おちさ
んと交歡」「満日」一九二六年六月二十一日付

4 3 「席暖まらぬ多忙 小波さんの講演 高女生徒千五百名の華やかな聴衆
を相手に」「満日」一九二六年六月二十三日付「満日」

4 4 「小波先生を迎へた一夕の清談 卅餘名が「少年世界」時代を省みて懷

第Ⅱ部

マス・メディアにおける児童文学の動き

―「満洲日日新聞」「満洲日報」紙

子ども欄の変遷

第一章 「満洲日日新聞」「満洲日報」について

植民地満洲での児童文学の誕生・発展を考える場合、看過できないのは、新聞の役割である。本稿では、「満洲日日新聞」「満洲日報」の子ども欄の変遷をたどることによって、子ども欄が満洲児童文学の誕生・発展にどのような役割を果たしたか、子ども欄の記事内容が在満の子どもたちにどう働きかけたかを探る。

一 沿革

「満洲日日新聞」は、一九〇七（明治四〇）年十一月に大連で創立。一九二七（昭和二）年十一月に、「遼東新報」（大連）と合併し、「満洲日報」と改名、一九三五（昭和十）年八月、「大連新聞」と合併し、再び「満洲日日新聞」となる。一九三八（昭和十三）年十二月、本社を大連から奉天（現在の瀋陽）に移すが、大連には、大連支店を設置し、奉天・大連の二大都市で、同時に、同名、同頁数、且つ実質を同じくする「満洲日日新聞」を発行する。

満洲における新聞事情について、昭和三年版『満蒙年鑑』¹に記述がある。それを参考にまとめると、以下のようになる。

「遼東新報」（一九〇五年創刊）は満洲最初の邦字新聞で、次いで創刊されたのが「満洲日日新聞」（一九〇七）である。一九〇八年十月に、日支融合の漢字新聞「泰東日報」が発行され、一九二六年八月には満洲唯一の英字新聞「マンチュリアデリーニュース」が生まれている。領事館内には奉天に漢字新聞「盛京時報」（一九〇六年十月創刊）、營口には邦紙「満洲新報」（一九〇八年一月創刊）、安東に「安東新報」（一九〇六年十月創刊）等があったが、その後、これらは鉄道附属地内に移る。この他、これら諸新聞と前後して発行さ

れたものもあるが、少なからず経営困難のため廃刊となっている。一九〇八（明治四一）年頃、関東州内に四新聞十雑誌しかなかったが、その二〇年後の一九二七（昭和二）年には新聞が六九種（関東州四四、附属地二五）雑誌が一四一種（関東州一〇九、附属地三二）となっている。

「遼東新報」と「滿洲日日新聞」は、「滿蒙言論會の双壁として多年大陸文化の開發に貢献し、ともに十數萬愛讀者の好伴侶」であったとは、両紙合併による「滿洲日報社」誕生時の弁である（一九二七年十一月一日付「満日」）。つまり、両紙は滿洲にあつて日本の滿洲植民地化当初からある全国紙的な存在で、日本の大陸政策を推進する立場にあつた報道機関であつた。

その両紙が合併した「滿洲日報」（一九二七）の使命とは何か。「改題の辭」（一九二七年十一月一日付「満日」）にいう。（引用文中の×印は不鮮明のため判読不可能を表す）

（前略）今や昭和新政、事物百般更始一新し、國民の總意を世界平和の確立、國民民福増進の爲に具現して舉國一致の努力をなすべき機運に際會して居る。（中略）我等言論機關に係わるものゝ責務××重大なるを自覺し、兩社が此に渾然相融合して論調を整制し、面目を一新して内容を充實し、以て本來の使命に精進せんとする（中略）。

両新聞の合併は「渾然相融合して論調を整制」し、「本來の使命に精進」するためであるという。では、「本來の使命」とは何か。「改題の辭」にはこうある。

惟ふに、滿蒙問題は、直に我が國民民人の死活に關する事柄なるのみならず、東洋の平和、日支露各國の共存共榮の上より、

斷じて忽諸に附すべからざる事柄であるに拘はらず、我が國內の輿論頗る冷淡なる傾向あるは洵に痛憾に堪へない。加之、我滿蒙政策を目して恰も對支侵略策なるかの如くに思惟し且つ之を宣傳する向がある。（中略）兩國（日支 引用者注）の目標とする所は共存共榮のものでなければならぬ。我國が多額の犠牲を拂つて關東州及び滿鐵を經營し來れる精神が一に此に存すること、永劫に渝るべき筈がない。（中略）我等は（中略）滿蒙經營の第一線に立てる廿萬の人々と共に内地滿洲に於ける言論の調整に微力を傾け、以て對外輿論の一致を圖らん事を期するものである。（後略）

滿蒙問題は、日本にとつて死活問題であるばかりか、東洋の平和、日支の共存共榮を目指すものであるのに、国内世論は冷淡で、滿蒙政策は、「對支侵略策」であるかのような論調もある。だが、「滿洲日報」は、「滿蒙經營の第一線に立てる」滿洲の人々と共に内地及び滿洲における言論を調整し、「對外輿論の一致」を図ろうとするものであるという。換言すると、「滿洲日報」の使命とは、滿洲の植民化を企図する国策にそつた世論作りであるということになるのか。

「滿洲日報」の記事内容は内地の情報にも多くの紙面を割いており、滿洲にあつても、ほぼ同時に内地の動きを知ることができる。一方、滿洲については、滿洲植民地化の拠点であつた大連を中心としているけれど、地方の動向を伝える記事も多数掲載されている。発行部数や購読者の正確な数字は不明であるが、滿洲植民地化当初からあつた「遼東日報」「滿洲日日新聞」の伝統を受け継いでいる点、また掲載の記事内容から、滿洲では全国紙的役割を担っていたであろうから、「滿洲日報」の報道姿勢や論調は、滿洲での国策の推進、世論作りに大きく作用したと考えられる。

本稿で資料として使用した記事は、一九二六（大正十五）年から

一九三〇（昭和五）年までである。その間、新聞名が「満洲日日新聞」から「満洲日報」へと変更される。しかし、「満洲日日新聞」と「満洲日報」とは、発展過程での呼称の変更はあるものの、在満日本人向け邦字新聞としての実質は同じものであったと考えられるので、本稿では、原文引用等必要な時以外は「満日」と表記する。

二 子ども欄の移り変わり

「満日」紙上における子ども欄の主な動きを挙げると、次のようになる。

一九二六（大正十五）年

一月九日～一九二八（昭和三）年二月六日？

「ミツワ家庭欄 コドモブンゲイ」欄（月一回掲載）

六月三日

「小供ページ」（一回のみ）

一九二七（昭和二）年

三月二日～同年十一月

「子供の世界」欄の創設（ほぼ毎日・月曜日休み）

十一月一日

新聞名変更（「満洲日日新聞」→「満洲日報」）

十一月二十日

「満日婦人週報」欄創設（毎日曜）

十二月四日～一九二八（昭和三）年二月

「満日婦人週報」欄内に「コドモしんぶん」欄創設（毎日曜日に掲載）

一九二八（昭和三）年

二月十三日～一九三〇（昭和五）年一月

「満日コドモページ」欄の創設（ほぼ毎日掲載）

一九三〇（昭和五）年

一月二八日～一九三二（昭和七）年六月

「満日コドモページ」欄が「家庭トコドモ」、さらに「家庭欄」と改称される

一九三二（昭和七）年

七月十日～一九三四（昭和九）年六月二四日

「マンニチ日曜附録」の創設（子ども向け記事はここに掲載）

一九三三（昭和八）年

八月？「満日こども新聞」発刊

これより以下のことが分かる。

「満日」紙上で、子ども対象とした欄が最初に現れるのは「ミツワ家庭欄 コドモブンゲイ」である。この欄は、「ヨンデイタバクオ話」として物語を掲載しているが、物語の末尾に必ずミツワ石鯨の宣伝が入っている。

次に、一九二七年三月、「満日」紙上に、「子供の世界」欄が創設される。この「子供の世界」欄は、家庭や教育関連の記事の一角ではあるが、子ども欄が紙面に定位置を確保したという点で注目値する。しかも、ほぼ毎日の掲載であった。また、記事内容は豊富で、童話、童話、時事ニュース、時には、中国の民謡や中国古典から題材をとった話が掲載されている。

同年十一月、「遼東新報」との合併により新聞名が「満洲日日新聞」から「満洲日報」へと変更されるに伴い、子ども欄も変わる。従来毎日掲載されていた子ども欄は、週一回掲載の「満日婦人週報」欄内に「コドモしんぶん」と名前を変えて設けられる。

そして、一九二八（昭和三）年二月十三日、これまでの子ども欄を發展させた形で、子ども専用の「満日コドモページ」欄の創設を見る。この「満日コドモページ」は、ほぼ毎日、子どものためのページとして、内容にも形態にも様々な工夫が凝らされた。

一九三〇年一月、「満日コドモページ」は「家庭トコドモ」欄と改称、のち「家庭欄」と名を換える。

一九三二年七月、「マンニチ日曜附録」が創設されると、子ども対象の記事はそこに吸収され、週一回の掲載となる。「マンニチ日曜附録」は最大四ページという時期もあったが、一九三四（昭和九）年六月二十四日を最終に、子ども向けの紙面を擁した「マンニチ日曜附録」はなくなる。一九三三（昭和八）年八月に「満日」から「子ども新聞」が発刊されているが、筆者は、現時点ではまだ閲覧する機会を得ていない。

尚、「満洲日日新聞」「満洲日報」紙掲載の子ども向け記事については、「資料編の〈資料3〉」に、一覧表にして収めてある。詳細についてはそちらを参照願いたい。

本稿では、「満日」の子ども欄の変遷を 1 子ども欄創設以前 2 子ども欄「子供の世界」 3 子ども欄「コドモしんぶん」 4 「満日コドモページ」 5 「満日コドモページ」以後の五つに分けて論述する。

第二章 子ども欄創設以前

—子ども欄の萌芽—一九二六（大正十五）年

一九二六年初期、「満日」紙上には、月一回の「ミツワ家庭欄 コドモブンゲイ」があるだけで、特設された子ども欄はなく、子ども向けの記事もほとんど無かった。

一九二六年三月三十一日の「満洲日日新聞」（以下「満日日」）の第五面から記事拾ってみる。上半面は文芸欄、下半面は広告である。（記事内容には便宜上番号を付けた。以降同じ）

ページ — 第五面

記事内容—1 「幕末十剣士」八九 悟道軒圓玉演 近藤紫雲畫（連続

読物—筆者注）

2 「満日文藝」—作品募集要項

3 小品 二編（「夢」神尾×× 「十六の年よ」眞砂子 × は不鮮明で判読不能 筆者注）

4 詩壇 「旅立つ心」鹿野芳夫 「汽車のなか」鞍山G×生

「失業者の悲哀」吉尾晩秋

「母國へ憧憬れて」（大連高女母國見學團旅出の夜）

松尾溪司郎 「池の春」大連 渡鹿

5 「新刊紹介」—『支那の童話』（青山捨夫・今永茂共著

大連 兒童圖書出版協會發行 筆者注）他六冊は雑誌の

ため雑誌名は省略した

以上の記事の中には子ども向けの記事はない。大連高女母國見學への思いを語った「母國へ憧憬れて」は、母国日本にあこがれる乙

女の心情を詠んでいるが、名前が男性であるところから、引率者の教師の作品ではないかと考えられる。ただ、新刊として紹介されている『支那の童話』（牛郎と織女）「不思議な卵」の二話収録）が、児童の課外読物として推奨されている。これは、在満の日本人児童向けに、中国文化を紹介した書物が満洲で出版されたという点において注目に値する。また、著者の青山捨夫は、のち創設される「満日コドモページ」担当の中心的存在でもある。

しかし、記事内容全般については、子ども向けの記事が無いに等しい状態であったということはいえる。

—「ミツワ家庭欄 コドモブンゲイ」

「ミツワ家庭欄」は、ミツワ石鹼本舗が広告を兼ねて設けている文芸欄のことである。内容によつて、表題が「ためになるおはなし」「ミツワ家庭常識文庫」「コドモブンゲイ」となり、それぞれ記事内容が異なる。「ためになるおはなし」と「コドモブンゲイ」の掲載はそれぞれ月一回、「ミツワ家庭常識文庫」は不定期である。

ここでは、「コドモブンゲイ」欄について述べる。

この欄は、「コドモブンゲイ」という表題に、「ヨンデイタブクオ話」という副題がつく。「コドモブンゲイ」という表題がついたのは、一九二六（大正十五）年一月からで、それ以前は、「ヨンデイタブクオ話」とだけ表記されていた。「ヨンデイタブクオ話」は一九二四（大正十三）年十二月から始まる。掲載されているのは全て物語で、主として西洋の物語の再話か翻案だと思われる。例えば、「靴屋と一寸法師」（一九二五年一月八日付）、「乳母の猫」（同年二月一日付）、「孔雀姫」（同年十二月九日付）、「長靴の猫」（一九二六年一月九日付）等である。物語の末尾には必ず「ミツワ石鹼」の宣伝が入るのが特徴である。

入手している記事の中から物語が掲載されている「ミツワ家庭欄
コドモブンゲイ」(一九二六年六月三日付「満日日」資料1)を紹介
する。記事内容は以下のとおりである。

ページ ー第六面

表題 ー「コドモブンゲイ」(ミツワ家庭欄十五、六)

記事内容ー1「ヨンデイタダクオ話」(十九)「木と鳥と金の水」(二)

2 タイトル無し 「ヤイエユエヨ」「ラリルレロ」

(筆者注 一種のことば遊び 前頁の資料1参照)

「木と鳥と金の水」(二)の物語は、病気の女王のため、二人の王子が魔術師のもとに不思議な水を取りに出かけるが、二人とも失敗して石にされるが、妹である姫が行き成功するという話である。

巻一の末尾では一番上の王子が石に姿を変えられるところで終わり、次のように締めくくられる。

さあ、あとは如何なることせう。来月お話のあとを申し上げませう。
だんだん暑さに向つて参ります。晝戸外で遊んでお歸りになると、埃と汗や脂がまぢつてお顔や手や體が、まつくろにきたなくなつて居るでせう。(中略)御飯の前に、入浴して、ミツワ石鹸できれいに汚れを落し、ミツワ練歯磨で、齒をきれいに口の中をすつかり浄めて置かなければなりません。(後略)(一九二六年六月三日付「満日日」)

末尾に「ミツワ石鹸」の宣伝文句が入るが、物語部分は変化に富んだ筋立てで、大人も子どもも物語を楽しむことができる。内容は物語もあれば、教訓的な話もある。教訓的な話の例として次の「コドモブンゲイ」(一九二六年五月三十日付「満日日」)を紹介する。
内容は以下のとおりである。

ページ ー第六面

タイトルー「コドモブンゲイ」(ミツワ家庭欄十五、五)

記事内容ー1「ヨンデイタダクオ話」(十八)「ニコニコした顔」

2 詩「可愛い雀」

3 タイトル無し(一種のことば遊び 筆者注)

「ハヒフヘホ」「マミムメモ」

「ニコニコした顔」は、山番の小さい娘お園の話。いつもしかめつづらのお園は、夢の中で、仙女に美しい水晶島に連れて行ってもらい、心から楽しむ。いつもニコニコしていることを条件に島の女王の座が約束されたところで夢から覚める。それ以後、お園はいつもにこにこしているようになる。そしてこう述べられている。

これからは美しい花は咲いて参ります。樹はみんな元気よく緑の葉をのばして行くのですから、皆さんも元気よくにこにこして居なければ變でせう。(後略)(一九二六年五月三十日付「満日日」)

そしてこの後に、「ミツワ石鹸」で「埃や、汗や脂をきれいに洗ひ落しますと、それは愉快ですからしぜんとにこにこして居る様になります」と続いている。

「ミツワ家庭欄」の「コドモブンゲイ」には、作者名はない。物語は筋立てに変化があり、物語の面白さで読者を引きつけ製品の宣伝効果をあげようとする意図は明らかであるが、子ども対象に物語を掲載している点において、子ども欄の萌芽と考えてよいだろう。

50

二 「小供ページ」の登場

一九二六年六月に、紙面一面（下段は広告）にレイアウトされた「小供ページ」（一九二六年六月三日付「満日日」資料2）が登場する。今までになかったことである。これは、同年六月、ちょうど満鉄主導による「全満児童デー」が各地で盛大に催されたことと時期が重なる。「児童デー」とは、子どもを主体とした文化的事業で、関東州や満鉄沿線の各地で童話講演や児童劇等の様々な催しが企画された。それに合わせて巖谷小波（六月十六日から七月七日）、深瀬薫（六月二日から約二週間）が満鉄に招聘されて訪満し、お伽講演を行なっている。この「小供ページ」の登場は、「全満児童デー」によつて子ども文化の育成と意識の啓発とが企図されていることと連動しているとも考えられる。また、植民地満洲において、子ども文化に対する関心が高まってきたということも考えられる。

「小供ページ」の内容は以下のとおりである。

ページ ―第七面

タイトル―「小供ページ」

記事内容―1 「童話 王女ナタリー」 元木瑞枝

2 「満洲童謡 豚」 島木赤彦（浅枝次郎畫）

3 「綴り方」―「お見送り」 常盤 小島榮子

4 「童謡」―「ブランコ」 常盤 武田綾子「祭の日」 常盤 溝口幸子

5 絵画「花旗洋行一角」（大廣場校尋六 渡邊彰平君）

6 「子供の圖書館 猿蟹合戦や兎と龜の浮彫り長椅子が坐り心

地よく待つて居る」

7 「西洋と日本と反対な事 なほ此外におありませう 考

へて御覽なさい」

8 「へんな日記」（一） 浦野たけ子

9 「支那童話（第二編）」 青山捨夫・今永茂共著 兒童圖書出版協會發行（新刊紹介 筆者注）

10 「兒童作品募集」（毎週一回水曜本欄發表）

このページは、全面子ども対象の記事で構成されている。内容は多岐にわたり、「満洲童謡」や大連神社の祭の様子を書いた児童作品等に、植民地満洲の諸相を見ることがができる。

以下、記事内容を簡潔に説明する。

1 「王女ナタリー」は森に住む二人の少女、心優しいナタリーといじわるなレダの物語。人物形象と結末から、おそらく昔話の再話ではないかと考えられる。2 「満洲童謡 豚」は、島木赤彦が、満鉄の招聘で満洲を訪問した（一九二三年十月十七日から十一月三日）翌年に雑誌「アララギ」（一九二三年十二月）に発表した童謡の一つ。『満洲唱歌集尋常科第一・二学年用』（一九二四年八月）にも収められている。挿絵は浅枝次郎。親豚と六匹の子豚を背景に都会風の洋服を着た女の子と男の子が描かれている（資料2参照）。この二人の子どもは、容姿から明らかに日本人であることが分かる。「豚の子ころり／ころりころり く／ころりて遊ぶ」（第二聯）の詩のイメージとは異なるモダンな絵で大正期の子供雑誌から抜き出したような挿絵である。土の匂いのする豚の群と都会風の子どもの姿に、満洲、特に大連等の都市において特権的階層であった日本人の子どもの生活の一端を窺うことができる。3 「綴り方」の「お見送り」では転校する友達を停車場で見送った時の心情が素直に綴られている。4 「童謡」の「祭の日」は、大連神社の祭で神輿を担ぐ弟の姿を詠っている。日本は「領土を拡張する時に、まずその地に神社ないしは神宮を置」いた²。満洲における神社の建設は一九〇八（明治四一）

「小供ページ」
一九二六年六月三日付
「滿洲日日新聞」

「小供ページ」
一九二六年六月三日付
「滿洲日日新聞」

「小供ページ」
一九二六年六月三日付
「滿洲日日新聞」

「小供ページ」
一九二六年六月三日付
「滿洲日日新聞」

「小供ページ」
一九二六年六月三日付
「滿洲日日新聞」

「小供ページ」
一九二六年六月三日付
「滿洲日日新聞」

「小供ページ」
一九二六年六月三日付
「滿洲日日新聞」

「小供ページ」
一九二六年六月三日付
「滿洲日日新聞」

「小供ページ」
一九二六年六月三日付
「滿洲日日新聞」

「小供ページ」
一九二六年六月三日付
「滿洲日日新聞」

「小供ページ」
一九二六年六月三日付
「滿洲日日新聞」

「小供ページ」
一九二六年六月三日付
「滿洲日日新聞」

「小供ページ」
一九二六年六月三日付
「滿洲日日新聞」

年「千山神社」（千山）「関水神社」（老虎灘）が最初で、一九二八年時点では四二社あったという³。大連神社の建設が何年かは不明だが、一九二六年六月にはすでにあったことが分かる。ここには、満洲植民地化の具現されたものとしての、異郷の中に造られた日本人社会が見られる。5「絵画」は風景を描いた児童作品。6「子供の図書館」の記事内容は、大連日本橋図書館に設置された児童閲覧室の利用案内である。「猿蟹合戦や兎と龜の浮彫り長椅子が坐り心地よく待つて居る」という文言から、当時にあつて児童室としての工夫がすでに見られ、植民地満洲における子どもの読書に対する関心の高まりが窺える。7「西洋と日本と反対な事」とは、日本人と西洋人の生活習慣の違いを二十ほど挙げている。満洲、特に大連は海外に開かれた都市でもあった。ここには、外国に目を向ける時代の到来を念頭においた記者の姿勢を見ることができよう。8「へんな日記」はユーモア話が三つ。9「支那童話（第二編）」は、新刊紹介である。前述した「支那童話」（第一編 青山・今永編）の二冊目で、満洲において、日本人及び日本人児童向けに出版された中国の話である。「仙人と鶴」「魔法の宿屋」を子どもでも読めるように書き改めているという。10「児童作品募集」は、作品投稿要領である。「毎週一回水曜本欄発表」と、今後とも継続して児童作品掲載を予告し、子どもの創作意欲を引き出し、積極的な紙面参加を呼びかけている。以後、同月十九日、二十四日、二六日に、綴り方や童謡、絵画の児童作品が多数掲載されている。

三 童話の掲載と紙面の工夫

全面「小供ページ」は特別な企画であつたようで、その後はこのようなページは見られない。子ども向けの記事の掲載は、相変わらず、教育や家庭関連記事の一部分ではあつたけれど、童話や漫画が、

徐々にそれらの一角に掲載されるようになる。以下、特徴的な作品を何点か紹介する。

一九二六（大正十五）年

六月十七日 童話「太郎と花子」（嶺前 尋三 佐藤侃）

八月二八日 童話「胡弓の李さん」上下（翠川妙子）（八月二九日）

十一月二五日 童話「都へ行った貞吉」上中下（岩淵睦子）

（「満日文藝」欄）（十一月二七日）

十月八日 四コマ漫画「イタヅラハカセ」一（十二月十五日）

十二月十五日 「ニハトリ」（ハヤシカズマ）

「新考へ物」（二つ 大連 畑中治・畑中正一）

十二月三一日 童謡「帰還兵・バンザイ」（田代仲）

一九二七（昭和二）年

二月十日 童謡「支那正月」（ひろし）

作品掲載は不定期である。

「太郎と花子」（一九二六年六月十七日付）は尋常三年生の児童（佐藤侃）の作品である。仲のいい兄妹が山で迷い、大きな御殿で王さまに歓待される。兄妹は、不思議な鏡に映った「どいつ」の窮状を救い、喜んだ王に両親の元まで送り届けられるという話。荒唐無稽な話だが、「どいつ」が出てくる所に、当時の世相を反映しているとも考えられる。わずかに固有名詞や数字に漢字が使われているほか、ほぼ全文ひらがな表記である。

「胡弓の李さん」（翠川妙子作 同年八月二八日―二九日付）は、満洲を舞台にしている。内容は、馬賊によつて父と妹を失い、一人で病気の母を抱える親孝行の金少年が不思議な胡弓弾きに救われるという話である。満洲と言えば「馬賊」、「馬賊」とは民の幸せを奪う悪者。そんな逆境にもめげず健気に生きる主人公は最後には幸せ

になる。日本人が描く満洲を舞台にした作品の多くは、この図式で描かれている。

「都へ行つた貞吉」(岩淵睦子 同年十一月二五日〜二七日付)は、都に憧れ家出した貞吉が、都の虚構の中で貧しい人々の人情に触れ、村の良さに気づきわが家へ帰るという話で、現代の物質的な繁栄に惑わされた少年が真の幸せに気づくという教訓が前面に出ている。当時の風潮に対する戒めとすることもできる。

「イタヅラハカセ」は、少年のたわいないイタヅラをユーモラスに描いた四コマ漫画である。「ニハトリ」はカタカナ童話で、低学年の子ども向けに書かれている。作者林一馬の経歴は不明であるけれど、以後、紙上に度々登場する。

「新考へ物」(同年十二月三一日付)は、「考へもの 募集いたします」(同年十二月十一日付)というなどなぞの投稿を呼びかける記事に応じたものであろう、投稿者の二人には賞品が送られている。

童謡「歸還兵・バンザイ」(同年十二月十五日付)は「僕の好きな兵隊さん／日本え歸つた」(「歸還兵」)、「兵隊さんは／突かんだ／敵ぢんめかけて／突進だ」(「バンザイ」)と、日本兵に対する親しみや雄姿を詠っている。満洲は日露戦争の舞台で、雑誌や新聞で、事あるごとに、戦跡と日本軍の雄姿が紹介される。また、満洲には軍隊が常駐し、日常風景の一つに兵隊の姿がある。そういう満洲の状況を反映した作品である。童謡「支那正月」(一九二七年二月十日付)も、満洲の地ならではの作品である。「彼方でドン／此方でヂャン／支那のお正月賑かだ」と、中国の旧正月の様子を詠っている。

これら作品の作者がどのような人たちであつたのか、定かではない。だが、在満日本人の子ども向けに創作をする人々がいたということはいえよう。

四 子どもの文化的環境の整備

子ども欄の変化と同時に、子どもの文化的環境の整備が進められていく様子が「満日」の記事から窺える。例えば、児童館開館を報じる「沙河口児童達の待ち焦れる児童館 愈々出来上つたが開館は下旬」(一九二六年十二月二日付)、大連の小学校五校が子ども新聞発刊を計画していると報じる「子供新聞計畫 市内五小學で(伏見臺、朝日、大廣場、南山麓、春日 筆者注)」(一九二六年十二月十五日付)である。子どもの文化に関心がもたれ、子どもの文化環境が整備され、子どもの文化が植民地満洲でしだいに育ちはじめた表れであるといえる。

第三章 子ども欄「子供の世界」の誕生

—一九二七（昭和二）年

不定期ではあったが、「満日」に児童作品及び童話や童謡が掲載され、また、大連市内に子どもの文化的環境が徐々にではあったが、整えられていく。そんな中、一九二七年三月二日、紙面の一角に「子供の世界」欄（資料3—1・2）が誕生する。家庭や教育関連の記事の一角ではあるが、子ども欄が紙面に定位置を確保したという点で注目している。月曜日以外、ほぼ毎日掲載され、一九二七年十一月まで続いている。詩や絵手本、童話、童謡、コント風の話とその挿画、児童作品が掲載されている。特筆すべきは、「支那童謡」「支那童話」「創作童話」という用語が見出しに使われていることである。「支那童謡」は中国民謡の翻訳紹介、「支那童話」「創作童話」はともに童話作品である。前者は中国文化の紹介という点で、後者は満洲における児童文学の萌芽という点で注目に値する。記事内容の一部を紹介する。（「子供の世界」の全記事内容は「資料編の〈資料3〉」「満洲日日新聞」「満洲日報」紙掲載の児童読物一覧」を参照願いたい。）

一九二七年

三月二日 童話「仙人」（秋津島彦）

「真似上手」（一）・挿画（みづきゑがく）

三月三日 童話「雛の國」（水城精一郎）童謡「ひなまつり」（戸塚みね子）「真似上手」（二）・挿画

三月六日 支那童話「箕の白状」（秋津島彦）「真似上手」（五）・挿画

三月十七日 童話「軟虫合戦」（一）（松本弘）（三月十九日）
四月十七日 支那童謡「なまけもの（吉林）」「豆腐屋」（湖北）

「デンシヤノキツプ」・挿画

五月一日 童謡「アカシヤ」（ササキヒデコ）「マヨイゴノオトウサン」・挿画

五月三十一日 「へいたいさん」（こんどうすゝむ）（童謡 筆者注）

「ボウヤノランドセル」・挿画

七月二日 「どうようデー」（山科菊子）（童謡 筆者注）

「ボウノリヨコウ」（廿一）ツナイダコイ」・挿画

八月六日 「母國見たまゝ—母國見學の感想（金州 遠藤昌俊）・

恐しい大阪市（本溪湖 坂本正）・驚いた嚴島神社（大

連南山麓 大西正二）「アメフリボウヤ」（一）・挿画

八月二十五日 創作童話「魔法のお琴」（二）（東京府青山師範學校

富田淑雄）（九月四日）

エテホン（二）ネコ（じらうゑがく）

九月十一日 支那童話「チャン、ワン、リウ」（一）（松原緑蔭）

（九月十七日）

十月六日 「そこぬけ半ちゃん」（一）（松原莞爾）（十月十五日）

「エテホン」（二十四）シカ

「子供の世界」は、文芸作品と低学年向け記事の二つで構成されている。前者は、童謡、童話、ルポルタージュであり、後者は、コント風のお話とユーモラスな挿画で、日本人家庭の一コマを描いたものや、「エテホン」である。

一 文芸作品

（一）童謡

日六十月四年三第

新日

日六十月四年三第

(七)
春の樂行
日歸りの旅と
一夜泊りの旅
金州や旅大遠征へ
或樂し、遠征行き

子供の世界
馬一(著)
文藝春秋社
「馬一」は、
「馬一」は、
「馬一」は、

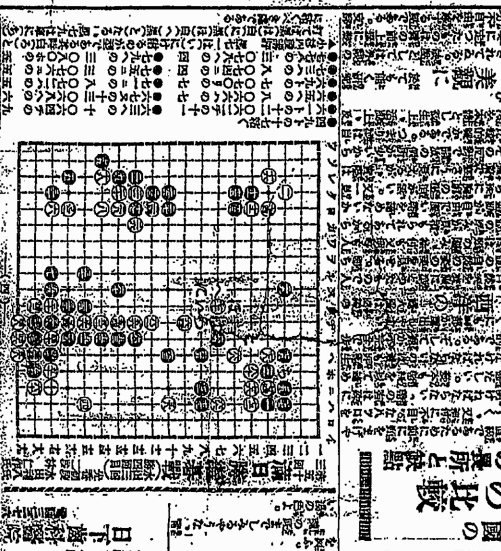


日本の諸外國
婦人服の比較
その場所と決断

小學校教科書
生命は十年持たぬ
今春改訂の教科書

日本全國を飛ぶ
一時間百八十哩
興味ある波瀾の遠力
鳴は一日で

女子美術界
誕生町高女の活躍
「女子美術界」
誕生町高女の活躍



洗滌法
色の削げぬ
石鹸液
洗滌法
色の削げぬ

青い湯の色
「青い湯の色」
「青い湯の色」
「青い湯の色」

ギネスの記録
「ギネスの記録」
「ギネスの記録」
「ギネスの記録」

子供の世界

支那童話

馬二郎 (貴州)

小さい小さい馬二郎
お馬にのつて學校へ
先生は私の年の少いを
嫌つてゐるが私の
お馬は一ぱい馬聞よ
牛は田中の草をくひ

馬は路の秋を食ふ

先生は早よ來て早よ歸りませう

ボウヤノオケシヨウ

みづきあかく

オカアサン「ボウヤオダカケヨ、ナニラシテキルノ」
ボウヤ「ボク、オケシヨウラシテキルノ」

まず、童謡について述べる。子ども対象ということで童謡が多く掲載されている。「仔犬」(三月八日付)「おそうじ」(五月八日付)「しやぼんだま」(五月十三日付)といった子どもの遊びや生活を詠った作品、「ひなまつり」(三月三日付)、「アカシヤ」(五月一日付)といった季節の風物を詠った作品のほかに、時事的な内容の「どうようデー」(七月二日付)や時局を反映した「へいたいさん」(五月三一日付)もある。これは、子ども文化が社会と密接な関わりを持っていることを意味する。ここでは、「へいたいさん」(こんどうすゝむ作 五月三一日付)という作品を紹介する。以下は全文である。

てつぼう かっいで／いさましく／みくにのために／まあります／
うみをわたつて／はるばると／みくにのために／まあります

この作品は中国大陆に渡る兵隊を詠っていると思われる。日露戦争終結後も日本は、一九一四年九月(山東半島)、十一月(青島)と中国に出兵している。一九一九年、旅順に関東軍司令部が設置され、満洲の関東州には軍隊が常駐する。一九二七年五月、蒋介石の国民政府軍北上を阻止するため、当時の田中義一内閣は、山東出兵を決定している。この出兵は、植民地満洲を守るためである。つまり日本の中国への侵略行為である。だが、童謡の「へいたいさん」は、「みくにのために」中国に渡るのである。中国への侵略行為が「みくにのために」という大義名分にすりかえられて進められていく。七五調の軽快なリズムは理屈ぬきに子どもたちに詠われる怖さを持っている。

童謡の中に、「支那童謡」として八編の作品が紹介されている(四月十六日〜四月二二日付)。地方名が明記されているだけで、訳者名はないが、おそらく翻訳紹介だと思われる。その内の二編を紹介する。

「なまけもの」(吉林 四月十七日付)は、無精な嫁を歌った内容で、訳語は七五調である。全文を引用する。

おまへはなぜに燈をつけぬ／外は一ぱい大風だ／おまへはなぜに髪梳かぬ／頭の油がなくなつた／おまへはなぜに顔ふかぬ／洗ふシャボンがなくなつた／おまへはなぜに花さゝぬ／旦那は家にゐないんだ／おまへはなぜに門しめぬ／外には人がまだ居るよ

「豆腐屋」(湖北 同上)の訳語も七五調である。全文を引用する。

小さい豆はまん圓い／豆腐をつくつて賣つてると／人は私の商賣を／小さなものだと言つてゐる／小さな小さな商賣も／大きなお金がもうかるよ

豆腐屋を営む大人の心情が詠われている。

いずれも「童謡」とあるがそうではなく、おそらく吉林省や湖北省で歌われていた中国民謡であろう。中国民謡が在満日本人の子ども向けに幾首も翻訳紹介されている点は、中国文化に触れる機会を与えようという「満日」の積極的な姿勢が感じられて興味深い。

(二) 童話

次に、童話について述べる。

「支那童話」と分類された作品があり、「子供の世界」に掲載された全童話作品の約三分の一を占める。「支那童話」には、中国古典から再話された作品と、題材を中国に取った作品の二種類に分けられる。ここでは、前者の例として「箕の白状」(秋津島彦 三月六日付)、後者の例として「チャン、ワン、リウ」(松原緑蔭 九月十一日〜十

七日付)の二話を取り上げる。

「箕の白状」は頓智ばなしである。米屋から借りた箕を返さず、自分の物だと言い張る粉屋に、お巡りさんは箕に白状させようと棍棒で箕を打つ。箕から、まず白い粉が落ち、その後に糠が落ちて、一件落着となる。「お巡りさん」が登場するところは現代的であるが、中国笑話の再話ではないかと思われる。というのも、著者の秋津島彦は、他にも「軍師孔明」(七月十三・十四日付)等、多くの中国古典を紹介しているからである。前述の「支那童謡」と同様に、在満の子どもたちに、中国文化を積極的に紹介しようとしているといえる。

「チャン、ワン、リウ」は女房子持ちの出稼ぎ労働者(苦力)三人の名前である。夏中働いてためたお金を持って山東の家族の元に帰る途中、馬賊に身ぐるみはがれる。無銭で旅を続けるうち、自分たちを襲った馬賊をやっつけ宝物を手に入れた故郷に無事帰るという話。満洲を舞台に中国人労働者を主人公とした作品が日本人によって書かれている例であるが、作者の松原緑蔭については詳細不明である。

「創作童話」とはどういうものか。創作童話として掲載されているのは、「魔法のお琴」(八月二五日・九月四日まで九回にわたって連載)である。東京府青山師範学校の富田淑雄の作品とあるので、内地で発表された作品の転載であろう。これは次のような話である。王様の頭に大きな瘤があることを知った正吉は、誰にも秘密を明かさないという王との約束を守って病気になる。見かねた母親の勧めで、山奥の桐の木の下に穴をあけ、その穴に向かって秘密をもらして元気になる。その桐の木は、のち、琴の材料となって、調べとともに、王様の秘密を明かしてしまうという話。「王さまの耳はロバの耳」を連想させる話である。内地で発表された作品の転載はよくあることで、在満の日本人児童は、植民地満洲で誕生し始めた子ども文化を享受しながら、一方で内地の子どもたちと同じ文化を共有し

ていたということである。

童話の最後に、「そこぬけ半ちゃん」(松原莞爾作)を取り上げる。この作品は九編のシリーズもので、主人公の「半ちゃん」は、在満の日本の子ども、うっかりもので、失敗ばかりする男の子である。人物描写や物語が十分に描けているとは言えないが、現代の子どもを描こうとした点で、これまでになかった作品であるといえる。

中国に題材をとった「支那童話」にしろ、「王さまの耳はロバの耳」的な発想の「創作童話」にしろ、筋立てのおもしろさを追っている感はあるが、「満日」で子ども読者対象に童話が常時掲載され始めたということ、また、「そこぬけ半ちゃん」で現代の子どもを描こうとした試みは、満洲における児童文学発展へのステップと考えてよからう。

(三) ルポルタージュ

一九二七年八月六日から八月十三日にかけて、「子供の世界」に「母國見たまゝ」と題して、在満の日本人児童が「母國」である内地を訪れた印象記が掲載されている。子どもの「母國」への感想が率直に綴られているので、ここでは、ルポルタージュとして取扱う。この印象記の掲載と並行して同頁に参加児童の親及び一般読者向けに「母國見學團から」として行程や参加児童の様子等が報告されている。在満の日本人生徒、特に中等学生が修学旅行として内地を訪れることはよくあったようだが、一九二七年、夏休みを利用したこの見學團は「満洲小學生母國見學團」と称し、団員五十八名、大連、撫順、安東等広範圍の小学校から参加している。期間は七月二五日から二十日間ほどの旅である。行程は、ハルピン丸で大連から下関を経、厳島神社を見学後神戸にて上陸。神戸、大阪、奈良、伊勢、東京、鎌倉等を見学している。彼らは、木の茂る山々の美しさや厳

島神社のすばらしさに感嘆する一方で、大阪の交通の激しさに驚き、道が狭く忙しい内地の生活に対する戸惑いを率直に語っている。さらに、下関では、「日本人が苦力の様になって働く様、女の人迄も一生懸命に働いてゐる様子を見ると自分等は非常に幸福だと云ふ事がわかる」（八月十三日付）と書いている。また、「日本人にも矢張り支×同様に下等の人がゐたこと（×は印刷不鮮明。「支那同様」と書かれていたと思われる。筆者注）（八月二十日付「母國見學團から」）とも書いている。ここに、満洲の特権的な位置にあった日本の子どもたちの意識が窺い知れる。

これら、児童が語る印象記は、内地の自然や名勝旧跡のすばらしさと同時に、満洲での日本人の暮らしの豊かさを際立たせることになり、在満の子どもたちに満洲で暮らす「幸福」を、大人が語る以上に感じさせる効果があつたのではないだろうか。

二 低学年向け記事―「ボウ」のシリーズ

カタカナ表記の低学年の子ども向けの記事は、「エテホン」（絵手本）を除くほぼ全編通して、幼児の「ボウ」（坊 筆者注）が主人公である。日本人の子どもの日常や日本人家庭の一コマが、挿画とともに、コント風に描かれている。兄妹や大人、時には生き物のしぐさをまねる幼児のユニークな発想を描く「真似上手」（三月二日～三月十三日付）、電車の中で自分も切符をほしがる幼い子どもの心情を描いた「デンシヤノキップ」（四月十七日付）、迷子になったのはお父さんだと言わんばかりの「マヨイゴノオトウサン」（五月一日付）等、気の利いたユーモアが時には低学年の子どもにどこまで共感されたか、いささか疑問を抱かせる場面もあるが、子ども独特の観点や反応が描かれている。

ここでは、「ボウノリヨコウ」を取り上げる。シリーズもので、

三〇回（誤植があるので、実際は三一回 六月九日～七月十五日付）、「カエツテカラ」（七月十六日～七月十九日付）が三回、合計三四回である。大連生まれの「ボウ」が大連からハルビンまで、列車の旅をする。その行き先々の見聞や驚きがコント風に描かれている。遼陽の白塔（六月十二日付）や奉天のラマ塔（六月十四日付）などの名所旧跡の紹介、「ウゴクシヨクドウ」（食堂車六月十五日付）の物珍しさ、はじめて目にする「ウシトブラ」（六月十七日付）、日露戦争で密偵としてロシア軍に捕らえられ銃殺された「ヲキヨコガワノヒ（沖・横川の碑）」（七月六日付）等が描かれる。一方で、ロシア人と「支那人」が描かれている。彼らはどのように描かれているか。

ロシア人が登場している場面は、確認できただけでも九か所にのぼる。これは「ボウノリヨコウ」の三分の二以上が「ハルビン」を舞台にしており、ハルビンはロシア人が作った街で、ロシア人が多数住んでいたからである。だが、もう一つ考えられるのは、日本人にとって、満洲に住む民族のうち、ロシア人に対する関心が、他のアジア系の民族より高かったからではないかとも推測される。ロシア人の描き方の特徴の一つは、彼らの容姿に対する描写が多いということである。ハルビン駅で声をかけてきた「ロシアノヒゲムシヤ」の運転手（六月十九日付）、「アメリカムラキタオニギョサン」のような「ロシアノボツチヤントジョウサン」（六月二一日付）、「オムキナカアサン」（六月二四日付）がそれである。もう一つの特徴は、ロシアの子どもと「ボウ（日本の子ども）」とがお互いに友好的に描かれているということである。『ボウノリヨコウ』（十三）「ロシアノボツチヤン」（六月二三日付）では次のように描かれている。

（前略）「キミハ、ロシアノボツチヤン？」

「ソウヨ、キミハ、ニホンノボツチヤンカ、コンニチハ、ヲシヤウ」
「ボク、タイレンカラキタノ、オクワシヲモツテキルヨ、アゲヨウカ」
(六月二三日付)

互いに挨拶を交わし、「ボウ」はお菓子をあげる。

また、『ボウノリョコウ』(廿八)ヒダリマエ(七月十二日付)
では、次のように描かれている。

スイヨクジヨニユクト、ロシアノコドモガ、ニホンノキモノヲキ
テキマシタ。

「コレハ、ニホンノキモノダヨ」

「ダメダヨ、マエノチガエカタガ、ウエシタ、チガツテキテ、ヒダ
リマエニナツテキルカラ」(七月十二日付)

ここでは、日本の着物を着たロシアの子どもが描かれている。しかもそれが「左前」であるところに、文化の違いやほのぼのとしたユーモアが感じられる。

では、本来の住人である「支那人」はどう描かれているのか。

「支那人」を描いた場面は二か所あり、その描き方の特徴は、働く姿を描いているということである。一つは、松花江の埠頭で大豆の袋を陸揚げする「ハタラクヒト」で、「ソノヒトタチハ、ヒトフクロハコブタンビニセンヅツモラヒマシタ。」(七月一日付)とあり、低賃金で働く「支那人」が描かれている。もう一つは、「支那」の市場の場面である。全文を引用する。

イチバニユクト、シナノヒトガ、コイヲウツテキマシタ。ソノコイ
ハミナ、セナカノヒレニイトヲトウシテ、ミズノナカニラツリサゲ
テアリマスノデ、ヨワツテモヨコニナレマセンカラ、イツデモゲン

キニミエマス

(『ボウノリョコウ』(廿二)ツナイダコイ(七月二日付))

ここで描かれた、コイのひれに糸を通して、横向きになれないようにした「支那」の物売りの知恵は読者に小ずるさとして映る。

エキゾチックなロシア人への称賛と友好的な態度、働く人間としての「支那人」、この両民族に対する描写の違いはどこからくるのか。その一因は、日本とこの両国との当時の関係にあると筆者は考えている。

『図説満州帝国』⁴によると、韓国をめぐる起こった日露戦争後、日本とロシアは満洲の勢力範囲を明確に南北に分けた。ロシアは日本と韓国との関係を黙認するかわりに、日本はロシアの外蒙における権益を認めるといった取り決めを行い、さらに、「極東」(満洲・蒙古・中国全土)の領土権、特殊権益の擁護と防衛のために相互に協力するという協約を結んでいた(以上は要約である)。

その後、日本とロシアとの関係は、ロシア革命以後、変化し、「満洲事変」(一九三二)によって日本は満洲支配を強め、ロシアと敵対する。敵対しながらも協力関係にあった日本とロシアとの関係は、人々の意識にも影響を与えているといえる。

また、ロシア文化やロシア人に対する当時の日本人の見方がある。磯田一雄は「風土や権力機構には巧みに適応しながらも、民族語や固有の生活様式や宗教的信仰をきちんと守ってたくましく生きている」ロシア人の姿に、当時の在満の日本人の多くは、他の民族よりロシア人を重視する傾向にあったと指摘している⁵。

一方、日本と「支那」とは、「共存共栄」をうたいながら、実質は支配と被支配との関係にあった。この両民族に対する日本人の立場、そこから生れた意識が反映されていると考えられる。

最後に、『ボウノリョコウ』(廿四)ニホンノガツコウ(七月

七日付）を紹介する。

ボウ「キミたちハガツコウニユクノ」

セイト「ソウヨ、アレガボクラノガツコウデ、ニホンシヨウガツコ

ウトイフンダゾ、ニツポンーオムキンダゾ」

ボウ「ソウカエ、リツパダナア、ボクモユキタイナア」

ハルビンにある日本人小学校を誇らしげに語る生徒とそれに憧れる「ボウ」の言葉は無邪気な子ども同士の会話であるだけに、在満の日本の子どもたちの心に素直に受け入れられるであろう。だが、これらは、日本の満洲植民地政策への肯定であり、賛辞である。

三 「子供の世界」の役割

文芸、教育、婦人の記事内容の一角に設けられた子ども欄「子供の世界」は、小さな欄ではあったが、その記事内容は多彩で、童謡・童話・ルポルタージュの文芸的な作品と、主として「ボウ」を主人公とした低学年向けのコント風の記事・ユーモラスな挿画の二つで構成されている。そこには、子どもも大人も楽しめる工夫と要素が見られる。

文芸作品には、日本内地の作品もあるが、満洲を舞台にした作品が多く、また、中国民謡の翻訳や中国古典の再話もあって、中国文化に触れる機会を与えようという「満日」の積極的な姿勢が感じられる。さらに、「支那童謡」「支那童話」「創作童話」という用語が見出しに使われているということは、児童文学に対する認識が、記者や読者にすでにあったことを意味している。

幼児「ボウ」の目を通して描かれる日本人家庭は、ほのぼのとして明るく、登場する大人も皆屈託ない。さらに、「ボウ」の旅は、読

者である子どもたちにとって、植民地満洲についての興味を抱かせ、知識を与えてくれる。一方で、そこには、当時の日本人の意識と作者の意図が現れてもいる。「支那人」は働く人間であるとの意識、ロシア人には「外国人」としての畏敬ともとれる感情、また、満洲における日本人の「偉業」への称賛ともとれる文言がある。

「子供の世界」の記事内容は子ども読者を楽しませると同時に、満洲に対する親しみや知識を持たせる効果も併せ持っていた。「子供の世界」の記事内容は、在満の日本の子どもたちを、日本人としての習慣や考え方を持つと同時に、育った満洲の風土に馴染み、植民地満洲の発展を担う次世代としての、いわゆる「満洲っ子」に育てるという役割を担ったといえる。

第四章 「満日婦人週報」欄の「コドモしんぶん」

一九二七年十一月二十日に「満日」紙上に「満日婦人週報」欄（毎日曜日）が設けられる。紙面一面を使った女性対象の頁であるが、その二週間後の十二月四日から、その中に子ども対象の「コドモしんぶん」欄が設けられ、婦人欄・教育欄・子ども欄を網羅した構成となる。これまで、週五回掲載されていた子ども欄は、以後、週一回毎日曜日の掲載となり、子ども欄の掲載回数が減り、内容的にも娯楽を主体とした記事内容となっている。

一九二七年十二月四日付「満日婦人週報」欄（資料4―1、2）を紹介する。

ページ ― 第五面

タイトル ― 「満日婦人週報」

記事内容 ― 1 「麻疹の流行と親達の注意 内攻を起させぬよう早く手

當するが肝要 池田喜一郎氏談」

2 「新しい毛糸 からみ糸が流行 配色美しいもの 單色では裏葉色」

3 「座蒲團のカバー 刺繍應用で 満鐵家庭研究所 田鎖つう」

4 「日曜漫画 三作品（浅枝次郎画）」

5 「コドモしんぶん」

― 「十二月繪曆（初雪・冬至・年の市・クリスマス）」

「日本飛行機の太平洋横断飛行」

「うそつき修行」（四コマの絵物語 筆者注）

6 「奥さん訪問（三） 大概の病氣は信念で癒せる 手藝にかけては十幾種にわたつて堪能な……美しい岡梅野夫人」

7 「科學の知識 蟲類はなぜ啼くか ノルバート博士の發表」
8 「けふの放送 プログラム解説」

― 性相學「形状性に就て」（午後七時十分）

ハーモニカ合奏（午後七時四十分）

長唄「鞍馬山」（午後八時）


箏曲「明治松竹梅」（午後八時三十分）

9 「珍らしい今津の蠅供養 殺された蠅五千五百石」（大阪市平野区で行われた今津博士主催の蠅供養 筆者注）

「コドモしんぶん」欄に記事が三つ。一つは、十二月の繪曆で、「初雪」「冬至」「年の市」「クリスマス」である。それぞれに挿絵があるが、「年の市」には羽子板や羽根の日本の正月用品が描かれ、「クリスマス」では袋を担ぐサンタクロースが描かれている。在満の子どもたちの年末風景が一方で日本的、一方で西洋的であると言えるかもしれない。もう一つは、時事ニュースである。「日本飛行機の太平洋横断飛行」では、翌年六月に予定の、日本機、日本人パイロット二人による太平洋横断飛行計画の詳細が紹介されている。「日本」が製造した「飛行機」で、「太平洋横断」することは、日本の威信をかけた歴史的な出来事であり、以後もニュースとして何度か取扱われる。もう一つは、「うそつき修行」という四コマの絵話である。うそつき村の村長が「つきべえ」「ほらきち」の二人を前にして、三人がかりでやっと運べる巨大大根の大法螺を吹く滑稽話である。十二月四日付「コドモしんぶん」は、時事ニュースと文芸とを組み合わせた形となっている。

だが、これ以降の「コドモしんぶん」の記事内容を見ると、ニュース性は少なく、「手品の種明し―鶏卵のダンス」（十二月十八日付）、六コマ漫画「トン子の羽根つき」（一九二八年一月八日付）等の娯楽的な記事が多くなっている。

第七千七百三十六號
(日曜日) 昭和二年十二月四日




満日婦人週報

麻疹の流行と 親達の注意


内食を起さぬよう
早く手當するが肝要

池田 一郎氏談




新しい毛糸

ふんわり柔らかく
編みやすい




併合症

皮膚科の専門病




皮膚病の カバ

田中 三郎氏談




くふんしん

日本銀行 大正十一年




けふの放送

形勢は如何なる



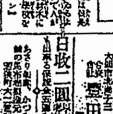
今津の風景

夢の如く




毛皮

防風服 毛皮




日取

日取 二回




北海道

北海道 物産



正

正 肺



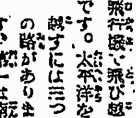
大

大 肺

64

來年の五月から九月まで
 日本に日本の飛行機が廣い
 ぜひ日本の飛行機で飛び越
 したいものです。太平洋を

つてゐる海の



郎は吐兵衛法螺吉の二人を前にして愈々吹き立てる。

「うんそれでは大根を御馳走しようか？」

「あゝ大根なら喰べますよ」

A black and white illustration showing three figures running up a steep, grassy hill. The figure in the foreground is a man in a plaid shirt and shorts, running towards the left. Behind him are two other figures, one in a dark shirt and one in a light shirt, also running up the hill. The background is a simple line drawing of the hill's slope.

俺の家の大根なんかはまた
小さい。この村の庄屋
さんの畑に出来るのなんか
モツト大きくて根元の白い
處が二十尺もある」

で一気に飛ぶのです。第三は東京から北海道に出て千歳(チゼイ)に着いて、アリイ・エーシヤン群島のアツタに向ひ、それからアラスカのシトカに寄き、更にシヤトルに向ふ北方の航路です。今度の日本の電報飛行はこの路を飛ぶので、八千三十三キロメートルあります。

そこで今度使はれる飛行機は川西式十二機(機體國産)は西武十二機(機體國産)

(四九)「戦北紀」の刊行

はビー・エム・ダブリュー
の六百平方一丁だが、二
人の探検者は代る／＼探検
して行けるやうになつてお
ます。この他に飛行機に載
せる機械には高さを測る高
度計、進むやうな磁力計、
道の多少を知る距離計、そ
れに磁針計、羅針盤、天候
の分る機軸、時間を計る機

(五)「何が元氣なものをか
 雨の降る密です。五十時間餘
 夜の間にふもとの二人の
 夜は眠る能く出来た。
 雨はサンドウキ
 チョコレット、燕窩
 の一週間は用意
 した。何もないさう
 である。その三十時分には
 雲や小雨の中を一秒

向を捕獲せしに對し太閤
 には慰。その御、謙婉を便
 せしに對し飛んで行くのです
 から、よんで來ねに據候の人は
 合しといひてござせん。飛行者
 海江田伯武、藤本照男の
 兩氏で、後藤助清、眞手
 一の兩氏が候補者となりま
 した。さうかしてこの壯舉
 を成功させ、世界のハハ
 なるアツギはせたいもので

第五章 「満日コドモページ」

一 「満日コドモページ」欄の創設―一九二八（昭和三）年

一九二八（昭和三）年二月十三日に「満日コドモページ」欄が創設される。この「満日コドモページ」は、これまでの子ども欄の発展したものと考えられる。

創設の予告（「満日」一九二八年二月十日付）では、次のように書かれている。

年少少女諸君に 満日コドモ・ページが出来ます

コドモ・ページ が、来る十三日から、満洲日報の朝刊第五面に新しく設けられますから、可愛がつて読んで下さい。

コドモ・ページ には、諸君がお読みになつて、面白く有益な記事や、寫眞や、童謡などが澤山掲げられます。

コドモ・ページ は、本當に諸君のお友達となるやうに、學校の先生達のお力を借りて、立派なものとするつもりです。

コドモ・ページ には年少少女諸君が、學校で書いたお習字や、自由欄や、作文なども掲載される豫定です。

コドモ・ページ は、特別の事情がないかぎり、毎朝、諸君のために掲載されますから、楽しみにしてお待ち下さい。

この予告には「満日コドモページ」発刊の趣旨として、面白く有益な記事や童謡が毎日掲載されること、児童作品の掲載も予定していること、學校の教師の協力を得て紙面の充実に努める旨が述べられており、創設趣旨が明確に示され、紙面充実に取り組もうとする「満日」の意気込みが窺える。

「満日コドモページ」第一号（一九二八年二月十三日付 資料5）は、紙面半分の大きさ（下段は広告）で、内容は次のとおりである。

ページ 一 第五面

タイトル―「満日コドモページ」

記事内容―1 「ワタクシ ハ コドモノ シンブン デ アリマス」

2 児童作品 「つゞりかた」三編 「どうよう」三首

「絵画」一点 「書道作品」一点

3 「コドモ・シンブン」

「シュトウ ヲ ナサイマセ」「お牛の喰すぎ」

「ニツポシノ ダイブツサン」

記事内容は、カタカナの挨拶文、「コドモシンブン」欄、児童作品で構成されている。カタカナの挨拶文には「ワタクシ ハ コドモノ シンブン デ アリマス」という見出しの後に、子どもの良い友になりたいという意味の文言が述べられている。以下はその挨拶文全文である。

ワタクシ ハ コドモノ シンブン デ アリマス

ワタクシハ ケフ ウマレタバカリノ コドモページデス。ワタクシノ オトウサンハ マンシウニツポウデス。ソシテ オカアサンハ マンシウニツポウノ コドモページ カカリノ キシヤデゴザイマス。

ワタクシハ ボツチャンヤ ジャウチャンノ ヨイ オトモダチニナリタイノデス。シカシ マダ ウマレタバカリデスカラ ミナサンノ オキニイルヤウナ オトモダチニ ナレルカ ドウカ シンバイシテヨリマス。ソレデモ ワタクシハ 一セウケンメイデ

[illegible][illegible][illegible]

三才圖會

ミナサンノ オキニイルヤウニ ベンキヤウ イタシマセウ。ソシ
テ ヒノタツニシタガツテ ミナサンガヨロコンデ 一シヨニ
アソンデ クダサルヤウニ ナリタイモノダト オモヒマス。
ドウゾ ミナサマ ワタクシガ ドンナ コドモシンブンニナ
リマスカ マイニチ ゴランクダサイマセ。

全文カタカナ書きは低学年の子どもでも読めるようにという配慮であり、擬人法による語りかけは、子ども読者への直接的な訴えである。「コドモシンブン」欄には、主に時事ニュースや啓発記事を掲載している。種痘の呼びかけをし、食べ過ぎで死んだ牛を例に食べ過ぎを注意している。また、別府温泉に出来た「日本一」の大仏を紹介している。児童作品は、綴り方三編、童謡二首、絵画・習字作品がそれぞれ一点掲載されている。ゆったりとしたレイアウトに配慮の行き届いた仮名遣い。子ども読者を主体とした子どもの新聞の誕生である。

二 「満日コドモページ」の概要

「満日コドモページ」は、ほぼ毎日、朝刊に掲載された。当初は、上段半面が「満日コドモページ」で、下段半面は広告であった。が、同年三月八日より、上段半面は二つに仕切られ、片側に「満日コドモページ」、もう片側に「学校と家庭」欄が併設された。ただし、日曜日は「満日婦人週報」との併設である。だが、一九二八年十月二十六日より、教育欄とコドモページとが分離され、毎日掲載される「満日コドモページ」は紙面一面に拡大、土曜日休みとなり、教育欄は毎土曜日のみとなる。

まず、ここでは、「満日コドモページ」が創設された二月、及び三月の記事内容（「資料編の〈資料3〉」「『満日コドモページ』記事内

容一覧」（一部抜粋）を参照）から、具体的にいくつかを紹介し、「満日コドモページ」の特徴を探る。

一つ目の特徴は、読者対象が小学生であることを踏まえ、学校や小学生についての身近で親しみやすい話題を数多く取り上げている点である。

「小さい藝術家をたづねて」（二月十四日付）三月三日 十一回連載）は、特技を持った子どもたちのインタビュー記事である。ここで紹介される児童は、大連市内の小学校に通う小学生で、絵画、ピアノ、声楽、踊り、童話の創作等の一芸に秀でているだけでなく、学業にも優れた子どもたちである。「親孝行な内地の子供に厚い同情 大正校の青柳さん 手紙にお金を添へて贈る」（二月十七日付）では、「涙の学校美談」として評判になった、広島県の親孝行な小学生に、励ましの手紙に自分の小遣い「一圓」を添えて送ろうとした「大正校の青柳さん」の行為を善行として讃えている。ここに登場する子どもたちは、模範とすべき一つの小学生像でもある。また、「学校ニュース」では、各校の行事の案内や担任教師の紹介、「学校茶話」では、先生の失敗談や入試の珍回答など、学校に関する、ちょっとしたこぼれ話がかかれていく。読者である小学生にとっては身近で親しみやすく、また啓発される記事内容である。

二つ目の特徴は、勉強に関する記事が多い点である。

「どうすれば圖畫が上手にかけるでせう ◇―大連常盤小学校 高野先生のお話」（三月十五日）三月十九日付）は五回に渡って、絵画法を説いている。「綴方と批評」では、児童の「綴方」を載せ、その作品の良さや欠点を指摘して作文指導を行っている。三月四日付「綴方と批評―或る日の放課後」では、試験を返してもらった放課後の様子が書かれているが、その「綴方」の「評」にこうある。

（前略）取扱にくい題材であるだけに文そのものゝまとまりがよく

ない。むしろ成績の悪かったことを聞いて非常に残念に思ったその時の感じを中心として今後大いに勉強しやうと決心したまでの心の状態を描いたならばもつといふものが出来たことと思ふ。綴り方は着想が大切である（三月四日付）

掲載された児童作品は、一般的には優れているから掲載されるわけだが、「満日コドモページ」の場合、もちろん褒めることもあるが、その「綴り」の良くない部分を取り上げ、どう書けばより良くなるかを具体的に指摘しており、子ども読者の書く力を育てるという姿勢が窺われる。さらに、「知識くらべ」では、「誰の年でもすぐわかる」（二月二三日付）、「思つてゐる数字が判る」等、数のマジックによる算数への興味づけがなされている。

三つ目の特徴は、紙面充実にさまざまな工夫が凝らされている点である。

その一つは、「質問欄」の設置（三月二一日付）である。この欄は、一人の子ども読者の手紙によって設けられた。「コドモページ」に掲載された手紙の一部を紹介する。

（前略）僕は新聞や本を読んでゐるときいろくわからない事が出て来にママ父に聞いても先生に聞いてもわからない事が多いのです。（中略）僕の様にはわからない事のあつた人は新聞社にきいてその答へをコドモページに出してもらふ様にしたらどんなにいいだらうと思ひました。（後略）（提案者は、大正小学校の有馬善彦君 筆者注 一九二八年三月二十日付「コドモページ」）

係では、この少年の要望に誠実に応え、「質問欄」創設に当たり、子ども読者に次のように呼びかけている。

（前略）皆さんがたのおわかりにならないこと、不思議に思つて居ること等があつたら満洲日報コドモページ係宛でドシク御質問下さい、記者だけでわからないことがあつたらそれぐ専門の先生におきゝしてお答へいたします。（後略）（同上）

子ども読者の要望に誠実に応えることは、子どもの向上心を伸ばし、主体性を培うことにつながる。さらに、投稿者の学習態度や文章力を褒めて手紙を紙上に掲載することは、投稿者のみならず、他の子どもたちを啓発することにもなる。

もう一つの工夫は、「児童作品紙上演覧會」（三月二八日付）である。児童作品の掲載は、「子供の世界」（一九二七）以前からすでに行われてきたことでもあつた。それは、子ども欄の大きな役割の一つで、子どもの意欲を引き出し、主体性を育成し、子どもの文化的水準を向上させることを意図していると考えられる。「満日コドモページ」では、日常的に児童作品の掲載は行っているものの、さらに特別に曜日を設定し、紙面一面を使って、大々的に行おうとしている点の特徴である。

以上、二月と三月の「満日コドモページ」の記事内容を紹介した。いづれも、これまでのこども欄とは異なる特徴が見られる。だが、「満日コドモページ」の特徴はそれだけではない。「満日コドモページ」の大きな特徴は、次の二点にある。一点はマス・メディアとしての「新聞」の役割を担い、ニュースを伝えると同時に、読者への啓蒙的な働きをしているということ、もう一点は文芸欄が今まで以上に充実しているということである。この二点について述べる前に、「満日コドモページ」の担い手である青山捨夫について述べる。

三 青山捨夫と「満日コドモページ」

「満日コドモページ」の中心的人物は、青山捨夫である。

青山捨夫（以下「青山」）は、一八九一（明治二三）年石川県に生まれ、同県の師範学校を卒業。同県で小学校に勤務したのち、満洲に渡る。大連常盤小学校で多年教鞭を執っていたが、一九二八年三月、児童教育の社会化を志して教育界を去り満洲日報社に入り、「コドモページ」を担当する。⁶

青山は「満日」に入社前、一九二六年にすでに『支那の童話』第一編・第二編（今永茂との共著）を出版している。この二冊の書籍について筆者は未見であるが、『支那の童話』第一編の「新刊紹介」（一九二六年三月三十一日付）に「児童の課外読み物として最も適當であると共に建國の古い支那に傳つた童話を忠實に記している」とあるところから、子ども読者を念頭に置いた再話であったことが推測される。小学校教師の経験と文学的素質を備えた青山は、「満日」紙上において、「満日コドモページ」の充実を図る一方、満洲の教育に対して積極的に取材し発言している。例えば、一九二八年の「満日」から関連記事の見出しを抜き出すと、小学校校長へのインタビュー記事である「或日の教育漫談 教育は……永遠の事業 絶江ざる讀書を續けたい」（四月二七日付「學校と家庭」欄）、學校訪問記である「いでゆ村の楽しい學習 熊岳城小學校參觀記（三）」（五月十五日付「コドモページ」）、児童と映画について述べた「児童と映画問題（十）映画教育について」（六月二六日付「學校と家庭」）、學芸会についての論評「神明町高等女學校 學藝會批評（上）」（石森延男と共著）（同上）がある。

「満日コドモページ」の挿絵を描いたのは、「満日」記者の画家淺枝次朗である。経歴の詳細は分らない。「満日」紙上に掲載された「淺枝次朗君の藝術」（大野斯文著 一九二六年十一月五日付）という記事によると、かつて「ヒウザン會」の同人であったという。その著者大野斯文は、「すでに中央で社會的に名を成すべきであった同

君が、ヒウザン會以來繪筆をとりつゝ、現在のやうに満洲の人からもその存在を一部の人以外には認められなかった原因は、婦女子にでも批判される挿繪等に器用でないことゝ、餘りに藝術家らしい良心と謙遜を有ち過ぎるためであると思ふ」と述べている。「婦女子にでも批判される挿繪等に器用でないこと」とあるが、淺枝の画風は広く、特に「満日コドモページ」ではその才は遺憾なく發揮されていると筆者には感じられる。

彼ら二人の他に、「満日コドモページ」を支えたのは、在滿の小学校教師たちであつたろう。紙面に登場する個性的で優秀な小学生の発掘、「學校ニュース」や「學校茶話」での學校の様子、「知識くらべ」や勉強法に関する記事の協力、そしてなにより、多くの児童作品は、小学校教師たちの提供であつたろう。

四 「満日コドモページ」の文芸作品

（一）青山捨夫の仕事―海外の作品紹介

青山は「満日コドモページ」創設当初から、精力的に作品を発表している。下記に、抜き出してみる。

童話「森のカナリヤ」上中下 青山捨夫作

（一九二八年三月四日～三月七日付）

學校劇「米國で劇になつた 日本の舌切雀」青山捨夫譯（一一五）

（一九二八年三月八日～三月十二日付）

學校劇「熊のおうち」（上中下）青山捨夫譯（一九二八年十一月四日～十一月九日付）（米國ウイスクンシンの師範學校

で尋常五年生が行つた人形劇。）

學校劇「コロンプス」（一一三）オリブ・エル・ウエルス原作・

青山捨夫譯（一九二九年三月一日〜三月六日付）

學校劇「健康への道」（二―四）ゲオルギー・コーリン作 青山捨夫譯

（一九二九年六月十七日〜六月二一日付）

「森のカナリヤ」は買ってもらったばかりの空氣銃でカナリアを狙って遊んでいた太郎が、夢の中でカナリヤになって、空氣銃に狙われる恐怖を味わい、生きものを殺す行為を反省するという内容である。教訓くさはあるが、空氣銃に狙われ逃げ惑う場面は、読者をはらはらせる表現のうまさがある。

「米國で劇になつた 日本舌切雀」は、アメリカの小学生が先生と一緒に作つた學校劇で、「日本の舌切雀がすっかり姿を代へて」いる。「アメリカの子供達に日本の舌切雀のお話がどんなふう映つてゐるかたのしみにして讀んで下さい」とは、訳者青山の弁。大きな変更点は、登場人物が、寒さに震える雀を家に入れてやり、その鳴き声を愛でる優しい老夫婦と、その轉りがうるさいからと雀の舌を切る隣のいじわるなおばあさんになっている点である。「熊のうち」は、よく知られた「三びきの熊」の話である。

ここで、何編か紹介したが、特に、青山は海外の學校劇の紹介に力を入れているように思える。學校劇の脚本はすぐに教育に役立てることができるという利点もあるが、それだけではあるまい。子どもたちに広く世界に目を向けて欲しいという青山の思いの現れではないだろうか。

（二）「合作童話」

「満日コドモページ」に次のような二編の「合作童話」が掲載された。

合作童話「唾になる石」（二―六）（中溝新一・青山捨夫・弓削應明・

上村哲彌・石森延男・今永茂）（一九二八年十月十一日〜十月十七日付）

合作童話「お窓の星」（石森延男・上村哲彌・弓削應明・青山捨夫・今永茂・中溝新一）（一九二九年一月一日〜一月十四日付）

「合作童話」は、六名の連作による作品である。日本の連歌からの発想であるのかもしれないが、管見によると、この形式による創作の試みは、「満日コドモページ」が最初に行ったものである。

まず、「合作童話」の執筆者たちについて述べる。

執筆者六人の所属はそれぞれ異なる。石森延男と今永茂は南滿洲教育会教科書編集部、上村哲彌は滿鉄社会課、弓削應明は大廣場小学校訓導、中溝新一は中日文化協会である。これら六名は滿洲の児童文化・児童文学に関わっている人々である。「満日コドモページ」から彼らの著作を抜き出すと、今永茂は「こどものおはなし 太ちやんとお馬」（一九二八年三月十三日〜十六日付）、中溝新一は「端午節に就て」（同年六月二二日〜二三日付）、石森延男は童話「OASIS」（同年十月十三日付）がある。また、「児童デー」は、滿鉄社会課の主催である。「満日」に上村哲彌の「児童愛護の目標―児童デー當日JQAKでの放送―」（一九三〇年五月十七日付）という文章が掲載されている。彼らはいずれも「満日コドモページ」掲載の文芸作品等の充実に貢献し、さらに滿洲児童文学の誕生・発展に貢献したともいえる。

「唾になる石」は、「満日」が「御大典奉祝記念」のために「滿洲を背景とした日支親善を意味した合作童話」として「連載」された作品である。作品のあらすじを紹介する。

仲の良い秀ちゃんと正ちゃんは、山に三葉虫の化石探しに行き、両手に化石を握った「唾」の「支那少年」と出会う。その少年は三

年前に化石を探していて、雷に打たれ「唾」になり、それ以来奇妙な行動をするようになっていた。少年の父も兄も、化石の呪いだと思ひ込んでいた。二人はその誤解を解き、少年のために聾啞学校に入れるように尽力することを約束する。

日本の子どもが不遇の「支那少年」に出会い、その少年のために援助の手を差し伸べる。日本の子どもと「支那の子ども」とが同じ作品に登場する場合、しばしばこういう図式で描かれる。さらに、この作品の場合、少年の父や兄は石の呪いだという迷信に惑わされているという設定である。「支那人」は貧しく文化的に低い。これは、植民地満洲における日本人の目から見た「支那人」の姿である。だからこそ、日本が「支那」の近代化を助けるために、「支那」に渡るのである。この考え方が満洲植民地化の大義名分であった。この作品が、「日支親善」の作品として日本人社会に受け入れられるのは、当時であつては当然のことであつたろう。この一回目の掲載が「非常に好評を拍_マした（一九二八年十二月二八日付）」というところで「合作童話」は再度掲載される。二回目の作品である「お窓の星」は、夜なべの針仕事をする母親の傍らで、窓から夜空の星を眺めていた女の子が、いつしか空の星たちのもとに行き、楽しい時を過ごすという幻想的な童話である。

合作による童話創作という趣向の面白さ、六名の文体や発想の違いの妙味、予測もつかない展開を各執筆者はどう収めるのかという読者側の興味はあるだろうが、作品としてはまとまりを欠き、決して成功とは言ひ難い。しかし、「満日コドモページ」では紙面作りに様々な試みをしているという点については評価できよう。

(二) 懸賞童話・童謡

「満日」では、一九二九（昭和四）年の新春に向けて、「懸賞童話・

童謡」の募集を行い、以後、同年三月、同年五月と引き続き募集を行っている。入選作品は順次「コドモページ」に掲載されている。これら一般の書き手の参加を促すことによって、「満日コドモページ」が更に充実していったといえる。

第一回の「懸賞児童讀物」の応募数は、童話第一種（尋常三・四年程度のもの）九十五編、童話第二種（尋常一年程度のもの）六十二編、童謡二一八編、笑話二五一編、計六二六編。編集局で厳選の結果、以下の作品が入選した。（一九二九年一月一日付）

童話（第一種）			
一等	お年玉とスケート	山田健二	
二等	草はほゝゑむ	西谷一之	
三等	楽しいお正月	山田健二	
佳作	六編		
童話（第二種）			
一等	シャウジキナヒヤクシャウ	豊村 修	
二等	ジラウサントロバ	西元 静男	
三等	ミゴトナモモ	坂口としろ	
佳作	六編		
童謡			
一等	捨てられ小犬	上倉童夢	
二等	おてらのかね	柴田正一	
三等	寒雀	尋三 東瀬戸泰雄	
佳作	十二編		
笑話入選			
	四大都市	豊村水星	
	高梁	同人	

童謡入選の柴田正一、東瀬戸泰雄は共に小学生である。それ以外はすべて大人である。柴田正一は、以後、しばしば「満日コドモページ」で作品が取り上げられる。童謡（第一種）一等の山田健二は、満鉄社員でありながら、童話創作や口演童話を行い、のち、満洲児

童文学作家の一人として活躍している。山田健二については、「第V部」で論述する。応募数の多さは文学愛好者の多さと積極性を意味している。「満日コドモページ」は、子どもの文学的才能を発掘し、育成しただけではなく、大人の児童文学愛好者のすそ野を広げ、彼等の創作活動を促したという点において大きな推進力となったといえる。

五 マス・メディアとしての役割と啓蒙

「満日コドモページ」では、一九二七年二月十五・十六日の両日にわたり、「普選のお話―ぜひおよみください」と題し、「普通選挙」について子ども向けに分かり易く解説している。これは、同年二月二十日に予定されている「普通選挙」に向けての啓蒙活動である。また、「満日コドモページ」では、時事ニュースを掲載している。創設当初は「満日コドモページ」内に「コドモ・シンブン」欄（創刊〈三月一日付〉が設けられていた。以下はその記事内容である。

一九二八（昭和三）年

二月十三日「シュトウヲ ナサイマセ」「ニッポン一ノダイブツサン」

二月十四日「ユウカンナ 四ユウシ」「わづか十六で三十一貫ある」

二月十五日「ゼンソクヲ エントツデナホス」

「マグロを米國へ輸出する」

二月十七日「コホリノ オクニ ヘトブ」「三笠の大砲で劍を作る」

二月十八日「驅逐艦が衝突」「デンノウ ヘイカ」

二月十九日「マンシュウノ トシヲトッタヒト」

「米國の汽船が爆破した」

二月二十日「ゲンカンノ オハナシ」「横断飛行は一年のぼす」

二月二十日「デンノウヘイカ」「八尺七寸の大男」

二月二十三日「クワツドウ シャシン」「六十臺の飛行機で空中演習」

二月二十五日「チノブノミヤデンカ」「満鐵の汽船が衝突した」

二月二十七日「デンノウヘイカ」「浅間山噴火し 電車とまる」

二月二十八日「少年が投票 選挙に違反」「クワジ ニゴチユウイ」

二月二十九日「去年のお手帳の中から」なまえ、かそん

□撫順の町 □落葉 □霜 □ほうづき坊さん

三月一日「コトシガクカウヘ ユクケウダイハナイカ」

「秩父宮殿下」

時事ニュースは、内地、満洲、海外から広く集められ、また内容も予防注射（「シュトウヲ ナサイマセ」二月十三日付）の健康面や日常的なことから、「驅逐艦の衝突」（二月十八日付）、太平洋横断飛行（「ユウカンナ四ユウシ」二月十四日付）や、日本の水産業の国際化（「マグロを米國へ輸出する」二月十五日付）に至るまで多岐にわたる。「コドモ・シンブン」欄がなくなっても、時事ニュースは掲載されている。これらの記事は、「満日」が社会や世界に目を向ける子どもの育成を目指していたということであろう。

ここで、「満日コドモページ」のもう一つの大きな役割について検証したい。それは、「満日コドモページ」が担った皇民化教育についてである。

「コドモ・シンブン」欄に掲載された時事ニュースの中に「デンノウヘイカ」（二月十八日〜二十一日付）、「チチブノミヤデンカ」（二月二十五日、三月一日付）と見出しのついた記事が何度か掲載される。いずれも天皇や秩父宮の行事日程である。

一九二八年十一月十日は、昭和天皇即位の式典が行われた日である。全滿あげての「御大典奉祝」ムードに、「満日コドモページ」も例外ではなかった。この日を迎えるまでに、「満日コドモページ」では、「御大典」に対して、多くの紙面を割いている。

一九二八年十月十一日付「満日」では、「大典奉祝児童愛護週間に賛して」「特にコドモページを開放して一週間児童愛護週間欄とし、特に子どものための読み物として満洲を背景とした日支親善を意味した合作童話を連載、また一般読み物としては児童愛護に関する専門家庭教育家の寄稿を連日発表し親たちの参考に資すると共に児童愛護の良風を鼓吹することとした」とある。「御大典奉祝記念」のために「日支親善を意味した合作童話」とは、前述した合作童話「啞にされた石」のことである。

さらに、「御大典」関係の記事が連日のように掲載される。

例えば、「ある夜のお話會」として、「御大典のお話」が（一）「御大典について」（十月二三日付）（二）「大嘗祭と『悠紀主基兩齋田について』（十月二六日付）（三）「兩陛下の東京御發輦について」（十月二九日付）（四）「三種の神器」（十月三一日付）の記事が連載されている。記事内容は、子どもたちの自主的な勉強会で、その日の担当者がみんなの前で発表し、傍聴者には親や兄弟、近所の人まで参加するという形である。そのため、言葉は平易でしかも発表する時の工夫や様子までが描写されており、子ども読者には物語でも読むように楽しみながら、「御大典」の意義や天皇制が理解できるように工夫されている。「明日は國を擧げてお祝ひ申上げる 御即位の御儀式」（十一月九日付）では、「御大典」の日を迎える心構えまで書かれている。

（前略）我々國民は行ひをつゝしみ御大典を無事に終らせられることをまごころからおいのりしなければなりません。殊に其の日は家の内外を清め、かりにも火を失するやうなことなく、又お互ひが注意して病氣になつたりしないやうにしなければなりません。この日にお葬式を出すやうなことは無論御遠慮しなければならぬのです。（同上）

「御大典」の儀式が無事に終わるように、「まごころからおいのり」し、「家の内外を清め」「病氣になつたり」「葬式を出すやうな」ことは許されないという。「御大典」がいかに「神聖で厳かな儀式」であるかが強調され、子どもたちの心に神格化された天皇思想が自然に入っていくのは疑いようもない。

六 「満日コドモページ」と満洲児童文学活動

満洲の副教科書の編纂に携わった石森延男は、「満洲児童文学回想」⁸で、「満日コドモページ」のことに触れている。「満日コドモページ」誕生前後の子どもの文化的環境が分かるので、少し長いが引用する。

（前略）教科書はもともと一定の分量に抑えられるものであり、ひとたび編集が完了すれば数年間はそのまま使用される運命をもっている。このように形式上固定した読物では、とうてい子どもたちの心情を満足させ郷土愛など耕し得べくもない。そこではじめて教科書以外の児童読物というものをこの土地から育てなければならぬと痛感し、志を同じうする連中と語りあう機運が到来した。（中略）その機運は来には来たがいざその出版や経営という壁につきあたり、せつかくの児童読物製作の機運もいきづまってしまった。（中略）さいわいに『満洲日日新聞』社に青山捨夫がいて、『童話』『民話』『創作童話』なるものを掲載してくれるようになった。（後略）（三一頁）

この文章から、青山が作品発表の場を提供し、満洲児童文学活動の推進に一役買ったことが分かる。石森や久富榮次郎の作品（「オハナシ ナキムシ ノ タラウサン」一九二九年六月二五・二六日付）は早い段階から登場するが、石森以外の他の同人たち（政本勇・平

方久直ら）の作品が「満日」子ども欄に登場するのは、もつと後の一九三二（昭和七）年のことである。「満日」子ども欄が、石森らの児童文学活動と歩みをともしてきた。そのことは、石森らの活動を後押しすることになったと同時に、「満日」子ども欄の充実にもつながったといえよう。

青山は、「満日」というマス・メディアで積極的に満洲教育を取り上げ、提言を行い、在満日本人児童の教育環境の整備を行った。また、「満日コードモページ」の充実によって、子どもの意欲を引き出し、子どもの文化を育てる働きをした。一方、青山自身も児童文学の執筆活動を行い、また、同じ時期に興った石森らの小学校教師を中心とした児童文学創作活動に作品発表の場を提供し、満洲児童文学発展に大きな貢献をしたといえる。

第六章 「満日コドモページ」以後

「満日コドモページ」（途中から「コドモページ」と表記）は、一九三〇（昭和五）年一月二五日から、「家庭トコドモ」（「家庭とコドモ」とも表記）と名称が変わる。これまで「満日コドモページ」は家庭欄と併設されており、記事内容によっては子ども対象か、大人対象か、明確に区別できない場合もあったので「家庭トコドモ」となっても紙面上ほとんど違和感はない。掲載もほぼ毎日で変わりない。ただ、児童作品の掲載がほとんど見られなくなった。当初は絵物語や童話が常時掲載されていた「家庭トコドモ」だが、しだいに婦人向けの記事内容が多くなり、一九三〇年七月には、名称が「家庭欄」となる。同年九月、新社屋（奉天・現瀋陽）移転に伴い「家庭欄」は新しく「家庭・學藝」欄と名称変更する。変更直後の「家庭・學藝」欄の記事内容は家庭、家庭教育が中心となり、かつて「満日コドモページ」の特徴であった子どもを中心とした新聞の体裁及び内容は無くなっている。ただ、以後の紙面の体裁や記事内容については改めて詳細な調査が必要であると、筆者は考えている。

一九三二（昭和八）年七月十日に「マンニチ日曜附録」が創設される。週一回の掲載であるが、そこに、子ども向け紙面が復活する。「マンニチ日曜附録」は、最大四ページという時期もあったが、一九三四（昭和九）年六月二四日を最後に、子ども向けの紙面を擁した「マンニチ日曜附録」は無くなる。

おわりに

日露戦争（一九〇四―〇五）後、国策会社として満洲植民地化をおし進めた満鉄は、鉄道、産業とともに、特に力を入れたのが教育だった。満鉄は学校教育と文化の育成に力を注いだ。満鉄主導の「全満児童デー」（一九二六）も子どもの文化的環境作りの一つであった。それが契機となって、「満日」では、子どもを対象とした記事が掲載されるようになる。やがて、紙面の一角ではあつたけれど、「子供の世界」「コドモしんぶん」（共に一九二七年）と子ども欄が設けられ、それらが発展して「満日コドモページ」（一九二八年二月）となる。「満日コドモページ」は青山捨夫と浅枝次朗が中心となり、大連在住の小学校教師たちの協力によって、子どものための新聞となる。「満日」の子ども欄及び「満日コドモページ」が果たした役割は何であつたのか。

子どもたちに、活字に親しみ、作品に触れる機会を与え、子ども読者に読む喜びを与え、文化を受容する土壌を育てた。児童作品を随時掲載することにより、子どもたちの書く意欲、参加する積極性を育てた。子どもの文学的才能を発掘し、育成しただけではなく、大人の児童文学愛好者のすそ野を広げ、彼等の創作活動を促し、児童文学の担い手を育てた。「満日」子ども欄及び「満日コドモページ」は、読者を育て、書き手を育て、満洲児童文学の誕生・発展を促したといえる。

一方、「満日」子ども欄「子供の世界」では、中国の民謡の翻訳や中国古典の再話・翻案を積極的に掲載し、植民地満洲の次代の担い手である、満洲を愛する「満洲つ子」の育成を目指した。また、「満日コドモページ」では、時事ニュースを、日本国内、満洲、海外から広く求め、世界に目を向けた子どもの育成を目指すと同時に世界

に比肩する日本の子どもとしての自覚を促した。さらに、神格化された天皇思想の啓蒙に多くの紙面を割き、皇民化教育に力を注いだといえる。

石森の渡満の時期は、ちょうど植民地満洲に「子ども」に対する意識が育ち、子どもの文化環境が整備された頃である。石森らの児童文学活動は、それら土壌の上に興り、しだいに活発になっていく。それは、ちょうど「満日」に子ども欄が現れ、その子ども欄がしだいに豊かになっていく過程と重なる。一方は同人誌で、一方は新聞で、満洲の子ども文化を育てたといえよう。

第Ⅱ部 注

- 1 中日文化協会編 一九二七年十一月 六一三頁
- 2 相川美恵子著『児童読物の軌跡―戦争と子どもをつないだ表現』龍谷叢
二〇一二年八月 一五八頁
- 3 『滿蒙年鑑』（昭和三年版）五八九・五九〇頁
- 4 太平洋戦争研究会著 河出書房新社 一九九六年七月
- 5 磯田一雄著『のらくろ探検隊』と『スンガリーの朝』―戦時下の児童
文化における「満洲」―「成城文藝」第一六六号 一九九九年三月三
〇日発行 二四頁
- 6 『滿蒙日本人紳士録』大連 滿洲日報社 一九二九年五月
- 7 一九二二年に結成された青年美術家集団。斎藤与里を中心に岸田劉生
高村光太郎・木村莊八・津田青楓らが集まる。
- 8 日本児童文学会編「児童文学研究 二」一九七二年
- 9 「満洲日報」のこと。「満洲日日新聞」に改称したのは、一九三五年八月
なので当時は満洲日報といった。石森の記憶違いであろう。

第Ⅲ部

石森延男と満洲児童文学

はじめに

石森延男（以下「石森」）は、国語教育者として、また、文学者として、戦前・戦中・戦後を通して第一線で活躍した。ここでは石森の在満時代の事跡を説明する。その目的は、結果的には満洲植民地化を積極的に推進することとなった石森の行為を暴き断罪するためではない。一人の文学を愛する教育者が、戦前・戦中という時代に、植民地であつた満洲でどう生きたかを探るためである。

石森は在満十三年、植民地満洲の教育、文化に深く関わり、在満の日本人及び日本の子どものための文学活動を展開した。満洲児童文学の源泉は、『満洲補充読本』の編集事業にあつたと石森はいう¹。それは、石森個人にとって、教科書編集部で携わった副教科書作成の基本理念が石森の満洲における文学活動の原点となり、そして多くの満洲教材の執筆が石森文学を育てたからである。また、のち満洲の児童文学活動が石森を中心とする小学校の教師たちによって展開され、課外読物と深く結びついていたからである。

筆者は、石森を、満鉄の文化政策によって耕された文化的土壌に創作児童文学の種を播き育てた人物として位置づけている。満洲における石森の児童文学面での功績は、一つは満洲にこれまでなかった在満日本人児童生徒向けの雑誌を編纂し発行したこと、もう一つは満洲で創作を中心とした児童文学活動を展開したことである。

本稿では、石森の満洲時代の事跡及び各作品について論述する。

第一章 石森延男―在満十三年の軌跡

本章では、石森の満洲時代の事跡を論述する。但し、満洲時代の石森を論じるためには、これまでの石森について押さえておかななくてはならない。そのため、まず石森の生い立ちや経歴を簡潔に記すことから始める。

尚、満洲における石森の事跡の詳細は、「石森延男年譜」（「資料編の〈資料4〉」）、「石森延男著作目録」（「資料編の〈資料5〉」）、「大連詳細図」・「石森延男在満ゆかりの地」（「資料編の〈資料6〉」）を参照願いたい。

一 誕生から渡満まで

石森は、一八九七（明治三〇）六月十六日、北海道札幌市南六条西九丁目に、父和男、母辰子の長男として生まれる。二人の姉（安代、春野）がいた。「延男」の名は、父和男の依頼で、親友である落合直文が、「ますらをの手にとる征矢のひとすじにのびよとぞ思ふ軒の呉竹」という歌をそえて命名した。

父は、宮城県登米郡石森神社の子として生まれ、伊勢国神官教院本教館と東京帝国大学古典講読科（中退）に学び、ひたすら短歌を愛し、放浪詩人となって北海道に渡る。父は、一八九六年五月から札幌師範学校で教鞭をとったが、一九〇四年三月、師範学校の生徒が起こした事件（石狩事件）のため、職を辞し、札幌市郊外山鼻村百六十七番地に移り住む。

一九〇〇年（三歳）、弟邦男誕生。一九〇四年（七歳）、石森は北海道札幌師範付属小学校に入学。一九〇七年七月（十歳）、父は、世話する人があって札幌税務監督局に勤めていたが、樺太庁に単身赴任する。同年、弟友男誕生、姉安代嫁ぐ。一九一〇年一月（十三歳）、

父、文官分限令に依る休職となり樺太から帰り、北海道庁立札幌第一中学校と庁立札幌高等女学校に勤務。同年、石森は札幌師範付属小学校高等科に進む。一九一一年（十四歳）、かねてから心臓病を患っていた母辰子死去。母の死は幼い心に刻みつけられ、後年文学への道しるべとなる。

一九一三年（十六歳）、石森は札幌師範学校に入学。姉春野嫁ぐ。一九一六年（十九歳）、姉安代急死、脳溢血で療養中であつた父和男死去。石森は、札幌師範学校在学中、校友会誌「誌友」を編集。

一九一七年（二〇歳）、札幌師範学校卒業後、札幌市立北九条小学校に赴任。二年後の一九一九年（二二歳）、東京高等師範学校文科第二部（国語・漢文・教育）に入学。担任は松井簡治、童話童謡を藤森秀夫、葛原しげるに、詩を正富汪洋に学ぶ。他に、吉田彌平、諸橋轍次、保科孝一、垣内松三、比田井天来などの諸教授に教えを受ける。口演童話に興味をもち、大塚講話会に参加する。一九二一年（二四歳）、二月に末弟友男病没、十一月に弟邦男病没。相次ぐ肉親の死に、学業意欲を失い退学を決意するが、担任の松井簡治に励まされ思いとどまる。桐花寮の雑誌部にて「校友会誌」を編集、同室に池田亀鑑、中西清、五味保義等がいた。

一九二二年（二五歳）、岡藤緑と結婚、東京巢鴨に新居を構える。一九二三年（二六歳）、東京高等師範学校卒業後、愛知県渥美郡田原町の成章中学校に赴任。四月、長女のみち誕生。一九二四年八月（二七歳）、香川師範学校校長石川義次に招かれ、同校に転勤。十一月、長男曙峰（あけお）誕生。

一九二六年一月（二九歳）、『慕はしき人々』（培風館）を、東京高等師範学校の恩師吉田彌平の序文を得て処女出版。この年の四月、石森渡満。一九三九（昭和十四）年三月に離満するまでの十三年間を旧満洲（現在の中国東北）の関東州大連で過ごす。

二 渡満の動機

石森は、一九二六（大正十五）年四月に渡満、関東州大連にあった南満洲教育会教科書編集部（以下「教科書編集部」）に赴任する。教科書編集部での石森の活躍を述べる前に、渡満までの石森の経歴について、確認しておきたい。

石森は、札幌市立北九条小学校で二年間（一九一七年～一九一九年）、愛知県田原の成章中学で約一年半（一九二三年～一九二四年）、香川師範学校で一年半（一九二四年～一九二六年）、教鞭を執っている。さらに、渡満直前には、少年少女向けに日本古典・中国古典案内を物語風に書いた『慕はしき人々』（培風館）を出版している。つまり、渡満時の石森は、小・中学校及び師範学校で教師としての経験を積んだ若き教育者で、石森なりの教育観を持っていたと考えられる。さらに、少年少女向けの古典案内を書く程、日本と中国の古典に精通していた研究者であった。これらの経験を土台として、石森の満洲での活躍は始まるのである。

「わたしの渡満動機は、満洲に憧憬したのではなく、教科書編集部の副主事赤塚吉次郎が中国留学を命ぜられたあと埋めにいくようにと（東京高等師範学校の）恩師諸橋轍次先生のすすめによったものである」²。後年、石森は渡満のいきさつをこのように述べている。さらに、渡満時の心境及び、満洲の地に足を踏み入れた時の印象を、『満洲日日新聞』紙上で次のように述べている。

満洲の自然は殺風景だと人はいふ。そこに住む人々は、いつもすすんでゐるといふ。この春、渡満が決定して、いよく横濱を下瀬するとき、私は、この言葉を思ひだして心を暗くした。しかし、一たび、この満洲に足をおろした時、この言葉は、何の力もない空虚なことを知つて、まあよかつたと思つた。ど

うだ。透明な空気を透してひろげられた曠野 雲の影をうけて紫紅色（パープル）に輝く山の肌。河か路、どちらともつかない遠白き路、應揚にかけまはる群雀 内地ではみられない快明と晴朗と廣潤とがただよつてゐる。³

自ら望んだ渡満ではなかったが、一たび、満洲の地に渡ると、その自然にたちまちに魅了されたという石森の言葉に偽りは無いと思われる。札幌で生れ育った石森にとって、満洲の自然はどこか故郷を思わせる所があつたのではないだろうか。

三 満洲時代

（一）教科書編集部時代

六年余りの教科書編集部時代は石森にとって、満洲での活躍の基礎であり、その後の石森の教育者・児童文学者としての方向を決定づけた時代であつたと筆者は考えている。

一九二六年四月、石森（二九歳）は、当時の関東庁と満鉄の合同組織である教科書編集部に赴任する。担当は「国語・日本語・歌詞」、所属は「関東庁」、在任期間は一九二六年四月二六日から一九三二年十一月九日までであつた⁴。教科書編集部での石森の主な仕事は、国語の副教科書である『満洲補充読本』の教材執筆及び編纂であつた。さらに、中等学校日本語科編輯員（一九二六年五月一日～一九二七年三月二日）、公学堂修身科編輯員（一九二七年五月三日～一九三二年十一月九日）をそれぞれ兼務している。教材作成に当たって、石森は次のように述べている。

まず満洲各地にでかけていって調査をつづけ、できるだけ実

地と見聞をし、現実の生活に密着したものを記述することにとめた。⁵

石森は、教科書編集部公的な仕事をしながら、一方で、在満の雑誌や新聞に、精力的に文章を発表する（「資料編の〈資料5〉」の「石森延男著作目録」参照）。

満洲で最初に活字となった石森の著述として現時点で確認できているのは、「日本文学私語（一）——宇治十帖にひそむ悲劇生^{ママ}」という論考である。この論考は、植民地満洲の教育を担った「南満洲教育會」発行の教育雑誌「南満教育」（六三号 一九二六年八月十五日）に掲載された。石森が、東京高等師範学校で、「国語・漢文・教育」を学び、さらに少年少女向け日本古典・中国古典案内『慕はしき人々』を出版していることを考えると、最初の寄稿が、日本古典文学に関する内容であったのは、当然ともいえる。また、在満の多くの教師がこの雑誌の読者であったことを考えると、教材研究の一助として読まれることを石森は意識していたとも推測される。以後、石森は、「南満教育」にほぼ毎号寄稿している。内容は、日本古典文学、ものがたり、アイヌ伝説、雑感等である。

また、石森渡満の年（一九二六）の五月に満洲で創刊された家庭教育雑誌「愛兒と家庭」（大連奨学会・「資料編の〈資料7〉」）にも寄稿している。現時点で確認できている石森の著述は、「ある燈臺守りの話」（一九二六年十一月）⁶である。この作品の掲載は十一月であるので、この作品以前にも寄稿していることは十分考えられる。石森はこの雑誌にもがたりや童話、エッセイを寄稿している。しかし、筆者は、この雑誌については、四冊しか確認できておらず、この雑誌に掲載された石森作品の全容については、現時点では不明である。

さらに、満鉄社員会の機関誌「協和」（一九二七年四月創刊）にも

寄稿している。この雑誌の読者対象は、満鉄の社員とその家族で、記事内容は、政治、経済、満鉄の運営方針から、家庭、文芸、スポーツまで多岐にわたる。石森は、この雑誌には、主に、ものがたり、童話、学校劇等を寄稿している。

満洲で発行された雑誌への寄稿と同時に、石森は、在満日本人児童・生徒のための雑誌を私費で刊行し、文芸同人誌を主宰している。

満洲中等学生読物「帆」（学期毎。一九二七年一月～一九二八年十二月、全六冊。「資料編の〈資料8〉」を発行。昭和天皇即位を祝し、「帆」の増刊として、「御大典記念」の「小學生よみもの満洲野」（季刊。上學年用と下學年用。一九二八年六月～一九二九年二月。全八冊。「資料編の〈資料9〉」を刊行。さらに、小学生向けリーフレット「ます野」（月刊。第四号より初級用・中級用・上級用の三分冊。一九二九年五月～一九三〇年三月。全二四冊。「資料編の〈資料10〉」を刊行する。また、文芸同人誌「童心行」（月刊。一九三〇年一月～一九三四年六月。全四四冊。「資料編の〈資料11〉」）、童話同人誌「新童話」（月刊。一九三〇年五月創刊、一九三二年九月「郷土満洲」と改題。一九三二年十一月終刊。全五〇冊（推定）「資料編の〈資料13〉」を主宰している。

一九三〇年十一月、石森は千葉県三、酒井朝彦、水谷まさるらの「童話文学」の同人になる。

石森は、中日文化協会発行の雑誌「満蒙」に小説「波濤社」（一九二九）を四回にわたり発表。父の遺稿集『谷廼葦切』（一九三一）を自費出版し、『まんちゅりあ』（二巻・満洲読物研究会・同年「資料編の〈資料12〉」、最初の童話集『どんつき』（新童話社・一九三一）を出版している。

石森は、満洲に渡り、その地の自然に魅了された。教科書編集部

の副教科書編纂事業に意義を覚え、精力的に執筆・編纂に携わった。在満の日本の子どもたちの置かれている文化的状況が、内地製のお

仕着せで、現地の実情とかけ離れていることを痛感し、満洲での雑誌発刊、満洲読物の出版を行った。その石森の活動に共感する教科書編集部メンバーや初等教育者が集まり、満洲で創作を中心とした児童文学活動が興った。石森は常にその活動の中心におり、そしてその活動を通して、石森は自身の創作スタイルを確立していった。石森にとって、教科書編集部時代とは、石森のその後の教育者・児童文学者としての人生の基盤を作った時代であった。だが、一方で、石森らの活動は、満洲に対する郷土愛育成という、満洲植民地化の国策を推進する一面を持っていたのである。

(二) 視学時代

一九三二（昭和七）年十一月、石森（三五歳）は、教科書編集部（一九三二年十一月九日解嘱）⁷から大連民生局地方課学務係に転勤、視学として約三年半勤務する。芸術肌で文学者の石森の視学就任は、周囲を驚かせたようだが、文学仲間たちは次のような期待を寄せている。

人情味の豊かな人であり、感激に燃え立つ人であり。そして努力の人である。常に濁った人間に對する反抗があつて正義に向つては飽く迄猛進しようとする強さがある。私は創作家として期待する外に、視学としても大きな期待を持つてゐる。（政本勇）

「今、いたるところで、石森さんは、大連教育界のシミヌキをしつゝある」と、僕は考へてゐる。（中略）不純なものをどんくひつぱがして、ほんとに自然な温味のある、美しいものをのみ育てゝてゆきつゝあるのであり、さうすることに努力してゐなさるのだらうと僕はみてゐる。（中略）つらい仕事ではあらうけ

れども、目鼻のつくまでは頑張つてやつてもらいたいものと、切望するものである。（平方久直）⁸

視学時代の石森は、視学という役職を精力的にこなすと同時に、国語教育者として、児童文学者として、文化人として、植民地の教育・文化の育成に全面的に関わっている。

視学就任後、「満日」紙上で教育に関する記事に石森の名前がしばしば登場する。

石森は、一九三三年六月から一ヶ月にわたり、内地の小学校を視察（東北地方、関東、関西）し、その時の視察報告が「満日」紙上で、「勤労しつゝ學ぶ貧しい内地児童―大連の子達より遙に深刻だ石森視學のお土産話」（一九三三年八月八日付）という見出しで掲載されている。東北では教具もろくにない貧しい農村の小学校、東京では豪華な小学校、大阪では作業に従事しながら学ぶ勤労学校を見学している。

さらに、例えば、「先生を偶像化するな 寧ろ反省の指針とせよ―教育者も人間」（一九三四年二月九日付）、「入・試問題寸感」上中下（一九三五年三月九日・三月十二日）、「いかに見るべきか『映画』の利用法 題目に眩惑されるな！いゝものを数少くみせる」（石森延男氏談一九三五年八月十八日付「満日日」）「秘訣を語る 心遣ひ一つでめきめき伸びる 家庭と關係の深い 綴方・勉強法」石森延男氏談「満日日」一九三五年十月四日付）等がある。

また、石森は多忙な公務の合間を縫って、朝の読書会を開催し、出勤前の一時間、常盤小学校で大連市内の教師たちを対象に古典文学の講義（『奥の細道』）を行っている。

一九三四年七月十四日、「満洲文庫」全十四篇（―一九三五年七月二五日）のうちの第一篇「風俗」篇『まんしうの子ども』『満蒙の風物』（東洋児童協會）が刊行される。日本人児童のための課外読物と

して編まれた満洲百科的な内容で、自然科学、社会科学、文学を網羅した満洲初の叢書である。編輯人は石森、執筆者は、満洲、主に大連在住の初等教育者たちである。編集者として、リーダーとしての石森の素質が発揮された仕事であるといえる。第一篇が刊行されると、すぐに「満日」紙上で、「児童郷土讀物の高峰」「家庭には必ず備ふべき良書」(一九三四年七月二二日付)として紹介される。「満洲文庫」については後述する。

石森の同人雑誌や一般雑誌との関わりは、視学就任後も続くが、童話同人雑誌「新童話」は、石森の視学就任と同時に、「視學といふ名前が純潔な新童話の上に一點のしみを作ることを恐れ」¹⁰た同人たちの意向で停刊する。

しかし、石森は新たな同人誌の発刊を計画し、いくつかの雑誌に関わっている。

大連発行の「國語と教育」(一九三二年六月創刊)という雑誌がある。編輯人は政本勇。政本は小学校教師で、石森の文学仲間であり、前述の童話同人誌「新童話」でも中心的存在であった。石森は、「國語と教育」の主な書き手の一人である。これらのことから、「國語と教育」の発刊に石森が関わっているであろうことは十分考えられる。

一九三四年八月「満日」紙上に、「石森延男氏を中心として近く大連から文藝同人雑誌『微風』が創刊される」と報じられている¹¹。筆者は現物未見であり、「石森スクラップ」にもそれらしい記事がなく、実際に刊行されたかどうかは不明である。また、同年九月二五日、日語讀物「友邦」(月刊。東洋児童協會発行)が創刊され、編輯人として石森延男の名前がある。「友邦」¹²に、石森は主として童話を掲載している。

一九三五年四月、大連で同人誌「童話作品」(「資料編の(資料14)」参照)が発刊される(終刊日は不明・一九三七年五月の発行まで確認できている)。この「童話作品」は「新童話」の流れを受け継ぐ雑

誌である。創作童話・童詩・童謡・児童劇・評論・隨筆等が掲載されている。「満日」紙上の「満洲童話界に聴く」(一九三六年三月)という連載記事の中で、石森は「童話作品」発刊及び発刊前後の満洲の児童文学状況について次のように述べている。(引用文中の×印は印刷不鮮明箇所)

(前略) 日本で、明治初年から、今にいたる童話進展の道ゆきが、この満洲では、ほんの十年ばかりの間に移し植ゑられようとしてゐる。この勢ひでいくとあと數年のうちに×の方が母木よりも、背高く伸びていくかもしれない。

今、日本で童話雑誌と名づけられるものが、二つある。一つは、酒井朝彦君の主宰する「児童文學」と、もう一つは、政本勇君の手になる「童話作品」である。満洲で童話を書く人たちは、この「童話作品」に據つてゐる。(中略)

昨年、小川未明氏に逢つた時に、商品化されない童話誌の刊行を語り合つた。これがたまたま「童話作品」として生れた。

(中略)

植民地は、やゝもすれば、精神文化がとり残されようとするのに、満洲では、児童文化の一面が、童話なる道によつて、いちはやく拓かれていつたことは、特異なことゝいはねばならぬ。(後略)¹³

この文章から、満洲児童文学活動は内地の活動となんら遜色ない、むしろそれを凌ぐ勢いで成長しているということ、そして、満洲の児童文化を先導してきたのは自分たちの活動であるという、石森の自信や自負が感じられる。「童話作品」は、一九三六年十月より東京の鳩居書房で発行される。石森ら、在満の作家たちにとって、東京での出版は悲願であつた。それは、自分たちの創作活動が内地で認

められたことを意味しているからである。「童話作品」掲載の同人作品は、のち、『童話作品第一輯 一つぶの豆』¹⁴という書名で鳩居書房から出版されている。

この時期の石森の単行本に、『第二まんぢゅりあ』二巻（「小學一二三年用」「小學四五六年用」一九三三年三月二五日 新童話社「資料編の（資料15）」、『母の思い出』（一九三五年六月 自費出版）、『童話集 お母さん』（同年七月 東洋児童協會）がある。いずれも大連で出版されている。さらに、西原慶一のすすめで、石森は『綴方への道』（啓文社・同年十一月）を東京で出版している。『綴方への道』出版は、石森の国語教育者としての仕事の成果である。

また、石森は大連のラヂオ放送とも深く関わっている。「童話作品」同人らと「子供の時間」中継のラヂオ・ドラマや童話を「改善し子供の情操教育に資するために」として「子供のためのラヂオ・ドラマ研究会」を発足させている。¹⁵

この他、石森は、「人形使節歓迎歌」（石森作詞・園山民平作曲 一九三三年六月七日）、「軍隊歓迎迎の歌（小學生のために）」（石森作詩・園山民平作曲 一九三六年）を制作している。

視学時代の石森の活躍は、新聞紙上における教育に関する発言、教師の育成、国語教育の充実、満洲初の叢書「満洲文庫」の発行、児童文学活動、ラヂオ放送への積極的な関わり、時局的な行事に対する作詩等、多方面にわたる。石森にとって視学時代は、植民地満洲の教育・文化の育成・発展に全面的に関わった時代であったといえる。

（三）大連彌生高等女学校教諭から文部省図書局図書監修官へ

石森は一九三六（昭和十二）年五月（三九歳）に、大連彌生高等女学校（以下「彌生高女」）に転勤する¹⁶。視学を辞し、彌生高女の

教諭に転じた理由は定かではない。石森が所属していた大連民政署が翌年に廃止（一九三七年十二月一日「廃庁式」）されることと関係しているのかもしれない。因みに、石森の長女のみちが、前年に彌生高女に入学している。

彌生高女の石森はどんな教師であったのか。

「石森延男児童文学全集」（第14巻 一九七一年）に「受持ち生徒たちとピクニックにいった」と題され、女生徒たちに囲まれたにこやかな石森の写真が掲載されている。『石森先生の思い出』¹⁷に彌生高女時代の教え子の寄稿が掲載されている。それらの文章から、石森の彌生高女時代の姿を追ってみる。入学式の思い出を語った文章に、生徒を信頼し、生徒の信頼に応え、「生徒自身の自覚のうえにたった可能性の芽を、信念と真心と深い大きな愛情」（大石美恵子「少女時代」一〇九頁）で育てようとした石森が語られている。ドイツ合作映画「新しき土」を鑑賞した後の国語の時間に、石森は、制作者の意図、登場人物の心理分析、全体と個、生きるという事の尊厳を説いた。その姿に「世の時流がどうであろうと、子どもたちをまっすぐに伸ばす」ことに一心不乱な教師の気魄を感じた（田辺幸子「先生とF・I、F・O」一一一・二頁）とある。いつも「人間の尊さ」を説き、「どのようなことが身の上に起ころうともけつしてくじけてはいけないよ。勇氣と誠実そして自分さえ信じておれば恐れることはないさ」という石森の言葉を忘れることはできないと語る者もいる（小田珠子「すみれの花」一一三頁）。これらからは、愛情をこめて真摯に生徒に向き合い、何十年経ようとも教え子に慕われる続ける先生像が浮かびあがってくる。

石森は、彌生高女の交友会誌に映画寸評等を寄稿している。その分析は本格的で鋭い。また、「やよひ図書だより」（NO1）に発刊の辞（「発刊によせて」）を寄せている。

これら公務の他に、石森の文学活動は彌生高女に転任後も精力的

であった。同僚で、かつての「童心行」の同人である柳生昌勝と少女雑誌「日本少女」を発行（発行時期は不明・三号で終刊）している。さらに、一九三八年四月には、同人誌「装」（一九三九年十一月終刊）（資料編の〈資料18〉）の発刊に関わっている。「装」は月刊誌で、同人には、「新童話」「童話作品」からの文学仲間が名を連ねており、柳生昌勝は、彼ら同人たちを『「新童話」から「童話作品」に進み、現在は『装』として結束をつづけてゐる石森延男氏を中心とする一群の作家たち』¹⁸と称している。石森は、「装」に毎号、作品（「坊やのアラビアン・ナイト」他）を載せている。

また、石森は、「満洲婦人新聞」の「子供の読書欄」新設にともない、この欄の記事の選択や論考掲載を担当している¹⁹。

彌生高女時代の石森は、満洲にあつて、教育者として文学者として、文化人として揺るぎない立場にあつたと考えられる。

石森は、「満洲日日新聞」の横田氏から「満洲の子どもを主題としたものを書いてほしい」と頼まれ、新聞小説「もんくうふおん」を書く。「もんくうふおん」は、一九三九年三月十四日から五月三日まで「満洲日日新聞」の夕刊に連載される。その連載中、石森に三月二九日付電報辞令で、文部省図書局に図書監修官として転勤の命が下る。離満の日、石森一家を見送る人々で大連埠頭が溢れんばかりであつたという²⁰。

石森の転勤は、「サイタ サイタ サクラガ サイタ」で始まる、いわゆる「サクラ読本」を改訂するにあたり、そこに満洲教材を入れる方針がたてられたことによるものであつた²¹。その経緯について、詳しい記事が二編、「石森スクラップ53」にある。二編とも出典等は不明であるが、いずれも新聞記事のようだ。

その一編は、「詩人肌で満洲通の石森延男君 文部省圖書監修官（人物の片影（七二七）」という記事で、石森の人物紹介である。これによると、文部省で図書監修官の補欠（大岡国語監修官の北支

転任 筆者注）及び増員が行われ、石森が抜擢されたのは、「満洲事情に精通」していたからで、「國定讀本の大陸的材料に、新鮮味と充實さを加えるであろうこと」を期待されたのであつた。

もう一編は、「大陸から乗込んで来た新國語監修官 ◇石森延男氏の意気◇」という勇ましい見出しの記事で、石森の談話も紹介されている。それによると、石森の仕事は「新讀本卷十二にひきついで、高等小學用國語讀本」の編纂で、「大陸を睨んでの編纂ぶりは大いに注目されてゐる、流石に大陸の風に吹かれて帝都に來ただけに、その覺悟ももの凄く、大陸ッ兒の顔にかけてもヘマはやれないとばかりの元氣である」と書かれている。教科書に満洲ものを取り入れる仕事は、石森がこれまで携わってきた経験にもの言わせることである。張りきらずにはおれないのも最ものである。

同記事で、石森は「内地に來ての感想」を次のように述べている。

（前略）内地の都會の人の氣分は大へん悠然としてゐますね。事變下であるとは思へん程呑氣なやうですね。もつと時局に對して身を以て感じ緊張して行ふところがあつてよいと思ひますね。

こう述べた後、石森は内地の教育を次のように批判している。

（前略）教科目の改廢を斷行して、生徒も先生も知的なものを詰め込む爲の負擔を軽くした方がいゝ（中略）もつと子供たちに創造・發展出來る餘地を與へなければなりません（中略）天才教育が必要の時代です。創造力を養成して、潑刺と伸びるで^{ママ}欲を培つてやる必要があります。（中略）大陸のことを考へないで、せゝこましい教育界だけの内部を見てゐるものだから、かへつて教育が徹底しないことになるんでせう。大陸は廣いで

すよ、教育も廣いところへ着眼して、もつと大らかにゆとりをもつて、創造を生むやうになるといいですね。

日本の教育を大きな視点で見ると、この石森の「大陸的視点」は、在滿十三年間の教育活動・文化活動によって形作られたものであったろう。石森は、在滿時から常に、受験の為の知識の詰め込み教育を批判してきた。「創造力を養成して、潑刺と伸びる欲を培う」教育が大切であるというのは、石森の教育の信念でもある。石森が課外読物として、子ども向けの雑誌の発刊にこだわってきたのもそのためである。読書によって、様々な感性が培われる。それはとりもなおさず、創造力の養成であつた。

帰国した石森は、新聞連載の「もんくーふおん」に大幅な加筆をして『咲きだす少年群』（一九三九年八月・新潮社）として出版する。翌年二月、『咲きだす少年群』は新潮社大衆文芸賞を受賞する。

石森は、帰国後も満洲と関わり続ける。そして戦後も、満洲時代に対して特別な思いを持っている。離滿以降の石森については別稿で論じる。

第二章 満洲中等学生読物「帆」

はじめに

教科書編集部時代の石森の児童文学活動の一つとして、「帆」を取り上げるのは、満洲で初めて刊行された中等学生向け雑誌であること、石森が渡満して初めて主宰した雑誌であり、満洲における石森の児童文学活動の出発点だと考えられるからである。ここでは中等学生読物「帆」の目指したものが何かを探る。

一「帆」の概要

(一) 書誌事項

「帆」は、一九二七（昭和二）年一月二十日創刊。一九二八（昭和三）年十二月三日終刊。学期毎の発行で全六冊。発行人石森延男、編輯人高橋庸男（ただし「VOL3」より編輯人は黨鉈磨）。満洲学生読物研究会発行。表紙及びカットは高橋庸男。縦一九四mm、横一三四mm、背幅十三mm（「VOL2」原寸による）。購読者数は約一二〇〇名。大連、安東、奉天、鞍山、長春、旅順、撫順にある中學校、高等女學校、商業校の生徒らが読者。奥付には「非賣品」とあって、店頭では販売されていない。購読者募集、配布、集金は各校国語教師によった。実費として一冊五十銭で頒布。「帆」が「VOL6」で終刊に至った理由は購読者の減少により、刊行の継続が困難になったためだと考えられる。同人は八名（誌上で同人と明記されている七名―石森延男、今永茂、浦田繁松、多架土作、高橋庸男、谷山靜生、湯下誠一郎―に「VOL3」より編輯人となった黨

鉈磨を加えた）。同人の他に、執筆者は、広く在満の、中等学校の校長、教員、行政の教育関係者、及び、内地の教育関係者、石森の友人等多数にのぼる。また、生徒作品も多数掲載されている。書き手、内容いずれも満洲を前面に出している。

(二) 発刊動機

「帆」が実際に刊行されたのは、一九二七年一月であるが、石森が「帆」の発刊を思い立ったのは、もっと早い。それは、一九二六年十一月の時点で、「満洲日日新聞」（一九二六年十一月九日―十一日）に石森の名で「郷土愛、生活愛、讀書愛 満洲中等學生讀物「帆」の発刊動機について（上中下）」という文章が掲載されていることから分かる。この文章では、「帆」の発刊についてかなり具体的に述べられている。

では、「帆」の発刊動機はどういうものであったのか。その動機は三つある。

一つは、「郷土愛」の育成である。十一月九日付掲載の文章（「上」）には次のように書かれている。

（前略）近代移民の多くは、打算瞑想に溺れ黄金禮讃の實證論者であつた。そのために、我が國の植民地には、忌むべき植民地氣分が發酵している。わが満洲は、果してこの忌むべき氣分に満たされてゐるかどうか。私は、次の三項目によつて、満洲に於ける郷土愛を若人たちに培ふことができると信じる。

（一）は、満洲に關する自然科學の研究 「知」を「愛する」ことから、産土を親しむことまでに進む賢き昇天。

（二）は、満洲に於ける自然美の探究。心の眼を開いて、蒼空に羽ばたく天使の姿を見ること。

(三) は、思ひきり原始的素朴性にたちかへる。そこには、満洲に主材を得た、口碑も傳説も民謡も生れるであらう。要は、熱である。わが土地を想ふ熱の強さである。「帆」は、満洲に住む若人たちにあくまで郷土を愛すべき念を育てようと植ゑつけられた光輝ある一粒の種である。²²

「忌むべき植民地氣分」を排除した、新しい植民地意識の樹立とはどういうことか。それは、郷土として植民地を愛すること、この場合は、満洲を愛することである。「帆」発刊の動機の一つは、満洲の日本人少年少女たちに郷土を愛する思いを持たせることであつた。郷土愛を育てるには、満洲の自然に対する研究、満洲の自然美の探究、そして満洲を郷土として愛することによって、満洲を題材とした物語や歌謡が生まれると石森は述べる。

ここで筆者が疑問に思うことは、この三項目の中に、その地に住む人間への視点が抜け落ちてゐることである。郷土愛というものは、生活の中で育まれるものである。とすると、当然ながら、そこで暮らす人間同志の関わり合い、人情なるものも含まれるべきである。

二つ目は「生活愛」である。ここで言う「生活愛」とはどういうものか。十一月十日付掲載の文章(中)に次のように書かれてゐる。

現在の日本に於ける學徒は、見えざる桎梏に呻吟してゐる伸びるべき正しき方向に伸びることのできない不自然が、やがては、病的な壓縮のもとにいちけてしまふ。初等教育から、中等教育にうつらうとする、子女たちは、(中略)早くもこのうつり目に於いてはかなき投機精神に目覺めてゐる。さらに中等教育から高等教育に登るべき時には彼らは少なくとも快活さに息づくべき青年子女は、ここで立派な憂鬱患者であり、可憐なる百

科全書である(中略)今少し、おのが現在の生活をふりむいてみようではないか。(中略)「帆」はせめて、このおちつきのない中等學生のために、ほつと息づかせるために設けられた公園の四阿であり、沙漠の緑地でありたい。(後略)²³

ここで、石森が言おうとしているのは、生徒たちは受験勉強に追われ、若く澁刺たるべき學生時代を無味乾燥に過してゐる。「帆」発刊の動機の一つ目は、彼らに暫しの憩いを与える雑誌を目指すというのである。

三つ目は「讀書愛」である。「讀書愛」とはどういうものか。十一月十一日付掲載の文章(下)に次のように書かれてゐる。

多く讀むものは、よく肥る。讀むために、自然や人生に對する理解が洗練され、博大な見識は養はれその思想は自由を得て立派な人格にすゝむ。讀むことは、いゝ。けれども若きものにはその讀物の選擇が必要である。このごろの出版物は商業政策の捕虜となつてゐるために、たゞ讀者に媚び、流行にひきづられる。具体的にいへば、感傷主義の横行、社會裏面の暴露、あくどい性理衛生記事。(中略)これら讀物の悪い風潮を抑制しようとする教育的運動は、不幸にして未だに着手されてゐない。新しくよき讀物を製作してゆかうとする企圖などはさらにない。(中略)「帆」は小さいものだ。けれどもこゝに見かねて生れた健げな闘士であり雄々しい騎士である。(中略)「帆」は、彼等のために、生々した心根を表現し得る活舞臺にしてゆきたい。(後略)²⁴

「帆」発刊の三つ目の動機「讀書愛」とは、商業ベースに乗らない、若者たちに滋養となる読物を与えること、さらに彼等にとつて

自分たちの思いを表現する場を与えることである。「帆」はそんな雑誌を目指すということである。

満洲に対する郷土愛を育み、日々の生活に潤いと憩を与え、読んで滋養となると同時に若者の思いのたけを表現できる場としての「帆」の役割を、石森は、「郷土愛、生活愛、讀書愛」と表現したのである。

では、石森は、なぜ郷土愛にこだわるのか。また、郷土愛の育成に、なぜ雑誌発行という形をとったのか。その答えは、戦後、石森が書いた「満洲児童文学回想」²⁵の中に見つけることができる。そこには次のように述べられている。

（前略）大正の終りころは、満洲にかなりの日本人子弟がいたはずだが、地もとから生れた読物はまず皆無であったといっている。読物があるとすれば、それはことごとく日本内地から送られてくる雑誌の類であつた。満洲の土地に生れ、ここで育ち成長する少年少女たちに日本内地製（東京）の読物ばかりを与えていては、ついに故郷に親しむ手がかりすらなくなり、いたずらに日本内地（東京）にあこがれる気持になるばかりで大地に足のつかない浮草的不安定な生活者になるだろう。（中略）そこでどうしても郷土満洲を肌で理解させ、愛着を持たせなければということを感じ公の機関でこの情熱を具体化したものが「満洲補充読本」である。といつても教科書はもとも一定の分量に抑えられるものであり、ひとたび編集が完了すれば数年間はそのまま使用される運命をもっている。このように形式上固定した読物では、とうてい子どもたちの心情を満足させ郷土愛など耕し得べくもない。そこでではじめて教科書以外の児童読物というものをこの土地から育てなければならぬと痛感し、志を同じうする連中と語りあう機運が到来してきた。（後略）

生れ育った地に愛着を持つことによって、人は地に足をつけた生活を営むことができる。郷土愛を育てるには、その土壤に根ざす生活から生れた読物でなくてはならない。しかも、生活は日々変化し続けている。一定の定められた分量でしかも形式上固定した読物である教科書では、その変化を充分に反映させることは難しい。そのためには教科書以外の児童読物が必要であるというわけである。それは、単行本であつてもかまわないわけだが、石森が取ったのは雑誌という形式であつた。それはなぜか。筆者の推測にすぎないが、時代の変化はより雑誌の方が反映しやすく、しかも出版が安価で容易、出版回数も多く、多数の執筆者が参加できる。また、買い手にとつても安価に手に入るといふ利点があるからではないだろうか。

（三）「帆」発刊に至る経過

満洲で初めての中等学生向け雑誌の発刊について、石森は「編輯後記」で次のように書いている。

（前略）「帆」が、この世に生れました。生れ出るまでの苦しみや悩みは、今さらいふまでもない、その苦しみを大げさに言ひたてゝ同情を買つたり、立派なものだといふ裏書きにしたり、などはしたくない。第一號だからまだ く 缺けたところがあるろう 讀者たる皆さんにいろ く 註文してもらひ、希望を遠慮なく申しでゝもらはう。（二八一頁）

石森は、発刊にこぎつけるまでの苦勞を言いたててることをしないで、「第一號だからまだ く 缺けたところがあるろう 讀者たる皆さんにいろ く 註文してもらひ、希望を遠慮なく申しでゝもらは

う。」と謙虚に述べて、読者の参加を促している。創刊号の編集に、どれほど細心の心配りがあったかは、執筆者の顔ぶれ、構成と内容に十分現れている。その点、石森にとっても自信作であったろう。だが、石森の、雑誌の更なる発展を願うての思いがこういう表現になったと考えられる。

植民地満洲では、今まで誰もしなかった中等学生向けの雑誌の刊行である。決してすんなり実現できたものではなかった。「缺损するからよせ」といった人、つぶれるからやめろといった人、盲目蛇だといつて無謀を笑ってくれた人、これら忠言にさからってまでもやりだした「(同上)」という。一方で「帆」の發刊をきいた友だちが、あゝまでに喜んでくれるとは思はなかつた。各學校の国語科の先生方もみな賛成して下さった「(同上)」とある。石森の背中を押してくれた人々もいたのである。

石森は、「帆」を非売品として、各學校の国語科の教師を通じて、生徒へ頒布している。その理由として、次のように述べている。

(前略) 商店の棚にごちやくと並べられたり、いゝ加減なひやかし連中に、立ち読みされたりするのにしのびないからである。心から静かによんでくれる人々にだけ分ち與へたいねがひからである。(一八一頁)

ここには、活字至上主義ともいえる石森の考え方があってはなにか。石森は多作である。その時々を思いを活字にしたかのように、多くの作品を書いている。そして、石森は、自分の作品に強い愛着を持つていたかのように、何年経ても自作を何度も転載している。この「帆」の刊行に際しても、生半可な仕事ではなかつたであろう。石森にとっては、純粹に在満の中等学生のために編んだ雑誌であつたのだ。それだけに、必要とする人、つまり、在満の少年少

女たちに直に届けたいという思いがあつたのかもしれない。

石森はさらに、こう述べる。「中等學生のためにこんな讀物ができたのは、日本では滿洲が最初のことです。これだけでもお互いの肩味^{ママ}がひろいと思ふ。」ここに、在満の日本人少年少女に滿洲は決して内地に劣つてはいないという自負を持つてもらいたいという石森の思い、そして、滿洲から内地に向けて新しい文化を発信していくんだという石森自身の氣構えが見てとれる。

(四)「帆」全六冊について

表1 「帆」全六冊 書誌事項

号数	概要
V O L 1	扉―「關東廳學務課推薦」「滿鐵學務課推薦」「滿洲中等學生」「讀物」「帆」 「VOL 1」 目次四頁 口繪(セザンヌ「冬木立」・有島生馬著『セザンヌ』より抜粋した文章) MANCHURIA CHORUS二曲 I「吹くか北風」II「曠原」 (園山民平作曲・石森延男作詩) 本文一頁〜一八二頁・奥付 一九二七(昭和二年)一月二十日發行

号数	概要
VOL 2	扉―「満洲中等學生」「讀物」「帆」「VOL2」 目次四頁・口繪（クールベ―作品・解説） MANCHURIA CHORUS 二曲（石森延男詩・村岡樂堂曲） A「ゴールテ―プ（男聲三部曲）」 B「唐告天子に寄す（女聲三部曲）」 本文一頁〜一九〇頁・奥付 一九二七（昭和二）年五月二十日発行
VOL 3	扉―「満洲中等學生」「讀物」「VOL3」 目次四頁・口繪二枚（希臘競技者男性彫刻・ローマ市法王宮美術館藏・矢代幸雄氏著 『西洋名彫刻より』 抜粋の説明文）及び（THE SISTERS） PEACOCK・RALPH作） MANCHURIA CHORUS 「野そだち」（石森延男詩・島田英雄曲） 巻頭詩（スワローダイビング） 本文一頁〜二二五頁・奥付 一九二七（昭和二）年九月二五日発行
VOL 4	扉―「満洲學生讀物」「帆」「出版一週マ年記念號」「満洲野（ますの）」「郷土讀本」「VOL4」 編輯趣意六頁 ―『満洲野郷土讀本』を編みあげるまで―先生や父兄の方へ― 石森延男記 目次三頁 口繪四枚（窓の少女）レンブランド筆 矢代幸雄著『太陽を慕ふ者』より 抜粋の説明文・「遼陽白塔」杉野一湧筆 木下奎太郎著『支那南北記』より抜粋の説明文・ 「鳥籠もてる人々」小林克己筆 寺田寅彦著『冬彦集』より抜粋の説明文・「法隆寺五重 塔」寫眞 和辻哲郎著『古寺巡禮』より抜粋の説明文・序詞四頁・本文一頁〜一五一頁・ 奥付 一九二八（昭和三）年二月十一日発行
VOL 5	扉―「帆」「美しいものがたり集」「VOL5」 目次三頁・本文一頁〜二二九頁・奥付 一九二八（昭和三）年六月一日発行
VOL 6	扉―「満洲中等學生」「讀物」「帆」「VOL6」 目次六頁・本文一頁〜三〇三頁・奥付 一九二八（昭和三）年十二月三日発行

「帆」全六冊の目次については「資料編の（資料8）」を参照願いたい。ここでは、全六冊の概要（表1「帆」全六冊 書誌事項）について紹介する。

創刊号の「VOL1」（一九二七年一月）の扉に、「關東廳學務課推薦」「滿鐵學務課推薦」とある（但し、創刊号のみに表記）。創刊号ということであろうか、寄稿者は、關東長官、南滿洲教育会長をはじめ、滿洲教育界の錚々たる人物である。内容の詳細については後述する。

「VOL2」（一九二七年五月）「VOL3」（一九二七年九月）は、滿洲中等学校の教師と学生の作品で構成されている。

「VOL4」（一九二八年二月）は出版一周年記念として、「満洲野郷土讀本號」となっている。いわゆる教材を滿洲に採った副読本である。国語力の育成と郷土愛の培養を目指した構成である。

「VOL5」（一九二八年六月）は「美しいものがたり集」となっている。「はしがき」と「繪を見る人のために」という文章、及び挿絵（エッチング）は杉野一湧の手になる。「ものがたりを讀む人のために」及び全収録二十編のものがたりは石森作。これまで雑誌に発表したものから収録したとある。

「VOL6」（一九二八年十二月）「終刊号」には「満洲中學生作文集」として、各中等学校の交友会誌より選んだ生徒作品を多数収録している。

二 「帆」創刊号（VOL1）

本稿では、全六冊のうち、「VOL1」（創刊号）について分析する。それは、創刊号に、「帆」の発刊目的が明確に現れていると考えるからである。

(一)「創刊号」目次

目次 (扉に「關東廳學務課推薦」「滿鐵學務課推薦」と表記)

表紙及カット	同人	高橋庸男	
口繪 冬木立		セザンヌ	
卷頭言 救はれた花			一
發刊の言葉	同人	石森延男	二
郷土愛	關東長官	兒玉秀雄	四
若人たちに與ふ	南滿洲教育會長	廣瀬直幹	六
ペスタロッツチの墓誌銘			八
MANCHURIA CHORUS (二曲)	作曲園山民平		九
I 吹くか北風 II 曠き野	作詩石森延男		一三
新鮮な空氣	關東廳學務課長 藤田俱治郎		一四
滿洲野花ことば			一六
滿洲男子中等學生水泳記録その一(大正十五年九月廿六日)			二三
米國のホールドアツプマン	關東廳視學 松橋基彦		二四
若き日の思ひ出			
懷しく華やかな時代	大連第二中學校長 丸山英一		三〇
木版刷の英語辭書	大連市立高等女學校長 土田忠二		三五
生れて初めてきた羽織	安東中學校長 伊東善吉		四一
史蹟めぐり	大連廳立高等女學校長 石川義次		四四
滿洲女子中等學生水泳記録その二(大正十五年九月廿六日)			四八
偉人エピソード(その一) チャールス・ダーウィン	湯下誠一郎		四九
『帆』の發刊を歡ぶ友のたより	同人		
それは一つの太陽です	吉祥寺にて	西原慶一	五四
しつかりやれ	在巴港	清野謙藏	五八

愛すべき少年のために	代々木より	正富汪洋	五九
日本文化發展の眼目たれ	十勝海岸	金怒濤	六〇
私は舵を握ります	麻耶山麓にて	鈴木義邦	六二
あの『帆』だな	瀬戸の内海	長尾七郎・愛子	六四
よろこび	京都から	五味保義	六七
滿洲スケッチ			七一
滿洲女子中等學生陸上競技記録—その四—	ママ—		
おしらせ	大正十五年九月廿六日旅順にて		八一
置みやげ(前書き—石森延男)		野口雨情	八三
テニス三昧ラストボール	大連市立高等女學校	太田芳郎	九一
唐雲雀(十首)	大連廳立高等女學校	秦美穂	九八
遊於藝	大連第一中學校	今井順吉	一〇〇
簞柑子(十句)	奉天中學校長	熊谷野光	一〇三
こりさを物語	鞍山中學校	加茂弘	一〇五
あこがれ(九首)	長春商業高校	瀧本貞一	一一〇
燕京雜筆	南滿中學堂	近藤總草	一一二
滿洲中等學生作文作品及評(十二篇)			一二〇
ものがたり	同人	石森延男	一四七
A 雪戰會			一四七
B 三つの不思議			一五七
C 熊祭のお禱			一六四
D しんこ爺さん			一七一
帆の購讀者數			一七九
編輯後記			一八一

(二)「創刊号」分析

石森が満洲で刊行した雑誌はいずれも、同人誌である。石森は、常に同人誌にこだわりつづけた。それは、商業主義の影響を受けないうで、純粋な動機を大切にしていたためである。この「帆」刊行も自費出版で、同人（主に石森）による運営であった。だが、「帆」（創刊号）の目次から受ける印象は、意外にも執筆者の顔ぶれの豪華さである。植民地満洲の行政のトップである「關東（廳）長官」、教育行政の責任者「南滿洲教育會長」「關東廳學務課長」「關東廳視學」、在滿中等学校の校長の寄稿がそれである。満鉄関係者の寄稿は、創刊号には寺田喜治郎だけであるが、「VOL3」には、「満鉄學務課長」「満鐵社會課」職員の寄稿もある。創刊号の扉に「關東廳學務課推薦」「満鐵學務課推薦」とあって、關東庁と満鉄から推薦された出版物、つまり政府お墨付きの出版物であったとの印象を受ける。権威によりかかっている感はないが、渡満もない石森が、在滿の教育関係者を総動員したかに見えるほどの原稿を集めたことに驚きを禁じ得ない。これは、どういうことなのか。一つは、石森の熱意と尽力のたまものであり、石森の「帆」にかける意気込みや気負いが見てとれる。もう一つは、教科書編集部という部署の特異性を物語っているともいえる。教科書編集部は、關東庁と満鉄の合同組織で、在滿日本人児童生徒の副教科書の作成と同時に、中国の子どもの教育をも担っていた。植民地満洲の教育の要であり、最前線であった。そのため、教科書編集部に赴任した石森はすでにその時点で一編集員であつてもかなり重要な地位にあつたと推測される。また、在滿の教育界は狭い世界で、関係者は互いに交流する機会が多かつたとも推測される。

次に、創刊号の目次に沿って、掲載記事を見ていく。

扉は右から左の横書き。上段に「關東廳學務課推薦」「満鐵學務課

推薦」と二行で表記。その下に「滿洲中等學生」「讀物」と書かれている。中央の図柄の中に「帆」とあり、最下段に「VOL1」と表記されている。高橋庸男のデザイン。高橋庸男も教科書編集部に所属。高橋は一九二七年春に離滿するが、二人の親交は戦後も続く。²⁶石森の満洲関係の書籍の表紙・挿絵はほとんど高橋が手がけている。口絵はセザンヌの「冬木立」。解説として、有島生馬著『セザンヌ』より一部抜粋したものを掲載。「口繪」は、創刊号から「VOL4」まで組み込まれ、西洋絵画を中心として、それに、日本の著名な作家や哲学者の著作から抜粋した説明文が付けられている。これは、広く世界の美術作品に親しむと同時に、先人の優れた鑑賞文に学んでほしいという石森の思いの表れであろう。が、一方で、先人の優れた文章によつて、雑誌の質をあげようとしたともとれる。

巻頭言は、上段に脚つきの皿に盛られたリンゴの挿画。下段に巻頭言、石森が書いたものと思われる。陽のあたらない所に生える草花を鉢に植え替え、陽のあたる場所にうつしてやると、花は丈夫に育ち、「あなたの親切な心」にお礼を言うだろうと書かれている。深い意味があるのかどうか、ちよつと分かりかねる文章である。

次に「發刊の言葉」。石森は發刊の趣旨を次のように述べている。

最近中學生や女學生の皆なさん^{ママ}のために出版される幾多の讀物の多くは、商業政策の捕虜となつてゐる（中略）「帆」は、この陥穽から皆さんを救ひあげ、希望にみちた彼岸に恙なく運ぼうとする健げな渡船でありたい。（中略）「帆」は、皆さんの心に育てられた健全な美しい思想詩心を培養すべき一握の土となりたのである。（中略）「帆」は、せめてもの皆さんの疲れたる心を慰め、しびれた神経を休息させようとして咲いた學園の花弁でありたい。（VOL1「三頁」）

この引用文により雑誌名「帆」の由来が分かる。若人を商業主義の出版物から救い出し、健全な場所に導く雑誌を帆船に譬え、その帆船の主要部分である帆を雑誌名としているのである。

次に、「關東（廳）長官 兒玉秀雄」は「郷土愛」と題して、次のように述べている。

故國をはなれ、はるかに海越えてこの満洲に住む青年たちは、いたづらに英雄的眩惑に陥ることなく、漂流的隠遁に迷ふことなく、先づ己が住む土地そのものを愛することが肝要である。たとへ満洲の地は、傳説、口碑に乏しく、風景に見るべきものがないとはいへ、心の持ちやうでいくらでも美化し純化するこゝとができると思ふ。次の如き心がまへなどは、たしかに、郷土愛を培ふことのできる方法であらう。その一つは、満洲における自然科学の研究である。（中略）もう一つは、満洲の自然美を発見することである。（中略）かうして、わが周囲に樂園をかたちつくり、生活に濕ひを注ぐ時には、郷土自然から無限の恩愛をうけることができるのである。（「VOL1」四・五頁）

石森が「發刊の言葉」で述べている内容、及び「關東（廳）長官 兒玉秀雄」が寄稿している「郷土愛」の内容は、共に、前述した「満洲日日新聞」（一九二六年十一月九日〜十一日）の「發刊動機」と同内容である。このことによつても、十一月時点で、「帆」の方向性がすでに確定していたこと、石森が目指した雑誌「帆」の方向性は、まったく国策に沿うものであったということが明らかである。

ただ、石森らしさが出ていたとしたら、「帆」の役割に、「郷土愛」の育成に加えて、文芸誌としての役割を強く打ち出している点である。その役割とは、「健全な美しい思想詩心を培養すべき」ものとなることであり、精神に潤いを与えるものとなることである。ここに、

教育者であり、文学者である石森の意識を見ることが出来る。

続いて、「南滿洲教育會長 廣瀬直幹」の「若人たちに與ふ」と題した詩が掲載されている。「若人たちよ。／汝がもてるけだかき理想に、ためらふことなく雄々しく進め」と在満日本人少年少女に力強い言葉でエールを送っている。

「ペスタロッツの墓誌銘」は英語表記。

「MANCHURIA CHORUS」は「吹くか北風」「曠原」の二曲で楽譜付き、いずれも、作詩は石森延男、作曲は園山民平である。園山民平は満洲をホームベースとして活躍した音楽家である。創刊号から「VOL3」までは、三曲（「ゴールテープ」「唐告天子に寄す」「野そだち」）掲載されており、全て石森の作詩である。が、作曲家は、園山民平の他に、村岡樂童（VOL2）、島田英雄（VOL3）。楽譜も掲載されており、「満洲唱歌」と同様に、口ずさむうちに、読者に満洲に対する愛着が自然と生れることを意図している。石森の作品については、後述する。

ここで、注目したいのは、「ペスタロッツの墓誌銘」も「MANCHURIA CHORUS」も英語表記を取り入れている点である。これは、読者対象が中等学生であることを意識した編集であることはいうまでもなからう。ただ、この二つの英語表記の意図は異なる。と筆者は考える。「ペスタロッツの墓誌銘」は、タイトル以外、全て英語である。これは、中等学生の英語力でも読みとれる内容であるところから、あえて、原文を掲載したと考えられる。一方、「MANCHURIA CHORUS」はタイトルのみ英語表記である。これは、満洲に対する新しいイメージ作りの方策ではなかったか。西洋風のモダンなイメージを歌にもその土地にも持たせたいという石森の思いがあったと筆者には思える。「MANCHURIA CHORUS」を含め、石森著述の記事については、まとめて後述する。

ここでは、石森以外の掲載記事について見ていくこととする。

「關東廳學務課長 藤田俱治郎」は「新鮮な空氣」という文章で、英国のある町で見かけた、木蔭に乳母車を置きっぱなしにしてある情景を述べて、日本と英国の子育ての違いを語る。「關東廳視學 松橋基彦」は「米國のホールドアップマン」という文章で、米國に滞在中、日本人としての心意気を示した友人たちの体験を語っている。次に、「若き日の思ひ出」と題し、四人の中等学校長の文章が載せられている。これは、人生について考えだす多感な年頃の中等生に向けての人生のアドバイスとしての意味を持たせている。おそらく石森が各校長に原稿依頼した時に要望した内容だったのだろう。

「大連第二中学校長 丸山英一」は、「懐しく華やかな時代」と題して、自分の中学時代及びその頃の讀書体験を語っている。「大連市立高等女學校長 土田忠二」は「木版刷の英語辭書」という文章で、貧しく、教育制度も確立していない時代だったけれど、ゆつたりとした明治時代の小・中学の思い出を語る。「安東中學校長 伊東善吉」は「生れて初めて着た羽織」という文章で、小学校の新校舎の落成式で生徒総代として祝辞を述べた体験や、吉野作造と机を並べて英語を学んだ思い出を語る。「大連廳立高等女學校長 石川義次」は「史蹟めぐり」という文章では、学生時代に「偉人傑士の傳記言行録繙き、その偉大なる人格に接觸して、靈感を受ける」ことの大切さを述べている。

「偉人エピソード」は、同人の湯下誠一郎の文章で、進化論のダーウインの生涯を紹介している。湯下誠一郎は、小学校教師（のち校長）で、新聞紙上においても教育面で積極的に発言している。

「帆」の發刊を歡ぶ友のたより」では、内地から多くの友人たちがエールを送っている。「私の身にあまるほどのお言葉をいたゞいたが、友情すてがたくそのまゝここに發表します」（「編輯後記」と石森は書いている。中等学生期の潤いとなる「帆」の趣旨に賛同する声、發刊を激励する声である。その中から二通紹介する。一通は、「金

怒濤」（朝鮮人と思われる）の「日本文化發展の眼目たれ」である。当時の一朝鮮人の日本に対する意識が窺い知れる文面である。

（前略）我が日本は、支那内地の敗殘者を抱擁し、よく愛撫し、滋養して、之を同化し、特有の文化を造り上げたのです。（中略）今後は、此の日本文化を、日本内地より朝鮮へ、遼東へと發展し、此處から支那大陸へ伸張させねばなりません。「帆」の同人諸兄よ、此の意味に於ける日本文化の眼目となつて、努力されんことを深くお祈りいたします。（後略）

ここで、朝鮮、滿洲が「我が日本」と一くくりにされている。これは、当時においてはごく普通の意識であつたことだろうか。もう一通は学生時代の友人「五味保義」の便りである。「帆」は純情一路の人石森兄によつて發刊される。その生命のみずみずしさとそれが全じく純情一路である人々に與へる力は如何許りであらう」と述べられており、この文章から石森の人柄が窺える。

野口雨情の「置土産」は、雨情が滿洲蒙古を旅した印象を語り、さらに、民謡の本質を俗歌と比較して分かり易く述べ、童謡についての持論を展開している。石森は、この三年前に東京で野口雨情に会っており、「この『滿洲置土産』は、とくに『帆』のために掲載をお許し下さつたものです」と前書きに書いている。当代きつての童謡詩人、野口雨情の文章を掲載することができるのは、石森にとつて誇らしいことであつたろう。

中等学校の教師たちの寄稿は全部で七編（内、校長一編）である。執筆者それぞれが、持ち味を生かした独自の形式で文章をしたためているのが特徴である。「大連彌生町高女 太田芳郎」の「テニス三昧」（「ラストボール！」）は散文で、不世出の奇才と騒がれたアメリカ人選手と、イスパニヤの若き無名の選手との決勝戦の描写を通して、

真のスポーツマンスピリットとは何かを述べている。「大連廳立高等女學校 秦美惠」の「唐雲雀」は短歌十首、いずれも満洲を題材に詠っている。「大連第一中學校 今井順吉」の「遊於藝」は、全文漢文で、学芸の成熟は、学芸の中で遊んでこそ得ることができると述べる。「奉天中學校長 熊谷野光」の「簞柑子」は、俳句十句、おそらく満洲を題材としていられる。「鞍山中學校 加茂弘」の「こりさを物語」は、「古今著聞集神祇の部」にある熊野権現にまつわる話の現代語訳である。「長春商業學校 瀧本貞一」の「あこがれ」「こゝろ」は、詩とも連歌とも取れる作品である。「南滿中學校 近藤總草」の「燕京雜筆」は、北京滞在中の見聞を記した散文である。古都の美しさと、彼地で「國民軍」の暴挙に苦しむ中国人の思いを述べている。近藤總草はのち、石森主宰の文芸同人誌「童心行」（一九三〇年一月創刊）の同人として作品を発表している。

「滿洲中等學生作文作品及評」として、中等学生の十二編の作文が掲載されている。学生の作品掲載は、「帆」の創刊の動機の一つである。石森は、「生々とした心根を表現し得る活舞臺にしてゆきたい」（一九二六年十一月十一日付「滿洲日日新聞」）とその豊富を述べていた。生徒たちの意見の発表の場として、また、作文修業の場として、石森がことさらに力を入れている部分である。

十二編の作文は、学校生活、キャンプの思い出、内地で過ごした体験、「時」や「雪」に関するエッセイ、読書感想文、短歌等、学生らしい興味と思いが書かれている。各作品の末尾には、著者に語りかけるような筆致で書かれた「評」があり、記名はないが石森が書いたものだろう。

これら作文の中から、植民地満洲で暮らす満日本人中等学生の生活や心情の窺い知れる作品をいくつか紹介する。

「我校の誇」という題の作文が三編ある。開校まもなく三年目を迎え「自由に活躍して校風を樹立し得るものの幸福」（大連第二中學校

四年生）、「學校の内外に溢れてゐる若々しい自由な何物をも貫かずには止まぬ確固たる意氣」（「鞍山中學校四年生」）。この二編には、満洲で開校まもない学校の自由な雰囲気と、これから自分たちで校風を作っていくのだという生徒たちの気構えが見られる。戦跡に「眠れる英魂を想ひ、彼等が盡した燃ゆるが如き忠君愛國に感謝」して走るマラソン（旅順第一中學校五年生）を誇りに思うという文章は、日露戦跡を有する旅順ならではの感慨である。これらの文章から、在満日本人生徒の思いや気構えが窺える。

「流浪」（長春高等女學校四年生）という作品では、「赤いロシア」に追われた避難民のロシア人家族の哀れな姿を、やや感傷的に描いている。

「撫順中學校四年生」は、「支那人街」での見聞や菓子屋を営む自分の家の「支那人」の職人とのやりとりを、ユーモラスに書いている。

また、「大連第二中學校一年生」の五首の短歌に、石森は、「すっかりした材料の取捨ができ」「しかも選択した場合を動かざる眼で、どっと見つめている」と評し、「作者よ、君は、わき見をせずに歌の道に精進していつてくれ給へ」と励ましている。

十二編（最後の「帆」の発刊を喜ぶ文章を入れたら、十三編）の作文は、大連（5編）、鞍山、旅順、安東、長春（3編）、撫順、奉天の学生作品である。どのようにして集められたのか。ある「評」の中で、「君は、随分澤山の原稿を送ってくれたね」とあるので、原稿は学生が送ってきたものようだ。また、石森は各中等学校の「交友會誌」を丹念に繰っている（VOL6「編輯後記」）。しかし、それだけではあるまい。学校の教師の協力があったことは想像に難くない。

学生を含め、満洲の教育関係者を総動員したかのような書き手の多さと原稿内容の豊かさ、そして満洲で初めての中等学生雑誌「帆」

の創刊号発刊にこぎつけた石森の精神力、行動力、指導力には驚くばかりである。だが、それだけではない。石森自身、この創刊号に多くの作品を発表している。

(三) 創刊号掲載の石森作品

「帆」の創刊号に、石森はさまざまなジャンルの作品を掲載している。詩、エッセイ、散文、ものがたりである。それぞれについて、作品を見ていくことにする。

(1) 「MANCHURIA CHORUS」(マンチュリヤ コーラス)

こゝろの合った友だちがあつまる。(中略) このたのしさうれしさをもつとうつくしいものにしてあげたいと、こゝにわたくしらが、マンチュリヤコーラスを作りました。どうぞなかのいゝ方々を集めて高らかにゆたかにうたつて下さい。

詩 石森延男 曲 園山民平 (「帆」VOL1 九頁)

これは前書きに書かれていた文章である。「マンチュリヤ コーラス」の目的は、仲間が集えばみんな一緒に歌える歌であるということである。ここでは、石森の作詩について述べる。

創刊号に掲載された二曲のうち「吹くか北風」は口語詩。(／は改行を表す。以下同じ)

- I 吹くか／吹くか／北風吹くか／吹くよ／吹くよ／北風吹くよ／のきの枯蔓(かれづた)／ざわざわ／ざわり
- II 吹くか／吹くか／北風吹くか／吹くよ／吹くよ／北風吹く

よ／みちの並木が／ゆらゆら／ゆらり

もう一曲「曠き野」は文語詩である。

- I はてなき／ひろ野を／紅にそめつゝ／いま陽はしづむ／砂山に立つ／このわれの影／おのづから／尊し
- II かぎりない／希望(のぞみ)に／心そぞろに／もゆる若人／曠き野に満つ／このわが憧憬(おもひ)／おのづから／麗はし

「吹くか北風」は、満洲の自然を平易な言葉でリズムミカルに詠い、「曠き野」は、大きな希望を胸に、満洲の曠野に向かって立つ若者の気概を詠っている。口ずさむことによって、自然と生れる満洲に対する愛着。石森は、満洲唱歌の作詩の経験もあり、歌の効用をよく知っていたと考えられる。もちろん郷土愛の育成を念頭において生れた「MANCHURIA CHORUS」であろうが、この二首には石森の感性で捉えた満洲の自然や若人の気概が率直に詠いこまれている。

(2) 「満洲野花ことば」

前書きに、こうある。

空に輝く太陽を見て、なんともいはれぬ偉大な感じにうたれます。勇ましいやうな、強いやうな、あくまで清純な、華麗な感じにうたれます。日の丸の旗は、この感じを、表はしたすがたでせう。太陽に限らない。この自然に生育するもの 存在してゐるものを、よく眺めてゐると、なにかしら、自分の心をひ

きつけます。それがたとへ、路傍にころがつてゐる一つの石ころであらうが。ギリシャの人々は、花を愛しました。花を見ることから、その花の表徴を考へ出しました。(中略) 私は、これから満洲野に咲く花々に新しい花詞 (florigraphy) をさづけてゆきませう。これを真似て、皆さんも、すきな花に、何かの象徴を名付けてやって下さい。(創刊号「帆」 十六頁)

「満洲野に咲く花々」に「花詞」を付けることは、満洲の自然に関心を持つという積極的な行為である。「帆」の刊行動機でうたっている「満洲の自然科学の研究」や「満洲の自然美の探究」の具現化の一方策であるともいえる。だが、石森の文章は、そんな意図が読みとれないほど詩的である。文中にあるのは、生きとし生けるものを慈しむ心である。意図は詩的な文章によって隠されているのか。あるいは、慈しみの心を持つ石森の人の表れか。おそらくどちらも当てはまるのであろう。石森の生きとし生けるものを慈しむ心は石森の真の思いであらう。そして、生きとし生けるものに目を向けることはそれらを愛することにつながるのである。意図を隠すつもりではなく、詩的に表現することは石森の特質であるといえる。

石森は、「満洲野花ことば」で、「高梁」「一輪草」「とまと」「ひめゆり」を取り上げ、それぞれ物語で、自分がつけた花ことばを説明している。ここでは、「高梁」を紹介する。「高梁」の花ことばは「先見の明」。高梁の種と岩との会話で物語られる。時は明治三十八年、まさに日露戦争の戦場である二〇三高地での出来事である。日露戦争の悲惨を見た高梁の種が、戦が終わる頃には伸びて、「平和」の訪れを予感する。その「平和」とはどのようなものか。高梁の種がいう。

(前略) 神さまだつてこんなむごい修羅を何時までもみそなす

ことはない筈だ。みたまへ、よく澄んだ空にお日さまがのぼる。その目に照らされて、こゝらには、松でも生えるであらう。死んだ人々を弔ふやうに、秋の虫が歌ふであらう。目の下に見えるあの旅順の海が湖のやうに静かに風いで白玉山あたりには、きれいな表忠塔もできやうし。それに、あの港が、埋めたてられて、そこには、平和の喜びがみちあふれる時がくるにちがひない、(後略)(十七・十八頁)。

ここに描かれている「平和」の象徴は、「表忠塔」であつたり、「埋めたてられ」た「港」である。それは、当時、進められていた満洲の植民地建設の姿である。日本によつて進められる植民地建設は中国に平和をもたらすものであつた。かつて戦場であつた旅順は今も平穏で植音高く近代化が進められている。石森は、当時の日本人の大部分がそうであつたように、日本の満洲への侵略を「平和建設」と認識していたということである。

(3)「満洲スケッチ」

在満期間に石森は満洲を題材に多くの散文を書いている。それは、在満日本人の子どもたちに、郷土を愛する心を持たせたいという思いでの積極的な関わりであつた。また、石森自身、満洲の自然や風土に心惹かれたからでもあつたらう。いずれの作品も、石森の描写の共通点は「写生」である。初期の作品である、この「満洲スケッチ」に収められた四編の散文も「写生」である。「馭者と鞭」は、馭者が持つ鞭の形・色のおもしろさや鞭の動きに現れる馭者の心を軽妙な文章で綴っている。「山山の肌」は、建設中の建物の上層の窓の向こうに見える、「小さな額にはまつた油繪」のような山を描写している。この二編には、自ら絵筆をとつた石森ならではの画家の視点

がある。「D市の測候所」では、さまざまな機器を用いて日夜休みなく記録される仕事に感心しつつも、それらは数値に過ぎず、一握りの土に生きる足元の花には及ばないと述べる。人間の英知も「宇宙の相」には及ばないという石森の考え方が窺える。地下の坑道を見学した体験を描いた「大山坑」という作品には、坑道で働く「苦力」の描写がある。石森は、満洲風物を多く描いたが、中国の人々の姿を描いた作品は少ないので、ここでは、それを紹介する。

（前略）

「エレベーターでおりませう」

暗い電燈がともつてゐる。檻のやうなエレベーターが、上つてきたり、降りていたりする。その度に、乗りこまうとする人や、降りてくる人がどや　く　する。高い臺の上に大きな人がつき立つてゐて手に握つた太い棒で、乗らうとして集つてくる人々を、一々制御する。

何人かの人數をかぞへて、そこに、棒をさし入れる。働きにゆかうとするのは、みな支那の坑夫ばかりあつた。私らがゆくと、その棒もちの人が、棒で、一番前にでゝよろしいといった様子を見せたので、私は、電燈のすぐ下のところに立つて、エレベーターのくるのを待った。何げなくうしろを見ると、何人かの坑人の眼が、一度に私の瞳にぶつかつた。いきなり頭をなぐられたやうな心地がしたので、すぐこちらをむきなほした。

（七三・七六頁）

「大山坑」とは、撫順炭坑大山坑のことである。「高い臺の上」に立つ人間が「檻のやうなエレベーター」に乗る「支那の坑夫」を棒で「制御」する。石森は感想や考えは書かず、「写生」に徹している。だが、その「写生」に徹した描写は読者に非人間的な坑道の世界を

感じとらせる。それは、石森が「写生」という表現方法を取る狙いなのかもしれない。余計な説明や解釈を加えず、見たまま、感じたままを描写し、読み手自身にその解釈を委ねるというわけだ。では、「坑人の眼が、一度に私の瞳にぶつかつた。いきなり頭をなぐられたやうな心地がしたので、すぐこちらをむきなほした。」という箇所はどう解釈できるだろうか。「坑人の眼」が「ぶつかつた」という表現に、生活苦にあえぐ支那「坑人」たちの、日本人見学者に対する非難あるいは敵意が表われているとはとれないか。「いきなり頭をなぐられたやうな心地」という表現に、石森自身が強いショックを受けた様子が現れている。「すぐこちらをむきなほした」に、石森が場違いの自分の立場を自覚したといえまいか。

さらに、「苦力」について、次のやうな描写がある。

苦力が、現場の日陰に、腰をおろしたり、寝ころんだりしてゐた。みな、血の氣のない蒼い顔色をしてゐる。さうだろうとも。日のめも見ずに、あんな地の下で、働く。渴つた空氣に、石炭粉をすつて、力まかせに働くんだもの。それが、毎日々々、何時間となくつゞくんだもの。わづか、十分たらず、何もせず、に、たゞずんでゐてさへも、氣持がふさがつた、マゆくのだもの。

そこで、『地上にはたらく人々よ』といひかけたくなるのだ。

「君らは幸福なものだ」

（七五・七六頁）

地下で働く苦力は「みな、血の氣のない蒼い顔色をしてゐる」。この作品では、苦力の置かれてゐる劣悪で苛酷な状況が描かれてゐる。だが、その筆致は輕妙であるためか、いささか深刻さに欠ける。あるいは、深刻な状況を輕妙さで輕減させたのかもしれない。苦力の多くは山東省から出稼ぎにきた貧しい農民である。彼等の背景である貧困や日本統治下における搾取されている状況には石森はまった

く触れていない。むしろ、これらの背景に踏み込もうとはしないで、「地下に働く者」と「地上で働く者」との差異にすりかえている。石森にすれば、自分が描こうとしたのは、「大山坑」の地下坑道の体験であるため、その体験の一部である自分が見た「苦力」の姿を「写生」したということであろうか。後の作品についてもいえることだが、満洲風物を描く際、石森は、おおむね「写生」に徹しており、その姿勢は中国の人々を描く時にもほとんど変わらない。

(4) 「ものがたり」

「ものがたり」には四つの話が収められている。ここには、満洲の題材から離れて、石森は、自分の興味の赴くままに表現の世界を構築している。

(A)「雪戦會」とは、石森の故郷札幌の「第一中學」の冬の行事である。学校中の生徒が敵味方に分かれ、それぞれ築いた氷の城に翻る旗を取り合うというもの。「ものがたり」というより、ルポルタージュ的手法で描かれている。血気盛んな若者たちの勇壮な闘いが簡潔な文体で綴られ、臨場感あふれる作品となっている。在満の同世代の若者たちに、内地の北国の冬の楽しい行事を伝える気持ちで書かれた作品であろう。

(B)「三つの不思議」は、童話である。親はなく、貧しい叔母さんと暮らす柳子が、クリスマス夜の夜を祝うささやかな品をだいなしにしてしまう。お嫁に行った姉さんからもらった金魚は寒かろうと湯をいれたばかりに死に、貧しいおばさんが買ってくれたサフランの花は、元気づけようと息を吹きかけてしぼませ、貯金をはたいて買った花ロウソクの炎は隙間風から守ろうと袖のかげに抱えこんで消してしまう。その「三つの不思議」に戸惑った柳子が夜空を仰ぐと、三つの品は星になって、柳子にほほえみかけたという内容であ

る。好意がみな予期せぬ結果を招くが、三つの品は、柳子の好意に感謝するという筋立てである。悪意のない過失に、石森は寛大である。石森の精神世界の一面が現れているといえる。

(C)「熊祭のお禱」は、アイヌの熊祭りに材を取っている。アイヌには、山からさらってきた小熊を養い、五年目にその熊を殺して魂を神の元に返すという儀式があるという。父親と山に入り、小熊を連れ帰り、小熊とともに成長した少年が、熊祭りを迎えた今、自分の心境を熊へ語りかけるといふ手法で描いた作品で、しみじみと読む者の心を打つ。北海道出身の石森は、早くからアイヌの風俗や昔話に関心を持っていた。この作品もその一つである。

(D)「しんこ爺さん」は、しんこ細工（飴細工）の行商人と貧しい信太の物語。貧しい家の子信太は、しんこ爺さんが来るのをいつも楽しみにしていた。しんこ爺さんの手元から次々と生れる小動物を見るだけで心が満たされていたのだ。体の具合が悪く故郷に帰ることになったしんこ爺さんは、信太のほしがった猿を作ってやって去っていく。

四編の短編は、ルポルタージュ的、童話的、散文的と手法も内容も異なる。これら小品の中に、多作で、さまざまな文体を駆使した石森の文学活動の芽生えがすでに見られる。

三 「帆」が目指したもの

以上、創刊号「帆」の内容について分析を試みた。その分析をふまえて、ここでは、「帆」が目指したものが何であったのかをまとめたいと思う。

「帆」の刊行に際し、うたわれたのは、「郷土愛、生活愛、讀書愛」の三つである。在満の日本人少年少女に対して、満洲に対する郷土愛を育み、日々の生活に潤いと憩いを与え、読んで滋養となると同

時に若い思いを表現できる場としての雑誌が「帆」の役割である。在満の日本人の子どもたちに、満洲に対する郷土愛を持たせることは、教科書編集部の方針であり、国策であった。その国策の方向性に、石森は共感し、当然のことと考えている。満洲で生きることが、生活者として、その風土を愛し、その風土の中で育まれることであるからである。そのため、石森は、書き手や題材を満洲にこだわった。それは、「郷土愛」を育てるには、満洲の地で、満洲に住む人々によって、満洲から多く取材した内容を掲載することが必要であると考えたからである。その結果、「關東（廳）長官」、「南満洲教育會長」、「關東廳學務課長」、「關東廳視學」、在満中等学校の校長及び教師たちという、満洲の教育関係者を総動員するような顔ぶれとなったのである。

一方で、石森は、在満の日本人の子どもたちは、植民地満洲で生れ育とうとも、日本人の心を持つべきであると考えていた。満洲に対する郷土愛を持った日本人として生きていく若い読者に向けて、共感や啓発を生む記事内容の掲載にも腐心している。たとえば、各中等学校の校長たちの文章である「若き日の思ひ出」がそれである。さらに、石森は、「帆」に文芸雑誌的要素を持たせようとしている。在満日本人教師たちの手になる作品には、彼等それぞれが独自の文芸スタイルで作品を発表している。そして、石森自身、詩、散文、ルポルタージュ、童話、エッセイ等の作品を精力的に載せている。また、石森は、雑誌の質にもこだわり、一部ではあるが、既存作家の文章を選んで掲載している。

「満洲中等學生」の作品掲載は、「帆」発刊の動機の一つで、石森は、在満日本人少年少女たちに意見の発表の場と作文修業の場を提供しようとしたのである。

読んで、楽しんで、為になって、作文修業にもなる雑誌、作り手と読み手が協力して作っていく雑誌を石森は目指したということでは

ある。だが、ここで、確認しておきたいことは、「帆」の読者対象は、あくまでも在満の日本の中等學生であつたということである。

四 「帆」の評価

一九二七（昭和二）年二月六日付「満洲日日新聞」の「新刊紹介」で「帆」（創刊号）は次のように紹介されている。

（前略）本誌の發刊計畫はとくに昨年初秋の頃たてられ其發刊趣意は其の頃の本紙文藝欄に發表された若人達の胸を如何に躍らせたことであつたらう。爾來尠からぬ日が経つた或は何等かの事情で計畫の中絶があつたのではないかとさへ思はれてゐた（中略）よりよき子を生むにより大きく生みの悩みをするとは限らぬが本誌がいかに慎重な態度から生み出されたかそして如何に謙讓な態度で今後の成長を期せんとして居るか想像されるそして健全な讀物として中等學生の好伴侶として推賞出来る、藝術の香氣高き帆よ帆よ

創刊号「帆」は、「健全な讀物」「藝術の香氣高き」と、高い評価を得て、世に送り出される。

確かに、教育関係者による寄稿は、いずれも、誠実で、中等學生にとつては、人生への真摯なアドバイスとなるだろう。また、生徒作品の掲載は同世代の読者に共感を生み、彼等を啓発する。そういう点においては「健全な讀物」といえる。また、「藝術の香氣高き」とは、西洋絵画を中心とした「口繪」や、「MANCHURIAN HORUS（マンチュリヤ・コーラス）」を組み入れた構成や、俳句、短歌、散文、物語など、豊富な形式の文芸作品が収められている点を指していると思われる。そういう点において、書評にいう「健全

な讀物」「藝術の香気高き」はある程度は的確な評価であるといえる。だが、誠実さが前面にでているため、遊びの無い「お堅い讀物」という印象が強いのも否めない。また、満洲色を前面に出しているあまり、啓蒙的な要素が強い印象も受ける。さらに、文芸作品においては、同人誌的な文章や内容で、作品レベルとしては習作段階であるともいえる。

おわりに

「帆」の終刊号（「VOL6」）で石森は次のように述べている。

たとへ、たつた六冊の帆ではあつたにしても、その中に盛られたことは、けつして貧しいものではないと信じます。汲みつくせない泉のやうな力が、満洲に住む、若いあなた方の胸奥に生れはしなかつたか。

（中略）

同じ満洲の土地に住んでゐるあひだはお互にこの土地を愛し、自然に親しんで、内地の若ものたちに負けないだけの「郷土愛」を抱かうではありませんか。（後略）

満洲に対する郷土愛を育み、日々の生活に潤いと憩を与え、読んで滋養となると同時に若い思いを表現できる場としての雑誌が「帆」の役割であつた。そして、石森は常に在満の少年少女たちに自信を持たせようと鼓舞している。記事内容が啓蒙的であるとはいへ、満洲初の在満少年少女向けの雑誌が、渡満まもない石森の尽力で、何もない「無」の状態から発刊されたこと、しかも「帆」に文芸雑誌的要素を持たせようとしたことは、植民地満洲の児童文学活動において、先駆的な意味を持ったといえる。

第三章 満洲読物『まんちゅりあ』

―石森延男の満洲観を探る

はじめに

ここでは、『まんちゅりあ』を取り上げる。その理由は三つある。一つは、『まんちゅりあ』二巻は、小学生向けリーフレット「ます野」（月刊）を合本にした満洲読物であるということ。前章で、中等学生読物「帆」について考察した。それに続いて小学生向けリーフレットを考察することは、石森が満洲で刊行した雑誌の全体像を探るという点において必要であるからである。

二つ目は、「ます野」はすべて石森が書いていること。石森の児童文学活動の内容を探り、石森の満洲観を探る上で重要なテキストであると考えるからである。

三つ目は、月刊誌であった「ます野」を全冊見ることは、現在ではおそらく不可能に近いと考えられるから、『まんちゅりあ』研究は、すなわち「ます野」研究への唯一の道であるからである。

一 「ます野」と『まんちゅりあ』

『まんちゅりあ』分析に入る前に、まず、「ます野」（「資料編の（資料10）」と『まんちゅりあ』（「資料編の（資料12）」）の関係を押さえておく。

「ます野」とは、石森が、大連で発行した小学生向けリーフレットである。前述したが、『まんちゅりあ』は、この「ます野」を合本にしたものである。このことは、戦後、石森が次のように述べてい

ることから明らかである。（傍線は筆者）

（前略）小学生下級用と上級用の二種のリーフレツ（各十六頁もの）を月刊誌として発行することにした。原稿はすべてわたしが書いた。編集も、校正も、発送までしなければならなかった。ポーナスもなにもこれに注いだ。（中略）さいわいに在満の子どもたち、父兄、教師たちからは意外なほど喜ばれた。「おかげで、満洲っ子が育つだろう」とさえいわれたのに気をよくしてさらに新鮮にして満洲の匂いのぶんぶんする読物を書きつけた。だが、これは、かなりの労働になり出費が重なるので、十カ月め、つまり十号でついに終刊せざるを得なかった。（中略）せめてその読物「満洲野」を合本してくれないかという切なる声があったので、「まんちゅりあ」（春夏の巻、秋冬の巻）の二巻を刊行した。（後略）²⁷

まず事実と異なる点を指摘する。上記引用文の傍線部「下級用と上級用の二種」とあるのは、石森の記憶違いで、それは小学生読物「満洲野」²⁸のことであって、月刊誌「ます野」のことではない。月刊誌「ます野」は「初級用」「中級用」「上級用」の三分冊である。

次に、表記について確認する。元来、月刊誌「ます野」の表記には、「ますの」「ます野」「満洲野」の三種のあることが確認できている。引用文中、石森は「満洲野」を使用しているが、原書の奥付では「ます野」となっている。本稿では「ます野」を使用する。

さて、上記引用文から以下の点が明らかになった。「ます野」刊行はすべて石森個人が担い、好評だったが、経費、労力の負担から十号で終刊に至る。読者の要望で、「ます野」は合本され『まんちゅりあ』二巻として刊行されたということである。

筆者は、今回、次の三点の資料を基に、「ます野」と『まんちゅりあ』

表1 「ます野」・『まんちゅりあ』掲載作品対照表

凡例

- 1 この対照表は、以下の三資料に基づく。①石森延男編『満洲児童文学資料（その二）』（児童文学研究 NO.4 一九七五・春季）所収の「ます野」作品目録 ②『まんちゅりあ』（一九三〇・四）の目次 ③函館中央図書館所蔵の「ます野」三冊（第四号 中級用「第五号 初級用」「第五号 上級用」である。
- 2 『まんちゅりあ』の目次作品については、引用の際、通し番号を付けた。
- 3 傍線を付した作品は、「ます野」に掲載されているが、『まんちゅりあ』にはないものである。
- 4 現物確認ができた作品には○印を付けた。

「ます野」		『まんちゅりあ』（春・夏の巻）	
(一号) 一九二九・五・十		(第七号) 一九二九・十二・十	
九官鳥	1	九官鳥	1
水兵さん	2	水兵さん	2
春浅		浅黄の空	3
兵隊さん	3	磐石と落葉	4
春日		伝書鳩	5
(二号) 一九二九・六・十		風ノ言葉	6
ケモノノキョクゲイ	4	カラクル	7
若葉青葉	5	しづかな宵	8
ねむのき		うごかぬ風車	9
牧場に	6	かけくらべ	10
まんちゅりあ風景	7	冬の旅（冬の夜の誤記）	11
苺とり	8	広い空	
おばあさんへ	9	噴水と金魚	12
(三号) 一九二九・七・十		鞭あそび	13
星ガ浦ノ水族館	10	夢の王様	14
雲雀と少女	11	(第八号) 一九三〇・一・十	
籠城記念祭	12	月ゴヨミ	15
(四号) 一九二九・九・十		白い狐	16
初級用		夜明	17
九月	13	小山田さんのをぢさん	18
支那ノ母サン	14	サチガモト	19
ギス	15	大連連鎖商店	20
ひろば ひろば だ	16	月と風	21
ろてんいちば		(第九号) 一九三〇・二・十	
ろてんいちば		雪戦会	22
タあかり	17	支那村へ	23
○太刀魚釣り	18	遼陽白塔	24
○果物店	19	湖底の鏡	25
(五号) 一九二九・十・十		水師營へ	26
夏の日を	20	水上の少女	27
満洲考古土俗展覧会	21	欠	
底力	22	(十号・終刊号) 一九三〇・三・十	
初級用		水師營へ	28
○ドイツタ顔	23	満洲守備兵さん（うた）	29
○橋ツクシ	24	満洲アチコチ	30
○うづらのおやこ	25	子猫	31
○周水子の飛行機	26	若草山の測候所（うた）	32
中級用		護れ祖国	33
時雨	27	満洲野花（うた）	34
日本人	28	満洲野花（うた）	35
出帆	29	満洲野花（うた）	36
上級用		満洲野花（うた）	37
○夜學	30	満洲野花（うた）	38
○老鐵山燈臺へ	31	満洲野花（うた）	39
○仲秋節の夜	32	満洲野花（うた）	40

あ』の具体的な対照作業を行った（前頁の「表1」）。『まんちゅりあ』二巻²⁹と、「ます野」三冊（「第四号・中級用」「第五号・初級用」「第五号・上

級用」³⁰、石森延男編「満洲児童文学資料（その二）」³¹所収の「ます野」目録である。その結果、以下の三点が明らかになった。

一つは、「ます野」の発行期間と発行冊数である。石森編「ます野」目録によると、創刊は一九二九年五月十日、終刊は一九三〇年三月十日。第一号から第三号までは、月一冊刊行、第四号から「初級用」「中級用」「上級用」の三分冊となる。四月と八月は休刊であったため、創刊から終刊までの発行は全二十四冊、作品七十七編（推定）である。作品数を「推定」としたのは、石森編「ます野」目録では第十号「初級用」が紛失のため記載がなかった。だが、逆に、『まんちゅりあ』の目次からその箇所が補えると考えたためである。

もう一点は、上記引用の石森の言によると、「ます野」がそっくりそのまま合本して『まんちゅりあ』になったような印象を受けるが、実際には、「ます野」掲載作品がすべて『まんちゅりあ』に収録されたわけではないということである。現時点で、「ます野」掲載作品のうち、五編が収録されなかったことが判明している。その五編とは、「春浅」「春日」「ねむのき」「ひろば ひろば だ」「広い空」である。これらの作品が、なぜ収録されなかったのか。現時点では作品内容が不明であるため、今後の調査を待たないといけないが、この点はいずれ説明する必要があると考えている。

三点目として言えることは、上記五編は収録されていないものの、五編を除く七十二編は、発表順序どおり、しかもそのまま、『まんちゅりあ』二巻に収められていると考えられる。つまり、「春夏の巻」は「ます野」第一号から第六号の中級用までの三十九編、「秋冬の巻」には、第六号の上級用から終刊までの三十三編で、学齢を考慮した編集ではなく、季節の流れに即した編集となっている。春から始ま

るのは、小学校の新年度の開始が春四月であることと関係していると思われる。筆者が現物確認した「ます野」三冊に掲載されている十編（表1の中の○印）と、『まんちゅりあ』掲載の同作品とを照合した結果、一字一句、同じものであった。異なる点は、装丁部分のみである。「ます野」では本文頁が四角の線で囲われているのに、『まんちゅりあ』本文にはその枠組みがない。「ます野」の表紙は杉野一湧³²の木版画であるが、『まんちゅりあ』の表紙・挿画は高橋庸男で、杉野一湧の表紙絵は本文頁に組み込まれている。

ここで改めて次のようにいえる。「ます野」に掲載された作品のうち、五編（上述）は収録されていないけれど、『まんちゅりあ』二巻には、「ます野」掲載作品をそのまま収録していると予測できる。よって、『まんちゅりあ』二巻研究から、「ます野」のほぼ全容を窺い知ることができると考えられる。

二 『まんちゅりあ』の概要

（一）書誌事項

書名は『少年少女よみもの まんちゅりあ』。「まんちゅりあ」とは、「満洲」の英語表記「MANCHURIA」を平仮名書きにしたものである³³。「春夏の巻」（三十九編）「秋冬の巻」（三十三編）二巻、各冊菊判、約二百頁。満洲を題材とした満洲読物である。すべて石森の作品である。表紙・挿画は高橋庸男、扉・木版は杉野一湧。二巻共に一九三〇年四月十五日発行。発行所は満洲學生讀物研究會内。定価各九十銭。発行地は大連。

ここで、注目すべきは、書名である。雑誌「ます野」の合本であるので、「ます野」でも良かったはずなのに、石森は「まんちゅりあ」という英語の平仮名書きにしている。ここには、石森のモダン志向

の現れと満洲に対するイメージ改変の意図があると考えられる。石森赴任当時の満洲のイメージは殺風景、広野、僻地であった。あえて英語を平仮名書きすることによって、石森は、読者である子どもたちに、満洲に対して、モダンで新しいイメージを持たせようとしたと筆者は考えている。

(二) 出版動機

家庭教育雑誌「愛兒と家庭」(一九三〇年五月号)^{3,4}に、『まんちゅりあ』の紹介記事が載っている。その記事の中に、石森自身が語った出版動機が紹介されている。その部分をそのままここに引用する。

満洲に生れて、そこで育つ子どもはなんといつても満洲が故郷になる。たとへ植民地で、北國で、荒々しい風が吹かうとも、この子どもたちにとつては、かけがへのない故郷ぢやないか。日本内地の子どもには、其の土地のことを書いた美しい讀物が、ありあまるほどあるのに、この満洲の子どものためには、たゞ一冊の讀物もない。子ども雑誌すらない。まるで星のない夜の空のやうにまつ暗い。よその土地のことばかり書いたものを讀まねばならぬ満洲の子どもは、なんとさびしいものであらう。私はせめてこの暗い空に、一つでもいいから星を光らせたいとおもつてこの本を書きたした。(今永茂記「少年少女よみもの『まんちゅりあ』を紹介す」(六八・六九頁))

在満日本人児童に満洲に対する郷土愛を持つてほしいという思いは、在満中、常に石森の念頭にあった。その思いは、満洲における石森の行動の原点だといえる。石森は、在満の日本の子どもたちが

自分たちの住む満洲の作品を持たないことを憂え、「暗い空」の「星」のように、心を慰めるものとして、この『まんちゅりあ』を出したという。

前述したように、『まんちゅりあ』は「ます野」をそのまま合本したものである。従つて『まんちゅりあ』の出版動機は、そのまま「ます野」の出版動機でもある。すると、これら作品には、渡満初期の石森の満洲観が表れていると同時に、在満日本人児童に向けての啓蒙的要素も含まれていると考えられる。石森の満洲観と啓蒙的要素については、次項で検証する。分析は内容と表現の二つの観点から行う。

三 『まんちゅりあ』分析

(一) 内容別分類

次頁の(表2)は、「春夏の巻」(三十九編)「秋冬の巻」(三十三編)の計七十二編について、内容別に分類した結果である。ただし、作品内容が単一とは限らず、複数内容の作品もあるので、その場合は、主要内容によって分類した。これらの数値から以下の点が明らかにになった。

一点目は、作品の中で最も多いのが「風物」を描いた作品で三十七編、全作品の約半数を占めるということである。そのうち、満洲独特の自然、習俗、風物を描いた「満洲風物」が二十六編、日本の植民地建設によって生まれた風物を描いた「満洲新風物」が七編、日露戦争戦跡を描いた「歴史風物」が四編である。

石森は風物をさまざまな手法で描いている。子どもの視点からの描写や大人の視点からの描写、散文や歌の形式でスケッチ風に描写する一方で、短編小説風に描いたり、擬人法を用いて童話風に描い

表2 『まんちゅりあ』（「春夏の巻」「秋冬の巻」）内容別分類

「春夏の巻」（39 編）「秋冬の巻」（33 編）に掲載の全作品 72 編は、3 編（「底力！」「かけくらべ」「雪戦會」）を除き、すべて満洲を題材としている。
下表は、全作品を以下の内容別に分類した結果である。但し、作品によっては下記要素を複数以上含むものもある。その場合は主な内容で分類した。

- 内容別—①満洲風物（満洲特有の自然・風物・風俗を描いたもの）
②満洲新風物（植民地化によって新たに加わった風物）
③歴史風物（日露戦争の戦跡、及びそれに関連するもの）
④日本人（日本人・日本の子どもの生活を描いたもの）
⑤中国人（満洲に住む中国人・中国人の子どもの生活を描いたもの）
⑥ロシア人（ロシア人を描いたもの）
⑦時事（時事・時局的なもの）
⑧生きもの（鳥・魚・小動物）
⑨その他（上記の分類に入らないもの）

		「春夏の巻」	「秋冬の巻」	計		作品
風物	① 満洲風物	8 編	1 8 編	2 6 編	3 7	若葉青葉 まんちゅりあ風景 おばあさん 満洲考古土俗展 時雨 コホロギ角力 まき風 南京豆の畑 金州文廟丁祭 ジャンク小旗 浅黄の空 甃石と落葉 風の言葉 うごかぬ風車 冬の歌 鞭あそび 月ゴヨミ 白い狐 夜明け サチガモト 月と風 支那村で 遼陽白塔 湖底の鏡 満洲アチコチ 満洲野花ことば
	② 満洲新風物	5	2	7		夏の日を 橋ゾクシ 周水子の飛行機 出帆 夜學 大連連鎖商店 若草山の測候所
	③ 歴史風物	1	3	4		籠城記念祭 しづかな宵 水師營へ 護れ祖國
④ 日本人		1 3	2	1 5		牧場に 九月 ギス タあかり 太刀魚釣り ドイツタ顔 日本人 仲秋節の夜老鐵山 燈臺 オハナシ 夜風 菊 氷上の少女 小山田さんのおちさん 雲雀と少女
⑤ 中国人		3	日・中 1	3 1	4	支那の母さん ろてんいちば 果物店 子猫
⑥ ロシア人		日・中・ロ 1	1	1 1	2	夢の王さま 苺とり
⑦ 時事		2	2	4		水兵さん 兵隊さん 傳書鳩 満洲守備兵さん
⑧ 生きもの		5	2	7		九官鳥 ケモノモノキョクゲイ 星ヶ浦の水族館 うずらのおやこ かさゝぎの子 カラクル 噴水と金魚
⑨ その他		1	2	3		底力！ かけくらべ 雪戦會
計		3 9 (内童話風 4)	3 3 (内童話風 7)	7 2 (内童話風 11)		

たりしている。これは、石森がさまざまな文体を駆使する文才豊かな人物であったことに加えて、読者対象である小学生を念頭に置いて、楽しく読める、理解しやすい、さまざまな文体に触れるということを考えていたということであろう。題材が多岐にわたっているのも、同じような指摘ができる。石森の視点の広さを意味すると同時に、読者である小学生が幅広く興味を持てるようにという配慮があったと思われる。

「満洲風物」に分類した作品は、例えば、温泉地として名高い熊岳城の若葉の季節（「若葉青葉」）、雨中を駆けるマーチョ（馬車）（「時雨」）、コロギ角力に興じる「支那人」（「コロギ角力」）、農村風景（「南京豆の畑」）、満洲の子どもの遊び（「支那村で」）、古式に則った迎神の儀式（「金州文廟丁祭」）、等である。石森は自分の感性、観察眼で「満洲風物」に向き合っている。そこには、満洲に対する石森独特の発見があり、その石森の発見を通して、読者である子どもたちは、満洲風物の良さを知ることになる。

筆者は「満洲新風物」という項目を立てて、日本の植民地建設によつて生まれた風物をそこに分類した。それは、掲載作品の中で七編と比較的数が多く、しかも、この「新風物」が、石森の意識の中に、満洲固有の風物と同じように「風物」として位置づけられていると考えたからである。「満洲新風物」に分類したのは、例えば、建設途上の大連の街（「夏の日を」）、飛行場と旅客飛行機の見学（「周水子の飛行機」）等である。これら作品からは、植民地建設が進む大連の活気が伝わってくる。

満洲には日露戦跡がある。これら日露戦跡を描いた作品は「歴史風物」に分類した。石森は日露戦争や戦跡に関し、四編の作品を書いており、その思い入れの強さが窺える。「籠城記念祭」では日露戦争終結二十五年後に旅順で行われた慰霊祭の様子を語り、旧ロシア兵と日本人将校とが互いの兵士の慰霊を行うさまに、「人道的な美

しい催」と讃える。「しづかな宵」では乃木保典の戦死地を訪れた感慨を述べ、「水師營へ」では日露戦争両將軍の会見の様子に思いを馳せ、「護れ祖国」では旅順港口閉塞決死隊に参加した兵士の実録を書いている。これら四編の作品で語られるのは、過去の日露両軍の兵士の雄姿と今日の和睦である。満洲について語るときに日露戦跡は欠くことが出来ない、と石森が考えていたということである。

二点目は、「風物」の次に、「日本人」を描いた作品が多いということである。十五編あり、日本人の満洲での暮らしや日本人の偉業が描かれている。

石森はごく普通の日本人の生活を描く。日焼けを競い合う夏休み明けの教室風景を描いた「九月」、「支那人」の子どもから買ったキリギリスの鳴き声を一夏楽しんだ後、野に放つ日本人家庭を描いた「ギス」、鱈をえさに父子で楽しんだ「太刀魚釣り」。いずれも、身近な出来事である。これら作品では、石森は日本人の生活を満洲風物にからめて描いている。

石森は、満洲における日本人の偉業も描く。「日本人」という作品では、発電所の東洋一の煙突を設計した一日本人技師の仕事を取り上げ、また、列車で乗り合わせた日本人商人の語る団結力のある日本人気質の話を紹介する。第二回全日本氷上競技大会で世界記録を出した尋常六年生の塩谷みどりの偉業（「氷上の少女」）、菊つくり職人の言葉（「菊」）、忠霊塔を毎日掃除し、大連の日本橋の時計のねじを欠かさず巻きつづける小山田さんの奉仕精神（「小山田のおぢさん」）、愛情こめて牛の世話をする牧夫（「牧場に」）を描いている。ここで描かれているのは、「氷上の少女」以外、無名の人々である。名もなき人々の行為に着目し讃美するところに、誠実を尊び、職人精神を讃える石森の考え方を見ることが出来る。これら作品で、石森は、満洲における日本人の誇りと、人としてのありかたを提示している。

では、石森は日本人以外の民族をどう描いたのか。

三点目として言えることは、満洲において圧倒的に多い「中国人」を描いた作品がわずかに四編、ロシア人については二編、朝鮮人や蒙古人については作品がないということである。「中国人」については次項の「四」で述べる。石森は「夢の王さま」という作品で、少年の夢にでてきた王さまが貧しいロシア人のパン売りそっくりだったという話を書き、哀感たどようロシア人の姿を描いている。ロシア人を描いたもう一作は、「苺とり」という「をどりうた」で、日本人の「わたし」と中国人の「李さん」とロシア人の「マーシャさん」が仲よく苺とりする様子を歌う。満洲に住む民族の協和は満洲における植民地政策のうたい文句である。また、満洲の日本人と中国人とロシア人との融和は、石森の願いであつたということだろう。だが、同じように満洲に住む朝鮮人、蒙古人については、石森の意識から欠落しているように思える。これは、石森の住む大連がロシア人によつて拓かれた街であつたので、ロシア人が今なお多く住んでいたこと、逆に、蒙古人や朝鮮人が少なかったことと関連していることもあるが、石森は、優れた文化を持つロシア人に対して、畏敬の念を持っていたということ³⁵にも起因しているといえよう。

「時事」に分類した作品は主に軍隊関係である。四点目としていえることは、作品数は四編と多くはないけれど、石森は軍隊（兵隊）も題材とした。軍艦榛名の見学を描いた「水兵さん」も、兵舎見学の様子を描いた「兵隊さん」も、作品名から受ける親しみやすい印象とは異なり、内容は本格的な訪問記である。前者では軍艦の設備内容が詳細に述べられ、後者では、戦死兵士の話や兵舎での生活が描かれている。二編とも少年の体験記として書かれているが、詳細な内容から、実際には石森の体験であつたと考えられる。二編とも、「ます野」創刊号に掲載されている。それは、ともに四月の体験であつたので、偶然、創刊号に軍隊関係の内容が重なつただけであつ

て、雑誌「ます野」の性格を決定づけるものではあるまい。ただ、石森にとつての満洲風景には、当たり前のように、軍隊の存在があり、それは石森にとつて「御国を守る」讃えるべき存在であつたといふことはいえるだろう。「傳書鳩」という作品では、駅の構内で見かけた伝書鳩を持つ兵隊の様子を歌い、「満洲守備兵さん」という作品では、寒風の中、夜番に立つ守備兵の様子を軽快なリズムで歌っている。

「生きもの」を描いた作品が七編で、そのうち、童話風のものが四編である。石森は、満洲風物である「うずら」「かささぎ」を擬人化し、「満洲新風物」である「星ヶ浦の水族館」の生きものたちを擬人化して、いずれも童話風に描いている。読者である子どもたちがより楽しく読める工夫であろうが、ここにすでに童話作家としての石森の資質が表れているといえる。

「その他」に分類したのは、直接には満洲を題材としていない作品である。「底力」ではドイツの飛行船の偉業を述べ、ドイツ国民の底力を讃えている。そして、在満の少年少女たちに向けて「君たちの底力」を伸ばして、「君たちの時代が来たその時には、日出づる國、わが愛する日本からも、世界的なものを、花々しく生みだしてやろうではありませんか」と鼓舞している。「かけくらべ」では、速さを競う世相を諷刺し、「雪戦會」では、満洲とは同じ北国というつながりで、札幌にある中学校の「雪戦會」を詳細に描いている。

以上、内容分類の数値から『まんちゅりあ』分析を行った。石森が渡満した頃は、日本の植民地化が槌音高く進められている時期であつた。日本の行為は明らかに中国への侵略であつたが、石森の目に映つた満洲は、満洲（中国）固有の文化と日本文化が共存し、日本によつて近代化が進められ、日本の軍隊が治安を守り、日本人、中国人、ロシア人がともに暮らす地であつた。石森は、自分の感性と観察眼で満洲固有の風物の趣を発見し、植民地建設の活気を描き、

その中で暮らす日本人の生活を重点的に描いた。作品はすべて、在満日本人児童に満洲の良さを提示するという姿勢で貫かれており、植民地の持つ負の部分は描かれてはいない。

(二) 表現について

『まんちゅりあ』について、斎藤秀昭は『『満洲国』文化細目』³⁶でこう述べている。

(前略) 子供の眼を通して描かれる風物の一つ一つには詩情がよく現れている。また、その詩情を支える著者の科学的精神(観察眼)の確かさも特徴の一つと言える。(三九頁)

緻密な観察眼と詩的な表現については筆者も異論ない。筆者は、さらに、石森の画家の眼を加える。音楽に親しみ、絵をたしなんだ石森は、しばしば色彩豊かに文章表現する。

船頭の支那人は、古い麥わら帽をかぶり、素足のまゝ黒ズツクの靴をつつけてゐます。白の上衣とずぼんを着て、胸のかくしから、唄本らしい緑表紙がはみでてゐました。

右手の小さな支那造船所も、その家壁にかけた「仁丹」の白文字も、竜骨だけ組み合はせた小蒸気船も、崖の上で、はぜ釣してゐる支那少年の紺色の服地も、夕陽に映えて、近代風の畫致です。(「春夏の巻」「太刀魚釣り」八三頁)

船頭は黒い布靴に、白い上下服、襟元に緑。小さな造船所の黒い影に浮かびでる白い文字、竜骨のシルエット、崖の上の少年の濃紺の姿。それらが夕陽をバックに映しだされる。まさしく一幅の絵で

ある。それを石森は、「近代風の畫地」だと述べる。

(前略) こゝはもう老鐵山の眞裏なのです。鴨や山雉がとれるといふ谷を越えると、はるか向ふの岬の上に、眞白な燈臺が見えました。

「見えた、見えた。」

私は思はず、呼びかけました。藍の海、銀の空、鳶色の岬。その間に、すつきりと突立つた白い燈臺。その周囲をめぐる白い石壁。

(中略)

風のおさまった空に、夕あかりがひろがつて、(事務室の) 東窓の白い鎧戸が、うす緑に映えてゐます。マチスの繪のやうな美しい部屋と空と窓です。(中略)

西の海に、今しも大きな朱色の夕陽が半分沈みかけてゐます。

(「春夏の巻」「老鐵山燈臺へ」一四三―一四五頁)

これは、老鐵山燈臺を訪れたときの文章である。刻々と変化する景色を石森は色彩で描く。夕映えに照らされた燈台事務室の部屋と窓、そしてそこから見える空を「マチスの繪」にたとえている。これら色彩豊かに、かつ西欧風に形容された風景は、石森の西洋画に対する造詣の深さからくる表現であるとはいえ、『まんちゅりあ』という英語表記と同じように、満洲の新しいイメージづくりの意図を指摘することができまいか。少なくとも、石森は、満洲を異国として認識し、自分の感性で満洲に対峙したといえる。

四 作品に見る石森の満洲観

石森は満洲をどのように見ていたのか。この渡満初期の石森の満洲観については、前項「内容別分類」による分析で、すでにほぼ明らか

になっている。ここでは、その内容を実際の作品で検証する。まず指摘できることは、石森は、満洲（中国）文化に対して敬意に近い思いを持っていたということである。

「ジャンク小旗」という作品がある。帆をはる小船（ジャンク）の三本帆柱の真ん中の柱の先につけられた小旗の趣を述べた作品である。（傍線は筆者。以下の引用文についても同じ。）

（前略）旗の色は、無地の紅ですが、もうどれも色があせてしまつて、先の方がびらびらにちぎれてゐます。藍色の旗も見えます。赤と白と半々に縫ひ合わせたのも見えます。中には、青地に赤く丸を染めぬいたのも見えます。

小旗の形は、短かいの、長い、三角の、紐のやうに細くて長い、さまざまです。

つくり方は同じ小旗ですが、その形が船々によつてちがつてゐるのはおもしろいではありませんか。その船に住む水夫たちの心もちが、その小旗にあらはれてゐるやうでおもしろいのです。

（中略）

無器用に立ち聳えた丸太檣の先に、触角のやうに敏感に身ぶるひするジャンク小旗は、悠大さの中に繊細な暗示をひそめた支那藝術の姿を思はせます。文字に、南畫・北畫に、陶磁器に、その象徴を思はせます。

陽がかげつてさあーと俄雨がおちてきました。一艘のジャンクに支那少年の水夫があらはれて、帆綱をそろく とひきおろしました。その帆綱の先には鳥籠がぶらさがつてゐました。中には、雲雀が、羽ばたきもせず、とまり木にしゃんととまつてゐました。（「秋冬の巻」三一六頁 傍線は筆者）

ジャンク船の帆柱の先につけられた、小旗は、雨風にさらされ、

色あせ、ぼろぼろになっている。石森は、その単純素朴な小旗の形や色、動きに目をとめ、そこに、水夫たちの個性を見る。そして、それらが、伝統的な中国文化とつながっていることに思いを馳せる。ここに、満洲（中国）固有の風物、文化に対する石森の発見とその趣を楽しむさまを見ることが出来る。

二つ目は、石森にとつて満洲とは、満洲（中国）固有の風俗と日本文化が共存する所であつたということである。石森は、両文化の共存を好ましいと思うと同時に、両文化の融合も望ましいと考えていたと思われる。

石森は、満洲風物を日本文化や日本人との関わりで描くという手法を多くとっている。そういう手法で満洲風物を描いた作品に「仲秋節の夜」がある。散文詩のような書き方である。ここでは、仲秋節を祝う日本人家庭と中国人の姿の両方が描かれている。（／は改行を表す。以下同じ）

（前略）今夜はせつかくのお月見ですのに、／萱、野萩、おみなへしを花瓶にかざり、／枝豆、お團子、栗、おさつ、仲秋月餅をお供へしたのに、／月は、ちつとも顔を見せてくれませんでした。／妹も弟もお母さんも、窓からちつと空ばかり見まもつてゐたのに。（中略）

たうとう月は、少しも光りませんでした。／私は妹と弟とをよびよせて、トランプでおばあさんめぐりをしました。（中略）

爆竹が、ひびいてきます。／青天白日旗の垂れた門口で、支那の子どもたちは遊びほうけてゐるでせう。

静かな夜です。それにしても暗い夜です。／お父さんの頁をくる音が、時々するだけです。

（「春夏の巻」一五一・一五二頁）

静かに月の出を待つ日本の月見と、爆竹を鳴らして家族団欒を楽しむ中国の仲秋節。それぞれが祝う仲秋節を描く石森の文章には、それぞれの文化を互いに尊重する姿勢が見られる。そして、日本人家庭のお供えに、中国の仲秋節の食べ物である「仲秋月餅」が置かれているところに、自然に生まれる文化の融合を石森が望ましいと考えていたことが分かる。

それを端的に表している作品に、「月ゴヨミ」（「秋冬の巻」五九一―六二頁）がある。四ページのカタカナ漢字まじり文である。要約すると、一月春聯、二月大豆を積んだ馬車、三月陸軍記念日の模擬戦、四月蒙塵、五月日本内地からの旅行団、満洲の学生は日本へ、埠頭はお別れテープで花園のよう。六月アカシアの香り、七月夕立と虹、八月マクワ瓜、九月カオリアン畑、十月ストーブの展覧会、十一月栗売り、サンザシ、石炭を積んだ貨車、十二月スケート、となる。陸軍記念日の模擬戦、日本内地からの旅行団、ストーブの展覧会、スケートは、日本の植民地建設後に満洲で盛んになったものである。これら日本によってもたらされたものと、満洲固有の風物、特に自然とが混在した姿が石森の見た満洲であり、石森の認識する満洲の姿であった。

三つ目は、石森が、日本の植民地建設による近代化に期待と誇りを持っていたことである。作品「夏の日を」で、石森は、建設途上の大連を次のように歌っている。

夏の日を

昭和四年の 夏の日を、／グレート大連 できてゆく。
高いボールの 根もとから、／遼東ホテルが できてゆく。
長いシュートの ましたから、／郵便局が できてゆく。

赤い煉瓦が 重つて 連鎖商店 できてゆく。
固い鉄骨 組みながら、／新聞社屋が できてゆく。
濱の潮風 あびながら、／埠頭倉庫が できてゆく。
昭和四年の 夏の日を、／みんなそろつて できてゆく。
（「春夏の巻」九三・九四頁）

石森が渡満した大連は植民地建設の真ただ中であつた。その活気が伝わる歌である。のち、石森は「グレート大連」（一九三一年六月一五日）³⁷という学校劇を発表している。そこでは、「連鎖街」や「埠頭」等の植民地建設を代表する大連の名所がそれぞれ力比べをするが、結局、どれも「グレート大連」を形造る大切なものである、という内容で、植民地建設によつて栄える大連を讃えている。同じ植民地建設を描いた作品に「大連連鎖商店」という作品がある。

大連の電気遊園の下に、連鎖商店ができあがらうとしてゐます。（中略）全体が一つ方針に統一されてゐます。ちやうど百貨店の賣場を各店が引受けたやうなかたちになつて、店舗は凡て一人の技術家によつて設計され、お互に手をつないで同じ營業をするから連鎖商店といふのです。（中略）この大連の連鎖商店は、ひたすらショウウキンドに力を入れました。（中略）やがてこゝは、清爽なしかも近代的な散歩街となつて、大人にも子供にもよろこばれるでせう。そしてこの連鎖商店は、大連の名物となるばかりでなくて、満洲の誇ともなるでせう。私は日本人だけの集まつた、唯一のこの買物街が、日に日に榮えてゆくことを願はずにはゐられません。（「秋冬の巻」九三―九八頁）

そして、石森は、連鎖商店が生まれるまでに至つた経過を次のよ

うに語る。日露戦争後、多くの日本人が移住してきた。中には小売商人もいたが、「支那商人」との競合や気候に負けて内地に戻る人も少なくない。そこで、日本人の小売商人を定着させるために、連鎖商店街の計画が持ち上がり、各官庁と満鉄の後援によって建設が実現したという。

この二編には、植民地大連の近代化の様子が描かれ、讃えられている。石森は、日本人の手によって、大連が近代的な都市に生まれかわることを誇りに思うと同時に、在満の日本の子どもたちとその偉業を伝えようとしている。

石森は満洲に住む中国人をどのように描いたか。中国人を描いた作品は四編である。うち二編は、石のオジャミをして子どもと遊ぶ「支那の母さん」(歌)と「支那人賣子」が居眠りしながら店番する「果物店」(歌)で、どちらも大人の姿をスケッチ風に描いている。四つ目に指摘できることは、石森は、中国人を描く場合も、風物を描く時と同じように、写生に徹し、積極的に彼らの内面を探ることも、石森自身の感想を述べることもほとんどしていないといえる。そうではあるが、石森の緻密な観察眼と的確な表現は、時に、満洲の子どもの真の姿を描き出し、石森の心情までも読み手に伝えてしまう。その例を二編挙げる。

「ろてんいちば」という作品がある。ここに描かれているのは、中国庶民の市場風景である。

よごれたテントのしたで、あをじろいかほをした支那の子どもが、そうめんをにてゐます。にえたぎったなべのなかから、すきとほったそうめんを、おはしでつまんでは、おちやわんにあります。そばには、くりい(苦力 筆者注)らしいのがたつてゐて、そのおちやわんをうけとるなり、つるつるとすゝります。天井にはがらすのくもつたランプが、しづかにさがつてゐ

ます。(中略)

蠣うりが、蠣のからをわつてゐます。われるのをまちわびてゐる七つほどの子どもがたつてゐます。その子は、弟らしいあかちやんをせおつてゐるのです。あかちやんは、まるはだかのまゝ、ちいさなせなかで、ぐつすりねこんでゐます。はへのむれが、あかちやんのほゝにたかつてゐます。(後略)

(「春夏の巻」七三―七六頁)

「よごれたテント」「あをじろいかほ」「ガラスのくもつたランプが、しづかにさがつてゐる」。すべて客観的描写でありながら、貧しさに疲れた「支那の子ども」が描かれ、痛々しげに目をやる石森を感じさせる。そして、牡蠣売りの親子だろう。蠅の群が背中の子の頬にたかつてゐる。子守りをしながら親の仕事が終わるのを待っている小さな女の子。ここでは「待ちわびてゐる」という、その子の内面に踏み込んだ表現が活かしている。

「子猫」という作品がある。この作品には、日本の子どもたちと中国の子どもたちが出て来る。そして、石森はこの作品で、対等な子どもたちの世界を描いている。

私は一日のしごとをすませて、かへつてきました。(中略)支那町通りを曲つて、社宅の小路に、はいらうとするとところに、生垣が路にそつて生えてゐました。(中略)ふと私の足もとに、石ころがいきなりとんできました。おもはずたちどまつて前を見ますと、八九人の支那の子どもらが、垣の向ふがはへ、石をしきりになげつけています。

よごれた紺の上衣へ、石をいつぱいに包んで、つかんではなげ、つかんではなげしてゐます。そしてなにやら大きな聲でさけんです。垣の向ふには、日本の子どもだちが、やはり八九人、

負けずにこちらへ、石を投げつけます。

(中略) なぜこんな石合戦をはじめるやうになつたか、そのわけはわかりません。(中略) もし、あの石があつたら、どちらの子どももかはいさうだ。私はどうしたものかと、見つめてゐました。

そのとき、垣の根を、一匹の子猫が、よろ　く　と歩いてきました。(中略) どちらの子どもも石をなげうつことは、ぱつたりやめてしまひました。そして申しあはせたやうに、しのび足で、子猫のそばへちかづきました。(後略)

(「秋冬の巻」一五八—一六四頁)

子どもたちは子猫を取り囲む。日本の子どもがボール箱を持ってくる、「支那の子ども」が食べ物を持ってくるというふうにして、みんな家に帰ってしまふ。

ここでも、石森はスケッチに徹している。しかし、ここには、「私」の視点がある。出来事がある。出来事を通して、対等にぶつかりあふ子どもたちの姿が描かれ、小さなものをいたわる子どもたちの心が描かれる。この作品は石森の実体験であろう。石森は、この出来事によつて改めて、どの国でも子どもの姿は同じ、対等であると確信したにちがいない。石森の人間性を思わせる作品である。日本と中国の子どもたちの日常を描いた作品は『まんちゅりあ』では、この一作だけである。

石森は、日本の子どもと中国の子どもとが対等に渡りあふ姿を描いた。だが、それは、子どもの世界だから存在しえたのではないだろうか。民族間の対等な関係は石森の望むところであつたらうが、大人の世界でそれは望むべくもない現実だということを石森は認識していたのではないだろうか。だから、石森は、風景の一部として、

中国人を描くしかなかったのではないだろうか。

五 『まんちゅりあ』の評価

『まんちゅりあ』の「序」は、石森の教科書編集部の同僚であり、文学仲間である矢澤邦彦が書いている。矢澤は、「近頃満洲の郷土化といふ事が喧しい」と、植民地満洲での動きを紹介し、過去に倣つた物の見方では、「満洲の郷土感」「愛着讃美の念」は起こらない、「先づ、満洲に對して、之を異國として中心より驚くことが必要である。」と説き、石森と『まんちゅりあ』収録作品について次のように述べている。

(前略) 我友石森延男君は、(中略) 常に目覺めた心を以て外海に接し、澄みきつた精神を以て之を鑑賞し、常に發見と創作にいそむ士である。その潑刺たる感受性と、奥へ奥へと突き入つてゆく不斷の努力とに對しては、實に敬服に堪へないものがある。(中略) 一篇一篇すべて君が心より驚き、心より感じ、發見創作した所のものである。實に貴重なる文献といはねばならぬ。これこそ我々が我が在満子弟の前に積み重ねて、彼等の教養攝取に任せたい、此上もない業績である。ひとり満子弟のみでない、在満の大人も、亦視察見物の人々も(中略) 更に亦元來土着の華人諸君も、改めて満洲の美を認識して、更に郷土の愛すべきを知らるゝ」(とある。)(「序」四・五頁)

収録された作品は、すべて石森の「心より驚き、心より感じ、發見創作した所のもの」であつて、日本人だけでなく、中国人にとつても、改めて「満洲の美」を認識させるものである、と絶賛している。これら文章には、「序」としての誇張的表現はあるものの、石森

と『まんちゅりあ』についての本質を述べていると筆者は考える。『まんちゅりあ』は、石森の目を通して描かれた満洲読物であり、作品からは石森ならではの物の見方や感性が読みとれる。だが、石森が取り上げたのは、満洲の良さのみで、満洲の暗部、つまり日本人と中国人の生活の格差や置かれていた状況の相違などは描かなかった。家庭教育雑誌「愛児と家庭」(第五巻第五号)は、『まんちゅりあ』の出版を次のように紹介している。

満洲讀書界に大きなショックを與へて、石森氏の『まんちゅりあ』が出版されました。家庭の好讀物として心から推薦したいと思ひます。(後略)(「第五巻第五号」「編輯の後に」七六頁)

「満洲讀書界に大きなショックを與へて」とは、どういう意味か。おそらく満洲を背景にした童話集が皆無に近い状態のところ、出版されて大きな反響を呼んだということであろう。この文章から、石森の『まんちゅりあ』が、当時「好讀物」として評価されていたということが分かる。

函館中央図書館所蔵の「ます野」(第五号・「上級用」)に、発行所宛ての講讀予約票が挟み込まれていた。そこに書かれた宣伝文には『まんちゅりあ』の活用法が次のように書かれている。

(前略)

○各編配列は、四季の順にしたから、家庭では季節よみものとなるでせう。

○國語(讀み方)、作文(綴り方)の副讀本として、一學期より二學期にかけて、「春夏の巻」を、二學期より三學期にかけては、(秋冬の巻)を使用することができよう。

○内地のお友だちに、又は旅の人にさしあげるのにふさはしい

おくりものです。

『まんちゅりあ』は「家庭よみもの」として、「副讀本」として、「満洲ガイドブック」として活用できるということである。

おわりに

在満の子どもたちに、自分たちの住む満洲の地で生れた讀物を提供したいという思いで出版された『まんちゅりあ』には、石森の満洲風物に対する新鮮な発見がある。石森は、先入観なしに自分の眼で満洲の自然、風物に向き合い、自分の感性で捉えた満洲の良さを美しい文章でしたためた。石森にとつて満洲とは、中国文化と日本文化が同居する所、日本の植民地建設によつて、近代化がすすめられていく所、それが満洲の姿であった。そこに、石森は日本人として期待と誇りを感じてもいる。だが、石森は、満洲に住む中国人を積極的には描かなかつたように筆者には思える。たとえ描いたとしても、それは風景の一部であるかのような描き方で、彼らの内面を描くことはほとんどなかった。

最後に、『まんちゅりあ』の中に見られる、その後の石森の文学活動の萌芽について指摘する。

収録されている作品に、童話形式の作品が十一編含まれている。のち、石森は「私は畢生の仕事として『童話』を創作してゆくつもりだ。」³⁸と述べており、実際、童話同人誌「新童話」を主宰し、童話創作に没頭していく。

また、『まんちゅりあ』掲載の「オハナシ」という作品には、母子の会話という形でお話作りの場面が出て来る。のち、石森は『綴り方への道』(一九三五年 啓文社)、『幼な子へのお話』(一九四〇年 修文館)のような作文・創作童話指導書を出版している。

第四章 童話同人誌「新童話」―石森童話の誕生

一「童話」への道

一九三〇（昭和五）年五月、石森は童話同人誌「新童話」を発刊する。これまで石森が発行してきた、中等学生向け雑誌「帆」、小生向けリーフレット「ます野」に続く在満日本人の子ども向け雑誌である。だが、この「新童話」は、「帆」「ます野」とその発刊趣旨が異なる。それは石森の創作境地の変化による。

石森は、父和男の遺稿集『谷廼葦切（たにのよしきり）』（一九三〇年二月）の「後序」で次のように書いている。

私は畢生の仕事として「童話」を創作してゆくつもりだ。それには種々の意味があるけれど、父母からうけた性格と、亡くなつた弟への思慕とが泉になつてゐる。

渡満後中等學生讀物として「帆」六巻を刊行し、さらに小學生讀物として「ます野」十巻を刊行した、これらは、滿洲的郷土色を帯びたものだが、今年から、純粹な童話境地を進んでいかうと考へてゐる。現代日本の童話界は、まだいくたの拓くべき所があり、築かねばならぬものがとり残されてゐる。私は残る半生をこれへぶちこむ。父は歌を道として、人生行路を歩いた。私は童話をそこにおきかへる。（「後序」三六頁）

この引用文から次のことが分かる。

一つは、石森の創作境地の変化である。生涯の仕事として童話創作を行うということ、これまでこだわり続けてきた滿洲色の童話創作を止めて、純粹に童話創作に向かうということである。石森が自

身の資質に目ざめ、啓蒙ではなく、自分の為に創作活動を行う決意を固めたということである。

もう一つは、当時の日本童話界に対する不満である。石森は、当時の童話界は「拓くべき所」「築かねばならぬもの」が取り残されている現状にあるという。それに対し、石森は果敢に挑む決意を固めたということである。

では、石森は当時の童話界をどのように見ていたのか。

石森が書いた「このごろ」（「石森スクラップ 57」）という一編の文章がある。出典も発表日時も不明であるが、内容からおそらく、一九三〇年前後に書かれたものである。当時の子ども雑誌に対する批判が次のように述べられている。

何々クラブといった少年少女雑誌が横行して、玩具箱を眞晝にひつくりかへしたやうな蕪雜さを兒童に注ぎこんでゐる。危険なる好奇心と、傷つきやすき感傷と、俗悪なる争鬭心とに詔つた記事を、露はに、日本少年少女の前に並べたてゝゐる―あゝ童心よ。雄々しかれ。鈴木三重吉氏が「赤い鳥」の休刊號に言ひ残した悲壯なる叫びは、そのまゝ私の心に傳つてくる。圓本が、良書來版に禍ひしたやうに、諸雑誌は、今や見えざる兒童の神聖なる殿堂に土足のまゝでしのびこんでゆく。（後略）

（「このごろ」五月二十二日脱稿 五五頁）

この文章は、役人をやめ、短歌道に進む学生時代の友人五味保義宛の手紙という形で発表されたものである。引用文にある「赤い鳥」の休刊は一九二九年三月、復刊は一九三一年一月であるので、この文章の発表は一九二九年か一九三〇年頃であろう。ちょうど石森の創作境地の変化の時期と重なる。「何々クラブといった少年少女雑誌が横行」とあるが、これは、「赤い鳥」に代表される芸術的雑誌とは

対照的な「少年倶楽部」(一九一四年十一月創刊)等の大衆的な雑誌の隆盛を指していると考えられる。「圓本」とは、「一圓」で買える廉価な児童書のこと、大正末期に「圓本」ブームが興り、「日本児童文庫」(アルス社一九二七)等の廉価な児童書の全集が刊行された。このような当時の日本児童書界の現状は、芸術性を重視し、子どもの健全な成長を促す児童読物こそ良書だと考える石森にとっては憂慮すべきことであつたのだろう。

童話に対する創作境地の変化と当時の童話界に対する憂慮、及び千葉省三、水谷まさる等の「童話文學」との出会いが、おそらく石森に「新童話」の発刊を促したのであろうと筆者は考えている。

「新童話」の先行論文に、柴村紀代「満州児童雑誌『新童話』について―函館図書館児童雑誌コレクションによる―」³⁹があり、「新童話」の全容がほぼあきらかになっている。だが、柴村論文は第二十号までの「新童話」に基づいているので、「新童話」に関する書誌事項については、一部新たな補足を行った。また、ここでは、「新童話」発刊に影響を与えたと考えられる「童話文學」(千葉省三主宰)との関わり、「新童話」刊行と時を同じくして大連で起こった「童話論争」について述べる。石森は「新童話」に作品を発表していくなかで、自身の童話スタイルを育てていったと考えられる。その点についても検証する。

二「新童話」の概要

(一) 書誌事項

一九三〇(昭和五)年五月創刊。一九三二(昭和七)年十一月終刊。全五〇冊(推定)。子ども向け童話雑誌。A5縦判。縦書き右開き。編輯人は政本勇、発行人は石森延男、発行所は満洲學生讀物研

究會。第二号から発行所は新童話社となる。発行地は大連。第一号から第二十号までは各月一冊発行で定価十五銭(郵税含む)。表紙絵はカラーで、本文の漢字には漢数字以外はすべてルビがふられている。

第二十一号(一九三二年二月)からは各月三分冊(初級用・中級用・上級用)、定価各十銭。表紙はモノクロ。一九三二年九月に、「郷土満洲」と改題、その年の十一月で終刊となる⁴⁰。終刊号はカラー表紙。

販売方法は、店頭販売ではなく、小学生は学校の担任の先生が取りまとめて申し込み、個人の読者は、発行所「新童話社」への直接申し込みであつた⁴¹。購読者は、四三〇余名。大連が一番多く、ほかに奉天、長春、ハルビン等にも及ぶ。⁴²

同人は以下のとおりである。同人の所属は、現時点で分っているのは、教科書編集部所属か、小学校教師である。

伊賀良一・石森延男(筆名 丘光・旗野二郎)・茅山つゆ・桐畑まゆみ・小池歩・境一之(本名 境野一之)・杉野一湧・政本勇(筆名 綾不美男)・峰ふぶき・森川昇治・八木橋ゆじろ(本名 八木橋雄次郎)・弓削眞砂明(本名 弓削應明)(五十音順)

尚、「新童話」に関する詳細な内容は、「資料集(資料13)」を参照願いたい。

(二)「新童話」の歩み

(1) 発刊と終刊

「新童話」の編輯人である政本勇が「石森延男氏論」(「石森スクラップ57」)の中で、「新童話」の発刊と終刊について述べている文章がある。少し長いが、発刊の思いと終刊の理由が分かるので引用

する。

(前略)丁度昭和五年の正月です。二人で色々話してゐたら、「どうだ、二人で童話雑誌をやらうか」といふことになったのです。實は私もその頃一生懸命古文の研究をやつてゐたので、創作の方面はあまり自信もなかつたのですが、好きな道だし、思ひ切つて「やりませう」といつたのです。(中略)

新童話といふ名前でスマートな表紙をつけて五月號がいよく出ました。一人で二つも三つもづつペンネームで載せてゐました。石森さんのは丘光、旗野二郎、私は綾不美男、世間からの反響もかなり大きかつたです。満日大連の新聞誌上でいろいろたゝかれ反駁もしました。石森さんがいつも矢表に立つて奮闘してくれました。兎に角面白かつたです。(中略)

昭和六年の十二月に石森さんが童話集『どんつき』を出し、私が『白いねずみ』を出版しました。二年目から境野、八木橋、小池、杉野、桐畑といった連中が同人に加はつて大した勢でしたが、昭和七年十一月石森さんが視學になるといふ話が持ち上がった時、同人は思切つて休刊してしまつたのです。経済的苦衷といふよりも、視學といふ名前が純潔な新童話の上に一點のしみを作ることとを恐れたからです。(「石森スクラップ 57」)

「帆」、「ます野」に続く「新童話」が、二年半ほどの刊行のち、終刊する。それは経済的な理由より、「視學といふ名前が純潔な新童話の上に一點のしみを作ることとを恐れたから」だという。それはどういうことか。具体的なことが書かれていないので、詳細は不明であるが、のち、同人の八木橋雄次郎がこの「新童話」廃刊について「(石森)先生が視學になつたために、迎合する者がいて発行部数が急に伸びたりする場合のことを心配されてのことではなかつたらう

か」⁴³と書いている。純粹な文学活動が、政治的な、世俗的なものによつて影響を受けることを恐れた結果であつたということだろう。同人たちの創作姿勢としては、外部から制約されることなく、各人の内的な発露による童話創作を目指したということであろう。

(2) 歩み

筆者が現物確認したのは、「新童話」は二七冊、「郷土満洲」は一冊のみ(第四十七最終号・中級用)であるので、主に「新童話」二七冊から分かる「新童話」の歩みと内容の変化をたどる。

「新童話」「創刊号」(一九三〇年五月十日発行)には、発刊意図や趣旨を述べた文言は全くなく、作品のみの掲載である。だが、「新童話」という雑誌名にこの雑誌の発刊意図が表されている。のち、石森が編集した叢書「満洲文庫」の文学篇(一九三五年五月)の「後記」に「新童話といふ意味は、新しく創作した童話といふので、今までなかつたものといふ意味なのです」と説明されている。つまり、「新童話」とは、満洲の「今」を生きる人々によつて書かれた新しい童話を載せた雑誌だというわけである。

前出の引用文にあるように、石森と政本二人から始まつた。二人は本名の他に複数のペンネームを用い、同人雑誌の体裁を整えて創刊にこぎつけた。そんな感じの出発であつた。表紙絵は、満洲在住ののち東京で活躍する高橋庸男である。「創刊号」掲載の作品には、特に満洲色はみられない。

誌面が変化し、記事内容が豊かになるのは、「第六号」(一九三〇年十月)からである。

まず、「後記」の欄が設けられたこと。「後記」はほとんど記名がないが、なかには「石森」と記名された号もあるので、記名のない「後記」はおそらく編輯人である政本勇が書いたと思われる。文中

に、しばしば「われら」という言葉が使われていることから、「後記」の内容は、同人の共通の思いや共通認識でもあったと推測される。

次に、児童作品が掲載されていること。「後記」によると、かねてより児童作品の掲載を考えていたがふさわしい作品がなく、やっと今回、「西原慶一氏の好意によつて」「教へ子の作品」（成蹊學院児童・荻部百合子）を得たとある。その作品は「電車の中で」という作文で、自分の体験を書いている。西原慶一は石森と香川師範以来の付き合いで、当時は東京在住で、成蹊學院で教鞭をとっていたようだ。

さらに、中国人の作品が掲載されたこと。掲載された中国の訳詩は、中唐の詩人錢起の「帰雁」である。訳詩は七五調の口語定型詩で、リズムカルな童詩風である。この細目の中で確認したかぎりでは、中国人の作品は、この一編だけであるが、中国の文化を紹介しているこうとする姿勢の表れと捉えられる。

「第六号」に描かれた谷山静生の表紙絵は、「童話雑誌の表紙としてふさはしい暗示的なもの」、江島京之介の挿画は、「挿畫として獨立した藝術境を拓いてゐる」と「後記」で評価されている。谷山も江島も在満の画家である。表紙・挿画も含め、在満者の手からなる、よりよい童話雑誌を作ろうという同人たちの強い思いが感じられる。また、これまで毎月第二土曜に、「新童話座談會」を開いて「お互に創作態度を練り作品の批評をしてゐたが十月よりしばらく休むことにした。一通り話しあったからである。」（「後記」）とあり、この頃に、童話雑誌「新童話」の方向が確定したと考えられる。

「第九号」（一九三二年一月）から雑誌の体裁が変わる。二段組にして「カタカナ童話」、「ひらがな童話」「なぞなぞ」そして、十数編の児童作品を掲載している。だが、児童作品の内容は特に満洲を特徴づけるものではない。本号から学齢を意識した編集にもなっている。「第十二号」（一九三一年四月）の最終頁に各作品解説が入り、課外読物としての教育的配慮がなされている。

ここで、「新童話」のうたい文句について考える。「第十二号」に挟みこまれていた「講讀申込書」に書かれていた文章がある。

あくどい子供雑誌がはびこつてゐます。ジャーナリズムの流れがおしよせてきてゐます。そのために日本には、ほんとによい童話誌が、つぶれてしまひました。それではいけません。どうしても子供のために正しい味方がなければなりません。「新童話」はこんな意氣ごみで生れたんです。この新しい童話運動には、中央の童話作家たちも、力ぞへしてくれてゐます。

「新童話」は、あくまでも新鮮で正しい藝術的に深まつた作品のみを精選して發表します。

お子さん方のためには、また、家庭誌として親御さんのためにも、ぜひよんでほしいのです。

「ほんとによい童話誌が、つぶれてしまひました」とは、一九二九年三月に休刊した「赤い鳥」のことであろう。「この新しい童話運動には、中央の童話作家たちも、力ぞへしてくれてゐます」とは、「童話文學」⁴⁴で「新童話」が、「體裁も内容も、現在では全く他に見られない努力のこもつたものだ」「是非一讀をおすすゝめしたい雑誌である」と紹介されたことをいっているのであろう。『新童話』は、あくまでも新鮮で正しい藝術的に深まつた作品のみを精選して發表します。」とある。宣伝文としての誇張は当然あったであろうが、石森らの「新童話」同人の意氣ごみと固い決意の表明だといえる。

さらに「第十二号」に挟みこまれていた申し込み葉書には、「満洲唯一の純童話月刊集 新童話」となっているが、「第十三号」（一九三一年五月）では、

私たちの『新童話』は日本唯一の子供のための純童話雑誌です。

一つには藝術としての美しさを、一つには教育的朗らかさを持つてゐます。(第十三号・表見返し)

とあって、「日本唯一の子供のための純童話雑誌」に変わっている。当時、子供のための純童話雑誌としては「赤い鳥」があった。「赤い鳥」は、一九二九年三月に一時休刊したが、一九三一年一月には復刊しており、厳密に言えば、「新童話」は「日本唯一の純童話雑誌」ではない。だが、石森の意識としては、「日本唯一の純童話雑誌」と豪語してもよいほどに、この「新童話」に対する自負と思い入れがあったと考えられる。

「第十六号」(一九三一年八月)から誌面が変わる。

まず、組み方が二段から一段に変わる(但し、「第十九号」からは元に戻っている)。さらに、「満洲児童よみもの」として「その月々にあつたためらしいことや、満洲らしい風景や、新鮮なよみもの」を選んで掲載とある。満洲色が強くなり、さらに時事内容も加わる。最初は「防空の日」として、「大連市を敵の飛行機がおそつてきた時、市民たちはどうしなければならぬかを教へた演習」の記事を掲載。同人が輪番で執筆を担当したらしく、この回は石森の担当であった。「第十八号」(一九三一年十月)には、同人による連作童話を掲載。連作童話という形式は、「満日コードモページ」⁴⁵ですでに試みられている。同人五、六人で各章を担当して一編の童話に仕上げる。筋立ても、文章の味わいも担当者次第。「満日コードモページ」では比較的評判はよかったようで、石森はここでもその形式を採用している。趣向としては面白いが、作品完成度という点では不足である。

「第二十一号」(一九三二年二月)より三分冊(初級用・中級用・上級用)となる。課外読物として、より細分化した学齢別の編集であるが、頁数も少なく、紙質も劣る。「先生とお母さんに」欄が新設され、そこに「本年度から(中略)三種に分冊して郷土的文学をふ

くめることにきめました」とある。また、上級用の「後記」によると、「やつと『新童話』の改訂版を、お手もとにさしあげることができました」「一月号はその準備のために休刊いたしました」「同人は、一生けんめいです。せめて、筆でお國のために御奉公しようと申しあはせてゐます」と書かれている。実際、収録作品に満洲色が濃くなっており、さらに戦時色も強めている。戦時色については、次の「四」「新童話」における石森作品」の項で述べる。

一九三二年九月からは「郷土満洲」と改題。

(これ以降の号は、筆者未見)

一九三二年十一月に終刊。「郷土満洲」中級用 十一月号(第四七号・函館中央図書館所蔵)を見る機会を得た。最終号ということ、カラーの表紙絵(境一之)である。目次の下に「みなさんと、／いつしよに歩いてきた／『郷土満洲』は、／この十一月號をもつて、／終刊號といたします。／これは、同人がもつと、もつと、／いゝお勉強をするために／一まづおわかれすることに／したのであります。(後略)」と終刊の挨拶が述べられている。終刊に至った事情については前述したので省く。

三 「新童話」における石森作品

石森は「新童話」に毎号、作品を発表している(「資料編の(資料5)」「石森延男著作目録」参照)。筆者が現物確認した「新童話」(二七冊)及び「郷土満洲」(二冊)の中に収録された作品は約五十編(筆名丘光・旗野二郎による作品も含む)に及ぶ。その中には、童話、童詩、学校劇の脚本(「三臺の馬車」「ふるさと」)やルポルタージュ(「満洲児童よみもの」「防空の日」)等がある。また、「新童話」の中で「童話」とされる作品には、今日のジャンル分けでは「散文」と呼ばれるリアリズム作品も含んでいる。ここでは、それらリアリズム

ム作品も含めた「童話」と「童詩」について、具体的な作品を挙げて、石森作品の特徴を探る。

石森の筆名で、現時点で明らかになっているのは、「丘光」と「旗野二郎」である⁴。筆者が見る限り、石森が作品の内容によって、この二つの筆名を明確に使い分けているように思えないので、この筆名で書かれた作品も含め、いっしょに論じることにする。

(一) 童話

(1) 発想の妙味

「影に乗って」(丘光の筆名・第一号)という作品がある。

空に泳ぐ鯉のぼりを見て、鯉のぼりが欲しくなった皓。だが、家計を思うと口に出せない。隣の家主の庭に初孫の大きな鯉のぼりがある。その鯉のぼりの影が皓の家の庭におちる。植木屋の父が持ち帰った菖蒲を頭と腰に差して「金太郎」になった皓が鯉の影にまたがって、風の揺れとともに体を動かし、それを見て両親が笑う。

作品には、家主の大きな鯉のぼりを羨む心も、また貧しさを悲しむ心も描かれていない。ただあるのは鯉のぼりの影に乗って得意満面の皓とそれをほほえましく見守る父母の姿である。「影に乗る」という発想の妙味が光る小品である。

(2) 小さな命への慈しみ

石森は、小さな命を慈しむ心を作品の中で多く描いている。

「卒業するころ」(旗野二郎の筆名・第一号)では、校舎の屋根に住みついた野良猫の親子を見守る貧しい家庭の少女の心が描かれ、「家主と野鳩」(第三号)では、家の軒下に巣を作った鳩の家族を見

守る少年の心が描かれている。「國王と少女」では、國王を迎えるために豪華に設えた舞台で暴れて、すんでのところで殺される犬の命を救った少女とそれを讃える王の姿を描く。また、「山羊とタヤケ」という作品では、病気で乳の出なくなった人の赤ちゃんのために毎日山羊の乳をとどける少年の姿を描いている。

(3) 存在の意味を問う作品

石森の作品で、そのものの存在を問う作品が幾編がある。「そのものの存在を問う」とはどういうことか。

「雁とブルスニカ」(第一号)という作品がある。

シベリヤを渡る群れから脱落した一羽の傷ついた雁に我が身を与え励ますブルスニカの赤い実。曠野を旅するものが飢えないために、自分たちは存在し、それは神から与えられた役目だとブルスニカは語る。

この作品は、のち、「満洲文庫」の文学篇『満洲新童話集』にも収められており、石森はこの作品をこよなく愛していたように思える。与えられた場所で自分の役目を果たす、そんな石森の人生観を窺わせる作品である。

「砂山の濱なす」(第五号)という作品では、海で遭難した息子を探し求めるおばあさんのために、おいしい実を結んで力づけようとする「濱なす」の花の心を描いている。また、「海と太陽」(旗野二郎の筆名・第四号)では、毎日同じ旅を繰り返す太陽といつも同じ所にいる海とが、互いの存在を不思議に思い、その疑問の答えを風の助けで互いに知る。地上のものを育てるためにと答える太陽と、水の中のものを育てるためにと答える海。互いの心を知って太陽と海は共感しあう。

擬人法によって描かれたこれら作品世界からは、自然物の一つ一

つに存在意義を見出す石森の姿勢が窺える。これら自然物は常に「他」との関係において、存在意義が見い出されている。「ブルスカ」の「赤い実」は「傷ついた雁」に我が身の一部を与えることによって自身の存在意義を見い出す。「濱なす」も「傷心のおばあさん」に我が身の一部を与えようとする。「他」の命を育むために、一生同じことを繰り返す「太陽」と「海」。いずれも、「他」を生かすことによって自分が生かされているという自己犠牲的な愛を描いている。ここに挙げた三編は教訓的な作品である。船木枳郎は石森の作品を「教化的」と評し、「この教化的ということは彼の読物の長所でもあり、文学としては短所でもある」⁴⁷と述べている。船木の指摘は、これら存在の意味を問う作品について、筆者も同意見である。

(4) 見捨てられた物への哀感

石森は、不要になって見捨てられた物を哀感こめて描いている。「古い城壁」(第二号)では、昔の栄華の跡すらとどめないほどに、広告で埋まってしまった城壁の変わりようと嘆きを描き、「飛ぶ新聞紙」(第十号)では、インクの匂いも新しく送り届けられた新聞紙がその夕方には、捨てられ、行くあてもなく風にさすらう姿と嘆きを描いている。

「一年セイ」(ワカヒカルの筆名・第十二号)というカタカナ童話がある。ここで描かれるのは、一年生になった男の子の誇らしげな様子と、その男の子が捨てたメンコをそっと拾って筆筒の引出しにしまう母心とを描いている。

(5) 貧しい者に寄り添う姿勢

石森の童話には、貧しいけれど温かい家庭がしばしば登場する。

そして主人公たちは皆いじけず健気である。「影に乗つて」の皓、「卒業のころ」のお貞、「家主と野鳩」の少年はみな、貧しいけれど小さな命に慈しみを持つ子どもとして描かれている。

満洲を題材にした作品「おし花」(第二号・上級用)は、満洲の裕福な日本人家庭で「女中奉公」する娘の話である。娘は生けられた椿の花にふるさとを懐かしむが、厳しい寒気に一晩で散ったその花の姿に自分の境遇を重ねあわせ、おし花にする。

これら貧しい者に寄り添った作品群の手法として、石森は、それら作品の中に金持ちの家庭を対比的に登場させている。「影に乗つて」の皓の場合は、隣の大家さんの家庭であり、「家主と野鳩」の少年の場合は、鳩を巣から追い出す「家主」であり、「おし花」の場合は、一晩で散った椿に何のいとおしさも示さないお嬢様の態度であったりする。その対比はいささか図式的ではあるが、石森の貧しい者に対する共感が強調されている。

以上、「新童話」の中から具体的に作品を挙げて石森童話の特徴を探った。その特徴をまとめると、発想の妙味、小さな命への慈しみ、存在の意味を問う内容、見捨てられた物への哀感、貧しい者に寄り添う姿勢が挙げられる。これらを一言で述べるなら、それは人間を取り巻くすべての事物に対する愛おしさともいえるようか。日常のささやかなものに、ふと目をとめてそれを美しく無駄のない表現で一編の作品にする。そんな創作姿勢が感じられる。

前川康男は石森文学を大別して、童話風エッセー、空想童話、写実的な長編物語の三つのジャンルに分けている⁴⁸。筆者はその三つの分類に、写実的な短編を加える。童話風エッセーは「ます野」でその文才がいかになく発揮されている。「新童話」では、写実的な短編と空想童話が際立っている。

(二) 童詩

次に、「新童話」における石森の童詩を取り上げる。筆者が確認した「新童話」二七冊の中に、筆名で書かれた作品も入れて、童詩六編、童謡一首が確認できている。それら作品の発表はいずれも、三分冊後（第二一号以降・一九三二年二月以降）である。

「新童話」第二一号発行は一九三二年二月である。その前後は満洲に大きな変動があった。一九三一年九月十八日満洲事変勃発、一九三二年三月一日満洲国建国。

前述したように、一九三二年二月から、「新童話」は学齢別の三分冊（初級用・中級用・上級用）となり、上級用の「後記」では「せめて、筆でお國のために御奉公しようと申しあはせてゐます」と述べられており、三分冊前後から満洲色が濃くなり、戦時色も強くなっている。同人たちの国策への協力意識が強くなってそれが実際に作品に反映されたかどうかは個別に検討する必要があるが、少なくとも、その変化は、ここで紹介する石森の四編の童詩に表れている。

石森は、第二一号の三分冊に四首、兵隊を題材とした作品を掲載している。記名は本名の他に筆名を用いている。

タノミマス

日ノマル／日ノマル／フリマシタ。／ヘイタイ サン モ／
フリマシタ／バンザイ／バンザイ／フリマシタ

オクチ ヘ／オクチ ヘ／イキマシタ／ヘイタイ サン ハ／
イキマシタ／ゲンキ デ／ゲンキ デ／イキマシタ

サヨナラ／サヨナラ／イヒマシタ／ヘイタイ サン モ／
イヒマシタ／シツカリ／シツカリ／タノミマス

「カイセツ」（本号二三頁）によると、この作品は、満洲事変後に兵隊さんが北の方に行く度に日の丸の旗を持って停車場で見送る、その時の情景だという。日常的な情景となっている当時の停車場の様子が分かる。さて、兵隊は奥地に、何をしに行くのか。日本の関東軍は中国軍に見せかけて鉄道を爆破、それを口実に満洲を武力で制圧（一九三一年九月十八日「満洲事変」）し、翌年三月一日、清朝の最後の皇帝「溥儀」を擁して強引に「満洲国」を建国した。そのため、満洲の各地で日本の統治に対する抵抗運動が起こった。兵隊はその反満抗日勢力を討伐に行くのである。北に行く兵隊は必ず、大連を経由し、その度に市民は盛大に見送ったのである。

次に、中級用（同年月日 第二一号）に掲載された童詩は、石森の記名である。

こんばんは

ひどい かぜ だね、／こんばん は。／チチハル あたり
の／へいたい さん／さむくて さむくて どう でせう

それ に ゆき だね、／こんばん は。／チチハル あた
りも／ゆき でせう。／ゆき に ふられて／見はりして。

かかう おてがみ／こんばん は。／チチハル に あてて／
おくりませう／ごくろう さま です、／かきませう

「解説」（二三頁）には「これは、雪のふつてきた夜、そして寒い

夜、チチハルあたりで、はたらいてゐられる兵隊さんたちのことを、しみぐとおもひだしてゐる子どものうたです」と書かれている。これも満洲事変後に生じた生活の変化である。石森は積極的に慰問文を書いて送ることを提唱している。

上級用（同年月日 第二一号）の冒頭に掲載された「丘光の筆名」による童詩。

われら日の本の民

空にかがやく日のごと／光あまねき尊き歴史／われら、日の本の民／正しくあれ、

四方にただよふ海原／波にあらしに育ちし島根／われら、日の本の民／雄々しくあれ、

ともに手をとれ同胞／いざやこぞれよ同胞すべて／われら、日の本の民／まもれよ皇國

文語調の勇壮な童詩である。「解説」では、次のように書かれている。

日本の國民は、第二國民のあなたがたは、このうたのやうでなければならぬ。世界人として、大手をふつて歩いていかなければなりません。ことに、滿蒙維新のこの際、こゝに住む日本民族は、本當に強い正しい民族として、思慮し、行動しなければなりません。

「滿蒙維新」とは、「滿洲国建国」を指している。滿洲国建国によ

つて、滿洲の植民地化が新たな段階を迎える。石森は、それに共鳴し、在滿の少年少女たちを鼓舞している。

同号上級用にはもう一首、石森の童詩が掲載されている。

氷の空

氷の空を／爆撃機が／ま一文字に／うなつてくる。／なんていゝ／ひびきだ。

地べたはふる／あゝの爆音に／僕もぞくぞく／うれしいよ。／すばらしい／怪鳥だよ。

日光の中を／つばさをはつて／日本のしるしだ／日の丸だ。／どうだい／いゝだろ。

「爆撃機」のうなりは「いゝひびき」。その「爆音」に「僕もぞくぞく」「うれしい」「すばらしい」「つばさ」の「日の丸」、「どうだい／いゝだろ」。軽快に歌われた戦時下の少年の心。戦争讃歌である。写實的な短編や空想童話で人間を取り巻くすべての事物一つ一つに愛おしさを表現した石森と、これら四首の童詩で勇壮で、軽快な戦争讃歌をうたう石森。いずれも、石森の姿である。

四 「童話文學」と石森延男

ここで「童話文學」と石森との関係を押さえる理由は二つある。一つは、「童話文學」と「新童話」の結びつきを探るためである。それは、「童話文學」が、「新童話」発刊のきっかけを作ったと筆者が考えるからである。なぜなら、「童話文學」の創作方向と石森の童

話観が類似していること、「新童話」の発刊時期が、石森が「童話文學」と関わりを持った後のことで、しかもその時期が非常に近いからである。

もう一つは、満洲をホームベースとして活動していた石森が、内地の童話雑誌である「童話文學」にその活動範囲を広げた、その事跡を確認するためである。

(一)「童話文學」について

「童話文學」は、一九二八（昭和三）年七月一日に創刊。一九三一（昭和六）年十一月休刊。一九三五年（昭和十）年十一月、「児童文學」と改題して復刊。月刊の童話雑誌である。「童話文學」の編輯兼発行人は水谷勝。発行所は童話文學社。同人に千葉省三、酒井朝彦、北村壽夫らがいた。復刊後の「児童文學」の編輯兼発行人は室淳。編輯所は童話文學社、発行所は鳩居書房（東京）。同人に千葉省三、酒井朝彦の他に伊藤貴麿、稲垣足穂が名を連ねる。特別寄稿家として小川未明、石森延男、水谷まさる、坪田譲治の名がある。

(二)「童話文學」と石森延男の関わり

「童話文學」における石森作品の掲載、及び「童話文學」と「新童話」の関係については、「末尾資料1 『童話文學』と『新童話』の中の石森作品」と題した資料を添付したので、詳細はそちらを参照願いたい。ここでは、概略を述べる。

最初に「童話文學」に登場する石森作品は、童謡「夕あかり」（一九二九年十一月一日・二巻十一号）⁴⁹である。大連の日本人町の「杜宅うらまち」を歌った生活感のあるこの作品は、石森が在満の小学生向けに出していた「ます野」（中学年用・一九二九年九月十日 第

四号）に、ほぼ同時期に掲載されている。この作品が「童話文學」に掲載される経緯は定かではないが、千葉省三が（石森さんは）「満洲野」というパンフレット風の小雑誌を出しておられ、わたしは、それを毎号送っていただきました」と書いていることを考えると、この作品掲載は千葉省三の推薦であったのかもしれない。この号の「童話文學」の「編輯後記」で酒井朝彦が、石森のことを「特異な環境と作風とを有つ有望な新進作家である。われらは遠い海の彼方に、かかるよき同士を有つことを痛切に喜ぶ」と述べている。

次に掲載されるのは、「一本道」（一九三〇年二月一日・三巻二号）という少年時代の故郷の思い出を語った作品である。この号の「編輯後記」で、水谷まさるが「満洲へ旅行した時に、親しく石森さんにお目にかかつて、忘れ難い楽しい時間を持ちました。同じ道につながる人を、旅で知る愉快さは、まったく知る人ぞ知ると云っておきませう」と書いており、水谷が石森と交流のあったことが分かる。これ以後、石森作品は、「童話文學」にほぼ毎号のように掲載される。

石森作品掲載の度に、「編輯後記」に石森に関する記述がある。作品評（三巻四号）であったり、寄稿への感謝（七巻一号）であったりする。「童話文學」同人たちと石森との関係が親密になっていることが分かる。

一方、石森は、一九三〇（昭和五）年五月、大連で「新童話」を創刊する。「童話文學」から童話創作方法や装丁の影響を受けながらも、石森は「新童話」では独自の雑誌を目指した。それは次の二点から明らかである。一つは雑誌名「新童話」で表された、満洲在住者による、生活実感から生れた作品の創作を目指したということ。

もう一つは、低学年の子ども読者をも意識した細やかな編集がなされているということ。この点は、「童話文學」が同人の作品の発表の場という点に主眼を置いていたのとは異なる。漢数字以外の漢字に

は総ルビをふり、カタカナ童話、ひらがな童話、児童の作品掲載など、これら子ども読者に向けた細やかな編集は、副教科書編集で培われた石森の編集手腕の表れであろうし、石森が課外読物としての童話雑誌「新童話」を考えていたということである。

石森は、大連の「新童話」に精力的に作品を発表しながら、「童話文學」への寄稿を続け、一九三〇年十一月、「童話文學」の同人となる。その「編輯後記」に「われらは君を得て意を強うし、一層斯界のために精進しよう」と歓迎の辞が述べられている。さらに、「石森氏のあちらで出してゐられる『新童話』は、體裁も内容も、現在では全く他に見られない努力のこもつたものだ。本誌の讀者讀君^{ママ}に、是非一讀をおすゝめしたい雑誌である」と「新童話」の宣伝をして、満洲における石森らの活動をバックアップしている。石森にとつて、「童話文學」への参加は、自身の世界を広げ、優れた児童文学仲間を得るという意義ある事柄であつたといえる。

石森が同人になつた経緯ははっきりしないが、少なくとも、「童話文學」が目指す童話創作に共鳴しての入会だと考えられる。

(三)「童話文學」が目指した童話創作

「童話文學」が目指した童話創作の方向とは、どういうものであつたのか。「童話文學」創刊号（一九二八年八月）の酒井朝彦著「童話の描く世界」（二九頁）にこうある。

- ・童話はもつとも特異なもので、従つてその藝術的な香りの高いことに於ても、詩や戯曲と等比さるべきものである。
- ・童話が藝術として存在するには、
 - 1 一つの散文詩であるべきこと
 - 2 その詩の基調を成すものは純眞な童心の輝きである。

3 童話としての形式にまで具象化するのには、表現の力であり、生命である。

4 童話を新藝術として生かすうへに大切なのは、その作そのものが、リアリズムの精神の上に築かれてゐるべきことである。

5 童話を單に兒童對照^{ママ}の讀みものであると極限せず、廣く人類一般への讀みものであると解釋するのは妥當である。

童話とは「藝術的な香りの高いこと」は、詩や戯曲と同じである。

童話創作の方向とは、「一つの散文詩」であること。その詩の基調となるのは、「純眞な童心」である。「童話として具象するのは」「表現の力であり、命である」。童話を「新藝術」となすのは、「リアリズムの精神の上に築かれて」いること。童話は児童だけを対象とするのではなく、「廣く人類一般の讀みものである」と解釈すべきだといふわけである。

ここで述べられる童話論は、石森の童話論とほぼ同じである。

石森の童話論については、次項で述べる。

五 大連を中心に興つた童話論争

「新童話」刊行（一九三〇年五月）と時を同じくして大連を中心に新聞紙上で「童話論争」が興る。ちょうど、石森が「童話文學」に寄稿を重ねている時期である。

事の発端は、一九三〇（昭和五）年六月四・五日付「満日」紙上に掲載された石森の『新興童話』に就て（上下）という文章であつた。

ここで石森が述べている童話論は、「童話文學」の童話創作に関する

る主張と類似している。石森が、童話創作を「畢生の仕事」と決意したのも、石森の中で自分の童話観が明確になったからであろう。

(一) 石森の主張

まず、石森の主張を押さえておく。

石森は『新興童話』に就て(上下)の冒頭でこのように述べる。

童話は子供のものだからといって、調子を上げてゐたのは冒読であつた。大人の猥雑な趣味を盛つたり、新奇なる異國情緒を取り入れた時代は、まさに過ぎようとしてゐる。このケオスの渦中から派生した芽が、「新興童話運動」なのである。(「上」)

そして「新興童話」とはどういうものかについて次のように述べる。

新興童話は、作者の個性を進展し、主義を表示するところに文學的価値を有してゐる。直ちに現實にとびこみ、同時に象徴の大空に昇天することのできる魔力を有する文學形象なのである。新興童話の作者は、創作の時にあたつて、あへて兒童を對照としない。作者のもつ童心によつて構成された境地なのである。故に新興童話は、子どものみが讀むべきものではない。青年に老人に、あらゆる人を通じて、翫味されるべき本質を附與されてゐる。(上)

また、石森は、「童心」を次のように説明する。

自分はこゝで「童心」なるものを「生れながらにして存し、

つひに失はれざる若々しい天稟」と解釈する、老ても老ざる心の一隅をさして「童心」と名づける。(「上」)

さらに、「新興童話」の芸術性について次のように述べる。

新興童話は、兒童文學の衣裳を纏ひながらも、座席は、遙か上位に運ばれて、戯曲と列し、小説、詩歌と並列するのである。換言すれば、今後新興童話なるものは、純然たる文學藝術として認められねばならぬ。(「上」)

石森は、「新興童話」は、作者の個性を進展し、主義を表示するところに文學的価値を有してゐる」として、これまで子ども向けに書かれてきた物語や昔話と一線を画し、「純然たる文學藝術」であるとし、従つて、読者対象は子どもだけではなく、すべての大人も含むと主張。そして、「童話的境地」としてのよき作例として、「千葉省三の『トチ馬車』と小川未明の『童話集』(『新興童話』に就て「下」)を挙げてゐる。

童話についての石森のこの考え方は、「童話文學」の創刊号で酒井朝彦が述べた次の内容と重なる。「童話は(中略)その藝術的な香りの高いことに於ても、詩や戯曲と等比さるべきものである」。童話の「基調を成すものは純眞な童心の輝きである」。「童話を單に兒童対象^{ママ}の讀みものであると極限せず、廣く人類一般への讀みものであると解釋するのは妥當である」等である。

筆者が、「新童話」発刊に「童話文學」の影響を見る所以である。

(二) 石森の主張を巡つて興つた童話論争

石森の「新興童話に就て」の主張に、すぐ反応したのが、春木羊

一路であつた。春木については詳細不明。あるいは「満日」の記者であるのかもしれない。春木は『新興童話』を斯くあらしめたい」（同年六月十日付「満日」）という文章で、「もっと率直に兒童の心靈の眞ん中へ飛び込み得る童話の出現を望んでゐる」として、「一部新人の間に新興童話が孵化されようとしてゐることはまことに嬉しいことだ」と、石森らの文学運動に期待を寄せる一方、次のような「不満」を表明した。

新しい童話を生み出さんとしてゐる人々が童話の唯一の對照ママであるべき兒童を見放そうとしてゐることだ。（中略）兒童を對照としないものを果して童話と言ひ得るかどうか。（中略）新興童話なるものが一般民衆を對照として書かれた文藝であるならば一般文藝と對比してどこにその特異性を認めんとするのであらう 童話は子供の讀み物としての條件（内容・形式）を度外視して存在しえない（中略）

「生れながらにして存し、つひに失はれざる若々しい天稟、老ても老ても老ざる心境」さうした心によつて描き出された文藝が童話であると簡単に斷定することは許されない、童話には童話の出發點があり到達點がある。（同年六月十日付「満日」）

春木が「不満」としたのは二点である。一つは兒童を対象としなものは童話と呼べないという点、もう一つは、「童心」によつて書かれたものが、すべて童話であるとは言えないという点である。

次に、同年六月十四日付「大連新聞」に新旅順・KM生の「所謂童話に就て お伽噺と童話の差異」が掲載された。これは石森の主張に対して直接応じた内容ではないが、これまでよく知られたお伽噺と童話との違いを論じた点において、今回の「童話論争」に觸発された寄稿であると思われる。KM生は、お伽話は「神話や傳説よ

り一進歩した藝術品」で、童話はお伽話をさらに進めた「新しく生れた兒童藝術の一部」と捉え、「兒童の眞剣な要求に即した童話こそ童話の上乗なるもの」と規定する。そして、年齢に応じた兒童読物の選択を勧めている。KM生については不詳。

ここで、石森は、「再び『新興童話』について」（上下）（同年六月十五・十七日付「満日」）という文章を発表する。これは、春木氏の「不満」に答えたもので、「童話は童心を童話によつて描くといふことによつて、一般文學と明瞭に區別される」と石森は説明している。

続いて「満日」に二つの記事が掲載される。

一つは、高尾雄峰『新興童話』のために 敢へて進言す：（同年六月十九・二十日付「満日」）である。高尾雄峰は春木と同じ立場を表明。「大人（作者）自身の中に生きてゐる童心は純眞な子供のそれに比べてどれだけ離れてゐるか、そのかけはなれた童心を以て作者が子供本位でない一般を本位としたならば本當の童話とは非常に遠いものとなるはずだ」と述べる。

もう一つは、酒井弘「新興童話の眞意義について」（上下）（同年六月二一・二二日付「満日」）である。酒井弘の主張は唯物史觀から論じた意見である。酒井弘は、「新興」に「新しい」という意味はなく、「前のものとは違つた革命的なもの」、「一段高次なるもの」の出現を意味するものだと述べる。そして、「一段高次の童話」である「新興童話」とは、「在來の資本主義經濟社會の個人主義の自らの中に自己矛盾をきたし、それから生じた社會的生活意識（これは既に一段高次の段階である）の上に萌芽せる童話に外ならない」と述べる。その観点から、石森の主張する「新興童話」の定義を見ると、「新興の意義を包含してゐない」とし、「唯在來の童話を量的に變化させたのみであつて、質的の變化は些かなりとも發見し得ない」。また、石森の主張する「童心」は「依然として、個人的な社會の反映を受けた童心を維持」していると批判している。酒井は「童心」について次

のように定義する。

資本主義経済組織に於ける個人主義に育まれた童心ではなくしてその組織の内部の矛盾により、生ぜる新らしい、より高次の社会関係或は組織によつて規定せられる童心これによつて畫がき出されたものこそ新興童話でなくてはならない。

酒井はそう述べて、「新興童話の香を有つてゐる」作品として、旗二郎氏の「卒業するころ」を推している。旗二郎の「卒業するころ」は、「新童話」創刊号に掲載されており、目次では「旗二郎」となっているが、本文では「旗野二郎」となっている。「旗野二郎」とは石森の筆名である。そうすると、酒井が新興童話の作例に挙げたのは石森の作品であり、石森の主張は、奇しくも酒井によつて認められたことになる。おそらく酒井は、「旗二郎」が石森の「筆名」であるとは知らなかったにちがいない。

石森とともに児童文学活動をしている政本勇は、「新興童話私見『あへて児童を對照_{ママ}としない』といふことに就て」（『石森スクラップ57』）という文章を発表して、石森の論を補足している。発表時期、出典は不明であるが、内容から、一連の紙上討論が行われた後のことである。この文章で、政本は、石森の主張で紙上討論の争点である、「あへて児童を對照としない」と「童心」について説明している。

政本はまず、従来の童話と新興童話の相違を次のように述べる。

従来の童話が子供を喜ばせようといふことに重きを置き過ぎてゐたと思います。然しこれは當然のことで従来の童話は話す童話であつたからです。だから筋の變化に重きを置き興味本位となるのはやむを得なかつたのであります、新興童話は讀む童

話であります筋よりも文章そのものに生命があります描写を重んずる所以もそこにあると思ひます。

さらに、政本は、「描写を重んずる」ことに加えて、「豊かな詩情の中に何らかの思想が盛られてゐるといふことが望ましい」と述べて、新興童話がどのようなものであるかを説明したのち、二つの争点について述べている。童話と童心の関係について、政本はこう述べる。

童話は單なる讀み物ではありません、作者の持つ童心を通して生れたものでそれは必ず児童のもつ童心にがつしり融合し交流すべきものであります、童心は人類本然の姿であつて生命の核心であり萬人のもつ魂の故里であります。

また、「あへて児童を對照としない」については、小川未明の言葉を借りて説明している。

未明氏は又かういつて居ります、

「眞に美しいもの、眞に正しいこと又悲しい事實といふものは直覺力の鋭い神經の鋭敏な子供にも分らない筈はないのです、よく分るやうな文字を使つて書いたならばそして子供に分ることとはもちろん大人には分らない筈です（中略）この意味から私は童話なるものを獨り子供のためのものとは限らない。そして子供の心を失はないすべての人類に向つての文學であると主張するものです」

最後に政本は、自分の言葉で次のように結んでいる。

私達の童心そのものを見つめてそれを子供の言葉を以て表現した場合に子供が共鳴し共感しない筈はないのです、凡て命あるものには靈魂の共鳴があります、童心それがこの神秘の關門をくぐる唯一の鍵であります。そこに童話が童心を通じて凡ての大人にも子供にも共鳴される文學であるといふ所以であります

以上、大連を中心に興こつた童話論争のあらましを紹介した。石森や政本の主張は、童話とは作者自らの童心を通して書かれたもので、その作品は子どもにも大人にも共感を呼ぶというものである。それを、「あへて兒童を對照としない」という表現で表したことから、諸氏から批判の声があがつた、そんな童話論争であつたように思える。しかし、「満日」という満洲の全国紙的な邦字新聞で、童話を巡る紙上討論が行われたということは、満洲児童文學にとつて、意味あることである。人々の関心が児童文學に向いているということであり、植民地満洲に童話を論じる土壤が育っているということである。

因みに、満洲の家庭教育雑誌「愛兒と家庭」⁵¹（一九三〇年七月一日）の同年七月号には、小川未明の講演の要約記事（石田薫「童話創作の態度―小川未明氏講演」と政本勇の「童心に就いて」）が掲載されている。

また、満洲では全満洲情報を網羅した『滿蒙年鑑』（昭和八年度より『滿洲年鑑』と改題・中日文化協会発行）という書籍が、「大正十二年版」より毎年出版されているが、その年鑑に、「藝術」欄が設けられ、「文藝」情報が収められるのは、「昭和七年度版」（一九三一年十二月）からである。その中の「童謡・童話・児童劇」の項に「新童話」が紹介されている。これは、はじめて児童文學關係の情報が公の書籍で紹介されたということであり、満洲児童文學が満洲で市

民権を得たということでもある。これら童話論争から一年半あまりのちのことである。

植民地満洲に起こつた「新興童話運動」は、当時の国内の童話創作の動きと連動している。国内では、巖谷小波で代表されるお伽話の時代から鈴木三重吉や小川未明の童話創作の時代へと移行していったように、一九三〇（昭和五）年に、植民地満洲でも、お伽話の口演の時代から、「読む童話」、芸術的な童話創作への移行が起りつつあつたということである。そして、満洲において、「読む童話」、すなわち芸術的な童話創作の時代へと切り拓いていったのは、石森ら「新童話」の同人たちであつたといえる。

六「新童話」と石森童話の誕生

石森は、当時の「少年俱樂部」のような大衆的な雑誌に対しては批判的であつた⁵²。一方、「赤い鳥」は高く買つていた。石森らが目指したのは、「赤い鳥」や「童話文學」のような純童話雑誌であつた。

石森らは、「赤い鳥」のように、積極的に児童作品（詩・作文）を掲載した。が、より強く影響を受けたのは、「童話文學」からであつた。

それはなぜか。「童話文學」の創作方向に共感しただけでなく、「童話文學」が同人雑誌だつたことも関係していると筆者は考える。

同人雑誌には商業ベースに影響されない、純粋な創作の発表の場としての特質があるからである。しかし、石森らが心がけたことは、「童話文學」の模倣ではあつてはならないということである。「赤い鳥」や「童話文學」と比肩する、あるいはそれを超えるレベルの高い純童話雑誌を、満洲の地で刊行することを目指していたと考えられる。

石森ら同人たちは、「新童話」では、在満日本人児童に向けての啓蒙活動よりも、自身の「童心」に基づいた創作を追及したといえる。そのことが結果的には、作品の質をあげることにつながつた。そし

て、石森自身に、童話が自分にとって最適の表現形式であることを確信させるに至ったことであろう。自分を取り巻く事物一つ一つを愛しみ、人間も含め、この世に存在する自然すべての存在意義を見出そうとする石森の人生観。生活のほんの一面を切り取って詩的な文章で表現する。まさしく童話作家の資質ではないだろうか。石森の作品は大別すると、童話風エッセー、空想童話、写実的な短編、写実的な長編物語に分けられる。石森は、「ます野」では童話風エッセーを多く書き、「新童話」では、写実的短編と空想童話を数多く発表した。この「新童話」に至って、石森童話の基盤が形作られたといえよう。

第四章 末尾資料

「童話文學」と「新童話」の中の石森作品

——ここに挙げた石森作品は、「童話文學」及び「新童話」に掲載されたものである。

凡例 ○収録基準

・「童話文學」では発刊（一九二八・七）から休刊（一九三一・十一）までに掲載された石森作品をすべて挙げた。
・「新童話」は第一号（一九三〇・五）から第二〇号（一九三一・十二）までに掲載されたものを挙げた。

理由 1 石森作品が「童話文學」から受けた影響を探るためには、同時期の作品群を比較すべきだと考えたこと

2 「新童話」は、第二十一号から学齢別の三分冊になるため、比較する場合、違う要素が加わってくる可能性があるかと判断したため

○上段は「童話文學」（●印）、下段は「新童話」（○印）である。

「童話文學」

●一九二九・一一・一 夕あかり（童話）二卷十一號

「（前略）更にまた童話「夕あかり」は大連の石森延男氏の作、特異な環境と作風とを有つ有望な新進作家である。われらは遠い海の彼方に、かかるよき同士を有つことを痛切に喜ぶ。——十月下旬 酒井朝彦記」（編輯後記）三二頁

●一九三〇・一一・一 一本道（童話）三卷一號

「今月の、一本道の作者石森延男さんについては、十一月號に紹介が出てゐましたから、重ねて書く必要もないかも知れませんが、わたしは満洲へ旅行した時に、親しく石森さんにお目にかかつて、忘れ難い楽しい時間を持ちました、同じ道につながる人を、旅で知る愉快さは、まったく知る人ぞ知ると云つておきます。」「（編輯後記）水谷まさる記三三頁

●一九三〇・四・一 みぞれ雨（童話）三卷四號

「石森延男氏の作品は、既に度々紹介されましたが、今月の「みぞれ雨」は、月謝をぬすんだ子供が弟でなかつたところに、陥りやすい常套から免れてをります。そして明るい結末がこの一篇を活かして居ります。（編輯後記）濫澤青花記三八頁。

●一九三〇・五・一 銃弾と月見草 (童話) 三卷五號

「丁藤氏の童話、石森氏の童話も本誌に色彩を加へ得た事と信じてゐる。」(編輯後記「千葉省三記三八頁」)

●一九三〇・七・一 風の母子 (童話) 三卷七號

「末筆ながら、はるかに大連から童話をよせられた石森氏、又、本誌になじみの深い島田氏の作品を得たことを感謝する。(後略)(編輯後記 伊藤(貴麿)記 三八頁)」

●一九三〇・一一・一 三太と流行 (童話) 三卷十一號

「今度、石森延男君が新たに同人に加はつた。諸君にはおなじみ深い作家である。われらは君を得て意を強うし、一層斯界のために精進しよう。なほ、石森氏のあちらで出してゐられる「新童話」は、體裁も内容も、現在では全く他に見られない努力のこもつたものだ。本誌の讀者諸君に、是非一讀をおすすめしたい雑誌である。發行所は大連市聖徳街「丁目四十番地新童話社、定價拾五錢であらう。」(編輯後記「記名なし。編輯兼發行人の水谷勝だと思われる。筆者注」)

●一九三〇・十二・一 川は流れて (童話) 三卷十二號

第一回童話文學会記事 (大連の石森を除いた同人全部……)

●一九三二・二・一 スケート・リンク (童話) 四卷一號

「新童話」

○一九三〇・五・十 影に乗って (童話) (丘光の筆名) 一號
卒業するころ (童話) (旗野一郎の筆名)
雁とブルスニカ (童話)

○一九三〇・六・十 古い城壁 (童話) 二號

○一九三〇・七・十 家主と野鳩 (童話) 三號

○一九三〇・八・十 海と太陽 (童話) (旗野一郎の筆名) 四號
三日月 (童話) (丘光の筆名)
國王と少女 (童話)

○一九三〇・九・十 砂山の濱なす (童話) 五號

○一九三〇・十・十 青い林檎 (童話) 六號

○一九三〇・一一・十 まよつた犬 (童話) 七號

○一九三〇・十二・十 冬と魚たち (童話) (旗野一郎の筆名) 八號
ぱんぱん帽 (童話)

○一九三二・一・十 山羊とタヤク (カタカナ童話) 九號

○一九三二・二・十 飛ぶ新聞紙 (童話) 十號
雪と人形 (童話) (旗野一郎の筆名)

○一九三二・三・十 海と小羊 (童話) 十一號

●一九三二・四・一 眞珠の行方 (童話) 四卷四號

●一九三二・五・一 旅の燕たち (童話) 四卷五號

●一九三二・六・一 海と路 (童話) 四卷六號

第四卷第七號「あてにしてみた大連の石森からも、原稿を送つて來なかつたので……」(編輯後記) 青花記 三六頁

●一九三二・八・一 お話をしなかつたお父さん (童話) 四卷八號

●一九三二・九・一 高原を (童話) 四卷九號

●一九三二・十・一 寛城子風景・水光り (童話) 四卷十號

●一九三二・十一・一 梨の實 (童話) 四卷十一號

○一九三二・四・十 一年セイ (カタカナ童話) (ヲカヒカルの筆名) 十二號
「よく泣く子でした」 (童話)

滿洲唯一の純童話月刊集 新童話―白葡萄のやうに水々しいお話集
(巻末に挟み込まれた申込葉書に書かれていた文言・傍線部は発表者)

○一九三二・五・十三 臺の馬車 (学校劇)―滿洲兒童生徒のために― 十三號

私たちの『新童話』は日本唯一の子どものための純童話誌です。一つには藝術としての美しさを、一つには教育的朗らかさを持つてゐます。この意義ある運動と価値とをみとめられ、今度次の諸先生が、賛助會員となつて下さいました。諸先生のお力によつて、『新童話』は、さらに兒童文學の健かな道を拓いていきます。

鞍山中学校校長 矢澤邦彦先生・関東庁学務課長 御影池辰雄先生
東京高等師範学校教授 吉田彌平先生・東京高等師範学校教授 保科孝一先生
(目次の次頁に表記・傍線部は発表者)

○一九三二・六・十 ふるさと―滿洲兒童生徒のために― (学校劇) 十四號

私たちの『新童話』は、あかしやの花のやうに氣品があります。／私たちの『新童話』は、あかしやの花のやうに響があります。／私たちの『新童話』は、滿洲一の子どもの文學雑誌です。／私たちの『新童話』は、日本一の童話月刊集です。(表紙裏に、賛助員の紹介とともに、記載されている。発表者注)

○一九三二・七・十 口笛ふいて (童話) 十五號

○一九三二・八・十 タやけ (童話) 十六號
防空の日―滿洲兒童読物―

○一九三二・九・十 お月見の蝶 (童話) 十七號

○一九三二・十・十 コノゴロノマコトサン (カタカナ童話) 十八號
石段に落ちた葉っぱ (新童話同人聯作童話) 石森は八章を担当

○一九三二・十一・十 アキノヨルⅠ・Ⅱ (カタカナ童話) 十九號

○一九三二・十二・十 アキノヨルⅢ・Ⅳ (カタカナ童話) 二十號
鳩になつたルミ子さん (新童話同人聯作童話) 石森は一章を担当

第五章 叢書「満洲文庫」

はじめに

石森は、教育者として児童文学者として、植民地満洲の教育・文化育成に深く関わっている。石森の視学時代の仕事の一つに、「満洲文庫」全十四篇の刊行がある。この叢書の刊行は、指導者として、編集者としての石森の資質が遺憾なく発揮された仕事であるといえる。本章では、「満洲文庫」全般について論述する。

一 「満洲文庫」の概要

(一)「満洲文庫」について

「満洲文庫」全十四冊は、一九三四（昭和九）年から一九三五（昭和十）年にかけて、大連で刊行された。この叢書は、満洲全般に亘る満洲読物で、在満日本人児童の課外読物として刊行された。低学年向けの「紅版」と高学年向けの「緑版」から成る。当初は雑誌として出版する予定であったが、雑誌だと読んだ後、粗末に扱われるということで書籍になったという⁵³。

石森自筆の年譜によると、「満洲文庫」は、関東軍によって発禁処分になったとある⁵⁴。だが、この年譜に記された内容について、近年研究が進み、発禁処分になったのは、「満洲文庫」ではなくて、後に刊行される「東亜『新満洲文庫』」の可能性が高いとされている⁵⁵。

なぜなら、一九三九（昭和十四）年二月、「満洲文庫」は、「東亜『新満洲文庫』」と名も装幀も改めて、東京の修文館から再版されるからである。しかも、「文部省認定の許可書」（昭和十四年四月二十

日付）を挟み込み、「石森延男先生編集」の良書として、大々的な宣伝とともに、各冊カラーの函つきで、十二冊ワンセット（のち、『カメラの満洲』二冊も加わり、十四冊）で売り出されたのである。大連で発禁処分になったものが、東京で、良書として再版されるということがあるだろうか。発禁問題については「第八章」で述べる。

筆者が現物確認した「満洲文庫」十一冊を、各「東亜『新満洲文庫』」とつき合わせたところ、装幀、写真説明の版組みが異なり、「編集後記」の文章が一部削除・変更されている点を除けば、同じ版型、同じ内容であった。「満洲文庫」「東亜『新満洲文庫』」の対比の詳細を含め、「満洲文庫」関連資料については、「資料編の〈資料16〉」を参照願いたい。

(1)「満洲文庫」全十四冊

表1 七篇全十四冊 ●印は現物確認済 ○印は刊行目次あり

第一 「風俗」篇	●『まんしうの子ども』 昭和九年七月十四日 ○	●『満蒙の風物』 昭和九年七月十四日
第二 「歴史」篇	●『まんしうでんせつ』 昭和九年九月五日	●『満洲史話』 昭和九年九月五日
第三 「地理」篇	●『明るい港黄色い風』 昭和九年十一月五日	●『大平原めぐり』 昭和九年十一月五日
第四 「写真」篇	『カメラの満洲（その一）』 推定 昭和十年一月五日	●『カメラの満洲』 昭和十年一月五日 ○
第五 「理科」篇	『生きようとする姿（その一）』 推定 昭和十年三月五日	●『生きようとする姿』 昭和十年三月五日 ○
第六 「文学」篇	●『童話と童詩』 昭和十年五月五日 ○	●『満洲新童話集』 昭和十年五月五日 ○
第七 「修身」篇	●『まんしうの美しい話』 昭和十年七月二十五日 ○	『満洲の美談』 推定 昭和十年七月二十五日

(2) 書誌事項

現時点で確認できた十一冊に基づいて記す。

「満洲文庫」は、一九三四（昭和九）年七月から一九三五（昭和十）年七月（推定）にかけて、大連で刊行された。全七篇からなり、各篇は、尋常一・二・三学年用の「紅版」と、尋常四・五・六学年用の「緑版」に分かれている。全十四冊。隔月「紅版」と「緑版」、各一冊ずつ配本された。縦二十cm×横十七cmの正方形に近い大きさで、縦書右開きである。発行所は東洋児童協会。

表紙には、シリーズ名「満洲文庫」と右から左へ横書きされ、その下にサブタイトルとして各書名が小さく書かれている。中央に連翹の花と蜜蜂の線画が描かれ、下段に「尋常〇〇學年用」と明記されている。

裏表紙には、中央に丸型のデザイン画があり、中に英語で「CHILDREN'S MANCHURIAN SERIES」と書かれている。（表紙・裏表紙ともに「資料編の〈資料16〉」を参照）

編集人は石森延男であるが、それぞれ内容によって、編輯同人として、執筆者名が書かれている。彼らは在満、特に大連在住の初等教育者だと考えられる。編輯同人は下記のとおりである。

伊尾外次郎・池上哲男・石田薫・磯野良平※・入来惇※・小山田保雄・甲斐清作※・金栗良二・※喜田瀧治郎※・後藤直・小林徳次郎・佐々木悌三・高野運太郎・武午師・久富榮次郎・藤目友一※・細川東治良・政本勇・松本正義※・宮田榮松※・森田昌和・山手保樹・湯下誠一郎※・（※印は「東亜新『満洲文庫』」による）

定価五十銭。当初は学校を通しての申し込みだったが、のち、店頭でも販売された。店頭販売価格は八十銭である⁵⁶。

二 「満洲文庫」の誕生

石森が書いた「誕生せんとする『満洲文庫』」⁵⁷ CHILDREN'S MANCHURIAN SERIES⁵⁸（「石森スクラップ54」）⁵⁹ 出典「國語と教育」（推定）という文章がある。そこにはこう書かれている。

（前略）子どもは考へる輩であります。（中略）輩をそよがせるものに、『讀物』があります。けれどたゞ今日日本にある子供のための讀物は、どうでせうか。多くは、秩序が乏しくて、刺激性がつよくて、浅いものでみたされてゐるやうです。やゝもすれば暴風になつて弱い輩の群はいたづらにざわめき、倒れさうになります。

考へるものさへ與へてやれば、子どもは考へるものです。深く思ふものです。今すこしおだやかな澄んだ風を輩におくつてやることは、初等教育者に残された一つの義務ではないでせうか。

「満洲文庫」はこの意味で生れようとしてゐます満洲の地質・人文・風物、傳説、虫、鳥などの入口となる窓をひらいてやらうと思ひます。窓さへひらいてやれば、子どもは静かに、ながめませう。考へて知りませう。知つて愛しませう。（中略）暗示に富んだ興味深い満洲郷土資料を系統的に配列して、美しい文章でまとめあげようと企てゐます。（後略）

この文章からどういうことが読み取れるか。

1 子どもの資質に全幅の信頼を寄せる石森の子ども観、2 子どもの精神にとって「讀物」の必要性、しかもその「讀物」は良質で、美しい文章でなくてはならないという石森の考え、3 当時の日本の

読物に対して、「秩序が乏しくて、刺激性がつよくて、浅いもの」であるという石森の認識、4それとは反対の「おだやかな澄んだ風」のような「満洲文庫」を発刊するという意気込みがあったということが分かる。

「秩序が乏しくて、刺激性がつよくて、浅いもの」とは何を指しているのか。石森は、当時隆盛していた大衆雑誌類が子どもにも与える影響を憂慮していた。おそらくそれらを指しているものと考えられる。石森はじめ、「満洲文庫」に関わった初等教育者たちは、大連にいても、いや、外地である大連にいたからこそ、日本国内（内地）の文学状況、特に児童文学の動きに、常に注目し、敏感に反応していたと思われる。「おだやかな澄んだ風」とは、美しい文章で、知的な思索を促すだけの内容ある読物ということであろう。

だが、その「おだやかな澄んだ風」としての読物の題材が、なぜ「満洲郷土資料」なのか。石森らが、あくまでも満洲にこだわるのは、一つは、石森らがかかわった『満洲補充読本』の延長線上に「満洲文庫」があったと考えられること、また、それほどに満洲に関する読物が乏しいということ、さらに、そこに住む「子ども」つまり、日本の子どもたちにとって、まず、自分の住む地（満洲）への理解が先決であると考えられていたということであろう。

「子どもは静かに、ながめませう。考えて知りませう。知って愛しませう」とある。この文言は「郷土満洲を肌で理解させ、愛着を持たせなければ」⁵⁷ということに通じる。つまり、「満洲文庫」は、在満の日本の子どもたちに、郷土としての満洲を理解し、愛着を持たせるために編まれた、良質な満洲読物を目指したということである。

三 「満洲文庫」とはどのような叢書か

「満洲文庫」全十四冊のうち、十一冊確認できている。現時点の資料をもとに、「刊行目次」の記述及び十一冊の「編集後記」等から、「満洲文庫」の特徴を探る。

（一）「刊行目次」について

「刊行目次」は、確認した全冊に付いていたわけではない（表1の○印）。付いているものもあれば、無いものもある。また、付いている場合も同じものであるとは限らない。

現時点で明らかなのは、「刊行目次」は、三種類あるということだ。第一回配本である風俗篇『まんしうの子ども』の前見返しに印刷されていたもの、単なる誤植を改めたもの（『童話と童詩』前見返し）、二か所書名が実際の出版書籍と異なるもの（本来『童話と童詩』となるべきところが『まんしう童詩と童話』となり、『満洲新童話集』となるべきところが、『児童文学』となっている―『カメラの満洲』（その二）前見返し）である。

しかし、各篇の紹介は内容的にはまったく同じであるので、ここでは、第一風俗篇『まんしうの子ども』の前見返しに印刷されている「刊行目次」（表2）を使うことにする。それは、一部誤植を除けば、配本書名が正しく表記されているからである。（ただし、同タイトルの『まんしうの子ども』であっても、大阪国際児童文学館所蔵のものには「刊行目次」が付いているが、北海道文学館所蔵のものには付いていない。この点については後述する）

「満洲文庫」の編輯人は全冊石森延男となっているが、各篇によって編集同人の名があるところを見ると、石森を中心とした同人たちの共同編集であったと考えられる。「編集後記」は、『カメラの満洲』のみに石森の記名があるだけで、他の編集後記は無記名であることから、複数の手になったと考えられる。この「刊行目次」の文

表2 「刊行目次」

左の刊行目次は『まんしうの子ども』の前見返しに印刷されていたものを打ち直したものである。現物は見開きであるが便宜上二段に組みかえた。

満洲文庫		刊行 目次 (各七篇完結)
尋常一・二・三年用(紅版)	尋常四・五・六年用(緑版)	
<p>第一 篇「俗風」</p> <p>まんしうの子ども</p> <p>まんしう國の子どものかはい、遊びごとや、生ひたちや、名のつけ方や、たべものことなど、いろいろなものをしらべて、かきあつてあります。ことに「服装」のことや「満洲國の子どものみた世界」などは、ぜひ知つておかねばならぬこととおもひます。</p>	<p>第二 篇「史歴」</p> <p>まんしうでんせつ</p> <p>古くからひらけた満洲にはあちこちに傳説があります。いかにものんびりした話や、あはれな話や、ふしぎなものや、こつけないのがあります。こんな傳説をよみますと、ほんとうに満洲國といふものに親しみを感じてきます。</p>	<p>第三 篇「地理」</p> <p>明るい港黄色い風</p> <p>「黄」といふ字は、支那、満洲にかけてふさはしい字です。風も空も、土も、それから港も人も、これからのびよくする黄な満洲、そこにある温泉の話、山河のありさま、樹木、みんなこの國でなければ見られないふしぎなものでせう。</p>
<p>満蒙の風物</p> <p>正月から十二月までにある満洲各地のおもしろい行事をあつめてあります。それから蒙古のめづらしい風俗や習慣がこまこまとかかれてあります。きれいな寫眞がはさまれて。</p>	<p>満洲史話</p> <p>今そこ満洲國といふ名だかい國になりましたが、その昔、どんな風にしてそだつてきたのでせうか。日本の神代のころから、もうひらけてゐたことがわかります。ドルメン、高句麗城、ザンギスカン、赤い木の實「サルフ山」こんなお話が次から次へと愉快につづられてゐます。満洲國のなりたちがよくわかります。</p>	<p>大平原めぐり</p> <p>ひろい満洲のあちこちに生れた村と町、みなそれには、わけのある名がつきました。人といふものが、どうして進んできたかといふ跡がしのばれます。撫順の炭がでてきたり、大豆の園積があつたり、苦力の話が生れたり。</p>

篇「眞寫」四第	篇「科理」五第	篇「學文」六第	篇「身修」七第
<p>カメラの満洲(その一)</p> <p>満洲で名高いところやきれいなけしきや、そのほかふだんの暮らしのありさまなどをはつきり寫眞にして、五十枚ほどにまとめあげたものです。そして、それには一頁つづくはしい説明をつけてあります。</p>	<p>生きようとする姿(その一)</p> <p>寒ければ寒いやうに、暑ければ暑いやうに、ちゃんとそこには、それだけの準備があたへられてゐます。あのシベリヤの荒野にブルスニカといふ野毒がみえます。そこにすむ人たちはこの野毒を、ジャムにします。神さまは、みなかはいがつてくれます。</p>	<p>童詩と童話</p> <p>この満洲といふところは、内地、日本にくらべれば、水が少いとか、木がないとかいひますが、しかし、そこにながく住んでゐますと、やはりこのいゝところがあえてきます。大人も小供もここが故郷になります。そこで初めて詩が生れてきます。</p>	<p>まんしうの美しい話</p> <p>満洲は日本人が忘れてはならないところですが、それだけに、には日本人が力ををつくしました。本氣でやりました。本氣になるときは、きつとそこにいゝ話があります。人を動かす偉いことがあります。それを集めました。</p>
<p>カメラの満洲(その二)</p> <p>こちらもやはり、寫眞帖ではありませんが、満洲といふものを説明する寫眞ではなくてほんとに、カメラから眺めた美をあつめたのであります。たとへ高梁の葉さきにある小さな雲片でもみんな苦心してつくりあげたのです。満洲は決して殺風景ではありませんよ。</p>	<p>生きようとする姿(その二)</p> <p>三百年もたつてゐる運の實、石炭化したその運の實です。みな生命あるものはなんとかして生きようとしてゐます。満洲には、はたしてどんなものが、眞剣になつて生きようとしてゐるかを示してゐます。</p>	<p>満洲新童話集</p> <p>満洲の傳説口碑はありますが、童話、童詩は乏しいです。このころやつと満洲を背景にした新しい童話と童詩が生れました。これからだん／＼かうした本が豊かになるでせう。これはその處女集です。</p>	<p>満洲美談集</p> <p>満洲といへば戦争を思ふほど戦争美談はよく集められてゐます。しかし、ここでは戦争よりも、むしろ平時で文化方面にさ／＼げられ、人間として美しい行爲をひろひあつめました。修身例話としてみな慣のある深いものだけをえらんでおきました。</p>

章も誰が書いたのか不明である。「刊行目次」の記述はある程度、宣伝という意味合いがあるので、誇張や美化した部分もあるだろうが、少なくとも、この「刊行目次」から読み取れる編集姿勢は、全冊の編輯人である石森の考えを反映しているだろうし、また、編輯人たちの共通認識であったと考えられる。

(二)「満洲文庫」の特徴

「満洲文庫」の特徴としてまず挙げられるのは、モダンな装丁である。従来の副読本や読物にはないほぼ正方形の大きさ、カラフルな厚紙の表紙等、子どもが手に取りやすい大きさ、子どもの目につきやすい色目、何度読み返しても耐えうる作りになっている。石森は、従来から本の装丁にかなりのこだわりを持っていたようで、ここでもその特徴が顕著にあらわれている。

二つ目の特徴は、学齢、対象を明確に示している点である。「紅版」、「緑版」で文章表現や表記が異なるだけでなく、「紅版」では、分かち書きや、途中から平仮名を使う等、学齢に合った表記で、読みやすさの工夫がなされている。これは課外読物として作られたということである。

三つ目の特徴は、ジャンル別に分かれている点である。これは、かつて石森が執筆編集に携わった『満洲補充読本』の経験をもとに、『満洲補充読本』を更に発展させた形といえよう。『満洲補充読本』では、文学的なものも、歴史的なものも、理科の観察文もすべて一冊に収められていた。『満洲補充読本』の編集に携わる中で、ジャンル別読物への原型が生まれていても不思議ではない。各篇、バラエティに富み、楽しく読みながら満洲について知ることができる工夫がなされている。

四つ目の特徴は、刊行ごとに改良を加えようとしている点である。

第一風俗篇緑版『滿蒙の風物』では、漢字が多く、しかもふりがなも無かった。その反省は「編集後記」で「すこしむづかしいと思ひますが、すこしづつよみこなしてください。第二冊めからは、みなふりがなをつけます」と記されている。第二歴史篇の緑版『滿洲史話』については、現物は未見であるが、『東亜「新滿洲文庫」の『滿洲史話』』には、ふりがながつけられている。

五つ目の特徴は、実地調査に基づき、写真を豊富に取り入れている点である。第一風俗篇『まんしうの子ども』の「刊行目次」に「いろいろなものをしらべて、かきあつめてあります」とある。また、第四写真篇『カメラの滿洲(その一)』の刊行目次に「滿洲で名高いところやきれいなけしきや、そのほかふだんの暮らしのありさまなどをはつきり寫眞にして、五十枚ほどにまとめあげたものです」とあり、その他にも「東亜印畫協會」から借りた写真を各作品に豊富に取り入れている。ここに、画像により子どもたちの理解を深めようとする姿勢が見られる。

六つ目の特徴は、人間・命あるものの営みを見つめる視点が入れられている点である。第三地理篇『大平原めぐり』の「後記」に「地理といふ學問は、人間にとつて、ずゐぶん大事なものです。人間が生きてゆく姿が、寫眞のやうに、はつきりと地理を學ぶことによつて、眺めることができます」とある。また、第五理科篇『生きようとする姿(その二)』の「刊行目次」では、「みな生命あるものはなんとかして生きようとしてゐます」とある。さらに、第七修身篇『滿洲美談集』では、「ここでは戦争よりも、むしろ平時で文化方面にさゝげられ、人間として美しい行爲をひろひあつめました」とある。これらの文言から「人間・命あるものの営み」をとりあげていこうとする編集姿勢が読み取れる。戦時下である当時としては、かなり思い切った表現だったのではないか。それだけに、この「滿洲文庫」にかける編集者たちの思いが真摯であったといえよう。

七つ目の特徴は、在満の日本の子どもたちに対して、満洲に親しみ、故郷満洲に愛着を持たせ、満洲に根づかせるための啓蒙的要素が明確に出ている点である。第四写真篇『カメラの満洲（その二）』の「刊行目次」には「満洲は決して殺風景ではありませんよ」とある。また、第六文学篇『童詩と童話（誤植。正しくは『童話と童詩』）の「刊行目次」に「そこになが く 住んでみますと、やはりこのいゝところがみえてきます。大人も小供^{ママ}もここが故郷になります。」とある。満洲の良さを語りかけ、強調したこれらの文言には明らかに啓蒙的な意図がある。さらに、第七修身篇『まんじうの美しい話』の「刊行目次」では「満洲は日本人が忘れてはならないところです。それだけこゝには日本人が力をつくしました。本気でやりました。」という文言に至っては、当時としては当然だったのだろうが、日本にとって満洲の大切さを自明のこととして押しつける強引さがある。

「満洲文庫」とは、どういう叢書か。読み手である子どもを念頭に置いた細やかな心遣いの見られる本作りは、今日にも通じる良心的な編集姿勢であるといえる。満洲に関する全体像をできるだけ実地調査に基づき、しかも生身の人間、生きとし生けるものの姿をできるだけ正しく伝えようとしている点も評価できる。だが、その底には、七つ目の特徴として挙げた、在満の日本の子どもたちに対して、満洲に親しみ、故郷満洲に愛着を持たせ、満洲に根づかせようとする意図がある。この点については二つの見方ができる。一つは、日本内地から遠く離れた満洲に住む日本の子どもたちにとっては、自分たちが住む満洲への新たな発見と認識をもたらし、郷土愛を抱くに至ったであろうということ。だが、それは別の角度から見れば、国策を遂行する人づくりであったともいえる。子どもを思う初学教育者たちの真摯な仕事が、一方で国策推進に加担していったのである。それは植民地における教育である以上、避けられない一面なの

である。

四「満洲文庫」の発刊から終刊まで

「石森スクラップ」の中に、「『満洲文庫』終刊にあたって」という一枚の印刷物があつた。そこに、こう書かれている。

「満洲文庫」がいよいよ終刊になりました。これが生れる話のあつたのは三年前でした。はたしてどんな讀物ができ上るかどうかとあやぶまれましたが、私どもは尻ごみはしませんでした。そして初めの計畫どほり、おしきつてしまひました。ちやうどけはしい山路を登つてきて、今その絶頂にとどいたやうな歓びであります。本月四日（昭和十年八月四日・筆者注）の東京朝日新聞によつて、日本全國に紹介されました。どんな木精となつてひびいてくるでせう。満洲の人情風俗・地理・理科・文學といったものをほんとうに知つてもらつたら、私どもの念願がとどくわけであります。

どうぞ皆さん、書棚に永く飾つておいて大事にしておいて下さい。

大連市聖徳街二丁目四十番地 東洋兒童協會
編集者一同

内容から、この文章は一九三五（昭和十）年八月に印刷されたものであることが分かる。本文の漢字にはすべてふりがながつけてあり、読者である子どもに向けてのメッセージであると考えられる。印刷物の大ききから最後の配本である第七修身篇に挟みこまれた可能性も考えられる。だが、最後の配本は予定どおりであれば七月である。時間的に一カ月ほどのずれが生じる。あるいは、第七篇の刊

行が八月にずれたということも考えられる。

この文章から、「満洲文庫」について、いくつかの点が明らかにあった。1「満洲文庫」の出版計画が三年前に起こったこと。三年前と言え、一九三二（昭和七）年、満洲国建国の年であり、また、石森が大連民政局地方課学務係に転勤、視学となった年である。2出版計画、編集、刊行そして終刊に至るまでに、多くの困難があったこと。だが、その困難をなんとか乗り越えて、「満洲文庫」は初めての計画どおり刊行されたということ。そして、3「満洲文庫」が、東京朝日新聞によって、日本全国に紹介されるに至ったこと。4その反響を楽しみに思えるくらい、石森はじめ編輯同人にとっては、誇れる仕事であったということ等である。東京朝日新聞の記事については、次項「五『満洲文庫』の評価」で述べる。

（一）叢書としての「満洲文庫」

「初めの計畫どほり、おしきつてしまひました」とあるが、発刊から終刊までは決してすんなり行ったわけではなく、紆余曲折や試行錯誤があった。前述の「書誌事項」にあるとおり、「満洲文庫」は二か月毎の各篇同時刊行である。約二年間の準備期間を経て、第一回配本を迎える。それは、第一風俗篇紅版『まんしうの子ども』の「あとがき」に「やうやく『満洲文庫』のだい一さつめができ上りました」、また、同緑版『満蒙の風物』の「後記」に「やつと『満洲文庫』の第一冊めができ上りました」と書かせるほど、平坦な道ではなかったことが推測される。

当初刊行予定と実際とでは、篇の数が異なる。当初は、五篇の十冊で終えることになっていたのである。それは、石森スクラップの中にあった『満洲文庫』だより⁵という印刷物から明らかである。その印刷物は、内容から第四写真篇『カメラの満洲』が出る直前に

出されたものである。河野孝之論文⁵⁸の中で引用されていたものと同じものであることから、『大平原めぐり』（一九三四年十一月刊行）に挟み込まれていたものと判明している。それにはこう書いてある。

「満洲文庫」は、今のところ第五篇（理科篇・筆者注）で終わることになつてゐますが、なんとかしてその後もつゞけてくれないかと、あちこちから切望されてゐます。考へてみようと思つてゐます。しかし、これはかなりむづかしいことですから、はつきりお答えできかねてゐます。

つまり、当初の予定では、第五篇までの刊行予定だったのが、途中から、二篇を追加することになったのである。その追加も「かなりむづかしい」と言わせるほど、たやすいことではなかった。詳細は分からないが、おそらく、経済的、時間的な問題であつたろう。しかし、上記印刷物から二か月後の、次号の『カメラの満洲』刊行時にはすでに追加が決定。本体に印刷物を挟む形で予告している⁵⁹。それにはこう書いてある。

（前略）「満洲文庫」は、第七篇で完結することにしました。『満洲の童詩と童話（正しくは『童話と童詩』筆者注）』それから『満洲美談集』を加へたからです。これは皆の切なる御希望でありました。折角『文庫』と名づけた以上、できるだけ整つたものにしたといふ考へからです。どうぞ、つづけておよみください。（後略）

第六文学篇紅版『童話と童詩』、緑版『満洲新童話集』と、第七修身篇紅版『まんしうの美しい話』、緑版『満洲美談集』が追加刊行さ

れたということである。つまり、社会科学、自然科学に文学が加わることによって、総合的な読物の体裁が整ったということである。

(二) 刊行物としての不統一

「満洲文庫」は、いくつかの点で、刊行物としての統一性に欠ける。一つは、「後記」に書かれた書名と、実際に刊行された書名の相違である。第二歴史篇紅版『まんしうでんせつ』は、その「あとがき」では「まんしうでんせつ集」と表記され、予告では「満蒙傳説」(『まんしうの子ども』「あとがき」と表記されている。また、第三地理篇緑版『大平原めぐり』は、その「後記」で、「満洲の地理」と表記されている。二つ目は、製本上の不統一である。三種類の「刊行目次」をはじめ、その他に「刊行目次」のあるものもないものの、扉のあるものもないもの等がある。

ここで一つの矛盾が生じてくる。第一回配本である風俗篇『まんしうの子ども』にすでに「刊行目次」(表2)が見返しに印刷されており、その「刊行目次」は七篇十四冊そろい、しかも出版順序、出版書名がほぼ実際と同じ形で載せられていることの不思議である。前項「三の(一)」で述べたが、『まんしうの子ども』自体も二種類ある。大阪国際児童文学館所蔵の版本には「刊行目次」がついている。北海道文学館所蔵の版本には「刊行目次」はついていない。だが、ともに発行年月日は同じである。これはどういうことか。考えられるのは、「満洲文庫」は、何度か増刷されているということ。そして、増刷の際、奥付は変更しないで、「刊行目次」だけが誤植や書名の変更を行ったということである。また、赤茶色の函付きのものもある。それは、北海道文学館所蔵の『カメラの満洲』(昭和十年一月五日発行)である。「定価八十銭・郵税八銭」という表示が、値段の部分に上から貼付されていることから、店頭で販売されていたも

のであると思われる。

良質の読物を目指した当初の意気込みからすれば、決して完璧な出来栄ではないが、編輯同人の多くは、初学教育者たちで、学校の仕事をしながらの編輯であり、二か月毎の刊行ということもあって、時間的にはかなりきつい作業であつたらう。まさに試行錯誤しながらの刊行であつた。

五 「満洲文庫」の評価

第一篇が刊行されたその月に、「満日」(一九三四年七月二二日付)家庭欄で「児童郷土讀物の高峰／＼満洲文庫」の誕生／家庭には必ず備ふべき良書」という見出しで、次のように紹介されている。

かねて研究編纂中であつた「満洲文庫」が、こんどすばらしい装ひをこらして誕生した(中略)ややもすれば、物質文明謳歌のみしたがる満洲に於いて、かゝる児童精神文化運動の樹立は、なかなか困難である、編輯同人たちは、かゝる中にあつてよく材料を吟味し、批判して、児童の理解に適するやう制作に努力しつづけた、(中略)満洲在住の家庭では贅費を省き、子どものためへの費用をもつと豊にすべきであらう、初等教育者たちが、こぞつて、かゝるよき文化運動に參與したことは、祝すべきことである。(M・O生)

この引用文では、「満洲文庫」の刊行を満洲における「児童精神文化運動の樹立」だと捉え、それに関わつた大連の初等教育者たちの仕事を讃えている。

さらに、当時の評価が分かる二枚の印刷物がある。

一つは、第三地理篇『大平原めぐり』(昭和九年十一月五日刊行)

に挟みこまれていたものである。長いので要約する。鈎括弧内は本文からの引用である。

「東京高等師範學校教授保科孝一先生」の「お言葉」として、まず、「(滿蒙)新帝國の發展と福利とは、一にかゝつて日滿兩帝國の善隣の實績如何にある」と述べ、「兩帝國の善隣の實績は、兩國民が相互の風俗なり文化なり歴史なり、その他一切の國情をよく理解し、眞に兄弟の友好を持するにあらざれば、これをよく期待することは出来ないのである。それにはまづ兩帝國の少年兒童から教育してかからねば」ならない。「この度石森君がこゝに着眼して大連初等教育者たちと滿洲文庫を創刊してその教育に資益しようと、志されしことは、まことに意義ある計畫」である。「滿洲文庫」は、「取材その宜しきを得、これに精巧鮮麗なる挿畫を豊富に差加へ、行文もまた兒童本位の直切簡明、しかも字句流麗、讀みゆく間に感興油然而として湧き起」る。「卷中年中行事等において、日滿兩帝國の間にきはめて密接な關係の存することを知り、兩帝國の今日あるは決して偶然でない」と述べ、「もし日滿兩帝國の少年兒童があまねくこれを讀破したならば、かならずや兩帝國親善の上に貢獻するところすこぶる大なるものある」と推奨している。

上記は、滿洲での購読者に対する紹介宣伝であるが、「滿洲文庫」終刊時には、東京高等師範の佐々木秀一の「滿洲文庫」に関する文章が、「東京朝日新聞」の「讀書欄」に掲載、日本全国に紹介される。そこにはこう書かれている。

(前略) さて、日滿兩國の關係がどうあらねばならぬかに就いては、その大方針に何人も迷つて居ないが、その方針の十分に實現するのは、何としても、現在の子供が成長して十分にこの國を知つての上の二國の提携親和協力といふことでなければならぬ。

それにはどうしても、今日の子供に、滿洲の現状―地理的、歴史的、政治的、經濟的の方面から、風俗でも、習慣でも、言語宗教、藝術でも苟もこの國をして特質あらしめる一切を學ばせなければならぬ。然し一國教育の教材全體の安排からは、滿洲にだけ、こんなに多くの部分を割く譯に行くまいと思ふ。

これは、どうしても直接教育以外、有ゆる方法を盡して、その目的を達する工夫を立てなければならぬが、かうして目的にピッタリ適したものは、實にこゝに紹介しようとする「滿洲文庫」である。(中略)

今この「滿洲文庫」は、既に公にされた十巻を、以上の各視點(材料の正確さ、優れた文章、兒童の趣味と程度に適する材料の精選という点・筆者注)からの用意を十分に盡くして居り、その最大の特質として、優れた寫眞版を豊富にし、その説明或は記述を、趣味に滿ち教育的工夫に富んだものとし、然も且つ、これを利用すべき兒童の程度をチャーンと明かに示してゐる。(中略) 日滿兩國の兒童に薦めるのみならず、更に世の教師父兄にも推薦するに躊躇しないものである。

上記二編の文章は、いずれも、「滿洲文庫」を高く評価している。保科孝一、佐々木秀一はともに、石森の東京高等師範時代の恩師である。佐々木秀一は石森が童話同人誌「新童話」を刊行した際、その雑誌の賛助員となつて、石森の滿洲での文学活動を後押ししている。今回も、石森との関わりで内地に紹介する労をとつたとも考えられる。

さて、ここで注目すべきは、「滿洲文庫」の役割が「兩帝國の善隣」「二國の提携親和協力」を實現するのに、最適の書籍であると考えられている点であり、読者対象が、在滿の日本の子どもたちから、「日滿兩帝國」の子どもたちになつてきている点である。知識讀物で

ある「満洲文庫」が満洲国建国推進の役割を担っていく過程がここに現れている。

おわりに

「満洲文庫」(全十四冊)は一九三四年から三五年にかけて、刊行された満洲読物である。石森を中心とする大連の初等教育者たちの手になった。いわば、出版関係では素人たちの集団である。当初は作品名の不統一やルビ等に不備があつたが、刊行の回を重ねるごとに、改良されていった。石森はじめ初等教育者たちの熱意の表れであり、石森の指導性や編集者としての素質が発揮された仕事であるともいえる。満洲の風俗、歴史、地理、理科、文学等を正しく知ることによって、自分たちの住む満洲に愛着を持つてほしい、という願いをこめ、読者である子ども本位に作られた本づくりがなされている。だが、当時の植民地大連で発刊されたこの叢書は、一方で、国策を遂行する人づくりの一端を必然的に担うことにもなった。さらに、その後の戦局とあいまって、ますます高い評価を受け、満洲国の発展をおし進めるための役割を担う叢書となっていくのである。一方、「満洲文庫」の成功は、石森にとっては大きな自信になり、『満洲補充読本』とともに、その後の石森の教育・文学活動の原点となるのである。

次章で、「満洲文庫」全十四冊のうち、文学篇『童話と童詩』(紅版)と『満洲新童話集』(緑版)について考察する。

第六章 「満洲文庫」 文学篇『童話と童詩』

はじめに

「満洲文庫」七篇（全十四冊）のうち、第六「文学」篇を取り上げる。「文学」篇は紅版『童話と童詩』（一・二・三学年用）と、緑版『満洲新童話集』（四・五・六学年用）とからなり、一九三五年五月五日に同時に刊行された。ともに石森の編集で、緑版『満洲新童話集』にはさらに境一之が編輯同人として加わっている。この文学篇は当初の計画にはなかったが、継続発行の要望が強く、新たに加わったものである。

満洲の傳説口碑はありますが、童話、童詩は乏しいです。

このごろやつと満洲を背景にした新しい童話と童詩が生まれました。これからだん く かうした本が豊かになるでせう。

これはその處女集です。

（『満洲新童話集』表見返し「満洲文庫」刊行目次）

これは、緑版『満洲新童話集』の紹介記事である。が、紅版『童話と童詩』についても当てはまる。この「文学」篇は、「満洲を背景にした新しい童話と童詩」を収録しており、満洲児童文学の「處女集」である。つまり、出版時点における満洲児童文学の実相を表しているといえる。本章では、「満洲文庫」文学篇『童話と童詩』（紅版）について考察する。

一 『童話と童詩』（紅版）の概要

（一） 編集方針と収録作品

『童話と童詩』の「後記」には、次のように書かれている。

コレ ダケ ノ 童話 ト 童詩 ト ヲ アツメル ノニ
ハ カナリ 手カズ ヲ カケマシタ。エランデ エランデ
コレダケ ニ ナツタ ノ デス。ドレモ リツパナ モノ
バカリ デス ガ、コノ 廣イ 満洲 ニ タツタ コレグラ
キ シカ 童話 ト 童詩 ガ ナイトハ サビシイ ト 思
ヒマス。ドウゾ 皆サン ノ 力 デ 新シク 生ンデ 下サ
イ。（後略）

「満洲文庫」では記名はないが、「東亜『新満洲文庫』（以下「新満洲文庫」）では、「後記」の末尾に「編輯者石森延男」とあることから、この「後記」は石森の文章であることが分かる。石森は、この『童話と童詩』を編集するにあたり、時間と手間をかけて作品を集め、その中から、掲載に値する作品を選んだという。しかし、満洲の広さに比べたら作品はまだまだ少ないので、これを読む子どもたちの手で、満洲から作品を生み出してほしい、と述べている。

ここという「皆サン」とは、在満の日本の子どもたちを指し、ここでいう「童話」「童詩」は、日本人の手によって生まれた、満洲を題材とした作品を意味している。実際、この『童話と童詩』に収録されている作品はすべて、日本人が書いた作品であった。

石森はどのような出版物から作品を集めたのか。現時点で分かっているのは、「コードモノクニ』『満洲唱歌集』『第二まんちゅりあ』『鵲』（詩誌）『愛兒と家庭』『協和』『童心行』である。

（二） 内容

表 ①・原書では目次の漢字には全てふりがなが付いている。・作者名・ジャンルは筆者記入。

掲載作品はすべて満洲を舞台にしているが、さらに以下の観点から題材・内容別に分類した。

題材別―満洲の地名・自然・風物・中国の人々が出てくるもの ●（34編）

内容別―①自然・風物を描いたもの ◎（28編）

②日本人・日本の子どもを描いたもの ○（11編）

③中国人・中国の子どもを描いたもの ☆（6篇）

④時代を表す表現のあるもの ※（3編）

紅版『童話と童詩』（尋常一・二・三学年用）	題材・内容	出典・出版履歴
「ハル」 （瀧口武士） 詩	●	『第一まんちゅりあ小學一・二・三年用』（一九三三・八）
「テフテフ」 （瀧口武士） 詩	◎	『コドモノクニ』（十一）巻七号（一九三〇・七）／『満洲地図』
「エン ソク」 （政本勇） 童話	◎	『第一まんちゅりあ小學一・二・三年用』（一九三三・八）
「學藝會 ニデル アサ」 （石森延男） 詩	●	『満洲唱歌集』（尋常一・四学年 一九二六・三）
「黒豚 小豚」 （北原白秋） 詩	◎	『協和』（一九三二・八・一五）／『満洲補充読本一の巻』（一九三五・二）
「テラス デセウ」 （石森延男） 童話	◎	『満洲唱歌集』（尋常一・四学年 一九二六・三）
「熊岳城」 （野口雨情） 詩	◎	『満洲唱歌集』（尋常一・四学年 一九二六・三）
「やなぎ の わた」 （石森延男） 詩	◎	『満洲唱歌集』（尋常一・四学年 一九二六・三）
「やなぎ の 春」 （北原白秋） 詩	◎	『満洲唱歌集』（尋常一・四学年 一九二六・三）
「サンザシ」 （八木橋綾子） 童話	●☆	『満洲唱歌集』（尋常一・四学年 一九二六・三）
「ノロさん の かけくら」 （野口雨情） 詩	◎	『満洲唱歌集』（尋常一・四学年 一九二六・三）
「ペ チ カ」 （北原白秋） 詩	◎	『満洲唱歌集』（尋常一・四学年 一九二六・三）
「ペチカ ト スズメ」 （石森延男） 童話	◎	『満洲唱歌集』（尋常一・四学年 一九二六・三）
「あきばれ」 （瀧口武士） 詩	◎	『満洲唱歌集』（尋常一・四学年 一九二六・三）
「ハト ト スズメ」 （政本勇） 童話	◎	『満洲唱歌集』（尋常一・四学年 一九二六・三）
「キタヤスカヤ」 （北原白秋） 詩	◎	『満洲唱歌集』（尋常一・四学年 一九二六・三）
「りん ご」 （北原白秋） 詩	◎	『満洲唱歌集』（尋常一・四学年 一九二六・三）
「子供の 熊」 （北原白秋） 詩	◎	『満洲唱歌集』（尋常一・四学年 一九二六・三）
「ハル」 （境一之） 詩	◎	『満洲唱歌集』（尋常一・四学年 一九二六・三）
「ふかい 霧」 （石森延男） 詩	◎	『満洲唱歌集』（尋常一・四学年 一九二六・三）
「なは とび」 （石森延男） 詩	●	『満洲唱歌集』（尋常一・四学年 一九二六・三）
「トンボ ノ ハネ」 （政本勇） 童話	●☆	『満洲唱歌集』（尋常一・四学年 一九二六・三）
「タ マ ゴ」 （八木橋雄次郎） 詩	◎	『満洲唱歌集』（尋常一・四学年 一九二六・三）
「ワンサン ト犬」 （中溝新一） 童話	●☆	『満洲唱歌集』（尋常一・四学年 一九二六・三）
「シナ ノ コドモ」 （倉橋惣三） 詩	◎☆	『満洲唱歌集』（尋常一・四学年 一九二六・三）
「や ん ま」 （赤塚末造） 詩	◎☆	『満洲唱歌集』（尋常一・四学年 一九二六・三）
「かつこどり」 （政本いさむ） 詩	◎	『満洲唱歌集』（尋常一・四学年 一九二六・三）
「ヤナギナミ木」 （石森延男） 童話	◎※	『満洲唱歌集』（尋常一・四学年 一九二六・三）
「フユ ト ハル」 （石森延男） 童話	◎	『満洲唱歌集』（尋常一・四学年 一九二六・三）
「ずるい 父さん」 （矢澤邦彦） 詩	◎	『満洲唱歌集』（尋常一・四学年 一九二六・三）
「おたまじやくし とろば」 （境一之） 詩	◎	『満洲唱歌集』（尋常一・四学年 一九二六・三）
「二人で 一つ」 （山田健二） 童話	●☆	『満洲唱歌集』（尋常一・四学年 一九二六・三）
「夜汽車」 （島木赤彦） 詩	◎	『満洲唱歌集』（尋常一・四学年 一九二六・三）
「ぶた の 子」 （島木赤彦） 詩	◎	『満洲唱歌集』（尋常一・四学年 一九二六・三）
「ヒカウキ」 （政本勇） 童話	◎※	『満洲唱歌集』（尋常一・四学年 一九二六・三）
「高い所」 （瀧口武士） 詩	◎	『満洲唱歌集』（尋常一・四学年 一九二六・三）
「遠足」 （瀧口武士） 詩	◎	『満洲唱歌集』（尋常一・四学年 一九二六・三）
「海」 （瀧口武士） 詩	◎	『満洲唱歌集』（尋常一・四学年 一九二六・三）
「もうすぐ夏休み」 （山田健二） 童話	◎	『満洲唱歌集』（尋常一・四学年 一九二六・三）
「みちぐさ」 （平方久直） 童話	◎	『満洲唱歌集』（尋常一・四学年 一九二六・三）
「ダンダンバタケ」 （八木橋綾子） 詩	◎	『満洲唱歌集』（尋常一・四学年 一九二六・三）
「雲」 （石森延男） 童話	◎	『満洲唱歌集』（尋常一・四学年 一九二六・三）
「ヒル」 （久富次郎） 童話	●☆	『満洲唱歌集』（尋常一・四学年 一九二六・三）

(1) 構成

『童話と童詩』の目次（前頁の表1）は、一見、脈絡なく作品が並んでいるかに見える。しかし、よく見ると、作品の配列・表記に工夫があり、学齢を意識した構成になっている。低学年用であるため、短い作品が多い。そのうち、半数以上が童詩で、大部分が定型詩か、定型詩に近い形である。片仮名書きの詩がいくつか続くと、童話が入る。また合間にひらがな書きの作品が入る。そして、次第に長い文章が増えていく。これは、学齢に応じた読物を与えるほかに、読み手が飽きないための工夫でもあり、また、より文学性の高い作品を与え、しかも作品を楽しみながら、読む力を伸ばしていくという狙いがあったとも考えられる。ただ、惜しいのは、挿絵が本文内容とマッチしていない箇所がある点である。それは、おそらく「満洲文庫」の制作に携わったのが、プロの出版関係者ではなくて、初等教育者であったことと関係している。

(2) 題材・内容による分類

収録作品は四十三編。うち、詩が二十八編、童話が十五編である。詩二十八編の中には、発表時には「童謡」として曲譜のついていた作品が十編ある。詩が多いのは、短い作品であるというほかに、おそらく、洗練された言葉によって表現される詩の文学性を石森が高く評価していたからであろう。また、「童話」と一括りにしたが、実際には、写生文、童話、随想等いろいろである。前掲した「後記」の記述から、すべて満洲を背景にした作品であることが分かる。だが、内容はさまざまで、満洲の風物や中国の人々を描いた作品もあれば、在満日本人の子どもの生活を描いた作品もある。そこで、題材・内容によって、さらに分類し、『童話と童詩』の目次にそれぞれ

記号を付した（表1）。分類方法は以下のとおりである。

まず、題材による分類だが、作品中に、「満洲の地名・風物・自然・中国の人々が出てくるもの」には●印を付けた。三十四編あった。次に、内容による分類だが、「自然・風物を描いたもの」には◎印（二十八編）、「日本人・日本の子どもの生活を描いたもの」には○印（十一編）、「中国人・中国の子どもを描いたもの」には☆印（六編）をつけた。ただし、風物を描きながら、子どもたちの姿を描いたような作品については、内容別分類において、明確な線引きがむづかしい、その場合は、重点的に描かれている内容によって分類するか、あるいは複数の記号を付した。さらに、内容別分類の中で、「時局を表す表現のあるもの」には※印（二編）を付した。これらの内容別作品の特徴については、「三 作品分析」の項で述べる。

二 作者と作品

〈表2〉 作者・作品数一覧表

○印は「満洲文庫」編集同人

作者名	掲載作品数	備考（当時の所属他）
石森延男	9	民政署学務課・視学
瀧口武士	6	小学教師・詩人
政本勇	5	小学教師
境一之	2	満鉄職員
山田健二	2	八木橋雄次郎夫人
八木橋綾子	2	小学教師・詩人
八木橋雄次郎	1	小学教師
久富榮次郎	1	鞍山中学校長・歌人
矢澤邦彦	1	小学教師
平方久直	1	大連新聞学芸部
中溝新一	1	小学教師
赤塚末造	1	詩人・歌人・童謡詩人
北原白秋	6	詩人・歌人・童謡詩人
野口雨情	2	詩人・歌人・童謡詩人
島木赤彦	2	詩人・歌人・童謡詩人
倉橋惣三	1	幼児教育研究者

作者と作品数を一覧表(表2)にすると、作者たちは、大きく二つに分かれる。「満洲在住者」と「内地在住者」である。

「満洲在住者」は、瀧口武士以外は、石森を中心とする児童文学グループのメンバーである。つまり彼らが満洲児童文学の担い手たちである。「内地在住者」は、本書の場合、北原白秋、野口雨情、島木赤彦、倉本惣三である。当時すでに名のある歌人・詩人及び教育者である。彼らの作品は、いずれも『満洲唱歌集』および「コードモノクニ」から選定されている。

『満洲唱歌集』とは、教科書編集部が、在満日本人児童のために編んだ音楽の教科書である。『満洲唱歌集 尋常小学第一・二学年用』(一九二四年八月)の「緒言」に、「歌詞は主として満蒙の景物を背景とし児童の日常目撃するものの中から趣味の教養、感情の陶冶(正しくは「陶冶」。筆者注)に適切なものを選んだ」とある。つまり、歌詞は、満洲の風物を背景とし、在満日本の子どもたちの身近にあるもので、子どもたちの心を育てるにふさわしいものを選んだ、というのである。『満洲唱歌集』は、「一・二学年用」の他に、「三・四学年用」、「五・六学年用」や「各学年毎」、または「再版」等で、十五種類以上にのぼる⁶⁰。白秋・雨情・赤彦らは、『満洲唱歌集』が編まれた初期の時代に、教科書編集部依頼に応じて満洲唱歌の制作に携わった。

「コードモノクニ」は一九二二年創刊の低学年を対象とした絵雑誌で、大正から昭和にかけて一時代を画した。長期にわたり、倉橋惣三が編集顧問、北原白秋が童謡顧問を務めている。当時、在満の日本の子どもにとっても、絵雑誌「コードモノクニ」は身近な雑誌であったように、子どもたちが投稿した自由画が、一九二四(大正十三)年五月号や十月号にすでに掲載されている。

(一) 満洲在住者プロフィール

「満洲在住者」の多くは小学校教師で、仕事の傍ら、石森を中心とする児童文学同人誌や大連発行の新聞に作品を書いたり、研究会に参加したりしている。教育の最前線で子どもたちに接する仕事であったからこそ、在満日本人児童生徒に対する満洲を題材にした作品の少なさと必要性を感じたのにちがいない。

石森延男の作品は、童詩及び童話が全部で九編掲載されている。そのうちの童詩「やなぎのわた」は『満洲唱歌集』⁶¹からの転載である。

瀧口武士(一九〇四—一九八七)。大分県生まれ。大分師範学校在学中に短歌を創作。のち詩作するようになる。一九二四(大正十三)年渡満、旅順師範学堂研究科卒業後、大連市朝日小学校に勤める。

安西冬衛らとともに詩誌「亜」の同人として活躍。短詩形式で大正末期の日本詩壇に新風を起こし、現代詩発展のきっかけとなった「詩と詩論」誌の創刊に中心的役割を果たした。一九三九(昭和十四)年帰国して郷里の小学校に勤める傍ら、農業に従事、詩作する。詩集に『園』(一九三三)『道』(一九八〇)、遺稿集『庭瀧口武士詩集』(一九九五)がある。⁶²

政本勇(一八九七—?)。綾不美男のペンネームを持つ。作詩のときは「政本いさむ」を使用。香川県師範学校卒。石森より早い一九二二(大正十一)年に渡満。伏見台小学校を経て大連常盤小学校に勤務。同校を会場として石森らと有志による古典の勉強会(水曜会)を開く。日本古代文学を研究。同人誌「新童話」「童話作品」に創刊号から参加。石森の文学仲間であり、「満洲文庫」の編集同人でもある。著作に『門売り』(大陸の童詩・旅行・童話)『幸福の花』(大陸の童話と風俗)『かささぎ—大陸の生き物と傳説』(共に一九四二年修文館)がある。

境一之(?!?)。本名は境野一之。一九二八、二九年頃、大連常盤小学校に勤務。同僚に、八木橋、政本、久富、佐々木ら(八木橋

以外の三人とともに、「満洲文庫」の編集同人となっている）がおり、石森とはその頃からの付き合い。画家。詩作と同時に、同人誌の表紙等、美術面でも活躍。戦後、熊本県美術協会委員長を務める。

山田健二（一九〇三—一九七六）東京生まれ。小学一年生まで東京で暮らし、家族とともに渡満。旅順工科大学を卒業後、満鉄に入社。満洲で育った、いわゆる「満洲っ子」である。一九三一年一月、満鉄社員会の機関誌「協和」で行われた童話の懸賞で一等賞を受賞⁶³し、その時の選者が石森延男だった。それ以来、満鉄社員として仕事をしながら、童話を書き、口演童話を行う。『高粱の花環』（一九三四年 新生堂）、『慰安車』（一九三五年 新報社）、『少年義勇軍』（一九三八年 満鉄社員会）等の満洲童話集がある。山田健二については、「第V部」で詳しく述べる。

八木橋雄次郎（一九〇八—一九八四）。「八木橋ゆじろ」とも記名。秋田師範をへて旅順師範専攻科卒。一九三〇（昭和五）年、大連常盤小学校に赴任。同僚であった政本勇の紹介で石森を知る。同人誌「新童話」「童話作品」同人。「赤い鳥」に投稿し、童話「青空」（一九三三年五月号）が掲載される。一九三四年、瀧口武士と詩誌「鵲」を発行。「満洲詩人」「新領土」同人。短編童話集『みどり色の地図』（一九五〇年 雁書房）、詩集『地下茎』（一九六五年 謙光社）がある。戦後は、日本国語教育学会理事、作文の会会長等を歴任。八木橋綾子は八木橋雄次郎夫人であるという以外、詳細は不明である。

久富榮次郎（？—？）熊本出身。一九二一（大正十）年熊本県第二師範学校卒。一九二七年旅順師範学校卒。大連常盤小学校に勤務。「童話作品」同人。「満洲文庫」では、佐々木悌三とともに「カメラの満洲」を担当、実際に撮影旅行に出かけている。そのため、作者一覧表（表2）では、編集同人と同じ扱いにした。戦後、郷里熊本の教育委員会に勤める。随筆集『あの日あの時』（一九七七年 財界

春秋社）がある。

矢澤邦彦（一八八三—？）。東京高等師範専攻科卒。一九二一（大正十）年渡満。奉天中学校を経て、鞍山中学校長に就任。詩人、明星派歌人。前田翠溪と学友、上田敏に師事。石森が教科書編集部に赴任した当時、すでに教科書編集部にあつて、国語科主査を務めていた。石森とともに、文芸雑誌「童心行」を主宰。著書に『少国民読物 杏の花びら』（一九四三年 筑摩書房）『国語教材に現れたる詩の鑑賞』（一九四九年 秀文館）等がある。

平方久直（一九〇四—一九九〇）岐阜師範学校卒。渡満前から創作を手がける。一九二八（昭和三）年に渡満。後、旅順師範学堂研究科で学ぶ。旅順で小学校の教員をしながら創作に携わる。本書掲載の「みちぐさ」は、旅順時代に「愛児と家庭」（掲載年不明）に発表した幼年童話で、「童話教育」（一九三四年九月）にも掲載された。

石森主宰の「童話作品」にほぼ毎号執筆。平方は在満当時より、故郷の農民の姿を思い起こさせるとして、中国の農民の姿を多く描いている。また、中国の子どもを主人公にした作品も多い。在満時より「赤い鳥」にも投稿し、童話「線路」（「赤い鳥」一九三五年七月号）、童話「王の家」（「赤い鳥」一九三六年三月号）が掲載されている。一九三六（昭和十）年に、内地に引き揚げ、『王の家』（一九四〇年 文昭堂）『童話集 北京に行く』（一九四二年 教養社）、『イカダノオウチ』（与田準一編集「新幼年文庫」一九四二年 帝国教育出版社）等を出版、『現代童話四十三人集』（一九四三年 フタバ書院成光館）に「氷の上」が収められている。平方久直については、「第III部第八章」で詳しく述べる。

中溝新一（一八九一—？）。東京で婦人雑誌、児童雑誌に関わりながら、『豚ちゃんの記録』他二冊の童話集及び子供評論集等を出版。一九一九（大正八）年九月に渡満。大連新聞学芸部長、大陸社嘱託を経て中日文化協会編集部主事となり、雑誌「満蒙」を編集。著書

に『海国少年の夢』（明治三十九年）、『湘南物語』がある。

赤塚末造（？―？）。大連在住の小学校教師。「讀方教材論」（『国語と教育1』推定一九三二年六月）という文章がある。

（二）内地在住者プロフィール及び掲載作品履歴

北原白秋（一八八五―一九四二）は、当時すでに詩壇に確固たる地位を築く詩人・歌人であった。本書には童謡が六編収められている。そのうちの「ペチカ」⁶⁴「やなぎの春」⁶⁵は『満洲唱歌集』から選定されており、いずれも山田耕筰⁶⁶の曲がついている。執筆の経過は、「教科書編集部依頼を受けた二人が、満洲に住む日本人の子どものために、書き下ろした、もの」⁶⁷だということである。のち、白秋は、一九三〇（昭和五）年に、満鉄の招聘を受けて、訪満し、約一ヶ月かけて満洲を旅行している。その直後は数編の童謡を作ったのみであった。が、その十三年後、病床にありながら、訪満の経験を「満洲建国十周年慶祝記念」として編んだ詩集『満洲地図』（一九四三年九月 フタバ書院成光館）にまとめている⁶⁸。本書に掲載された次の四作品、「黒豚小豚」「キタヤスカヤ」「りんご」「子供の熊」は、いずれも『満洲地図』に収められているが、初出はみな「コドモノクニ」である。「黒豚子豚」は、清水良雄画、中山晋平作曲そして土川五郎の振りがついて、一九三二年三月一日号（第十一卷三号）に掲載。「キタヤスカヤ」は、岡本帰一画、小松耕輔作曲として一九三〇年八月一日号（第九卷八号）に掲載。「りんご」は、「林檎（リンゴウ）」と漢字のタイトルで、清水良雄画、室崎琴月作曲として、同年七月一日号（第九卷七号）に掲載。「子供の熊」は、清水良雄画、中山晋平作曲として、同年十月号（第九卷十号）に掲載されている。

野口雨情（一八八二―一九四五）は、坪内逍遙に師事し、詩作の

傍ら、お伽噺・短編童謡を発表する。独自の詩型による民謡、また、当時では非常に新しい型であった口語詩を発表、口語詩運動の先駆けとなる。哀調を帯びた童謡が多い⁶⁹。雨情は一九二三・二四・二六・三四年の四回、満洲を旅している。そのほとんどが、満鉄の招聘による講演巡遊である。本書に掲載された「ノロさんのかけくら」は、初山滋画、室崎琴月作曲として、「コドモノクニ」一九三四年十月号（第十三卷十一号）に発表されている。「熊岳城」の出典は現在調査中である。

島木赤彦（一八七六―一九二六）は伊藤左千夫に師事し、アララギ派の歌人として、斎藤茂吉らとともに意欲的に作歌活動を行った。一九二〇年「童謡」の創刊にともない、請われて童謡に筆を染め、以後、童謡を多く発表している。自然観賞に基づく写実的な童謡が特徴である。赤彦は一九二三（大正十二）年、満鉄の招聘で、十月十七日から十一月三日まで、満洲を訪れ、大連・奉天（現在の瀋陽）、長春、撫順等で、万葉集や短歌道の講演を行っている。翌年より、赤彦は満洲を詠んだ短歌約三〇首と童謡三首を、雑誌「アララギ」（一九二三年十二月号）「一九二四年五月号」「同年十一月号」にそれぞれ発表している。童謡三首とは、「高粱」「豚」「満洲の汽車」であるが、「高粱」は「アキ」（小松耕輔曲）として、「豚」は「ぶたの子」（信時潔曲）として、それぞれ『満洲唱歌集尋常科第一・二年用』（一九二四年八月）に収録されている。また、「満洲の汽車」は「夜汽車」として『満洲唱歌集尋常科第三・四年用』（一九二六年三月）に収録されている。「夜汽車」には作曲者名が記されていない。『満洲唱歌集』の「緒言」に、「本書の歌曲中記名してあるものは特に當編輯部から委託したものである」ということであるから、「夜汽車」の作曲者の記名がないということは、教科書編集部内の者が作曲したと考えられる。本書では、「夜汽車」と「ぶたの子」が掲載されている。

倉橋惣三（一八八二—一九五五）は、幼児教育者で、日本の保育理論を確立した人として知られている。「婦人と子供」（一九一〇年創刊、のち「幼児の教育」と改名）、「少女画報」「日本幼年」「コードモノクニ」「キンダーブック」等の編集にも関わっている。保育と結びつけた絵雑誌づくりを試み、月刊保育雑誌の基礎を築いたともいわれる。倉橋は、一九一六（大正五）年の夏、満洲・朝鮮の視察と講演に出かけており、「満鮮幼児教育視察談」として「婦人と子供」（一九一六年第十六卷第十一号、同年第十六卷十二号）に掲載している。また、一九二七（昭和二）年の夏にも満洲を訪れ、満鉄主催の保育講習会で、満洲全土から集まった保母たちに講義をしている。その時の様子を「南満行」として「幼児の教育」（一九二七年第二七卷第十号、同年第二七卷第十一号）誌上で報告している。本書に掲載された「シナノコードモ」は、「童謡」として岡本帰一の画で、「コードモノクニ」（一九二七年十一月号（六卷十一号））に発表されている。作曲者は不明である。

三 作品分析

（一）自然・風物を描いたもの

本書に収録された四十三作品は、すべて満洲を背景にした作品である。

そのうち、「自然・風物を描いたもの」が一番多く、二十九編で、全作品の大半を占める。しかも、そのほとんどが、純粹な風物詩で、そのうち、十編は「童謡」である。

本書に出てくる風物では、「赤く、まるい夕日」「（黒）豚」「やなぎのわた」「ノロ（鹿）」「霧」「ろば」「ひろい野原」「枯れ野」「サンザシ」「こうりゃん」「ジャンク」「レンギョウ」「きいろいほこり」「ふ

さつき帽子」「熊」「ペチカ」等である。「ペチカ」はロシアの暖房設備で、中国式は「オンドル」である。だが、大連、ハルピンはもとロシア人によって作られた街でもあるので、「ペチカ」も満洲の風物の一つとなっている。

掲載されている詩のうち、「満洲在住者」の作品と白秋、雨情、赤彦、倉橋惣三ら「内地在住者」の作品とは半々である。だが、両者の間には違いがある。その違いはすべての作品について当てはまるわけではないが、前者の作品は「旅人の眼」で見た満洲風物詩であるのに対し、後者の作品は生活の中から生れた、生活実感の伴っている作品が多い。

例えば、同じ「やなぎのわた」を題材にした作品に、石森の「やなぎのわた」と白秋の「やなぎの春」がある。

石森は、次のように詠う。（／は改行を表す。以降も同じ）

青空 とぶ よ／ふは ふは わた が／やなぎ の わた
が／光つて 光つて／とぶよ。
窓 から はいる／ふは ふは わたが／やなぎ の わた
が／つづいて つづいて／はいる
机 に のる よ／ふは ふは わた が／やなぎ の わた
が／こつそり こつそり／のるよ。
廊下 に たまる／ふは ふは わた が／やなぎ の わた
が／あんなに あんなに／たまる。 （十五・十六頁）

石森の「やなぎのわた」は、春になると、やなぎのわたがふわふわと窓から中に（教室だろうか）入ってきて、机の上にそつとのり、やがて廊下にたまるという、日常生活からしか生れないであろう生活実感のある作品である。この詩は一九三二年三月に『満洲唱歌集』（尋常小学校二年用）に収録されている。

白秋は次のように詠う。

やなぎのわたの飛ぶころは／きいろいほこりもかすみす／乗
れく 小さな驢馬の上／夕日の古塔を見に出よか／奉天北陵、
新市街／飛べく やなぎの毛のわたよ／ふさつき帽子をうち
ふるか／やなぎのわたの飛ぶころは／日本のお祭り思ひ出す
(十七頁)

黄沙、驢馬、夕日、古塔、ふさつき帽子。白秋の「やなぎの春」では、奉天の街の春の情景が一幅の絵のように描かれている。スケールの大きな作品である。そこには異国にたたずむ旅人の姿が浮かんでくるように思える。

白秋の六首は、「やなぎの春」をはじめ、みな風物を描いている。白秋の「ペチカ」は、現在でも歌い継がれている詩情あふれる七調の口語定型詩である。白秋は詩の中で「栗や栗やと、呼びます、ペチカ」「いまに楊(やなぎ)も萌えましょ、ペチカ」と詠う。どちらも満洲の風物である。しかし、この詩全体から受けるイメージはロシア的あるいは西洋的である。白秋が満洲を訪れるのは一九三〇年である。この「ペチカ」創作時には、白秋はまだ満洲の地に足を踏み入っていない。

「キタヤスカヤ」(末尾資料1・1)では、ハルピンの街の様子を詠み、「りんご」(同1・2)では汽車の中での様子を描く。「子供の熊」(同1・3)では、突然現れた熊の子に驚き、大騒動のトンカ(敦化)の町の様子を物語風に描き、「黒豚小豚」(同1・4)では、満洲の風物をたつぷり入れながら、黒豚たちの様子を擬態語「ちよこら」のリフレインを効果的に使って表現している。

赤彦の二作はともに七七調の口語定型詩である。ころころ丸い豚と広い野原を描いた「ぶたの子」(同1・5)はリズムカルでユーモ

ラス。月あかりの中、枯れ野をひた走る「夜汽車」(同1・6)には詩情がある。⁷⁰⁾

『満洲唱歌集』は、一九二四(大正十三)年に最初に作られてから何度か改訂されており、当初は著名な作曲家・歌人・詩人らによる作品が多数を占めていたが、しだいに、より現地に即した作品に差しかえられ、「ペチカ」「ぶたの子」は、一九三二(昭和七)年頃改訂の『満洲唱歌集』からは、外されている⁷¹⁾。石森が、この『童話と童詩』を発刊した一九三五(昭和十)年には、「ペチカ」や「ぶたの子」はすでに『満洲唱歌集』の中にはなかった。だが、それらを石森はあえて本書に掲載している。それはなぜか。あくまでも推測にすぎないが、白秋や赤彦の作品は今日の眼から見ても質的に高く、また、当時すでに愛唱され、親しまれていたであろう。作品選定の際、石森が最も大切にしたのは、石森自身の鑑識眼ではなかったか。石森の中に、郷土満洲を肌で理解させ、愛着を持たせなければという思いと同時に、子どもにより質の高い作品を与えたいという思いがあったのだろう。その思いから出た作品選定であったと推測される。

雨情の「ノロさんのかけくら」(同1・7)は、汽車と駆けっこするノロ鹿たちの姿が目につくような、動きのあるユーモラスな詩である。

全体的に、満洲の自然・風物を象徴的に作品に取り込み、洗練された言葉と技巧で、満洲の良さを詠っている。いずれも、リズムカルで、のどかで、おおらかで、異国情緒を感じさせる。だが、そこには生活実感はない。

では、「満洲在住」の作者たちは満洲をどのように表現したか。

石森は、「フユ ト ハル」(同1・8)で、満洲の南と中ほどに位置する大連と新京(現在の長春)の気候の違いを擬人法で表した。

また、海に臨む大連に発生する霧を八五調の詩「ふかい霧」(同1・

9)で描いている。

八木橋綾子は「ダンダンバタケ」で、次のように描く。

ダンダン バタケ／カオリヤン アヲイ ヨ／ユツタリ／ユツ
タリ／ロバ ガ トホルヨ／ダンダン バタケ／ウミ ガミ
エルヨ／ユツタリ／ユツタリ／ジャンク ガ トホル ヨ／
(七八頁)

目に見える景色をそのまま文字に書き写したような詩である。が、この詩からは、「ゆったり」と流れる時間や生活が感じられる。石森の作品も、八木橋綾子の作品も、身近な題材で、表現が直接的である。そこにあるのが、生活実感から生じた思いだからであろう。

瀧口武士は「ハル」で、こう詠う。

ソラノ／ユフヒハ／マンマルイ／ミンナノ／カホモ／マンマル
イ／マアルイ／マルイ／ハラッパデ／ミンナ／イッショニ／ア
ソンデル」(六頁)

わずか四十九文字の口語定型詩の中に、地平線を望む原っぱで元氣よく遊ぶ子どもたちの姿が現れ出る。ここには、風土と一つになった子どもたちの姿がある。本書に掲載された瀧口武士の作品には、この「ハル」以外、背景が満洲だとわかる作品はない。そのためであるうか。瀧口の作品の中には、普遍的な子どもたちの姿がある。「テフテフ」(同1・10)では、蝶をつかまえようと、帽子を持って追いかける男の子の姿が描かれ、「秋晴」(同1・11)では、昼休みの運動場のわきかえるさまが描かれる。「高い所」(同1・12)では、高い所が好きな子どもの気持ちが描かれ、「遠足」(同1・13)では、うきうき

とはやる気持ちを「とつとつとつとつと進んで行くよ」と表現する。ここには、生き生きとした子どもたちの姿があり、子どもたちの生活実感がある。また、「海」では、こう詠う。

海の神様／何を産む／頭のやうな／雲を産み／心のやうな／風
を産み／海べに町を／産みました。(六五頁)

この詩では、雄大な自然の営みを無駄のない言葉で表現している。満洲で海べの町といえ、瀧口の住む大連を指していると思われる。政本いさむの「かつこどり」には、こうある。

ほ／／鳴いてるよ。／……／かつこ かつこ／お茶碗 持った、
／六つの顔が、／黙って聞いた。／かつこ かつこ。／ほんと！
／かつこどりね。／朝風の すがやかな、／向ひの／薄緑の山
から、／かつこ かつこ(四七・四八頁)

朝の食卓。六人家族。お父さんの言葉に、一瞬おとずれる静寂。お茶碗を持ったまま、みんな耳をすます。「ほんと！かつこどりね」とお母さんのはずんだ声。ここには、仲のよい家族の朝の食卓の一幕が描かれている。

瀧口武士の詩も、政本いさむの詩も、タイトルだけで見れば、「風物詩」に入る。だが、これらの詩の中には、人間の営みがあり、子どもたちの姿がある。生活の中から生れた作品である。

(二) 日本人・日本の子どもたちの生活を描いたもの

「日本人・日本の子どもたちの生活を描いたもの」十余編のうち、詩は二編だけで、ほとんどが「童話」である。「童話」というより、「写

生文」である。子どもたちの生活や生活実感を描くには、散文が向いているということだろう。そこには、満洲における日本の子どもたちの生活、生活実感が描かれている。作者のほとんどが、大連在住であるので、作品舞台は大連かその周辺である。

詩の二編はいずれも石森の作品で口語定型詩、「学芸会 ニ デル アサ」(末尾資料2・1)と「なはとび」(同2・2)である。前者は、「モモタロウ」の劇で「おさるのお面」をつける「ぼく」が、両親に見に来てね、と念を押して出かける朝の様子が描かれ、後者では、ゴムテープを一段ずつ高くして跳んでいく子どもたちの遊びが描かれている。「エンソク」(政本勇 同2・3)では、遠足のうきうきする心と同時に山から見える大連の街並が描かれ、子どもたちは、「ノリマキ、イナリズシ、ヒノマルオニギリ」のお弁当をひろげる。「ヒカウキ」(政本勇)では、大連運動場で開かれた運動会のお祝いに飛んできた飛行機に喜ぶ子どもたちが描かれている。「もうすぐ夏休み」(山田健二)では、東京で大学生活を送る兄の帰省を心待ちにする家族の姿が描かれている。ここで描かれているのは、自然風土は満洲であるが、生活も生活実感も日本国内の子どもたちと何ら変わらない。これは植民地大連での日本人の生活スタイルが内地とほとんど変わらなかったということである。

(三) 中国人・中国の子どもを描いたもの

「中国人・中国の子どもを描いたもの」としては、詩が一編、童話が五編。合計六編の作品のうち五編は、中国人や中国の子どもだけを描いている。その描き方は、ほとんどが通りすがりに見た印象記のような作品である。

倉橋惣三は、童詩「シナノコドモ」(末尾資料3・1)で、満洲の子どもの印象を、「シナ ノ キナカ ノ ハダカ ノ コ カハイ

イ コエ デ ウタヒ マス」と描く。これは大人の眼で見た満洲の子どもの一つの姿である。

「トンボノハネ」(政本勇)という「童話」では、日本人らしいおじさんが駅で見た光景が描かれている。たくさんのおトンボが飛んでいる。「シナ人」の家から出てきた可愛い三毛猫が、トンボといつしよに跳ねまわる。家から出てきた「シナ人」の男は、猫がトンボをとっているのだと勘違いして、竹ぼうきでトンボをたたきおとしてやる。猫はばくと口にいれる。が、それがトンボだったと知って、もう食べようとしなかったという話である。「おじさん」とは作者自身のことだろう。作者は猫に感情移入しながら、猫とトンボに主眼を置いた物語にしている。

「ワンサント犬」(中溝新一 同3・2)では、犬が鳴くたびに「呼ばれている」とからかわれるから犬がきらいだという中国の子ども「ワンサン」。作品は「ワンサン」のつぶやきのような内容である。からかうのが誰かも書いてはいない。だが、文脈から日本人の子どもが中国人の「ワンサン」を犬が鳴くたびに、からかう様子が分かる。作品としては中途半端な感じがする。だが、なぜ石森はこの作品を掲載したのか。推測でしかないが、からかわれて嫌な思いをしている子どもがいるということを、日本の子どもに知ってほしいという石森の思いを筆者は感じる。

「ヒル」(久富次郎)とあるが「久富榮次郎」の間違い筆者注)という作品では、昼下がり、村をわたり歩く盲目の胡弓弾きとその手をひく子どもとが、道端でひと休みしながら語らう様子を描いている。原っぱにいっぱい咲く花を香りで「見る」老人、「やなぎのわた」に触れて声をあげる老人に、語りかける子どもの言葉が温かい。それを描写する作者の目も温かい。

ただ一編だけ、日本の子どもと中国の子どもの触れ合いを描いた「サンザシ」(八木橋綾子 同3・3)という作品がある。行楽地に

行く途中、サンザシ摘みを見た「ヨウコチャン」が、「シナ」の男の子にサンザシの枝をもらい、帰り道に、まだ働いているその男の子にキヤラメルをほってやるという作品である。作者の体験であろうか。作者はこの作品で日本の子どもと中国人の子どもの触れ合いをほほえましいものとして描いている。おそらく編集者の石森も日本の子どもと中国の子どもの望ましい触れ合いとしてこの作品を選定したのである。「サンザシ」を初めて見た「ヨウコチャン」の驚きは新鮮で、それをほしがった行為も子どもらしい。そして、それに応じた中国の子どもも好意的である。行楽を終えた帰り道、まだその子どもは働いていた。「ヨウコチャン」は「キヤラメル」を投げてやる。おそらく、サンザシのお礼と、「お仕事、ご苦労さま」という気持ちからであろう。「ヨウコチャン」の優しさは欺瞞ではない。それは分かっている。しかし、筆者はこの作品に違和感を覚える。それはなぜか。それは、この作品の底に流れる植民地に住む日本人の意識を見るからである。行楽に出かける豊かな日本人の家族と、一日中働く中国人の姿。一見のどかな農村風景の底に歴然と存在する生活格差に何ら疑問を感じない日本人の意識がそこにはある。

(四) 時局的な表現の見られるもの

「時局的な表現の見られるもの」はわずかに二編。一編は「やんま」(赤塚末造 末尾資料4・1)。力強く躍動感ある七五調の定型詩であるが、「やんま」を「ばくげき」に、「たまご」を「ばくだん」に譬えている点に、当時の世相が反映されている。もう一編は「ヤナギナミ木」(石森延男 同4・2)である。「ヤナギナミ木」は、幼女が落とした夏ミカンを通りかかった兵隊が拾ってやるという作品である。この作品には、時局を表わす事物として「ヘイタイサン」が出てくるものの、軍国主義的な主張はまったく見られない。石森

は戦後に編集した『新しいふく読本 竹 四年下』(一九五一 光村図書)に、「ヘイタイサン」を「どこかの中学校の生徒さん」に変えて、この「ヤナギナミ木」を「母から聞いた話(下)」の中に収めている。瑣末な表現の変更はあるが、物語の大筋は同じである。「ヘイタイサン」を「中学校の生徒さん」に置き換えるだけで、まったく日本国内の話になってしまいうくらい、そこに描かれているのは日本的な日常である。

(五) その他

以上、掲載作品を内容別に分け、内容ごとの特徴を探った。全作品を取り上げることはできなかったが、掲載作品は、童詩は満洲風物詩が多く、童話では、写生文や雑感、印象記的作品が多かった。次に文学作品としての童話、随想を五編取り上げる。

「ペチカ ト スズメ」(石森延男)は、あまりの寒さに耐えかねて、スズメの母子が煙突から中に入り、とろとろと眠っているペチカに遠慮がちに許しを請う。ペチカは快く招き入れてやり、小スズメはペチカの暖と母スズメの羽根の中で安心して眠るという作品である。満洲時代の石森は動物を擬人化した小品をよく書いている。これもその作品の一つ。

「ハル」(境一之)は、春節の翌日だろうか。道に花火のくずがいっぱい落ちている。「サンチャン」は花火を拾おうとしてすってんころり。氷の中に銅銭を見つけた。いつか自分が落とした銅銭にちがいないと、氷を割ろうとするが割れない。あきらめて家に帰り、ふろの中で「カアサン コホリ ハイ ツ トケル ノ」と問いかけながら眠ってしまい、「だっこ」して寝床まで運んでもらう。サンチャンの視点で描かれた幼年童話である。

「みちぐさ」(平方久直)は、広い野原の先にあるポストに、手紙

を出してくるように頼まれた「三ちゃん」の話である。キリギリスが三ちゃんを遊びにさそう。野原を駆け回っているうちに、「いたづらものの草たち」が、そつと手紙を抜き取る。手紙をなくしたことに気づいた三ちゃんは探しまわるが、見つからない。声をかけてくれたカササギもさつさと帰り、ろばもお腹がすいたと帰ってしまう。べそをかいていると、風が助けてくれる。風が勢いよく野原を駆け回ると、草たちがかくしていた手紙が出てくる。寄り道を戒める教訓も少しはあるが、野原の中で、人の子と自然物とが一つになって展開する物語世界がこの作品にはある。

「二人で一つ」(山田健二)は、本書では唯一の民話風の話である。満洲の田舎に双子の兄弟がいた。不思議なことに目が二人で一つ。一つの目を二人で仲良く使っていた。弟は、旅に出る兄さんに、不便だからと無理やり目を持って行かせる。その夜、弟のもとに賊が押し入る。近所のおじさんだと思った弟は、剣を突き付けられておどされても、とんちんかんな受け答えをする。気味が悪くなった賊は逃げ去る。兄さんが帰ってきてはじめて事の真相を知り、目がなくてよかったと喜ぶ。満洲の民話が基になった話かもしれない。

石森の「雲」という作品がある。科学知識の入った随想とでもいおうか。雲がさまざまに変化する。スワンになったり、帆かけ船になったり、魚になったり。その雲の形のおもしろさを述べながら、心の状態によって見あげる雲の印象がかわることを語る。そして、雲の短歌を詠んだ自分の父親の思い出を語る。十種類の雲の呼び名を紹介した後に、一度見たらそれきり一生出会うことのない雲の性質を述べる。童詩、童話、写生文、随想、編集者と、多才な石森の文筆活動が本書でも発揮されている。

おわりに

以上、『童話と童詩』掲載の作品について、その特徴を探った。その結果、本書の特徴として次の何点かをあげることができる。

学齢および読者対象を念頭においた構成と内容である。作品の長短や作品の配列、表記が考慮されている。

日本の子どもを読者対象とする課外読物であるということから受ける制約であろうか、作者はすべて日本人であり、日本人の視点で文章が書かれ、主に日本の子どもの生活が描かれている。

満洲を肌で理解させ、愛着を持たせようという編集意図が明確であるため、作品のほとんどが満洲讃歌である。

「内地在住」の大家の作品と、「満洲在住」の作者の作品には明確な違いがある。前者は、「旅人の眼」で見た満洲風物詩であり、後者は、生活の中から生まれた、生活実感のともなう作品が多い。

時局を反映した作品がほとんど見られないのも特徴の一つである。『童話と童詩』に収録された作品は、当時の満洲児童文学の一端を表している。満洲児童文学を形成した作家たちの多くは小学校教師であった。彼らは実生活の中から作品を生み出していった。その作品の多くは、生活実感を伴う短い作品で、そのほとんどが写生文である。中には文学的香りのする作品もあるが、多くは素朴で習作的な作品であった。

(資料1) 自然・風物を描いたもの

(資料1.1)

キタヤスカヤ

刷毛が一丈、ペンキ壺。
鉋に鉋針のめど、

壁を塗らしよと思ふなら、
キタヤスカヤへ行てごらん。

お家建てよと思ふなら、
そこのベンチを見てごらん。

そして靴下破けたら、
日向の地べたを見てごらん。

玄那のをばさんお針さん、
仕事待つてる坐つて。

刷毛が一丈、ペンキ壺。
鉋に鉋針のめど。

とても哈爾濱大通り、
お腹が空いたと眺めてる。

北原 白秋

二八・二九頁

(資料1.2)

りんご

りんごもちこむ
三十里堡

汽車はよい汽車、ひろい汽車
母さんりんごがたくさんね。

りんごあげましよ普蘭店
ありがとありがとおぼつちゃん。

ひとりおります瓦房店

坊つちゃん再見ごきげんよう。
りんごも再見ごきげんよう。

ひとりおります得利寺

坊ちゃん再見ごきげんよう。
りんごも再見ごきげんよう。

ひとりおります萬家領

坊つちゃん再見ごきげんよう。
りんごも再見ごきげんよう。

北原 白秋

二九・三〇頁

(資料1.3)

子供の熊

熊が出ました、教化の街に、
トトンカ、トントトン
街の子供がソラ逃げました。

トトンカ、トントトン
出たよ出た出た、大きな熊が、

トトンカ、トントトン
みんな大人がソラ逃げました。

トトンカ、トントトン
蜜の日にかに出た出た熊が、

トトンカ、トントトン
わアと街ちゆうがソラ逃げました。

トトンカ、トントトン
見ればお菓子舗子のお窓

トトンカ、トントトン
店はがらあきソラ逃げました。

トトンカ、トントトン
なんだ子の熊ちつちやな子熊

トトンカ、トントトン
おくれおくれよソラ逃げました。

北原 白秋

三一・三三頁

(資料1.4)

黒豚 小豚

ちよこらくと
黒豚 小豚

黍の根かよの
鳥を走る。

ちよこらくと
黒豚 小豚

汽車の来る方へ
ちよこらくと走る。

ちよこらくと
黒豚 小豚

鐘は揺れてる
汽関車の上で

ちよこらくと
黒豚 小豚

春が来た来た
ちよこらくと走る

ちよこらくと
黒豚 小豚

赤い夕日の
下から走る

北原 白秋

一一・一二頁

(資料1.5)

ぶたの子

お日さま くるり
くるりくと 青空をのぼる

ぶたの子 ころり
ころりくと ころけて遊ぶ

ころげろく
野はひろい

島木 赤彦
六〇頁

(資料1.6)

夜汽車

かねを鳴らして

夜汽車が通る

からんくと

鳴らして通る

かねはから山

かれ野にひく

空の遠くの

月にもひく

鳴つて鳴らして

ずんく通る

島木 赤彦

五九頁

(資料1.7)

ノロさんの かけくら

ノロさん ノロさん ノロさん

ノロさん お家は 満洲の

興安嶺の 山の中

北安嶺の 原つばに

びよこ びよこ 遊びに いきます。

ノロさん ノロさん ノロさん

ぼかんと 並んで 原つばに

汽車はつば 汽車はつば 待っています。

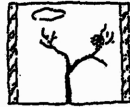
ノロさん ノロさん ノロさん

汽車が 通れば ノロさん は
かけくらごっこ の 仕度です。

お苗 ふりふり 角ふつて
びよこ びよこ かけくら 初めます。

ノロさん ノロさん ノロさん
オニニ オニニ 原つばを

汽車はつば 汽車はつば 走ります。



— 野 口 勇 —

二〇頁

(資料1.8)

フ ユ ト ハ ル

新 京 カラ ノ 貨物列車 ガ、大連 ニ ツキマシタ。
貨物 ノ 上ニ 登 ガ ツモツテ キマシタ。大連 駅 ハ ソレヲ

ミテ

「ア、モウ、多 ガ クル ナア。」

ト オモヒマシタ。

大連 カラ ノ 客車 ガ 新 京 ニ 行キマシタ。

展望窓 ニ 杏 ノ 花ビラ ガ ノツテ キマシタ。

新 京 駅 ハ ソレヲ ミテ、

「モウ、デキ 春 ダ ネ。」

ト ヒトリゴト ラ イヒマシタ トサ。

— 石 森 延 男 —

五一頁

(資料1.9)

ふ か い 霧

ひんやり おりた よ

ふかい 霧

どこへとも なくながれてて

誰か が どこかで

呼びさうだ。

さくら も つぼんだ

ふかい 霧

そこち が ぼつと 明るくて

いゝなあ もうちき
さくだらう。



しんしん こもるよ

ふかい 霧

あの子 は まだだふつてゐる

ブランコ ブランコ

ふつてゐる。

— 石 森 延 男 —

三七頁

(資料1.10)

テ フ テ フ

ヒラ

ヒラ

ヒラ

アノテフテフラ ツカミタイ

ボウシヲ モツテ

オフレド

ナカナカ テフハ

ツカマラス

ヒラ

ヒラ

ヒラ

アノテフテフラ ツカミタイ

六・七頁

瀧口 武士

秋

晴

(資料1.11)

お 登 休みの

運動場

秋の 晴の 日の

運動場

わきかへつてゐる

運動場

海の やうな

運動場

瀧口 武士

二六・二七頁



(資料2) 日本人・日本の子どもの生活を描いたもの

(資料2・1) 學藝會ニデルアサ

(資料2・3)

(資料1・12)

高い所

壇の上や
木の上や
高い所に上りたい
山の上や
ルーフや
高い所に上りたい

— 龍口武止 —

六四頁

(資料1・13)

遠足

みんな仲よく歩いて行くよ
列を作つて歩いて行くよ
みんなちがつた聲で
呼び合ひながら進んで行くよ
みんなちがつた足どりで
とつとつと進んで行くよ

— 龍口武止 —

六四・六五頁

學藝會

ニデルアサ

木花 サイトテ ケサノ モヤ
ボク ハ デルンダ 學藝會
「トウサン カアサン
今日 クルノ?」

ソコノ 木花モ サイトキル
ボク ハ オ猿 ダ 面ツケテ
「トウサン カアサン
イツテ キマス。」

朝日 モモイロ ウゴイテル
ゲキ ハ モモタロ オニタイデ
「トウサン カアサン
キツト オイデ。」

(資料2・2) なはとび

「一だん おはりよ」ゴムテープ
びらびら ふるへて ゴムテープ
連翹さいてる
「さあ おとび。」

「三だん おはりよ」ゴムテープ
すべすべ ひかるよ ゴムテープ
芝生は もえてる
「さあ おとび。」

「六だん おはりよ」ゴムテープ
さらさら うねるよ ゴムテープ
かげらふ ゆらゆら
「さあ おとび。」



九・一〇頁

— 石森延男 —



エンソク

ペンタウ ショツテ、スキタウ サゲテ、
ケフ ハ エンソク ダヨ。ナガイ ギヤウレツダ。
アラダミ モ、アカダミ モ、モモダミ モ、キダミ モ、ミンナ イツ
シヨ。
センセイ ガ タイシヤウデ、ボクラ ガ ケライダ。
ボカ 「アツタカイ ナア。
キノ ノ クサ ノ メ チヨツビリ カホ ダシテル。
ホラ イヌコロ ガ ツイテ キタヨ。
イヌコロ イヌコロ イツシヨ ニ イカウヨ。ケフ ハ ボクラ ノ
エンソク ダヨ。

ヤマノ ウヘ タカイ ナア。

マチガ ミエルゾ。ウミガ ミエルゾ。

アレム カフ ニ フネ ガ キル グラウ。フタウ ダヨ。

マンテツビヤウキン、ホンダワンジ、テンマヤホテル、ソレカラ ヤマト
ホテル。

ホテル。

センセイ スミレ ガ サイトタヨ。

タンボゴ モ、ホラ ココ ニモ アルヨ。

カレクサ ノ シタ デ アライ ハツバノ キモノ キテ、コツソリ
ワラツテルンダ。オヒサン ボカ 「ユクワイダ ナア。

クサツバラ ニ ミンナ スワツテ オペンタウ、オイシイ ナア。

ノリマキ、イナリズシ、ヒノマルオニギリ、オイシイ ナア。カマボコ、

オサカナ、オイシイ ナア。

ゴクン 「スキタウ ノ オミツ モ オイシイナア。

— 石森延男 —

八頁

三八頁

— 石森延男 —

(資料3) 中国人・中国の子どもを描いたもの

(資料3-1)

シナノ コドモ
アカイ ハゲヤマ ニゴリガハ
シナノ ネナカノ ハダカノ コ
カハイイ コエデ ウタヒ マス。
ロバノ オミミ ハナガイナ。
コブタノ シツボ ハミジカイナ。
アヒルノ アシ ハミジカイナ。
ヤナギノ オヒゲ ハナガイナ。

ナガイナ
ミジカイナ
ミジカイナ
ナガイナ

—金 橋 節 三—
四四・四五頁

(資料3-3)

サ ン ザ シ
アル日、ヤウ子ちゃんハ、オトウサンヤ オカアサント キンシユウヘ
アソビニイキマシタ。
キンシユウヘツイテカラ、バシヤ ニ ノリカヘテ、ミサキヤマヤ、ナン
ザンヤ、キヤウスネジヘ、イクコトニシマシタ。
キヤウスネジヘ イクトキノコトデス。シロイホコリノ タツミチヲ、バ
シヤハ ハシリツツケマシタ。サカミチヲ ノボツタリ、ミツタマリヲ
タツタリシテ イキマスト ミギテニ タカイ オシヤウザンガ ミエタリ
カワレタリシマシタ。クモヒトツナイ ヨイオテンネデス。

(資料3-2)

ワンサント 犬

ワンサン ハリイサン ト オ友ダチ デス。
マイニチ ガクカウ ヘ イクトキ ニモ カヘル トキ ニモ ナカヨ
ク イツシヨ ニ ツレダツテ イキマス。
シガシ ワンサン ハ 犬ガ ダイキラヒ デス。
ミチバタ ニ 犬ガ ネテ ネテモ イソイデ ニゲマス。
アル日、リイサン ハ ワンサン ニ、
「キミ ハ 犬ガ コハイ ノデスカ。」
ト キキマシタ。スルト ワンサン ハ
「犬 ナンカ コハク ナイデスガ、犬ガ ワンワン ト イツテ
ホエル タビ ニ トモダチガ『ワンサンヲ 犬ガ ヨンデ キルヨ。』
ト イフ カラ キラヒ ニ ナツタ。」ト マジメ ナカホ シテイ
ヒマシタ。

中 瀬 新一

四三・四四頁

ダンダン イクト、ミチノ ヒダリガハニ ヒロイノウエンガ アリマシ
タ。イシガキノ スグソバニ アカイミノ スズナリニ ナツタ キガ 五
六ボシ ナランデ キマシタ。
「アレハナニノキデスカ。」

オトウサンニタツネマシタラ

「アレハ サンザシ トイフノダヨ。ヨク シナジンガ アメダワシニ
シテ クシニサシテ ウツテキルデセウ。」ト オツシヤイマシタ。

キノソバニハ ヲトコノヒト ガ イクニン モ 犬キナカゴヲ オイ
テ セツセト サンザシノ ミヲ チギツテキマシタ。ソノ中ニ、ヤウ子。チ
ヤント オナジトシゴロノ ヲトコノコガ ヒトリ キマシタ。

ヤウ子。ちゃんハ ソノ サンザシノ アカイミガ ホシクテ タマラスモ
ノデスカラ ヲトコノコニ ムカツテ

「ニヤ、ソノミヲ ヒトツ チヤウダイ。」

トイツテ テヲ サシダシマシタ。

ヲトコノコハ ニツコリ ワラツテ イツバイ ミノツイタ エダヲ
ボキリト ヲルト バシヤノナカヘ ハウリコンデ クレマシタ。

ヤウ子。ちゃんハ 大ヨロコビデ 「アリガタウ」ヲクリカヘシテイヒ
マシタ。

キヤウスネジヘ オマキリシテ カヘリミチ、マタ、サツキノ トコロ
ヲ トホリマスト、ヲトコノ子ハ マダオシゴトヲ シテキマシタ。

ヤウ子。ちゃんハ ボケツトカラ キヤラメルノハコヲ ダシテ ヲトコノ
コニ ホツテヤリマシタ。

ヲトコノコハ 「シエー シエーナ」ト、ウレシサウニ、アタマヲサゲテ
キマシタ。

トホザカツテイク バシヤノナカカラ ヤウコちゃんハ フリカヘツテ
ミマシタ。

ヲトコノコノ シロイフクガ イツマデモ チラチラ ミエテキマシタ。

—八 本 橋 節 三—

一七頁

(資料4) 時代を表す表現の現られるもの

(資料4・1)

や ん ま

(資料4・2)

ヤナギ ナミ 木

青黒ぬりの
ばくげきき、
ぐんぐんとび来る
いさましき。
ひらりとどる
あのはやさ。
つういとおりの
水の上、
ちつちとおしりを
つけてゐる。
卵でないよ、
ばくだんさ。
お池の兵たい
さあにげろ。

やんまは強いぞ
すてきだな。

—— 藤 末 雄 ——

四五・四六頁

テイシヤバ ノ ゲンカン ヲ オリテ イク ト サカミチ ニ ナツ
テ キマス。ソコデ 小サナ 女ノ 子 ガ マツ白イ エブロン ヲ
シテ、ソノ エブロン ノ 中ニ 大キナ マルイ モノ ヲ カカヘ
コンデキマシタ。
女ノ 子ハ ヲチヨチ ト ハシリ ダシマシタ。スルト ツマヅイ
テ マヘ ニ タフレテ シマヒマシタ。ソバ デ オモリ ヲ シテ キ
タ オ母サン ガ ハシツテ キテ
『イイコ イイコ ナカナイ ワネ。』
ト イツテ ダキオコシマシタ。
女ノ 子ハ ソノ トキ エブロン ノ ナカ カラ 大キナ ナツ
ミカン ヲ オトシマシタ。
マルイ ナツミカン ハ コロン コロン ト サカミチ ヲ コログマ
シタ。
オ母サン ハ ニニコ ナサリナガラ ミテ イラツシヤイマシタガ、
女ノ 子ハ モウ ナキダシサウ ニ シテキマシタ。
サカミチ ノ ムカフ ハ ヤナギミチ デ、青イ ワカバ ガ イツ
バイ ニ シゲツテキマシタ。ソノ 下ヲ 一人ノ ヘイタイサン ガ
イソギアシ デ ヤツテキマシタ。
ソノ マヘ ノ 方ヲ ナツミカン ガ キバツテ コロン コロン
ト ハシツテ イクノデス。
ヘイタイサン ハ タチドマツテ、シヤガミマシタ。ソシテ 両手ヲ
ノバシテ ナツミカン ニ
『オイデ オイデ』
ヲ シマシタ。ナツミカン ハ ナホ キバツテ コロン コロン ト コ

ロゲナガラ ヘイタイサン ノ 手ノ 中ニ コログ コミマシタ。
女ノ 子ハ ヘイタイサン ニ ヒロハレテ シマツタ ノ カト オ
モツテ ワツ ト ナキダシマシタ。ヘイタイサン ハ ケン ヲ オサヘ
ナガラ ハシツテ ヤツテ キマシタ。ソシテ 女ノ 子ノ マヘニ
シヤガシタ。
『ナクンヂヤ ナイヨ。ヒロツテ アゲタシタヨ。』
ト イツテ ナツミカン ヲ 目ノ マヘニ サシダシマシタ。女ノ
子ハ ナンダカ ハツカシサウ ニ シテキマシタ。
『サ、ナカナイデ。』
ト ゲンキ ヲ クイヒナガラ ナツミカン ヲ コドモ ノ 手ニ モ
タセマシタ。オ母サン ハ
『アリガタウ ゴザイマシタ。』
ト オレイ ヲ イヒ マシタ。スルト ヘイタイサン ハ
『オジョウサン ノ カホ ヲリ ナツミカン ノ ハウガ フトツテル
ナ。』
ト イツテ ソノママ テイシヤバ ノ ナカニ ハイッテ イツテ シマ
ヒマシタ。
女ノ 子ハ ダイジサウ ニ ナツミカン ヲ エブロン ニ ツツン
デ、オ母サン ニ オ手ヲ ヒイテ モラツテ、ヤナギナミ木 ノ 下
ヲ ヲチヨチ ト アルイテ イキマシタ。

—— 石 森 延 男 ——

第七章 「満洲文庫」 文学篇『満洲新童話集』（緑版）

次に、高学年用の『満洲新童話集』（緑版）（以下「緑版」）について考察する。考察方法は、各作品を分析し、その分析結果から「緑版」の特徴を明らかにする。

一 「緑版」の概要

（一）編集意図

編集意図は、前章で述べた低学年用の紅版『童話と童詩』（以下「紅版」）と同じであるが、再度確認しておく。

「緑版」の「後記」に次のように書かれている。

こゝにあつめた新童話は、満洲としては重々なものばかりです。新童話といふ意味は、新しく創作した童話といふので、今までになかつたものといふ意味なのです。満洲に親しむためには、かうした新しい童話を作つて残していくことが、大切なことだと信じます。今後皆さんだちの力によつて、もっと立派な童話をこの土地に残して、いたゞきたいと思ひます。

「後記」のこの記述には主語が抜けていたり、意味を補うのに必要な修飾語が抜けていたりする。そこで、それらの文言を補つて書きかえてみる。鈎括弧内は原文からの引用である。

「こゝにあつめた新童話」は、日本人が満洲に入植後、「新しく創作した童話」です。我々日本人が「満洲に親しむためには、かうし

た新しい童話を作つて残していくことが、大切なことだと」編輯人である私（石森）は「信じます」。在満の日本の子どもの「皆さんだちの力によつて、もっと立派な童話をこの土地に残して、いたゞきたいと思ひます」。

この引用文によると、在満の日本の子どもたちが満洲に根をおろし、この地で生きて行くことを前提としている。そして満洲に親しむためには、自分たちの生活の中から生れた童話を作つていかななくてはならないという。そういう作品の誕生を願つてこの文学篇を編むというのである。

（二）作者と収録作品

収録作品十四編は、『満洲補充読本』『愛兒と家庭』『まんちゅりあ』『新童話』等から採られている。高学年用であるためか、脚本二編を除くと、すべて散文である。タイトルでは、『満洲新童話集』となっている。だが、厳密に形式で分けると、童話、短編小説、随想がある。

内容別に分けると、〈表1〉のようになる。①「日本人の心情を描いた作品」が七編で半数を占め、うち、少年少女が主人公の作品は三編（○△印）、大人が主人公の作品が四編（○印）で、それらはすべてリアリズム作品である。②「中国人・満人を描いた作品」はわずかに三編（☆印）⁷²③「ロシア人を描いた作品」は一編（●印）である。動植物を主人公にしたいいわゆる童話三編は④「その他」に分類した。

作者は全て満洲在住者で、「紅版」にも作品が収録されている者も多い。作品内容については、次の「二」で分析する。

ここでは、作者紹介と各作品の履歴について説明する。ただし、前章で紹介した作者については、略歴を省略する。

表1 『満洲新童話集』 作者と作品履歴

内容による分類 ① 日本人が主人公の作品 7編
うち 少年少女が主人公 3編（○△印）
大人が主人公 4編（○印）
② 中国人・満人を描いた作品 3編（☆印）
③ ロシア人を描いた作品 1編（●印）
④ その他 3編

作 品	内 容	作 者	所 属 他	作 品 履 歴
軍人の子	○△	平方久直	小学教師 作家	・『愛児と家庭』（発行年不明） ・『僕のお父さん』（改編）『王の家』（一九四〇・八文昭社）収収。
赤いコスモス	○△	八木橋 綾子	八木橋雄次郎 夫人	
總理大臣と鳩	☆	山田健二	満鉄社員 作家	・『満洲補充讀本六の巻』（一九三四・四・八初版・一九三九・三・三一改訂初版） ・新満洲同話集『高粱の花環』（新生堂一九三四・九・五）所収
黒い蝶	○	矢澤邦彦	中学校長 歌人	
崩れた堡壘	○	石森延男	民政署字務課 視学	・『崩れた砦』（満洲補充讀本五の巻）一九二八初版・一九三〇四版発行復刻 柏書房「在満日本人用教科書集成二〇〇〇・七」 ・『満洲補充讀本五の巻』（一九三三・三・三一初版・一九三四四版発行復刻 国書刊行会一九七九・九）
あの雲	●	八木橋 雄次郎	小学教師 詩人	
月とめししんじょう	☆	小池 歩	教科書編輯部	
扇の箱	○	政本 勇	小学教師	
雁とブルスニカ		石森延男	（前出）	・『新童話』第一号（一九三〇・五） ・『どんつき』（新童話社内 一九三一・十二）所収 ・『新しい副読本 竹 五年下』（光村図書 一九五一・六）所収
少年と犬	○△	入來惇	小学教師	
春		久富 榮次郎	小学教師	
押し花	○	石森延男	（前出）	・『新童話』第二十一號（上級用）（一九三一・二） ・『第2まんちゅりあ四・五・六学年用』（新童話社一九三三・三） ・『満洲婦人新聞』（一九三九・二・一一）掲載
かさゝぎの子 （児童劇）		石森延男	（前出）	・『まんちゅりあ 春夏の巻』（満洲學生讀物研究會一九三〇・四）（童話形式） ・『協和』（一九三一・四・一五号） ・『満洲補充讀本一の巻』（一九三七・三・二〇 初版 一九三九・一・三〇 三版
竹うり	☆		小学教師 画家	『新童話』第二十一號（初級用）（一九三一・二）

「緑版」には、編輯者である石森の作品が四編収録されている。

満洲時代の石森の作品に、中国の子どもを主人公にした創作はないことはないが、非常に少なく、ほとんどが、日本の子どもを主人公としている。石森の創作活動が、在満の日本の子どもが対象であったということである。この四編のうち、日本人の心情を描いた作品が二編、童話が一編、児童劇が一編である。石森の作風は多彩で、童詩も随想もリアリズム作品も童話も書き、さらに学校劇にも関心が高く、脚本も書く。その多彩な活躍が、「紅版」で九編、「緑版」で四編という収録作品の多さとして現れ出ている。

「緑版」に収められているのは、戦死した息子を偲ぶ父の思いを描いた「崩れた堡壘」、満洲に出稼ぎにきた娘の心情を描いた「押し花」、群れから脱落した雁を助けるブルスニカ（野苺）を描いた「雁とブルスニカ」、町に憧れる鵲の子を描いた児童劇「かさゝぎの子」である。「かさゝぎの子」は学校劇として学校現場でよく演じられていたようだ。『まんちゅりあ』（一九三〇年）、「協和」（一九三一年）『満洲補充讀本一の巻』（一九三七年三月初版・一九三九年一月三版）に、それぞれ形を変えて収められている。

「崩れた堡壘」は『満洲補充讀本五の巻』にある。現在確認が出来るのは、「一九二八年初版で一九三〇年四版発行」（「崩れた砦」として掲載）のものと、「一九三三年初版で一九三五年改訂五版発行」（「崩れた堡壘」として掲載）のものである。この二種は、内容・テーマは同じであるが、気になる書き換えが一箇所見られる。それについては、後述する。

「押し花」の初出は「新童話」（一九三二年二年）である。『第二まんちゅりあ』（一九三三年三月）「満洲婦人新聞」（一九三九年二月十一日付）に転載されている。

「雁とブルスニカ」は、戦後、石森が編集した『新しい副読本 竹五年生下』（光村図書 一九五一年六月）にも収められている。両

作品ともに、字句や表現に些少の変更はあるが、内容・テーマは同じものであることが確認できている。

政本勇の作品は「紅版」に五編、「緑版」に一編「扇の箱」という随想が収録されている。監獄の中で運動する囚人の姿と自分の日常とを重ね合わせた内容で、作者の人生観が吐露されている。

境一之の作品は、「紅版」に二編、緑版に一編「竹売り」が収録されている。竹が売れず、癩癩を起こす中国人竹売りの様子を写生風に描いている。

山田健二は、「紅版」に二編、「緑版」に一編「總理大臣と鳩」が収録されている。實在の満洲国國務總理・鄭孝胥（一八六〇—一九三八）を主人公とした作品である。本作品は、『満洲補充讀本六の巻』（一九三四年四月初版・一九三九年三月改訂初版）にも収められている。大意は同じだが、文言に変動がある。「補充讀本」の方はより整理された形で掲載されている。また、山田健二の満洲童話集第一冊目の『高梁と花環』（一九三四年九月）にも収められている。

八木橋綾子の作品は「紅版」に一編、「緑版」には「赤いコスモス」が収録されている。どちらも、日本の少女の目を通して中国（満洲）の子どもを描いた写実的な作品である。

八木橋雄次郎の作品は、「紅版」に一編、「緑版」には、白系ロシア人父子の姿を描いた「あの雲」が収録されている。

久富榮次郎の作品は、「紅版」に一編、「緑版」には「春」という作品が収録されている。ト書がないので、放送劇の脚本かもしれない。満洲の春の野が舞台で、満洲を代表する風物がそれぞれ春への感慨を述べている。

矢澤邦彦の作品は、「紅版」に一編、「緑版」には「黒い蝶」が収録されている。地味だが仕事一途の初老の線路係と、蝶の採集を趣味とする「私」との心の交流が描かれている。

平方久直の作品は、「紅版」に一編、「緑版」には「軍人の子」が

収められている。ともに初出は「愛児と家庭」（掲載年不明）である。この「軍人の子」は、のち「満洲文庫」発禁処分の原因となったという⁷³。また、この作品は、「僕のお父さん」というタイトルで、平方が内地で出版した童話集『王の家』⁷⁴に収められてもいる。この作品の内容分析及び「満洲文庫」発禁処分問題については「第八章」で述べる。

入來惇（明治三六年―？）。小学校教師。鹿児島県立福山中学卒業後渡満。旅順師範学堂卒業後、大連日本橋小学校に赴任⁷⁵。「満洲文庫」の編集同人である。「緑版」に収録された「少年と犬」は、初めて小犬を飼う少年の心理が描かれている。

小池歩（？―？）は、教科書編集部に所属。また、詩人小池亮夫夫人でもある。石森を中心とした文芸同人誌「童心行」、童話同人誌「新童話」の同人。小池は石森のことを、「文筆生活といふ私の生活の他の一面のスタートのひきがねをひいて下さった人」と語る⁷⁶。童話、詩、散文を書く。石森は小池歩のことを「日本未来派らしい鋭さ」を持つと評している⁷⁷。「緑版」に収録された「月とめしんじょう」は、貧しい家計を支える中国人の王少年が主人公である。中国の農民の姿を描いた平方久直とともに、満洲児童文学作家の中で、中国の子どもの視点で作品を描いた数少ない作家の一人である。

以上、「緑版」に収録された作品と作者について簡単に述べた。「緑版」及び「紅版」の作者たちはみな、石森を核とした児童文学の同人たちで、主に大連在住の初等教育者たちである。満洲児童文学とは、満洲の中のごく限られた地域での活動であったのだろうか。必ずしも、そうとは言いきれない。なぜなら、満洲児童文学が、担い手と内容において、教育と深く関わっていたからであり、さらに、彼らの活動場所が、関東州大連であったからである。というのは、関東州は、日露戦争後、ロシアに代わり、清国（満洲国）建国後は「満洲国」からの租借地として、実質日本の領土であった。大連は、

満洲植民地化推進の根拠地として、政治、文化、産業の中心であったからである。そこから発信された文化活動が在満日本人に与えた影響は小さくなかったと考えられる。

二 「緑版」作品分析

収録作品は、初めから課外読物「満洲文庫」に収めるために書かれた作品ではなかった。そのためか、作品は子どもの目線にそったものばかりとは限らず、さまざまな角度から満洲の風物や生活を描いている。そのことが、逆にこの「緑版」の内容を豊かにしている。教育的な面も時局的な内容もちろんあるが、一方で、植民地満洲で暮らす中国人や日本人の生活実態や普遍的な人間感情の表出も見られる。

しかし、「紅版」と「緑版」に共通して言えることは、日本人よりはるかに多い中国人（満人）と日本人との触れあいの描かれた作品があまりにも少なすぎるということだ。「紅版」では、中国人（満人）を描いた作品は六編あるもののそれはみな写生文で、そこには、日本人と中国人との触れ合いはない。両者の触れ合いが描かれているのは、「紅版」で二編（サンザシ）八木橋綾子作、「緑版」で二編（赤いコスモス）と「月とめしんじょう」にすぎない。

これは、どういうことか。

一つは「満洲文庫」の性質を如実に物語っている。つまり、在満の日本人児童・生徒を対象とした読物で、満洲を背景にしながら、あくまでも日本人の生活実感、心情、考え方を中心としていたということである。

もう一つは、満洲における日本人の生活環境を物語っている。つまり、多くは、日本人街を形成し、日本人としての生活習慣を維持したまま暮らすという生活環境であったということである。

はたしてそれだけであろうか。他の要因として考えられるのは、日本人作家の意識の問題と関わるということである。創作を促す内的要因は作家個人まちなちである。彼らの意識がどこまで他民族に向けられていたかによると筆者は考えている。

(一) 作品の中の日本人

日本人の心情を描いた作品数は、「緑版」収録作品の半数を占める。そこに描かれる彼らの心情とはどのようなものか。

まず、日本の子どもを主人公にした作品から見ていく。作品は三編あるが、ここでは、「軍人の子」と「少年と犬」について述べる。(引用文中の傍線は筆者による。以下同じ)

「軍人の子」(平方久直作)は、職業軍人を父に持つ小学生の「僕」を主人公に、一人称で書かれた短篇小説である。軍人になりたいと思う一方で、軍人にしたくないという母親の言葉に心が揺れる少年の思いが描かれている。日露戦争の戦跡に触れ、ますます軍人の勇ましさに憧れる少年の心情が描かれており、そういう意味で時局を色濃く反映した作品であるといえる。だが、父親を敬慕する少年の心情と、子を感じる母親の気持ちはこの作品に深みを与えている。この作品にこんな場面がある。

父親が土匪討伐のため常に不在であることを寂しく思う「僕」は、一人、旅順にある日露戦跡二〇三高地に登り、勇ましい軍人に憧れる。だが、帰宅した玄関先で受けた電報の「センチ」という文字を見て、父親が戦死したと思い込むが、すぐに、早合点だったと分かる。その後にく続く。(傍線部分は作者)

「佐合をじさんが、戦死したんだつてよ。」

僕は電報を母さんの胸にたゞきつけるやうにして言った。

母さんは口をもぐもぐさせてゐたが、

「まあ、……父さんでなくつてよかつた」

と云ふと、ヘナヘナとそこに坐りこんで、手で顔をおほふてうつぶしてしまはれた。

僕は、自分のそゝつかしきから、こんなに母さんをびつくりさせたことをすまないと思ひ、また自分も安心して、急にはしやぎたくなり、母さんの背中に馬乗りになつて、

「僕は騎兵の大將になるんだ。進め　く　。」

と云つて、母さんのお尻をびしゃ　く　たゝいた。

母さんはしばらくしておき上がつて、僕をいやと云ふほど抱きしめて、僕のほつぺたを吸ひながら、

「三ちゃん軍人なんかにはしません。軍人なんか母さんは大嫌ひです。」

と云つた。

「だつて、母さん、御國の爲ぢやない？」

と云つたら、急におそろしい顔をなさつて、

「子供はよけいなことを言はないで、黙つておいで」

つて、叱られちやつた。(一一・一二頁)

傍線部分に描かれているのは、世の妻、世の母親の本音であろう。

普段、見たこともない母親のむき出しの感情だったからこそ、「僕」の心は揺り動かされたのである。このことがあつてから、「僕」は長い間、軍人になる決心を放棄する。だが、閲兵式で父親の雄姿を目の当たりにした僕は、母親の思いにゆれながらも、再び軍人になりたいと思うようになる。

この作品を読者である在満の日本の子どもたちはどのように読むだろうか。父親の任務である土匪討伐、それに伴う死は、新聞紙上で見聞きすることであつただろうし、また、日露戦争の激戦地二〇

三高地は、単に作品背景の要素ではなくて、主人公の心の動きに深く関わっている。身近な地名、身近な出来事とともに、少年の心の動きに導かれて、在満の子どもたちは「勇ましい軍人」に憧れるであろう。だが、文中で語られる母親の本音はその動きを違う角度から照射し、抑制する働きを持つ。平方によれば、この作品が、雑誌「愛児と家庭」（掲載年不明）に掲載された際、「かきかたがきがきいている」と石森に褒められ、その後、「満洲文庫」に収録されたという⁷⁸。石森がどの点に着目していたかは分からないが、あるいは、この母親の本音部分であつたかもしれない。

ところで、父親の任務である「土匪討伐」であるが、土匪の多くは、抗日勢力と結びついて日本の侵略に抵抗した。だが、当時の日本人の認識は中国の民を苦しめる「悪者」であつた。一九四〇年、内地で出版された平方久直童話集『王の家』に、この作品は、大幅に書きかえられ、「僕のお父さん」と改題して収められている。「僕のお父さん」では、引用文の傍線部分の母親の本音の部分がほぼ削除されている。また、他の部分で、軍人の勇ましがより強調されている。改作の詳細については「第八章」で論じる。

「少年と犬」（入來惇作）という作品では、子犬を飼うことになった少年の期待と落胆が描かれている。主人公の「文雄」は、まだ見ぬうちから「ポチ」と名づけ、子犬がやってくるのを心待ちにする。少年は一日中、子犬と過ごす。だが、子犬は夜になると母犬恋しさに泣いてばかり。結局、母犬のもとに返すことになる。ここで描かれた犬を飼う喜びというのは、誰もが少なからず子ども時代に体験した思いであろう。満洲、内地関係なく、子どもの普遍的な心理が描かれているといえる。ただ、作品中にこんな台詞が出てくる。

「ジョンは、利口だつたよ。家の中におしっこすることなんか無かつたよ。おしっこしたい時は、戸を押しあけて出て行つ

たよ。」「ほんとうに、あのポチは、あんまりよい犬ではありませんね。雑種でせう」「支那犬の子だらう。何んだかジョンまでが馬鹿になつたやうだ。此の間の獵はさつぱりだめだつた。」と、お父さんは獵の不成績までも、ポチのせいにしてしまった。（七二頁）

テーマとは別のところで、何気なく交わされる会話の中に、中国蔑視の文言が出てくる。作家自身、意識すらしていない差別意識がここに出てきたということであろう。「支那犬の子」だから馬鹿だ、という差別意識は、犬にとどまらず、「支那」の人々に対する差別意識として、植民地満洲にはびこっていた現実がここに現われている。「満洲文庫」は、小学生の課外読物として編集された書物である。編集者石森は何の抵抗もなく、この文言を受け入れていたのか。「犬」のことだから良いと見過ごされたのか。あるいは、他作家の作品には原則手をいれない主義であつたのか。少年の子犬に対する気持ちがよく書けているだけに、この部分は作品として惜しい。

日本人の大人を主人公にした作品は四編ある。その四編には、満洲で暮らすさまざまな大人の姿が描かれている。

「黒い蝶」（矢澤邦彦作）では、トンネル付近に飛来する一匹の黒い蝶をめぐる、線路係と蝶の採集を趣味とする「私」の触れ合いを手紙形式で描いている。線路係は、「満鐵の制服、満鐵の徽章、巻ゲートルをつけて、地下足袋をはいて、まことにかひがひしい出立ち」と描写される。植民地満洲において、満鉄社員はエリートであつた。その誇りが線路係のいでたち表れている。この作品は、毎日飛来する蝶に、無事故の証を見る初老の線路係の、仕事に対する敬虔な思いに焦点を当てた作品である。

「扇の箱」（政本勇作）は随想である。山歩きの途中、監獄の扇形の空間で運動する囚人の姿を見て、毎日電車に乗って出勤する自分

たちの日常も、これと同じものではないか、と作者は感じる。大人には、日常に埋没して生きる自分をふと省みる時がある。そんな思いが綴られた随想である。ただ、「罪は憎んでも、決して人間を憎んではゐないといふことがわかりました」と、監獄についての教育的な文言があるので、子どもに向かつて書かれた文章であることが分かるが、内容的には作者自身の真情が吐露された作品だといえる。

「崩れた堡壘」（石森延男作）は、「私」が、旅順の白露戦跡、東鶏冠山堡壘を見学した際、案内者から聞いた話として、ある父親の物語が紹介される。男手一つで育てた息子が徴兵検査で合格し、御国のために役にたつようになったという誇りと喜び。ここで描写される父親の誇りと喜びは、徴兵検査で合格することが、人間の価値を決めるという当時の価値観に基づいている。息子の出征の日には「きつと生きて歸るなよ。御國の爲に死んで来い。」と息子に言いながら、その帰り道、鎮守の神様に「どうぞ、せがれが生きて歸つて来ますやうに。どんなけがをしてもいゝから、生きて歸りますやうに。」（三二・三三頁）と祈る。息子の無事を祈る思いは、世の親の本音であろう。だが、息子はこの地で戦死。父親は何年もかけて旅費を貯め、四国から息子の茶碗や故郷の水を持つて、息子の命日にこの地を訪れる。この老いた父親の姿は心打つ。だが、ここには、失われた若い才能を惜しむ文言も、また、このような親が日本に多数いることにも触れられていない。つまり、戦争に懐疑的な文言は一切なく、ただ肉親の情にのみに焦点をあてた作品である。磯田一雄は『「皇國の姿」を追つて』（皓星社 一九九九年三月）の中で、「崩れた堡壘」を「軍国主義的・超国家主義的ないし国威発揚的な色彩の濃い教材」の一つに見なしている。

前述したが、この「崩れた堡壘」は『満洲補充讀本五の巻』に掲載されている。当初は「崩れた砦」であったが、改訂版では「崩れた堡壘」となっている。タイトルも本文の書き換えも、基本的には

テーマに影響ないが、一箇所、次のような書き換えがある。

「一度ぜひせがれの死んだ山にお参りしたい」と思ひましたが、何しろ遠いところ、さうでした、わたしの國は四國の土佐です。働き盛りのせがれを亡くしてからは、たゞ貧しくなるばかり、「でもどうかして行きたい」と決心し（後略）⁷⁹

だが、「一九三三年初版・一九三五年改訂」以降では、右の傍線部が削除され、次のようになっている。

それで一度は是非せがれの死んだ山にお参りしたいと思ひましたが、何しろ遠い所ですからさうです、わたしの國は四國の土佐なのです―ずゐぶん旅費がゝります。でもどうかして行つて見ようと決心し（後略）⁸⁰

「緑版」に収録されている作品も書き換え後のものである。しかし、『満洲補充讀本』の本文をそのまま収録したわけではなく、瑣末な部分が変わっている。石森は文章に対してはかなりのこだわりがあったのか、北海道文学館所蔵の「石森スクラップ」でも、自分の作品に関しては、しばしば手を入れている。ところで、この部分の書き換えであるが、前者の文章の方が、事実であり、本音であるう。この書き換えは、明らかに時局に対する配慮が働いたものと思われる。

「押し花」（石森延男作）は、内地生まれの「女中さん」が主人公の作品である。出典が「新童話」なので、前章で紹介した。が、この「女中さん」のような満洲に出稼ぎにくる境遇の人は、在満日本人の一つの典型でもあるので、再度、ここでも取り上げる。

「女中さん」は、雪の日、売られていた椿の花に、故郷を懐かし

むと同時に、満洲の地に出稼ぎにきたわが身をその花に重ね合わせる。夜の間に、花瓶の水が凍り、椿の花がぼたりと落ちたとき、「女中さん」はこう思う。

あんな明るい温い南の國から、なぜこんな北の國に來なければならなかったのだらうかとおもひました。そして、これは、椿の花のことより、自分の身の上のことのやうにおもはれてきました。(八四頁)

そして、「女中さん」は、その椿の花を日記帳にはさんで押し花にするのである。内地の人にとって、満洲は身近な「外国」というイメージがある一方で、内地から遠く離れた僻地のイメージもあった。満洲に渡る人たちの事情はそれぞれ違うが、多くは生活の活路を求めて移住した。この作品の主人公はそういう人たちの一人である。気候風土の違う満洲で、故郷とつながる物に出会う。郷愁に誘われるのは当然である。この思いは別に内地と満洲の関係でなくても、内地の別の場所であつても、思いは同じであろう。が、花瓶の水が凍るような厳しい寒さはやはり満洲ならではのあつたろう。

以上、日本の子ども・日本人の心情を描いた作品を見てきた。これらに共通することは、背景は満洲であつても、ここに描かれる生活実感や心情は、日本内地のそれとほとんど変わりがなく、ということである。日本人として満洲に根づく。それが望ましい姿であつたということなのである。

(二) 作品の中の植民地的諸相

収録作品に「日本人」「中国人(満人)」「ロシア人」を主人公にした作品がある。これは、他民族社会であつた植民地満洲の特徴でも

あつた。では、彼らはどのように描かれているのか。

まず、作品に描かれた日本人の姿を見てみよう。

「赤いコスモス」(八木橋綾子作)の中の日本人少女「美智子」は、「お母さまのおいひつけで、夜店へ花を買ひに」行き、路上で、拙い芸をして見物人に茶碗を差し出す二人の「小孩(子ども)」を目にする。「あんなに一生けんめいに、汗をながして藝をしてみせてくれたのに何にもお礼をしないのはいけないことだ」と思った美智子は、一銭も持っていなかったので、手にあつた二束のコスモスのうちの一束を渡して、逃げるように立ち去る。「小孩」の精一杯の芸のお礼に花を差し出す。少女のこの美しい人間的な行為は、この作品の主題である。作者は満洲で暮らす日本人少女に焦点をあてて、日常生活の一面を写實的に描いた。

だが、少女の純粋な行為が「きれいごと」のように思えるのはなぜだろう。それは、路上でお金を稼いで生きる「小孩」の現実が底辺にあるからだ。それは、支配と被支配との構図からなる植民地で暮らす人々の間に厳然と存在する貧富の差である。作者には、支配と被支配の植民地の構造に対する認識はなく、人間的な優しさで接すれば、民族間の友愛が成り立つと考えていたのであろう。甘いヒューマニズム作品である。そうではあるが、多くの在満の作家たちが日本人を主人公に、日本人の心情をのみ描いていることを考えると、内容の深さはなくとも、満洲に暮らす他民族の生活や姿に目をやり、日本の子どもと他民族の子どものささやかな触れ合いを描いた点は評価できる。

「月とめししんじょう」(小池歩作)では、中国人の王少年が主人公である。「しんじょう(進上)」とは、もともととは、「差し上げる」という意味の日本語であるが、中国では「下さい」として誤用され、物貰いで使われている。「めししんじょう」は、「ごはん、下さい」という意味になる。父親は失業、母親は病気のため働けず、王少年

は、物乞いと屑拾いで家計を担っている。が、やがて、片言の日本語ができることから、日本人家庭のボーイとなる。その王少年の目を通して大連に住む日本人のさまざまな姿が描きだされている。

物乞いに来た王たちを「まあいいやらしい、何時も何時も」「蟲のいゝことをいやがる。去！去！」（四二・四三頁）と邪険に追い返す日本人や干し物の靴下を盗んだ王の頭をこぶになるほどたたく日本人がいる一方で、草抜きさせて小銭を与える日本人もいる。また、代金が少ないと文句を言った馬車屋をなぐる横暴な日本人もいる。おそらく、どれも満洲に住む日本人の姿であつたろう。また、日本人家庭のボーイとなつた王の目を通して、大連の日本人の生活は次のように描かれる。

ボーイになつた王が見た、日本人の家はほんとうにふしぎな世界でした。（中略）ラヂオのしかけよりも主人と奥さんが、あせびつしよになつてダンスを習ふことよりも、第一に驚いたことは、シエパートが、鳥のスープをなめたり、一ふくる五十銭もするビスケットを、やれ手をあげたといつては一つかみ、やれ後足で立つたといつては二つかみももらふことでした。それから驚いたことは、主人がはち植木のこやしに、卵をやることでした。何とも思はずに、二つも三つも、砂にうめてゐる卵を眺めてゐると、青い顔をして、あんべらのベッドに横になつてゐるお母さんが、百人も二百人ももちよち目の前を歩いてゐるやうな思がしました。（五一頁）

日本人である作者が、植民地で暮らす豊かな日本人の暮らしと、ろくなものも食はず病気で臥せている王少年の母親や母親と同じ境遇にある中国人の貧しい姿とを対比させることによって、日本人のおごりを軽妙な筆で批判している。

では、この作品で中国人はどのように描かれているのか。

中国は多民族国家である。九割強の漢民族と五十の少数民族から成る⁸¹。当時、満洲には、満洲族（満人）、蒙古族（蒙古人）、朝鮮族（朝鮮人）、漢民族らが住んでいた。日本人は、満洲に住む中国人を「支那人」と呼んだり、「満人」と呼んだりしていたようである。王の両親は二〇年ほど前に、山東省から大連に出来た漢民族である。安い賃金で「苦力（クーリー）」として肉体労働に従事した。彼らの姿も満洲に住む中国人の一つの典型である。年をとり働き口のない父親は、王のもらい物が少ないと「もつとかなしさうな聲」を出せ、と練習させ、拾うなら、日本へ引きあげた人が置いていった行李のような、金目のものを拾つてこいと王をたきつけ、干し物を盗ることを覚えた王を、「えらい く」と褒める。無学でだしらない父親だが、少し日本語ができる母親から、王が片言の日本語を習っていると、「中國人が日本語を話す はぢしらず」と苦い顔をする。子どもを日本人の家に物貰いに行かせ、それで何とか生きることに甘んじていながら、中国人の誇りを口にする。この父親の態度には矛盾がある。しかし、これが当時の植民地満洲で暮らす中国人の一つの姿であつたろう。中国人としての誇りはあつても、生きていくためには手段を選んではいけないということである。

作品の後半部分に、ボーイとなつた王が月を見て、今まで知らなかった「妙な氣持」になる場面が出てくる。王はその氣持ちを次のように説明する。

どうしたものかと色々考へてゐると、今はお腹がいつぱいだ、明日もその次も又その次もご飯が腹いっぱい食べられる、だからこんな氣持になつてくるんだな、といふことがわかつてきました。日本人が繪を見たり、花を見たりするのは、腹がふくれ

大連で暮らす王少年たち中国人にとって、日本人との関わりの中でしか生きる道はなかった。片言の日本語ができたことで、王は日本人家庭のボーイに雇われ、生活が安定する。飢える心配がなくなつてはじめて自然の美を愛でるといふ心のゆとりに気づく。王は、食べることで精一杯だった父母は月を美しいと思ったことがあるだろうかと、自分の両親に思いを馳せるのである。

植民地的様相をここまで鋭く描いた作者ではあるが、植民地の支配・被支配の構造を明確に認識していたかといえ、必ずしもそうとは言い難い。なぜなら、先に引用した部分から、作者は、貧しさは働きさえすればなくなるものだと考えているからだ。確かに働けば食べられる。だが、中国人の貧しさは植民地の構造の上に厳然としてあるもので、植民地であるかぎり、それは永遠に続くのである。植民地の構造に対して、作者に明確な認識はなくても、作者は自分の目で見た日本人と中国人との生活格差や、中国人に対する日本人の横暴な態度を、王少年の視点から描くことによって、植民地の現実をあばきだしているといえる。

中国児童文学研究者・新村徹は、『満州児童文学』について⁸²という論文の中で、「日本少年」を主人公にした「軍人の子」と、「中国少年」を主人公とした「月とめしんじょう」の両作品を取り上げ、それぞれの内容を紹介して、次のように論じている。

片や日本人、一方中国少年、双方の語る「満州」での実情は、多分に真実なのである。その間には、天地のへだたりがある。その描写は、とくに対比して抽出したものであるが、ここにはまだ救いが認められるかもしれない。(中略)問題にしたいのは、(中略)「軍人の子」の母の叫びを除いたその他の部分に全面的にあらわされている、中国の抗日の事実の誤認、日本の中国へ

の優越感、日本の中国侵略を正義とした戦意昂揚と言った点である。また中国少年が、日本人にもらったお金で、父母が月を美しいと思うようになるわけない。

「軍人の子」に関し、新村の指摘する二点、「中国の抗日の事実の誤認」「日本の中国侵略を正義とした戦意昂揚と言った点」については、筆者も同感である。だが、「日本の中国への優越感」に対しては、いささか疑問である。なぜなら、この作品では、旅順を舞台にしている以外、一切中国的なものを出てこず、「日本の中国への優越感」が具体的に描かれていないからである。ただ、中国を舞台に、日本人が我がもの顔にふるまっている、その点を指しているのであれば、そういえないこともないが、作品からそこまで指摘できるだろうか。

「月とめしんじょう」についての新村の指摘は、作者の小池歩が描いた王少年の人物像に対する批判である。だが、新村の批判は、抗日意識を持った「中国少年」であることが前提となる論である。侵略者である日本人から与えられるお金を、中国少年の父母がありがたがるはずがないというのである。新村の指摘に対し、筆者の認識は異なる。前述したが、小池歩の中には、支配・被支配という植民地の構造に対する認識が欠落している。当時の書き手である小池に、新村の言う覚醒した中国人像の創造は不可能であつたろう。また、当時の中国人がみな抗日意識を持った覚醒した存在であつたかという点必ずしもそうでなかったであろう。

「総理大臣と鳩」(山田健二作)は、現在の満洲国国務総理・鄭孝胥(一八六〇—一九三八)が主人公である。清朝最後の皇帝である宣統帝(愛新覺羅溥儀、のち満洲国皇帝となる)の教育を担い、満洲国建国後は国務総理を務めた。詩人、書家としても名高い。ここでは、鄭孝胥は、公務に誠実で、慈悲深い人物として描かれている。

「息が、凍るような冬の朝です」。物語は、満洲の冬の情景から始

まる。満洲国の執務室には、満洲人や日本人の役人が忙しそうに入りする。満洲国総理は「七十を越したお年寄り」だが、「子供のやうな血色のよいお顔」で公務をこなす。秘書官が差し出す「總理大臣官邸新築案」を、「そんな金があったら石炭でも買つて、小學校に分けてやれ」と却下。屋根裏の入りこんだ鳩のために、私費で餌を買求める。夜遅くまで働いた翌日の三時には起き出し、頼まれていた小學校のために、達筆で「王道」と書をしたためる。あたかも偉人伝のような描き方である。この作品から、「五族協和」「王道楽土」⁸³としての「満洲国」建設を信じて疑わない作者の姿が窺える。

だが、実際の鄭孝胥は満洲国最初の総理であつたけれど、満洲国が日本の傀儡国家であつたために、実権はなく、政治的には不遇で、その座は三年余りで解任されている⁸⁴。

「あの雲」（八木橋雄次郎作）では、白系ロシア人父子が描かれている。

日露戦争は、満洲の利権をめぐる、日本と帝政ロシアとの戦いであつた。日露戦争に勝利した日本はこれまでロシアが持っていた関東州の租借権と長春・旅順間の鉄道を手に入れる。関東州大連はもとロシア語の「ダルニー（遠い地）」から来た名で、日本がロシアの町づくりを引き継ぐ形で建設された都市である。そのため、異国情緒の漂う美しい都市であつた。この物語の舞台がどこであるのかは明らかではないが、海辺の町とあるので、おそらく大連であろう。満洲にロシア人がどれくらいいたかについては、調査する必要がある。「あの雲」では、満洲で暮らすロシア人の一つの姿を描いている。この作品の主人公レニエフには、母はなく、年老いた父親と二人で、町はずれの支那家で暮らしている。父親は元軍人。ロシア革命によって、満洲に逃れ、パン売りで生計を立てている。父子は他のロシア人と交わらず、互いをいたわり合つて、貧しく孤独に暮らす。故郷のわが家からよく見た雲、その同じような雲に、父は

郷愁を、息子はまだ見ぬ祖国に思いを馳せる。哀感たどよう作品である。植民地満洲に暮らすロシア人の一つの典型が作者の目を通して語られている。

（三） 作品の中の満洲風物

「春」（久富榮次郎作）には、満洲の野に生きる風物たちが主人公である。

「やっぱり春はいゝや」と背伸びする葱坊主。「くすぐつたい。（中略）人のふところに足をつつこんで」と土。豚はひたすら食べる。驢馬が大あくび。「また厄介になりますよ」と鵲が榆の木に挨拶。「今年の土はまづくて食へない」と高粱の種が土の中でぼやく。「柔かい青い草が早く食べたい」と牛。「何たることだ。世は非常時といふのに勝手なことばかり喋つてゐる。だがわしも眠くなつてきた」と仁丹の立看板。「土の上は歩きにくくていけないわね」とあひるA。「いつまで飛んでいくんだらう。今日で三日目だ」と柳のわた。「満洲の野は広いですよ」と風。「おや、もう東経百二十五度か」と太陽。

舞台は満洲の野、動植物はいずれも満洲の風物である。行けども行けども続く満洲の野である。野に立つ仁丹の立看板の台詞だけが時局に直結している。仁丹の立看板は日本の象徴であろう。東経百二十五度とは、「新京（満洲国の首都・現在の長春）」の位置を指す。「新京」とは「満洲国」の新都であるので、この作品は「満洲国」建国後に制作されたと考えられる。満洲では、春先に訪れる台風のような「モンクーフオン（蒙古風）」が終わると、景色は一変、一斉に花が咲きほこるといふ。久富の作品は一見、満洲風物の羅列のようであるが、台詞に農作物や生き物の特徴が踏まえられている。特に仁丹のいかめしさは、商標の絵柄と符号していて、時局的で場違いな感じではあるが、その立看板すら春の陽気に眠気をもよおす。

満洲の野の風物たちが、春の息吹の中でおしやべりするという、ユーモラスで、ほのぼのとした作品である。いかめしく場違いな感じだが、おそらく汽車の窓から見える所に立っている、その仁丹の立看板も満洲の野の景色の一つなのであろう。が、ここには、やや揶揄的なニュアンスも感じられる。

「雁とブルスニカ」(石森延男作)は、シベリアを渡る雁とブルスニカ(野苺)の物語である。出典が「新童話」なので、「第四章」で紹介した。群れから脱落し、死を覚悟した雁に、ブルスニカは自分の実を食べさせて救う。「神さまは『もし、この廣野を旅するものがあつたら、さぞ困るだらう。せめて餓えだけはまぬがれるやうに。』とおぼしめしになり」、ブルスニカの種子を「お蒔きになりました」と言うのだ。そして、旅立つ雁にこう励ます。

生きてゐるものは、だれもだれもみな旅をしてゐるんですもの。そして、よくかんがへてみればそれがみな一人ぼつちなんですわ。(中略)その旅のあいだで、かうして助けたり助けられたりする、それがたのしいことになるのではないかしら。

(六六頁)

この作品のテーマは何だろう。他者のために己を投げ出すことか。神に与えられた(持って生まれた)自分の役目を果たすことか。そのどちらも含んでいる。また、石森は、人生は旅である、とブルスニカに語らせる。これは何も新しい主張ではない。すでに『奥の細道』の冒頭で芭蕉が述べている、一つの真理である。石森はこの主張に読者へのメッセージをこめる。人生は一人で歩く旅である。だが、その旅の途中で、関わる人のつながりはすばらしいものだ、というのである。人生訓を盛り込んだ教育的な内容の童話である。ここに、石森の人生観を見ることができる。

「かさゝぎの子」(石森延男作)は児童劇である。町の華やかさに憧れ、母親の反対を押し切って、町へと向かった鵲の子は、「町って、そんなに、いゝところじゃないよ」と言う驢馬の言葉にも、「自由に、青い空を飛んであるけるだけでも、幸福だ」という鸚鵡の忠告にも耳を貸さない。だが、子どもに空気銃で狙われ、町の怖さを知り、あわてて母親の待つねぐらに帰る。

物語の出だしで、すでに結末が予測できるオーソドックスな作品である。あれほど強かった町への憧れが、一度の事件で消え去ってしまう。命を狙われる大事件であるのでやむをえないのか。もともと町の持つ虚飾性が鵲の子自身の体験や鵲の子自身の観察によつて暴かれていく方が筆者は納得できる。

石森は『王の家』(平方久直著・文昭社・一九四〇年八月)の序文に次のように書いている。

満洲といへば、すぐ寒いところ、木は少ないところ、殺風景なところだといはれてゐました。けれども、こゝで生れ、こゝで育つた日本人の子どもについては、かけがへのない故里なのであります。

昭和三年の春、私たち五人のものが集つて、満洲にゐる子どもたちのために、この土地の美しさ、風俗などのおもしろさを取り入れて童話を作らう、さうして子どもたちに、少しでも満洲を知らせたいと考へました。(後略)

その五人とは、石森、平方久直、政本勇、久富榮次郎、松尾茂である⁸⁵。石森らの創作には、日本の子どもたちが親しめる、満洲風物を取り入れた作品を書く、という明確な創作方針、創作目標があったということである。ここで分析した三作はいずれも、それらの具現したものである。

三 「緑版」に見る満洲児童文学の実相

満洲児童文学とは何か。

『満洲新話集』（緑版）に収録された十四編はすべて日本人作家の作品で、その半数は、日本人及び日本の子どもたちの生活実感や思いを描いている。それらの作品は、すべて満洲の風土を背景にしているが、そこに描かれた生活実感や心情は、日本国内に住む日本人と何ら変わらない。

そういう意味から、満洲児童文学とは、満洲で生まれた日本児童文学であるといえる。

初めて犬を飼う少年の心理（「少年と犬」）、戦死した息子を偲ぶ父（「崩れた堡壘」）、軍人にあこがれる少年と子を思う母の気持ち（「軍人の子」）。そこには、世相や時局的な考え方にそった部分がある一方で、普遍的な人間感情が描かれている。

だが、植民地満洲を舞台にしている以上、意識的であれ、無意識的であれ、作品には植民地的諸相が必然的に表れ出る。

「赤いコスモス」は、路上で芸をする中国人の子どもに対する日本人少女の思いを描き、「あの雲」は異郷に暮らすロシア人父子の望郷の念を描いている。これら、他民族との関わりを描いた作品があるのも満洲児童文学の特徴であるといえる。

一方で、植民地的諸相を意識的に暴いた作品もある。「月とめしんじょう」は、中国人少年の視点を通して、満洲の日本人の驕りを描いている。

また、「満洲国」を舞台にした作品もある。満洲国総理鄭孝胥の人物伝（「總理大臣と鳩」）や「春」がそれである。

満洲児童文学は、満洲で生れた日本児童文学であるけれど、その作品世界に、植民地としての諸相、異国としての味わいを内包しているという独自性を持っていたといえる。

平方久直は次のように述べている。

「満洲は遠いから、あまりジャーナリズムにはのつてゐませんが、この時の同人で、政本勇、松本茂、久富榮次郎などの諸君は、ゆたかな天分にめぐまれた童話作家でありました。おそらくこれらの人々によつて、大陸新天地の児童文学が、今後ますます、盛んになることでありませう。」（『王の家』「作者のことば」）

満洲児童文学の担い手であった日本人作家たちは、常に内地の動きに注目しつつ、自分たちの住む満洲で、「大陸新天地の児童文学」を生み出し、満洲から内地へと発信していく気構えであったのではないかと思われる。

第八章 平方久直作「軍人の子」と「満洲文庫」発禁問題

「満洲文庫」の緑版『満洲新童話集』の冒頭をかざる作品に、平方久直の「軍人の子」という作品がある。ここでは、平方久直（以下「平方」）の「軍人の子」及びこの「軍人の子」を巡って起こった「満洲文庫」発禁問題について論述する。

一 平方久直―人と作品

（一）プロフィール

平方（一九〇四―一九九〇）は、岐阜県揖斐郡徳山村に生まれた。岐阜師範学校卒。一九二八（昭和三）年に満洲（関東州）に渡る。旅順師範学堂研究科卒業後、大連南山麓小学校、旅順第二小学校に勤務する。小学校の教員をしながら創作に携わる。一九三六（昭和十一）年八月、満洲より帰国⁸⁶。千葉県市川市の私立日出学園、日本女子大学附属豊明小学校に勤務。その間、これまで発表してきた作品をまとめるような形で、童話集『王の家』（一九四〇年八月）『北京へ行く』（一九四二年四月）等を出版する。一九四五（昭和二〇）年、敗戦によって、豊明小学校を退職し、故郷岐阜に帰る。七年間ほど、岐阜で、教育関係の仕事に携わる。一九五三（昭和二八）年に上京。日本女子大学附属豊明小学校に勤務しながら、作家活動を行う。一九六六（昭和四一）年豊明小学校を退職し、日本女子大学事務局に五年ほど勤めたのち、静岡県伊豆の陶芸村に転居。一九九〇（平成二）年十一月、八六歳で生涯を終える。

生涯、教育と創作に携わった平方の文学活動は、「満洲時代」「帰国から敗戦まで」「戦後」の三つに分けられる。

（二）平方の文学活動

（1）満洲時代―平方文学の原点

平方の創作活動は渡満前から始まる。処女作は「眼鏡のお國」（『教育の世紀』一九二六年三月）⁸⁷という幼年童話で、祖父の老眼鏡の中に見える不思議な世界を幼な子の視点から描いている。ほのぼのとした温かさは平方作品の特徴の一つであり、それはすでに処女作に見ることができる。また、平方は岡本瓊二編集の雑誌「小学校」にいくつかの作品を発表している（『資料編の（資料17）」「平方久直著作目録」を参照）。

一九二八（昭和三）年、平方は、満洲の関東州に渡り、旅順師範学堂研究科で学んだ後、大連の小学校に赴任する。やがて、在満の教師らが発行していた母親向けの家庭教育雑誌「愛兒と家庭」⁸⁸に作品を発表する。この「愛兒と家庭」に発表した幼年童話「みちぐさ」は、内地の雑誌「童話教育」（一九三四年九月）⁸⁹に掲載され、また、「満洲文庫」文学篇紅版『童話と童詩』（一九三五年五月）にも収録されている。また、同雑誌に掲載された「軍人の子」は「満洲文庫」緑版『満洲新童話集』に収録されている。いずれも初出掲載年は不明である。「みちぐさ」も「軍人の子」も、ともに在満の日本の子どもが主人公の作品である。

平方文学の原点は、満洲にあるといえる。それは、満洲で、平方の創作の終生のテーマである「土」との出会いがあり、また、ひたすら創作に励んだ時期でもあるからである。後年、平方は満洲について次のように語っている。

満洲の生活で、一番私の心をとらへたものは、百姓の姿でした。（中略）どんな困難にも不足にも耐へて、黙然とはたらきつ

づける、ふるさとの人たちと、それはなんとよく似通つたものであつたでせう。私は、日本と満洲・支那が、心から手を取り合ふ鍵はこゝにある、と、かたく信じないではゐられませんでした。『王の家』「作者のことば」二七一頁）

この文面によると、平方は中国の農民の姿に、故郷の農民の姿を重ね合わせ、心惹かれる。中国の農民の姿を日本の子どもたちに知らせたい、そうすることによって互いの理解と共感が生まれるという思いを持ったというのである。そして、暇さえあれば、「支那部落」を歩きまわったという⁹⁰。つまり、平方は、国策である「五族協和」は、土に生きる民同士の理解によって実現すると信じていたということである。

平方は満洲時代の創作の様子を次のように述べている。「がむしやらの制作を、満洲で唯一の童話誌であつた、『童話作品』で勉強しました」⁹¹。「童話作品」に、平方はほぼ毎号作品を発表していたという⁹²。「童話作品」は、「昭和三年の春、（中略）満洲にゐる子どもたちのために、この土地の美しさ、風俗などのおもしろさをとり入れて童話を作らう、さうして子どもたちに、少しでも満洲を知らせたい」⁹³という考えのもと、石森延男（以下「石森」）を中心として生まれた同人雑誌で、平方はその創刊時から参加している。この引用文では「童話作品」の発行年は「昭和三年」となっているが、これについては異論があるので後述する。

当時の平方について石森は次のように述べている。

平方さんは、おもに満洲人の子どものことを、いろいろとしらべることから初めました。（中略）満洲人の子どもたちは、いったいどんな暮らしをしてゐるのか、その子ども同志が、どんな遊びをしてゐるのか、日本人の子どもと、どうして仲よくなる

きつけかけを持つかなどといふことを、平方さんは、ぐんぐんつこんで考へました。さうして苦しんでしらべて、それを童話にかきあげました。⁹⁴

この雑誌への参加によって、平方は中国の農民や子どもたちの姿を自分の目で見、確かめた。それは、「童話作品」での創作活動が平方文学の方向を定め、基礎となつたということでもある。

平方にとって、石森との出会いは大きな意味を持つ。平方は次のように述べている。

石森さんは、多くを語りませんでした。しかし、私たちに、正しい方向を示してくれました。おもしろいかおもしろくないとかいふやうな域をのりこえた、人生に通じた正しい童話への道を教へてくれました。⁹⁵

しかし、石森と平方とは、当初から昵懇であつたわけではない。平方は、渡満当初の石森の印象を次のように語る。

（殆ど渡満早々）石森さんの名前とお顔は知つてゐたのであるが『藝術肌の人によくあるきむづかしい人』と云つた印象が、お話する機会をいつもとり逃がさしてゐた。（中略）お話してみても、實際もう十年前からの知合ひのやうな氣持になつてうれしかつた。⁹⁶

この文章によると、石森とは渡満後すぐ親しくなつたわけではなかつた。しかし、その後の石森との交流によって、平方は、作家としての進むべき道をつかんだということである。

ここで「童話作品」の創刊年について確認する。石森によると、

同人誌「童話作品」の発刊は「昭和三（一九二八）年の春」となる。だが、『満洲年鑑』（昭和十一年度版）によると、「童話作品」の創刊年は「一九三五（昭和十）年二月」である。どちらが正しいのか。次の二つの理由により、石森が「昭和三年の春」と書いているのは「新童話」の間違いで、「一九三五（昭和十）」が正しいと筆者は考える。

理由の一つは、昭和三年は、平方が渡満した年である。平方はその年、旅順師範学堂を卒業して大連南山麓小学校に勤務する。上述の平方の石森に対する印象から、こんなにすぐに石森との接触はなかったと考えられる。理由の二つ目は、「満洲唯一の童話誌であった、『童話作品』と、平方は述べているが、仮に「昭和三年」に「童話作品」が発刊されていたとしたら、その一、二年後には、石森中心に、「童心行」（赤塚吉次郎発行 一九二九年十二月創刊）一九三四年六月終刊）「新童話」（石森延男発行 一九三〇年五月創刊）一九三二年十一月終刊）が発刊されることになる。「童心行」は文芸雑誌で、純粋な童話雑誌ではないが、童話も掲載されている。そして、「新童話」はまるまる童話雑誌である。だから、昭和三年に「童話作品」が発行されていたら、「童話作品」が「満洲唯一の童話誌」である期間はずいぶん長い一年位で、ちよつと無理がある。また、この二雑誌には、平方の作品は全く掲載されていない。もし、「童話作品」が「一九三五（昭和十）年」発行であるなら、上述の「童心行」も「新童話」もすでに廃刊になっており、「童話作品」は「満洲唯一の童話誌」となり、平方の語る内容とつじつまが合う。

以上、長くなったが、「童話作品」の発刊年が明らかになったことで、平方の満洲における文学活動は次のように確定できる。

平方は渡満後、最初に大連南山麓小学校に赴任する。やがて、在満の教師らが発行していた家庭教育雑誌「愛児と家庭」（一九二六年五月創刊 大連奨学会）に、作品を発表する。その後、「國語と教育」

（政本勇発行 推定一九三二年六月創刊）が発刊されると、さらに活動の場を「國語と教育」にもひろげる。そして、石森を中心に、政本勇、久富榮次郎、松尾茂らと童話雑誌「童話作品」を発刊してからは、主に雑誌「童話作品」を活動の場として精力的に作品を発表するのである。

在満児童文学作家たちのほとんどがそうであったように、平方も、日本国内の童話界の動きに関心が高かったようである。平方は、雑誌「赤い鳥」にも投稿し、童話「線路」（「赤い鳥」一九三五年七月号）、童話「王の家」（「赤い鳥」一九三六年三月号）の二編が掲載されている。「赤い鳥」掲載の両作品はいずれも中国の子どもを主人公にした作品である。

平方にとつて、満洲は作家としての基礎づくり、作家としての成長の場であったといえる。

（2）帰国から敗戦まで

中国を舞台にした平方の作品がすべて満洲で書かれたかというところではない。その作品の多くは帰国後に書かれている。

平方は、一九三六（昭和十）年八月に内地に引き揚げ、小学校に勤めながら、主に二つの同人誌、「童話時代」（野村吉哉主宰）と「風と裸」（「童心群」を改題）で創作活動を行っている。「童話時代」には、一九三六年十一月から評論や童話を発表している。一九三八（昭和十三）年五月に組織された新児童文学研究会に参加。その機関誌「風と裸」九月号に作品「春」を発表し、これを皮切りに、以後、「風と裸」誌上においても、精力的に童話や評論を発表している。「春」（のち、「ユイガのうた」と改題）は、もともと「土」という作品を改作したものである。子守をする貧しい中国の少女が、自分が知る唯一の日本語「メシ・シンジョウ」（残飯を貰う時の呼び声）

という言葉をも、歌のつもりで、声をはりあげて「うたう」という内容の作品である。新児童研究会とは、当時不毛であった児童文学の前進を願って、松田伊勢次（松田いせ路）、加藤てる緒らの「童心群」が拡大して、新しい組織となったものである。同人は十名ほどで、そのほとんどが教師であった。平方も同人である。機関誌発行（当初は隔月・一九三九年二月から月一回）のほか、例会を開き、座談会を企画、新児童文学研究会編纂の童話集『先生の靴』（一九四〇年四月）出版等の活動を行ったりもしていたが、日本が太平洋戦争へと向かう中、会の運営が困難になり、一九四〇（昭和十五）年十二月に会を解散、同時に機関誌「風と裸」も廃刊となる。わずか三年ほどの刊行であった。「風と裸」に当時の平方について述べた文章がある。「平方久直氏―作品を書くことに於て同人中第一位。そこに平方イズムがある。君は市川から月例會に上京しては百姓魂を高唱して歸つて行く。温厚な人柄とたくましい情熱がみんなをひきつける。」⁹⁷とある。

また、平方は「風と裸」の「新春隨想」の欄（一九四〇年一月）で、次のように書いている。

ことしはぼくはせいぜい大陸のものを書きたいと思つてゐる。むかふからかへつてきてみると、あるときは殺風景だとか、あられずりだとか文句をつけてゐた大陸の自然が、強烈になつてしまふ。

それから土の中からはひだして來たやうな、鈍重な、凡そ童話には遠い支那の子どもの姿である。それをぼくも、土くさい鈍重な筆で一年かきたいと思つてゐる。

（「風と裸」第三十七号 五頁）

この後、平方は長編「線路」を「風と裸」誌上に発表し、後、『北

京に行く』（一九四二・四教養社）に収められる。

平方が「風と裸」に発表した作品は、評論をのぞくと約十編で、日本内地を舞台にした作品と中国大陸を舞台にした作品とが半々である。「風と裸」誌上に掲載されたいわゆる「大陸もの」のほとんどは、平方が帰国後に書いた作品であると考えられる。

一九四〇年八月、平方は、童話集『王の家』（文昭堂）を出版する。その序文を石森延男が書いている。この作品集は、その年の九月の文部省の児童図書部門推薦図書に選ばれている。同書は、平方のこれまでの作品をまとめたもので、中国大陸を舞台にしたものが十五編、日本内地を舞台にしたものが十編収められている。日本ものも十編収められているが、書名を『王の家』としたのには、「この集のうち、力を入れたものは、無論、大陸に取材したことにあります」⁹⁸とあるように、平方にとつて満洲は特別であったことを意味する。だが、中国的なタイトルが読者をひきつけるという国内事情もあったことは想像に難くない。中国大陸・満洲がますます重要視されている戦局と相俟って、中国・満洲を描いた作品が求められていたということである。その後、『童話集 北京に行く』（一九四二年四月教養社）、『イカダノオウチ』（与田準一編集「新幼年文庫」一九四二年五月 帝国教育出版社）『まんしうのをちさんから』（一九四三年七月 増進社）等が出版されている。

『イカダノオウチ』（斎藤長三画）は幼年向けに出版された「新日本幼年文庫」（与田準一編集）シリーズの一冊である。シリーズ全二四冊のうち、五冊が中国・満洲を題材とした作品であることから、中国・満洲に対する関心の高さ、あるいは国策の影響がうかがえる。長江を下る筏の家に住むワン君の家族を中心に、中国の水上生活者の姿を描いたもので、物語性がないため、作品としては平板であるが、そこには、写実に徹しようとする作者の姿勢が見られる。平方は以下のように述べる。「揚子江の筏流しの風景をかいて、子どもた

ちに大陸の自然や、そこにすむひとびとの心をわからせたいと思いました。」（「おかあさまがたへ」）

平方は中国の民や子どもを主人公に作品を書いた、数少ない児童文学作家の一人である。中国の風物や自然描写には、在満十年ほどの経験に裏付けされたリアリティがある。だが、彼らの心情が十分に描かれているか。この点に関してはいささか疑問である。

平方の描く中国の民は、みな貧しいけれど、子どもは健気で心優しく、大人は根気よく働き者である。そして、日本に対して憧憬の念を抱いている。これらの人物像には、平方の実感と同時に、平方自身の感情移入や願望が多分に入っていると考えられる。病気の母親のために、うずらを買ってきた「永長」父子に、かわいそうだから逃がしておやりと言う母親（「うずらとお母さん」）、豆かすを荷馬車に積んで運ぶ「永長」と、スケートの練習をする日本の少年との友情（「氷の上」）、畑仕事を手伝うために学校を休ませられる「永長」の頼みを聞いて、学校へ行つて日本語を勉強してこいという父親（「霧の晴れる朝」）等、ここに描かれる人物像は、筆者には、実際の中国の民の姿というより、平方の願望によって描かれた人物像のように思える。

『現代童話四十三人集』（一九四三年十二月 フタバ書院成光館）には「氷の上」が収められている。この童話集は、小川未明の還暦を記念して小川未明の親しい童話作家たちによって出版された。当時の主な童話作家たちが名を連ねている。ここに作品が収録されているということは、平方が童話作家として国内においても認められていたということである。

（3）戦後

平方は、敗戦によって、郷里岐阜に帰る。七年ほど、郷里で教育

関係の仕事に携わったのち、一九五三年に上京。小学校に勤めながら、作家活動を行い、多くの作品を著している。主にふるさとを題材とした作品や名作の再話を中心であった。だが、戦後の作品の中で、注目すべきは、『土ねり三ねん』（一九七四年三月）である。平方がこれまでこだわってきた「土」を主題とした作品の延長線上に、この作品もあるといえよう。

二 作品「軍人の子」

（一）「軍人の子」を巡って

（1）出版履歴

「軍人の子」の初出は、旧植民地満洲の関東州大連で出版された「愛児と家庭」（大連奨学会）である。「愛児と家庭」は、在満の教師らが学校と家庭との連携を図るために、母親対象に発行した家庭教育雑誌であるが、童話も掲載されていた。本作品の掲載年は不明であるが、内容から満洲国建国後に書かれた作品であるといえる。

本作品は、平方によれば、最初に石森にほめられた作品で、「かきかたがきがきいている」と言われたという⁹⁹。そして、その後「満洲文庫」文学篇『満洲新童話集』（一九三五年五月）に収められるのである。書き方が気が利いている、とはどういうことかはよく分からないが、本作品は、時局を色濃く反映しているものの、筋立てのうまさ、当時の人々の本音が描き込まれている点は評価できる。

（2）「軍人の子」に関する問題点

この作品には、問題点が二つある。一つは書きかえの問題である。

平方は一九三六（昭和十一）年八月に帰国。「軍人の子」は、平方が東京で出版した童話集『王の家』（文昭社・一九四〇年八月）にも収められている。だが、そこでは、「僕のお父さん」と改題、内容の改編も五〇箇所以上に及ぶ。その改編は、字句、かなづかいの瑣末な書き換えから、作品全体の内容にまで及び、大連と東京という出版地の違い、五年間という時間の差と社会状況の変化による影響が見られる。改編の詳細については、「三」で述べる。

もう一つは、この作品が、「満洲文庫」の発禁問題を解く鍵となるということである。

平方久直の帰国後、一九三九（昭和十四）年には、石森も文部省の図書監修官の任に就くため帰国している。その後（正確には何年か不明であるが、少なくとも、「僕のお父さん」改編（一九四〇年）後であると考えられる）、この「軍人の子」という作品が、新潟の憲兵に問題視され、作者の平方、および編集者の石森が本部（東京）の憲兵隊に呼び出され「反軍思想をいだいている」と責められ、それが原因で「満洲文庫」が発禁処分になったという¹⁰⁰。これらの文面が、長年、未解明だった「満洲文庫」の発禁の問題を解く手がかりになる可能性が高いのである。文面に記憶違い等がなければ、次のことがらが確認できる。

憲兵からの呼び出しは、「満洲文庫」に掲載された「軍人の子」が問題になったこと、それは平方・石森両氏が大連から帰国後だったこと、呼び出しは憲兵隊本部（東京）であったこと、「満洲文庫」十二冊の裁断が官報で布告されたということである。

発禁問題については、「四」で述べる。

（二）「軍人の子」作品分析

「軍人の子」は、旅順に住む日本の軍人家庭が舞台である。軍人

になりたいと思う一方で、軍人にはしたくないという母親の言葉に心が揺れる、小学生の「僕」の心理が一人称で描かれている。

（1）内容分析

以下、内容に沿って作品分析を行う。「第七章」での分析と一部重なるが、論点に関わる重要な部分であるので、再度ここで取り上げる。テキストは「満洲文庫」『満洲新童話集』所収の「軍人の子」を使用。

「僕のお父さんは軍人だ」。この一文は作品中で二か所使われている。まず、冒頭文に出てくる。その後に、軍人の父親の任務が明らかにされる。

ハルピンの、そのまた奥のさみしい部落に二十人たらずの日本の兵たいさんと、たくさん満洲國の兵たいたちを引つれて、罪のない人を殺したり、お家に火をつけてものをぶんどくつたりする土匪とか云ふ悪者たちを征伐してみなさるのだ。（四頁）

父親は土匪討伐隊の隊長である。そして、母親は父親のことを「御國のためにはたらいいていらつしやるんだよ」（七頁）と「僕」にいつも言っている。

中国の民を苦しめる土匪を日本軍が征伐する。これは、当時の日本人の一般的な認識であり、日本が中国を侵略する大義名分の一つでもあった。在満日本人のほとんどは、そのことになんの疑いも持っていないかった。それが、この文章によく現れている。だが、実際には、土匪の多くは抗日勢力と結びついて、日本の中国侵略に抵抗する存在であった。そして、日本軍はその勢力を土匪とよんで恐れ、あらゆる手を尽くして討伐を行ったのである。

「僕」にとって、父親が軍人であることは、この時点では、誇りでも何でもない。むしろ、長期不在のため、遊びにつれて行ってもらえないし、かまってももらえないから、「僕なんかつまらないよ」(四頁)「父親と散歩するよその子を」うらやましく(五頁)思う。ここでは、父親不在を寂しく、つまらなく思う子どものも普遍的な心理が描かれている。

「僕」は、一人ぼっちの日曜日に、家から遠くにある二〇三高地に登る。二〇三高地についてこう書かれている。

この山は日本人だったら誰でも知ってある筈だ。

読み方の本にも出てあるからな。

今も山の草花まで、日露の戦に討死した、勇ましい日本軍人の血の色に咲くと云はれてゐる。(六頁)

日露戦争の激戦地二〇三高地は日本軍人の勇ましさの象徴として、教科書でも教えられていることが分かる。作品ではこの後に、冒頭と同じ「僕の父さんは軍人だ」が出てくる。この一文は、その「勇ましい日本軍人」と「僕の父さん」とが暗に重ねられている。それが「僕」に勇気を与え、僕は二〇三高地を目指すのである。本文にはこうある。

少し道が遠すぎておつかない気がしたけれど、

— なにつ、くそッ。

と、勇んで僕は出かけたさ。(七頁)

山上の戦跡では、案内人のおじさんが、たくさんの見学団に涙を流さんばかりに、「忠勇なる兵士」が「戦友のなきがらを土のう代り」に戦かった話をする。

僕もそんなことは今耳あたらしく聞くのではないけれど、なべん聞いても目がしらが熱くなる話だ。

そして、「僕」は山をかけ下りながら決心する。

「ようつしッ、僕も軍人になるぞッ。軍人は勇ましいな。ぼんく 鐵砲をうちまくって日の丸の旗を持って歩くんだ。」

(八頁)

ここには、小学生の「僕」が、現象だけに惹かれ軍人にあこがれていく過程が端的に描かれている。それは読者である子どもたちが、この作品を読むことによって軍人にあこがれていく過程ともなったであろう。だが、家に帰ってきた「僕」は郵便配達人に渡された電報に「センシ」という文字を見つけて父親が戦死したと思い込む。呆然とする母親。だが、勘違いと分かった時の二人の様子はこう書かれている。

「まあ、……父さんでなくってよかった。」

と云ふと、(母さんは)へなくとそこに坐りこんで、手で顔をおほふてうつぶしてしまわれた。

僕は、自分のそゝつかしさから、こんなに母さんをびっくりさせたことをすまないと思ひ、また自分も安心して、急にはしやぎたくなり、母さんの背中に馬乗りになつて、

「僕は騎兵の大將になるんだ。進めく。」

と云つて、母さんのお尻をびしゃくたゝいた。

母さんはしばらくしておき上がつて、僕をいやと云ふほど抱きしめて、僕のほつぺたを吸いながら、

「三ちゃん軍人なんかにはしません。軍人なんか母さんは大嫌いです。」

と云った。

「だって、母さん、御国の為じゃない？」

と云つたら、急におそろしい顔をなさって、

「子供はよいけいなことを言はないで、黙っておいで。」
って、叱られちゃった。

(十一・十二頁 括弧内語句は筆者補充)

ここには、世の母親の本音が描かれている。普段見たことのない母親のむき出しの感情だったからこそ、「僕」の心は揺り動かされたのである。このことがあってから、「僕」は長い間、軍人になる決心を放棄する。だが、最終的には、父親の雄姿を目の当たりにすることによって、「僕」は再び軍人になりたいと思うようになる。

(2) 「僕」にとって「父親」とはどういう存在か。

この作品は、父と子の物語でもある。「僕」にとって父親はどのような存在であるのか。

軍の用事で奉天(現在の瀋陽)まで来る父親に、「僕」は「とび立つ思ひ」で母親と、会いに行く。長期不在の父親への思慕が「とび立つ思ひ」という言葉に現れている。

父親は「恰好のいゝ毛皮の軍帽」をかぶり、「サーベルを光らし」「自動車」で「番兵」の立つ宿までのりつける軍の上官である。が、「僕」にとって父親は生身の人間として描かれている。文中にはこうある。

其晩、僕は父さんの太い、ゴツ　く　した手にぶら下がって
街を歩いた。

父さんは僕のほしいと云ふものを、なんでも買ってくれる。

僕は父さんが大好きだ。

こないゝ父さんと一緒におれないのかと思ふと淋しくなった。
晩も父さんの手をしっかりと握ってねむった。

いつまでも　く　はなしたくなかった。(十三頁)

小学生の「僕」にとっては、父親は、軍人というよりも、温かくて優しく包容力のある生身の人間なのである。だが、あくる日の閲兵式で「僕」は、仕事をする父親の姿を見る。

ゆたり　く　といく、馬上の父さんの後姿は勇ましいものだったよ。

キラリッ

と父さんの手に軍刀が光った。

「キラツケイッ」

と云ふ聲が、まっすぐに寒い空をつきぬけて走った。

僕はあの時ほど父さんを強い、偉い人のように思ったことはない。

なんだかからだがぶる　く　ふるふるやうだった。

かへりの自動車の中で、自分でもおかしい位はにかんで、ろくに話も出来なくて父さんのかげに小さくなってゐた。

(十四頁)

父親への親しみが畏敬に変わった瞬間である。少年にとって、父親は、目標でもあり、乗り越えていくべき存在となったのである。

僕は矢張り軍人になりたいな。

けれど、お母さんのことを思ふと、――

だけど矢張り僕は軍人になりたいなあ。(十六頁)

再び「軍人になりたい」と思うようになった「僕」の心中には、「父親」のような「軍人」という具体的な目標ができています。だが、その一方で、我が子と思う母親の気持ちにもそむけないという思いもあるのです。

時局を色濃く反映した作品である。だが、父親を敬慕する少年の心情、子と思う母親の気持ちはこの作品に深みを与えている。

この作品は満洲でないと生まれなかった作品だろう。父親の任務である土匪討伐、それに伴う死は、新聞紙上で見聞きすることでもあっただろうし、また、日露戦争の激戦地二〇三高地は単に作品背景の要素であるというより、主人公の心の動きに深く関わっている。そういう意味で、満洲の地だからこそ生まれた作品だともいえる。

では、在満の読者である子どもは、この作品をどのように読んだであろうか。身近な地名、身近な出来事とともに、少年の心の動きに導かれて、「勇ましい軍人」にあこがれるのではないだろうか。

中国児童文学研究者・新村徹は、『満洲児童文学』について「1001の中で、この「軍人の子」について論じている。その内容と検討については、「第七章」で行ったので省略する。

三 「軍人の子」から「僕のお父さん」へ

ここでは、「満洲文庫」文学篇『満洲新童話集』（一九三五年）に収録された「軍人の子」と、平方久直童話集『王の家』（一九四〇年）に収録された「僕のお父さん」との改編内容を検証する。

書き換えは、字句やかなづかいの変更といった瑣末な部分から、全体のイメージに関わる部分にまで、五十箇所以上に及ぶ。そこには、出版地・出版年の違い、社会情勢・戦局の違いがはっきりと出ている。

書き換えの特徴として、主に次の三点、（1）読者対象を考慮した書き換え、（2）軍隊・軍人に対する大幅な加筆、（3）心情表現の大幅な削除、について述べる。

（一）書き換えの特徴

（1）読者対象を考慮した書き換え

童話集『王の家』は内地の小学生を読者対象として出版された。その読者を念頭に置いた書き換えは、表記と内容の両面で行われている。

表記では、従来片仮名や漢字であった語句を平仮名に改めて、小学生にとって読みやすくしている。また、この作品は主人公の「僕」の一人称で語られているが、「父さん・母さん」を「お父さん・お母さん」に、「先生が云つた」を「先生がおつしやつた」等に見え書き換えて、やや改まった口調になっている。

一方、「軍人の子」の読者が満洲に住む日本の子どもやその母親たちであったのに対して、「僕のお父さん」は「内地の子」が読者対象である。そのため、作品の背景となる場所や社会情勢の違いは、書き換えの大きな要素で、その書き換えは作品内容にまで影響している。

冒頭部分、「僕」の父親の職業が紹介される場面ではこのように書き換えられている。（前者は「軍人の子」で、後者は「僕のお父さん」）。括弧内は頁。傍線・波線部は筆者。以下書き換えの対象部分については同じである。

1 ハルビンの、そのまた奥のさみしい部落に二十人たらずの日本の兵たいさんと、たくさんの満洲國の兵たいたちを引

つれて、罪のない人を殺したり、お家に火をつけてものをぶんどくつたりする土匪とか云ふ悪者たちを征伐してゐなさるんだ。(四頁)

←
ハルピンの、まだまだ奥の、さみしい部落に、二十人たらずの部下の兵たいさんと、たくさんの満洲國の兵たいをひきつれて、國境を守つていらつしやるのだ。(一三二頁)

2 さら、三年ばかり前、柳條溝と云ふところで支那兵が日本の鐵道線路を破壊しかけたことがあつたろう。あの事件以來、鐵砲のたまのやうに奥地へとんで行つたきり、めつたに歸つて來ないのさ。(四頁)

←
削除

削除された「土匪の征伐」や「柳條溝（正しくは柳條湖）事件」というのは、在満の子どもたちにとっては、身近な事件であるが、内地の子にとっては、聞きなれない、馴染のない事件である。また、「柳條湖事件」は一九三一年、満洲事變の引き金となった事件で、『王の家』の出版時点からは約十年前になる。「土匪」と一括りされているが、その中には、反満抗日組織も含まれている。日本人の一般的な認識は、「土匪」はすべて、中国の民を脅かす存在でしかなかった。抗日運動は日本の敗戦まで続くが、この作品が内地で出版される頃（一九四〇年）は、東北における反満抗日組織が日本軍の追撃にあり、かなり打撃を受けていた頃で日本人にしたら過去のイメージであった。また、一方、日本とソ連（当時）との関係は悪く、一九三六年には満ソ國境で日ソ軍の衝突が起こっている。そのため、「土匪討伐」を「國境警備」に改めたものと思われる。

この部分の改編は、内地の子にとつてのわかりやすさを考慮したものであると同時に、社会情勢・戦局の変化を反映しているともいえる。

(2) 軍隊・軍人に関する書き換え

軍隊・軍人に関する書き換えについて、まず目につくのが、日露戦跡である二〇三高地に対する過剰なほどの追加説明である。

3 (前略) 僕は、思ひ切つて、僕の家からずうと遠くに見える二〇三高地つて山にのぼつてやらうと思つた。

この山は、日本人だつたら誰でも知つてゐる筈だ。(中略) 今も、山の草花まで、日露の戦に討死した、勇ましい日本軍人の血の色に咲くと云はれてゐる。

僕の父さんは軍人だ。(六頁)

←

(前略) 僕は、思ひきつて僕のうちからずうと遠くに見える、二〇三高地つて山にのぼることにした。

この山は、日本人だつたら誰でも知つてゐるはずだ。

(中略) 今も、山の草花まで、日露の戦にうちじにした、勇ましい日本軍人の血の色に咲くといはれている。

乃木大將が、二〇三米といふ山の高さを、「爾靈山（にれいさん）」つまり爾の魂の山と名付けられたといふ、あの山だ。

僕のお父さんは軍人だ。(一三三頁)

「この山は、日本人だつたら誰でも知つてゐるはずだ」とあるだけで、十分説明し得ていると思われるのに、さらに「乃木大將：」（波線部分）と追加説明している。これには、別の配慮がはらわれ

ていると考えられる。次に挙げる箇所と合わせて、後で検証する。

4 わけなく上までのぼりついた。(中略) 朝夕見なれた港口も、
たつた一人かうしてたつて見渡してみると、いろんなことが
思ひ出される。みんな先生からお聞きした戦争の話さ。(七頁)

←
わけなく上までのぼりついた。(中略) 朝夕見なれた旅順港も、
たつた一人かうしてたつて見渡してゐると、いろんなことが
思ひだされる。先生からおききしたり、本やざつしなどで讀
んだ、かずかずの戦争の話……

「とどろく砲音、

とびくる彈丸、

……………」

と、もうひとりでにうたへてくる。

はじめは小さな聲でうたつてゐたが、だんだん大聲をはり
上げて、

「……………」

やみをつらぬく

中佐のさけび……………」

とばかり、うたつてゐると、(一二三五頁)

波線部は追加の部分である。これらの追加のうち、「本やざつし……」の部分は、内地の子の状況をそのまま言い得ていて、妥当な追加である。だが、それ以降の歌および前出の「乃木大将……」の追加は、物語の本筋とは関係ない。追加することによって、冗漫な感じすら与える。この追加には別の配慮、つまり戦意昂揚の意図的な追加であつたのではないかと思われる。

さらに、軍隊・軍人に関わる書き換えが目立つのが、「勇ましさ」

の強調である。

5 「ようつしツ、僕も軍人になるぞ。(中略) 日の丸の旗を持つて歩くんだ。」(八頁)

←
「よしつ、僕も軍人になるぞ。(中略) 日の丸の旗を持つて突貫だつ、そら進めつ、そら。」(一二三六頁)

6 「僕は騎兵の大將になるんだ。進め進め。」(十一頁)

←
「僕は陸軍大將になるんだ。進め、進め。」(一二三九頁)

「歩く」を「突貫」に、「騎兵の大將」を「陸軍大將」に書き換えてあるのは、軍人の「勇ましさ」を強調すると同時に、男子の「志の高さ」を示しており、それは、子どもたちの軍人へのあこがれを煽る効果となっている。

また、一方で、高位にある軍人の特権意識を削除していると思われる部分もある。

7 父さんから、

……軍の用事で奉天まで出る。三坊をつれて會ひにおいで。

と云ふうれしく、お便りが來たので、とび立つ思ひで母さんと出かけて行つた。(十二頁)

←
お父さんから、

―軍の用事で奉天まで出る。(傍線部削除)
といふおたよりがあつたので、僕はお母さんにつれられ

ていった。(一四〇頁)

8 すぐ自動車にのつて父さんの宿にのりつけた。父さんの

宿の門のところには番兵さんが立つてゐたよ。

僕が「失敬」をしてやったら、ニコニコ笑ひながら、棒
のやうにキチンと姿勢をとつて「失敬」をしてくれた。

(一二三頁)

←

全て削除

7の引用文の傍線部からは、父親の素顔が垣間見える。また、「僕」と母親の、父親に会える喜びが表現されている。8の引用文では、「僕」の知らない父親の一面―職業軍人としての父親の地位が描かれている。これらの描写は作品をより豊かにする要素である。だが、一方で、高位にある軍人の特権的な部分を描いているともいえる。戦局は「国民皆兵」の時代を迎える。この部分の削除は、軍部に対する配慮の結果ではなからうか。

「僕のお父さん」で追加された部分は、戦跡、乃木大将と軍歌、軍人の姿である。これらの追加表現によって、明らかに、作品は軍国調を帯びている。

(3) 心情描写の大幅な削除

「軍人の子」は時局的な要素を含んではいるが、「僕」や母親の心情描写が率直である点において、評価できる作品である。だが、「僕のお父さん」では、その心情部分がかなり削除されている。中でも、「軍人の子」の読者であった母親たちの共感と呼んだであろう台詞が、「僕のお父さん」では大幅に削除されている。

それは、「僕」が、電報の「センシ」という文字を見て、父親が戦死したと早とちりした後の場面である。

9 「佐合をじさんが、戦死したんだつてよ。」

僕は電報を母さんの胸にたゝきつけるやうにして言った。
母さんは口をもぐもぐさせてゐたが、

「まあ、……父さんでなくつてよかつた」

と云ふと、ヘナヘナとそこに坐りこんで、手で顔をおほふてうつぶしてしまはれた。(中略)

母さんはしばらくしておき上がつて、僕をいやと云ふほど抱きしめて、僕のほつぺたを吸ひながら、

「三ちゃん軍人なんかにはしません。軍人なんか母さんは大嫌ひです。」と云つた。

「だつて、母さん、御國の爲ぢやない？」と云つたら、急に
おそろしい顔をなさつて、

「子供はよいいなことを言はないで、黙つておいで」
つて、叱られちやつた。(一一頁)

←

「佐合をじさんが、戦死したんだつてよ。」

僕はきまりわるさうにいった。

母さんは口をもぐもぐさせてゐたが、

「まあ。」

といふと、へなへなとそこにすわりこんで、手で顔をおほふて、うつぶしてしまはれた。(中略)

お母さんはしばらくして、おき上るなり、僕をいやといふほどだきしめた。

「くるしい、くるしい。」

と僕は大きな聲をだして、お母さんのひざでばたばたあば

れた。(一四〇頁)

9の引用文の中の傍線部がすべて削除されている。傍線部は母親の本音が描かれている部分で、図らずも当時の戦意昂揚の虚構を暴いている。だからこそ、この作品に深みを与えているともいえる箇所である。「僕」は母親の生の感情に触れたからこそ、気持ち揺らぐのである。それがそっくり削除されている。おそらく軍部に対する配慮であろう。さらに、僕的心情表現の「うれしい」「さびしい」等の形容詞が削除されている。

以上、書き換えに関する主な三点について分析を行った。

書き換え後の「僕のお父さん」は、表記の整理が行なわれ、「僕」や母親の心情表現をかなり削っている。作品としてはすっきりした形でまとまっているが、作品に深みがない。さらに、新たな追加部分によって、より軍国調を帯びた作品になっている。

(二) 書き換えの背景

「軍人の子」から「僕のお父さん」に至るまでには、少なくとも五年間の時の流れがある。ここで、この五年を含む十年間の戦局・社会情勢・出版状況について述べる。

一九三一(昭和六)年満洲事変、一九三二年「満洲国」建国によって、かねてから推し進められてきた日本の満洲の植民地化に拍車がかかり、一九三六年、満洲国開拓移民計画が策定される。満洲は中国大陸侵略の要として重要な地であった。平方はこの間、満洲にあつて「軍人の子」を書いた。

一九三七(昭和十二)年蘆溝橋事件をきっかけに、日本は中国と全面戦争(日本側呼称は「支那事変」または「日中戦争」)に突入する。戦火の拡大とともに、国内では、戦時体制が強化され、厳し

い言論統制がしかれていく。一九三七年、国民精神総動員運動、一九三八年、国家総動員法公布。一九三九年国民徴用令の制定。一九四〇年大政翼賛会発足。一九四一年、小学校を国民学校と改称。治安維持法の強化。太平洋戦争が始まる。平方帰国後の内地では、戦火の拡大に伴って全国民に対し軍国化が急速に進む。

言論統制は、「浄化」という名で児童文化の世界にも及ぶ。統制は、まず紙芝居検閲制度(一九三八年四月実施)から始まり、漫画、赤本、児童読物へと広がる。一九三八年十月、「児童読物改善ニ関スル内務省指示要綱」(以下「指示要綱」として内務省図書課から児童出版関係者に提示され、やがてそれは「検閲」という厳しい統制へと変わっていく。

中国関係の書籍は、この「指示要綱」と、これと同時に出された「指導方針」五カ条の第五条によって、大きく影響を受ける。それは、次のような文言である。

「指示要綱」——編輯上ノ注意事項

一 事変記事ノ扱ヒ方ハ、単ニ戦争美談ノミナラズ、例ヘバ「支那の子供は如何なる遊びをするか」「支那の子供は如何なるおやつを食べるか」等支那人ノ子供ノ生活ニ関スルモノ又ハ支那人ノ風物ニ関スルモノ等子供ノ関心ノ対象トナルベキモノヲ取上ゲ、子供ニ支那人ニ関スル知識ヲ与ヘ、以テ日支ノ提携ヲ積極的ニ強調スルヤウ取計ラフコト、從ツテ皇軍ノ勇猛果敢ナルコトヲ強調スルノ余リ、支那人ヲ非常識ニ戯画化シ、或ハ敵愾心ヲ唆ルノ余リ支那人ヲ侮辱スル所謂「チャンコロ」等二類スル言葉ヲ使用スルコトハ一切排除スルコト¹⁰²

「指導方針」五カ条

五 新東亜建設のため日滿支融合を特に強調する。¹⁰³

戦時中に、中国に関する絵本・児童図書が多数出版されているのは、明らかにこの「指示要綱」の影響を受けている。出版数だけでなく、内容も「指示要綱」に規定されている。

そんな中で『王の家』（一九四〇年八月）は出版される。在満約十年の平方の、中国に取材した作品は、時機に適ったものであったろう。だが、一方で、軍国化の進む中でその出版は思うほどスムーズにはいかなかったのではないか。出版計画は出版前年の十二月にはあったものの、「平方君の『王の家』も出るらしいが、まだはつきりしないらしいので、本誌は豫告を遠慮した」（『風と裸』第三十六号「編輯後記」一九三九年十二月）とあり、出版までにいささか手間取っている印象を受ける。もし、手間どっていたとしたら、どういう原因か。その間の事情についてはわからないが、人間の感情部分の大幅な削除、軍国主義的要素の加筆という、この「軍人の子」の書き換えは、出版にこぎつけるために、必要な書き換えであったのではないか。それは、平方の自主規制によるものであったのかも知れない。

「軍人の子」には無いが、「僕のお父さん」の末尾には次のような「あとのことば」がついている。

この子は旅順にゐるのです。旅順の陸軍官舎にはこのやうに、お父さんの留守をまもつてゐる子がたくさんゐます。お父さんは、いつ、御國のために華と散るかわからないのです。わたしたちはかうした家族の方々にも、心からなる感謝の念をささげないではゐられません。旅順から奉天までは、汽車でおよそ七時間ばかりです。（『王の家』一四五頁）

この「あとのことば」は、「大陸を取材したものの解説のつもり

で書」いたものであると平方は述べている¹⁰⁴。しかし、ここに書かれた軍人家族に対する感謝の念は、軍部に対する配慮ともとれる。『王の家』の「あとのことば」について、相川美恵子は「読者に与えられていた解釈の自由が『あとのことば』によって制約されてしまう」。また、作品によつては、「作者の私的見解が一九四〇年当時の日本国家の公式的見解につながるための橋渡しの役目を果たしている」と指摘している。¹⁰⁵

この物語は父と子の物語でもある。だから、「僕のお父さん」というタイトルであったとしても、何ら問題ないようであるが、なぜ当初の「軍人の子」というのを変えたのか。平方は他の作品においても、作品名を変えたりしているので、作品名の変更に深い意味はないかもしれないが、この場合、むしろ「軍人の子」の方が、時機に適っているように思える。この点、気になるところである。

『王の家』に収録されている他の作品について、書き換えの有無を調べてみた。二五編中、八編について原作が確認できた。「軍人の子」を含めた八編については細かい字句の訂正程度から大幅な書き換えまである。「軍人の子」以外にも大幅な書き換えがある。他の作品の書き換えについては別稿で論じる。

四 「満洲文庫」発禁問題を解く手がかり

「満洲文庫」の発禁については、諸説あり、その詳細はいまだ明らかにされていない。だが、「満洲文庫」の全容を探るためには、発禁問題は看過できない問題である。「軍人の子」は、その発禁問題解明の鍵となる作品である。ここでは、「軍人の子」を手がかりに、「満洲文庫」発禁問題を検証する。

（一）「満洲文庫」出版履歴

まず、「満洲文庫」の出版履歴を確認しておく。

「満洲文庫」全十四冊は一九三四（昭和九）年七月十四日から一九三五（昭和十）年七月二五日までの間に、隔月二冊ずつ、大連の東洋児童協会より刊行された。のち、一九三九（昭和十四）年二月、「東亜『新満洲文庫』と改名、一部装丁も改めて、東京の修文館書店より、全十二冊一セットで再版され、同年四月に「文部省認定図書」に指定される。さらに、同年六月、続編として残り二冊『カメラの満洲』（その一・その二）が出版され、全十四冊揃うことになる。つまり、「満洲文庫」と「東亜『新満洲文庫』」は、出版地、出版年は異なるが、内容は同じものである。（筆者は、「満洲文庫」十四冊のうち、十一冊について、対応する「東亜『新満洲文庫』」とつきあわせて、内容的に同じものであることを確認している。）

（二）発禁関連文献について

次に、「満洲文庫」発禁に関連する記述を確認しておく。

「満洲文庫」の発禁については諸説ある。石森の年譜の関連箇所（五編）、および発禁に言及されている文章（四編）を抜き出してみ

（一）発禁の記事のない年譜

- ① 「一九三二（昭和七）年 三五歳 大連民政局地方課学務係に勤務。『満洲文庫』十二冊を編集。（『石森延男略年譜』注記「年譜・著作目録の作成にあたりましては、船木枳郎氏の協力を得ました。」とある。三二二頁 石森延男児童文学全集第十五巻）学習研究社一九七一年 十一月 三一五頁）
- ② 「昭和七年（一九三二） 三十五歳 大連民政局地方課に視学として勤務。『満洲文庫』十二冊を編集。（八木橋雄次郎「石

森延男年譜」注記「この年譜は、八木橋雄次郎が、『石森延男児童文学全集』（学習研究社）第十五巻をもとにし、石森延男氏の校閲ならびに補筆を得て作製した。二九一頁」とある。
船木枳郎著『石森延男 人間愛とロマン』に所収 一九七四年十月 二八七頁）

（二）「満洲文庫」発禁説をとる年譜および記述

- ③ 「昭和七年（一九三二） 大連民政署地方課学務係に転勤、「満洲文庫」十二巻を編集したが、のちに憲兵隊の忌むところとなり、情報局を通じ、官報にて発行停止を公布される。」（「年譜」『石森延男先生の思い出』編集委員代表 喜田滝治郎 石森延男先生教育文学碑建設賛助会発行 一九六七年九月 二二・二一三頁）
- ④ 「石森氏の編集した『満洲文庫』全十二冊が、昭和七年に情報局を通じて、官報で発行停止を公布され、在庫品はもちろん図書館、書店、にあるものまでことごとく裁断されたという事件（後略）」（乙骨淑子「A特集V戦時下の児童文学―戦時下に活躍した作家たち 石森延男の場合」『日本児童文学』日本児童文学者協会編一九七一年十二月 四三頁）
- ⑤ 「昭和七年に延男は大連民政局地方課学務係に勤務し、各地の学校を視察する傍ら『満洲文庫』十二冊を編集。この本は関東軍の検閲に引っかかり官報で発禁が告示され、書店に配布されていたものも憲兵の手で裁断されました。」（船木枳郎『石森延男 人間愛とロマン』学習研究社 昭和四十九（一九七四）年十月 三七頁）
- ⑥ 「昭和七年（一九三二） 三十五歳 大連民政局地方課に視学として勤務。『満洲文庫』十二冊を編集したが、関東軍の検閲により発禁となる。」（「石森延男年譜」注記 本年譜は、石森

延男先生自筆による。五二三頁『石森延男国語教育選集第五卷』一九七八年九月 五一七頁)

- ⑦ 「昭和七年(一九三二) 三十五歳 『滿洲文庫』十二冊を編集したが、関東軍の検閲により発禁となり、本は憲兵によって破棄された。」(前川康男編「石森延男年譜」『日本児童文学大系 第二三巻 石森延男 山本有三 川端康成集』一九七七年一月 四九三頁)

- ⑧ 一九三三年、『滿洲文庫』一二冊を編集刊行したが関東軍はそのリベラリズムをとがめ発禁処分とする(栗原一登 『児童文学事典』日本児童文学学会編 東京書籍 一九八八年四月四五頁)

(3) 「東亜『新滿洲文庫』」発禁説

- ⑨ 「一九四二年(昭和十七年)『東亜 新滿洲文庫』発禁となる。」(新村徹『滿洲児童文学』について『近代文学における中国と日本』汲古書院 一九八六年一〇月 五三四頁)
- 「一九四二(昭和十七)年二月に日本少国民文化協会が発会をみる(六月「少国民文化」創刊)。同年一〇月に「少国民軍歌」が選定発表され、「進め少国民」などの少年軍歌が轟く中で、『新滿洲文庫』は発禁のうきめにあう。」(前掲書 五三九頁)

上記の年譜および記述を整理すると、「滿洲文庫」の発禁に関しては大きく分けると二説ある。一つは、「滿洲文庫」発禁説、もう一つは、「東亜『新滿洲文庫』」発禁説である。そして、大部分が「滿洲文庫」発禁説をとっている。

「滿洲文庫」の発禁処分については、河野孝之論文「発禁処分の行方―石森延男編『滿洲文庫』と『東亜『新滿洲文庫』』」¹⁰⁶に

綿密な検証がなされている。河野論文では、『滿洲文庫』発禁説は消える」が、発禁を指示した官報が見つからない以上、『東亜「新滿洲文庫」が実際に発禁処分にされたということは断定できず、留保すべき事項である」という結論に至っている。

(三) 発禁問題に関する検証

発禁処分は事実であるということを前提として、ここでは発禁処分になったのが、「滿洲文庫」か「東亜『新滿洲文庫』」かどうかについて検証する。結論からいえば、筆者は発禁処分になったのは、「東亜『新滿洲文庫』」であったと考えている。が、ここでは、論を進める便宜上、「滿洲文庫」という用語を使用する。発禁処分に関する検証は以下のとおりである。

「滿洲文庫」発禁説は六編あるが、いずれも内容的にはほぼ同じである。異なる点は「関東軍」か「憲兵」か。または「昭和七年」か「昭和八年」か、である。

これら「滿洲文庫」発禁説の基になったのは、③の一九六七年発行『石森延男先生の思い出』所収の「年譜」、及び同書に掲載された平方久直と石森延男の「滿洲文庫」発禁に関する文章(八五・八六頁)だと考えられる。この「年譜」の作成者の記名はないが、⑥の石森自筆の「年譜」とつきあわせると、「憲兵隊」と「関東軍」の違いはあるが、その他は同内容である。従って、作成者は編集委員代表の喜田滝治郎か、あるいは石森かであろう。どちらであっても石森が目を通して可能性が高い。ここでは、③の年譜の内容と平方・石森両氏の記述について検証する。

まず、上掲した③の年譜の文言を再度ここに引用し、疑問点三か所に傍線を付した。その箇所について検証する。

a 昭和七年（一九三二） 大連民政署地方課学務係に転勤、b
「満洲文庫」十二巻を編集したが、cのちに憲兵隊の忌むところとなり、情報局を通じ、官報にて発行停止を公布される。

「満洲文庫」の出版計画が持ち上がったのは、石森が視学となった昭和七（一九三二）年であると考えられる¹⁰⁷。そして、約二年の準備期間を経て、昭和九（一九三四）年七月に第一回配本を迎える。③の年譜にa「昭和七年」「満洲文庫」十二巻を編集」とあるのは、昭和七年に編集にかかったという意味にとることは可能である。

次に疑問となるのが、b「満洲文庫」十二巻」という文言である。

「満洲文庫」は隔月二冊配本で、全冊揃うと十四冊である。十二巻は「東亜『新満洲文庫』」で、しかも、十二冊一セットで一括販売されている。この点は三つ目の疑問点c「のちに憲兵隊の忌むところとなり、情報局を通じ、官報にて発行停止を公布される」とも関わるので、併せ検証する。この「のちに」がいつか。そのヒントは平方・石森の文章の中にある。平方の文章を要約すると、以下のよう内容になる。

平方が石森に最初にほめられた作品が「軍人の子」で、この作品は「満洲文庫」文学篇『満洲新童話集』に収められる。平方は一九三六（昭和十一）年¹⁰⁸、内地に帰り、一九三九（昭和十四）年、石森も文部省図書局図書監修官の任に就くため帰国する。その後、この「軍人の子」が、新潟の憲兵に問題視され、作者の平方、および編集者の石森が本部（東京）の憲兵隊に呼び出され責められたという。その時の様子を平方はこう記す。

とりしらべなどというなまやさしいものではなく、「バカヤロ——」からはじまったわけです。（中略）なにかいうということは、

抗弁する、反抗する、不とどき者なのです。（中略）軍人の子がさびしがるなんて、けしからん。というわけです。もつと、太い子どもらに軍人の家庭はたのしいものだ、ということを鼓吹すべきであるのに、もつてのほかだ。それでキサマ、子どもに軍人をきらわせる——つまり、反軍思想をいだいているのである、といったようなことを、どなるのでした。¹⁰⁹

石森は、平方のこの記述に応える形で、こう述べている。

あの「満洲文庫」十二冊は、ことごとく裁断するように官報で布告された。在庫品はもちろん、図書館、書店にあるものすべてだ。ぼくがとり調べを受けている憲兵隊の一室から中庭が見えた。サクラが白っぽく咲いていて、その下を乗馬憲兵が悠々遊んでいた。あの事件では、きみにすっかり迷惑をかけた。でもお互いよく忍耐したもんだ。¹¹⁰

これらの文面から、以下の点が確認できる。憲兵からの呼び出しは、「満洲文庫」に掲載された「軍人の子」が問題になったこと、それは平方・石森両氏が大連から帰国後だったこと、呼び出しは憲兵隊本部（東京）であったこと、「満洲文庫」十二冊の裁断が官報で布告されたということ等である。

「軍人の子」による呼び出しに関する平方の同内容の文言は、赤座憲久「石森延男の児童文学」¹¹¹にも記載されている。内容は次のとおりである。

（中略）『軍人の子』について、作者の平方久直（〇四〇九〇）は、「内容が反軍思想だとして、憲兵司令部（今の九段会館の場所）に連日呼びつけられ、取り調べを受けた。取り調べと言っ

ても、罵声を浴びせかけられただけであり、戦後、その近くを通るのさえ嫌だ」と生前筆者に語ったことがある。石森自身もそのシリーズの編著監修の責任者として、「反軍思想の持ち主」と憲兵に責められ、全巻すべてが発禁処分させられた。(三頁)

この文言には、具体的に東京の「憲兵司令部」に呼びつけられたという事実が語られている。ということは、「満洲文庫」(あるいは、「東亜『新満洲文庫』」)の発禁処分は、平方、石森両名帰国後の東京でのことだったことが確定する。

平方の帰国は、一九三六(昭和十一)年八月、石森の帰国は一九三九(昭和十四)年三月末。「東亜『新満洲文庫』」十二冊の出版が石森帰国の直前の二月で、しかも「石森延男先生編集」の良書として大々的に宣伝され、同年四月「文部省認定図書」になっている。平方・石森が憲兵隊本部に呼び出されたのは、その後のことである。とすると、b『満洲文庫』十二冊」とある記述は「東亜『新満洲文庫』」の間違いだと考えられる。理由は、一つは十二冊という冊数である。もう一つは、「満洲文庫」が大連で発禁処分になっていたら、発禁処分になった書籍が内地で大々的な宣伝のもとに再版されることは考えられないからである。「満洲文庫」十二冊という石森の記述は記憶違いであろう。この点、河野孝之論文でも同じような指摘がなされている。「満洲文庫」と「東亜『新満洲文庫』」とは同内容の書籍であるため、石森からすれば、どちらの呼び方にしても、同じ書籍を指しているであろう、というわけである。筆者も同意見である。

では、「東亜『新満洲文庫』」の発禁はいつのことか。⑨の新村徹論文では「一九四二(昭和十七)年」発禁となっている。新村徹論文によると、新村徹は、「満洲文庫」の存在すら知らず、ただ「東亜『新満洲文庫』」をめぐってのみで論を展開している。だが、内容に

関する指摘は生鵠を得ている。それは、「満洲文庫」の存在を知らなくとも、何ら問題のないことである。なぜなら、「満洲文庫」と「東亜『新満洲文庫』」とは、内容が全く同じものであるからだ。だが、発禁の時期についてはきちんと考察しなくてはならない。新村徹は、何の疑いもなく、発禁時期は昭和十七(一九四二)年だと断定している。だが、その根拠は一切明らかにされていない。それはなぜか、は疑問である。だが、昭和十七年発禁は、非常に可能性の高い年号であると筆者にも考えられる。それは、次の理由による。

上掲の石森の文面から、石森が憲兵隊に呼ばれたのは、「サクラ」が咲く春だと考えられる。「東亜『新満洲文庫』」が出版された同年六月に、「東亜『新満洲文庫』」続編として『カメラの満洲』(その一・その二)が出版される。だから、「東亜『新満洲文庫』」出版の昭和十四年ではない。さらに、「東亜『新満洲文庫』」の出版は好評を博し、「皇紀二千六百一年記念」として増刷されることになり、各冊十銭安い価格で記念特賣される。その申し込み締切が「昭和十六年九月三〇日」となっている。¹¹² そうすると、「サクラ」の咲く春に憲兵の呼び出しがあったことから、発禁は早くても翌年の昭和十七年以降のことである、と考えられる。すると、新村徹が言う「昭和十七(一九四二)年」説がかなり有力となる。

だが、筆者は昭和十六年から昭和十八年の官報を調べてみたが、発禁の記事は見つからなかった。布告は官報であるのか。または、官報と同じような公的文書が他にあるのだろうか。

最後に、作品「軍人の子」の書き換え問題が、「満洲文庫」発禁に関わっているかどうかを検証する必要がある。もし、この書き換えが関係したとするなら、発禁処分は一九四〇(昭和十五)年ということになる。結論からいえば、その可能性はおそらく無いだろう。「軍人の子」が「僕のお父さん」という作品名に変わった点、「僕」や母親の心情部分がかなり削除されている点、軍国主義的要素が追加さ

れている点を考えあわせると、書き換えは、検閲を逃れる方策であった可能性も考えられないこともない。だが、「満洲文庫」が、「ことごとく裁断するように官報で布告された。在庫品はもちろん、図書館、書店にあるものすべてだ」という憂き目にあう原因となった作品を、改編して作品集に収める危険を、平方はあえて冒すだろうか。それはあり得ないと筆者は考える。

以上、「満洲文庫」発禁の問題について検証してきた。筆者の結論は以下のとおりである。

「満洲文庫」は発禁処分になった（石森と平方の証言による）。ただし、発禁処分になったのは、「満洲文庫」では無く、「東亜『新満洲文庫』」である。こう断定する根拠は、「満洲文庫」が「東亜『新満洲文庫』」として再版された（一九三九年二月）こと。また、「皇紀二千六百一年記念」として増刷されることが決定したこと（その申し込み締切は一九四一年九月）。さらに、発禁処分の原因となった掲載作品の「軍人の子」の件で、当事者の平方と石森が取り調べを受けた時期は二人の帰国後で、場所は東京の憲兵隊本部だったということである。この件で筆者に残された仕事は、確証となる布告記事の載った「官報」を見つけることである。

五 まとめ

一編の作品の履歴が、時代を映し出すことがある。「軍人の子」（平方久直作）は、まさにそんな作品である。

「軍人の子」は、一九二八（昭和三）年に渡満した平方が、旅順の陸軍宿舎に住む一軍人家族の姿を、小学生である子どもの目を通して描いた作品である。作品では、父不在の寂しさ、死と隣あわせの父親の職業によってもたらされる家族の不安、母親の偽らざる感情に軍人になることをためらう少年の迷い、高位軍人である父の雄

姿に畏怖と誉れを感じる少年の心情が、日露戦跡である旅順の二〇三高地を舞台に描かれている。発表当時にあっても、軍国主義的な要素は十分にあるものの、人間感情の自然な発露も描き込まれていて、生きた人間が登場する。この「軍人の子」は、石森によって、在満日本人児童の課外読物「満洲文庫」文学篇『満洲新童話集』に収録される。「満洲文庫」は、のち、「東亜『新満洲文庫』」と書名を変えて、東京で出版される。

一九四〇（昭和十五）年八月、平方は、これまでの作品をまとめた童話集『王の家』を、東京で出版する。この「軍人の子」も収録されているが、作品名を「僕のお父さん」と改め、大幅な改編がなされている。その改編は、読者対象の違い、つまり「軍人の子」は在満日本人児童とその母親向けであつたが、「僕のお父さん」は内地の小学生向けである、というだけでなく、改編には、出版地・出版年の違い、社会情勢・戦局の違いをも反映している。

「僕のお父さん」では、主人公の「僕」や母親の心情表現をそぎ落とし、逆に、軍隊や軍人に対する大幅な加筆が見られ、より軍国主義的な作品となっている。それは、つまり、軍国化が加速的に進んだ時代の要求に沿った改編だったということである。

また、「軍人の子」は、内容が反軍思想だとして、憲兵隊によって作者の平方、編輯者の石森が取り調べを受け、その後、その作品を収録した「東亜『新満洲文庫』」が発禁処分を受けるに至った。最初に発表された当時にあっても、軍国的な要素を含んだ作品にも関わらず、当時は何ら問題にならず、その後、発禁処分を受けるという、これは、戦時体制における理不尽さを表しているといえよう。

第九章 長編小説『咲きだす少年群』

はじめに

本稿では、『咲きだす少年群』を取り上げる。それは、石森の初めての長編小説であること、満洲の少年群像を描いた作品であること、結果的には、石森の満洲生活の集大成的意味を持つ作品となったこと、さらに、この作品が内地で出版され新潮社大衆文芸賞を受賞した、いわゆる石森の出世作となったからである。

一 『咲きだす少年群』 先行文献

『咲きだす少年群』に関する先行文献は、現時点で十数点¹¹³確認できているが、その多くは、作品の誕生秘話や概要の紹介にとどまっている。その中で、『咲きだす少年群』を本格的に論じた論文の一つに、森かをる著『咲きだす少年群』と『コタンの口笛』における〈日本語〉・〈種族〉―石森延男の戦中と戦後の作品から―¹¹⁴がある。森は、『咲きだす少年群』を〈日本語〉を軸に読み解き、〈弱者〉に対する〈強者〉の支配の構図を認め、「満州人や蒙古人の固有の言語や文化としての民族性を抹消し、日本への同一化を求める同化主義に基づいている」と指摘している。また、川村湊は、「理念としての「五族協和」¹¹⁵という文章の中で、『咲きだす少年群』は、「人道主義的な、複数民族の共存共栄を求める言葉に満ちている」が、作品のなかには「観念的な「五族協和」の「民族的な平等」の「限界」が存在していると指摘している。

本稿では、『咲きだす少年群』の全容を紹介し、石森が『咲きだす

少年群』に込めた思いを解明したいと考えている。

二 『咲きだす少年群』の概要

(一) 誕生から出版まで

『咲きだす少年群』の原作は新聞小説である。「もんくーふおん」(挿画・三井正登)という題で、「満洲日日新聞」(夕刊)に四十回にわたり(一九三九年三月十四日～五月三日)連載された。「もんくーふおん」といふのは、「蒙古風」の中国語読みであつて、大陸の春の魁と呼ばれている砂塵を含んだ大風のことである。

この作品は、「満洲日日新聞」(一九三九年三月五日付)に掲載された予告記事「次の夕刊短篇^{ママ}小説 もんくーふおん」で、こう紹介されている。(予告記事に「短篇」とあるのは「長篇」の誤植だと思われる。)

(前略) 次回小説として本社は、満洲のみならず日本児童文藝界にその異色ある藝術味をもつて知られ、国定教科書の満洲紹介執筆者としても有名な、石森延男氏の斬新獨特なスタイルによる新短篇^{ママ}「もんくーふおん」を贈ることになりました。(中略) 満洲を背景とし満洲の子供を描いた作品として江湖の注目を惹くものと信じます。(後略)

石森は、この時すでに、日本児童文学界で児童文学作家として知られ、また、国定教科書の満洲関連の執筆者としてもよく知られていた。そして、この「もんくーふおん」は、「満洲を背景とし満洲の子供を描いた作品」として「江湖の注目を惹くものと信じます」と確信に満ちた言葉で予告されている。

同記事に掲載された「作者の言葉」で、石森はこう述べている。

長期建設といふ語をきくと子供を思ふ、この大きな仕事の成否の鍵は、今の子供らが握つてゐるからである、殊に満洲を故郷とする子供を思ふ―「もんくーふおん」はその世界を描かうとしたもので、とかく子供を主にした作品には、親や周囲の不運、貧困、争闘で暗くさせたがる、しかし「もんくーふおん」に登場する子供らは、大人の道具でないからスリルや興味に踊らせられない、自由で、静穏で、むしろ平凡であるかもしれない。

其れが満洲的なもの―自然、生きる、友情などに培はれ、驚き、考へ、あこがれていくのである、僕の文章中で句讀點、漢字、語法などで聊か讀みにくい所もあるが、これは子供心の動きに少しでも近く文學をもつていきたい念願からである。

「この大きな仕事」とは、満洲植民地化のことである。その「成否の鍵」を「握る」のは「今の子供ら」、つまり、「満洲を故郷とする子供」である。ここでいう「満洲を故郷とする子供」とは、主として在満日本人の子どもを指しているが、石森の意識はそれにとどまらず、満人(支那人)、ロシア人、蒙古人の子どもをも含んでいる。本来ならこれに朝鮮人が加わるのであるが、渡満当初から石森が、朝鮮人について語ることがほとんどなかった。大連に在住の朝鮮人が少なかったということが起因しているのであろうか。

石森は、この作品で表現上の試みを行っている。それは、「子供心の動きに少しでも近く文學をもつていきたい」という思いから、これまでの語法や文章規範をあえて逸脱したというのである。表現についての分析は別稿で行う。ただ、一つ顕著なのは、地の文の中に主人公である洋の思考が自在に混ざり、洋の視点から作品が展開し

ているということである。

もともと、この作品は、「満洲日日新聞社の横田氏から『満洲の子どもを主題としたものを書いてほしい。』と頼まれて、三週間ばかりの間に書きあげた」ものである(『咲きだす少年群』の「はしがき」という。在満十三年、満洲の日本の子どもたちの教育に深く関わり、児童文学を中心に満洲の文化活動に精力的に携わってきた石森にとって、我が意を得たりとばかり、一気呵成に書きあげた作品であるともいえる。

挿絵は、東京美術学校出身で、当時、在満画家として、満洲で教壇に立っていた三井正登である。三井は前述した予告記事の中の「挿絵について」で次のように述べている。

従来の子供を中心にした新聞雑誌挿絵を良く注意してゐたが、キマツタ童心、キマツタ素朴さで表現されてゐたそれも必要であらうが、今度児童文學の石森さんの相手を承つてから、俄然僕に燃えた情熱は、今までの形式でなく何か新しい行き方を求めたいことです、技法も形式を變へてみたい氣持ちであります、試作ですからどうなりますか、しかし作家の風貌は毀さない積りで、満洲が取材なので、ぼつく 風景スケッチを始めました。¹¹⁶

満洲在住者による満洲ものである。真の満洲の姿、そこに生きる子どもたちの姿を反映した作品として大いに期待されたことであろう。

石森は、連載途中、三月二九日付電報辭令で文部省図書局に図書監修官として内地への転勤命令が出たため大連を去る。

帰国した石森は、新聞連載の「もんくーふおん」に大幅に加筆し推敲した分厚い原稿の包みを、吉祥寺に住む西原慶一(香川師範学

校時代からの友人」のもとに持ち込む。その原稿を読んだ時の感動を、西原は、のち、次のように述べている。

（前略）まず異国情趣があった。しかし、それは、人間に、子どもの中に結ばれる深い友愛があった。（中略）烈しいエネルギーであった。愛の主題は、微粒にちりばめられた、ことばの総合であった。この構図、リズム、テンポ、色彩（ことに）、間、それは、何ものをも粉碎する原子力である。読者の血肉にくいいる精神力であった。わたしは読み、わたしは万雷にうたれた。¹¹⁷

西原はその原稿を持って近所に住む、かねてから親愛するドイツ文学者の高橋健二のもとを訪れる¹¹⁸。高橋は作品の印象を、のち、「その新鮮なのに私はまったく驚嘆した」¹¹⁹と述べている。高橋は、訳書の多くを新潮社から出していた縁で新潮社の編集者斎藤十ーに原稿を見せ、すぐに刊行が決定する¹²⁰。「もんくーふおん」という書名では、日本の子どもたちには分らないからということと、『咲きだす少年群』（装幀・挿画 三井正登 一九三九年八月）と改題して出版される。『咲きだす少年群』という一風変わった書名の意味は、『咲きだす少年群』の「はしがき」で、石森は次のように述べている。

（前略）日本の少年をとりまいて、蒙古やロシヤの少年、満洲人の子どもなどが、いつしよになつて、自然に憧憬し、なじみ、おそれ、疑ひ、争ひ、親しみあひ、思ひく の動き方をしてみせる。今や日本は、大陸に巨歩を印した。その足もとには、かうした見えない小さな花が咲きだしたのである。日本の子どもたちよ、萎むことなく豊かに伸びてくれ。躓くことなく、ま

つすぐに育つてくれ。この念願が、「咲きだす少年群」を書かせた。（後略）

日本の満洲植民地化が推し進められている中、「日本の少年をとりまいて」育つ各民族の子どもたち。かれらの姿を描いた作品であることから『咲きだす少年群』と名づけられたということである。この命名はおそらく石森自身によるものである。のち、「尾崎志郎さんが、『いい小説だ、文章の格調も高い。でもどうしてあんなにいい原題を避けたんだろう。』と、いぶかしんでいた」¹²¹という。

翌年二月、『咲きだす少年群』は第三回新潮社大衆文芸賞を受賞する。文部省推薦図書にも指定される。

筆者が確認したのは、「初版」「一九四〇年三月版」「一九四三年六月版」である¹²²。「初版」と「一九四〇年三月版」は版型（約二〇cm×十三cm）は同じで、初版の脱字が補足されている以外、頁数も内容も挿絵も同じである。「一九四三年六月版」は上記二冊よりやや小型（約十八cm×十三cm）で、頁数も内容も挿絵も同じ、奥書に「十刷」とあり、その出版数は三千部。出版統制が厳しくなっていく中、本作品は増版を重ね、出版数を伸ばしている。それはなぜか。その一因は、この作品が満洲を題材にした作品であったことと関連している。この点については後述する。

のち、『咲きだす少年群』は、一九七一年刊行の「石森延男児童文学全集」（第14巻）には、原題の「もんくーふおん」に戻し、「モンクーフオン」と片仮名表記に改めて収められている。

（二）戯曲化の経緯

『咲きだす少年群』は、栗原一登によって戯曲化されている。戯曲名は不明であるが、戯曲化の経緯について、栗原は次のように述

べている。(栗原一登著「もんくーふおん譚」を要約。括弧内は原文引用)

一九三九年に帰国した石森を役所に訪ねた栗原一登が、石森の机の上にあった「もんくーふおん」の新聞の切り抜きを借りて一読、「わたしは個性的な人物像、色彩、音の豊富さ、これは芝居になると思った」「どうにも上演したかったのは、わたし自身二年たらずであったが、大連の四季を経験したせいもあった。春の空を、どんよりと黄塵でおおう蒙古風、やがてはカラリと澄みきった青空をのぞかせる大陸性。その下に生きる多彩な人種。そして少年たちに芽ばえる人種を越えた友情―。そうしたものを舞台で語りたいかったのである」と述べている。台本にかかったころ、この作品は『咲きだす少年群』(一九三九年八月)として出版される。栗原は劇団を持っていなかったもので、子役は「子供街」(永井鱗太郎主宰)の劇団の子どもたちを借り、おとな役は当時の教え子である日大の芸術科の学生を使ったという。築地小劇場で数日公演。「しり上がり」に客席も埋まってきた。(中略)三段抜きでほめてくれた新聞もあった¹ たという。

この「もんくーふおん」は「咲き出す少年群」と題して、大阪でも上演されている。劇団ドオゲキ(安田利一脚色・演出)による公演で、一九三九(昭和十四)年十二月二四日、大阪中の島の朝日会館、公演日数は一日、公演回数¹²³は三回であった。

児童文学者中川正文は、大阪で観劇した時の印象を、「昭和十四、五年の秋ごろ」「ほぼ満席の劇場で、寒さにふるえながら、上原弘毅たちの演技を、じっと息をつめて凝視していた」、寒さを感じたのは、「芝居の間じゅう奈落の底から吹きあげてくるような、冷たい『モンクーフオン』のひびき」であったかもしれないと語っている。¹²⁴

三 『咲きだす少年群』の作品世界

(一) 作品構成・登場人物・テーマ

作品の章立ては、新聞小説「もんくーふおん」そのままである。単行本となった際に、各章に小見出しがつけられ、どの章にも加筆が見られるが、物語の展開は基本的には変わらない。植民地建設の拠点であった国際都市、大連に暮らす日本人の人間模様が、在満日本人の洋と麻子の姉弟を軸に描かれている(末尾資料 表1 『咲きだす少年群』構成表)、表2 「主な登場人物一覧表」参照)。作品は「起承転結」の四段構成である。「起」では、作品の登場人物たちが、それぞれの生活圏で登場し、「承」では、登場人物たち、それぞれの交流や生活面での変化が描かれる。「転」では、啓二中心に物語が展開し、「結」では、登場人物たちがそれぞれの道へと歩みだす。

「はしがき」によると、洋とその友人たちとの交流を通して描かれる民族を越えた友情が主テーマとなる。が、その他に、洋と麻子の姉弟愛、麻子を軸として描かれる女性の生き方・銃後の在り方、そして麻子の婚約者啓二の行動を通して、日本の満洲・支那大陸政策、「日支親善」が描かれている。

(二) 時代と舞台

作品の舞台は旧植民地満洲の大連である。作品で描かれる時代は、石森が暮らす大連の「今」である。その「今」とは、一九三七(昭和十二)年七月の盧溝橋事件によって、戦火は中国全土に拡大し、国内では「国家総動員法」が施行(一九三八年四月)され、国を挙げて戦時体制が強化され、やがて太平洋戦争(一九四一年十二月)へと突入する、そんな時代である。

では、作品では、そんな時代はどのように描かれ、大連の人々の暮らしはどのように描かれているか。

麻子の婚約者は一年前に戦死している。洋がラジオのスイッチをひねると、ラジオから「機関銃の音がとびだし」「ラッパがひびき」「わあ、わあ、ばんざあい、ばんざあい」という戦場の擬音が流れる(二二頁)。洋の担任南先生は内地の兄の出征の知らせを受けとる(一四二頁)。麻子が友人と街頭を散策している時、上空を爆撃機が通過していく(七五頁)。作品の中で、戦争の影はこのように描かれているが、そこには緊迫感はなく、登場人物の日常はむしろのどかである。麻子たちはデパートの食堂で紅茶を飲みながら語らい(五八―六九頁)、洋の父親は家にいる時は、四六時中謡を吟じ(一四頁)、南先生は趣味の昆虫採集にいそしみ(二三五頁)、日本人医師中田は霧の中のアカシヤの並木を馬車に乗って写生に出かける(一七八・一七九頁)。これは作者にとつて、戦争の影は日常の一コマにすぎなかったということであり、また、作者の意識は、植民地の日本人の暮らしを描くことに主眼が置かれていたということであろう。

(三) テーマその一―民族を越えた友情

(1) 洋と眞ちゃん

主人公は、日本人小学校五年生の洋である。作品では、洋の学校や家庭における生活を通して、大連に住む日本人少年たちの日常を描き、民族を越えた友情を描いている。作品には、洋の他に、日本人の眞ちゃん、蒙古人のチャクト、ロシア人のユリヒートとその妹ソニーニヤ、満人の志泰とその妹桂英らが登場する。彼らは各民族の一つの典型として描かれる。

冒頭に「ロング」を背にスケートリンクから帰る洋が登場する。大連の日本人の子どもの冬の遊び(スポーツ)はスケートで、「ロング」(スケート靴)は彼らの生活の豊かさを表している。帰り道、こ

れから滑りに行くという眞ちゃんに出くわした洋は、疲れているけれど、再びスケートリンクに戻る。この場面は次のように描かれている。

「僕、いまから、すべりにいくんだ。君、いらないか。」

洋は、すべててきたばかりで、疲れてゐた。しかし、ぐづくしてゐたら、なんだ、いらないのか、疲れたんだろ、なんだ弱蟲と、やられそうなので、

「よし、いかう。」

と、立ち上る(中略)

「人がゐなくて、ちやうどいゝや、洋君、競争やらう。」

挑戦してきたな、どうせすべりにきたんだ、今さらやらないなんかいふものかと洋は、

「やるとも。」

と元氣よく返事をした。

「このリンク、何回まはるかな、二回にしようか。」(中略)

それつぽちかと、だんく　せり上つていつて、七回まはるといふことになった。(中略)

洋はロングをはきながら、腹のすいてゐるのが氣になり、自分がいやにから元氣をだしたことがいさゝか悔いられてもきた。

「眞ちゃん、なにか喰べてきた。」

「あべ川、お母さんが、たべていけつて、きかないんだもの。すき腹に、冷えは毒だつてさ。」(後略)(七―九頁)

眞ちゃんも洋も在満の日本人少年である。眞ちゃんは単純で屈託なく、洋は負けん氣が強い。仲が良い一方で互いに張りあう少年心理が描かれている。眞ちゃんの父親は鉄道関係、洋の父親は道路敷設の仕事(十七頁)で、共に植民地建設に携わる。満洲での一つの

典型である日本人のインテリ家庭の子どもである。眞ちゃんの母親は、スケートに行く子どもに「すき腹に、冷えは毒だ」と、「あべ川」を無理やり食べさせる。内地の生活とは異なる大連の冬の厳しさを子どもにいかにも過ごさせるかは、在満日本人家庭の大きな関心事の一つでもあった、その一端が垣間見える。

洋にはしばしば優等生的言動が見られ、それが石森の少年読者に対するメッセージとなっている。殊に、それは言語の面で強調されている。洋たちが在満の日本人の子どもは「支那語」が話せなくても、生活には支障がない。そういう世界で暮らしている。チャクトもユリヒーも志泰も日本語を話す。作品の中で、志泰の母親が倒れ、洋がその事情を志泰の代わりに満人小学校へ知らせに行く場面がある。その洋に対し、満人の女の子が日本語で受け応える。その時、洋は「あんな小さな満人の女の子に負けたやうで」「くやしかった」「満洲に住んでゐて、満洲人と話ができないなんて、ほんたうに恥かしいことだ。ふだん支那語の時間に、支那語をばかにして、たゞ鸚鵡がへしに、口眞似してゐたことが、こんな恥をかくやうになつたんだ」(一一六頁)と自省する。ソーニヤが日本語の国語読本を上手に読んだ時も「あんな小さなソーニヤにひけをとつたやうな氣がした」(一五六頁)とある。満人の子もロシア人の子も日本語を話す。だが、在満の日本の子どもは日本語しか話せない。これら洋の思いは、在満の日本の子どもの「支那語」に対する姿勢を批判している。これは、石森の思いでもあったろう。また、満洲に住むからには、「支那語」を軽視してはいけないというメッセージでもあったろう。

(2) 蒙古人少年チャクト

洋と蒙古人少年チャクトの友情は、休み時間の雪投げで起こった出来事を通して描かれる。洋の組の者が二手に分かれて雪投げして

いる。それに後から加わろうとした洋は、どちらからも排斥される。癪にさわった洋は、両方を相手に闘うが、雪の中に押し倒され、みんなが洋の上に馬乗りになる。その悪ふざけの中心人物である腕白の玉田を押し倒して洋を助けたのがチャクトであった(二三八頁)。チャクトの父親は蒙疆政府の役人で、「チャクトは、父の望みにより、日本的な教育を受けたいといふので、この(日本人)小學校に編入し、今まで日本人と同じの生活^{ママ}をさせられてきたのである」(一六七頁)。作品では、いわゆる独立の志士を父に持つチャクトは、正義感の強い熱血漢として描かれる。また、体操の時間の騎馬戦で、相手に負けると、辺りかまわず「おんく泣きだ」す(一二四頁)単純で直情的な面を持つ。ほどなく、チャクトは蒙古の學校で日本語を教えるために大連を去ることになり、駅でクラスみんなの見送りを受け、別れの挨拶で「みなさんと、手を握つて、立ち上る時が、いよく來ました」(一七〇頁)と述べる。

ここで、当時の日本と蒙古との關係を押さえておこう。

満洲国樹立とともに、内蒙古東部の蒙旗地方も満洲国の支配下に入った。関東軍は内蒙古工作によって、内蒙古における支配を拡大し、さらに、中国西北への侵略を画策する。一九三九年九月、日本軍は内蒙古にあった三つの自治政府を統一し、「蒙古聯合自治政府」を樹立し、首都を張家口に置き、徳王を主席とする。蒙古の独立運動を支援するという形をとりながら、實際は、日本の傀儡政權を誕生させたのである。蒙疆政府は、内蒙古と山西省の北部を含む地域を統治した。満洲国では、日本語、満語(漢語)、モンゴル語が国語であると規定され、蒙古人にとっては、日本語とモンゴル語が国語と定められ、必修科目となっていたのである。¹²⁵

作品では、当時の日本と蒙古の關係がそのまま反映されている。ここで、描かれているチャクトは、日本の少年たちとともに生き生きと學校生活を送り、やがて父の元で蒙古の獨立のために働く蒙古

少年である。石森は、洋たちと同じ少年チャクトの姿と、蒙古人チャクトが背負う民族の社会的・政治的一面をも同時に描こうとした。そして、満洲における蒙古人の社会的・政治的一面とは、石森にとつては、日本の満洲植民地化が推し進めようとする「正義」に沿った道筋にほかならなかったというわけである。

(3) ロシヤ人少年ユリヒー

ユリヒーは白系ロシヤ人の少年で、一年生からこの組で学び、美しい日本語を話す(四九頁)。機敏で冷静沈着、温和な人物として描かれている。直情型のチャクトと冷静沈着なユリヒーの違いは、歴史の時間での発言にも表れる。南先生が、孤軍奮闘する「菊池武光」¹²⁶の愛馬が倒れた話をして、生徒に意見を求めた時、ユリヒーは自分ならひとまず退却して新しい馬と兜を用意して突撃すると答える(同)、チャクトは、兜なんかいらぬ、敵の良い馬をぶんどって乗ると答える(同)。

洋とユリヒーとの友情は主にロシヤ文化を通して語られる。雪投げ事件の放課後、ユリヒーが洋にロシヤ絵本を見せる。「どうせ日本の幼児繪本のやうなどぎついうすつぺらな漫畫が、滿載されてゐるのだらう」(五一頁)と思つていた洋は、表紙の立派さに驚き、「一頁大に描かれ」た「黒いインクの挿畫」の美しさにひかれ、「幸福な人」という話の内容にも興味を示す(五二頁)。「妹のソーニヤのだけど、君たちに見せようと思つて、持つてきたのさ」(五二頁)というユリヒーの台詞があるにしても、ユリヒーがわざわざ絵本を持つてきて洋たちに見せる設定はいささか奇異である。が、石森があえてロシヤ絵本を登場させたのは、ロシヤ文化の優れている点を示したかったからではないか。石森のロシヤ文化讃美は、洋と眞ちゃん、ユリヒーの家に招かれる場面でも見られる。室内のインテリア

の美しさ(一四七頁)、妹のソーニヤが「蓄音機をかけていつしよに唄つてゐる」(同)。サモワルが音をたて、紅茶にざらめ砂糖を入れる(一五〇頁)。元騎兵の父親は、油絵を描きコルネットを吹く。父親の吹くトロイカの曲に合わせ、母親とソーニヤが歌う。「ユリヒー君の家の人たちは、なぜこんなにみんないつしよになつて遊べるのだらうな」(二六一頁)と洋は羨ましく思う。ロシヤの文化的な生活様式に、文化的な趣味での一家団欒。そんなロシヤ人の生活スタイルを、洋の思いを通して、石森は讃美する。

ロシヤ文化に対する石森の思いについて、磯田一雄は次のように述べている。「風土や権力機構には巧みに適応しながらも、民族語や固有の生活様式や宗教的信仰をきちんと守つてたくましく生きていく。石森はそういうロシヤ人の生き方に尊敬の念を覚え」ていた¹²⁷。そして、在満の他の民族より「ロシヤ人」を重視する姿勢は「石森に限らず多くの日本人に共通した態度でもあつた」(同)とも述べている。

この後、ユリヒーの父親から日本の歌を所望された洋たちは、「愛国行進曲」¹²⁸を歌う。ユリヒーもソーニヤもそれに唱和し、歌いおわると、ユリヒーの両親が手をたいて喜ぶ(一六二・一六三頁)。この場面では、ロシヤと日本との友好が強調されている。

(4) 満人少年志泰

洋には、洋と同年齢の満人の友人志泰がいる。チャクトとユリヒーが洋の同級生であつたのに対して、志泰は満人小学校に通う。当時、初等教育は満人と日本人とは別々だった。満人小学校に通う志泰と洋がどういうきっかけで遊ぶようになったかは、作品では不明である。志泰は日本語を話し、妹の桂英は日本語がほとんど分からない。石森は、鶏や爆竹、土饅頭(墓)のような「支那」的な風物

の中で、志泰と洋の友情を描く。では、作品では志泰はどのように描かれているか。

「ほう ほう ほう ほう ほう。」

鶏を呼びながら、志泰君がやってきた。妹の桂英さんも、

「ほう ほう ほう。」

と呼んでゐる。

「志泰君、この鶏、君のところのかい。」

「こんなところにゐたのか。」

「今、どこかの大きな犬が、追つてきたわよ。」

「黒いんだろ。あれ、いつもうちの鶏を追ひかけたり、噛みついたりするんだよ。いつか、ひよこ食はれちやつた。」

「今も、石ぶつけてやつた。」

「さう、ありがと、桂英、お前、そつちから、追つておいで。」

「つかむのかい。」

「さう、つかんで、鳥屋の中に入れておかなくちや」(中略)

鶏がきよんとしたち止つてゐるところを、すばやく志泰君が、尻尾をおさへた。

「儼把這個拿回去。(お前、これをもつていきなさい。)」

桂英さんは、胸のあたりに鶏をしつかりだつこした。(中略)

「あんなに抱いてゐても、鶏は、とびだして逃げないかしら。」

「大丈夫、うちの鶏は、みんな桂英になれてゐるから。とても可愛がるから、僕らよりずつと、好かれてゐるんだよ。」(中略)

「卵どうするの、賣るの。」

「たいいてい賣るんだけど、今は、母が體が弱つてゐるから、卵をたべるの。こんどもつと卵をかへして、ふやさうと思つてゐるんだよ。」

「君のところぢや、お父さんがゐないから、みんな君が世話す

るんだろ。」

「いや、僕より桂英がやるのさ。僕、いゝものだしてみようか。」
といつて、志泰君は、ポケットから、爆竹をひっぱり出した。

「どうして、今ごろ持つてゐるの。」

「支那正月に、鳴らさうと思つたんだけど、母が寝てるから、やかましいと思つて、少しか鳴らさなかつたのさ。洋君にあげようか。」

「僕、もらふより、こゝで鳴らしてみないか。」

「ん、火をつけやう。」(中略)

志泰はマツチの火を、爆竹の口火にうつすと、それを宙に向つて投げた。(後略)(八七―九〇頁)

父不在の家庭で、志泰は幼い妹とわずかばかりの鶏を世話をし、卵を売る。生活力のある志泰の一面が描かれている。一方、志泰は、病気の母を気遣う心根の優しい少年として描かれている。その後、洋たちは、「土饅頭のお墓」のそばで遊ぶ。眞ちゃんが、魂なんてない、死んだら火葬されてそれでおしまいだと言いつつ、おもしろ半分は土饅頭に尻もちつくと、「眞ちゃん、雨が降ってくるよ」と言つて、志泰は「眞ちゃんの手をひっぱつて、お墓の上から、つれだしてしまふ」(一〇五頁)。これは、魂の存在を信じる志泰が、眞ちゃんの軽はずみな行動を優しく制止するためにとつた行動であつた。だが、石森の筆は、どちらかというと志泰の人物像よりも志泰たちの貧しく不幸な境遇を描くことに力点を置いてゐるように思える。志泰の父親は、志泰が小さい時に芝罘(チーフ)に行つたきり行方不明である。さらに、母親は脳溢血で亡くなり、その後、身寄りもない二人に、怪しげな満人が近づいてくる。

「志泰君、なんだか嬉しさうぢやないか。」

「だって、嬉しいことがあるんだもん。」

つひこのあいだ、母を失ってしまったて、たった兄妹二人になったのに、そんな嬉しいことなんかあるかしらと、洋は不審だった。

「僕も、桂英もこんど、よそのおぢさんの世話になることになったんだよ。」（中略）

「お金持でね、とても親切なんだよ。僕たちをつれていくんだつてさ。」（中略）

「（濟南にいつて）すきな學校に入れてやるつて。稼がせるやうなことはしないつて。」

「その人、前から知つてゐるの？」

「ん、ちつとも知らない人なんだけど。お金なんかくれるもんだから、桂英もすっかり、その人になつてね。」（中略）

「でも、僕ね、學校を卒業したら、もうその人の世話にならないつもりなんだよ。すぐ働くんだ。そしてそのお金で、世話になった金を返すつもりなんだ。それから、こんどは、お金をためて、あちこち旅をしてあるくんだ。」（中略）

「僕は、お父さんを探すんだよ。桂英と二人でね。」（中略）

「僕ね、こんな親切ないゝ人、王さんね、きつとお母さんの魂が、呼んでくれたのだと思ふんだよ。」

「魂が、かい」

「ん、僕と桂英のことを心配して、死んだから、誰かいゝ人に拾はれるやうにつて、祈つて死んだにちがひない。」（後略）

（一八八—一九六頁）

志泰は金持ち風の満人の甘言にすっかりだまされてしまう。石森の意図は、それだけ志泰が人を疑うことを知らない純真さを備えていたということであろう。その純真さは、その後の台詞「學校を卒

業したら、もうその人の世話にならないつもりなんだよ。すぐ働くんだ。世話になつた金を返すつもりなんだ」にも表れている。志泰は洋と同年齡である。世間知らずの危うさをまだ備えているということであろうが、志泰は心優しく純真だが、一方で父不在の家庭で母を支えて生きてきた。それを考えると、もっと世間の厳しさを知つていてもおかしくはない。しかし、石森の筆からは、強くたくましい志泰像は浮かび上つてこない。

志泰兄妹は麻子の婚約者啓二に救いだされ、麻子たちとともに、北京で暮らすことになる。志泰兄妹が魔の手から救い出され、麻子たちの庇護を受けるという結末は、読者にとっては救いではある。しかし、筆者はこの展開に甘さを感じる。不遇な満人の子が日本人の援助を受けるという展開は、これまで満洲を舞台にした作品に見られる一つのパターンでもある。満洲に生きる少年たちの人間模様を描こうとしたこの作品にも、そのパターンを指摘することができよう。

磯田氏は、「蒙古人」は「たくましく日本人のように働」き、「白露人」は「固有の文化を持ち自立して生きて」おり、「満洲人」は、「志泰兄妹のようにいたわり助けるべき存在」として描かれていると指摘している¹²⁹。これは当時の一般的な見方であつたと思われる。作品は少年たちの交わりを生き生きと描いており、その表現力は評価できる。しかし、人物造型は類型的であるといえる。

やがて、洋の友人たちはそれぞれの道に歩み出す。チャクトは父のもとで蒙古のために日本語を教え、ユリヒー一家は芝罘で喫茶店を開くために引越し、志泰兄妹は麻子たちと共に北京へと旅立つ。麻子たちを見送つた翌日、「大陸の春の魁」である「もんくーふおん」が吹き荒れる。洋は、この「もんくーふおん」に向かつてふんばり、「少年航空兵」になると決意する。当時の少年にとって、少年航空兵が憧れであつたという世相が反映されている。

ところで、この場面で、洋が突如、勇ましい軍国少年の一面を見せるが、新聞小説の「もんくーふおん」では、洋が風に向かって少年航空兵になろうと決心する件はない。『咲きだす少年群』で加筆されたのである。この点については後述する。

(四) テーマその二―麻子を通して語られる女性の生き方・銃後

この作品のもう一人の主人公は、洋の姉の麻子である。麻子は、一年前に婚約者が戦死、縁あって啓二とまもなく結婚することになっている。わずか一年の間のこのめまぐるしい境遇の変化は特異であるが、この麻子を通して語られるのは、女性の生き方、特に銃後の在り方である。

昔からの顔馴染で、定夫と同窓の啓二との結婚を決めたものの、麻子は戦死した定夫のことがまだふつきれないでいる。定夫は出征する前に麻子にこう言い残していた。

僕が戦死したなら、君は、何も獨身で暮らすなどといふことをしなくともいいのだ。新しい家庭を作るべきであり、よき妻となり、よき母となつて、よき子どもを育てあげることこそ、今の日本が求めてゐる若い女性の道なんだ。(二七頁)

だが、麻子は、理屈は理解できても、気持の上で納得できないでいた。周囲の者はみな麻子の新生活を奨励する。定夫の父親も、麻子の父親も、定夫の意志だと麻子に新しい結婚を勧める。

麻子の女学校時代からの友人である保子も麻子の選択を支持する。新聞で報じられた婚約者の戦死に「殉死のつもりで自殺」した女の人に、「感動」し、「偉い女の方だとおもった」(六五頁)と述べる麻子に、保子は次のように語る。

(前略) あんまり美しすぎると思ふわ。心の夫に對する愛情といふもの、純情といふもの、それは立派なものだけれど、自殺するといふことについては同意しかねるの。わたしは許嫁の女みんながみんな、戦死を知るたびに、自殺をしてみたならば、今のやうな場合、國家からみた場合、はたしてどんなものかしら。

かうした長い期間戦時體制に處さねばならない若い女性は、しのぶべからざる感情をある時には、きれいさっぱりとふりすてゝしまつて、そのかはり、新らしく生きねばならぬ道を發見して、ね、ひたむきにそれに向つてつきすゝむ、こんな大乗的な立場にたゝなくては、と思ふの。

どう、人情主義にほだされたり、温情主義の板ばさみになつたり、自由主義の捕虜になるよりは、單純な制限で、極く手近なところから歩き出す方が、人間らしいものが生れでてくるのかもしれない――(六五・六六頁)

保子の口を借りて、石森は銃後の若い女性の生き方を説く。石森は、婚約者の死に殉じることを否定し、「國家」的観点から見る必要を説く。「長い」「戦時體制」に生きる若い女性は、気持ちを切り替えて新しい道を見つかるべきだと説く。そして、「極く手近なところから歩き出す方が、人間らしいものが生れでてくるのかもしれない」と、現実生活に根ざす生き方を説く。「國家からみた場合」とあると、すぐに戦時中「産めよ増やせよ」という標語を想起させられるが、この標語が閣議決定され施策となるのは、一九四一年一月であつて、石森がこの作品を書いた頃にはまだなかった。石森が若い女性に向けて發したメッセージは、國家の担い手である国民という意味で、國家の未来を見据えた表現ではなかったか。彌生高女で教鞭を執る

石森にとって、麻子たちは、いわば石森の教え子と同じである。戦時体制下に生きる彼女らに向けて石森が発した、現実生活に根ざした生き方をしてほしいというメッセージであつたのではないだろうか。因みに、定夫の言葉も保子の言葉も、新聞小説の「もんくーふおん」には無く、『咲きだす少年群』で加筆された部分である。加筆については後述する。

もう一つ指摘できるのは、麻子の女学校時代の友人たちの交流を通して、石森は、当時としては新しい女性像を描いているという点である。

まず、麻子たちの互いに忌憚ない意見を述べ合う関係が指摘できる。さらに、友人たちが個性的である。

直枝は、母を早く失い、蒙疆政府の顧問をしていた父の身の回りの世話を一手に引き受けていたが、父が蒙疆へいつてしまうと、一人大連に残り、料理とロシヤ語を勉強する（六三頁）。保子は洋の担任南先生の妹で、女学校卒業後、三年間洋裁を習っていた（六七頁）が、兄の友人大久保に求婚されると、お互いを理解しあうために、しばらく大久保の経営する商会で働くことにする（二六九頁）。すみ子は、紐育の石油会社に勤める叔父から、万国博覧会に招かれ、近く渡米する行動的な女性である。そして「寫真でも映畫でも、もう、娯樂や趣味でやつてゐる時代ではない」（七八・七九頁）と言い、写真を研究し、将来女流映画監督を目指している。

作品では、自分の意見を持ち、国際感覚を身につけた女性たちが描かれている。「よき妻となり、よき母となつて、よき子どもを育てあげるこそこそ、今の日本が求めてゐる若い女性の道なんだ」（二七頁）と定夫の口を通して語られる女性の務めは揺るぎない前提としての限界はあるが、そこへ行くプロセスに、新しい女性観を見ることができ。これは、植民地大連が、国際都市的な要素を備えていることと関係するかもしれないが、これからの女性はどうあつてほ

しいという石森の若い女性たちへのメッセージではなからうか。

（五） テーマその三

―啓二を通して語られる日本の満洲・支那政策、「日支親善」

作品の後半は啓二を中心に物語が展開する。「この作品は小学校高学年の子どもたちが中心のようでありながら、（中略）大陸壮士的な『啓二』という人物が、事実上の主人公であるかのように見られる」¹³⁰と磯田一雄は評している。それくらい、後半は啓二が活躍する。

啓二を通して描かれるのは、自分から姉を奪う啓二への反発が義兄としての信頼へと変わる洋の心の動き、日本の満洲・支那政策、植民地における日本人の在り方、「日支親善」である。

まず、啓二の人物像を明らかにしておこう。

東京のU博物館（三〇頁）に勤め、ドルメン（石の家）の研究で認められていたその仕事を辞めて（五九頁）、目下、北京で働いている。最近、皮膚病の多い支那人たちを治してやりたいと、暇があれば外科医の仕事を見習っている（八二・八三頁）。習慣や風俗を覚えるために、支那人の家に住まわせてもらい、支那語も何とか使えるようになっていく。「定まった収入などはないが、あちこちに日本語を教へては、いくらかお金のはいること、餘分のお金があれば、貧しい支那の子どもたちに、メリケン粉を買つて與へてしまふこと、四五人の支那人が、物をもらはうとして、いつも後からついてくること、時には、街道で、神の恩恵を説いたりするので、信仰に目ざめた支那人が、ぞろぞろ集つてきたりするので、支那の政府から誤解をうけて壓迫されたり、又、日本人からも白眼視されたやうなこと」（八三頁）もあつたという。

麻子の友人たちは、啓二の行動をこう称賛する。

「ちよつとかはつた方ね。でも、そこまでぶちこまなくちや、親

善といふ道が、生れてこないと思ふわ」(八三頁)「教養はあるし、信念はあるし、民衆にくひこんでいつて、それをひきあげていく仕事、なみたいでいぢやないわ」(同)「日本のインテリたちが、今、足場を失つてゐるのは、大衆といふものに握手してないからだわ。啓二さんなんか勇敢で正しいわ」(八四頁)「文化普及の潜行運動を身をもつてやつてゐるわけね。たのしい方ね」(同)。

作品からは、安定した職を棄て、支那人の中に飛び込み、彼らの生活や意識を向上させるという己の信念に微塵の迷いも無く突き進む青年像が浮かんでくる。そして、その啓二の行動を作品の登場人物たちは一様に讃える。だが、この点について、筆者は疑問を感じる。啓二の姿は無謀で、非現実的である。筆者には、ここに石森の甘いヒューマニズムが表れているように思える。石森自身、啓二の姿がやや非現実的であるという思いもあったのか、麻子の友人に、「ちよつとかはつた方ね」(八三頁)と言わせている。それにもかかわらず、石森が啓二に多くを語らせ、活躍させているのはなぜか。それは、啓二が語る満洲・支那大陸に対する思いは、まさに、日本の満洲・支那政策の建前であり、理想でもあり、石森はそれを心から信じていたということではないだろうか。

では、啓二は満洲・支那大陸についてどう語っているのか。

啓二は、「日本は、これから支那大陸を足場にして、東亜を建て直さねばならない」(二〇六頁)と語り、「日本民族は、人體に於ける白血球のやうなもので(中略)世界中、たとへどこであらうと、化膿しさに腐るところがあつたならば、人類平和のために、聖戦をいとなまねばならぬ運命以上の運命を、負はされてゐるのだ」(二一八頁)と語る。これは、当時の、日本の中国侵略は「東亜を立て直すための「聖戦」であるという大義名分そのままである。

さらに啓二は次のように語る。

「支那人が、あんなに間違つた民族に陥つてしまつたことは、諸

外國から、叩きのめされてしまつたから、いはゞひねくれてしまつたんだ(中略)これを、もどほり、至純なすなほな民族性にとりもどすのは、一體、誰がやる(中略)日本人より他に誰もゐないぢやないか。」(二五四・二五五頁)「彼等の餓ゑてゐるものは、人類の愛情なんだ。(中略)今、支那人を何百人、何千人と失つて行かねばならぬのは、その大きな日本國の愛情の發現に他ならないのだ」(二五五頁)。啓二の口を通して語られる日本優位の考え方、そして、日本が中国大陸で繰り広げる戦争が、「愛情の發現」であるという身勝手な論理。この論理が、まさに中国侵略を正当化したのである。

「これからは日本は、東洋に於ける太陽になるんですね。(中略)そして温かい手で、東洋人の頭をなでてやるんです。この仕事は、兵隊さんを先發隊として、あとからつゞいていく日本人、みんなの仕事なんですよ、ね。愛情をふりまく武器は、たゞ一つ、それは日本語あるのみなんです」(二五六頁)と啓二は語る。これは、まさに、日本が中国の占領地で行つた「宣撫」の仕事と同じである。占領した地で、新たに建設し、教育を行い、日本文化への同化を図るのである。作品中で、啓二が日本語を教えることに使命感を抱く根拠がここで明らかになる。啓二は、支那人を、東洋を救う道は日本語による日本文化との同化が最善と考えていたということである。また、啓二は「いまに、東洋は、日本語を共通語にするやうにならう」(二〇八頁)と熱く語る。啓二の主張は、まさに、日本が、「大東亜共栄圏」の実現を建前に、中国、東南アジアの国々を侵略し、日の丸を強要し現地の子どもたちに皇民化教育を行い、日本文化への同化を図つた、その思想そのものである。そして当時は、東亜における日本語公用語の政策が唱えられていたのである。この作品で、石森は、啓二の口を借りて日本の満洲・支那政策を「分かり易く」かつ「正義」として語っているのである。

そして、石森は、日本の満洲植民地化及び中国侵略が遠大な計画

であることを説く。

啓二と洋の父親とがそれについて語る場面がある。

(啓二)「日本の子どもが、これからどのやうにして、大陸で育つか、大切なことだね。國土は日本ではないが、日本の心、日本人としての性格を持たせようとするんですからな、お父さん？」

(洋の父親)「その通りだ。自然環境によくあふやうにすることが第一だよ。それが、あわてて、短日月でやらうとしたら失敗する。自然力と人力とが、そんなに容易にくつつかるもんか。」(中略)

(啓二)「洋君の時代、またその子供の時代になつてみなければ、大陸進出の基礎は、固められないと思ふんです」

(洋の父親)「今の日本人は、その新秩序建設といふ大きな道を固める道路ローラーになつてんのさ。」(二二四頁)

日本人の心・性格を育みながら、満洲・支那の自然に馴染んで生きることができる、そんな日本人となること、それが、植民地に生きるということであり、それは一朝一夕でできるものではないと、石森は説く。日本人の心・性格を育みながら、満洲の自然に馴染んで生きること、これは、満洲政策の基本理念であつた。また、石森が、在満中、常に考え、自身の作品で訴えてきた、在満の日本の子どもたちに、いかに満洲に対する「郷土愛」を持たせることができるか、ということに通じる考え方であるともいえる。

一方、石森は、啓二の口を借りて、植民地や占領地での日本人の生活態度を批判している。

啓二は満洲・支那で暮らす日本人について次のように批判する。「日本人は、これから、どんな異境にでかけていつて、生活し

なければならぬと思ふんですが、(中略)日本生活様式を身のまはりに持つてこないで、安住できないやうでは、心細いことなんですよ」(二二二頁)と。このことは、麻子が「満洲で生れて、こゝで育つたものゝ、みんな日本式に育てられ、日本内地の生活とはすこしもちがつてゐなかつた。そのために満人の生活の仕方については、知ることもなく、また知らうともせずに、きてしまつた」(二三九頁)と反省することでも表れている。つまり、石森は、啓二の言葉や麻子の自省を通して、植民地で生きる日本人の生活態度を批判し、改める必要性を説いているのである。

この作品で描かれる「日支親善」の象徴は、志泰兄妹が啓二によつて魔の手から救いだされ、啓二と麻子とともに北京で暮らすという結末である。この点については、前述したように、不遇な満人の子どもが日本人の援助を受けて幸せになるという、満洲・支那大陸を舞台にした多くの作品に見られる「パターン」が当てはまる。

本項で、啓二の口を借りて語られる日本の満洲・支那政策の大部分は単行本化のおりの加筆部分である。石森には、内地の読者に満洲植民地化についての理念を正しく認識してほしいという思いがあつたのであろう。本作品は、類型的な「日支親善」を描き、日本の満洲・支那政策を説いている。その点について、読者への啓蒙という要素が多分に見られると指摘できる。

石森は文部省の役人になつたことで、新聞連載の「もんくーふおん」を中止する。が、構想としては、続きがあつた。「北京の風物詩も書きたかつたし、北京の姉をたずねていく洋らしい旅も書きたかつた。万里の長城を走りまわつたり、天壇や景山を登つたりする洋を書きたかつた。どぎもをぬかれるやうな中国文化の深さを書きたかつた。歴史的、地理的モンクーフオンに乗つて、大いなるゆめをいづく洋を書きたかつた。」と述べている。¹³¹

四 「もんくーふおん」と『咲きだす少年群』と「モンクーフオン」

満洲で新聞小説として発表された「もんくーふおん」（一九三九年三月―五月）は、その年の八月、東京で『咲きだす少年群』（新潮社）として出版され、のち、一九七一年刊行の「石森延男児童文学全集」（第14巻）に、原題に戻した片仮名書き「モンクーフオン」として収められている。

筆者は、この三種を比較することによって、作者の意識の変化や時代の流れの影響を読みとることができると考え、この三種を比較した。この「もんくーふおん」・『咲きだす少年群』・「モンクーフオン」比較表は、「資料編の〈資料19〉」に収めているので詳細についてはそちらを参照願いたい。

（一） 比較の概略

まず、この三種をつきあわせた結果の概略を述べる。

新聞小説「もんくーふおん」は、「満洲日日新聞」の夕刊に四〇回連載された。読者対象は在満の日本人及び青少年であったと推定される。一回分は約一七〇〇字程度で、毎回、三井正登の挿絵がついている。字数の制限があったからであろうか、表現は簡潔で、テンポよく物語が展開している。

単行本『咲きだす少年群』は、東京で出版された。読者対象は、満洲の日本人も含め、全国の大人・青少年と推定される。「もんくーふおん」を原形としているが、大幅に加筆され、本としての体裁を整え、「はしがき」と目次がついている。「はしがき」では、作品の成り立ちと作品に込めた作者の思いが述べられ、目次では、新聞発表の回ごとに新たにつけられた小見出しが挙げられている。三井正登の挿絵は全四〇回そのまま、掲載されている。物語の大筋は、「も

んくーふおん」と変わらないが、どの回にも大幅な加筆が見られる。台詞箇所の増加、人物や事件に関する詳細な描写の追加、満洲に関する内容の増加、時局及び銃後に関する内容の増加が特徴として挙げられ、その結果、作品全体に戦時色が強くなっている。『咲きだす少年群』は、「もんくーふおん」という骨組みに、様々な肉付けを行い、一つの完成作品に仕上げたものといえる。

「全集」に収められた「モンクーフオン」は、基本的には、『咲きだす少年群』の再録である。が、一部語句の書き換えや削除が見られる。語句の書き換えは、おおむね、より平易な表現に置き換えられている。これは、「全集」編集時の方針として、現代の読者に対する配慮だとも考えられる。「モンクーフオン」の挿絵が萩太郎¹³²の手になり、現代的な感じを受けることもその点を裏付けているといえる。だが、削除部分は、軍国主義思想に関わる表現が主である。この点については、どう考えるべきか。現代の読者に対する出版社側の配慮というよりも、作者石森自身が削除したとは考えられまいか。

ただ、「全集」には、著者の作品世界の軌跡を辿るという役割がある。作品再録には、発表されたままの当時の形で収めるべきだと筆者は考える。

（二）「もんくーふおん」から『咲きだす少年群』へ

次に、「もんくーふおん」と『咲きだす少年群』との相違を考察する。ただし、必要に応じて「モンクーフオン」との相違も交える。

（1） 読者対象の変化による改変

満洲の邦字新聞に掲載された「もんくーふおん」の読者は在満の

日本人及び青少年、それに対し、東京で出版された『咲きだす少年群』は、日本全国の大人及び青少年である。この読者対象の変化は、作品に影響しているか。明らかに影響しているといえるのは、1 満洲で日常的に使われていたと思われる用語が改められている点である。さらに、影響したであろうと考えられるのは、2 満洲に関する記述が増えた点である。2 については、読者対象の変化による影響ともとれる一方で、新聞小説では文字数の制限があつて書けなかった満洲の記述を加筆してより満洲色を出そうとしたとも考えられる。1 の例として、「もんくーふおん」の中で「めし進上」という言葉が使われている場面を二つ挙げる。

一つは、麻子が志泰兄妹を引きとることになり、彼等満人の生活について何も知らないことを自省する場面である。

満洲で生れてこゝで育つた自分であるのに、満人たちの暮しの仕方にてんで氣をつけてなかつた（中略）めし進上たちがどこでどんな生活をしてゐるかさへ知らないぢやないか。いざ自分の手で世話をひきうけて見ると何一つ自信のもてるものはないぢやないか。（「もんくーふおん」第三〇回）

もう一つは、洋が啓二と夕食後散歩に出た場面である。

めし進上が、連翹の咲いた枝をかつぎながら前をとほる。あんまりきれいなので、洋がみとれてゐるとめし進上はじろじろこつちを見て歩いてゐたがきふに走りだした。

（「もんくーふおん」第三五回）

「めし進上」とは、満人の子どもたちが、日本人の家に物乞いに

行つたときに発する言葉である。本来は「飯をやるう」という意味であるが、当時の中国で誤用されて一般に「ごはん、下さい」という意味に使われていた。ここで使われている「めし進上」とは物乞いをする満人の子どもだけを指しているのではなく、満人の子ども全体を指していると思われる。『咲きだす少年群』では、「満人の子ども」と書き換えられている。

2 の例としていくつか挙げる。

冒頭部分に満人小学校の描写が加筆されている。洋がスケートから帰宅途中、満人小学校でボールを蹴つて遊ぶ少年の中に志泰によく似た子を見つけ声をかける（三頁）。この場面の挿入は、のち、洋と志泰との友情を描く伏線となる。それと同時に、冒頭にこの場面が出てくることによって、物語の展開前に、読者はいち早く作品の舞台が満洲であることを理解する。続けて、次の回で、洋の父親の趣味である謡にからめて、満洲の「鏡泊湖の傳説」が持ちだされる（十四頁）。「満洲小學唱歌」も引用されている（二七八頁）。どの加筆も、作品に満洲色を醸し出す効果を有している。

（2）加筆によって強まった戦時色

1 日常生活の描写に見られる戦争用語

日常生活の描写に戦争用語への書き換えや加筆が見られ、これらの加筆によって、作品を戦時色の強いものに変えている。

いくつかの例を挙げる。

「飛行機」を「爆撃機」に書き換え（九・二二・七五頁）、雪投げで洋が奮起する場面では「なにくそ一機で十機に向かふんだ」（三六頁）という勇ましい表現が加筆されている。

洋と眞ちゃんが南先生の家に遊びに行った時、南先生の幼な子が

蜜柑を運んでくる。その場面は次のように描かれている。

(前略) 坊ちゃん、お盆に上海蜜柑を山もりにして、運んできた。疊に置かうとしたら、蜜柑の山がくづれて、ごろくところがおちた。

「やあ、ツイラクだ。ツイラクだ。」

坊ちゃん、お盆に残つてゐた蜜柑もみんな疊の上に落してしまつて喜んでゐた。

「おや、く、大變だ。さ、坊や、ツイラクした爆彈を拾つておくれ。」(中略)

「先生、蝶の標本を見せてくれませんか。」

「蝶か、いくらでも見せてあげる。まあ、たべたまへ、坊主の爆彈を。」(後略)(一三四・一三五頁)

傍線部分はすべて加筆である。「蜜柑」を「爆彈」にたとえ、ころげおちる様子を「ツイラク」、落ちた蜜柑を「ツイラクした爆彈」(一三五頁)と表現し、幼な子のあどけない様子を描写した一コマに、戦争用語による加筆が見られる。因みに、「モンクーフオン」では、「爆彈」という語は削除され、「ツイラクしたの」「ツイラクミカン」と置き換えられている。

2 「洋」像の変化

『咲きだす少年群』では、「洋」像に軍国少年的要素が加味されている。

洋と眞ちゃんが人間と植物について討論する場面がある。

「もんくーふおん」では、「人間は役にたつないんだろ。死んだら人間なんか植物よりだめなんだな」と眞ちゃんが言う。『咲きだす少年

群』では、その後に以下の部分が加筆されている。

(前略)

(洋) 「死ぬときが、眞ちゃん、人間と植物とちがふよ。」

(洋) 「植物は、自然に山で枯れて倒れるんだけど、人間は、死ぬときに、自分の心で死ぬことがあるんだよ。」

(洋) 「生きてゐようと思へば、生きていけるんだけど、死なねばならぬと覺悟するとあつさり死ぬのさ。人間の方がずつと偉いよ、植物よりも。」

(眞) 「戦争なんかでかい」

(洋) 「さうさ。自分の飛行機が火を吐いたときなんか、もうこれまでと決心して、敵地の飛行機めがけて、自爆するなんて、とても立派なんだぜ。」

『咲きだす少年群』一〇一・一〇二頁)

ここでは、戦闘時における決死の覚悟や敵機に向けての自爆を「人間の方がずつと偉いよ、植物よりも」「とても立派なんだぜ」と洋の口を通して讃え、結果的には、少年読者の心を戦死讃美へと啓蒙している。

「モンクーフオン」では、この決死の覚悟を讃える波線部分の文言は削除されている。明らかに軍国主義思想であるからであろう。

さらに、次の最後の場面の加筆によって、洋は、勇ましい軍国少年に変身する。

石森は満洲の自然をこよなく愛した。その中でも特に、もんくーふおん(蒙古風)に特別の感情を持っていた。それは、「春の魁」であるばかりか、その勇壮さにおいてもある。南先生の口を借りて石森はもんくーふおん(蒙古風)を次のように讃える。

蒙古から、シベリヤ、支那、満洲と大陸いっぱいを駆けまはり、それから、黄海、太平洋までのしていって、そこで大あばれにあげられて、アメリカあたりまで、一氣にひとまたぎだなんて、英雄的で、天才的で、すばらしいな（後略）

『咲きだす少年群』三二一頁）

これは、『咲きだす少年群』からの引用文であるが、新聞小説「もんくーふおん」にも、表現は多少異なるが同じ内容で書かれている。だが、『咲きだす少年群』ではさらに次のように加筆されている。

洋は、庭の杏の樹につかまつた。空をみると、うす紫の光で、地平線には、セピア色の濃い雲が、四方にたれてゐる。空の感じではなくて、深い深い穴の底に入つてゐて、上の方にあいてゐる口を下からのぞいてゐるやうだ。（中略）

砂まじりの風が、またやつてきた。洋は風を背にして、上を見ると、白い紙が、礫のやうにとばされていった。みんなこの風に負けてしまふんだな。（中略）洋は、もんくーふおんの吹いてくる方に、眞正面に向つて、角力をとるみたいに、がんばつた。僕を倒すなら倒してみろ。負けるもんか。（中略）飛行機なら、もんくーふおんに勝てる、勝てる。（中略）飛行機乗りになるんだ。（中略）少年航空兵になるんだ。荒鷲になるんだ。空の荒鷲、若い鷲、洋はかつとなつて、五體がぶるくんとした。（後略）

『咲きだす少年群』三二四頁）

もんくーふおんの烈しい風に向かう洋の昂揚した気持ち、武者ぶりが伝わるような文章である。この部分はすべて加筆である。もんくーふおんを実際に経験した石森ならではの迫力ある描写であるといえる。

だが、石森が洋を軍国少年に変えたのはなぜか。「少年航空兵」は当時の少年たちの憧れであったという世相を反映しているのは確かであろう。他に理由として考えられるのは、創作上の必要からかもしれない。チャクト、ユリヒールとともに、新しい門出を迎える。これまで庇護してくれた姉との別れによって、洋にも新たな出発が必要だと石森が考えたとも考えられる。しかしその新たな出発が「少年航空兵になるんだ」となったのはなぜか。加筆がいずれも戦時色を強めている点を考えると、石森が作品推敲時に時流を意識しなかつたとは言い難い。

因みに「モンクーフオン」でもほぼこのまま再録されている。

3 定夫の口を借りて語られる出征兵士の心構え

時局及び銃後に関する内容の増加は、戦死した定夫を巡る場面と啓二の文言に顕著である。啓二の口を借りて語られる日本の満洲・支那政策及び「日支親善」については、前述したので、ここでは、定夫の口を借りて語られる出征兵士の心構えについて考察する。

「もんくーふおん」では定夫の人物描写はほとんどない。ただ、「定夫さんが出征する時に自分に言つた僕が戦死したら君は何も僕のためにいつまでも獨身であることはない新しい家庭の良い妻よい母となることがんばらうの銃後の務めなんだ」（第三回）とあるだけである。だが、『咲きだす少年群』では、定夫自身の言葉として多くの紙数を割いている。そこで語られるのは、出征時の思いと麻子の行く末である。麻子の行く末については、銃後の女性の生き方として前述したので、ここでは、定夫の出征時の思いを取り上げる。

（前略）生れてから今まで、これが、ほんたうの試練だと思つたことも、この出征からみれば本物ではなかつた。生命を的に

しないやうな試練は偽物だ。(中略)自分といふものは、國といふ大きな力の一粒であるといふつながりを、悟らない以上、自分は空しいものだといふことを深く教へられた。いはば日本は個々の力が、かたまりかたまつて、國を擧げて大きな一つの力になつて、廻轉し初め、鳴り初め、燃え初めようとしてゐるんだ。個人が推進力となるのでもない、みんながみんな推進力、廻轉力となつて動くんだ。(後略)『咲きだす少年群』二二三頁)

「生命を的にしないやうな試練は偽物だ」という生命輕視の文言、「自分」は「國という大きな力の一粒である」という全体主義的な考え方。そして、定夫は、「皆に送られて出征するからには、再び歸らうとは思はない」(同)と出征時に麻子に思いを語っている。これは、当時求められた出征兵士の心構えとしての建前であつた。その内容が『咲きだす少年群』では加筆され、そして、「モンクーフォン」では、上記文章はそっくり削除されている点を考えると、時流に乗つた加筆であつたというほかあるまい。

なぜ、石森は、これら多くの加筆に戦時色を加味したのか。彌生高女の教え子たちが語る石森は、「人間の尊さ」を説いている。疑問を感じる。一つ、ヒントとなるのは、満洲から文部省に赴任した時に、記事となつた石森の談話(「内地の來ての感想」(「石森スクラップ53」)である。石森は、「事變下であるとは思へん程呑氣なやうです。もつと時局に對して身を以て感じ緊張して行ふところがあつてよいと思ひますね。」と述べている。満洲にあつて、「支那事變」後の緊迫感を強く感じていた石森は、満洲と内地(東京)との緊迫感の違いに、憤りを感じた。その思いが石森にこのような改変をさせたとはいえないだろうか。

五 新潮社大衆文芸賞受賞

『咲きだす少年群』は、出版(一九三九年八月)された翌年二月、第三回新潮社大衆文芸賞を受賞する。その受賞について述べる前に、まず、この作品が出版された前後の社会情勢を押さえておく。

(一)『咲きだす少年群』出版前後の社会情勢

―求められた満洲・支那大陸もの

一九三一(昭和六)年九月十八日夜、奉天駅北方の柳条湖で鐵道線路が爆破、この柳条湖事件を發端に、関東軍は満洲の主要都市を武力で制圧。これが満洲事變である。日本は以後、満洲支配を強める。翌一九三二(昭和七)年三月一日、満洲国建国。満洲国は、愛新覺羅溥儀が執政(翌年皇帝)となり、滿人による独立国家の形態を取つてはいたが、實際は日本の傀儡国家であつた。一九三二(昭和七)年十月、日本政府は、満洲集団移民の試験移民として、東北の在郷軍人五百名からなる「佳木斯屯墾第一大隊」を満洲に送る。そして、一九三六(昭和十一)年八月、国策として満洲開拓民の大量入植計画が策定され、一九三七年から本格的に入植がはじまる。一方、満洲国の国都を長春に定め、長春は新京と名を改め、国都建設が大規模に進められる。満洲植民地化が着実に進められていったのである。

一九三七(昭和十二)年七月七日、北京で起こつた盧溝橋事件によつて、日本は中国と全面戦争に突入(「支那事變」又は「日中戦争」とも呼ばれる)。一九三八(昭和十三)年四月、国内に国家総動員法が施行され、戦時体制が強化される。

児童文化の浄化という名目で推し進められてきた出版統制は、一九三八(昭和十三)年十月に内務省警保局図書課から出された「児童読物改善ニ関スル指示要綱」(以下「指示要綱」)によつてさらに

強化される。この「指示要綱」は、絵本・児童読物に関して活字の大きさから内容まで細かく規定したものであったが、この「指示要綱」の一項目に中国に関する内容がある。この内容が、満洲・支那大陸ものを大量に生み出すきっかけとなった。この条項は、「第八章」で挙げたので、ここでは省略する。

日中戦争の前夜及びその拡大によって、日本国内では満洲・支那大陸への関心が高まる。まず、教科書に石森の手になる満洲教材が何編か入っている。「大連だより」『小学国語読本 巻八』一九三六年、「あじあ」に乗りて『小学国語読本 巻十』一九三七年、「支那の印象」『小学国語読本 巻十二』一九三八年）である。

さらに子どもの本の世界に、満洲・支那を題材にした作品が求められた。そして、その作品は、満洲・支那の風物を紹介し、「日支ノ提携ヲ積極的ニ強調スル」（「指示事項」）ものだった。特に、「満洲建国十周年」（一九四二年三月）前後には、日本国内で満洲を題材とした作品が多数出版されている。例えば、石森編集の「東亜『新満洲文庫』全十四冊（修文館 一九三九年二月、うち「カメラの満洲」二冊は同年六月出版）、「講談社の絵本」（一三九巻）の『満洲見物』（¹³³一九四〇年三月）、島木健作著『満洲紀行』（創元社 一九四〇年四月）。坪田譲治の満洲紀行文が、中尾彰（独立美術協会所属）のスケッチ画とともに、東京朝日新聞（一九四二年三月二四日～四月三日）に連載されている。絵雑誌「コードモノクニ」では一九四二年九月号で、「満洲建国十周年記念」の特集を組んでいる。与田準一編集の「新日本幼年文庫」（帝国教育会出版部）には、石森の『マンシウ月ゴヨミ』（¹³⁴一九四一年八月）の他に、満洲児童文学作家の一人であった平方久直の『イカダノオウチ』（¹³⁵一九四二年五月）がある。

これまで満洲・支那大陸を題材にした作品の多くは、戦記か風物紹介的な作品であったが、『咲きだす少年群』は小説である。満洲在

住者による、満洲の「今」を生きる子どもたちを主人公にした小説はこれまで少なく、しかも都会的で異国情緒ある作品世界は、国内の読者にとって、現実味を帯び、かつ新鮮でもあったろう。

『咲きだす少年群』が出版され、増版を重ねた背景には、ちょうど、日本国内に、満洲・支那大陸に強い関心が寄せられ、満洲・支那大陸ものが求められた時期と重なっていたのである。

（二）『咲きだす少年群』第三回新潮社大衆文芸賞受賞

「新潮社文芸賞」とは、新潮社の創業四〇周年を記念して、一九三七（昭和十二）年に創設された賞である。前年一年間に発表された作品を対象として、第一部文芸賞、第二部大衆文芸賞の二部門を設定して授賞した。一九四四（昭和十九）年第七回で廃止されている。

第三回新潮社文芸賞の第一部文芸賞は、榊山潤の『歴史』、第二部大衆文芸賞は、石森の『咲きだす少年群』であった。一九四〇（昭和十五）年二月十日審査会、二月十三日発表、三月五日新潮社で表彰贈呈式が行われた。そして、同年「新潮」の四月号に受賞に関する記事が掲載された。

石森が受賞した第二部大衆文芸賞の前年の受賞作品は坪田譲治の『子供の四季』である。たまたま連続して児童文学作品が選ばれているが、この賞は、児童文学及び新潮社刊が授賞対象であるとは限らない。選考委員及び全七回の受賞者・受賞作品は「本章末尾資料（表3）」を参照願いたい。

石森は、「受賞感想」を次のように述べている。

数多い家庭讀物の中から（中略）選ばれて受賞になるなどは、ほんたうに思ひがけなかった。

どんなところが審査された方たちの意になつたのか、きくよしもないのでわからないが、(中略)一つには、大人も子供も一しよに読んでいけるといふ家庭的な明るい世界がもりこまれてゐること(中略)もう一つは、子供のてくる家庭讀物は、一般に、大人の生活空氣が暗くて、しめつばい。子供は(中略)點景として使用される。だから、子供がひしやげて歪められて、摩擦のやうにきな臭い。この作では、それを避けた。(中略)もう一つ(中略)、優等型、善良型の子供(中略)ではなくて、ごく平凡でゐながら一脈の眞實を追つかけてゐるやうなごくありふれた子供と大人とのマツチを、私は考へてゐた。その境地では、たとへ異民族同志でも、お互にとけあふにちがひないと信じた。(後略) ¹³⁶

家庭的な明るい世界をもちこみ、子どもは子どもとして描き、そして、ごく平凡だが真心のある子どもと大人との関わりを描いた。その点が認められたのだろうと石森は述べている。

確かに、『咲きだす少年群』の中には、民族を越えた少年たちの友情、嫁ぎゆく姉と弟の姉弟愛、嫁ぐ娘への母親の思い、義兄に対する微妙な少年心理、ロシヤ人家庭の文化的な団欒、若い女性たちの健全な結婚観等が描かれている。だが、一方で、舞台である植民地満洲の建前や啓蒙的内容が登場人物たちの口を通して語られてもいる。

では、審査員たちの評はどうであつたか。審査員は六名、長谷川伸、加藤武雄、白井喬二、大佛次郎、中村武羅夫、吉川英治である。彼らは、作品が授賞されるに至つた優れた点と同時に、多くの選者が時代の必要性を指摘している。

長谷川伸は、「純文學型」である『咲きだす少年群』が「大衆文學賞」に選ばれる点に不満を表明しながらも、「此の作品は満洲在住者

を讀者として書いたと思へる點に若干の不足を感じただけで、好い作品であることと、時の必要を含んでゐる」と述べ、授賞を認めている。

加藤武雄は、「(前略)まんべんなき注意を以て破綻なく作りあげられた作品である。流露の感に乏しいことを憾みとするが、しかし、空想では書けない眞實性が見られる。少年の生活に通じて、五族協和の理想を強調とした作として、時代的意義も豊富である。好個の大陸文學である此の篇は、亦、大衆文學としての一分野を拓いたものとして推賞に値するであらう。」と述べている。

「流露の感に乏しい」とは、どういうことか。奥深さが無いということであろうか。

白井喬二は次のように述べている。

(前略)一口にいへば心の淨化される小説だ。文學の系統から云えば、現實派とも浪漫派とも斷ずべからざる境地だが、中々暗示に富んでゐる。(中略)少年がよく書けてゐる。嚴密に云へば、或ひは少年の純正のみに偏してゐると云へるかも知れない。けれども、其れ故、淨化される。愉しい。そして家族も、街の人も、亦適齡期の少女群も、みな、蒙古風(モンクーフォン)のやうにふくよかに伸び伸びした文章で、一抹の哀感と詩情と明敏さとを漂はせて、濁りなく描かれてゐる。まことに心に素直な物を與へて呉れる小説だ。大陸への關心は、斯様な文學をもつともつと澤山咲き出させて貰ひたいと思ふ。健全で面白く、意義の深い小説はと問はれた時、この一冊を差加へる事を私は忘れないつもりだ。

「少年がよく書けてゐる」。他の登場人物も、「伸び伸びした文章で、一抹の哀感と詩情と明敏さとを漂はせて、濁りなく描かれてゐる」

る」と石森の文章力を褒め、「大陸への關心は、斯様な文學をもつともつと澤山咲き出させて貰ひたい」とこの作品が持つ啓蒙的要素についても触れている。

大佛次郎は、他の作品を推していたと述べた後、本作品は、「清純で美しい。文學的に云へば、もつと緊められていいと思ふが、滿洲國から、かう云ふ作物が現れたと云ふ事實は、明るい心持で歡迎出来ることである。」と述べ、「滿洲國」で生れた点を評価している。

中村武羅夫は、本作品は「本筋の大衆文學」では無い点を指摘した上で、「素朴純眞な文學味」を「考量して」「推薦することにした」と述べ、吉川英治は、「いろいろな意味に於て新潮賞にふさわしく、此一作を自分も推します。」と述べているが、「いろいろな意味に於て」という表現は、意味深長である。

以上、審査員評について要点をあげて紹介した。いずれも、本作品の文学性、「眞實性」を評価する一方で、中村武羅夫以外、みな、「少年の生活に通じて、五族協和の理想を強調とした作」「大陸への關心は、斯様な文學をもつともつと澤山咲き出させて貰ひたい」「滿洲國から、かう云ふ作物が現れた」等の「時代的意義」を授賞の理由に挙げている。

『咲きだす少年群』は、日中戦争の拡大とともに、滿洲・支那大陸への關心が高まり、子どもの本の世界に、滿洲・支那ものが求められていた中で出版された。この時流の後押しも受賞の大きな要因であつたろうと筆者は考えている。

最後に、「読売新聞」に掲載された坪田譲治の評を紹介する。

(前略) この本は新時代の家庭小説である。(中略) 新興滿洲にうつぼつたる日本人の意氣とでもいふものが溢れてゐる。實に新鮮な咲き出す少年群なのである。よくれたもの、疲れたものは一つもない。この時代、これを新潮賞とした審査員達の心持

も、右のやうな點からして、またむべなるかなと察しられた。

137

「新時代の家庭小説」「新興滿洲にうつぼつたる日本人の意氣とでもいふものが溢れてゐる」。坪田譲治のこの評は、まさに石森が作品で目指したものを言い当てている。石森は家庭的な温かさを描くと同時に、滿洲で暮らす人々の生活や思いを描き、そして、滿洲植民地化の「理念」を登場人物の口を借りて表現しようとしたのである。

おわりに

石森と同時期に滿洲の国語教育に携わった寺田喜治郎は、「滿州リンゴと石森くん」¹³⁸という文章で、石森を「滿州リンゴ」に譬えている。滿洲の氣候風土に目をつけた日本人が、苦勞の末、「内地産にまさるともおとらぬりっぱなリンゴ」の栽培に成功する。石森が滿洲で行ってきた文学活動の数々の苦勞、そして最後に、「滿洲日日新聞」に連載した「もんくーふおん」が、「内地に引き揚げるみやげになつて新潮賞を獲得、石森くんの輝かしい出世作になつた(中略)石森くんの滿州リンゴのような香氣ある少年文芸が大成していくのはそれからであつた」と述べている。

『咲きだす少年群』は、戦時中を背景にしているけれども、滿洲風物の中で描かれる登場人物たちの日常はのどかでゆったりしている。描かれた大連で暮らす人々の生活や思いが作品の中に異国情緒を醸し出している。それぞれの民族の少年たちの人物造型はやや類型的ではあるが、彼らの姿や友情が生き生きと描かれている。滿洲国建国の理念である「五族協和」を「民族を越えた友情」に具現化させた作品である。が、その主張は押しつけがましくない。それは、生活実感の伴った描写と少年たちの生き生きとした描写によって、

主張が作品の中に昇華されているからであろう。

本来、「五族協和」とは、満人、支那人（漢族）、朝鮮人、蒙古人、日本人を指していて、ロシア人は入ってはいない。しかし、石森の意識の中には、ロシア人も含まれていたと考えられる。石森は作品の中で、「五族」にとらわれることなく、同じ土地に暮らす異民族同士「協和」ということを訴えようとしたと考えられる。

一方で、この作品には、随所に日本の満洲・支那大陸政策がちりばめられている。また、若い女性たちの明るい友情を描きながら、銃後に生きる女性や出征する若者の思いや心構えを語っている。そういう点でこの作品には、日本の植民地政策や戦時色が色濃く反映されているともいえる。

『咲きだす少年群』は、結果的には、石森の在満期間の集大成的な意味合いを持った。石森は、内地に帰ってからも精力的に満洲を語り、満洲について書き、ずっと満洲にこだわりのつづけた。石森にとって在満十三年間の営みは、石森という人間を育て、教育者・文学者である石森を形作ったといえる。

表1 『咲きだす少年群』構成表

目次

1	鶴のやうに……………	三
2	えすドバルーンの月……………	四
3	白々と光るクリーク……………	六
4	靴下カパー……………	六
5	花火……………	七
6	牡丹露……………	七
7	食しくても……………	七
8	純情……………	八
9	一束の花……………	九
10	鏡……………	九
11	一房の爆竹……………	九
12	さあこい……………	九
13	現……………	一〇
14	あすなるの樹……………	一〇
15	お母さん……………	一〇
16	梨の花……………	一三
17	蜜柑……………	一三
18	モンシロテフ……………	一四
19	ヨシヲサン……………	一四
20	コルネット……………	一五
21	汽車の鐘……………	一五
22	義兄さん……………	一五
23	黄海越えて……………	一五
24	ジャックナイフ……………	一六
25	生けるしるし……………	一七
26	クイーザン……………	一七
27	オリオン……………	一七
28	獨樂……………	一七
29	生・甲斐……………	一七
30	鳩時計……………	一七
31	水音……………	一七
32	最後の頁……………	一七
33	赤ちゃん……………	一七
34	及第……………	一七
35	べんな蟻……………	一七
36	露天市場……………	一八
37	黒い猫……………	一八
38	くらげの風船……………	一八
39	もんくーふおん……………	一八
40	朝の雪……………	一八

起	1・2	スケートで遊ぶ洋と眞ちゃん
	3・4	家でくつろぐ洋と麻子・麻子の亡き婚約者定夫への思い
	5・7	洋の学校生活と同級生たち
	8・10	麻子と友人たちの語らい
	11・13	洋と志泰兄妹
承	14	洋の見た夢
	15	危篤となった志泰の母
	16	体操の時間での騎馬戦、志泰の母の死
	17・18	担任南先生宅訪問
	19・20	ユリヒー宅訪問
	21	チャクトとの別れ
	22	義兄となる啓二への洋の複雑な胸の内
	23	南先生の授業で語られる生物の生態と歴史観
転	24	志泰兄妹に甘言で近づく満人
	25・27	義兄となる啓二への親しみと啓二の人となり
	28・29	怪しげな満人から志泰兄妹を救う啓二
	30・31	志泰兄妹を巡る麻子の葛藤
	32・34	友人たちを招き、麻子の家で開かれたお茶の会
	35・36	志泰兄妹を探して
結	37・38	洋の日記
	39	(麻子の結婚式・ユリヒー一家の引越・麻子たちの出立)
	40	もんくーふおんに向かって少年飛行兵となろうという洋の決意からりと晴れた空の下で

表3

新潮社文芸賞（新潮社主催 第一回～第七回）選考委員・受賞作品一覧

参考文献

- ・『最新文学賞事典』日外アソシエーツ社編集・発行 一九八九・十
- ・ALL OF NAKI AWARD 35 「付録新潮社第二部受賞候補作一覧」

http://homepage1.nifty.com/naokiaward/kenkyu/furok_SHINCHOBUNGEI2award.htm

	第一部 文芸賞	第二部 大衆文芸賞
選考委員	加藤武雄・菊池寛・久保田万太郎・佐藤春夫・島崎藤村・杉山平助・徳田秋声・中村武羅夫・室生犀星・	大仏次郎・加藤武雄・菊池寛・白井喬二・中村武羅夫・長谷川伸・三上於菟吉・吉川英治
賞・賞金	賞金千円	賞金千円
第一回（昭13）	和田伝「沃土」	浜本浩「浅草の灯」
第二回（昭14）	伊藤永之介「鶯」	坪田譲治「子供の四季」
第三回（昭15）	榊山潤「歴史」	石森延男「咲きだす少年群」
第四回（昭16）	壺井栄「暦」	北条秀司「閣下」
第五回（昭17）	大鹿卓「渡良瀬川」	摂津茂和「三代目」 長谷川幸延「冠婚葬祭」
第六回（昭18）	森山啓「海の島」	添田知道「教育者」
第七回（昭19）	寺門秀雄「里恋ひ記」 森三千代「和泉式部」	牧野英二「突撃中隊の記録」

第十章 満洲児童文学の推移

一 石森延男と満洲児童文学

ここで、石森を中心として展開されてきた満洲児童文学の推移をまとめておきたいと思う。

石森は、『満洲文藝年鑑Ⅱ』（一九三八年十二月）¹³⁹掲載の「児童文学追想」で次のように述べている。

満洲地元文藝について、とやかくいはれてきたのはここ二三年のことである。満洲の特異性を文學的眞實によつてあらはさうとする傾向、努力、意志はもつと早くから叫ばれてよかつたものである。

満洲の児童文學についてかゝる主唱を初めたのは昭和三年頃からであるから既に十年ばかりの日時はたつてゐる。その間、社會的には目に見えぬ不斷の作品發表が行はれ、それぞれ、満洲在住の児童たちに、母親たちに影響を與へて來た。

もつと児童文化運動に對しては、一般的理解があつてもいいし、援助があつてもいいわけだ。

やゝもすると、大人どもの足の下にされたり、大人たちの考へ方に劣るものと早合點されてあとまはしにされがちである、満洲植民地では、ことにさうだ。（後略）（二三頁）

これは、一九三七（昭和十二）年前後の満洲における児童文化に對する石森の見解である。満洲文芸界で「満洲地元文藝」について提唱されだしたのは、ここ二、三年のことだが、児童文學では十年も前からこの問題に取り組んでおり、実績もあげてきた、と石森は述べる。これは、石森及び石森を中心とする児童文學グループが、

活動初期から、満洲を題材とした作品制作に取り組んできた活動内容を踏まえた主張である。そして、児童文化運動が現在においても、軽んじられる傾向にある現状を指摘し、批判している。

柳生昌勝は『満洲文藝年鑑Ⅲ』（一九三九年十一月）掲載の「児童文學の足跡」で、次のように述べている。

「新童話」から「童話作品」に進み、現在は「装」として結束をつづけてゐる石森延男氏を中心とする一群の作家たちは、過去數十年に渡つて、満洲に於ける児童文學を最も藝術的な匂ひを持たせようとし、より情操的な文學とし、何よりも從來の童話に巢喰ふところの、感傷、冒險、怪奇、滑稽、臭みのある道徳、と云ふやうな俗味を排斥して、あくまで、純眞無垢な子供たちの心性に、豊かな情操を與へようとする、新しい児童文學の確立と云ふ事に目ざしつゝあつたのである。

石森らの活動が満洲児童文學を牽引し、その内容は「藝術的」で「情操的」な「新しい児童文學」を目指したものであつたと、柳生昌勝は述べている。

『満洲年鑑』の児童文學に関する記事内容は、一九四〇（昭和十五年）年版（一九三九年十一月二五日發行）までは、石森延男を中心とする児童文學グループの動向が主流であつた。そして、當時の「主なる児童文學作家」として、下記作家たちが紹介されている。

石森延男、中溝新一、鹿島鳴秋、山田健二、久富榮次郎、高橋周子、政本勇、松尾茂、平方久直、入來すなほ、矢澤邦彦、小林正則、下津總子、柳生昌勝、佐々木悌三、山田耕子郎、黒澤忠次、赤塚末造、境野一之、杉野一湧、喜田瀧治郎、松田公子、松尾忠風

ここに挙げられた児童文学作家の多くは、石森を中心とする同人誌のメンバーである。その他に、鹿島鳴秋や山田耕子郎は、石森らとは別に活動していたと思われる。山田健二は、石森と親交があったものの、活動は独自に展開している。ここに挙っていないが、他に、竹田幸雄（大連在住）がいる。また、撫順では、一九二六年、いち早く「撫順童話協會」ができていた¹⁴⁰。さらに、石森らの活動と同時期に、撫順・奉天で活動していた寺田喜治郎を中心とするグループがある。そのグループは、「撫順國語夜話會」（のち、「奉撫國語夜話會」と改称）と称し、児童雑誌「コドモ滿洲」を刊行していた。彼らの活動については、次の「第IV部」で明らかにするが、同人に、合志光、窪田忠言、大倉茂、足立敏郎、龜川馨、松井秀吉等がいる。また、寺田は巡回話会を立案し、集まってきた若い教員たちと、毎土曜日、撫順の各採炭所のクラブを廻り、話会を開いたという¹⁴¹。

石森は、一九三九（昭和十四）年三月末に離滿する。

二 石森離滿後の状況

石森離滿後の滿洲児童文学活動はどうであったのか。石森、寺田が核になったようなグループの存在はなく、それぞれの都市で、小さな文化活動が展開されていたようである。

以下は『滿洲年鑑』（一九四一年版・一九四四年版）の記述を参考に各都市の動きをまとめたものである。

まず、関東州大連の児童文化の動きを追う。「滿洲国」建国後、「日滿議定書」により、関東州は「滿洲国」からの租借地となったが、依然として「日本の領土」に変わりなかった。日本の滿洲植民地化初期から、大連は滿洲の政治・文化の中心であり、それは児童文化

においても同じであった。「滿洲国」建国後も、その状況はほとんど変わらなかったが、徐々に、その中心は新京、奉天へと移っていく。

一九四〇年、大連で、鹿島佐太郎（鳴秋の本名）編『滿洲童話作品集』（第一集・滿洲日日新聞社刊）が刊行され、「在來の滿洲童話作家及び一般作家特に女流作家を加へて十數編の滿洲的カラーのある童話を蒐めた最初のもの」として滿洲内地とも好感を以て迎へられた」（一九四一年版）と評されている。「滿洲的カラー」のある童話を蒐めた最初のもの」とあるが、実際は、「滿洲文庫」文学篇『童話と童詩』『滿洲新童話集』（一九三九年五月）が、滿洲児童文学の「處女集」であることは、すでに本論文「第六章」で明らかにした。また、鹿島を中心に、毎日曜日を利用して「健全なる兒童娛樂の供與を目的とする『大連兒童藝能社』が設立」されたが、入場料その他の問題で一ヶ月程で活動しなくなるとある（一九四二年版）。「興亞奉公聯盟」の斡旋で統合された関東州の児童文化団体「關東州兒童文化協會」が、「事變記念日」に発会式を行い、十一月三日に開かれた「興亞祭」で、「第一回子供大會」を開催するとある（一九四二年版）。

新京では、滿洲新聞社が毎月「こども大會」を開催し、兒童放送文化面では、伊藤樹夫が新京中央劇場を主宰し、毎月末「本月の出來事」をラジオ放送している（一九四一年版）。かつて大連で石森とともに活躍した政本勇は、この頃は、「新京童話會」に所属し、放送にも関わっていたようである（一九四二年版）。

奉天には、「滿鉄こども會」や小学校教師を中心とした「奉天童話の會」がある（一九四一年版）。兒童放送文化面では、山田健二の「奉天トモダチ會」が「滿洲傳説アルバム」「滿洲補充讀本アルバム」を定期的に放送するようになった（一九四一年版）。また飯河知記が紙芝居や童話会を開いている（一九四一年版）。

牡丹江に児童文化研究会「華蘭會」ができ、「ハナラン」の四季発

行を試みているとあったが、のち、この研究会がどうなったのかは不明である（「一九四一年版」に記述）。

「満洲国」建国後の児童文学活動での大きな変化は、中国人児童文学作家の出現である。彼らは「満系」と呼ばれ、その「満系」童話作家に「慈燈」（『童話集』を刊行・刊行年不明）がおり、「未名」が童話風の作品を書いているとある（「一九四三年版」）。また、「満文」（中国語）の雑誌「満洲學堂」「技術青年」が刊行される。青少年向読物『滿文大日本戦争史』（樺本捨三著 古丁、爵青、大内隆雄三の共同翻訳）が刊行、同氏著「日本殉忠譜」（大東亞戦争の巻・聖明治の巻）が爵青、田瑯二の翻訳で「技術青年」に連載されたとある（「一九四四年版」）。

一九四五（昭和二〇）年八月十五日、日本敗戦。「満洲国」の解体、皇帝溥儀の退位によって、「満洲国」は消滅する。

「満洲国」の消滅とともに、日本人によって展開された植民地満洲における児童文学活動は終りを告げるのである。

第三部 注

- 1 石森延男「満洲児童文学回想」「児童文学研究二」 日本児童文学学会
一九七二年 三〇頁
- 2 「満洲児童文学回想」「児童文学研究二」一九七二年 三一頁
- 3 「郷土愛、生活愛、讀書愛 満洲中等學生讀物「帆」の發刊動機について」「満洲日日新聞」一九二六年十一月九日付
- 4 「南満洲教育會教科書編輯部一覽」(昭和七年版)
- 5 「満洲児童文学回想」「児童文学研究二」一九七二年 三〇頁
- 6 「愛兒と家庭」 大連獎學會 一九二六年十一月号
- 7 「南満洲教育會教科書編輯部一覽」(昭和七年版)
- 8 「石森延男氏論」「國語と教育」 推定一九三三年九月
- 9 ・松畑喜代子「石森先生と『ねじあやめの会』」「石森延男児童文学全集
第14卷のしおり」一九七一 六頁
- 10 ・八木橋雄次郎「一幅の軸」石森延男著『随想 わたしの落穂ひろい』
あらき書店 一九八三年九月一日 一九二・一九三頁
- 1 0 「石森延男氏論」 政本勇「彼と自分」「國語と教育」 推定一九三三年九月
十八・十九頁
- 1 1 「満日」一九三四年八月十四日付 家庭欄・學藝消息に「同人は大連
の瀧口(武士?)、河野、谷山(靜生?)、奉天の近藤(總草?)、新京
の矢津(矢澤邦彦の誤植か?)の五氏」とある。
- 1 2 「石森スクラップ 52」
- 1 3 石森延男「童話寸感」連載記事「満洲童話界に聴く」「満洲日日新聞」
一九三六年三月十二日付
- 1 4 「童話作品」昭和十一年集 小川未明序文・平澤文吉挿画・初山滋口
繪
- 1 5 「『子供のためのラヂオ・ドラマ研究會』石森延男氏中心に」「JQA
Kサンデーラヂオ」 推定一九三五年または一九三六年
- 1 6 「石森延男略年譜」現代國語教育論集成編集委員會編『現代國語教育
論集成 石森延男』 明治図書出版 一九九二年二月 五二三頁

- 1 7 喜田滝治郎編集委員代表 石森延男先生教育文学碑建設賛助会
一九六七年九月二〇日
- 1 8 「児童文學の足跡」『満洲文藝年鑑Ⅲ』満洲文話會一九三九年十一月
三五〜三七頁
- 1 9 「石森スクラップ 53」一九四〇年一月頃。
- 2 0 八木橋雄次郎「一幅の軸」石森延男著『随想 わたしの落穂ひろい』
あらき書店 一九八三年九月一日 一九四頁
- 2 1 「石森延男児童文学全集第14卷」「あとがき」三〇九頁
- 2 2 「郷土愛、生活愛、讀書愛 満洲中等學生讀物「帆」の發刊動機につ
いて」(上)」「満洲日日新聞」一九二六年十一月九日付
- 2 3 「郷土愛、生活愛、讀書愛 満洲中等學生讀物「帆」の發刊動機につ
いて」(中)」「満洲日日新聞」一九二六年十一月十日付
- 2 4 「郷土愛、生活愛、讀書愛 満洲中等學生讀物「帆」の發刊動機につ
いて」(下)」「満洲日日新聞」一九二六年十一月十一日付
- 2 5 「児童文学研究二」一九七二 三〇・三一頁
- 2 6 高橋庸男「屋島文学碑によせて」石森延男著『随想 続々 わたしの
落穂拾い』あらき書店 一九八四年十一月
- 2 7 「満洲児童文学回想」「児童文学研究二」一九七二年 三一頁
- 2 8 「満洲野(ますの)」一九二八年六月—一九二九年二月 全八冊。「帆」
の御大典記念増刊号として出された。
- 2 9 大阪国際児童文学館蔵
- 3 0 函館中央図書館蔵
- 3 1 「児童文学研究四」一九七五年
- 3 2 杉野一湧(すぎのいちゆう)「教科書編集部所属。画家、詩人。童心行
同人。
- 3 3 「『満洲国』文化細目」石森延男「まんちゅりあ」の項(斎藤秀昭記)
不二出版 二〇〇五年六月 三九頁
- 3 4 一九三〇年五月 第五卷第五号

3 5 磯田一雄『『のらくろ探検隊』と『スナガリーの朝』―戦時下の児童文
化における「満洲」―「成城文藝」第一六六号 一九九九年三月三〇
日 二四頁

3 6 『『満洲国』文化細目』石森延男「まんちゅりあ」の項（斎藤秀昭記）
不二出版 二〇〇五年六月 三九頁

3 7 一幕「協和」第五十二号

3 8 『谷廼草切』後序 一九三〇年二月 三六頁

3 9 藤女子大学紀要 第四四号 第Ⅱ部 平成十九年

4 0 『満洲年鑑 昭和八年版』による。

「新童話」の「郷土満洲」への改題について。

昭和八年版『満洲年鑑』に次のような記述がある。新童話は2月以降
その形態を變へ、上級用、中級用、下級用の三冊子に別れ、毎月三冊宛
刊行した。9月からは「郷土満洲」と改題し、内容を擴張し、理科、地
歴、等のものも入れることになった。而し、11月限りで廢刊されてしま
った。（五七五頁）しかし、一方、同年鑑の「日本側發行定期出版物一
覧表（時事を掲載せざるもの昭和7年10月末現在）の中にある「郷土満
洲」の創刊年月日は昭和4年6月12日とあり、改題の時期とは異なる
（五六七頁）。このことから、「新童話」を「郷土満洲」に合併させた可
能性も考えられる。

4 1 分冊刊行となった第二十一号（一九三二年二月 中級用）の裏表紙に
掲載された「清規」によると、「小學生ならば、その受持先生に、それ
以外の個人申込はすべて發行所宛に、申込むこと」とある。

4 2 『『新童話』のお友だち』として、本誌に四回（第十三・十四・十五・
十六号）にわたって、購読者の名前と居住都市名が掲載されている。

4 3 八木橋雄次郎「新童話」のころ」石森延男児童文学全集』第14巻の
しおり 一九七一年

4 4 「童話文学」三卷十一号 一九三〇年十一月

4 5 「満洲日日新聞」の子ども欄のこと 一九二八年十月と一九二九年一月
に実施

4 6 政本勇「石森延男氏論」「彼と自分」「國語と教育」推定一九三三年九
月 十八・十九頁

4 7 船木枳郎『石森延男 人間愛とロマン』学習研究社一九七四年十月一
日 三二頁

4 8 「石森延男解説」『日本児童文学大系 第二三卷 石森延男・山本有三・
川端康成集』ほるぷ出版 一九七七年十一月二〇日 四五・四五二頁

4 9 『日本児童文学大事典』第一卷 六二頁「石森延男」の項に「彼は二八
年 七月創刊の「童話文学」の購読者となり、三〇年二月、「一本道」
を寄稿、すぐに掲載された。」（西田良子著）とあるが、「童話文学」に
最初に掲載された石森作品は「夕あかり」（一九二九年十一月一日・二
卷十一号）である。

5 0 千葉省三「満洲野」のことなど」「石森延男児童文学全集第7巻のし
おり」学習研究社 一九七一年 四頁

5 1 大連奨學會 第五卷第七号

5 2 石森延男「このごろ」「石森スクラップ」57

5 3 「協和」一一九號 「コードモノページ」「まんしうぶんこ」紹介 一九
三四年九月一日 三二頁

5 4 石森自筆による年譜には次のようにある。「昭和七年（一九三二）三十
五歳 大連民政局地方課に視学として勤務。『満洲文庫』十二冊を編集
したが、関東軍の検閲により発禁となる。」「石森延男年譜」『石森延男
國語教育選集第五卷』光村図書 一九七八年九月十日

5 5 河野孝之「発禁処分の方行―石森延男編「満洲文庫」と東亜「新満洲
文庫」―」「児童文学研究」第三五号 二〇〇二年

5 6 「満洲文庫だより」『大平原だより』（一九三四年十一月）に挟み込ま
れていた印刷物による。

5 7 石森延男「満洲児童文学回想」「児童文学研究二」一九七二 三〇・三

一頁

- 58 河野孝之「発禁処分の方方」石森延男編「満洲文庫」と東亜「新満洲文庫」―「児童文学研究」第三五号 二〇〇二年 一〇二頁
- 59 北海道文学館所蔵『満洲文庫 カメラの満洲』に挟み込まれていた印刷物
- 60 磯田一雄他編『在満日本人用教科書集成第七巻満洲唱歌集』柏書房 二〇〇〇年十一月 柏書房
- 61 『満洲唱歌集 尋常小学第二学年用』一九三二・三初版・同八月再版
- 62 『詩歌人名事典新訂第二版』日外アソシエーツ 二〇〇二年七月 四二(三頁)を参考にした。
- 63 「ほんとに強い兵隊さん」『石森延男先生の思い出』石森延男先生教育文学碑建設賛助会発行 一九六七年九月 八四・八五頁
- 64 『満洲唱歌集 尋常小学第一学年用』一九二四年八月
- 65 『満洲唱歌集 尋常小学第三・四学年用』一九二六年三月
- 66 『満洲唱歌集』には「山田耕作」と表記されている。
- 67 喜多由浩『満洲唱歌よ、もう一度』産経新聞ニュースサービス 二〇〇三年十一月 八頁
- 68 『満洲地図』「あとがき」より。
- 69 大阪国際児童文学館編『日本児童文学大事典』大日本図書刊・他の作者についても同書を参考にした。
- 70 島木赤彦の「ぶたの子」は、一九二六(大正十五)年六月三日付け「満洲日日新聞」にも掲載されている。一部歌詞が違うので、紹介しておく。(傍線部が異なる部分)
- 満洲童謡 豚(島木赤彦)
- お日さまくるり／くるりくる く／東へのぼる
- 豚の子ころり／ころりころ く／ころげて遊ぶ
- ころげろころげろ／いくらころげても／野はひろい
- 71 喜多由浩『満洲唱歌よ、もう一度』産経新聞ニュースサービス 二〇〇

〇三年十一月 八頁

- 72 「竹売り」(境一之作)という作品がある。市井の竹売りの様子を描いた非常に短い作品である。文章からは竹売りが日本人か中国人かは分からないか、初出の「新童話」の挿絵から中国人だと判明した。
- 73 『石森延男先生の思い出』一九六二年九月 八五頁
- 74 『王の家』一九四〇年八月 文昭堂・十月の文部省の児童図書部門推薦図書に選ばれる。
- 75 『満蒙日本人紳士録』満洲日報社 一九二九年五月
- 76 北海道文学館所蔵「石森スクラップ57」の雑誌の切り抜き「石森延男氏論」より
- 77 石森延男「満洲児童文学回想」『児童文学研究二』一九七二 三二頁
- 78 『石森延男先生の思い出』一九六二年九月 八五頁
- 79 「在満日本人用教科書集成」一九二八初版・一九三〇年四版発行復刻 柏書房 二〇〇〇年十一月
- 80 一九三三年初版一九三四年四版発行 復刻国書刊行会 一九七九年九月
- 81 一九八二年の調査資料を参考 馬寅主編・君島久子鑑訳『概説中国の少数民族』三省堂 一九八七年
- 82 『近代文学における中国と日本』汲古書院 一九八六年一〇月
- 83 「五族協和」「王道楽土」とは、満洲国建国の理想に掲げられた言葉。五族とは、満洲に住む満族、漢民族、朝鮮族、蒙古族と日本人を指し、王道とは、儒家の理想とした政治思想で、仁徳を本とする政道を言う。
- 84 太平洋戦争研究会『図説 満洲帝国』河出書房新社一九九六年七月
- 85 平方久直『王の家』「作者のことば」文昭社一九四〇年八月 二七一頁
- 86 平方久直の帰国年については、従来一九三七・八年頃と考えられてきた。また、平方自身「昭和十三年、内地へ引きあげ「王の家」その他二三の童話集を出版しました」(平方久直著「かたつむりのつぶやき」(「日本児童文学」昭和三五年八・九号二七頁)と述べている。だが、『山の

子ども―平方久直遺稿集』（発行者平方政代 平成三年十月）に掲載の年譜によると、「一九三六（昭和一一）年三二歳八月、満州（中国東北部）より帰国」（二六一頁）とある。さらに、「童話時代」には一九三六年十一月に評論（「童話作家への提言」）が掲載されている。以上の二点から、筆者は「一九三六年帰国」と考える。

87 志垣寛主宰「教育の世紀」に掲載 一九二六年三月

88 「愛児と家庭」大連奨励學會 一九二六年五月創刊

89 「童話教育」一九三〇年十二月一日創刊 編輯発行人 檜葉勇 童話教育社

90 『王の家』「作者のことば」文昭堂 一九四〇年八月 二七二頁

91 「かたつむりのつぶやき」『日本児童文学』一九六〇年八月

92 『王の家』前書き 石森延男著 一頁

93 『王の家』前書き 一頁

94 『王の家』前書き 二頁

95 『王の家』「作者のことば」二七二・二七三頁

96 「石森延男氏論」『石森スクラップ 57』推定一九三三年

97 「風と裸」「同人消息」第三十号 一九三九年六月

98 『王の家』「作者のことば」二七三頁

99 『石森延男先生の思い出』編集委員代表 喜田滝治郎 石森延男先生教育文学碑建設賛助会発行 一九六七年九月 八五頁

100 『石森延男先生の思い出』 八五頁

101 『近代文学における中国と日本』汲古書院一九八六年一〇月

102 滑川道夫『日本児童文学の軌跡』一九八八年九月 九六頁

103 滑川道夫『日本児童文学の軌跡』一九八八年九月 一〇一頁

104 『王の家』「作者のことば」二七三頁

105 相川美恵子『児童読物の軌跡―戦争と子どもをつないだ表現』龍谷叢書 25 二〇一二年八月二五日 四五・四六頁

106 「児童文学研究」第三五号 二〇〇二年一〇月 一〇四―九三頁

107 北海道文学館所蔵「石森スクラップ」の中の印刷物『満洲文庫』終刊にあたって（昭和一〇年八月記）に次のような文面がある。「満洲文庫」がいよいよ終刊になりました。これが生れる話のあったのは三年前でした。（後略）この文面から、昭和七年に出版計画があったことが分かる。また、昭和七年は、石森が視学になった年である。

108 平方の帰国年については、『山の子ども―平方久直遺稿集』（発行者平方政代 平成三年十月）掲載の年譜に基づき、一九三六年とした。

109 『石森延男先生の思い出』 八六頁

110 『石森延男先生の思い出』 八六頁

111 「児童文学論叢」第七号 日本児童文学学会中部支部 二〇〇一年十月 三頁 この資料は、柴村紀代氏よりご提供いただきました。この場を借りてお礼申し上げます。

112 大阪国際児童文学館の「東亜『新満洲文庫』『生きようとする姿』（其の二）には黄色い帯がついている。その帯には、「皇紀二千六百年記念」と書かれ、増刷で記念特賣であること。申込締切は「昭和十六年三月三十一日」とある上に傍線を引いて、その横に「昭和十六年九月三日」と印字してある。発行年は一九三九（昭和十四）年二月二〇日である。

113 序章末尾資料 満洲児童文学関係 先行文献一覧を参照願いたい

114 「名古屋近代文学研究会」第十五号 一九九七年十二月二〇日

115 『文学から見る「満洲」「五族協和」の夢と現実』吉川弘文館 一九九八年十二月一日

116 「次の夕刊短篇」小説「挿繪について」「満洲日日新聞」一九三九年三月五日付

117 西原慶一「石森児童文学のいかにすぐれた二面性」「石森延男児童文学全集」第十二巻しおり 学習研究社 一九七一年十二月一日 二頁

118 高橋によると、西原と石森両名の訪問を受けたとあるが、西原の記述

によると、西原が石森から預かった原稿を高橋の元に持ちこむとある。

高橋健二著「石森延男さんのこと」・西原慶一「石森児童文学のいかにすぎれた二面性」『石森延男児童文学全集第十二巻しおり』 学習研究社 一九七一年十二月 二・三頁

高橋健二著「石森延男さんのこと」『石森延男児童文学全集第十二巻しおり』 学習研究社 一九七一年十二月 三頁

高橋健二著「石森延男さんのこと」『石森延男児童文学全集第十二巻しおり』 学習研究社 一九七一年十二月 四頁

栗原一登著「もんくーふおん譚」『石森延男児童文学全集』第十四巻のしおり学習研究社 一九七一年十二月 一・二頁

○「初版本」一九三九（昭和十四）年八月二十六日発行 『咲きだす少年群』装幀・挿畫 三井正登 新潮社 縦十九・五cm 横十三・二cm 背幅二・一cm 扉には『咲きだす少年群—もんくーふおん—』と表示 定價老圓四拾錢 郵送料拾錢（外地定價老圓五拾四錢）

○「一九四〇年三月版」一九四〇（昭和十五）年三月一日 十八版 縦十九・五cm 横十三・〇cm 背幅二・五cm 定價一圓四拾錢 郵送料拾錢（外地定價老圓五拾四錢）

○「一九四三年六月版」一九四三（昭和十八）年六月十日 十刷（三千部）縦十八・一cm 横十三・〇cm 背幅一・五cm 定價老圓四拾錢 郵送料拾五錢

土田知博「一九三九年度關西新劇運動の一般回顧」『演劇雜誌』第十三輯 演劇雜誌社 昭和十五年三月二十八日発行 所収三五三頁

「ひとつの邂逅」『石森延男児童文学全集第七巻しおり』 学習研究社 一九七一年

宝鉄梅「蒙疆政權樹立下の対モンゴル人日本語教育について」現代社会文化研究No.31 二〇〇四年十一月

南北朝時代の武将

磯田一雄著『のらくろ探検隊』と『スングリーの朝』—戦時下の児童文化における「満洲」—「成城文藝」第一六六号 一九九九年三月三〇日 二四頁

森川幸雄作詩・瀬戸口藤吉作曲 一九三七（昭和十二）年、「支那事变」勃発後、内閣府が国威高揚の目的で、歌詞を公募して作られた。磯田一雄著『のらくろ探検隊』と『スングリーの朝』—戦時下の児童文化における「満洲」—「成城文藝」第一六六号 一九九九年三月三〇日 十七頁

磯田一雄著『のらくろ探検隊』と『スングリーの朝』—戦時下の児童文化における「満洲」—「成城文藝」第一六六号 一九九九年三月三〇日 十七頁

『石森延男児童文学全集』第14巻 石森記「あとがき」一九七一年十二月 三〇九・三一〇頁

一九一五—二〇〇九。愛知県に生まれる。東京美術学校（現・東京藝大）油画科卒業。この年、新制作協会展新作家賞受賞。一九四七年、新制作協会会員となる。参考 日動画廊のホームページ

『満洲月ゴヨミ』石森延男文・高橋庸男絵

『イカダノウチ』平方久直文・斎藤長三絵

「新潮」第三十七年第四號（通卷四百二十五號）八八頁

坪田譲治「新潮賞・石森延男氏の『咲きだす少年群』」『読売新聞』一九四〇年二月十六日付

「石森延男児童文学全集第十四巻しおり」学習研究社 一九七一年

満洲文話會編『満洲文藝年鑑Ⅱ』（昭和十三年版）

一九二六（大正十五）年八月、樫葉勇が撫順を訪れたのをきっかけに、各々童話を愛好していた者たちが会を設立。日本童話協會編「童話研究」第七巻第六號 五二頁

『満洲忘じがたし』満洲教育専門学校同窓会・陵南会一九七二年十二月

磯田一雄著『のらくろ探検隊』と『スングリーの朝』—戦時下の児童文化における「満洲」—「成城文藝」第一六六号 一九九九年三月三〇日 十七頁

磯田一雄著『のらくろ探検隊』と『スングリーの朝』—戦時下の児童文化における「満洲」—「成城文藝」第一六六号 一九九九年三月三〇日 十七頁

磯田一雄著『のらくろ探検隊』と『スングリーの朝』—戦時下の児童文化における「満洲」—「成城文藝」第一六六号 一九九九年三月三〇日 十七頁

磯田一雄著『のらくろ探検隊』と『スングリーの朝』—戦時下の児童文化における「満洲」—「成城文藝」第一六六号 一九九九年三月三〇日 十七頁

磯田一雄著『のらくろ探検隊』と『スングリーの朝』—戦時下の児童文化における「満洲」—「成城文藝」第一六六号 一九九九年三月三〇日 十七頁

磯田一雄著『のらくろ探検隊』と『スングリーの朝』—戦時下の児童文化における「満洲」—「成城文藝」第一六六号 一九九九年三月三〇日 十七頁

磯田一雄著『のらくろ探検隊』と『スングリーの朝』—戦時下の児童文化における「満洲」—「成城文藝」第一六六号 一九九九年三月三〇日 十七頁

磯田一雄著『のらくろ探検隊』と『スングリーの朝』—戦時下の児童文化における「満洲」—「成城文藝」第一六六号 一九九九年三月三〇日 十七頁

磯田一雄著『のらくろ探検隊』と『スングリーの朝』—戦時下の児童文化における「満洲」—「成城文藝」第一六六号 一九九九年三月三〇日 十七頁

第Ⅳ部

寺田喜治郎と児童雑誌「コドモ満洲」

はじめに

石森延男（以下「石森」）を中心とした児童文学活動が主に関東州大連での活動であったのに対し、鉄道附属地である撫順を中心とした児童文学活動が、石森らの活動と同時期にあった。ここでは、撫順で展開された、寺田喜治郎（以下「寺田」）を中心とした児童文学活動を明らかにする。

石森は一九三〇年五月、大連で童話同人誌「新童話」を発刊した。その約一年後、一九三一年九月に撫順で児童雑誌「コドモ満洲」が

発刊されている。一年の差はあってもほぼ同時期に在満の日本人児童向けに二つの児童雑誌が刊行されているのである。この二つの児童雑誌は、ともに在満日本人児童を対象とし、小学校教師を中心とした国語教育と深く関わる文学活動でありながら、趣を異にしている。

柴村紀代著「児童雑誌『コドモ満洲』の概要と特徴」¹は、この児童雑誌の概要と特徴を論じ、さらに撫順における児童文学活動の一端を初めて紹介した貴重な研究である。柴村論文では、「新童話」と「コドモ満洲」との相違を次のように分析している。「新童話」では、満洲の地に根ざした創作を目指したのに対し、「コドモ満洲」では、掲載作品の多くが内地の児童雑誌からの転載であり、それは国語の補充教材としての利用を念頭に、在満の子どもたちに日本の優れた作品を与えようとしている。さらに、この二雑誌の相違は、石森と寺田両名の資質の違い、つまり、ともに教育者であるけれど、童話作家としての石森と、ジャーナリズム的な側面を持つ寺田の違いに負うところが大きいとも述べている。柴村論文の指摘に筆者も異論はない。ただ、次に検討すべきは、関東都督府の行政下にあった関東州と満鉄経営の鉄道附属地という行政面や居住区の違いがこれら二雑誌の特徴に影響を与えているかどうかという点である。筆者は、寺田らの文学活動を、満洲におけるもう一つの児童文学活動だと位置づけており、この点も含め、寺田らの活動内容を明らかにする必要があると考えている。しかし、そのためには、多くの資料の分析と調査を必要とする。いずれ、その作業にも着手するつもりであるが、本稿では、「コドモ満洲」の主幹であった寺田の満洲における活動の一端を明らかにし、「コドモ満洲」に関して、柴村論文以後新たに見つかった資料を加えて、「コドモ満洲」の概要と内容を論じる。また、資料として、日本で確認できた「コドモ満洲」の細目を提示する（「資料編の〈資料20〉」参照）。

第一章 寺田喜治郎と満洲教育専門学校

一 寺田喜治郎の略歴

寺田は、一八八五（明治十八）年六月、岡山県に生まれる。一九一〇（明治四十三）年、東京高等師範学校卒業後、播州竜野中学に赴任、二年目に三木清を担任した他、各地中学校教諭を歴任。京都府地方視学、大谷大学教授を経て、一九二四（大正十三）年十一月、満洲教育専門学校教授を命ぜられて渡満、国文学を講じる。同校教授職にあつて、関東庁視学委員、満鉄視学委員を兼務する。一九三〇（昭和五）年、撫順中学校校長となり、翌年「コドモ満洲」を發刊する。一九三四（昭和九）年、奉天第一中学校長に転任。一九三八年秋、「満洲国」文教部に移り、編審官室長として、六年間、「満洲国」の小学校教科書の編集に携わる。一九四四（昭和十九）年、その職を辞す。何年に帰国したかは不明だが、帰国後は著述、古蹟探究に携わる。一九七二年、満洲教育専門学校同窓会編纂『満洲忘記がたし』出版の際には、寺田は病床にありながらその草稿に克明に目を通し、アドバイスしたという。

著書に『獵人日記』（ツルゲーネフ著）の翻訳、『國語教授』（二冊）、『教壇上下』（一九三四年）、『大陸の教壇』（一九四一年）、『日米外交秘話―日本の指導者と共に』（E・モアー著・共訳 法政大学出版局 一九五一年）、他研究論文等多数。²

二 満洲教育専門学校の概要

まず、関東州と鉄道附属地の教育研究機関について確認しておく。植民地満洲における教育は、基本的には、関東州は関東庁が担い、

鉄道附属地は満鉄が担った。両者は協力し合いながらも、それぞれの方針で教育に携わった。

当時、満洲の教育研究機関として関東州大連に南満洲教育会があった。会長は関東庁長官、顧問は満鉄社長、一九〇九年に発足したこの組織は、満洲の教育行政に強力な発言力を持ち、教育に関する多様な研究活動を行い、その成果を機関誌「南満教育」によって全満洲に伝えていた。

一方、満鉄は、幹部教員の養成を目的とした教員講習所（一九一三年）を作り、のち、それを教員養成と研究機能を併せ持つ教育研究所（一九一五）に改める。同研究所は一九二四年、満洲教育専門学校（以下「教専」）の設立に伴い、その附属機関となるが、一九三三年、教専の廃校によって研究機関として再出發し、鉄道附属地の教員を動員して各種研究会を組織し、機関誌「満鉄教育たより」（一九三四年九月創刊 三十九号で終刊）（『資料編の（資料21）』）を刊行、鉄道附属地において独自の教育活動を展開する。一九三七年十二月、「満洲国」への地方行政権委譲により、鉄道附属地の教育は満鉄の手を離れる。³

ここで二つの教育研究機関を紹介したのは、満洲における教育・文化活動が、関東州と鉄道附属地では共通性と独自性を併せ持っていたからである。共に、満洲植民地化という国策を推進し、共同で満洲教材を取り入れた副教科書の編集を進めながらも、実際に展開された活動には相違が見られる。鉄道附属地では満鉄による独自の教育活動があった。その一つが教専の存在である。

次に、教専の概要を説明する。

教専は、満洲の教育を向上させる目的で満鉄内に設置された学務課創設時の学務課長保々隆矣（以下「保々」）によって、ドイツの教育改革案を基礎に、一九二四年九月、奉天（現在の瀋陽）に設立された満鉄経営の教員養成機関である。教育研究所と附属小学校を持

つ。その設立趣旨は「日本の教育改造を究局の目的とし、差当って満洲の植民地教育に新生命を与へ、以て、滿蒙に發展する我同胞の百年の計に資せむ」とするものであると保々は述べている。あくまでも国策に沿った教育を進めるための教員養成機関ではあるが、その内容は、従来の「師範」が持つ型にはめる教育ではなく、学生の資質を伸ばす教育方針で、専門知識と教育技術を併せ持った初等・中等学校教員養成を目指した。⁴

文科一部（国語・漢文）文科二部（地理・歴史）と理科一部（動・植・鉱物）理科二部（物理・化学・数学）に分かれ、各部とも定員十名、修学年限三年、全寮制で在学中は全額給費（三十円）、卒業後は満鉄職員の身分（本俸七十三円）で、鉄道附属地内にある、日・鮮・満人の初等・中等学校に教員として配属された。

好条件の待遇に全国から優秀な学生が集まった。全寮制による少数精鋭の英才教育、教師と生徒の一对一に近い教育環境は、旺盛な研究心と満洲教育を担う気構え、教専生としての仲間意識を学生に植え付けたであろうと推測される。だが、卒業生の多くは、配属先で理想と現実のギャップにとまどったという。のち、教専運営経費が満鉄の財政を逼迫させるという理由で、一九三三年三月閉校となる。七期総勢二三〇余名の卒業生を有する。⁵

寺田は創立もない教専に赴任し、満洲の初等・中等教育の先兵たる青年教師の育成に力を注いだ。寺田はどんな教師であったのか。

教専の同窓会編纂『満洲忘じがたし』⁶には、「寺田教授語録」や「寺田イズム」という用語で寺田の思い出が語られている。そこでは、人物本位、教育者としての気骨、研究と信念を重視した寺田の姿がある。また、教えることに厳しい一面、学生を思いやる優しさも持っていた。「万葉集」等を講義、授業は演習形式で行ったという。また、同書に、渡満以前の竜野中学での授業の様子を寺田自身が書いた文章が紹介されている。その内容は、のちに発刊された「コード

モ満洲」の趣旨と共通するものがあるので、ここに紹介する。

（前略）教員になりたての年は自分の勉強に没頭して学校の方はお坐なり。二年目から自分の好きな教え方をしたように思う。事務室で借り出した謄写版で杉村楚人冠の『大英遊記』その他、新聞記事などを刷って教材にした。裏山の上に生徒を連れて行っているんな本を読んで聞かせたり、『自然と人生』を全部の生徒にもたせたり、『燈下に認む』式の作文を写生文一点張りに変えたり、要するに自分に興味があり生徒も興味をもち得るものを求めていったまでである。（後略）⁷

『大英遊記』は、朝日新聞特派員としてロンドンに出張した杉村楚人冠の、往復途中も含めた見聞記である。地方の中学生の目を世界に向ける良い教材となったであろう。三木清は『讀書遍歴』⁸の中で、寺田との出会いを次のように述べている。自分が読書に興味を持つようになったのは、寺田の影響であること、当時すでに寺田は国語教育についてずいぶん新しい意見を持っていたこと、副読本として与えられた徳富蘆花の『自然と人生』は、学校でも家でも読んだこと、また、寺田は字句の解釈は一切せず、幾度も繰り返し読むよう命じたという。

ここに、教科書だけにとどまらず、国語の副教材を貪欲までに求める寺田の姿がある。自分も生徒もおもしろいと感じる教材を選び、さまざまな文体に触れ、思索し、広く社会や世界に目を向けさせることを国語教育の使命とする寺田の考え方が窺える。

寺田は満洲においても、「本を読む力は、一にも多読、二にも多読」だと、多読主義を提唱し、「児童室整備」を推し進め、読書環境を整えることに尽力したという。

三 満洲における寺田の活動

満洲における寺田の活動は、教専内での教育活動にとどまらない。読書指導や児童書の選定作業、その紹介と普及、子どもの教育環境への提言を外部に向けて積極的に行っている。柴村論文ではこの点についての指摘はないが、筆者は、寺田のこれらの活動が、「ユドモ満洲」発刊につながっていったと考えている。その一端を表す記事を「満洲日報」（以下「満日」）から紹介する。

- 1 「初めての試み 児童讀物展―先づ奉天教専で開催 追て沿線各地で開かる」（一九二七年十一月一日付「満日」）
- 2 「児童讀物展に就いて 教專教授 寺田喜治郎談」（同年十二月十一日付「満日」）

この二つの記事の概略は以下のとおりである。

一九二七（昭和二）年十月から十一月にかけて、満洲初の「児童讀物展」が、教専主催で、満鉄学務課、関東庁学務課、奉天・大連図書館後援のもと、教専内、奉天の安東県、撫順、旅順、大連の五カ所で開かれ、主催者側の中心人物が寺田であった。この「児童讀物展」の目的は、夥しい数の児童雑誌が刊行されている今日、「教育的考慮」に基いて、「比較的良書」とされる「實物」を保護者に見せることであったが、子どもの勉強環境の望ましいモデルとして実物勉強室の陳列も行っている。「比較的良書」とする根拠は、内地の「日比谷圖書館、京都市小學校教員會等」発行の目録類や「満鐵」の「小學校から委員が出て」作成した「標準児童圖書目録」に拠り、出品書物の大部分は東京その他出版社からの寄贈であったとある。少数ではあるが「支那児童」の読物や外国児童の読物絵本も陳列されたともある。

現物を目にするのできる児童讀物展や実物勉強室の展示は、保護者に向けての教育環境作りの啓蒙活動である。寺田の大胆で合理的な発想と行動力を窺い知ることができる。

3 「尋常小學生文庫―教育専門學校選定」

（一九二八年二月五日付「満日」）

学齡別に「十圓文庫」「三十圓文庫」「五十圓文庫」に分けて、総数五二作品及び作者名を紹介している。

記事中に記名がないので、確かな根拠はないが、寺田の仕事である可能性が高い。というのも、その後寺田は、有志とともに児童讀物調査委員会を組織している。

4 「小學兒童の讀物―教專の調査委員會で十九冊の内五冊選定」

（一九二八年六月三日付「満日」）

概略は以下のとおり。

教専が中心となり、同校寺田教授を始め同方面の有志者は調査委員会を設置して、毎月委員会を開き、その月の児童讀物について一々選択し推薦図書として、関東州内外の各小学校に通告するというものである。第一回児童讀物調査委員会では以下の五冊が選択された。『西遊記物語』（金の星社版）『黒船の襲来』（同上）『少年大飛行家』（同上）『英雄ナポレオン』（同上）『義経物語』（幼年社）

この記事によると、調査委員会は、毎月、その月に出版された児童讀物に目を通し、一冊一冊選定し推薦している。単なる書物の紹介ではなく、その作品内容の評価を行い、公表している。

この児童讀物選定及び推薦に関する取り組みは、教専閉校（一九三三）後も教育研究所に引き継がれ、「満鐵児童讀物研究會推薦圖書

目録」(「資料編の〈資料21〉」)として、同研究所発行の「滿鐵教育
たより」(一九三四年九月三〇日創刊)に不定期に掲載され、鐵道附
属地の学校の図書室の充実や教育活動に供されている。寺田は教専
教授の職を辞した後、撫順、奉天の中学校長を歴任するが、その間
も、これら選定推薦作業に関わっている¹⁰。

早い時期から長年にわたって進められた児童読物に関する選定作
業の経験と蓄積が、「コドモ滿洲」刊行の下地となっていたことは間
違いない。

第二章 「コドモ満洲」について

一 「コドモ満洲」概要

(一) 書誌事項

一九三一（昭和六）年九月十日創刊。終刊年月日は不明であるが、一九三七（昭和十二）年三月十五日（第十卷第六号¹）までの三九一冊の所在^{1,2}が確認できている。昭和十六年版『満洲年鑑』の「民間定期刊行物」の項に「発行所 満洲新聞社、發行人 笠神志都延、半月刊」（四五頁）として「コドモ満洲」の発刊が記されているところを見ると、一九四〇（昭和十五）年までは刊行されていた可能性が高く、少なくとも刊行は約九年間に及ぶことになる。寺田喜治郎主幹、「撫順國語夜話會編纂」（一九三四年四月一日発行の第四卷第七号から「奉撫國語夜話會編纂」に変更）、「月刊撫順社」（のち、「月刊満洲社」に改名）発行。撫順で発行されていた子ども向け文芸雑誌。菊判。縦書き右開き。十六頁から二〇頁。月二回の発行。当初、「一・二學年用」「三・四學年用」「五・六學年用」の三分冊であったが、第二卷第二十号（一九三三年二月一日）から、「一・二學年用」が「一學年用」「二學年用」に分かれて全四分冊となる。定価各冊二錢五厘（のち、三錢五厘）。発行部数は当初五千部、「第一卷第八号」（一九三二年二月）で六千部を超す。

(二) 発行同人及び発行目的

「第一卷第一号 編輯室から」に、「コドモ満洲」発刊の動機が次のように述べられている。

○「撫順國語夜話會は、寺田中學校長を中心とせる在撫順各學校國語擔任有志の集りでありますが、小學校に於ける實際教授上のやむにやまれぬ我々會員の必要感がこの『コドモ満洲』を生みしました。

○この毎月二回の刷物を補充教材として利用下さる向が多くなればなる程、内容も豊富になり、廣く満洲各地に我等の同人を得る事になるものです。（後略）（十六頁）

当時、撫順中學校の校長であつた寺田のもとに、小學校教師たちが集まり、國語に関する勉強會を開いていた。その会の名は「撫順國語夜話會」（のち、寺田が奉天中學校の校長に転任してからは、奉天の教師も加わり、「奉撫國語夜話會」と改名。以下「夜話會」とする）で、同人に、教專出身者が多く、寺田の薰陶を受けた者もいたという¹³。そこでは、教室で直面するさまざまな問題や指導法について話し合われたことであろう。そこでの活動が基となり、「コドモ満洲」は生れたという。その目的は、日々の授業で活用できる補充教材の提供と、子どもの國語力を伸ばすことであつた。「第一卷第一号」の冒頭に寺田の次のような文章が載っている。

皆さんは、本をよむことがおすきでせう。本をよんだり、ものをかかんがへたりすることは、人間だけがもつ大きなよろこびです。どこの學校でも、兒童文庫がもうけられて居ります。その上に、先生はどうしやばんですつた讀み物を下さいます。それらの多くの讀み物で本が早くよめるやうに、又本をよむことがすきになれるやうに、又よんだらなるべく早くわかるやうに、そんなおけいこをするのです。「こども満洲」は、どうしやばんの代りになつて、皆さんに、よい讀み物をたくさんさしあげたいのです。

おもしろい、ためになるお話、ひろい世の中のできごと、あなたの方のつづりかたなどをのせます。

（寺田喜治郎記 「こども満洲」のはじめに）

おもしろく優れた文章で、子どもが興味を持って読み進むうちに、いつのまにか、読書の面白さを知り、読解力もついてくる。「コドモ満洲」はそんな雑誌を目指した。

前述したように、「コドモ満洲」の刊行は、少なくとも九年にのぼる。その間、二銭五厘（のち三銭五厘）という低価格で、月二回の刊行、四分冊（一九三三年二月までは三分冊）が長期間できたのはなぜか。それは、補充教材として現場の需要が高かったこと、編集を担った「夜話会」が尽力したこと、一からの創作は少なくほとんどが他雑誌からの転載であったこと、そして、「月刊撫順社」による商業出版であったことが理由として考えられよう。

二 評価と期待

「コドモ満洲」（第一号創刊）が「満日」の「新刊紹介」に取りあげられている。当時の評価と期待が分かる文章であるので、少し長いが、ここに全文紹介する。

見出し―「コドモ満洲」（第一号創刊）

撫順で発行する唯一の雑誌月刊撫順が最初計畫したものであるが、事務の都合上また子供のためによりよい物としてといふので寺田撫順中學校長を中心とする在撫各學校國語擔当有志の集りである撫順國語夜話會に於て引受け、小學校に於て實際教授上から月二回の発行を以つて三、四年程度の子供達に提供することになったもので本誌が創刊號である。近來兒童讀物の少

い折柄殊に満洲に於て發行せられるものとして子供を持つ親達に敢へて推賞したい。このコドモ新聞の内容、體裁を云々することは未だ早い、號を追ふに従つて編輯者の努力はこれを立派なものとして行くことを信ずるからである。然し一言希望としてこれを読む子供達は満洲で生れ満洲で育ち内地を知らない者が多い、この點より内地の事物をよく紹介すると共に満洲に育つて行く子供たちに満洲の何であるかと云ふことをよく理解させ覺悟を抱かすところありたい。

（一九三一年十月九日付「満日」）

一般に、「コドモ満洲」発刊は寺田の発案だと言われている¹⁴。だが、上記引用文によると、「月刊撫順社」の計画だとある。どちらが発案者であっても大した問題ではない。実際に編集作成に携わったのは寺田ら夜話会のメンバーであったからである。また、寺田は、「月刊撫順」を発行していた、元満鉄社員城島舟礼とは昵懇の間柄で、寺田もその雑誌に隨筆風の論説を発表しており、お互いの意思疎通は十分あったと考えられるからである¹⁵。

上記引用文からは、「コドモ満洲」が満洲で発行された読物であることへの期待がある。そして、その内容に、内地を知らない在満日本人児童に内地を紹介すると同時に、満洲という地について理解の深まるものであつてほしいと述べられている。

「コドモ満洲」の内容の多くが良質の日本内地の作品であつたのは、優れた作品に広く多く触れるという寺田ら夜話会の國語觀の反映であると同時に、当時の在満の多くの日本人、特に親や教師達の、故国日本への強い思いの反映であつたのかもしれない。

三 「コドモ満洲」の内容

(一) 内容の特徴

雑誌名に「コドモ満洲」という名称を使っているものの、掲載作品の多くは、内地の出版物からの転載である。この点は柴村論文でも指摘されている。満洲に関する内容は、時事、ニュース、グラフ、児童作品に見られる。

「内容の選擇には私共同人が嚴選を重ねるのですが、唯一つの寂しさは、未だく創作が少ないことです」(第一巻第七号「一・二學年用 編輯室から」十六頁)とあり、掲載作品の選択は同人によって吟味され選ばれたということ、当初から同人による創作の掲載を考えていたものの、実際には作品が集まらなかったということが分かる。寺田は初期の段階から精力的に作品を発表しているが、同人たちの創作が掲載されるようになるのはもっと後からである。龜川馨、合志光、窪田忠言、大倉しげるらの作品が少なからず掲載されている。

巻末のニュース欄には「なるべくニュースバリューの高いものを選び、新聞教育の豫備的段階たらしめたい心づもりです。」(第一巻第一号「三・四年編輯室から」十六頁)、とあり、また、「教材の地方化、ニュース、グラフ、児童作品等々、盛らねばならない内容も多い事です。ページの都合で割愛しなくてはならない月もあるのは止むを得ない所です。(第一巻第七号「一・二學年用 編輯室から」十六頁)とあって、満洲色を前面に出すことよりも、補充教材としての雑誌刊行に力点が置かれていたと考えられる。

作品内容は多彩である。赤い鳥系の文学作品、詩、童謡、各種『読本』からの転載、絵雑誌からの転載、新聞記事、科学読物、戦争哀話、偉人伝、孝行話、民話・伝説、紀行文、中国古典の再話、外国作品のダイジェスト、漫画、絵物語が収められている。

広範囲からの作品蒐集、大家の文学作品の多数の掲載は、結果的

には雑誌の内容を豊かにしている。が、「コドモ満洲」としての独自性、統一性に欠ける。日本国内の作品が多いことから、必然的に挿絵も日本的である。誌面の内容からは、在満の子どもたちに満洲に対する郷土愛を持たせるといふ積極的な意図は感じられず、むしろ日本の良質な文学作品に触れ、広く世界に目を向けさせることを主眼とした編集姿勢であったといえる。この点は、石森らが、満洲に対する郷土愛を育てるために、満洲の地から生れた童話創作にこだわったのと異なる。

(二) 内容の考察

全般的に、学齡(つまり「何年用」であるか)によって、雑誌の体裁や作品の傾向が異なる。低学年用では、「第二巻第四号」(一九三二年六月一日)より全ページにわたり、彩色が施され、絵雑誌的な要素が強くなる。また、当初、「一學年」と「二學年」に分かれて四分冊になる。これは学齡に応じた雑誌作りであって、現場の教師ならではの確な判断である。なぜなら、一年と二年では文字、語彙の習得数が大きく異なるからである。

作品内容は、低学年は詩・幼年童話が中心である。高学年は評論や時事的記事、科学読物、偉人伝が多く、他の学年に比べて、軍国主義的な色調が濃い。中学年用は、文学作品も多く、題材も多様で、四分冊の中では最も雑誌としての面白さを持っている。

以下、ジャンル別に述べる。

(1) 文芸作品

雑誌記事の中心は文芸作品である。前述したが、当初は、創作が

少なく、大部分が内地雑誌からの転載である。出典を明記していない作品もかなりあるが、文芸作品には「赤い鳥」掲載作品が少なからずある。作品は、転載時に、句読点の追加、改行、一部削除、書き換えなどの編集がなされている。語句については基本的には原文尊重であるように思われるが、一部、常体を敬体に改めている。二〇頁前後の限られた紙数ということもあるだろうが、編集姿勢に、補充教材としての教育的配慮が強く働いているといえる。

1 語句の改変

隠し↓ポケット（芥川龍之介「アグニの神」三・四年）
馬を十二匹↓馬を十二頭（宇野浩二「王様の嘆き」五・六年）
丁度↓まるで（芥川龍之介「蜘蛛の糸」三・四年）
思しめされた↓思はれた（同右）
運搬する↓運ぶ（芥川龍之介「トロッコ」五・六年）
作品中の語り手の自称としての「父さん」↓「私」
（島崎藤村「水の御馳走」五・六年）

漢語や古語は平易に、数量詞は正しくということであろう。ただ、「水の御馳走」のような語りの自称の改編は、作品の持ち味を大きく減じる。「父さん」の場合は、父が子らに語る物語として全体に温かみを醸し出しているが、「私」の場合は、大人が語る単なる物語となる。

2 削除

全体からみると、削除が一番多い。単語（副詞）・語句から数行に

わたる場合もある。ここでは、教育的配慮から削除されたと思われる例を挙げる。（―部は削除箇所、括弧内は補足を表す。）

「かまきり」（薄田泣菫）

―「五・六學年用」第一巻第二号 一九三一年十月十日

―出典「艸木虫魚」（参考一九九八年九月十六日岩波文庫）

かまきりはたった今生捕ったばかりの小さな赤とんぼを、大事そうに両手でもって胸へ抱え込んでいる。

哀れな犠牲だ。私はかろく指さきでその赤とんぼの羽に触ってみた。（中略）

私はまたとんぼの頭を小突いた。その一刹那かまきりは赤とんぼをふり捨てて、両手の鎌をふりかざして手向って来た。私は指さきでその草色の背を押えた。処女が他人に肌を弄られたような無気味さと恥辱とに（はげしく）身をふるわしながら、かまきりはいきなり私の指に噛みつこうとした。

「コドモ満洲」では傍線部分が削除され、「はげしく」が補足されている。性的表現だからこの部分は教材としてふさわしくないという判断であろう。

もう一編、削除の例を挙げる。

「なまけものの學校」（島崎藤村）

―「一・二學年用」第二巻第八・九号 一九三二年八月

―出典「幼きものに」（参考一九五八年四月新潮文庫）

もう一つ、なまけものの學校といふお話をして聞かせませう。三人の子供があつて、學校へ出掛けましたところ、どうも勉強

するのは骨が折れていけないと考へて、途中で相談しました。

三人は学校に行かず、杜（森）へ遊びに行き、そこで、杜の生きものは皆働いていることを知る。

三人の子供は杜へ来て學問しました。働きもしない快樂といふものは、楽しいものではないといふことを教はりました、とさ。

「コドモ満洲」では、傍線部分が削除されている。この部分は、冒頭と末尾である。冒頭は物語全体の流れを念頭に置いた書き出しであり、末尾は結びの部分である。この二か所を削除すると、作品の持ち味は変化する。原文では語りの物語であるが、削除後は読者の今と同時進行の物語となる。教材として考えた場合、この方が、子どもたちが物語に入っていくやすいという判断であろう。

だが、結びの部分は教訓部分で、末尾の二行に作者の主張があり、しかもこれが藤村童話のスタイルである。文学作品を味わうという観点からいえば、削除すべきではないと筆者は考える。

3 書き換え

「蟹の子供」（島崎藤村）

―「一・二學年用」（第二卷第九号）

―出典 「をさなものがたり・力餅」

（参考 一九五八年四月新潮文庫）

墨田川の岸辺の石垣に住む蟹の親子。遊びたいさかりの蟹の子が、石垣の上からさがってきた黒い炭に興味を抱く。親蟹は、あかいう

つくしい虫につられて行ってしまったダボハゼの子供を例に、だまされてはいけないと蟹の子に注意する。蟹の子は、あかいうつくしい虫ではなく、ただの黒い炭だと言い返す。

「いえ、きつと是が皆さんのよく言ふ『誘惑』といふものですよ。」

『誘惑』は紅くて美しいにかぎつたことはありませんよ。」こう親蟹が言うのも聞かず、蟹の子は、両方のハサミに力を入れて、その黒いものにつかまる。親蟹が子供をだきとめようとする間もなく、蟹の子は、みるみる岸辺の方につられて行ってしまう。

「をさなものがたり」（一九五八年四月新潮文庫版）には、「五五蟹の子供」「五六 同じく」として、蟹の子供の話が二話つづくが、収録作品は、後の「五六 同じく」の方である。句読点、仮名遣いの違いはあるが一箇所を除き、ほぼ同じ。その一箇所とは、引用箇所傍線部分である。その部分を「コドモ満洲」では、次のように書き換えられている。

「いいえ、黒い炭に見えても、ゆだんしてはいけません。皆さんをだますものは、いつもあかくて、うつくしいにかぎつたことはありませんよ。」

言わんとする内容は同じだが、表現は分かりやすく書き換えられている。これは学齢に配慮した編集で、読者である子どもには理解しやすい。だが、一方で、原文で用いられた「誘惑」が、「だますもの」に置き換えられた結果、原文の中で「誘惑」という語を持つ、妖しげな語感がなくなり、平凡な言い回しになることは否めない。ここで改めて「コドモ満洲」の編集意図が明確になる。つまり、

子どもたちを文学作品に触れさせることが目的ではあるが、そのまま教室で補充教材として用いることが優先されており、作者の微妙な言い回しや表現は大胆に書き換えられているといえる。

(2) 戦争哀話

「コドモ満洲」には戦場を舞台にした作品も採られているが、戦闘場面は少なく、戦争哀話が目立つ。

「お母さんの寫眞」(安倍季雄「三・四學年」第二卷第四号)という作品がある。これは、アメリカ海軍の水兵の話である。演習後に、脱いだ上着が海に落ちる。上官の命令に背いて、海に飛び込み拾いあげた水兵は、軍規に背いた罪で裁かれる。が、上着には母の写真が入っていたという言葉に「生命がけでお母さんの寫眞を救う」水兵は「國家のためにも生命を惜しまないりっぱな兵隊」として讃えられる。

「うみにおちた水兵」(杜修之助「二學年用」第三卷第号)では、実話として、海に落ちた水兵を飛び込んで助けた艦長の優しい心を描いている。

「せうねん せつこう」(杜修之助「二學年用」第三卷第十三号)では、故郷のロンバルディアのために、友軍に、高い木の上から敵の情勢を知らせて死んだ少年斥候の精神を讃えている。

「愛國物語 譽の日章旗」(池田宣政「五・六學年用」第四卷第九号)は、戦地に向う兵士に手造りの日章旗を送った姉弟の「真心」に応えようと戦場で死を賭けた兵士の物語である。池田宣政は、「南洋一郎」の本名。

ここに描かれているのは、母への愛、孝行心、仲間同士の情愛、愛国心、ゆるぎない信念である。そこには、野蛮な戦闘場面よりも、情に訴える物語を選ぶ教師としての目を感じられる。だが、情に訴

える物語であるからこそ、自己犠牲、献身を美德とする考え方を、読者により強く植え付ける啓蒙的效果があるともいえる。

(3) 教材の地方化

「教材の地方化」とはどういうことか。

寺田の作品に、満洲に関わるルポルタージュやエッセイが何編かある。それが「教材の地方化」ということだと考えられる。つまり、言い換えれば、「満洲の教材化」である。寺田作品については、後で述べる。

ここでは、同人である龜川馨の作品「マンシウコク ノ セイト」(「一年生用 第九卷第三号」)について検証する。

匪賊のために貧しい村の人間は手も顔も汚れている。日本の子どもと遊ぶ時に、汚い手だと嫌がられる、という先生の言葉に、きれいに洗った手を見せに來た満洲の子ども。兵隊はきれいな手の上にキャラメルをのせてやる。そして、龜川はこう締めくくる。

ワタシ ハ コノ ハナシ ヲ ヘイタイサンカラ キイテ、
マンシウコク ノ 子ドモ ハ エライ ト オモヒマシタ。
日本 ノ 子ドモ ノ 手 ハ キレイ ダラウ カ ト、チ
ヨット シンパイ ニ ナリマシタ。

この話はおそらく実話をもとにしているだろう。龜川は、「満洲国」の子どもの素朴な行動を伝えながら、日本の子どもに、他民族の模範的な存在としての自覚を促している。

「教材の地方化」とは、満洲を教材化することである。満洲の出来事を作品化することは、必然的に時局を色濃く反映する。龜川の作品でも、満洲における日本人の役割を自覚させる啓蒙的要素を指

摘することができる。

(4) 児童作品

「コドモ満洲」では、児童作品の掲載も積極的に行っている。児童自らの投稿はもちろん、学級文集など、教師からの投稿も募っている。

当時の在満児童の意識を表していると思われる児童作品があるので、ここに紹介する。この作品は、後日銅賞として表彰されている(「第一巻第七号」)。

「あだなつけっこ」(教専附属 尋二 小林敏二)

(「一・二學年」第一巻第五号)

傍線は筆者

きのふのばん、あだなつけっこをした。赤ちゃんはしやうぎうだから、姉さんが、「しやうぼうにしたらおもしろいよ。」といった。みんなはどつとわらった。こんどは、武をのばんになった。私は、

「武をだから、たけの子にしたらいいよ。」

武をはそれをきくとぶんぶんといっておこった。又、みんなが大わらひした。こんどは、私のばんになった。私のあだなはこんなあだなだ、それはたけの子のつけたあだなだ。

「としちゃんだからちゃんころだよ。」私はちゃんがつかないのに、ちゃんころだつていはれたので、しやくにさはつて、「たけの子のいふことは、ちがつてゐるよ。」

(中略)

こんどは私の上の姉さんのばんだ。又それもたけの子がつけた。

「津代子だから、つよんぼうがよくにあふよ。」といった。又みんながわらった。こんどは一番大きい姉さんのばんになった。私は、しやくにさはつてゐたので、大きなこゑで、「ふみこだから、ふじの山だよ。」といった。ねえさんは、「ふじの山がこのうちで一ばんいいよ。」といった。私は自分が一ばんわるいあだななので、しやくにさはつてゐた。そのかほを姉さんにみつかったので、こんどははづかしくなつてきた。(後略)

姉弟たちであだなのつけっこをしている楽しい様子が、伝わる作文である。出来事の流れとともに自分の心の動きも書いており、尋常二年生としては、文章力があるといえる。だが、「ふじの山」が一番良くて、「ちゃんころ」と付けられた自分のが「一ばんわるいあだな」だと感じるというのは、当時の日本人が中国人に対して持っていた差別意識の表れである。「ちゃんころ」とは、当時の日本人が中国人に対して使った蔑称であった。子どものたわいない会話の中に、自然と現れる中国人蔑視の意識によって、「五族協和」がいかに欺瞞であったかが知れよう。

第三章 「コドモ満洲」における寺田作品

寺田作品は、二十一編（重複掲載は一編として数える）が確認できている。創作、翻訳、再話、ルポルタージュ、エッセイと多彩である。寺田は創刊時から精力的に作品を発表している。特に、第一巻において作品数が多いのは、出版を軌道に乗せたいという雑誌への思いと、他の同人たちに、範を垂れる意味もあったのだろう。というのも、「コドモ満洲」の編集に携わった夜話会では、「参加者がオリジナルな満洲童話を創作した」とあり、また寺田は、「子どもに作文を書かせる教師が文章をよう書かないというバカな話があるか」と同人たちを叱咤鞭撻したという。¹⁶

〈資料1〉は、「コドモ満洲」に掲載された寺田作品を学年別に抜き出したものである。満洲を題材とした作品には、☆印を付けた。

再話・翻訳は十二話、ルポルタージュ・エッセイは六話、創作は二話となり、圧倒的に再話・翻訳が多いことが分かる。

作品については、1再話・翻訳 2ルポルタージュ・エッセイ 3創作の三つに分けて考察する。

再話・翻訳の題材は、日本の古典にとどまらず、広く世界の話から選んでいる。例えば、イソップ寓話やグリムの再話、ウィットの利用した小話の二話で構成される「スキフトの逸話」、ナポレオンの副官を描いた「ジュノ軍曹」、王が出した難題に羊飼いが主人の僧に代わりみごと答える「王さまと坊さん」、少年時代にうけた恩を命をかけて返すイギリスの作品「裁判」である。

しかも、どの内容も機転やユーモアに富んでいる。寺田が日ごろから多くの文献に目を通していたことが窺える。

ここでは、「山がくづれる」（第一巻第一號）を取り上げる。まず、あらすじを述べる。

〈資料1〉 「コドモ満洲」掲載の寺田作品（☆印は満洲を題材）

作品名	掲載誌（巻号）	掲載年月日	出典他
「こども満洲」のはじめに	全（一・一）	一九三一・九・十	巻頭言
カバン	一年（三・二）	一九三三・四・十五	
アリトハト（詩）	一年（三・七）	一九三三・七・一	イソップ
☆山がくづれる	一・二年（一・一）	一九三一・九・十 『宇治拾遺物語』	
☆満洲のりんご	一・二年（一・二）	一九三一・十・十	
小サナコトカラ	一・二年（一・七）	一九三二・二・一	
しあはせものの半助	一・二年（一・九）	一九三二・三・一	グリム
☆（無題）	一・二年（二・八）	一九三二・八・一	
☆がいせん將軍	一・二年（二・十一）	一九三二・九・十五	
☆満洲のりんご	二年（三・十四）	一九三三・十二・一	前出
ライオンのさばき	二年（四・二）	一九三四・一・十五	
王さまと坊さん（戯曲）	三・四年（一・四）	一九三一・十一・十	（翻訳）
熊の尻尾がなくなった話	三・四年（一・七）	一九三二・二・一	
古い借もの	三・四年（一・八）	一九三二・二・十五	（翻訳）
裁判（戯曲）	三・四年（一・九）	一九三二・三・一	（翻訳）
☆くわんぺい式	三・四年（二・十八）	一九三三・一・一	
馬盗人	三・四年（三・九）	一九三三・九・一 『今昔物語』	
彼の好きな歌	五・六年（一・七）	一九三二・二・一	
スキフト逸話	五・六年（一・八）	一九三二・二・十五	
ジュノ軍曹	五・六年（一・十）	一九三二・三・十五	
話の話	五・六年（三・八）	一九三三・八・一	
☆窓から見る	五・六年（三・十四）	一九三三・十二・一	
馬盗人	五・六年（九・二）	一九三六・一・十五	前出

祖先の言い伝えを守り、毎日山上の墓に参って村の安全を確認する老婆をからかって、心ない若者がその墓に細工をする。墓の異変に、血相変えて危険を知らせる老婆を人々はあざ笑う。が、突然、山がくずれ、その村は海の底に沈む。

寺田は、後の「編輯室から」で次のように書いています。

（この話は）「宇治拾遺物語」にあるのを翻譯したものです。「今昔物語」が原據で、支那の話です。此の話はただロマンチックな傳説として取扱ふべきもので、教訓などを含ませるべきではありません。従つて各部分に十分想像をつけ加へさせて、具現化すれば教授の目的は達せられたものと見るべきです。

民話的でドラマ性に富んだ話である。挿絵には和服姿の老婆が描かれているので、「編輯室から」の説明を読まないかぎり、この話が「支那」の話であることは分らない。だが、創刊号に、この話を掲載したのは、話のおもしろさのほかに、満洲で発刊する雑誌だから、日本の古典に収められている「支那」の話を紹介するという意識も寺田にあったのではないかと思われる。

上記引用文の内容は教授指導文である。ここで「編輯室から」の文章を紹介したのは、「コドモ満洲」が国語の補充教科書としての役割を担い、それに対する指導方法も示されていた点を実証するためである。「編輯室から」の文章は寺田がすべて書いていたわけではないが、「第二巻第五号」（一九三二年六月十五日）までは、ほぼ毎号、「編輯室から」の項目があり、短文ではあるが、掲載作品に関する解説や国語指導方法に関する記述がある。

ルポルタージュ・エッセイは、時事的な内容を取り上げており、ほとんどが満洲に取材している。いわゆる「教材の地方化」とは、こういう記事を指しているものと思われる。その内容は、必然的に

時局の影響を強く受けている。

「満洲のりんご」は、満洲でりんご栽培を成功させた一人の日本人について述べた文章である。「二・二學年 第一巻第二号」と「二學年 第三巻第十四号」に重複掲載されており、寺田にとつて、思入れのある文章であるといえる。寺田は、文章の最後に、「今では支那人もたくさんつくつてゐますが、まんしうにりんごをうゑつけたのは、日本人の柳本さんが先祖です。」と言い切る。ここに、在満の日本の子どもに向けて、パイオニアとしての自覚を促す寺田のメッセージを読みとることができよう。

「無題」（第二巻第八号）では、大連の「櫻花臺」にある小さな幼稚園に、当時の満鉄総裁である内田伯爵とその夫人が見学を訪れ、大金一千円を寄付した話を紹介している。「がいせん將軍」（第二巻第十一号）では、満洲事変で功労のあった関東軍司令官本庄中将が帰国のため、奉天駅で見送りを受ける様子を記事にしている。「窓から見る」（第三巻第十四号）は、半年に亘る北満の平原・大森林を調査した北満採金隊に随行した時の紀行文である。列車内の様子、匪賊の脅威、窓外に見る満人・鮮人の生活、日本人の生活、北満の自然が描かれている。「くわんべい式」（第二巻第十八号）は満洲が題材ではなく、舞台は大阪の城東練兵場である。雨中、風邪をおして観兵式に臨んだ天皇陛下の姿と感涙する兵隊、群衆を描いている。いずれの記事も、簡潔で、優れた描写の写生文である。所々に入る筆者の率直な感想は、子ども読者に一つの見方を提示している。

創作は、いずれも教訓話である。「カバン」（第三巻第二号）は、キャラメルをランドセルに入れて注意される初々しい一年生の姿を描く。「小サナコトカラ」（第一巻第七号）は、リングを盗み食いつとがめられても聞き入れない男児が、そのため次々と災難にあい、最後には、いたづらをしなくなるといふ、お定まりの落ちではあるが、次々と出くわす災難が、内容をおもしろくしている。

第四章 石森と「コードモ満洲」

石森は「コードモ満洲」をどう見ていたか。

「コードモ満洲」に石森の作品が六編収録されている（資料2）。そのうち五編は、「満洲野」「新童話』『まんちゅりあ』にすでに発表されたものであることが確認できている。六編は、おそらく寄稿ではなく、これら雑誌や単行本から転載されたものである。石森と寺田は、居住地域も活動範囲も異なり、それぞれが独自に活動していたようだが、彼らにまったく交流がなかったわけではなく、むしろ、石森は、「コードモ満洲」の刊行に大いに注目している。それは、『石森先生の思い出』（一九六七・一九六頁）の中で、寄稿した寺田に対し、石森が返礼の形で次のように書いていることから明らかである。

昭和二年あなた（寺田を指す。筆者注）を撫順に訪ねた。「子ども満洲」のことについておききしたかったのだ。（中略）この月刊雑誌は、わたしには魅力的であつた。異郷を故里にする日本人のこどものために地霊をふきこもうとしたあなたの情熱にうたれたからだ。わたしが、そののち満洲のこどものために「帆」「満洲野」などを刊行したのも、この「子ども満洲」にうたれたからだ。あなたの国語教育革新論は教師たちをふるい立たせた。わたしもそのひとりだつた。国語教育をゆるがせにできないなと思つた。二足のワラジ（寺田の文中に「教育者と作家の二足のワラジ」とあるのを受けてこう書いた。筆者注）をはくようになったのは、案外そこらに根があるのかもしれない。（中略）国語教師だから、何かものを書きたいときには書けるようになりたいと思ひ、人の前で話ができるようになりたいと心がけて生きてきただけだつた。（中略）ああ前波さん

保々さん合志君の顔が浮かんでくる。をなつかしい限りーです。

上記引用文中の傍線部分は石森の記憶違いである。「コードモ満洲」創刊が「昭和六年九月」であるので、「昭和二年」ではあり得ない。また、「帆」は「昭和二年一月」創刊、「満洲野」は「昭和四年」であつて、「コードモ満洲」はまだ発刊されていない。しかし、日時の記憶違いを別にすると、引用文から、以下のことが分かる。

石森が「コードモ満洲」に魅力を感じ、寺田らの活動を在満の日本人児童に「地霊をふきこもうとした」活動だと評価していたこと、石森も彼らの活動に刺激を受けていたこと、国語教育者としての寺田に敬意を表していたこと、教専関係者であつた前波、保々、合志たちとも面識があつたことが分かる。

〈資料2〉

作品名	掲載誌（巻号）	掲載年月日
タノミマス	一年（四巻三号）	一九三四年二月一日 出典―「新童話」「初級用」二二号（一九三二年二月）「ハタノジラウ」の筆名で発表
コンバンハ	一年（四巻四号）	一九三四年二月十五日 出典―「新童話」「中級用」二二号（一九三二年二月）
ギス	二年（四巻十四号）	一九三四年七月十五日 出典―「ます野」「初級用」四号 一九二九年九月・『まんちゅりあ』春・夏の巻 一九三〇年四月
夜明け	二年（四巻二三号）	一九三四年十二月十五日 出典―「ます野」「初級用」八号 一九三〇年一月・『まんちゅりあ』秋・冬の巻 一九三〇年四月
ふるさと	三・四年（二巻六号）	一九三二年七月一日 出典―不明
影寫會	三・四年（二巻九号）	一九三二年八月十五日 出典―「満洲野」「下学生用・秋の巻」一九二八年十一月

おわりに

関東州大連を中心に、石森らが児童文学活動を展開していたのと同時に、鉄道附属地撫順・奉天でも児童文学活動があった。いずれもその担い手が初等教育者たちで、しかも国語と深く結びついていたのは、決して偶然ではあるまい。ともに、国語力育成の教材として、精神的糧として、良質な作品を求めた活動であった。が、石森らが自らの創作活動に重点を置いていたのに対して、創作はあるけれど、寺田らの活動は、むしろ教材化に重点を置いていたといえる。

寺田が鉄道附属地での教育・文化活動に果たした役割は大きい。その一つが「コドモ満洲」という形で結実したといえる。それは、日々の教育現場で活用され、在満日本人児童の精神的な糧となる一方で、満洲の植民地化をおし進める啓蒙的な役割を担った。

本稿では、「コドモ満洲」の概要と内容を論じる中で、「コドモ満洲」の牽引力としての寺田の役割と、名作の教材化、地方の教材化の一端を明らかにした。次にすべきは、「コドモ満洲」の編集に携わった夜話会同人たちの創作についての考察である。それは、鉄道附属地で展開された寺田らの児童文学活動を明らかにする上で必要なことであり、それによって、石森らの活動もより明らかにすることができる。筆者は考えている。

第IV部 注

- 1 「児童文学研究」第四〇号 日本児童文学学会 二〇〇七年十二月 三頁
- 2 『昭和四年五月刊行 滿蒙日本人紳士録』大連 滿洲日報社
『滿洲忘じがたし』 滿洲教育専門学校同窓会・陵南会 昭和四十七年十二月二十四日 二三九—二四一・四一〇頁
- 3 槻木瑞生『滿鉄教育たより』解説「滿洲國」教育資料集成Ⅱ期『滿鉄教育たより』第三卷 エムティ出版 一九九二年十月 五一—九頁
- 4 「本校の使命」四期生入学式の保々隆矣の祝辞（一九二七年四月）『滿洲忘じがたし』滿洲教育専門学校同窓会・陵南会 昭和四十七年十二月二十四日
- 5 『滿洲忘じがたし』「まえがき」、三十二—四十一頁
- 6 『滿洲忘じがたし』 六十六—七〇頁、一二五頁
- 7 「三木清全集第四卷月報」「三木君を憶う」一九六七年一月
- 8 『滿洲忘じがたし』六八頁
- 9 『三木清全集第一卷』三七—三七三頁
- 10 『滿洲忘じがたし』一三四頁
- 11 「滿鉄教育たより」創刊号（一九三四年九月）に、「児童讀物研究會」委員に「奉中 寺田喜治郎」とある。
- 11 卷号の付け方が途中から変更。そのため、「第十卷第六號」は「第七卷第六號」に相当する。
- 12 国際日本文化研究センター所蔵（三八三冊）——一・二学年用 第一卷第一号—第二卷第十九号／一学年用 第二卷第二十号—第九卷第二十三号／二学年用第二卷第二〇—第四卷第二四号／三・四学年用 第一卷第一号—第九卷第二十三号／五・六学年用 第一卷第一号—第九卷第二十三号
- 函館市中央図書館所蔵（六〇冊）——二学年用第三卷第七号／三・四学年用第一卷第一号—第一卷第十号／第二卷一—第二三三号／第三卷第七号—第三卷十三号、第四

卷第二号—第四卷第五号／五・六学年用 第二卷第三号、第二三三号、第三卷第一号—第三卷第十号／五号、第四卷第一号—第四卷第八号

大阪国際児童文学館所蔵（十冊）——一学年用第十卷第一号—第六号

- 13 「第九卷第十八號」（一九三六年十月一日 十六頁）掲載の奉撫國語夜話會同人一覽。同人名はイロハ順〇印は教專出身者

主幹 寺田喜治郎（奉天中）

同人 ○岩切 巖（撫順高女）／○萩 正治（遼陽小）／○合志光（撫順永安小）／○龜川馨（同上）／高橋清顯（奉天浪速高女）／瀧本春譽（奉天彌生小）／祖父江一之（奉天敷島小）／○中村秀之助（鐵嶺小）／大倉茂（奉天高千穂小）／○窪田忠言（撫順新屯小）／足立敏郎（奉天千代田小）／○佐藤秋男（奉天加茂小）／○佐藤説治（撫順東七條小）／宮武城吉（奉天千代田小）／三浦和夫（奉天春日小）／水野 榮（撫順東公園小）／森安 護（奉天安安小） 他に「コドモ滿洲」誌上に、横岡昂、松井秀吉の名前と作品がある。（柴村紀代「児童雑誌『コドモ滿洲』の概要と特徴」十三頁 参考）

- 14 『滿洲忘じがたし』一三五頁
- 15 『滿洲忘じがたし』一三五頁
- 16 『滿洲忘じがたし』一三五頁

第V部

満洲児童文学作家

山田健二

第一章 山田健二―人と作品

本稿では山田健二（以下「山田」）を取り上げる。山田は、満洲で育ち、満洲で作家活動を展開した、いわば、「生粋」の満洲児童文学作家である。山田健二はどのような作品を書き、少年少女たちに何を伝えようとしたのか。作品を通して、山田の満洲における文学活動を探る。

一 プロフィール

山田は、一九〇三年六月二六日、東京に生まれた。小学一年まで東京で暮らし、一九一二年、家族（母と兄姉）とともに渡満。爾来、敗戦までの約四〇余年満洲で暮らす。「満洲は第二の故郷以上です」と山田は語っている¹。

旅順工科大学を卒業後、満鉄に入社する。満鉄の技師として仕事をしながら、童話を創作し、口演童話を行い、ラジオ放送にも深く関わる。詳細は、「資料編の〈資料22〉山田健二年譜・著作目録」を参照願いたい。

童話処女作は、一九二九（昭和四）年、満洲日報（以下「満日」）の懸賞童話に一等当選した「お年玉とスケート」（一九二九年一月一日付「満日」に掲載）である。それ以降、「満日」及び満鉄社員会機関誌「協和」を中心に作品を発表する。満鉄社員としての山田の活躍は、「協和」掲載の文章から窺い知れる。業務に対し、満鉄のあり方に対し、山田は積極的に発言し、時には満鉄の最前線取材したルポルタージュを書いている。

山田と石森延男（以下「石森」）の出会い、一九三一（昭和六）年一月一日、「協和」（第四一号）で行われた童話の懸賞募集で、実

話をもとに書いた山田の作品「本當に強い兵隊さん」が一等賞を受賞し、その時の選者が石森だったというものである²。それ以来、石森と親交を結ぶが、山田は自身の創作活動を独自に展開している。

石森は山田の人となりとその作品について次のように述べている。

わたしが大連に住んでいたとき、山田健二くんは、独身であつたろうか、満鉄の若手の社員として活躍していた。めぐりあつたきっかけは、山田くんが童話を書いてもってきたことが縁になつた。書くだけではない口演童話もなかなかうまいのを知つた。(中略) 親しくなればなるほど、わたしは、山田くんに心ひかれる。かれのおだやかな話ぶりと、その明るさが魅力であつた。わたしは、気が短くて、ことごとに激するたちであつたが、山田くんにはそれが無い。若いのに、いつもママ悠然として笑い顔をたたえている。

だからその作品を見ると、おおらかでユーモアがあり、どこかのんびりとしていて、読むものは、気が大らかになる。さすがは満洲育ちだなと思つた。

いやそれだけの理由ではない、もつともつと根深いものをちやんと抱いていたからだ。それは、信仰である。(後略)³

山田のおだやかで明るい人柄が述べられている。ここで石森はどういう意味で「信仰」という言葉を使ったかは不明である。山田の中に確固とした「自分」の信ずるところがあつたということだろうか。

山田は創作を始めた頃(一九二九)に安倍季雄に出会い、深く傾倒する。以後、自作ができる度に安倍季雄のもとに送り、教えを請うたという。この安倍季雄との出会いが、山田の童話の作風に大きな影響を与えたであろうことは想像に難くない。山田との出会いと

その後の交流について、安倍季雄は次のように述べている。(括弧は筆者が補足)

(前略) 私のはじめて山田君に會つたのは昭和四(一九二九)年五月、私の第一回の渡満中だ。たしか遼陽の圖書館で開かれた座談會の席上だつたと思ふ初對面の僕が怖かつたと見えて、名刺だけ出してモヂクして居た山田君を思出すと、何とはなしに微笑まれる。(中略) 昭和六(一九三二)年の一月、『協和』紙上で、偶然君の名によりて書かれた『本當に強い兵隊さん』を讀んだのである。國際愛を基調として佳い話だと思つた私は、直ぐに山田君に手紙をやつて其の承諾を得、之を改作して、『兵隊さんのお臍』と題し、東京から放送したのが、山田君と僕との交渉のはじまりである。

爾來足かけ四年になる。山田君は、新作が出来るたんびに丹念に自分で浄書しては私の許に送つてよこしたものである。その都度私が遠慮ない批評を書送つたのが百通にもあまつて居るといふ。御座なりとお世辭の嫌ひな私は、手紙を出したあとで、あんなひどい事を言はなければよかつたと後悔した事も二度や三度ではなかつた。良薬苦しだ。もうきつと送つてよこさないだらうと思つて居ると、折返し禮状に添へて二篇三篇と新作を送つてよこす君であつた。(後略)

〔新満洲の色と味〕一九三四年十二月一日)

これは、山田の処女出版である新満洲童話集『高粱の花環』(一九三四年九月 新生堂)を「童話教育」誌上で紹介した文章の一節である⁴。この文章から、山田がいかに創作に熱心に取り組んでいたかがよく分かる。また、誠実で努力家という山田の人となりが見られる。

山田のこの熱心さは、結果的には、満洲児童文学界と、内地とをつなぐパイプの役割を担うことになった。「児童教育」には、山田健二の作品の他に、平方久直、山田耕子郎、石森ら満洲在住作家たちの作品が掲載されている⁵。一方で、内地の作家、特に安倍季雄のように児童を書き、口演童話に携わる作家にとつて「満洲」の題材や情報を提供してもらえ良い機会だったのではないかと考えられる。満洲と内地はラジオによって、タイムリーにつながっていた。山田はラジオ放送でも活躍している。「童話教育」（一九三四年四月一日）⁶の「童話界消息」によると、次のような記事がある。

大連の同氏（山田健二のこと 筆者注）の作になる童話劇（氷の記念碑）が、（一九三四年 筆者注）三月三日満洲國帝制實施奉祝のため、大連放送局から全國に中繼せられ、非常な好評であつた。

「満洲國帝制實施奉祝」のために、山田原作の「氷の記念碑」が童話劇になって、満洲だけでなく、内地にまで放送されたという。日本の「満洲國」建国の内地へのアピールに、山田は全面的に貢献しているのである。この作品については後述する。

『高梁の花環』を出版した翌一九三五（昭和十）年、山田は所属している大連童話協会の他の会員とともに、日本童話協会に加入、大連支部を立ち上げている⁷。また同年、安倍季雄の推薦で童話作家協会会員にもなっている⁸。さらに同年、『慰安車』を出版。一九三八年十月には『少年義勇軍』¹⁰を出版する。いずれも満洲童話集である。その頃、すでに大連（鉄道部工務課）から奉天（鉄道総局旅客課）に転勤し、奉天在住となっている¹¹。この転勤により山田の仕事内容は大きく変わる。山田はいう。

（前略）仕事は一昨年まで鉄道土木関係の技術屋でしたが、それから百八十度の方向転換で観光宣伝屋になりました。土方がチンドンヤに商売換へしたわけです。童話を作りだしてから約十年、その間約三百の満洲童話を新聞雑誌に発表、童話の放送七十回位、本年は「奉天トモダチ会」の名で「満洲伝説アルバム」「満洲補充読本アルバム」等を同志と共に毎月奉天から放送してゐます。（後略）¹²

鉄道土木の技師をしながら、創作やラジオ放送等の子ども文化に本格的に取り組んでいた山田にとっては、この転勤は、適材適所であつたといえよう。

石森は一九三九年三月帰国し、文部省の図書局図書監修官となる。しかし、山田と石森の縁は、満洲を通してつながっていく。

鉄道総局旅客課にあった山田は、一九三九年に行われた「日滿綴方使節」¹³の催事に企画から実施まで全面的に携わっている。

「日滿綴方使節」とは、内地の小学校高学年を対象に満洲に関する課題作文を課し、優秀者を「満洲の見学交歓親善旅行」に招き、その印象記を綴方にして出版するというものである。主催は、（満鉄）鉄道総局営業局旅客課と大阪毎日新聞社、東日小学生新聞との共同主催で、さらに日本側、満洲側が共に賛助後援するという一大イベントである。応募数約三千名の中から選ばれた十名は、二十日間の満洲の旅を終え、その成果は、『綴方満洲』¹⁴として出版され、その後書きを山田が書いている。そして石森は日滿綴方使節選者（菊池寛、久米正雄、久留島武彦、安倍季雄）の一人に名を連ねている。山田は満洲にあって、日滿の橋渡しとして活動し、石森は日本国内にあって、満洲と関わっていったということである。

この企画は一回目が想像以上に大成功だったので、その後二回、実施された。内容は第一回とだいたい同じ。そのうちの一回は綴方

使節は日本人だけ。もう一回は、建国二六〇〇年記念として、日本、ロシア、韓国、漢民族、蒙古から二名ずつ計十名選ばれたという¹⁵。山田は、「満洲文芸家協会」（一九四一年七月二七日に結成）会員でもある。

一九四五年敗戦。山田がいつ、どのように日本に引き揚げてきたか等の詳細は不明である。

一九四九（昭和二四）年、山田は、草加幼稚園を設立する。その園長を約三十年務め、そのかたわら、児童文学に精進する。

一九四九年、『南極捕鯨物語 少年砲手長』（内田書店）という冒険少年小説を出版。この作品はのち、『波濤を越えて』（一九五二年金の鈴社）と改題し、再版される¹⁶。一九五五年、『南極捕鯨物語 光る氷山』（国際図書）という海洋少年小説を発表。これまでとは、全く作風の違う作品群である。

その他に、子供の雑誌に執筆、童謡・校歌・社歌・子供讃美歌等も制作したという。山田の放送との関わりは戦後も深く、NHK連続放送劇原作をはじめ、放送台本執筆約五百冊、放送約三百回を数える。また、ステージ放送、学校講演（幼稚園・小・中・高等学校）等数知れず活躍したという。¹⁷

一九六七年、『満洲開拓少年義勇軍』（草加幼稚園出版部）を出版する。山田は満洲在住時より「少年義勇軍」に強い関心を持ち、それに関する出版物もある。が、戦後、それに関して記録の整備も、総括もなされないままになっていることに義憤し、「大陸に散った若い魂を思えと、しばしば、世にうつたえる文章を新聞等」に投稿していたという¹⁸。その思いが、戦後二〇余年を経たこの書の発刊となったのである。翌年『曠野にかける虹』（草加幼稚園一九六八）を刊行する。帰国後も、山田の心には、常に満洲への思いがあったということであろう。

一九七六（昭和五一）年、山田は七三歳で永眠する。

二 山田の児童文学観

「満洲日日新聞」¹⁹紙上で「満洲童話界に聴く」というシリーズの連載があり、数名の童話作家が寄稿している。その中の一人に山田もあり、そこで自身の児童文学観を次のように述べている。

私は美談的な、修身式な講談社スタイルの、あの品のなさに、出来るだけ文学的要素を力一杯表現して、實話風な童話の取材に、又構成に、表現に努力するのも一つの途と確信してゐる。書く方（創作）以外に話す方面も立派な童話の一つであり、恰も車の両輪の如きだと信じ、直接児童に生々しき印象を以て童話を話しかける事も是非必要だと痛感してゐる。

従来内地の童話家ばかりを招じて、日本の話しを話して、素通りして過ぎて行く方法よりも、もつと満洲を知るものが満洲の話を話して廻る方が、より効果が多いと思つてゐる。

（一九三六年三月十四日付「満洲童話界に聴くE」「實話風に」）

山田は、「美談的な、修身的な講談社スタイル」に、文学性を加味しようとした。実話に題材を求めると同時に、創作であっても「實話風」に描くように努力しているという。また、「書く」童話と「話す」童話は共に立派な童話で、「車の両輪」のようなものであるという。そしてより印象的な表現で童話を話すことの必要性を説いている。さらに、満洲を知るものが満洲の話をすることの大切さをも語っている。

山田は、満洲を背景に、童話を創作し、ルポを書き、口演童話を語り、ラジオ放送で話す。これら多岐に渡る活動は、根元は同じで、すべてこの児童文学観より発しているといえよう。

第二章 作品（一）——『高粱の花環』

山田の代表的な満洲童話集は五冊ある。『高粱の花環』『慰安車』『少年義勇軍』『國境のお友達』『娘々祭の頃』である。このうちの『國境のお友達』は、前の三冊に収録された作品と重なる作品が多く、『娘々祭の頃』は筆者未見であるため、本稿では、前の三冊を取り上げ、各童話集の特徴と、収録された作品を通して山田の精神世界を探る。

一 書誌事項

『高粱の花環』は、一九三四（昭和九）年九月九日、東京の新生堂より出版された。四六版。「序」（安倍季雄・上澤謙二・柿沼介）、「自序」（著者）本文二〇〇頁。装幀は甲斐巳八郎、挿絵は江島京之介・竹田一路・河野想多・國井眞・甲斐巳八郎。定価九十銭。山田の処女出版である。収録された十編は、これまで雑誌や新聞で発表し、さらに、放送口演を経て訂正、加筆した作品で、ほとんどが新聞記事となった実話にヒントを得ているという²⁰。主要人物のモデルの多くが、鉄道沿線中間駅を背景に守備隊の兵隊や満鉄社員の子どもたちである。

安倍季雄は「序」で、山田がこれまで書いてきた「作品の凡べてを通じて、最もよく現はれて居る特色は、眞實味であり、満洲色である」と述べている。そして、山田は「自序」にいう。

「満洲の子供」に「びったりした童話」、「口演出来る満洲の童話」、「讀むお父さんも話すお母さんも、共に緊張出来る童話」、「若い太陽の満洲、虹の國の満洲、國際愛溢れてゐる満洲を知らせる童話」、こんな「要求の一部を充す意氣と祈りをこめて世に贈」るとある。

収録作品は以下の十編である。

「本當に強い兵隊さん」「涙の嘘つき」「尊い贈物」「高粱の花環」「宮様の記念碑」「總理大臣と鳩」「御大典の朝」「紙の金鵒勲章」「ポッポ一等兵」「氷の記念碑」

二 収録作品概要

収録作品の多くは実話をもとにしている。だが、一般に新聞で紹介される実話自体が讃美されるべき美談であることが多く、そのためか、あるいは、作者の創作姿勢なのか、おそらくはその両方であろうが、いずれも、皇軍讃美、「五族協和」を前面に打ち出した啓蒙色の強い作品となっている。次項「三」で取り上げる三作品を除く七作について、内容の概略を述べる。

「涙の嘘つき」は実話に基づく。破壊される度に線路を修理する鉄道修理列車の満鉄作業員のもとに、斥候に出て帰ってきた小隊長のためにと食べ物を買いにきた兵卒。その兵卒の言葉から、彼らがみな何も食べていないと知った食事係が、自分たちの食べる分まで与えるという話。兵隊と満鉄作業員との一体感を強調している。

「貴い贈物」は、半分実話。「普通学堂」（朝鮮人の小学校）の設備の貧しさを気の毒に思った「清」は、スケート靴を買うために貰ったお金を名も告げず寄付する。その心に感動した「普通学堂」の校長が保護者に呼び掛けて、新しい校舎を建設。その引越しを「内地人、朝鮮人、満州人」の子どもたちが手伝うというもの。「五族協和」をテーマにしている。この作品については、「第三章」で再度取り上げる。

「宮様の記念碑」は実話に基づく。本線からはずれた鉄道の小さな満洲人の家。日露戦争の頃、その家に「伏見の宮様」が泊まったということ、その満洲人の家族は「家の寶」として敬っている。

それを知った「御尊影切抜保存會の會長」の清水さんが記念碑建設に奔走する。「大満洲帝國の大功勞者小磯參謀長」を迎えての落成式が行われる。「參謀長」は子どもたちに「これからの満洲は君たちの手で創り上げてゆかねばならない」と語りかける。満洲人にまで及ぶ皇民化を強調する作品である。

「總理大臣と鳩」は実話に基づく。「満洲國」の初代總理鄭孝胥の逸話である。人間味あふれる總理の姿を偉人伝風に描いている。石森はこの作品を「満洲文庫」文学篇『満洲新童話集』（緑版）に収録している。詳細については「第Ⅲ部・第七章」を参照願いたい。

「御大典の朝」は創作である。一九三二年三月一日、「三千萬の満洲人と九千萬の日本人が待ちに待った満洲國大典」の日。「孝治」と「忠雄」は、鹵簿（儀仗兵に警護された行幸）を見るために、早朝から場所取りをする。だが、夜通し歩いてきたという「満洲國のお爺さんとお婆さん」に席を譲ってやる。「満洲國」建国を満洲人も日本人も喜ぶ姿を描き、建国を讃えている。

「紙の金鵒勲章」は創作か実話か明記されていないが、内容から創作であると思われる。同じ列車に乗り合わせたことから、貧しい日本人少年の代わりに、栗売りをしてやる心優しい兵隊。行き違いで帰隊が遅れ厳しく罰せられる。が、お礼に訪れた少年によって誤解が解ける。少年はその兵に感謝をこめて紙で作った金鵒勲章を贈る。優しい兵隊と子どもは、満洲童話の一つのテーマである。

「ポッポ一等兵」は創作である。鳩が大好きな守備隊の山下さんは、傳書鳩の係となり、ポッポ一等兵と呼ばれる。匪賊討伐で伝令に飛ばした最後の一羽も撃たれる。応援に駆け付けた守備隊は、高粱畑の陰で鳩を抱いて戦死しているポッポ一等兵を見つける。鳩を愛する心優しい兵士の話である。

以上、七作について内容の概略を述べた。これらの作品に共通するのは、自己犠牲的な思いやりの心であろうか。

三 個別作品

（一）「本當に強い兵隊さん」

前述したが、この作品は、実話をもとに書かれた作品である。満鉄社員会の機関誌「協和」で行われた「讀者文藝」懸賞募集の童話部門で一等賞を受賞し、一九三一年一月一日発行の「協和」（第四一号）に掲載された。のち、この作品を読んだ安倍季雄によって、「兵隊さんのお臍」という口演童話に改作されている。

大平原の真中、氷のような風が吹きつけるなか、線路に沿って巡回していた二人の守備隊の兵隊が、鉄橋のそばを歩くロシア人少年を発見する。ハルピンから歩いて奉天にいる父親を探しに行くという。二人は、少年をおぶって支那町に行き、一人は懷中時計で、一人はシャツを脱いで、それぞれお金に換え、切符と食べ物を買って、少年を列車に乗せてやる。列車のなかでさめざめと泣く少年にそのわけを尋ねた巡査によって、守備隊の隊長の知るところとなる。隊長は全員の前で、「この二人の様に、可哀相なものを見て、それを助けるのが『本當に強い兵隊さん』なのだ」と二人の善行を讃える。

ロシア少年の名はホロノフ、父親は白系ロシア人、守備隊の二人は川合、藤澤上等兵。人情味ある優しくて強い日本兵は、作品でしばしば描かれる人物像であるが、この作品の場合、実話に裏付けされた真実味がこの作品を良いものになっている。

石森はこの懸賞童話の選者であった。同誌「讀者文藝選評」欄で山田の作品を次のように評している。

童話を書かうとする人の態度が、はつきりきまつてゐないのがものたりなかった。（中略）童話にもやはり童話でなければなら

らぬ範囲がある。童話を描かんとする人はまづこの範囲を感得することが第一であらうと思ふ。（「童話の境地」）

さらに続けて、石森は童話について次のように述べている。

（前略）大人の生活にも童話風景があり、自然そのまゝの中に、童話雰圍気が湧いてゐる。作者は、そこを把握すべきである。童話には、「語る童話」と「読む童話」とあるが、「読む童話」は、文學の形式をとらねばならぬ。そこで文學の表現を考慮しなければならぬ。「読む童話」をかく人の苦心はこゝにある。

これから童話創作をこゝろざす人は、「書くべきもの」と、いかにして「書くべきか」を心得るべきである。（「童話の境地」）

この評を読むと、石森と山田との目ざすところの違いがよく現れている。石森が目指したのは、「芸術性」を重視し、文章の美しさを追究した「読む童話」であつたのに対し、山田の目指す「童話」は、「語る」要素と「読む」要素の両方を備えた童話であつたということである。

安倍季雄は、この話を「國際童話として、優れた話材だ」と思い、「兵隊さんのお隣」という口演童話に改作している²¹。

阿倍の改作では、守備隊の二人は、「母思い」で、一人は背が高く、一人は背が低いユーモラスな二人組となっている。原作の「父」は「母」に変わっている。母を捜しあてたロシアの少年。その母から守備隊の隊長のもとに拙い字で書かれた手紙が届き、はじめて二人の善行が明るみにでる。二人は、「陛下の軍人の眞價を外國人にまで知らせてくれた」と讃えられる、という話になっている。母思いの兵隊に母を探し歩く少年という、物語性をより強めた、情に訴えかける作品に換えている。

（二）「高粱の花環」

蒼空と高粱畑……

他になにも見へない曠野を二本のレールが眞直に走つてゐます。

カラン……コロン……

カラン……コロン……

がつしりした鋼鐵製の汽車が鐘を鳴らしながら驛と驛とを結んで行きます。

驛と云つても普通の家のやうな小さな建物に、四五人の人が居るだけで、裏の方には其の人達の住居と交番が原の眞中にポツンと建つてゐるだけです。（中略）

満さんは毎日長い貨物列車の後に附いた車掌車に乗つて二つ南の驛にある學校から歸ると、直ぐ驛のホームに行つて一人で遊びました。

このような冒頭文で始まるこの作品は実話をもとにしている。

「満さん」のお父さんは満鉄の職員で転勤になり、奉天から越してきたばかり。「満さん」は遊び相手を探すが、赤ちゃん言葉の通じない満洲国の子どもかお婆さんぐらい。「満さん」は駅の前の守備隊の兵隊と仲よくなる。内地から送つてきた柿羊羹をすすめると兵隊は遠慮がちに取る。そこへ銃声。馬賊の襲来に、食べかけの羊羹をポケットに入れ、兵隊は駅の方に駆けだした。馬賊はたくさんの死骸を捨てて逃げるが、日本の兵隊が一人死ぬ。その兵隊のポケットから一切れの羊羹がでてくる。「満さん」はその仲よしだった兵隊のために、高粱で花環を作る。

關東軍司令官

滿鐵總裁

關東長官

等の偉い人々から贈られた大きな美しい花環の中に、みすばらしい小さな高粱の花環がお骨の一番近くに飾つてありました。

(中略)

「立派な花環を有難う：戦死した兵隊さんは君のあの高粱の花環を一番喜んでゐますぞ：わしがかわつて厚くお禮云ひますぞ」

生れてから未だ一度も泣いたことのないやうな隊長さんは眼頭をおさへながら申しました。

感情表現はほとんどないが、標題作であるこの作品が、一番少年の心を描いているように思われる。この作品には建前もスローガンの表現もほとんどない。仲よしだった兵隊の死を悼む思いを手作りの高粱の花環で表した少年。その少年の心に山田は共感したのであろう。

(三)「氷の記念碑」

この作品は「滿洲國大典慶祝放送」のために書かれた戯曲で、山田の創作である。「(一九三四年)三月三日滿洲國帝制實施奉祝のため、大連放送局から全國に中繼せられ、非常な好評であつた」と「童話教育」の「童話界消息」(一九三四年四月一日)にある。「滿洲國」建国は一九三二年三月一日。その時執政となつた溥儀は、一九三四年皇帝となる。「滿洲國帝制實施奉祝」とは、そのことを指している。

この作品は三景からなる。

一景は、四年前、新京に近い片田舎。秋の刈り入れが済んだ満人

家族が馬賊に襲われ、息子秀盛がさらわれる。駆けつけた公安隊は息子を助け出す条件に、家と高粱を家族から取り上げる。

父「エッ！此の家と高粱全部？：でも・貴方は立派な公安隊の方々、澤山お給金を頂いてゐるのではございませんか？」

公「それは表面だけのこと：給料どころか兵營も荒れ放題、寒くて夜もろくろく眠れないのだ」

父「御冗談を：噂に聞けば大將様は何千萬圓のお金持ださうではございませんか。」

公「それはさうだ。けどその金は全部自分一人のぜいたくと飛行機や大砲を作るために使つてしまふのだ」

「大將様」とは「張学良」のことである。張作霖爆殺後、父の跡を継いだ張学良は蒋介石から「東北辺防總司令官」に任命され、滿洲の実権を握り、激しい排日運動を展開した。その「張学良」は私利私欲にかられた無能な大將として描かれ、その部下である公安隊も盜賊まがいの輩に描かれている。

二景は、一週間後の同じ村。

父「ム：支那の兵隊が日本の鐵道を爆破して、おまけに兵隊さんを射_{ママ}つたらしいんだ」

(中略)

父「本當だとも、それでどうく　日本軍がおこつて改_{ママ}めて來たのだよ。もう寛城子の支那兵も皆降参してしまつたそ_{ママ}うだ。

(中略)

姉「やつぱり日本の兵隊さんは強いね」

父「そうだ、あんな支那の兵隊が、どうして日本に勝てるもの

か！」

母「マア：：そんな大きな聲で：：若し近處に聞えたらうるさいじやありませんか」

父「かまふものか、近所の者もみんなそう言つてゐるんだもの。そうして大將を満洲から追ひ出して、新しい王道の國を作らなければ、わしたちは一生涯浮ばれないつて：：」

「支那の兵隊が日本の鐵道を爆破」したとあるのは、満洲事變のきっかけとなつた「柳条湖事件」を指す。しかし、真相は、関東軍が奉天柳条湖附近の満鉄線を自ら爆破し、それを中国軍の攻撃とみなして軍事行動を起こし、一挙に満洲を武力で制圧したのである。

物語は、日本の兵隊によつて、息子秀盛も助けだされる。「(日本の)兵隊さまは私たちの神様です」と父親はありがたがる。だが、そこへ支那軍が進軍してくるとの報に「日本軍はどんな澤山の敵でも絶対に逃げないのだ」と迎え撃つ。秀盛を助けた日本兵が撃たれ、「隊長殿：：お母さんのことをお願い致します：：天：：皇：：陛下：：萬歳」と息絶える。

三景は、ご大典の前の日から当日にかけて。同じ場所。

姉「(前略) こんな立派なお國が出来たのも、みんな兵隊さん達のお蔭ね」

秀「ほんとに：：それに今度の天子様、とてもお情け深いお方だつて、先生おつしやつたよ」

秀盛は、ご大典記念に戦死した兵隊のために記念碑を作ることと思いつく。秀盛の級友たちと家族が力を合わせて徹夜で作りあげる。日の丸と満洲国の旗が飾られた、土を凍らせて作った「氷の記念碑」である。

「満洲国」建国の正当性を前面に出した啓蒙色の強い作品である。当時、満洲にあつても内地にあつても日本国民は、「満洲国」建国は、圧政に苦しむ満洲の民を救うものであつたと信じこまされていたのである。

子ども向けの放送について『満洲忘じがたし』²²に次のような記述がある。

(前略) 童話、児童劇にしろ、ニュースにしろ、あらゆるものが、戦意向上、戦略増強をねらつたものに限定されていたし、放送原稿は、関東軍の嚴重な検閲を必要とされていた。(後略)

この引用文は、一九四三(昭和十八)年頃、新京で子ども向け放送に従事していた者がその頃の状況について述べたものである。一九四三年は太平洋戦争の真つただ中で、戦局がいよいよ厳しくなつてきている状況である。山田が「氷の記念碑」を書いた一九三四(昭和九)年頃にそのまま当てはめるのは早計ではあるだろうが、検閲に関してはおそらく同じ状況であつたと考えられる。山田のこの作品が検閲によつて啓蒙色を強く打ち出したものかどうかは推測するしかないのだが、筆者は、山田自身、「満洲国」建国に強い期待を持つており、「五族協和」を目指した国家建設であると心底信じていたのではないかと考えている。

四 『高粱の花環』の評価

石森は『高粱の花環』を読む「(石森スクラップ 52)」で、次のように述べている。

「郷土に根ざした文學を生まなくてはならぬ。」とよく満洲の

人はいふ。しかし、郷土のものになるには、短かい時間ではできない。郷土らしいものを生む以前に、郷土の人になつてしまはねばならぬ。(中略)

山田健二君の童話集「高粱の花環」はおちついてゐて、満洲らしいのである。このらしさがうれしかった。それに山田君は、童話をかたれる人だから、さもお話してゐるやうに書ける。いひかへれば、子どもにとつては、いかにもよみやすいのである。近づきやすい。話す童話として持つ筋などもはつきりしてゐて興味がある。

山田君の日頃苦心されてゐる書く童話と話す童話の歩みよりを、この著書によつて、まづその第一歩を試みたやうに思ふ。おもしろい試みであるだけに難かしい遠い道があるのではあるまいか。

石森は、山田の作品を「満洲らしさ」と「よみやすさ」の二点を挙げて評価している。「本當に強い兵隊さん」評では、童話作品としての不足を述べていた石森であつたが、ここでは、「話す童話」と「書く童話」が歩みよつた「童話」を指す、山田の創作姿勢を理解し、エールを送っている。

第三章 作品（二）——『慰安車』

一 書誌事項

『慰安車』は、一九三五（昭和十）年十月一日、東京の新報社から出版された。四六版。「はじめのことば」（著者）。「序」（久留島武彦・安倍季雄・野邊地天馬）。本文一八四頁。挿絵は甲斐巳八郎・竹田一路。定価八〇銭。山田の二冊目の満洲童話集である。『慰安車』は去年お贈りした『高梁の花環』と兄弟です。『高梁の花環』は『事變滿洲』を背景にしましたが『慰安車』は『樂土滿洲』を描きました（「はじめのことば」と山田が書いている。この書に収められた十編はすべて山田の創作である。収録作品は以下のとおりである。

「青い赤ちやん」「日本の母と子」「國境のお友達」「凍った涙」「パッソルに霞む頃」「縛った慰安車」「新線開通」「成功した音楽家」「一錢の生命」「慰問袋往復」

二 テーマ別作品概要

ここでは収録された十編の作品をテーマ別に分けて、そのうちの特徴的な何編かについて考察する。ただし、「五族協和」をテーマにした作品（「青い赤ちやん」「國境のお友達」）については、「第五章」で述べる。

（一） 子どもの心

標題となった作品「縛った慰安車」を取り上げる。それは、満洲独特の「新風物」である慰安車に、満洲で暮らす子供心の一端を垣

間見ることができるからである。

「あゝ煙が見へたよ」

「ど……ど……」

「ほら……遠方信號機の後の山に……」

さつきからブラットホームに立つてみた二人の少年は煙の方を見ながら駈けだしました。

からん……からん……からん……

やがて列車は鐘を鳴しながら構内に滑り込んで来ました。

車の横に大きく「慰安車」と書いてあります。

驛の裏の社宅からお母様達が髪をかきあげながら……赤ちやんを抱きながらホームに集つて來ます。

「來了（ライラ）……滿洲國のをばさんが、かん高い聲で近處を誘ひ合つて、ちよこく 駈けて來ました。

駅長さんも駅の人達も仕事をやめて慰安車の側に集まる。年に二回の慰安車は中間駅に住んでいる人々にとって、大きな楽しみであった。三つの車輛は、品物を並べた車、食堂車、麻雀や碁盤等を置いた娯樂室から成り、夜には駅前広場で「活動」もあった。

慰安車が、明日にはもう帰ってしまうと知った二人の少年は、夜陰にまぎれて、慰安車が動けないように連結機と側のアカシヤの幹をロープで結びつける。見つかり大目玉を食らうが、二人の少年の気持ちを知った慰安車のおじさんに「隣の驛でもやつぱり大勢待つてゐるんだよ」と諭される。

慰安車の来訪を心待ちに、その周囲に日本人も満洲国の人も集まってくる。平和でのどかなひと時。中間駅のこの様子は、満鉄で働く山田の実体験からくる描写であろう。待ちに待った慰安車の来訪がわずか一日で終わってしまう寂しさを少年は幼い行為で留めよう

とする。そのいじらしい気持ちは、普遍的な子どもの心であろう。

(二) 日本人の心

「日本の母と子」「凍った涙」「一銭の生命」という作品に共通するのは、これら作品の中に日本人の美德とされる心情が見出されることである。

「日本の母と子」の主人公はあと二日で内地に凱旋する原上等兵である。

一年の間、同じ守備隊の兵隊さんの外には満洲人の百姓と豚と南京虫きり見られなかつたのに、もう四日目には活動寫眞で見た外國のやうな大連に行けるのです。

そして一週間目には、緑の葉蔭から黄色の蜜柑が鈴生りになつてゐる故郷に歸れるのです。

帰還を控え、原上等兵は、支那町で母親の土産に温かい毛皮の胴着を買う。だが、神戸に着いた原上等兵にもたらされたのは、「あの子が大任を果して凱旋する迄は、私の死を知らせないで下さい」という母親の遺言だった。ここでは、母思いの兵隊と「大任」の完遂を願う「日本の母の心」が美德として描かれている。

「凍った涙」は教師と生徒の信頼を描いている。一週間後に「全満對校」の競技を控えたスケートの合宿中での出来事である。鬼のように厳しい教師が生徒の寝た後、支那料理屋へ電話で豚まんを注文している。盗み聴いた生徒たちは憤慨する。が、その豚まんは夜にスケート場の整備にきた苦力たちに食べさせるものだった。苦力が食べている間、スケート場に水まきをする先生のもとに生徒たちが駆けよる。

厳しさの中に温情を備えている。そういう先生を慕う生徒。こういう先生と生徒の関係はより日本的な心情と言えないだろうか。

「一銭の命」は誠実さがテーマである。

駅前の小さな果物屋の息子「清」は、汽車が着くたびにホームでりんごを売っている。りんごを買った「満洲國のおぢさん」に渡すおつりがなく、その「一銭」を返すために、夜中の汽車の到着時にもホームに立つようになる。無理がたたって病気になる。同級生たちがかわるがわるホームに立ち、その人を見つけてやる。が、それで安心したのか、「清」はその夜亡くなる。

「たとへ一銭でも餘計にはもらへない」と「清」は毎日毎晩、ホームに立ち、帰りの汽車に乗る「満洲國のおぢさん」を探す。この「清」の誠実さを作者は尊いと考えている。ここには、傍からみたら、些細な事であっても、誠意を尽くすことの大切さ、そしてそれが異民族に対するとき、その誠実さは民族間の信頼という点でより大きな意味を持つ。ここではそれをも視野に入れて山田は書いているのであろう。

孝養と大義（「日本の母と子」）、温情と厳格さ（「凍った涙」）、誠実さ（「一銭の命」）は、いずれも当時、特に日本人の美德としてもてはやされた精神であり、それらを山田は尊いものとして描いている。そこに、満洲で育ち、満洲をこよなく愛した山田の中にある、日本人としての精神世界が現れているように思える。

(三) 兵隊と子ども

満洲（支那）を舞台とした児童文学作品の大きなテーマの一つは、兵隊と子どもとの関わりである。山田は「慰問袋往復」でそれをテーマにしている。

「熱河の兵隊さんに慰問袋を送らう」と友達同士で決めたものの、

父のいない「満夫」は何も買えない。片側の板のとれた大切なハーモニカと手製の日の丸の旗を慰問袋に入れる。

その慰問袋は「鐵道線路に出るには木の蔭一つない原を四日も五日も歩かなければならない」熱河の守備隊のもとに届く。兵隊たちが大喜びして慰問袋を開ける中で、涙をぬぐっている「鬼上等兵」がいた。他の兵隊たちもみな、「満夫」の手紙と品物に心うたれる。彼らは役目を果して凱旋することになり、大連で見送りに来ていた「満夫」に、戦勝報告をして新しい日の丸と新しいハーモニカを贈る。

兵隊を励まし慰問袋を贈ることは、戦中の子どもたちの美德とされた。この作品には品物の良しあしではない。大切なのは、武運を祈る気持ちであり、その気持ちは必ず兵隊たちの力になるのだという、メッセージがこめられている。満洲であつても内地であつても、少国民たちが求められた精神であつた。

『慰安車』に収められた十編の作品について、「序」の中で、久留島武彦は「取材」が「清新」で、「行文にも組織にも、一貫せる純情の迫力は、近頃稀に見るところのものである」と讃え、安倍季雄は再度、山田の作品の特徴を「眞實味であり、満洲色」と述べて、山田を「新興満洲の新しい童話家」と呼ぶ。野邊地天馬は「各篇とも童心に迫るものがあり、幾度か涙を催した」と書いている。

山田の筆は、中間駅の出来事や車中の人々の様子を描く。その描写は生活実感に裏打ちされているからであろう、生き生きとした人間の営みを感じさせる。作品に登場する子どもたちは、純朴でおおらかで、そして「清く正しい少国民たち」である。作者の分身であるのかもしれない。

三 『慰安車』の評価

『慰安車』は「童話研究」(一九三五年十二月)の「新著を読む」に取り上げられ、次のように紹介されている。

(前略) 著者山田健二は満洲第一の創作童話集^{ママ}、本會大連支部の有力會員であるが、この童話集は同君の滿鐵勤務の體驗の中より生まれでた書である。空漠たる滿洲に如何に幼い魂が芽ばえゆくか、最も切實な問題がそのまゝ童話になつてゐる。語つても語つても語りたりないのは滿洲の話である。しかもうるほいあり、情操を陶冶する話は至つて少い。童話家教育家諸氏に絶好の滿洲童話集としてすすめる。

「滿洲第一の創作童話集」とあるのは、「滿洲第一の創作童話家」の誤植である。山田は「滿洲第一の創作童話家」として認められている。そして『慰安車』は山田の実体験から生れた滿洲童話集であり、一般的に滿洲を題材とした作品には、「うるほい」や「情操を陶冶する話」は少ないが、山田の作品にはそれらが備わっており、推奨するものであると述べられている。この書によつて山田の童話作家としての更なる一步が刻まれたといえる。

第四章 作品(三) — 『少年義勇軍』

一 書誌事項

一九三八(昭和十三)年十二月二十日、満鉄社員会(大連)によって刊行された。四六版。「序」(安倍季雄)。「自序」(著者)。本文一八七頁。挿入写真(伊達良雄)。定価八〇銭。山田の三冊目の満洲童話集である。収録された十編は、前著書と同じように、「美しい満洲、正義の満洲、平和の満洲を描いた實話風の童話や物語」で、「満洲は勿論、日本内地の少年少女と、そのお父さん、お母さん方に満洲の本當の姿を知るために読んでいただきたい」と「自序」にある。書名は『少年義勇軍』となっているが、少年義勇軍を描いた作品は「饒河少年隊」一作のみである。「私は此の少年義勇軍がとても好きですし、また今年は少年義勇軍が、初めて出来た記念すべき年なので此の本の題」にしたという(「自序」)。この童話集の特徴は、満洲に新しく出現した開拓村や少年義勇軍を描いたこと、満洲の発展に尽力した人物の実録が収められている点である。

収録作品は以下の十編である。

「中間驛の出来事」「苦力の神様」「お星さまと大蛇」「舊師を訪ねて二十年」「饒河少年隊」「金鵒勲章と盲馬」「クリスマス・プレゼント」「必ず死ぬ病氣」「少年移民隊長」「馬に乗ったラマ僧」

二 収録作品概要

ここでは、後述する「饒河少年隊」「少年移民隊長」以外の八作品の概略を述べる。

「中間驛の出来事」は小学三年生の男の子が主人公である。舞台

となっている車中はなぜか日本人の乗客ばかりである。行楽客で埋まった車に病気の赤ちゃんを抱いた母親が駆けこんでくる。大連の病院に連れていくのだ。誰も席を譲らない。正ちゃんも疲れていたが、席を譲る。さらに「病気の赤ちゃんが乗ってゐるんだから、全速力で走らせてよ」と機関士に頼む。行楽帰りの車中の人々の様子、病気の子どもを抱く母親の猶予ならざる様子や少年の気持ちに込める機関士の姿が生き生きと描かれている。

「苦力の神様」は、明治の終わり、奉天の病院で苦力のために医療活動に従事し、それがもとで伝染病に倒れたイギリス人ジャクソン医師の物語。「必ず死ぬ病氣」は、奉天の「獣疫研究所」で働く伊地知季弘獣医の物語。鼻疽に感染し、刻々悪化する自分の病状を記録し、検体した。ともに、実録である。

「お星さまと大蛇」は大連にある風光明媚な土地「星が浦」の伝説である。海辺の崖下に住む大蛇に狙われた村長の一番上の娘。その姉を守るため、姉妹みんなが毎夜神に祈る。約束の日、流れ星が大蛇を退治してくれる。

「舊師を訪ねて二十年」は実話である。遠足でセメント工場を訪れた六年生の一人が、その工場の大切な「鐵の球」を盗む。担任は責任を取って学校を去る。それから二十年、今では駅長になった当時の少年が先生の居場所を訪ねあてる。だが、先生はすでに南洋で亡くなっていた。この作品では、過ちを悔い、大成してからも自分のために学校を去った先生を探し、慕う人間の真心を描いている。

「金鵒勲章と盲馬」は軍馬とその馬係の物語である。馬太郎は軍馬「大和」と斥候にでて、敵の襲撃に遭う。負傷するが、手柄を立てたと勲章を貰い徐隊する。だが、行方不明の「大和」が忘れられず、再び満洲へ。そこで目を負傷しながらも生きていた「大和」と再会する。ドラマチックな展開で軍馬と馬係の絆の強さを強調している。おそらく創作であろう。

異民族の子どもが登場する作品が二作ある。「クリスマス プレゼント」と「馬に乗ったラマ僧」である。前者は日本の少女とロシアの少年との関わりを描き、後者は蒙古の少年と日本の守備隊長との物語である。この二作品については、「第五章」で考察する。

三 開拓村を描いた作品

満蒙開拓移民は、一九三二年から一九三六年までの試験移民期を経て、一九三七年「二〇カ年一〇〇万戸移住計画」が決定し、本格移民が始まる。

だが、満蒙開拓移民は、試験移民期から問題続出で決してうまくいってはいなかった。「周辺の反日気運や反日農民軍の攻撃で退団者が続出」（『満洲』の歴史一九四頁）。次に、「農業技術」の問題があった。内地で行っていた農法は満洲の風土に適さず、その後、北海道方式も取り入れられてはみたが、成功したとはいえなかったという。

「悲惨だったのは、青少年義勇軍だった。一四歳から一八歳までの農家の独身青少年で、満洲開拓に応募した者が集団で満蒙開拓地に配置されたが、厳しい開拓生活のために精神的な不安定さや孤独感から脱落したり、精神病にかかり帰国の途につくことを余儀なくされるケースが多かった」（同 一二五頁）という。

では、山田は開拓移民をどのように描いたか。

（一）「饒河少年隊」

この作品は、「匪賊討伐の際腰部を強打、治療のため飛行機で飛んで来たS少年（十八歳）」から「聴きながらノート二冊に寫したそのまますを原稿用紙に書き直して、ある大人の雑誌に発表した」（七二

頁）ものであるという。

「饒河」は「河一ッ隔ててソ聯に對した滿洲國東部國境」にある。すでに一九三四（昭和九）年の秋から入植している。饒河少年隊は「百萬少年移民の先驅」として、満洲移民計画の産みの親である「東宮中佐」によって選抜、結成された。当初十三名、翌年三〇名となり、一九三七（昭和十二）年には百名近い隊員がいた。彼らは「百萬少年移民の指導者となる」べく教育された。「骨の髄まで皇道精神でかたまつた」法元辰二寮長のもとで薫陶を受け、「神田大尉」の「徹底的なスパルタ式の教育」を受け、「大穂縣參事官」から「皇道世界宣布の大精神」を説かれた。その「參事官」が「共產匪」の襲撃で戦死。少年たちは「師として尊敬し、兄として親しん」だ「參事官」の死を悼んだ。二五歳から十六歳までの少年たちは「毎夜二人ずつ一時間交代で銃を抱へて歩哨に立つた」。寮も道場も自分たちで建てた。これまでに、二名が犠牲となっている。一人は部屋の窓辺にいる所を銃撃され、もう一人は病気で亡くなった。

一日の日課は四時半起床、五時半点呼、食事ののち、六時から一時まで作業。午後は一時半から六時まで作業。夕食後、二時間の語学（満・露語）を主とした学習。九時半消燈。作業中は一切沈黙。合図はすべて大太鼓によつた。「上長の命令は飽くまで絶対」、「鐵拳制裁は撲られた者が、眞心から『有難うございました』と感謝して頭を下げるまで續けられた」、「あまりの苦しさに抱合つて泣いたことも一度や二度ではなかった」という。彼らは二年の修業ののち、「（前略）オホムネ國家有用ノ材タルヲ認ム」と東宮・法元両先生の署名・捺印された「修業證書」を授与された。

山田は冒頭で「この少年隊の生活ぶりこそ、國民精神總動員の參考として最も相應しい」と書いている。この作品は、文章化した時にいささか表現の誇張があつたにしても、聴き書きをそのまま伝える姿勢で書かれたおり、饒河少年隊の置かれた過酷な状況を十分に

伝えている。

(二)「少年移民隊長」

「饒河少年隊」がルポルタージュであったのに対して、「少年移民隊長」は創作である。

土曜日に父親が馬で迎えに来て移民村に帰り、土日は家族と過ごし、月曜日の朝には父親と馬に乗って学校へ戻り、一週間の寄宿舎生活を送る。学校は支那家で教室が二つ。生徒はあちこちの移民村から来ている一年から高等二年まで合わせて三十人余り、先生は校長先生と奥さんの二人きり。

そんな移民小学校で学ぶ民ちゃんは一年生。三月の末、いつもより遅い父親の迎えを待っていた。父親の代わりに迎えにきた隣の叔父さんと家に帰った民ちゃんは、父が匪賊（共産匪）に襲撃されて死んだことを知る。盛大な葬儀が営まれる。内地に帰るか、それとも残るか決めかねている母親に、民ちゃんはここに残ると言う。「満洲の土になる決心は、我々以上なのだから、精神的には立派に隊長の資格はあるよ」と団長。畑は民ちゃんが大きくなるまでみんなで耕してくれることになり、民ちゃんは父の跡を継いで「少年移民隊長」となる。

冒頭で移民村の子どもたちの生活が紹介される。家族のもとで過ごせる土日がいかにも待ち遠しいものであったか。民ちゃんが火の無い寄宿舎で薄暗くなっても一人父親の迎えを待つ姿はいじらしい。多くの開拓民の子どもの姿であったろう。父親を失った民ちゃんは内地に帰らず、「満洲の土」になることを選ぶ。山田は民ちゃんの決心を讃えることによって、満洲移民推進の国策をバックアップしている。

この作品を、山田は一九三八（昭和十三）年十二月二七日午後六

時、奉天のラジオ局から「子供の時間」に「満洲童話」として物語っている。

第五章 山田作品に見る「五族協和」

山田は「五族協和」をどう描いたか。ここでは、前述した山田の三冊の童話集(『高梁の花環』『慰安車』『少年義勇軍』)から、「五族協和」をテーマにした作品を選んで検証する。

一「五族協和」をテーマとした作品

(一) 日本人の母と満洲人の赤ちゃん―「青い赤ちゃん」

「青い赤ちゃん」(『慰安車』に収録)では、日本人の母と満洲人の赤ちゃんとの関わりを描いている。冒頭は次のように始まる。

噴い野原を汽車が走つてゐます。

汽車の中には日本人や、満洲人のお客さんが一ぱいです。

大きな口をあけて居眠りしてゐるをばさん……、つばきをはねとばしながらお話をしてゐる満洲人……、煙草を吸ひながら新聞を見てゐるをじさん。

茂と令子は母親に連れられて奉天の叔父を訪ねるところである。隅の方で赤ちゃんの泣き声。「苦力らしい満洲人が、着物と同じやうに汚れた布團で、赤ちゃんを巻いて抱いてゐます」。瘦せて「青い顔」をしたその子には母が無く、腹をすかせて激しく泣いている。兄妹があやしても泣き止まず、自分たちの母親のもとに連れていく。

「ね……お母さん……今兄さんと二人でいくらあやしても黙らな
にのよ、お母さんのお乳やつてちやうだいよ」

兄妹は両方から一生懸命に願ひしました。

「まあ……それはかはいさうに……では澤山飲ませてあげませう」
お母さんは二人の顔を見ながら嬉しさに両手を差出ししました。

「ほんと？……だけど、この赤ちゃんとても汚ないのよ、臭いのよ、ほら……こんなに虱が列んでゐてよ」

「え、かまひませんよ、お母さんはお前達のやさしい心が嬉しくてたまらないのです。さあ……早くおだし……」

「そんなら僕虱つぶしてあげるね」

「お母さん、私抱いてゐて飲まされない？お母さんの綺麗な着物汚されたら大變でせう」

「そんなら僕、間に新聞紙はさんであげるよ」
「いいのよ、このまゝで……」

母親はその赤ちゃんにたつぷり乳をやる。頬に血の氣の戻った赤ちゃんは居眠りをしだす。

いつの間にか、お父さんの苦力がそばに來て床に膝間づいてゐました。

汚れた頬に涙の流れた跡がはつきり残つてゐます。

「も一度降りる時に、飲ませてあげませうね」

お母さんは襟を合わせながら優しく言ひました。

かつて「もらい乳」という言葉があった。乳の出の少ない産婦が近所の乳飲み子を持つ人に頼んで、我が子にその人の乳を飲ませてもらう。その場合は、近所の人か顔見しりであった。この作品の場合は、日本人の母親と満洲人の子との「もらい乳」であるところに作者は意味を持たせている。ひもじくて泣く乳飲み子は汚れて臭く

風がわいている。そんなことに構うことなく日本人の母は喜んで乳を与える。その母の行為に涙を流して感謝する苦力。この作品で山田は、乳飲み子を通して生れる日本人と満洲人との心の通い合いを描こうとしたのであろう。だが、日本人の母は「慈母」の如く神々しく、苦力は慈悲にすぎるようにそのそばで膝間づく。この作品の中に恩恵を施す日本人優位の意識を見ることはできないか。

ところで、この話の設定には無理がある。兄は小学生低学年くらい、妹はままごと遊びができるくらいの子どもで、すでに乳飲み子ではない。母親が乳飲み子に授乳できる条件はすでに無くなっているはずである。

(二) ロシア人少年を描いた作品二編

―「クリスマスプレゼント」・「國境のお友達」

「クリスマス プレゼント」(『少年義勇軍』所収)は長春(のちの新京)が舞台である。

クリスマスの催し会場の教会に、遠方からロシア人少年が母を訪ねて来る。少年の母親はこの長春でロシア語を教えているという。愛子は、自分の出番前に帰ってくるつもりで、少年をその母のもとに案内する。が、引越していてなかなか見つからない。やっと探しあてて帰ってきた時には、祝会は終わっている。愛子は残念に思いながらも、「嬉しく」思う。

日本の少女の親切で母との再会を果たしたロシア人少年。作品では夜に見知らぬ街で母を探すロシア人少年に同情した日本の少女の親切な心を描いている。異民族に対する親切な心は、「五族協和」のもとになる心である。日本人の子どもに望まれる姿として描かれているといえよう。

もう一編、ロシア人少年を描いた作品がある。それは、「國境のお

友達」という作品である。この作品は『慰安車』に収録されているが、山田の四冊目の満洲童話集『國境のお友達』の標題作にもなっている。この作品では、ロシア人のマルチック、満洲人の張(チャン)、日本人の正夫の友情が描かれている。

まず、あらすじを紹介する。

一日一回国際列車が通るだけの小さな駅が舞台。ある時を境に、その駅で働く人がロシア人から日本人に変わる。その駅の駅長だったマルチックの父親は失業する。張はその家の使用人の子だが、マルチックとは「兄弟のように仲よし」。そこへ、日本人の駅長の息子の正夫が越してくる。三人はすぐさま友達になる。ところがマルチックの父親が本国の大きな駅へ転勤することになる。離ればなれになりたくない三人は策略を練る。正夫の提案で仮病を使うマルチック。両親はマルチックの気持ちを尊重して、この地で百姓になる道を選ぶ。

少年たちの幼い策略に、大人が騙される。否、マルチックの両親は騙されたのではなく、友人と別れたくない息子の気持ちを思いやって満洲に留まることにしたのである。この作品では失業するマルチックの父親の背景にある、日本とロシアの複雑な状況やマルチックの父親の人生に対して何の考慮も説明もなく、ただ少年の民族を越えた友情のみに焦点をあてて、「五族協和」を描こうとしている。三少年の幼い計略は単純ではほえましいが、それで大人の人生が決まるのはあまりにも樂觀的であって、ここで描かれる「五族協和」が表面的に思える。さらに、人物造型が、日本人少年はリーダー的役割を担い、満洲人の張の影はうすい。これは、日本人が描く「五族協和」の作品に共通する一般的な造型の枠である。満洲で育った山田が描く「五族協和」もその枠にとどまっている点を、筆者は不足に思う。

(三) 朝鮮人小学生への贈り物―「貴い贈物」

「なぜ、こんなに違ふのだらう？ 同じ日本の子供でありながら：」

清さんは普通學堂（朝鮮人の小學校）の前を通る度に不思議に思ひました。

自分たち内地人の小學校は、まるでお城のやうに大きくて立派なのに、普通學堂は昔の寺子屋のやうに小さくてみすぼらしいからです。

「朝鮮人の小学生」を「同じ日本の子供」として捉える当時の考え方が、実生活において決して平等でなかったことを、図らずもこの作品は冒頭文で暴いている。この「貴い贈物」（『高粱の花環』所収）は、半分は実話に基づく作品であるという。

清たちの小學校にはスチームが通っているのに、學堂では小さなストーブが一つあるだけで、あまり寒い日には授業が出来ず、休校となる。クリスマスの日、休校となり學堂の門から大勢の朝鮮の生徒が引き返してくるのを見た清は、スケート靴を買うために親から貰った十円を匿名で寄付する。清の志に感動した學堂の校長は「父兄會」で訴え、役所や会社を訪ね、最後は校舎新築が実現する。一年後、新校舎への引っ越しの日、清はみんなに声をかけて「内地人と朝鮮人と満洲人」の小学生が、力を合わせて手伝う。落成式の日、清の善行は参列者の前で披露され、スケート靴が贈られる。

以上は、この作品のあらすじである。ここでは、どこまで実話かという詮索はしないで、一つの作品として検証する。

スケート靴を買うためにもらったお金を気の毒な普通學堂の小学生のために差し出す。「同じ日本の子供」なのに待遇が違うという率直な疑問が子どもらしい自己犠牲的な善行となる。だが、作品はそ

の善意に、いろんなものを付帯させて一つの小英雄物語としている。日本人少年の善行が、普通學堂の校長や保護者の意識を変え、劣悪な教育環境を変える原動力となる。日本人少年の声掛けで、「内地人と朝鮮人と満洲人」の小学生が力を合わせて引っ越しを手伝う。ここでも、日本人少年はリーダー的存在として描かれている。それはそのまま、植民地満洲における日本人の役割とされた考え方であるといえる。

(四) 蒙古人少年―「馬に乗ったラマ僧」

「馬に乗ったラマ僧」（『少年義勇軍』所収）は、蒙古人少年テムール（鐵木兒）が主人公である。

蒙古の伝統的な少年競馬の日。招待を受けた日本の守備隊長が車でくる。車に驚いた馬から落ちてけがをした弟の代わりに、今年ラマ僧となるテムールが出場し、優勝する。それを見た守備隊長はテムールを養子にしたいと申し出る。「東京に連れて歸って、大和魂のイロハから叩きこんで將來騎兵學校に入れ、思ひどほりの教育がしてみたいのです。十年後には、昭和の成吉思汗として、蒙古に錦を飾らせませう」と述べ、テムールは「エッ：：天子様のいらっしゃる東京：：僕行きたいです」と答える。

作品は蒙古の伝統的な少年競馬の様子を伝えると同時に、守備隊長に見こまれて、日本で十分な教育を受けられることを幸せに思う蒙古人少年の姿が描かれている。隊長の目ざす教育成果とは、つまり少年の「日本人化」を意味している。この作品の底には「優秀な日本民族」と「未開の蒙古」という意識がある。

二 山田が描く「五族協和」

以上紹介した作品の中で、山田は、異民族と日本の子ども、あるいは異民族と日本人との交流を描くことによつて、「五族協和」の象徴としている。だが、そこに描かれるのは対等な民族関係ではない。

一つは他民族のリーダー的存在である日本人の子ども像が描かれ（「國境のお友達」「貴い贈物」）、もう一つは援助する日本側と援助される他民族側との明確な位置づけがなされている（「青い赤ちやん」「クリスマス プレゼント」「馬に乗ったラマ僧」）。

植民地満洲において、日本人は文化的にも経済的にも優位の立場にあった。支配する側にあった日本人の立場、意識をそのまま反映しているといえる。

山田は民族を越えた友情、心の通い合い、助け合いを描こうとしたが、作品では常に日本人が助ける側にいる。これは、満洲植民地化の理念であつたが、それがそのまま作品に表れ出ているのは、山田の意識に、リーダーとしての日本人意識があつたということである。満洲で育つた山田であるので、小さい頃から満洲の人々と触れあい、付き合いながら生活してきたであろう。そうであるなら、作品にはもつと違う形で現れるだろうと考えるのは、筆者の思い違いであるのか。作品には満洲で暮らす人々の生活や雰囲気が出されている。だが、作品に描かれた満洲人像をみる限りにおいては、日本人と満洲人との間に交わることのない距離を感じては、日本人の中で日本の生活習慣を維持しながらの生活だったということであろう。

おわりに

以上、山田の三冊の満洲童話集を見てきた。

山田は、実話に取材し、その実話をさらにドラマチックに語るように描写していく。そういう手法を取る以上、作品は必然的に「美談的」「修身的」になり、国策に沿った啓蒙的なものとなる。そのため、山田作品には国策を前面に出して、国策推進を啓蒙する作品が多い。だが、これは山田が時代に迎合していたわけではなく、心底、「満洲国」建国に大きな期待をかけ、「五族協和」の実現を信じていたのだと筆者は考えている。彼は、「美しい満洲、正義の満洲、平和の満洲を描く」ことを使命と捉えていたと考えられる。

こういった国策を高らかに謳いあげている面が強い一方で、山田の描く作品世界には、満洲に住む普通の人々の生活や姿が作品の中に自然と現れ出ている。鉄道附属地に住む日本の子どもたちの日常や心情が描かれ、また描かれているその子どもたちの生活圏から満洲国の人々の生活や素顔がのぞいている。それは満洲で育ち、満洲を「第二の故郷以上だ」と語る山田の生活実感から生れた描写がなせる技である。この点は他作家にはない山田作品の優れた特徴であるといえよう。

第V部 注

- 1 鹿島佐太郎編『満洲童話作品集 第一集』作者紹介（満洲日日新聞社出版部） 一六八頁）
- 2 「ほんとに強い兵隊さん」『石森先生の思い出』 石森延男先生教育文学碑建設賛助会一九六七年九月二〇日 八四・八五頁
- 3 『満洲開拓少年義勇軍』序文「あの風 あの雲」草加幼稚園出版部 一九六七年
- 4 安倍季雄「新満洲の色と味」「童話教育」第五卷第十二号 一九三四年十二月一日
- 5 山田健二「二人で一つ」「童話教育」第五卷第四号一九三四年四月一日 平方久直「みちぐさ」「同」第五卷第九号 一九三四年九月一日
山田耕子郎「オマハリサン バンザーイ」「同」第六卷第四号一九三五年四月一日
- 6 石森延男「あけをさんへ」「同」第六卷第九号一九三五年九月一日
- 7 「童話教育」第五卷第四号一九三四年四月一日
- 8 「童話研究」第十五卷第二号・第四号
- 9 大阪国際児童文学館編『日本児童文学大事典』「山田健二」の項 大日本図書 一九九三年十月
- 10 東京 新報社 一九三五年十月一日
- 11 大連 満鉄社員会 一九三八年十二月二十日
- 12 『少年義勇軍』の作者現住所による。
- 13 鹿島佐太郎編『満洲童話作品集 第一集』作者紹介（満洲日日新聞社出版部）（長谷川潮著『子どもの本に描かれたアジア・太平洋』より引用 梨の木舎 二〇〇七年八月一日 一六八頁）
- 14 「協和」第二四九号 一九三九年九月十五日
- 15 ○「日滿綴方使節」の内容
- 16 主催―（満鉄）鉄道総局営業局旅客課・「大毎、東日小學生新聞」共同

主催。

- 賛助後援―日本側（文部省・拓務省・駐日満洲国大使館）満洲側（駐満日本大使館・満洲国民生部・協和会・関東局等関係当局）
- 内容―第一段「満洲認識運動」―小小学上級生からの綴方募集。課題より一題選択 一、少年義勇軍を勵ます手紙
- 二、大陸守備の勇士を慰問する手紙 三、満人學童に贈る親善の手紙 四、満洲を思ふ手紙。
- 応募資格―鮮滿支を除く全日本小学校の五・六年生 選者―菊池寛・久米正雄・石森延男・寺田喜次郎・久留島武彦・安倍季雄
- 結果―応募数約三千名から十名選出
- ・第二段「満洲の見学交歓親善旅行」一九三九年八月九日結団式・八月十日壮行会・出発（二十日間の旅）・訪問地―奉天・撫順・新京・哈爾濱・大連・旅順
- ・第三段 「躍進満洲の認識運動」
- 参加者は「足で見た満洲」を綴方にする。それを「綴方満洲」という「満洲紹介の模範綴方集」にして内地の書店より出版。
- 14 満鉄鉄道総局・大阪毎日新聞社・東京日日新聞社編、修学館 一九四〇年六月十八日
 - 15 山田健二「満鉄と児童文化―日滿綴方使節のこと―」「日本児童文学」盛光社 一九七一年八月 九一頁
 - 16 長谷川潮『子どもの本に描かれたアジア・太平洋 近・現代につくられたイメージ』梨の木舎 二〇〇七年八月一日 一六九頁
 - 17 『満蒙開拓少年義勇軍』「著者略歴」国書刊行会 一九八三年三月三〇日
 - 18 『満洲開拓少年義勇軍』福田清人著「序」 草加幼稚園出版部 一九

六七年

¹₉ 「満洲日日新聞」(一九〇七年創立)は、一九二七年十一月に「満洲日報」と改称、一九三五年八月、再び「満洲日日新聞」となる。

²₀ 『高梁の花環』「自序」十三頁

²₁ 安倍季雄「聴かせる童話の組立」「童話研究」(18)「童話の理論と実際」(復刻版)久山社 一九八九年五月十日

²₂ 『満洲忘じがたし』満洲教育専門学校同窓会・陵南会 一九七二年十二月二十四日 一七五頁

結論

「満洲文芸」という呼称がある。これはどういった文芸なのか。単純に「満洲で興った文芸」と解釈するだけでは説明がつかないだろう。なぜなら、満洲は近代の歴史に限って言えば、中国の一部ではあったけれど軍閥（奉天軍閥）によって支配されていたし、ロシアと日本に支配されてもいた。また、傀儡国家ではあったけれど「満洲国」という独立国にもなっている。そのため、「満洲文芸」を論じるとき、必然的にさまざまな視点からのアプローチが生じる。中国文芸としての視点、日本文芸としての視点、「満洲国」文芸としての視点、「満洲」に暮らした各民族の文芸としての視点、そして植民地文芸としての視点。なぜなら、「満洲文芸」にはどの要素も含まれているからであり、またどの視点で論じるかによってそこに現れる文芸活動の様相が異なると考えられるからである。

川村湊著『異郷の昭和文学』（一九九〇・岩波）は、満洲における文学活動を日本文学の視点から論じている。その著作の中で、川村は「満洲に関する文学」を書き手によって大きく次の三つに分類している。「一つ目は満洲を旅行し、その印象や感想や取材したことがらを紀行や創作として発表した一群の文学者たち」「二番目は、満洲に移住し、居住者として生活しながら文学に携わった人々」「三番目は、満洲に生まれ、育ち、そして戦中、戦後において日本列島に引き揚げて来た人々、およびその家族」（二三・二四頁）である。

大連の文芸同人誌「作文」（一九三二年創刊¹）の同人であった秋原勝二は、戦後五十余年を経たのち復刻された『満洲文芸年鑑』の「別冊」（一九九三）に寄せた『渦中の人』と『旅人』²という文章の中で、当時、満洲で文学活動に携わった日本人について、次のように述べている。「日本を棄てて満洲を凝視することに賭けた私は、満洲で書かれる日本人の作品も、全部、的外れに見えた。満洲で生涯を尽くそうとしている者と、日本から来てひと廻りして日本に帰っていく者、当分は満洲で暮してもいずれば日本に帰って行く

者とは、全然違う人種に見えた」。この秋原勝二の文章は、川村湊が「二番目」の書き手として一つに括った中に、「満洲で生涯を尽くそうとしている者」と「当分は満洲で暮らしてもいずれば日本に帰って行く者」とがあり、この両者の満洲に対する意識が異なっていたことを指摘している。

西田勝は『満洲建国十年史』（満洲帝国政府編・一九六九年三月原書房）中の「芸文十年史」による「満洲文芸」の推移を次のように紹介している。『建国精神』の具現としての『満洲文芸』は日露戦争直後から一九二〇年代中頃までが『発酵期』で、それ以後三六年度の頃までが『緩やかな成長期』、そしてそのあとに『興隆期』が続き、三八年から翌年にかけて『活動期』に入った³。「はじめに」七頁）。ここで述べられているのは、「建国精神」の具現としての「満洲文芸」の視点からであるといえる。

本稿では、植民地満洲で誕生・発展した日本人による満洲児童文学（以下「満洲児童文学」）について論述した。言い換えれば、日本児童文学の視点による、植民地満洲における日本児童文学活動の解明である。資料は、現地で発行された『滿蒙（満洲）年鑑』⁴及び『満洲文芸年鑑』三輯⁵、邦字新聞「満洲日日新聞」（「満洲日報」）、雑誌類と各作家作品及び満洲児童文学に関する先行文献である。植民地満洲における児童文学の発生はいつ頃か。

『滿蒙年鑑』に児童文学関係の記事が掲載されるのは、「一九三二年版」からである。その版の「文藝」欄に初めて、「童謡・童話・児童劇」が紹介されている。その記事は、前年（一九三二）に「新童話」（石森延男主宰）及び「協和」（満鉄社員会発行）に掲載された童謡童話作品の紹介である。これは、一九三一（昭和六）年の満洲において、児童文学という概念が育っていたということを意味している。

「新童話」を主宰した石森延男（一九二六年渡満。以下「石森」

は、満洲児童文学活動の中心人物であった。石森は、満洲児童文学の源泉を在満日本人児童が使用した国語の副教科書である『満洲補充読本』の編集事業に置きつつも、石森らの活動を満洲児童文学の誕生としている⁷。それは、石森個人にとつて、教科書編集部で携わった『満洲補充読本』作成の基本理念が石森の満洲における文学活動の原点となり、そして多くの満洲教材の執筆が石森文学を育てたからである。また、のち創作を中心とする満洲児童文学活動が石森を核に小学校の教師たちによって展開され、課外読物と深く結びついていったからである。

筆者は、石森らの活動以前を満洲児童文学の萌芽期と位置づけ、時代及び児童文学活動の流れを縦糸に各作品を横糸に、植民地満洲における児童文学の歴史が概観できるように本論文を構成した。期間は、満洲植民地化の初期から「満洲国」建国によって政治・文化の中心が新京（現在の長春）へ移るまでとした。なぜなら、「満洲国」は日本の傀儡国家とはいえ独立国の形態をとった他民族国家であり、その児童文学活動は、いわゆる植民地満洲のそれとは異なる様相を呈してくるからである。

満洲における児童文学の萌芽

第I部では、満洲児童文学の萌芽として、満鉄の文化政策とその政策の一つである、「巖谷小波の満洲お伽講演」について考察した。

満鉄は創立（一九〇六）初期より多くの文化人を招聘して日本文化の移植と文化環境の整備を積極的に行った。巖谷小波（以下「小波」）は満鉄の招聘に応じて、二回、満洲を訪れている。

一回目は一九一三（大正二）年秋で、満洲と朝鮮を訪れている。全日程一カ月と十一日間のうち満洲滞在は二十三日間（うち四日間）は天津・北京）。小波の満洲旅行は、在満の日本人小学生に話をし

てほしいという満鉄の招聘に応じたものであった⁸が、小波自身、植民地満洲の発展に日本の未来として大いに期待しており、「より多くの未来を有する土地の少年少女に接して豫て私が首唱してゐる『桃太郎主義』を鼓吹したいと思つたのです」⁹と、満洲旅行への意気込みを述べている。

講演地は大連・旅順・瓦房店・大石橋・營口・遼陽・撫順・開原・鉄嶺・奉天・長春・公主嶺・本溪湖・鶏冠山・安東で、小波は、各地の日本人小学校と満鉄家族会を中心に、一日二回から三回、時には四回、総計約五十回のお伽講演及び講演を行つてゐる。小学生を対象とするお伽講演では、低学年と高学年に分け、話の内容も所用時間も異なる。短いのは二〇分、長いのは一時間半に及び、聴衆は一回に約四百名から千百名ほどであった。小波の訪満は在満日本人にとって一大イベントで、各地における小波のお伽講演の模様は、その都度、新聞紙上で報道されており、時には講演内容の概略も紹介されている。小波の語るお伽話には、大胆で勇氣と知恵を兼ね備え、かつ情にあつく、樂觀的な「桃太郎」的人物が新しい主人公として登場する。これらのお伽漸を通して、小波は植民地満洲で暮らす日本人の大人や子どもに向けて、新しい人間像を提示し、啓蒙した。

小波は満鮮旅行に関する記事を雑誌「少年世界」（博文館）に多数発表している¹⁰。その中に六回にわたって連載された紀行文「満鮮いろは漸」がある¹¹。この「満鮮いろは漸」は少年少女に向けて書かれた最初の満洲旅行記であると考えられる。

小波の初めての満洲訪問の成果は、在満の日本の子どもたちや大人に、お伽講演を行うことによつて、慰問及び児童の教育、家庭教育に対する啓蒙を行つたこと、満洲にお伽漸の口演を広め、お伽漸を受容する土壌を作つたこと、そして、内地の人々、特に子どもたちに、日本の新天地としての満洲を紹介したことであるといえよう。

小波の二回目の訪満は一九二六（大正十五）年六月である。小波と同時期に深瀬薫も満鉄の招聘で約二週間、沿線各地で童話講演を行つてゐる。ともに「全満児童デー」に合わせたものであった。小波が初めて満洲を訪問してから十三年後、満洲では子どもを取り巻く環境の整備が進み、子どものための催しと児童愛護の啓発運動が満鉄主導によつて全満の鉄道付属地で一斉に行われるようになっていたといえる。

マス・メディアが果たした役割

植民地満洲での児童文学の発生・発展を考える場合、看過できないのは、新聞の役割である。第Ⅱ部では、「満洲日日新聞」「満洲日報」紙の「子ども欄」について考察した。

満洲の邦字新聞「満洲日日新聞」は、一九〇七年十一月大連で創刊された。一九二七年十一月に、「遼東新報」と合併し、「満洲日報」と改称、一九三五年八月、再び「満洲日日新聞」となる。

「満洲日日新聞」と「満洲日報」（本稿ではともに「満日」と表記）とは、発展過程で呼称の変更はあるものの、実質は同じ、植民地満洲における全国紙的な存在で、常に世論作りの先導的役割を担つてきた。

「満日」で、子ども対象の記事が掲載されるのは一九二六年六月頃からである。ちょうど満鉄主導の「全満児童デー」（六月十三日）と時期が重なつてゐる。この「児童デー」に合わせたように、一九二六年六月三日付「満日」に、紙面一面にレイアウトされた「小供ページ」が出現する。これは今までになかつたことである。この「小供ページ」はこの段階では定期的に掲載されるものではなかつたが、以後、徐々に、子ども向けの記事や児童作品が、教育や家庭関連記事と一緒に掲載されるようになる。

一九二七（昭和二）年三月二日、家庭欄の一角ではあるが、特設された子ども欄「子供の世界」（同年十一月まで掲載・月曜日以外ほぼ毎日）が誕生する。その後、合併による新聞名の変更に伴い、「コドモしんぶん」（一九二七年十二月四日創設・日曜日のみ）と名称も内容も変わる。そして、一九二八（昭和三）年二月十三日、「満日コドモページ」欄が創設される。これまでの子ども欄を内容的にも形式的にも発展させた子ども専用の特設ページで、紙面の半分、時には一面を使い、ほぼ毎日掲載された。

主担の青山捨夫（以下「青山」）は、郷里の石川県で小学校に勤めたのち渡満。大連常盤小学校で多年教鞭を執っていたが、一九二八年三月、児童教育の社会化を志して満洲日報社に入り、「満日コドモページ」を担当する。¹²

小学校教師の経験と文学的素質を備えた青山は、「満日コドモページ」の充実を図る一方、「満日」紙上において、満洲の教育に対して積極的に発言している。

「満日コドモページ」では、童話、カタカナ童話、童詩、絵物語や科学読物、「教專讀物調査會」¹³の児童読物新刊紹介・推薦児童読物等、様々な記事が掲載された。児童作品は常時、紙面を飾るほかに、週一度の割合で、紙面一面を使った「児童作品紙上展覧會」欄を設けて、優秀作品を掲載し、子ども読者の意欲と積極性を啓発した。また、子ども読者の声に耳を傾け、一人の子ども読者の手紙によって、「満日コドモページ」の質問欄設置（一九二八年三月二十一日）が実現した。一九二八年十一月十日は、昭和天皇即位の式典が行われた日で、全満あげての「御大典奉祝」ムードに、「満日コドモページ」も例外ではなく、この日を迎えるまでに何回も関連記事を掲載して、「御大典」の意義とそれを迎える態度や心構えを説き、皇民化教育の役割を担った。

「満日」では、一九三〇年の新春に向けて、「懸賞童話・童謡」

の募集を行い、第一回の「懸賞児童讀物」の応募数は、六二六編にも上った¹⁴。受賞作品は以後「満日コドモページ」に順次掲載されている。

「満日」子ども欄が果たした役割はどのようなものだったのか。「満日」の子ども欄及び「満日コドモページ」は、子どもたちに、活字に親しみ、作品に触れる機会を与え、文化を受容する土壌を育て、子どもたちの文化レベルをあげる役割を担った。児童作品を随時掲載することにより、子どもたちの書く意欲、参加する積極性を育てた。一方、満洲風土の特異性や母国日本の情報をも適宜掲載し、植民地建設の次代の担い手である、満洲を愛する「満洲っ子」の育成を目指し、それと同時に、皇民化教育にも力を入れた。さらに、児童文学の創作に携わる人々や愛好者に作品発表の場、研鑽の場を与え、児童文学の担い手を育てた。

「満日」子ども欄及び「満日コドモページ」は、読者を育て、書き手を育て、満洲児童文学の誕生・発展を促したといえよう。

石森延男と満洲児童文学

石森は植民地満洲の教育と文化の育成に深く関わった。第Ⅲ部では、石森の在満十三年の事跡と児童文学活動について考察した。石森が渡満した一九二六年は、満洲に児童愛護の啓発が進められ、児童の文化的環境に対して関心が持たれた頃である。筆者は、石森を、満鉄の文化政策によって耕された文化的土壌に創作児童文学の種を播き育てた人物として位置づけている。本論文では、石森の満洲時代を教科書編集部時代、視学時代、大連彌生高女教諭時代の三つに分けて、各時期に発表された石森の著作について考察した。第一章では、石森の誕生から渡満までの略歴及び在満十三年間の事跡を述べた。石森は一九二六年四月に渡満、教科書編集部に赴任

する。在満日本人児童のために国語の副教科書である『満洲補充読本』の執筆編集に携わりながら、精力的に文学活動を展開する。第二章から第四章までは、教科書編集部時代の児童文学活動として、「帆」、「まんちゅりあ」、「新童話」について考察した。

第二章で取り上げた、満洲初の中等学生向け雑誌「帆」は学期毎の発行で全六冊（一九二七年一月—一九二八年十二月）。刊行動機は、郷土愛の育成、学業の中での潤いと憩い、読書の喜び、そして若人の発表の場の提供であった。執筆者は在満者が主体である。記事内容は満洲を前面に打ち出した内容で啓蒙的ではあるが、満洲初の在満少年少女向けの雑誌が、渡満もない石森の尽力で発刊されたこと、しかも「帆」に文芸的要素を持たせようとしたことは、植民地満洲の児童文学活動において、先駆的な意味を持ったといえる。

「帆」に次いで、刊行されたのは、小学生向けリーフレット「ます野」である（一九二九年五月十日—一九三〇年三月十日 全二四冊）。その「ます野」の作品（五編を除く全編）を合本にしたのが、満洲読物『まんちゅりあ』二巻（一九三〇年四月「春夏の巻」「秋冬の巻」）である。収録作品の多くは、石森の感性で捉えた満洲風物の良さを綴ったものである。第三章では『まんちゅりあ』の作品を通して石森の満洲観を考察した。石森の満洲観とは、一つは満洲（中国）の風物に対して敬意に近い思いを持っていたということ。二つ目は、石森にとって満洲とは、満洲（中国）固有の風俗と日本文化が共存する所であったということ。そして三つ目は、石森は日本の植民地建設による近代化に期待と誇りを持っていたということ。四つ目は、石森は中国人を描く場合も、風物を描く時と同じように、写生に徹し、彼らの内面にまで踏み込もうとはしなかったということである。

「ます野」終刊後、石森は童話同人誌「新童話」を主宰する。これまで満洲を題材に、郷土愛の育成にこだわってきた石森だが、こ

の雑誌から創作境地が変わる。石森は、「新童話」発刊とほぼ同時期に、「私は畢生の仕事として『童話』を創作してゆくつもりだ。（中略）今年から、純粹な童話境地を進んでいかうと考へてゐる」（一九三〇年一月¹⁵）と述べている。第四章では、この「新童話」の特徴、及び「新童話」掲載の石森童話について考察した。

石森が「新童話」発刊を思い立った理由として、筆者は次の三点を考えている。それは、石森の童話に対する創作境地の変化、「赤い鳥」が休刊し、大衆的雑誌類がもてはやされる当時の日本童話界に対する憂慮、千葉省三・水谷まさる等の「童話文学」との出合いである。石森の「新童話」に対する姿勢は、内地の雑誌の模倣ではなく、この満洲から「日本唯一の子供のための純童話雑誌」を刊行して行くのだという気構えであった。そして、「新童話」に精力的に作品を発表する中で、自身の童話スタイルを確立していったと考えられる。

「新童話」の発刊は一九三〇年五月。月刊の子ども向け童話雑誌である。第二一号（一九三二年二月）から学齢別の三分冊（初級用・中級用・上級用）となり、この前後から満洲を題材とした作品及び時局的な内容が増えてくる。一九三二年九月に「郷土満洲」と改題、その年の十一月に終刊となる。

石森は「新童話」に毎号、童話作品を載せている。当初は、本名の他に筆名（丘光、旗野二郎）も使って、同一号に幾編も掲載している。掲載総数は、筆者が現物確認できた「新童話」二七冊だけでも五十編に及ぶ。

「新童話」作品に見られる石森童話の特徴は、発想の妙味、小さな命への慈しみ、存在の意味を問う内容、見捨てられた物への哀感、貧しい者に寄り添う姿勢が挙げられる。換言すれば、人間を取り巻くすべての事物に対する愛おしさと言えるかもしれない。日常のささやかなものに、ふと目をとめてそれを美しく無駄のない表現で一

編の作品にする。そんな創作姿勢が感じられる。前川康男は石森文学を大別して、童話風エッセー、空想物語、写実的な長編物語の三つのジャンルに分けている¹⁶。筆者はその分類に写実的な短編を加える。「新童話」では、写実的な短編と空想童話が際立っている。

石森は「新童話」に童詩も発表している。確認できた作品は童詩六編、童謡一首である。うち、三分冊となつた第二一号（一九三二年二月）に四首掲載され、その作品はいずれも時局を強く反映している。それ以降、雑誌は満洲色、戦時色を強め始める。それは前年に満洲事変が起こり、その年三月には「満洲国」が建国され、植民地満洲が新たな局面を迎える時期と重なっている。

写実的な短編や空想物語で人間を取り巻くすべての事物に愛おしさを表現した石森と、これら四首の童詩で勇壮で、軽快な戦争讃歌をうたう石森。いずれも石森の姿である。

一九三二年十一月、石森は教科書編集部から大連民政局地方課学務係に転勤し、視学となる。第五章から第八章までは、石森の視学時代の代表的な仕事である「満洲文庫」を取り上げた。この叢書の刊行は、指導者として、編集者としての石森の資質が遺憾なく発揮された仕事であるといえる。

「満洲文庫」全十四冊は、一九三四（昭和九）年七月から翌一九三五年七月（推定）まで大連で逐次刊行された。全七篇「風俗」「歴史」「地理」「写真」「理科」「文学」「修身」にわかれ、各篇は低学年向けの「紅版」と高学年向けの「緑版」がある。執筆者の多くは在満の初等教育者である。おそらく各分野に精通した初等教育者を動員した仕事であつたろうと推測される。実地調査を重視し、写真を豊富に取り入れ、かつ満洲読物として楽しめる工夫がなされている。課外読物として、在満の日本人児童に満洲全般の知識を与えることを目的とした叢書といえる。

第六・七章では、満洲児童文学の「處女集」である「満洲文庫」

の文学篇『童話と童詩』（紅版）と『満洲新童話集』（緑版）を取り上げて分析し、満洲児童文学の実相と特徴を考察した。

文学篇は当初予定にはなかったが、継続刊行の要望が様々な所から寄せられたことから叢書に組み込まれたという。収録作品は、全て満洲を題材にした作品で、石森が既刊の印刷物から選定し収録した。

『童話と童詩』には、童話十五編、童詩二八編が収められている。満洲在住者の作品は『第二まんちゅりあ』『鵲』『愛兒と家庭』『協和』『童心行』等から選び、北原白秋、野口雨情、島木赤彦、倉橋惣三の作品は「コードモノクニ」「満洲唱歌集」から転載している。

満洲在住者の作品には生活実感の伴ったものが多く、それに対して、内地在住の北原白秋ら大家の作品は、技巧も情緒も優れているが、旅人の眼で見た満洲風物詩が多い。が、いずれも満洲讃歌である。

『満洲新童話集』には、脚本二編、散文十二編が収められている。

いずれも満洲在住者の作品である。『まんちゅりあ』『満洲補充読本』『愛兒と家庭』『新童話』等から選ばれている。『満洲新童話集』に見る満洲児童文学の実相とはどういうものか。収録された十四編はすべて日本人作家の作品で、その半数は、日本人及び日本の子どもたちの生活実感や思いを描いている。満洲の風土を背景にしているが、そこに描かれた生活実感や心情は、日本国内に住む日本人と何ら変わらない。そういう意味から、満洲児童文学は、満洲で生れた日本児童文学であるといえる。中国人と日本人の触れ合いを描いた作品はわずかに二編、「満洲国」を舞台にした作品は一編にすぎないが、満洲を舞台にしている以上、意識的であれ、無意識的であれ、作品には植民地的諸相が必然的に表れ出ている。満洲児童文学は、満洲で生れた日本児童文学ではあるけれど、その作品世界に、植民地としての諸相、異国としての味わいを内包する独自性を持っていたといえる。

『満洲新童話集』の冒頭を飾る作品に、「軍人の子」(平方久直作)がある。のち、この作品が「反軍思想をいだいている」という理由で、「満洲文庫」が発禁処分を受けたといわれている(石森と平方の証言による)。第八章では、「軍人の子」(平方久直作)と「満洲文庫」発禁問題について検証した。

「満洲文庫」発禁問題については諸説ある。が、大きく二つに分かれる。一つは、昭和七年に編集した「満洲文庫」が発禁となったという説。もう一つは、一九四二(昭和十七)年に「東亜『新満洲文庫』」が発禁となったという説(新村徹論文による)である。「東亜『新満洲文庫』」とは、一九三九年二月に「満洲文庫」を再版したものである。「満洲文庫」の本文はそのまま、装丁と書名を変え、東京の修文館によって再版され、同年四月に「文部省認定図書」に指定されている。

検証の結果、筆者は、「東亜『新満洲文庫』」発禁説を取る。その根拠は、「満洲文庫」が「東亜『新満洲文庫』」(一九三九年二月)として再版され、「文部省認定図書」となっていること。「満洲文庫」が満洲で発禁処分を受けたと仮定して、さほど年数を経ないで、一度発禁処分を受けた書籍を東京で再版し、しかも「文部省認定図書」とすることはありえないと考えるからである。しかも「東亜『新満洲文庫』」は「皇紀二千六百年記念」として増刷が決定し、その申し込み締め切りが「一九四一年九月迄」となっていたこと¹⁷。また、発禁処分の原因となった掲載作品の「軍人の子」の件で、当事者の平方と石森が取り調べを受けた時期が二人の帰国後(平方は一九三六年に、石森は一九三九年に帰国)のことで、場所は東京の憲兵隊本部であったということ(平方、石森の証言による)。これらの根拠によって、筆者は発禁処分になったのは、「満洲文庫」ではなく、「東亜『新満洲文庫』」であり、その時期は新村徹論文の指摘どおり一九四二年であつたろうと考えている。

第九章では、大連彌生高女教諭時代の作品として長編小説『咲きだす少年群』(一九三九年八月 新潮社)を取り上げた。『咲きだす少年群』は、石森が離満したその年の八月に東京で出版され、「第三回新潮社大衆文芸賞」を受賞した作品ではあるが、その原型は、「満洲日日新聞」(夕刊)連載の新聞小説「もんくーふおん」(一九三九年三月十四日―同年五月三日)である。この「もんくーふおん」との比較を通して、石森が『咲きだす少年群』に込めた思いを探った。

「もんくーふおん」の大筋、テーマは変わらないが、『咲きだす少年群』では、大幅な加筆と推敲がなされている。

主テーマは民族を越えた友情であるが、その他に、姉弟愛、銃後・女性の生き方、日本の満洲・支那政策及び「日支親善」が描かれている。加筆の特徴は、一つは読者対象の変化による改変である。新聞小説は在満の日本人及びその子どもたちが読者であつたが、内地出版では読者対象は日本全国の大人及び青少年となる。この読者対象の変化に伴って、満洲でのみ使われている用語(例「満人の子」を「めし進上たち」と表現)は書き換えられ、さらに満洲に関する記述が増え、作品に満洲色を加味している。もう一つは、加筆によって戦時色が強くなっている。日常用語に「爆撃機」や「爆弾」という語が加えられ、主人公の洋像に軍国少年的要素が加味され、また、姉麻子を巡る人々の口を借りて、銃後・女性の生き方、出征兵士の心構え、日本の満洲・支那政策の「理念」や「日支親善」が説かれている。一方で、植民地満洲における日本人の在り方への批判も見られる。

『咲きだす少年群』には、そこに住む次代を担う少年たちの民族を越えた友情を願うとともに、戦時に生きる女性、特に若い女性たちに銃後の生き方を説き、満洲に住む人々の日常や国策としての満洲・支那政策を描くことによって、内地の人々にもっと満洲の姿を

伝えたいという石森の思いが込められているといえる。

『咲きだす少年群』は、作品の文学性、真実性に「時代的意義」も加味されて新潮社大衆文芸賞を受賞する。日中戦争の拡大とともに、満洲・支那大陸への関心が高まり、子どもの本の世界に、満洲・支那ものが求められた時流の後押しも受賞の大きな要因であったと推測される。

第十章では、石森と満洲児童文学との関わりをまとめ、石森離満後の児童文学の動きについて概略を述べた。

渡満と同時に石森が展開してきた児童文学活動の根本理念は郷土愛の育成であった。石森及び石森を中心とした初等教育者たちの文学活動は、常に満洲児童文学を牽引し、郷土愛の育成と同時に、芸術的で、より情操的な新しい児童文学を満洲の地に確立しようとした。石森は、一九三九（昭和十四）年三月末に離満する。

石森が活動していた頃は関東州大連が満洲の政治・文化の中心であった。「満洲国」建国後もしばらくその状況が続いていたが、新都（新京）完成とともに、その中心は新京・奉天へと移っていく。石森離満後の満洲児童文学活動の中で、石森らのようなグループの存在は、撫順の寺田喜治郎を中心とした「国語夜話会」だけであった。だが、『満洲年鑑』（一九四一年版～一九四四年版）によると、それぞれの都市で、小さな文化活動及びラジオによる活動が展開されていたようである。

一方、「満洲国」建国後の大きな変化は中国人児童文学作家の出現である。彼らは「満系」と呼ばれた。『満洲年鑑』（一九四三年版）には童話作家として「慈燈」の名が挙げられている。が、現時点で、彼らに関する資料の有無は確認できていない。中国人作家の活動の調査については、筆者の今後の課題としたい。

鉄道附属地における児童文学活動

石森を中心とした児童文学活動が主に関東州大連での活動であったのに対して、鉄道附属地である撫順でも児童文学活動があった。筆者はこの撫順での活動を植民地満洲におけるもう一つの児童文学活動と位置づけている。第四部では、撫順で展開された活動の中心人物であった寺田喜治郎（以下「寺田」と）とその活動から生れた児童雑誌「コドモ満洲」について考察した。

寺田は、各地中学校教諭、京都府地方視学、大谷大学教授を経て、一九二四（大正十三）年に渡満。満洲教育専門学校教授として、植民地満洲の教育を担う教員を養成する傍ら、読書指導、児童書の選定、その紹介と普及、子どもの教育環境への提言と、広く満洲の教育に関わった。一九三八年、「満洲国」文教部に移り、編審官室長として、「満洲国」の小学校教科書の編集にも携わった。

「コドモ満洲」は一九三一年九月に撫順で刊行された。終刊の時期は不明だが、一九三七年三月までの三九一冊の所在が確認できている。当初は一・二学年用、三・四学年用、五・六学年用の三分冊（一九三三年からは一・二学年用が分離し、四分冊）で、月二回の発行である。当時撫順中学校の校長であった寺田を中心に撫順の小学校教師たちが集まり撫順国語夜話会（以下「夜話会」）を作っていた。夜話会に参加した教師の中には、寺田が教鞭を執った満洲教育専門学校の卒業生が多かったという。その夜話会が小学校の補充教材に役立てたいと発行した雑誌が「コドモ満洲」であった。

掲載内容は多彩で、文学作品、詩、童謡、各種『読本』や「絵雑誌」からの転載、新聞記事、科学読物、戦争哀話、偉人伝、孝行話、民話・伝説、紀行文、中国古典の再話、外国作品のダイジェスト、漫画、絵物語が収められている。掲載された文学作品の大部分は、内地出版物からの転載である。転載の際には、児童にとって好ましくない表現の改変や削除等、国語の補充教材としての使用を念頭に

おいた編集がしばしばなされ、時には原作の持ち味を損なう例もあるが、広範囲からの作品蒐集、大家の文学作品の多数の掲載は、結果的には雑誌の内容を豊かにしている。新聞記事及び世界の戦争哀話の掲載などに満洲及び時事的な内容が見られ、在満の子どもたちに満洲に対する関心を持たせようとする意図はあるものの、それよりはむしろ、新聞記事から世の中の動きを知り、日本の良質な文学作品に触れ、広く世界に目を向けさせることを主眼とした編集姿勢である。

石森が大連で童話同人誌「新童話」（一九三〇年五月）を刊行したその翌年、「コドモ満洲」は発刊されている。ともに、在満児童を対象とし、小学校教師を中心とした雑誌ではあったが、この二雑誌は趣を異にしている。「新童話」は純粋な童話雑誌を目指し、「コドモ満洲」は、日々の教育活動の必要性から生れた雑誌であった。「新童話」は石森の視学就任を機に同人たちによって廃刊が決定されたが、「コドモ満洲」は少なくとも六年間の刊行が現物で確認できており、実際はそれ以上続いたと考えられる。その理由として、補充教材としての需要が高かったこと、編集を担った夜話会の尽力があったこと、ほとんどが他雑誌からの転載であったこと、そして、「月刊撫順社」による商業出版であったことが考えられる。

満洲児童文学作家 山田健二

第V部では、満洲児童文学作家の一人である山田健二の人物と作品について考察した。山田健二は、小学一年まで東京で暮らし、一九一二年に家族とともに渡満。爾来、敗戦までの約四十年間満洲で暮らした。満鉄の技師として仕事をしながら、童話を創作し、口演童話を行い、ラジオ放送に関わった。満洲育ちの山田健二はどのような作品を書いたのか。山田の代表的な満洲童話集『高梁の花環』『慰

安車』『少年義勇軍』収録の各作品を通して、山田の文学活動を探った。

山田は、「書く童話」と「話す童話」の融合を目指した。作品の多くは実話に取材した。また、創作であっても実話風に描いた。山田の作品には、国策に沿った「美談的」な、啓蒙的な作品が多い。これは山田が、時代に迎合したのではなく、心底、「満洲国」建国に期待を抱き、「五族協和」の実現を信じていたのだと筆者には思われる。山田の作品に見られる「五族協和」の意識は、他の日本人作家の意識とさほど変わらない。他民族のリーダー的存在である日本の子ども像が描かれ、援助する日本側と援助される他民族側の明確な位置づけがなされている。これは、植民地満洲における実態の反映であったのかもしれない。だが、筆者は、満洲で育った山田には、生活の中で他民族との接触が日常的にあったであろうから、山田の描く「五族協和」に他の日本人作家とは異なる描き方を期待していた。しかし、それは筆者の勝手な思い込みであったようだ。満洲で育った山田の中に、リーダーとしての日本人意識があったということがある。

こういった国策を高らかに謳いあげている面が強い一方で、山田の作品世界には、満洲に住む普通の人々の生活や姿が自然と現れ出ている。鉄道附属地に住む日本の子どもたちの日常や心情が描かれ、また描かれたその子どもたちの生活圏から満洲の人々の生活や素顔がのぞいている。それは満洲で育った山田の生活実感から生れた描写のなせる技である。この点は他作家の作品にはない山田作品の優れた特徴であるといえよう。

結び

本論文で筆者が研究対象としたのは、植民地満洲における日本人

による児童文学活動（以下「満洲児童文学」）であった。満洲児童文学は、満洲を題材に、主に在満の日本の子どもの姿を描いた。そこに描かれた子どもの生活様式や心情は、内地のそれとほとんど変わらない。また、作品の多くは、日本の情緒に満ちている。さらに、満洲児童文学活動の展開は、常に内地の児童文学活動と連動している。そういう意味で、満洲児童文学は、満洲で展開された日本児童文学であるといえる。しかし、一方で、日本人が特権階級にあった植民地の、しかも多民族が暮らす満洲の特異な社会構造は作品に大なり小なり反映している。そのため、満洲児童文学は日本児童文学ではあるけれど、作品は、植民地的諸相を有し、異国情緒を醸し出し、そして啓蒙的要素を多分に含んでいるという独自性を持っている。

満洲児童文学の誕生は、石森が在満児童生徒対象に満洲で初めて雑誌及び満洲読物の刊行をしたその時点からと考えることができる。しかし、その誕生までには、満鉄の文化政策によって耕されていた土壌があった。満鉄は創立（一九〇六）以来、多くの文化人を満洲に招聘し、日本文化の移植と文化的環境の整備を積極的に進めた。また、「児童デー」を設定し、児童文化の育成と児童愛護の啓発にも努めた。巖谷小波の二度の満洲お伽講演は満鉄の文化政策の一つであった。招聘された巖谷小波は、植民地満洲の子どもたちに次代を担う人材としての期待をかけ、精力的にお伽講演を行った。また、満鉄と足並みそろえて、満洲の世論を先導し、満洲の文化的土壌作りに貢献したのは、新聞の働きであった。「満日」の子ども欄は植民地満洲の次代を担う「満洲っ子」を育て、皇民化教育を施し、満洲児童文学の誕生・発展を促し、子どもの文化的レベルの向上に、大きく貢献した。

満洲で石森はどういう働きをしたのか。石森は満洲の教育・文化の育成に全面的に関わった。石森を核に集まった初等教育者たちの

児童文学グループは、大連で在満の日本の子どものために、創作を中心とした活動を展開し、常に満洲児童文学を牽引した。

石森、平方久直、山田健二の創作姿勢は、独自の感性と児童文学観に基づき、真摯で、各人各様であった。だが、彼らの活動は、いずれも満洲植民地化の国策を「是」とした上で展開されている。そのため、彼らの真摯な文学活動は、国策推進を担うという二面性を持った。

満洲児童文学は、日本の敗戦、「満洲国」の解体によって、突然消滅した。しかし、彼らの足跡及び作品は植民地満洲の実相を伝える「証人」として残っている。本論文は、これら「証人」としての当時の文献及び作品にあたり、これまで研究されてこなかった植民地満洲における児童文学活動の全容を解明しようとしたものである。作家の足跡及び作品から、植民地満洲で生きた人々の生活や思い、植民地満洲の実相を明らかにしようとしたものである。まだまだ調査研究しなければならない所は多々あるけれども、当初の目的であった植民地満洲における日本人の児童文学活動の解明はかなり達成できた。

今回、調査研究する中で、資料が常に筆者に語りかけてきた。植民地に生きるとはどういうことなのか。民族間の協和はありうるのか。あるとしたら、真の協和とは何か。時代が個人の生き方をどう規制するのか。時代の中で、真摯に生きるとはどういうことか。

植民地政策は侵略行為である。その是非は問うまでもなく自明のことである。それを承知しながらも、植民地に生きるとはどういうことであったのかを考えさせられた。石森らが作品を通して示したのは、日本人として満洲の風土を愛することだった。自分のアイデンティティーを保ちながら、あるいは育てながら、その地に馴染むことであった。これは、今日でも、外国で暮らす日本人に通じる考え方であると筆者は思う。しかし、決定的に異なるのは、植民地で

ある限り、支配と被支配の構造が厳然とあるということだ。だが、石森らの作品には、その視点が抜け落ちてゐる。その構造から生み出された支配者優位の社会の中で、石森ら日本人は当然のこととして暮らしていた。支配と被支配の構造から、差別、抑圧、搾取、非人間的な行為が生まれる。そのことを忘れてはならない。

民族間の協和はありうるのか。植民地満洲で標榜された「五族協和」はまやかしかつた。現在でも民族間での紛争が絶えることがない。しかし、民族間の協和が実現されない限り、平和は訪れない。経済的格差を基準とした物差しでの見方を排除し、同化を強要することなく、互いの伝統や文化を理解し、尊重する姿勢で臨むこと。真の協和は、そこから始まる。

人は時代の中で生きてゐる。常に、時代は人のものの見方を規制する。私たちは、知らないうちに、その時代の価値観で物を見てゐる。まずそのことを自覚すべきだ。満洲植民地化が中国の民を救い、中国の近代化をおし進めると信じた在満日本人の思考や感覚がそうであつたように、また、聖戦だと信じこまされた戦時中がそうであつたように、人々は、当時「是」とされた価値観を疑うことすらできなかった。「是」とされた価値観は、誰にとつて「是」であるのか、本当に「是」であるのか、と常に己に問いかける姿勢の大切さは、今日の社会でも求められる。

また、時代の中で、真摯に生きるとはどういうことか。石森をはじめ、満洲児童文学に携わった初等教育者たちは、自分にも子どもたちにも、真摯に向き合い、創作に励んだ。その活動は、一方で、植民地の次代を担う「満洲っ子」を育てるという国策推進の役割を担うことになった。ここに、人が生きる上で、時代を越えることのむつかしさを感じる。だが、それと同時に、物事を多角的に見つづ、己に忠実に生きることも大切だ。それは、「今」を悔いなく生きるために必要なことであるからだ。そのことを今回の研究で学んだ。

結論注

- 1 一九三二年創刊、一九四二年停刊。戦後一九六四年復刊。
<http://book.asahi.com/clip/TKY201006080263.html> 二〇一三年十月二七日「満洲 作文」で検索
- 2 秋原勝二『満洲の人』と『旅人』満洲文芸年鑑 別冊 葦書房 一九九三年九月十日 八頁
- 3 西田勝『満洲国』文化細目の「はじめに」の『満洲国』文化の展望―文学を中心に―不二出版 二〇〇五年六月二〇日 七頁
- 4 大連発行。一九四三年より奉天（現在の瀋陽）発行。「大正十一年版」創刊（推定）『昭和二十年版』、一九三三年以降『満洲年鑑』と改称「I輯」は「G氏文学賞委員会」編、「II・III輯」は「満洲文話會」編、一九三七年から一九三九年に発行。
- 5 一九二七年十一月「満洲日報」と改称、一九三五年八月再び「満洲日日新聞」となる。
- 6 「満洲児童文学回想」「児童文学研究NO2」一九七二 三〇頁
- 7 「満洲の小國民」大正二年十一月九日 日本橋俱樂部に於けるオモチャ會講演會にて 「三越」第四號一九二五年一月一日
- 8 一九一三年九月三〇日付「満日」
- 9 「大連から」「少年世界」第十九卷第十四号 一九一三年十一月一日
- 10 「爾靈山」(詩)「満洲お伽日誌」同 第十九卷第十五号 一九一三年二月一日
- ・「満鮮旬行 かうもあらうか」「文章世界」第八卷第十四号 一九一三年十二月一日
- 1 1 「少年世界」第二十卷第二号―八号 一九一三年一月―六月
- 1 2 『満蒙日本人紳士録』満洲日報社 一九二九年五月
- 1 3 「教育専門学校讀物調査會」の略
- 1 4 一九二九年四月四日付「満洲日報」
- 1 5 石森和男遺稿集『谷廼草切』「後序」一九三二年二月 三六頁
- 1 6 「石森延男解説」『日本児童文学大系 第二三卷 石森延男 山本有三 川端康成集 ほるぷ出版 一九七七年十一月二〇日 四五一・四五二頁 大阪国際児童文学館所蔵の「東亜「新満洲文庫」『生きようとする姿』(その二)に付いている帯の文言による。

あとがき

なぜ満洲か。それは、日本と中国との不幸な時代の事実であるのに、その満洲時代の事柄については未だに解明されていないからだ。中国児童文学を研究しようとする私にとって、満洲は避けて通ることはできない問題だった。児童文学の視点から過去の日本の満洲時代を明らかにすること。それを研究テーマに決め、満洲の児童文学活動を追ううちに、これは大変な領域に踏み込んでしまったと思うようになった。まず、現物を容易に見ることができなかった。また、作品誕生の舞台が植民地ということで、これら作品にどのような向き合ったらいいかという戸惑い、さらに、真つ向から日本の満洲政策に向き合わなくてはならなかったことである。

今の私の力のできることをするしかないという覚悟を決め、まず私がしたことは、可能な限り、現物にあたること、当時の状況を把握するために資料を集めることだった。そして、児童文学とは何か、児童文学とはどうあるべきかなどという確たる児童文学観もない私ができることは、作品を読んだ自分の感性に正直であることだった。

そんな私を論文完成まで引っ張ってくれたのは、数々の資料との出会いだった。

一年目(二〇〇九年)は、ほとんど、資料探しと、複写に駆けずり回った。その夏、私は単身大連に行った。目的は二つ。一つは旧満鉄図書館の日本語資料が収蔵されているという大連図書館で、資料を探すこと。だが、日本語資料は整理中ということで見せてもらえなかった。ただ、満鉄時代の目録は見る事が出来た。複写は駄目だということで、私は一週間ほど通って、必要な箇所を手書きで写した(二〇一一年六月、日本語資料の閲覧について電話で問い合わせたが、一部は閲覧可能だが、まだ整理中だということだった)。

もう一つは、石森延男が滞在した痕跡を探すこと。石森が滞在した昭和十年頃の大連市内の地図を複写して、その地図と現代の大連市内の地図とを照合しながら、大連の街を歩いた。大連は、近年、急激な経済発展を遂げており、中国でも有数の近代都市に変わりつつあった。街には、日本統治時代の市電が今なお走る一方で、スマートな近代的な路面電車が走っている。ロシア・日本統治時代の建物は現在でも使われている一方で、古い建物はどんどん取り壊されて、高層ビルに変わっている。石森が働いた民政署(市役所)は銀行になり、石森が勤めた弥生高等女学校は更地になっていたが、校門は残っており、往時をしのぶことはできた。現地での調査は、一部だけれど、満洲時代の大連を体感できたという点で大きな収穫があった。

大連図書館に貴重な資料の現物があることは確認できても、今後、それを閲覧できるかどうかは不確定なので、私は、国内で資料を探すことにした。大阪国際児童文学館には、戦時中の出版物がかなりあった。梅花女子大学の図書館にもあった。そして、私は、北海道立文学館で石森の資料と衝撃的な出会いをしたのである。札幌で開かれた日本児童文学学会(二〇〇九年十月)に出席するため前日に札幌に到着、その足で札幌市内の北海道立文学館を訪ねた。石森は生前、故郷札幌の文学館に多くの書籍と資料を寄贈していた。その多くは、現在も整理中だったが、その中に、満洲で出版された書籍や石森主宰の同人誌とともに、満洲時代に石森が新聞や雑誌に発表した印刷物が七冊のスクラップ帳(「石森スクラップ」)に貼られて保存されていたのである。そこには出典や発表年月日は明記されておらず、これから出典や発表年月日を探す作業はあるものの、これほど貴重な資料はない。この資料の出現は私にとっては奇跡のようなものだった。それと同時に、恥ずかしい博論を書きあげる責任を強く感じた。私はその後、三回、札幌道立文学館を訪れた。

「資料が呼んでくれるのよ。」新たな資料が見つかるたびに報告する私に、指導教員の畠山兆子先生はいつもこうおっしゃった。不思議に、一つ資料が見つかったと、その資料を手がかりに新たな資料が見つかった。

畠山先生の励ましと細やかなご指導をいただいて、私は、少しずつ、収集した資料を基に、論文を書きはじめた。いざ書きはじめてみると、それは資料収集とは別の作業だった。資料を読み込み、それを考察し、論文にまとめることは、自分の全能力をかける作業だった。己の未熟さを思い知らされる苦しい作業でもあった。が、一方で、資料を通して、過去にさかのぼり、その時代に生きた人々の思いを追体験するという貴重な体験でもあった。

満洲児童文学の全容を解明すべく取りかかった調査研究であったが、本論文をまとめてみると、満洲児童文学研究の緒に就いたばかりという感否めない。そうではあるが、これまで全くの空白であった日本児童文学史における植民地満洲の児童文学活動について、かなり明らかにできたのではないかと思う。

謝辞

本論文の作成にあたり、これまでお世話になった方々にお礼を申し上げます。

まず、論文の書き方を初歩からご指導いただき、常に励ましとご助言をいただいただけでなく、研究者としての在り方を示して下さった恩師畠山兆子先生にお礼を申し上げます。また、ご指導とお力添え下さった加藤康子先生、鶴野祐介先生ほか梅花女子大学の諸先生方、いつも温かい励ましの言葉をかけて下さった院生の皆さん、資料の検索にお力添え下さった梅花女子大学図書館員の方々にも感謝の意を表したい。

また、これまで筆者の論文にご助言やご教示を下さった畑中圭一先生、長谷川潮先生、貴重な資料を提供して下さった柴村紀代先生、いつも励ましの言葉をかけて下さった研究仲間の成實朋子さん、浅野法子さんに心からお礼を申し上げます。

さらに、研究者として快く迎え入れ、貴重な資料の閲覧に協力して下さった以下の施設・図書館及び学芸員の皆様に感謝の意を表したい。(施設名は五十音順である)

大分県立図書館、大阪産業大学図書館、大阪市立大学学術情報総合センター、大阪府立中央図書館、大阪府立中央図書館 国際児童文学館(大阪国際児童文学館)、大阪府立中之島図書館、神奈川近代文学館、国東市武蔵図書館、国立国会図書館、国立国会図書館国際子ども図書館、国際日本文化研究センター図書館、三康図書館、堺市立中央図書館、聖和大学図書館、大連図書館(中国)、名古屋市美術館・竹葉丈氏、函館市立中央図書館、兵庫県立中央図書館、北海道立文学館、光村図書出版株式会社

本論文を完成することができたのは、皆様方のお蔭である。心か

ら感謝申し上げます。

最後に、筆者の研究生生活を様々な面で支えてくれた夫と息子たちに心から感謝したい。

参考文献 (五十音順)

- 相川美恵子『児童読物の軌跡―戦争と子どもをつないだ表現』龍谷叢書 25
二〇一二年八月二五日
- 『赤彦全集 第一・六・八巻』岩波書店・一九二九年十二月
- 安倍季雄「聴かせる童話の組立」「童話研究」(18)「童話の理論と実際」(復刻版)久山社 一九八九年五月十日
- 『石森延男先生の思い出』石森延男先生教育文学碑建設賛会 一九六七年九月
- 石森延男「満洲児童文学回想」「満洲児童文学資料 その一」「児童文学研究二」 日本児童文学学会 一九七二年
- 石森延男「満洲児童文学資料 その二」「児童文学研究三」 日本児童文学学会 一九七三年
- 石森延男「満洲児童文学資料 その三」「児童文学研究四」 日本児童文学学会 一九七二年
- 石森延男『随想 わたしの落穂ひろい』あらき書房 一九八三年九月
- 石森延男『随想 続 わたしの落穂ひろい』あらき書房 一九八三年十一月
- 石森延男『随想 続々 わたしの落穂ひろい』あらき書房 一九八四年十一月
- 磯田一雄『「皇国の姿」を追って―教科書に見る植民地教育文化史』皓星社 一九九九年三月
- 磯田一雄他編『在満日本人用教科書集成 第7巻満洲唱歌集』柏書房 二〇〇〇年十一月
- 磯田一雄他編『在満日本人用教科書集成 第10巻教育関係法規・改題』柏書房 二〇〇〇年十一月三十日
- 磯田一雄著『『のらくろ探検隊』と『スングラーの朝』―戦時下の児童文化における「満州」―「成城文藝」第一六六号 一九九九年三月三十日
- 巖谷小波著『童話の聞かせ方』賢文館版 一九三一年三月 初版発行 一九八七年十月復刻

- 巖谷大四『波の聲音』新潮社 一九七四年十二月
- 尹東燦『「満洲」文学の研究』明石書店 二〇一〇年六月三〇日
- 内山憲堂編『日本口演童話史』文化書房博文社 一九七二年三月
- 小笠原治嘉『石森延男論考』童房舎叢書 I 二〇〇五年十二月一日
- 大阪国際児童文学館編『日本児童文学大事典』全三巻・大日本図書 一九九三年十月
- 大坂透編『瀧口武士年譜』朝日書林 一九九五年十二月
- 河野孝之「発禁処分の方行―石森延男編「満洲文庫」と東亜「新満洲文庫」―」「児童文学研究」第三十五号 二〇〇二年十月
- 川村湊『異郷の昭和文学―「満洲」と近代日本―』岩波新書 一九九〇年十月
- 季穎著『日中児童文学交流史の研究―日本における中国児童文学及び日本児童文学における中国』風間書房 二〇一〇年二月
- 喜多由浩『満洲唱歌よ、もう一度』産経新聞ニュースサービス 二〇〇三年十一月
- 金成妍「巖谷小波の「全鮮巡回お伽講演会」―朝鮮児童文学と巖谷小波その二」「九大日文5」 二〇〇四年十二月一日
- 金成妍「巖谷小波が朝鮮に「聞かせた童話」―朝鮮児童文学と巖谷小波その三」「九大日文6」 二〇〇五年六月
- 小林英夫『「満洲」の歴史』講談社現代新書 二〇〇八年十一月
- 「倉橋惣三年譜」(『倉橋惣三選集第一巻』フレールベル館 一九六五年七月初版 一九九六年六月 第二十六刷)
- 澤地久枝『もうひとつの満洲』文藝春秋 一九八二年六月
- 『児童文化人名事典』日外アソシエーツ株式会社 一九九六年一月
- 渋谷孝「改訂石森延男年譜と新資料―現代国語科教育史論のために―」「宮城教育大学紀要第三十巻 一九九六年三月
- 新村徹『「満洲児童文学」について』『近代文学における中国と日本』汲古書院 一九八六年十月
- 太平洋戦争研究会『図説 満洲帝国』河出書房新社 一九九六年七月

鳥越信編著『はじめて学ぶ日本児童文学史』ミネルヴァ書房 二〇〇一年四月

滑川道夫『日本児童文学の軌跡』理論社 一九八八年九月

西田勝『《満洲国》文化細目』不二出版 二〇〇五年六月二〇日

「野口雨情年譜」『みんなで書いた野口雨情伝』金の星社 一九八二年十一月

長谷川潮『子どもの本に描かれたアジア・太平洋―近・現代につくられたイメージ』梨の木舎 二〇〇七年八月一日

「白秋年譜」『白秋全集別巻』岩波書店 一九八八年八月

原田勝正『満鉄』岩波新書（第八刷）一九八五年四月

馬寅主編・君島久子鑑訳『概説 中国の少数民族』三省堂 一九八七年

船木枳郎『石森延男 人間愛とロマン』学習研究社 一九七四年十月一日

宝鉄梅「蒙疆政権下の対モンゴル人日本語教育について」『現代社会文化研

究 No. 31 二〇〇四年十一月

前川康男編「石森延男年譜」『日本児童文学大系第二三巻』ほるぷ出版 一九七七年十一月

『満洲文藝年鑑Ⅰ』復刻版 一九九三年九月 葦書房

『満洲文藝年鑑Ⅱ』復刻版 一九九三年九月 葦書房

『満洲文藝年鑑Ⅲ』復刻版 一九九三年九月 葦書房

「満洲補充読本」全六冊 復刻版 国書刊行会 一九七九年九月

『満洲忘じがたし』満洲教育専門学校同窓会・陵南会 一九七二年十二月

『満蒙日本人紳士録』大連満洲日報社 一九二九年五月

『満蒙（満洲）年鑑』（一九二七年版―一九四四年版） 中日文化協会

村上美代治『満鉄図書館史』二〇一〇年十二月

『満洲児童文学研究』は「論文編」と「資料編」とに分かれています。が、今回は、「論文編」のみ公開しました。